

恋する錬成師は世界最強

見た目は子供、素顔は厨二

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはただ、少年が奈落に落ちなかった。

ただそれだけの分岐点。

しかしそれはきつと大きな変動だったのだろう。

ーこれは「無能」の少年がその身を「怪物」とする事なく、憧憬を目指し「最強」となる。

ただそれだけの物語。

※この作品は「恋をしたありふれた職業は世界最強」の改訂バージョンです。前作を知っている人はご容赦を。

※原作キャラの性格、構図が原作と全く異なります。ただし全員出す予定です。

※ハジメは奈落に落ちないので綺麗なハジメ君です。決してハジメさんではないし、木こりの精の泉から出てきたハジメさんでもありません。

※香織メインヒロインが確定、園部さんが準ヒロイン、その他が側室という流れです。ご容赦あれ！なおオリヒロは入れません。ええ、オリヒロは。

※正直、戦闘などに関しては原作よりも（いろんな意味で）低レベルです。予めご了承ください。

※召喚された側が一章の主なキャラクターです。オリキャラ出すかもしれませんが、ご容赦を。

※多分、ハジメを主とした様々なキャラに原作とは程遠い強化を施

します。ご容赦を。

※不定期更新、思いつき発車です。

## 目次

序章：だから彼は立ち上がる

0、分岐点	1
1、覚醒と被虐	6
2、朝焼けの約束	19
一章：『弱』『輩』『勇』『者』	
1、これからの事	43
2、午前は実践訓練	55
3、午後は魔法講義	72
4、ただ望みて	82
5、乱(らん)！亂(ラン)！爛(ran)！	98
6、行き先は霧に隠れゆ	114
閑話、拝啓前に進む君へ	130
7、月下脈動	145
8、理に従え	158
9、消失	169
10、弱体化・表	184
11、弱体化・裏	197
12、ありふれた言葉	209
13、『始まりの戦い』上	224
14、『始まりの戦い』中	238
15、『始まりの戦い』下	251
16、誇りを胸に、罰を背に	271
17、新たな一歩	287
閑話、表の英雄劇と袖幕の影	304

18、過去最大のピンチ(?)	320
19、本日尚も訓練日和	335
20、騎士と姫の輪舞曲(ロンド)	349
21、光明は紅茶の香りと共に	366
22、『魔法理論学発展論会』――開幕	383
23、『魔法理論学発展論会』――現代魔法 “錬成” に関する新たな	397
24、『魔法理論学発展論会』―― “錬成” による魔力への干渉	410
閑話、相入れず、愛有らず	428
25、Sixty-Five	441
26、『原点』	457
27、開戦の銅鑼は鳴り響く	474
28、誰かが意志の下、暴れ狂え	491
29、己が意志の下、憧れを叫べ	506
30、イーカロスの翼	523
31、とある少年の回想	539
32、矢文	553
33、【勇者】VS【錬成師】	567
閑話、宴が始まる	602

解 釈

序章：だから彼は立ち上がる

## 0、分岐点

オルクス大迷宮、65階層。未曾有の罨により、身の丈に合わぬ修羅場へと少年少女は吞まれた。

ある者は死の恐怖に足をすくめ、死地からの逃亡を図った。ある者は声にならない何かを叫び、我武者羅に武器を振り回した。またある者は全員での生還を無意識に度外視し、怪物と戦う。

彼等は天からチートとも言える程の力が与えられている。だが器は強けれど、心は異なった。平穏の中で育った高校生達には耐えきれ無いのは当然の事だ。

「早く前へ。大丈夫、冷静になればあんな骨どうってことないよ。うちのクラスは僕を除いて全員チートなんだから！」

「なんとかしないと……必要なのは……強力なリーダー……道を切り開く火力……天之河くん！」

ただ一人の、器さえも凡夫たる少年を除いて。

彼はなんの躊躇いもなく、死が隣に潜む前線へと駆け出す。

「早く撤退を！ 皆のところを！ 君がいないと！ 早く！」

「いきなりなんだ？ それより、なんでこんな所にいるんだ！ ここは君がいていい場所じゃない！ ここは俺達に任せて南雲は……」

「そんなこと言っている場合かつ！ あれが見えないの!? みんなパニックになってる！ リーダーがいないからだ！」

日頃は争い事が苦手だからと声を荒げることもし少ない彼の口。しかし今は在らん限りの言葉を込めて叫んだ。

日頃とは異なる剣幕に勇者さえも足を引く。

「……やれるんだな？」

「やります」



ようだ。それだけでも少し安堵する。

あとは僕が逃げるだけだ。ポーシヨン最後の一本を飲み干し、体に活力を取り戻す。そして脇目を振らず走る。

背後から地響きの様な轟音が鳴る。きつと奴が背中から迫ってきているんだ。でも確認している暇は無い。ただ腕を振り、足を前に出す。

ベヒモスは未だ健在だが、みんなの魔法が動きを阻害している。チート達の魔法の総射はベヒモスをしてもお、堪えるようだ。追いついてくる気配はない。

背中を突くプレッシャーが遠くなるのを感じ、僕はあと一步の所まで辿り着く。心に余裕が僅かに現れ、正面を見る。

だから見えた。目の前で燃え盛る弾丸が。

ーードオウツツ!!

焰が胸を焼く。

驚愕に目を開く。

体が宙を舞う。

同時に僕を受け止めてくれるはずだった橋は今、蓄積した負荷により崩壊を迎えた。怪物と共に僕は重力に従い、奈落へと誘われる。

もし運が良かったなら：クラスメイトのみんなみたいに超人的な力を手に入れていれば、落下から逃れられたのかもしれない。：いや、そもそも運が良ければ異世界に來ることなんてない。こんな死地へと追いやられる事もなかっただろうな。

体が流れ弾によりのけぞったからだろう。視界を迷宮の天蓋が埋め尽くしていた。不気味に緑色の光を灯すそれはまるで僕がこの世界に抱く印象そのものだ。

この世界は僕にとっての檻だ。地球にいた頃ならば他人よりも上に立てる絵やプログラム<sup>データ</sup>の能力があった。現実から逃避できる娯楽<sup>人</sup>や居所があった。何よりもこんな僕を肯定してくれた大切な両親<sup>人</sup>がいた。あっちの世界でも嘲笑、蔑み、理不尽や不自由：嫌な物は多々あったけれど、それでも僕には不満は無かった。

けれども全て奪われた。



この世界で僕のアドバンテージは存在しない。地球よりも実力主義で、殺し殺されが当然の如く巻き起こる。戦う才がないと蔑まれ、理不尽を強いられた。元より人を傷つけるのが苦手だったから余計にだ。

この世界には現実逃避をする暇もない。常に誰かしらの視線がある。神の使徒唯一の【無能】というレッテルは僕に卑下の視線を浴びせ続けた。娯楽はあるものの興じる時間は無い。戦えないなりに価値を示す為、寝る間を惜しむのは当然となった。

そして両親も今は文字通り別世界にいる。学校で友人関係を形成しなかったのがいけなかった。この世界に僕を認めてくれる人はいない。

底は何も見えぬほどに深く、淵い。間違いなく死ぬ。元<sup>青</sup>の世界を見ることはもう叶わない。

(ごめん、先にいく…)

父さんや母さんはきつと悲しむだろうと心の中で別れを告げて：そこでふと思いつく。昨晚部屋に訪れて、わざわざ僕を心配してくれた彼女のことを。

彼女は言ってくれた。僕が強いと。他人には無い強さがあると。立ち向かえる力があると。正直、何度も何度も、慣れない賞賛の声を浴びせ続けられてとてもむず痒かった。

でも：嬉しかった。両親以外の誰かに認めてもらえることが恥ずかしくて、同時にとても嬉しかった。我ながら単純だけど、本心なんだから仕方が無い。

：ああ、だからか。だから僕は何の躊躇いもなくあのベヒモスという怪物に立ち向かえたんだ。彼女があああの時の僕を褒めてくれたから。彼女の言葉を証明する為にも、かっこつけたかったんだ。

それを自覚してしまうと状況が状況だというのに口角がほのかに上がった。本当に我ながら単純過ぎるな、と自嘲する。

そしてさつきまで悲観していた感情も消え去る。諦め切っていた心に灯<sup>ともりび</sup>が輝いた。力を再び全身に込めた。上に向いていた顔を前に戻す。

無駄だとは知っている。それでも僕は手を向こう岸に向けて伸ばした。生憎数センチが埋まるだけで、僕と向こう岸の間には数十メートルの距離がある。自在に空を飛ぶ魔法も風を蹴る脚もない僕がどう足掻こうと向こうに戻れる術はない。

ただきつと彼女は諦める僕が嫌いだから。ならばと僕は懸命に開いた手に全力を注ぐ。

「縛煌鎖!!」

彼女の声が聞こえた。そして伸ばした腕に巻きつく魔法の鎖。

落ちていた僕を無理矢理引つ張り上げ、地上へと巻き戻す。奈落が遠く遠く離れて行く。

やがて体を包んでいた光が光子となり、空気に淡く溶けていく。そして光子の泡沫のその先、そこに彼女はいた。

「南雲くん!」

「しら、崎さん?」

「そうだよ! 大丈夫、絶対に治してみせるから! 守ってみせるから!」

気づいた時には抱きしめられていた。優しく、それでも強く彼女は僕を抱きしめる。律儀な彼女は昨日の約束を必死に守ってくれたらしい。それだけで何故か僕の胸が熱くなる。

「香織! 南雲は無事か?! なら早くここから逃げるぞ!」

「坊主は俺が背負おう。…よくやった、坊主、白崎」

「逃げるわよ! 香織!」

「う、うん! メルドさん、南雲くんをお願いします!」

「任せておけ!」

高鳴りとは別にやはり無理し過ぎたらしい。もう立つどころか意識を保つことさえままならない。瞼がゆっくりと閉じる。体をメルドさんの肩に投げ出した。

そして途切れる意識の中、僕は願った。

――強くなりたい、って。

## 1、覚醒と被虐

ハジメが目を醒ますと、ここ数週間で見慣れてしまった天井があった。城において自分に割り当てられた部屋だ。日頃は侍女達もあまり積極的に掃除をせずに放つたらかしくなっている為、そこらに埃が積もっていたりするのだが、今日は僅かに綺麗になっている。

ホルアドと王都の距離を考えるに大迷宮での戦いからはかなり時間が経っているらしい。みんなが脱出している間に呑気に寝ていたと思うと少し申し訳なく思えてくる。

(…喉渴いたな)

ふとそんな事に気づく。おまけに腹も減っている。いったいあれからどれだけ時間が経つたのかは分からないが、取り敢えず体の要求のまま、食欲を優先させる。兎も角動くために己の上体を上げた。

すると己の脇腹が急に悲鳴を上げた。いきなり現れたその痛みに思わず顔を顰めるハジメ。だがその場所にはちょうど心当たりがあった。

(あの時、僕にぶつかって来た“火球”。それが直撃した場所か…)

オルクス大迷宮でのベヒモスからの逃亡、その際に直撃したあの魔法だ。ハジメの錯覚でなければまるであの一撃は自分を狙っていた様に思えた。軌道が途中で曲がったのもハジメの疑心を増させた。

ただその考えにハジメは頭を横に振った。ハジメはクラスメイトから悪感情を抱かれてはいるが、殺される程恨みを買った覚えはない。そもそも『殺す』という行為そのものがハジメにとっては遠いものだ。そのためクラスメイトもそうに違いないとハジメは考えていた。

すると再び脇腹が痛み出したため服を捲り、傷を確認する。その箇所はかなりの火傷を患っており、変色している。ただ予想していたほどではなく、直撃当時のそれよりは確実に改善していた。

誰かの回復魔法による物だろうか、と考えてすぐ思い当たったのは一人の少女だ。

(いやいやまさか…ね?)

確かに彼女は自分を守ると言ってくれたし、実際にあの時奈落に落ち掛けた自分を助けてくれた。しかし彼女はそもそも多忙の身であり、寝ている自分の世話をする暇など無いだろう。

そんな風に自らの思考を否定していると、己の頭から何かが落ちた。それは良い塩梅に絞られた布だ。恐らくは寝ている間熱に魘されていたのだろう。ただそれにしてもはハジメの人肌並みの温度になっっていた。長い間、変えられていないのだろうか？

その上辺りを見渡すとコップ一杯の水と消化に良いであろう果物、そして一枚の手紙が椅子の上に置かれていた。有難いことにベッドの上からでも届く箇所だ。直ぐに手紙に手を伸ばし、内容を確認する。

『南雲くんへ』

もし私が訓練に行ってる間に起きちゃったら、お腹減ってるだろうしこの果物食べてね。あと火傷はまだ回復し切れてないから、部屋の中に居なきやだよ。本当に出ちや駄目だよ？

白崎香織より』

どうやら香織は本当にハジメの容態を見てくれていたらしい。余計な面倒を掛けてしまった事を申し訳なく思う一方で口の端が僅かに釣り上がった。無意識的なもので、ハジメの意思では止められそうに無い。取り敢えず口を手で覆って隠す。誰が部屋にいるわけでも無いが、何となく情けない顔になっている己が気恥ずかしいのだ。

やがて表情筋の操作権を理性が取り戻すと、やはりお腹が減っているのが気になる。自然と目が椅子の上のコップと果物に行き着いた。

ハジメはこの場にはいない少女に手を合わせ、「頂きます」とだけ告げると直ぐ様に果物に手を付けた。気絶していた期間が長かったのか、口の中で碎ける果肉が何とも瑞々しい。日頃は健啖家とはとても言えないハジメだが、バスケットの中の果物はすぐに掻き消えた。

最後に口の中にある甘ったるい風味を水で胃に流し込むと、満ち足りた為か一つ大きな呼吸を吐いた。

「…平和だなあ」

凄まじくハジメはリラックスしていた。とはいえ気絶する前まで

は極限状態にあった為、仕方がない話でもある。この時ばかりは異世界によるストレスも脇腹の痛みも完全に忘れられた。

すると落ち着いた為だろうか。ハジメはふとその気配を感じた。それはじわじわと、されど確実に迫って来るのが感じられた。

そう——<sup>尿意</sup>奴が。

手紙にはあまり動くなと言った内容が書かれていたが、流石に雫を撃って来るトイレに行くのは許されるだろう。そもそも高校生にもなってベッドでお漏らしなんて事は御免だ。しかも今のハジメは病み上がりの様なものだ。歩く速度は日頃よりも確実に遅い。ギリギリまで我慢してからトイレに行く事を決めては途中で氾濫間違いなした。

そうと決まれば話は早い。痛みはまだまだ健在だが、壁伝いに歩く事にした。すると思いの外楽で予想に反し、すすいと進む事が出来た。

そうしてハジメは目覚めてから初めて外へ出る事となる。しかしハジメは気づくべきだった。手紙から、違和感を抱くべきだった。

怪我が開くことを心配するならば普通、「安静」、「休む」などと言ったワードがメインとして使われることが多いだろう。あくまでも咎めるべきは「動く」ことであり、範囲では無い。しかし香織の手紙は見方によつては「部屋で休む」という風に解釈も出来るが、主に「外に出る」という行為を禁じていた。

それが一体何を示しているか、そして外では何が起きているのか。ハジメは察することが出来なかったのだ。

「ねえ…あの【無能】、まだ呑気に寝てるらしいわよ…」

だからこそ、扉を僅かに開けたハジメはその言葉を聞いてしまったのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「撤回してください、イシユタルさん」

その一方で白崎香織は登り始めた朝日を脇目に、城の廊下で【聖教教会】の教祖、イシユタルと対面する形となっていた。手紙に書かれた「訓練」は嘘の用事だ。内容が内容だ。ハジメには真実を知ってほしく無かった。それ故の配慮だ。

白崎香織はブチギレていた。普段の温厚さが嘘の様に。声に圧があるのがその証左に他ならない。

「おやおや、【神の使徒】の…それも【聖女】様ではありませんか？如何なされたのです？ それ程息を上げられて…もしや体調が悪いのでは無いですかな？」

一方でその威圧を柳に風と受け流し、穏やかな笑みを見せるイシユタル。彼の周囲には神殿騎士が何人も並んでおり、イシユタルと同じように朗らかな表情を香織に向けている。

だがそんな彼等の明るい雰囲気、今の香織には怒りを煽るものとなった。どの口でそんな事を抜かすか、と。

「昨日のスピーチの内容、あんなの全部嘘です！ 南雲くんは…絶対にあんな事をやってません！」

そう聖教教会が香織の逆鱗に触れた理由。それは昨日の深夜、大迷宮からの脱出からおおよそ二日程経った頃に行われた、教皇イシユタルによるスピーチの内容そのものだ。

その直前まで香織はハジメの額に掛けていた水に浸した布切れを変えていた。そして布を変え終ったらすぐに火傷の治療の最終行程に取り掛かろうと考えたり、それは兎も角迷宮でのハジメの勇姿を思い出して惚けたりと、内心面が主に忙しなかった。

（でも南雲くんってば一人で無理しちゃうんだよ…ちよつとは私の事も頼ってくれないかな…）

ただハジメが流れ弾の「火球」で吹き飛ばされた時や奈落に落ち掛けた時は本当に生きた心地がしなかった。何とか「縛煌鎖」が間に合い、助け出す事が出来たが二度とあんな思いはしたくない。

だが自分はそう言ったハジメの強さに憧れ、気づけば夢中になっていたのは間違い様もない事実。きつと次があっても止められっこな

い。これが惚れたが故の弱味かと少し項垂れた。

そんな時だ。王城のバルコニーの方から声が聞こえてきたのは。

『【ハイリヒ王国】の皆様、お久しゅう御座います。私は【聖教教会】の  
教皇、イシユタル・ランゴバルドにて御座います』

聞こえてきた声には聞き覚えがあつた。それは異世界召喚の直後に現れた好々爺。見た目は豪奢で話し方も丁寧であつたが、声に含まれていた狂気の丈が異様であつたのが非常に印象的だつた。

ただイシユタルは高位な者であり、暫くはこちらに出向く予定が無かつたほどに多忙だつた筈。ならばここに何故いるのか。

香織のそんな疑問を湧かせていたが、次の途端にそれらは燃え滾る激情に吞まれる事となつた。

『此度はエヒト様が召喚なされた【神の使徒】、その中の一人と思われていた【錬成師】が裏切り者であつたという話をさせに頂きに参りました』

———は？

ベチャツ、と床に何かが落ちた。ふと見るとそれは香織が持っていたはずの濡れタオルだつた。どうやら無意識に手放してしまつていたらしい。

それを拾おうとすると窓の方から更に続きが流れて来た。

『先日、エヒト様がこの地に召喚した“神の使徒”。我々は勇者様方を邪なる魔王を退ける存在へとすべく、かの【オルクス大迷宮】へと導きました。最初からロツクマウントを楽に退けると、順調ではありましたが：彼らは迷宮で悪意ある罫にかかり、かの伝説の魔物、ベヒモスと遭遇。危うく帰らぬ人と成りかけたのです』

そうだ。あの時、クラスメイトの一人が大迷宮の罫に引つ掛つた。故に一行はピンチに陥り、そして彼が前に出たのだ。それは間違いない。間違いであつてはならない。

『我々は最初こそは迷宮に仕組まれた罫かと思つておりました。：しかし、そうでは無かつたのです。これは全て！ “神の使徒”に紛れていた邪なる“錬成師”が原因だつたのです！』

———チガウ、違う違うちがう！

香織の中で否定の言葉が幾重にも重ねられる。それほどに香織にとつてそれは認められない事だった。紛う事なき『嘘』でしか無かつた。

しかしイシユタルの光悦とした声の後に轟くは、色めき立つ街の人々の声だ。慌てて香織が窓から見下ろせど、もう既に遅い。狂信に塗れた興奮が香織の目に映った。

『』『エヒト様、万歳！ エヒト様、万歳！ エヒト様、万歳イイイイ！！』『』

万感の意を込めて、人々は揃えて口にする。『嘘』に塗れた教皇の言葉はされど『真実』として王国に伝播した。

だから香織は今、ここに立っている。ハジメはあの時、弱者の身であるにも関わらず誰よりも前で闘った。背水の崖つぶちの中、一筋に光る希望を掴みに行った。それは今もなお鮮烈に目に写る『真実』だ。そんなハジメをどういう訳かは知らないが目の前のイシユタルは『嘘』により汚した。黙って看過出来ることではなかった。

「昨日のあの言葉…撤回して下さい」

「ふむ昨日の、昨日の…ああ、もしやあの裏切り者のことですか？

あの様な者にも温情を与えろとは流石は【聖女】様ですなあ」

「違います！ 南雲くんは、裏切り者なんかじゃありません！ そんなの嘘です！」

「嘘、と言われましても我々が公正に話を伺った結果にて御座います。それを覆す様な証拠は、おありですか？」

「クラスメイトのみんなが見ていました！ 南雲くんは一人でベヒモスの足止めをしてました！ だから——」

そう、あの時六十五階層にいた者全員が証人だ。ベヒモスを足止めしようとして『鍊成』を繰り返していた彼を誰一人残らず見ていた。彼らが『真実』を話せば、イシユタルの『嘘』を覆せる。

そう、香織は思っていた。

しかしイシユタルは、笑った。しわくちやな顔を更に破顔させて、



どこか不気味な笑みを浮かべた。

「ですが：使徒の皆様の殆どは我々に『南雲ハジメが裏切った』とそう仰せられましたか？」

「——へ？」

香織は知らなかった。今日、この日まで直視する事が出来なかったのだ。

地球に居た頃ならばそれは単純な嫉妬や恨みで収まっていた。故に多少のイジメ程度で済み、ハジメには対して実害が及んでいなかった。またそれらの虐めは香織からは巧妙に隠されていた。

しかしこの世界で蝕まれ、削られ、そして増幅させられたクラスメイト達の精神は香織に初めてその悪意の真の姿を晒した。

見下していた者が、自分にとって面白くない者が、【無能】ごときが。そんな幼稚な感情を利用され、彼等は口裏を合わせて告げたのだ。『真実』を食い破る程の『嘘』を。冤罪を。

思わず呆気にとられた香織を他所に、イシユタルは横の窓を眺めて：そして面白そうに目を細めた。

「おやおや：【聖女】様。面白いモノが見れそうですぞ？ ほら、そちらの窓からならば見れるでしょう？」

「——え」

言われた様に香織は窓から下を見下ろして：今度こそ香織は言葉を失った。怒りの炎が瞬く間に止み、底冷える。

そこにあつたのは大庭園の名所、薔薇園。その中央に立つのは嗜虐的な笑みを浮かべる檜山達一同。そして地べたに力無く横たわっているハジメの姿。

外に出てしまったのかと僅かに慌てた後、ようやく香織の目はその姿をはつきりと理解した。這い蹲るハジメの姿が最後にベッドで見た時の物よりも明らかに酷く怪我を負っていたことを。

白崎香織は今まで気付かなかった。己の立場が認識していたよりも目立つ物であった事を。それ故に接触する人間には数多くの負の感情が向かうことも。にも関わらず己はそれを気づかなかった事さえも。

気付くにはあまりにも遅く、取り返しのつかない所まで彼女は気付けなかった。故に現実が白崎香織に容赦無く牙を立てた。

——世界は白崎香織の無知を、思慮の浅さを責め立て始める。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

時はハジメが扉を開けた瞬間に巻き戻る。

『あの【無能】、まだ呑気に寝てるらしいわよお…』

『良い御身分ね。こっちは汗水垂らして仕事してるっていうのに。迷宮で好き勝手やって【勇者】様に迷惑を掛けた様な奴の世話をしろだなんて…やってらんないわ』

扉から僅かに離れた距離。扉が閉じていたならば聞こえなかっただろう小さな陰口。このまま閉じて逃げれば、後回しにも出来ただろう。しかしこの時ハジメは扉を閉めるのを躊躇ってしまった。身に覚えのない話、何が起こっているか分からずノブを持つ手が止まってしまった。

『しかも迷宮に行く前、使徒様方とは別行動をしていたらしいわあ。その間に何かしらの罫を…』

『私も聞いた話なんだけど実はその時に魔族と接触したって噂よ。最初から裏切るつもりだったって——』

すると病み上がりが故か、ハジメの体が前へとバランスを崩す。幸いな事にドアにもたれ掛かる形となり倒れることは無かった。代わりに急に力を加えられたドアは派手に音を立てて開く。

陰口をしていただろう二人の侍女と目が合う。彼女等はハジメが聞いていたであろうことを察し、罰が悪そうな顔をした。しかしそれは一瞬だ。開き直るかの様に彼女等は顔を豹変させ、にったりと口を開いた。

「あらあ、どうされたんですかあ？ あー、もしかして仮病の方は治られたんですかあ？」

「えっ、あの——」

「何ですか？ 人の言葉で喋って下さいよ？ 小さくて聞こえないじゃないですか。…ああ、魔族の言葉つてもしかしてこんな感じなん

ですか？ だとしたら本当に：聞くに耐えないですね。同じ生命とは思えません」

今まで散々悪意の籠った目を向けられてきたハジメだが、ここまで露悪的なものは滅多にない。せいぜい檜山達、小悪党組ぐらいしかいなかった。それを滅多に顔も見ない様な人から向けられると、ハジメも舌を満足に回さない。

そして反論をしてこないと見たのか侍女二人の舌はハジメとは対照的にヒートアップする。

「意見があるならせめてえ、大きな声で反論して見てくださいねえ？  
じゃないとお、私達が悪者みたいじゃないですかあ」

「反論すら無いということは裏切り者と見てよろしいですよ？ ね？  
なら早く城から出て行って下さい、この裏切り者！」

侍女の一人が遂に我慢の限界に達したのか、廊下に置かれていたバケツの水をハジメにぶっ掛けた。怪我人であるハジメは抵抗する間もなく、全身をその水で濡らす。何度か雑巾などを洗った物なのか虫の死骸やホコリが混じっている。

更に濡れた床がハジメの脚を滑らせる。体も儘ならず、そのまま無様にも床に倒れた。

ハジメの予想を遥かに超える悪意。このまま立ち止まっただけでは更にヒートアップする。そう感じたハジメは水の中、四つん這いになって二人から逃げる。

背中を向けた二人は患者退治をした気なのか、気持ち良さそうにハジメを見つめていた。その視線が、顔が、発する言葉があまりにも気持ち悪くて、嫌で、ハジメは脇腹の痛みを無視して廊下の先へ逃げる。

——だが、

『おい、アレ確かイシユタル教皇が仰られていた…』

『ああ、【無能】だな。やっぱ仮病つてのはマジみてえだな』

『そもそも何故あんな見窄らしい格好になっているのでしょうか。：外道の考えていることはやはり分からない』

——どこに行こうとそれらはハジメの姿を捉え、絡み付く。

『次は何するつもりだ！ この…裏切り者オ！』



あああああああああああああああああああああ!!!  
あああああああああああああああああああ!!!」

王城の大庭園、呼吸が整う暇も無くハジメは叫んだ。いつの間にか雨が降っていたようで、ハジメをより一層濡らす。バケツの汚水と血と雨粒が混じり、顔に流れるものの正体すら分かりやしなない。

沢山いた追手はいつの間にかいない。そこだけは救いだ。こんなみっともない子供のような姿、誰にも見られたく無い。

脇腹が無理をした為かズキズキと痛みを鳴らす。だが知った事ではない。痛みなどあつてない様なものになる程、ハジメは心に傷を刻まれた。

大迷宮の時、別にハジメは名誉や誇りの為に闘った訳ではない。ハジメの意志が、彼女の言葉が背中を押した。それだけのこと。

だがハジメは決して聖人君主では無い。多少は認められる事を期待していたし、覚えの無い事で責められては傷を負う。我慢は出来るが、人並みに限界はある。なんの変哲も無い、たった一人の人間だ。掌に力が籠り、庭の土を思わず握る。小石が手の皮を裂けど、意に介さない。そのまま腕を掲げ、地面にこれでもかと何度も、何度も振り下ろす。

「何で！　何でだよ!?　僕が何をやった!?　ちくしょう!」

視界が滲み、手が様々な物で汚れ、声が掠れる。

耐えきれぬほどの理不尽。脆弱、悪意、冤罪、誹謗中傷。たった一人の少年が背負うにはあまりにも重すぎた。外聞もひつたくれもなく、ただただ慟哭する。

「みーつけたあ。な・ぐ・も・くーん?」

やがて叫ぶ気力をも失った時の事だ。庭園の奥からニタニタと嗤う四人の陰が現れる。

既に失意の底に沈んでいたハジメは蹲ったまま、彼等を見上げる。それは今の状況の優位性を顕著に表していた。

「南雲お…部屋から出れるぐらいにや元気になって何よりだよ?　し

かも聞いた話じゃ城の中を走り回れるぐらい元気なんだろう？ いやー、俺は嬉しいぜ？ これでも俺は氣遣つてんだ。優しいだろ？」  
檜山は己を見上げる事しかできないハジメを見て、一層その笑みを深めた。これから起きることをハジメは予想できた。しかしもう逆らう氣力が一ミリたりも湧かない。

檜山がまるでサッカーのPKの様に脚を掲げる。そして耐え切れるまで高く脚を上げると、ハジメの腹目掛けて己の脚をめり込ませた。

「サンドバックとして、なあ!!!」

ただでさえステータスが一般人程度しか無いハジメは為されるがままに吹き飛ばされる。体が錐揉み、雨に濡れた土が弾ける。ハジメはそのまま大庭園の薔薇園に突っ込む。薔薇の茎がハジメの柔な肌に赤い線をいくつも付けていく。

「おいおい檜山、あんまり派手にやるなよ〜」

「そうだな人が来られても困る…まあ今は別にいいか。よし囲むぞ？」

「とーぜんだろ。俺たちにも楽しませろよお、南雲お？」

仰向けになりながら咳き込むハジメ。その視界に映るのは己を見下す八つの目、四つの口。三日月の様に開かれた口からは酷い笑い声が聞こえて来る。

しかしそれらもすぐに見れなくなった。ハジメの視界は靴底により遮られることとなったから。

「——ぐもくん！ 南雲くん!? いや、いやだよ…お願い、返事をして!？」

氣を失っていた。

声により目を覚ましたハジメはその事実を自覚した。

しかし脇腹どころか全身が軋み、痛む。もはや痛覚が麻痺し、何処か夢うつつを打っているかの様だ。目の開閉さえもろくにコント

ロール出来ず、視界がぼやけている事が余計にそう思わせる。

見えないが己を抱き抱え、呼びかけているのは彼女だ。必死な声で自分を呼びかけている。ふと手紙で部屋を出るなど書かれていたのを思い出した。まあ、もう手遅れの話であるが。

彼女に言いたいことが沢山あった。あの日の、月下にて誓った約束を守ってくれて、有難うと。気絶している間看病してくれて、嬉しかったと。こんな無様な所を見せて、ゴメンと。他にも山程言いたいことがあった。

だが僅かな気絶ではこの傷だらけの身体と削れ切った心は回復しきれなかったらしい。覚めてすぐにまたハジメの意識は沈みかける。そして眠りに再び落ちる一瞬、ハジメの視界は僅かに開けた。

「ごめんね……ごめんね。ハジメ……くん」

彼女の顔が今にも泣きそうな程に歪んでいたのが、やけにハジメの記憶に残った。

## 2、朝焼けの約束

その男が、この会話を聴いていたのは本当に偶然だった。  
「ね？ 上手くいったでしょ？」

その声が聞こえたのは城の空き部屋の内の一つだった。つい先日  
の教皇の宣言とクラスメイトの様子の変化から薄気味悪さを覚えて  
いた彼。そうして少し気分が悪くなった為、壁伝いに移動していた  
所、聞こえて来たのだ。

その声には聞き覚えがあった。しかし声に含まれる雰囲気  
が異なった。その違和感から申し訳ない気持ちを抱きながらも、耳を壁に  
密着させた。

「初めて見た時もあったが…テメエ、二重人格じゃねえんだよな？」

もう一人の声は檜山のものであった。いつも南雲を虐めたりと、声こ  
そは出せないものの良い思いは抱いていないからこそすぐに分かつ  
た。

同時に「何故彼女が檜山と…」と胸中で溢す。関わりなど無いはず  
だと混乱する。

「前も言ったけれど、これが僕だよ？ いつもは可愛い子ぶってるだ  
け。人は自分を偽らなきゃ生きていけない。偽らなきゃ欲しいもの  
には届かない。それは君も同じでしょ？ 犯人様？」

「…そうだな。その通りだ」

『犯人』、その言葉にゾクツと背筋に氷柱が突き刺されたような幻覚を  
感じた。先ほどまで考えていた内容、ハジメの冤罪のことが頭によ  
ぎった。

彼はハジメの戦いぶりをしっかりと見ていた。故に犯人として疑  
おうとは思って居なかった。しかしクラスメイトの多くが彼を犯人  
扱いし、その勢いがあまりにも狂氣的だったが故に恐ろしく、結果中  
立という形を取っていた。

彼もまたそれを不思議に思いつつも、恐ろしく探れなかった。しか  
し壁の奥からその理由がいつも容易く明かされた。

「それにしてもこのアーティファクト凄いよね。僕も一か八かで教



会の方に『南雲くんは責任を擦りつける』提案をした訳だけど流石はファンタジー。一国規模で洗脳可能ときた。：色々制約はあるらしいけど、それでも便利なものには変わりないよね。：僕も使ってみていな〜」

それこそが教会がハジメを嵌める為に仕掛けた種そのもの。一見は拡声器のようなアーティファクト。しかしその正体は伝音式対民衆洗脳型アーティファクト：ヴィーゲン・リート。これは発動者が発する言葉を受容者の思考に『正しい』と判断させやすくするという単純かつ凶悪なアーティファクトである。イシユタル教皇がバルコニーで神言を発した際に使ったものでもある。

教会はバルコニーでこれを使う前に、一度クラスメイト達の前でこれを使用していた。『南雲ハジメは悪者でないか?』と。

そうして彼等は己の中にあるハジメへの疑心や嫉妬などの負の感情を爆発させた。そしてハジメが裏切り者だと証言させたのだ。

そうする事で檜山は己の罪の大まかをハジメへとすり付けられたわけだ。術に嵌まらなかった者達が狂氣的と表したのは、実に事実にも則していた。

「…それでも白崎はまだアイツを構ってやがる。なら意味がねえ」

「ん〜? あー、そーだね。このアーティファクトも万能じゃないって事だね」

アーティファクト：ヴィーゲン・リートにはその凶悪な性能と引き換えに制約が多々存在する。エヒト神の加護の下でしか使えないことや聞いた音の大きさによって洗脳の度合いが変化すること、改竄する事柄への興味の有無、話した内容に対する疑念の大小、このアーティファクトの存在の認識の有無…それらによって感情の増幅の具合はまるで違う。しかしその凶悪さは確かめるまでもない。

「白崎さんにメルドさん。八重樫さんに園部さん、愛子先生…後は幾らかいるけど彼等以外は僕らの作戦の妨害を警戒しなくてもいいと思うよ。彼らは確固たる自信を持って南雲くんは味方出来ない。つまり中立さ。他のメンバーは南雲くんへの信頼じゃなくて、話題への関心の有無とかそっちの制約だろうしね」



力つてき、相性すつごく悪いんだよね。流石の君も魂は隠し通せないでしょ？【暗殺者】の力つて一定以上行かないと魂魄は隠蔽出来ないらしいからね。」

笑う、微笑う、嗤う。

逃げ出せばこの悪魔を振り払えるのか。この悪夢を見ずに済むのか。

しかし成功のビジョンが見えない。彼女の手から零れ落ちることさえも出来そうにない。

故に遠藤の足は竦む。もはや鬼ごっこが成り立つ前から決まっていた。

「ごめんだけど…ちよつとオハナシ聞いて貰って、良いかなあ？」

この鬼ごっこは『鬼』<sup>彼女</sup>の勝ちだと。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「坊主の傷はかなり重傷だ。先日の傷が開いた上に、そこを抉るように付けられた打撲痕がある。かなり執拗にやられたようだ。…頼めるか、香織」

「……………はい」

南雲ハジメの部屋の中。今は彼の医務室代わりとなっている部屋だ。ベッドの上で静かに眠るハジメを見つめながら、メルドは香織に尋ねた。

香織の雰囲気はいつものようなにこやかなものとは違う。またハジメに関わった際に現れる様な静かな怒りも感じない。その顔はまるで罪人のもので、同時に虚無を感じさせた。

返事から少し後、香織はメルドの方へと向く。そして淡々と呟いた。

「メルドさん、どうか南雲くんと二人つきりにさせてください」

「…分かった」

不安げにメルドは香織を見つめながらも、扉から部屋を出て行く。

ギギギと音を鳴らして扉が閉まると、灯りは緑光石が放つ僅かな光のみとなった。

そんな暗闇に近い中、香織はハジメの治癒を開始し始めた。今までの治癒よりも調子が良く、次々と部位ごとに癒していく。

『何苦しそうにしてんだよ？ おおん？ 俺の方が！ テメエのせいだ！ ム力ついたんだよ!! 大罪人があ!!』

あの時の、ついさっき聞いた声が、頭の中で木霊した。

『ハハハッ！ 教室に居た時から不愉快なんだよ！ 散々虐めてやっただからよおー、家に籠りやいいだろうに来やがって！ キメエんだよ、クソオタがよ!』

『ですが…使徒の皆様の殆どは我々に『南雲ハジメが裏切った』とそう仰せられましたか?』

力のままに同級生が、彼を傷つけていた。世界が、彼に罪を被せた。でも、でも、でも。

『テメエなんざが！ 白崎に気に入られてんのが、どれだけ腹立つか！ オマエに分かるかあ？ 南雲おー？ 何も俺等だけじゃねえ！

クラスメイトの奴らにもそー思う奴らがいるんだよ！ しーっかり、身の程弁えろよ！ このっ、【無能】ごときがっ!!!』

『聖女』様、貴女はこの様な少年と関わっていい様なお方ではありません。もしこれ以上優しくされようものなら…彼の首を考慮できかねませんなあ』

——それらは全て、私の咎。私の罪。

虐めの現場で告げられた檜山の真意、その後香織の元を訪れたイシユタルの言葉。それ等が香織にそう気づかせた。

そんな事に気づいてからの『治癒魔法』は本当に調子が良い。前なら二日や三日掛かった傷も二十分かそこらで塞ぐ事が出来た。何とも皮肉で、その成長を素直に喜ぶことは出来なかった。

五時間後、全身の傷の治癒が完了した。あくまでも治癒力の活性化は本人の体力を奪うものなのであと数日は眠る事になるだろう。もし道中メルドに会ったらその事だけ言っておこうと思ひ、その部屋から出る。

「……めんね、南雲くん」

それだけをポツリと呟くと、香織はその部屋を完全に締め切った。後に残るのは泥のように眠るハジメとチカチカ点滅する緑光石のみ。夕日が地平線に隠れた。窓から覗くはずのあの日の月明かりは、もう曇天に覆われてしまった。

契りは、破れてしまったのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「どうしたものかしら……ね」

己に充てがわれた部屋のテーブルで頬杖をつきながらも、八重樫雫はそんな事を呟いた。目の前にあるのはとある署名書、そのコピーだ。そこには見覚えのある名前がズラリと並んでいる。

その命題としては簡潔にこう書かれている。『南雲ハジメを罪人であるか否か』。そしてここに署名されているのはそれを是とした者達の名前である。

『天之河光輝』、『檜山 大介』、『中村 恵里』、『谷口 鈴』……そこに書かれている名前は決して少なくない。

書かれていないのは香織、雫、坂上龍太郎、愛子ちゃん護衛隊、永山パーティーといった所か。とはいえ「ハジメがやっていない」と断言する者は数少ないようだ。彼等は彼等でハジメがしていないのは見ているが、署名組の圧力にも逆らえず結果中立という形を成している。

では雫は中立かと言われればそうではない。むしろハジメ側にいる人間だ。だからこそ彼が冤罪を掛けられた理由を一つ一つ説明している所なのだ。

(とは言え……こんな人数が無責任に一人を責めるような真似はするかしら。南雲君の大迷宮での戦いを見なかった、というわけでも無いでしょうね。嫉妬、つていう線が無いとは言いついていられないけれど……だとしたら本当に無責任が過ぎる。だとすればいい——)

ヴィーケン・リートを知る由も無い彼女は思考を巡らせる。そしてそこで廊下から足音が聞こえてきた。その足音は段々と近づき、そして部屋の前で止まった。

(香織、戻って来たのかしら?)

この部屋は雫と香織の二人一組専用となっている。一見人が多いが故に手狭にも思える。しかし『神の使徒』の中でもトップクラスに優秀である二人の部屋はハジメのそれとは広さも設備もグレードがまるで違う。むしろ学生には皆余るほどのものだ。

だからこそ部屋の前で止まったのが香織だと思ったのも自然な流れである。そして足音が止まって以降、何の動きもない事を不思議に思うのも当然の帰結だ。雫は扉の方に向かい、その鍵を開けた。

「香織? 何して——」

扉を開けると、雫の胸にゆったりと香織の身体が預けられた。一瞬何事かと焦ったが、直ぐに違和感を覚える。

震えているのだ。小刻みに。恐怖するかの様に。

香織がこう言った風に弱ると言うのは非常に珍しい。陰りがあるうと微笑みを絶やさず続けられる忍耐力が彼女にはある。しかしそれを意識できぬ程、香織は心に傷を負っていた。

「私ね、私のことがね。許せないんだよ…」

いつもの明るさ所か生気さえも失われたかの様な声。

「私はただ優しくしてるつもりだったの。南雲くんと仲良くなりたくて、助けになりたくて。私なりのやり方で、力になれたらなって思ってたんだよ…」

よく知っている。香織がハジメの勇気を見てから、少しでも仲良くなるうと努力していた。街中で事あるごとに彼の姿を探して、彼の趣味を知ろうとしていた。暴走したこともあったが、どれだけの間香織がハジメを想い続けたか雫は知っている。

「でもっ、違ってたんだ。それはただの私の自己満足で。南雲くんは知らない場所で傷ついてた。檜山くんも言ってた…私が南雲くんを気にしてるのが許せないんだって…。私が、私が南雲くんを傷つけていたんだよ」

「香織! それはちが——」

「違わないよっ!!」

雫は香織の言葉を否定しようとしたが、香織がそれを遮った。ボロ

ボロと涙が流れる。雫の胸元に落ち、湿らせていた。

「イシユタルさんから聞いた！ 檜山くんが言ってた！ 私が構うのが悪いんだって！ だから南雲くんがあんな目にあっちゃったんだって！ 私が南雲くんに関わらなきゃっ、南雲くんはちゃんとみんなに受け入れられてた！」

二人の言葉は間違いなく香織を蝕んでいた。ハジメの現状が現状が故に、ありもしない『もしかしたら』に寄り掛かる。それ程に香織は自身を責めていた。

「でもっ、でもお：何でいけないの!? 凄いつて思う人に、大切な人に！ 優しくしてあげたいって思う事のっ！ …一体。一体、なにがダメだったのかなあ…」

涙がより一層溢れ出る。強くなっていった言葉が段々と弱々しくなっていく。言い切る頃には消え去るかの様に小さくなっていった。度重なる自責が喉を狭く狭く押し潰す。

雫の胸から滑り落ち、香織は膝を崩した。そして無念である様に歯を食いしばる。

「香織…」

そんな香織に雫は慰めの声を掛けられずにいた。ただその腕で香織を抱きしめる。どうか落ち着いて欲しいと、香織の背中を手でそつと撫でる。

そうする事しか親友に寄り添う術を持たないこと、それを雫は不甲斐なく思わずにはいられなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「お父様、忙しくされている所申し訳ありませんがお話の時間を頂けませんでしょうか？」

その頃の【ハイリヒ王国】王宮、執務室ではこの国の王とその娘が机を挟んで対面していた。

国王、エリヒドⅡSⅡBⅡハイリヒ。それに対するは娘であるリリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒ。本来ならば仲慎ましい親子である二人。しかしこの場の雰囲気は親しみのへったくれもないものだった。

エリヒドは書類に目を通してばかりで、娘であるリリアーナを一切

見ようとしなさい。一方のリリアーナは親であるエリヒドを睨みつけていた。

「…リリイ、何の用だ？ 生憎ながら私は今は忙しい。話ならば後に――」

「昨日のイシユタル教皇のお話。私、納得しておりませんわ」

「…今何と？」

リリアーナの言葉により、より剣？さが増す空気。エリヒドは僅かに顔を上げ、リリアーナを一睨みする。そしてすぐに書類へと目を戻した。

しかし引けぬのはリリアーナも同じ。

「イシユタル教皇は『神の使徒の方々の意見を聞いた結果』とされています。ですがその意見はあくまでも一部のもの。それをさも同然として扱うのはあまりに横暴ですわ。現にその場の責任者であったメルド団長は罨は故意的に仕掛けられたものでなく、それに掛かったのは別の使徒様だとおっしゃられておりましたが？」

「教皇の言葉はエヒト神の御言葉も同然。それが証拠に他ならない。メルドは信用に値する部下ではあるが…残念ながら奴も人間だ。判断が間違える事もある」

教皇の言葉を、神の言葉を信じて疑わないエリヒド。表情の抜け落ちていた顔に僅かばかり笑顔が浮かんだ。狂気を孕んだ笑みだ。

そんなエリヒドを見てリリアーナは確信した。そして眉を八の字にする。そこに浮かび上がったのは失望や嫌悪、などではない。

「お父様は、変わってしまったのですね…」

「……………何がだ？」

「本当に、分からないのですか？」

悲哀だ。己が畏敬を抱いていた父の姿が、もはや昔のものとなってしまったことがリリアーナにとっては辛く、悲しい。

「昔のお父様は、国民の皆様を見ていらつしやいました。路地にて飢える人々がいるならば、就ける職を増やされました。流行り病が蔓延した際にはある限りの財を費やし、対応策を探されました。それこそが私が尊敬したお父様です」



国王となつたばかりの頃のエリヒドは兎に角周囲を見ていた。部下の体調、侍女の仕事ぶり、果てには国民の様子を見るため変装して街に繰り出していた。破天荒ではあったが、彼の目は間違いなく国をより良い物へと変えていった。

しかし今のエリヒドは違うと断言できる。それは――

「ですがお父様。今の貴方は国民どころか、身近な私すらも見ようとしておられません。それに『神の使徒』からも目を背け続けておられます」

「何を言う？ 私は『神の使徒』様方の力になれる様、全力でサポートしているとも。我が国の先鋭を教育係とし、宝物たるアーティファクトも惜しみなく彼等に渡している。今、私が力を最も注いでいるのが彼等の育成であ――」

「彼等はただの子供です」

「……？」

エリヒドはリリアーナの言葉に筆を止めた。そして不思議そうにリリアーナを見つめる。彼の心中はそんな事を口にしたリリアーナに対する疑問で溢れ返っていることだろう。

そんなリリアーナの言葉に首を傾げることこそが、見ていないことの示唆に他ならないと言うのに。

「確かに才覚には溢れています。高いステータスを持ち、この国でも希少な天職や技能を与えられている。神から愛されし、使徒というのも納得出来るでしょう。……心を除いては」

「……………ころ？」

「ええ、精神力です。彼等は向こうの世界では平和な暮らしの中にいたと聞いています。故に彼等は死に怯え、殺害に忌避を抱く。まだ心構えも出来ていない子供そのものです。……昔のお父様でしたら言われずとも気づいたことでしょうに」

彼等の実力と精神は酷く乖離している。『優しさ』と『甘さ』の違いすら区別できておらず、簡単な戦いでも容易にその命を散らしてしまうだろう。メルドも『殺し』を経験させなければならぬとしていた。

巻き込むべきではなかったのだ。この混沌な世界になど。戦いは

魔人に憎悪を持たぬ彼等には、あまりにも重すぎる。

「その様な事は関係ない。彼等は『神の使徒』。戦うためにこの世界に呼ばれた者達だ。それこそが彼等にとっても至高なる道だ」

「今のお父様は、言われてもなお目を背けられるのですね」

しかしエリヒドはリリアーナの言葉をも意に返さず、教会の指針に従ったまま。確かにリリアーナの言う様にエリヒドは目を背け続けていた。

「話を戻しましょう。南雲様には今、使徒の皆様を毘にかけた疑いが掛かっています。教会はその罪に対し『使徒の称号の剥奪』、『基本的な使徒との接触の禁止』、『給付金の最低額まで減少』。これらの三点が南雲様を罰として施行しようとしています。ここまでは間違いありませんね?」

「間違いない。それをされるだけの事をその男はやった。むしろその程度で済んだのは教皇の寛大さ故だろう」

「ですがこの施行権はあくまでも教会にではなく、我ら王国にある。これも間違いありませんね?」

「…何が言いたい?」

エリヒドはリリアーナの含みのある質問に警戒する様に睨みつけた。苛立ちも隠さずにいる。

「私が求めるのは、この施行開始時の延長です」

「…ふざけているのか?」

「私が戯れでこの様な事をお父様に言うとお思いで?」

すると執務室の扉が開き、彼女の専属侍女ヘリーナが現れる。その手には三枚の紙が持たれていた。

「先程申しました様に南雲様が犯人という証拠はほぼ何も無いのが現状です。そして罪の所在を根拠づけるのは使徒半数程度の署名と教皇様の威光、この二つのみ。逆に言えば同等の威光を持つ者がいるならば無罪の獲得は兎も角、延期は容易い。ならば…ヘリーナ!」

「はい。陛下、こちらは先程リリアーナ様が述べられた内容に賛成の旨を記した署名、三枚となっております。右からリリアーナ様、メルド団長、そして【豊穡の女神】畑山愛子様の者となっております」

「——っ!？」

リリアーナ、メルドの名はまだ良い。それは国王であるエリヒドの名よりは程度が低い。しかし【豊穡の女神】は話が別だ。彼女は下手を打てばエリヒドどころか教皇であるイシユタルよりもその威光は強い。特に農民などの労働者に対して彼女の名は強く働く。

何と言つても現代神とまで言われるほどのものだ。そんな彼女が南雲ハジメの方に肩入れしていると世間に知られたならば、間違いなく騒ぎ出す。

「やはりお父様は視野が狭くなつておいでですね。彼女は『神の使徒』の皆様を一人残らず大切に感じていらつしやいます。そんな彼女が今回の南雲様の一件を見逃すとしても?」

神の言葉を代弁する教皇と唯一神の化身とも呼ばれる愛子。彼等の意見の相違は教会の信頼を脅かす。それだけは、認められない。「…とはいえ彼女の威光でも無罪までは不可能。半数以上の署名は事実。故にお互いに妥協点はここでしょう。既にイシユタル教皇の許可は得ています。後はお父様、貴方のみです」

ヘリーナがエリヒドの机にもう一枚、署名書とペンを置く。それは未だサインの書かれていないもの。

エリヒドは筆を止め、リリアーナを再度睨み付けると嘆息を吐いた。そして非常に簡潔に一言。

「期間はどれほどだ?」

「何とか承諾をもぎ取れましたね、お嬢様」

「ええ、流石に寿命が縮んだわ。成果は得られたけれどね」

エリヒドの執務室から私室へと帰る途中、リリアーナとそれに続く形でヘリーナが歩く。リリアーナの手には新たにサインの書かれた署名が一枚。これにより南雲ハジメへの罰の施行の延期は確定した。

期間は半年。もしその間に犯人である証拠が見つければその時点で延長は終了。罰は迅速に施行される。

リリアーナとしては変わってしまったとは言え、相手は父であり国王。緊張はやはりリリアーナにのしかかっていた。

ふー、と一息つきながら首を回すリリアーナ。そんな彼女を見つめながら、ふとヘリーナは今回の行動の前に己が尋ねた事を思い返した。

『お嬢様。南雲ハジメが今、証拠もなく犯人に仕立てられているのは間違いありません。しかし南雲ハジメが犯人でないと言う証拠が無いのも事実。その上、お嬢様が南雲ハジメの庇い立てをしたとなれば、その立場も僅かながら危うくなるでしょう。正直に言つて危ない橋です。聡明なお嬢様の事です、それが分かっている筈もないでしょう。その為お聞きします。何故南雲ハジメを庇う真似をするのですか？』

ヘリーナにとって何よりも優先すべきはリリアーナだ。小さな頃より共にし、そして忠誠をリリアーナに誓っている。ヘリーナは彼女を守る為ならば国を、神を、自身を、そしてリリアーナ自身をも騙し、逆らうことを決意している。

だからこそ今回のリリアーナの手は悪手だと思った。もしその理由がただの優しさによるものならば、リリアーナの作戦を妨害する事を決めていた。

『単純です。私がこの国の王女だから、それだけです。例え『使徒』の誰が善人で、誰が悪人だろうと全ての責任は巻き込んだ我々にこそあります。例え彼が本当に罪人で、悪意を持つ者ならば閉じ込める等の罰は必要です。我々にとって真に重要なのは国民であり、危険が及ぶのは避けなければならない。ですがその上で彼等を責める資格は我々には無い。むしろ責められるべきは無理矢理呼び出した我々王族。だからこそ私はこの名を使おうとも可能な限り『使徒』の皆様の味方であらねばならないのです』

しかしリリアーナの答えは、どこまでも正しく王道。単なる優しさなどではなく、王家が為すべき責務に従い彼女は動いている。

とは言えそれは教会に、そして神に逆らうも同然だ。リリアーナの進もうとしている道には荊が群生している。

「ヘリーナ。貴女には暫く私ではなく南雲様に付いて貰うわ。彼を元々担当していた侍女二名が南雲様を不必要に責めた疑惑が掛かっている以上、彼女等には任せられない。代わりに私が最も信頼する貴女を少しの間、南雲様に付けるわ」

「…畏まりました」

故にヘリーナは見極めねばならない。南雲ハジメを。

「そして見極めて頂戴。果たして彼が本当に罪人かどうかを。本当ならば…向こうの世界への帰還まで閉じ込めねばならないから」

そしてもし南雲ハジメが危うい存在ならば——ヘリーナは懐の刃を閃かせる事になるだろう。

リリアーナはあくまでも国王の血筋を、ヘリーナはその従者としての役目を全うする。そして彼女等の焦点は今、一人の男に定められていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…南雲は無事なの？ 先生」

「…予断が許されない状況は乗り越えたそうです。外傷もほぼ塞がったとの事です。ただし治癒の際、体内の体力をかなり使ったそうです。あと数日は起きないと白崎さんは言っていました」

「そう…」

ハジメの部屋の前、園部優花は目の前の畑山愛子と同様前傾になりながらも、祈るようにして椅子に座った。

治癒が終了して間も無く、優花と愛子はハジメが再び多大な傷を受けた事を知った。それからすぐに二人はこの部屋の前に駆けつけた。愛子を守るべき生徒の一人として、優花は迷宮で助けられた恩人としてハジメを見ていたから。

「…先生、南雲は迷宮でちゃんと戦ってたわよ」

座り込んでから少し、ふと優花は隣にいる愛子にそう言った。

優花は迷宮での一戦の際、トラウムソルジャーに殺されかけた所をハジメに助けられている。更にベヒモスを足止めした事もすっかり記憶していた。

今、世間においてハジメは『裏切り者』のレッテルを貼られている。

しかし優花にとってハジメは変わらず恩人だ。

だからこそ優花は誰かに認めて欲しかった。ハジメが『裏切り者』などでは無いと言う事を。今呟いた言葉はそんな思いの表れだった。「ええ、そうでしょうね。南雲くんはやる時はやる子だと南雲くんの両親が自慢していらつしやいました」

愛子は優花のそんな言葉に嬉しそうに頷いた。

愛子がこの世界において最も大切なものは生徒全員だ。彼等を無事に元の世界へと帰すために、彼女は行動している。

だからこそハジメが『裏切り者』として晒し上げられているのは、許せなかった。当然、事実の再確認を求めたが教会側はそれを認めようとはしなかった。リリアーナとの協力により、罰の施行の延期は認められた。だが彼を取り巻く状況が改善したとは言えない。

しかもその上でハジメが檜山等により重傷を受けたとの知らせを聞いた。檜山等もその行為自体は否定しておらず、結果注意勧告を受けたとのこと。罰の内容が甘いのは『使徒』とそうで無い者の差故か。

兎に角愛子の心中はかなり乱されていた。守るべき生徒の名誉を守れず、その上生徒間の不和に今の今まで気づけなかった。ハジメが虐げられていることに気が付けなかった。生徒を不安にさせないためにも表面上はいつも通り元気に振る舞ってはいるが、本来ならもうこの場で己を責め続けているだろう。

ただそんな中での優花の言葉は少し愛子を安心させた。生徒の半分以上から邪険に扱われているハジメ。しかしそんな中でも味方ではないようとしてくれる人がいると、愛子は知ることが出来た。

故に愛子は日頃の無理に繕った笑みではなく、心の底からの安堵の笑みを一瞬浮かべた。

「私も、あいつに助けられた」

「そう言ってくれると南雲くんも救われるでしょう。味方でいてくれる人がいるだけで、人は心細さがなくなりますから」

「…そうかなあ」

「そういうものです。ですから…どうか園部さんは南雲くんの味方だと彼に言っておいてください。今の南雲くんにはそう言う人が必要

でしようから」

優花がハジメの事を語ると、愛子がそんな優花を肯定する。そんな会話が暫く続く。傷の舐め合いであろうと、二人の削れていた精神は僅かばかり調子を取り戻す。

未だに眠り続けるであろうハジメの部屋の前。優花は路頭に暮れる己の心を段々と定めていく。愛子は己があるべき道を再度目に見据える。

そうして暫く経っただろうか。目の前の扉がギギイ、と音を立てた。

「!!?」

南雲ハジメだ。

彼は目を張る二人を他所に現れた。身体中に包帯を巻き、脚を引き摺って歩いていった。

「ちよっ!? 何してんのよ、南雲!」

「南雲くん!? 今貴方は動いていい良い状況ではありません! 早く部屋に戻りなさい!」

度重なる怪我と治癒により無理矢理使われた体力。本来ならば動くどころか目覚める事すら不可能である筈のハジメ。しかし彼はよろけながらも歩く。

二人の静止の声すら聞く事もない。再度止めようとする優花と愛子。しかしハジメの目を見て逆に二人は止まってしまった。

あまりにも必死なのだ。身に知らぬ罪も、度重なる理不尽も、怪我の痛みも、疲労による眠気も。それ等全てを薙ぎ払いハジメは進んでいる。彼が放つ気迫に彼女等は圧された。

そして壁伝いに彼は歩く。ある一点を目指して。

「……白崎、さんっ」

彼の脳裏にはただ一つ。泣いている彼女の顔が映り込んでいる。

「…南雲くんに手を貸しましょう、園部さん」

「…そうですね、先生」

二人もまたそんなハジメを追う。彼を止められる気はない。しかし今にも倒れてしまいそうなハジメを支えようと、立ち上がるのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

もうすぐ夜が明ける。明日にはもう訓練が再開される。早く寝なければ体力がもたないだろう事は安易に予想できる。

されどメルドは眠ることが出来ずにいた。ハジメの事も心配だが、施行の延期以上のことが出来ない以上は無理矢理でも思考から外すしか無い。更に言えば暫くは起きないだろうことから、目下の問題は目の前の扉の奥だ。

「雫、白崎はまだ…」

「はい、メルドさん。自責の念に駆られてかずつと起きてます。私も何度も慰めようとしたんですけど…駄目でした」

「そうか…」

香織は自責をし続けている。それにより生み出されるストレスが、強迫観念が、香織から眠りという安易な現実逃避の方法を奪っていた。逃げるな、お前が悪い、と香織を責め立てて逃がさない。

しかも食事や水にも一切合切手を付けていない。今のままでは体に限界が訪れ、倒れてしまうだろう。

同時にメルドはこうなった理由もよく理解していた。香織はハジメに恋をしていたのだろう。懸命に彼と接していたり、弾んだその笑顔から良く理解できた。そこに悪意などは見えず、純粹な好意だった。

だがそこで気付かされた、己がハジメへの虐めへの間接的原因だったという事実。それに気づいた際の彼女が受けた傷の大きさは計り知れない。

そして気づいた時には後の祭り。過去に起きた事であり、香織が無闇に傷つけた事実は消える事はない。勿論、雫やメルドが彼女を癒す術を持ち得るはずも無い。

しかし【聖女】白崎香織は国や教会にとって大切なカードの一つ。【聖女】という類い稀な天職を持ち、精度の高い“治癒魔法”と“浄化魔法”を持つ。対魔人との戦争を考慮すると、必ず万全な状態まで育て上げたい人材の一人。ここで躓いてはいけない存在だ。

当然ながら精神がただの少女であることにメルドは気づいている。



しかし後に来るであろう戦争に必要な人材を育てることこそがメルドの使命。そこに香織の心も、そしてメルドが持つ人としての感情も挟んではならない。

(…きつと俺は地獄行きだな。この様な年端も行かぬ少女に鞭を打たねばならんのだから)

そうしてメルドは扉を開け、強引に香織を立ち直らせようと決意を固め――

「白崎さん…聞こえてる?」

いつの間にかすぐ横にいたハジメに目を見開いた。

「坊主!」

「な、南雲君?」

メルドが、雫が、そして扉の奥。三者に動揺が走る。何故ならば本来ならば起きているはずが無いのだ、この男は。

しかしそれ等の動揺も全て無視。ハジメはここまで来るのに手を貸してくれた優花と愛子に軽く礼だけ言うと、香織の部屋の扉にそつと寄り添った。

メルドはすぐにハジメを部屋に戻らせようとした。しかし今の香織を説得出来るとするならば、それは香織の想い人であろうハジメしかいない。少年に無理を重ねるのも情けない話だが、それ以外に香織を前向きに立ち上がらせる方法が思い浮かばないのだ。

結果、優花や愛子と同様、見守る形となった。

『――南雲くん?』

「白崎さん。少しだけでもいい。話をさせ――」

『…帰ってよ』

香織はハジメにそう冷酷に告げる。いつもの明るさが嘘の様に、その声は暗く重い。ハジメも初めて聞いたそんな声に僅かばかり動揺を見せた。

一瞬の動揺の後、めげずハジメは扉の向こうに声を掛ける。

「…帰らないよ」

『ダメだよ？ 帰って』

「…何で？」

『…………南雲くん、今凄く無理してるでしょ？ だから早く部屋に戻って寝なきやダメだよ？』

「白崎さん、嘘下手だね？ それが本当の理由じゃ無いなんてことにだって分かるよ」

『…………』

地球の頃から彼女はいつもいつも、下世話と言える程にハジメに話し掛けていた。嬉しそうに微笑んで、心配そうに上目遣いに見つめてきて、悲しそうに口を尖らせて…そんな一挙一動がハジメの記憶にはある。

なんて分かりやすい嘘だ、とハジメが軽く笑う。そして本当の事を話すつもりが無いらしい香織にハジメは困った様に眉を八の字にした。

「話してくれない？」

『ダメだよ。帰ってよ…』

「…本当の理由を話してくれるまで、僕はここでずっと待つよ？」

『…………』  
「気絶仕掛けても無理矢理体を叱咤打つし、食事だって取らない。四六時中、扉の前で君が本当の事を話してくれるのを待つ」

『…南雲くんってば、意地悪だよ』

「あはは、ごめんね。でも白崎さんは優しいから。僕の事を気遣って話してくれるだろうなって思ったんだ」

ハジメが切り出したのは我が身を使った脅し。何とも情けない脅しだが、それが兎に角香織には効いた。

扉の奥から、香織が想いを曝け出す。

『南雲くんが傷ついていたのはね、私のせいなんだよ』

『学校で話しかけてたから、檜山くん達が南雲くんを虐めた。トータスこっちでも仲良くなるうとしたから、南雲くんが悪者にされたんだ…』

『それを知っちゃったら、もう南雲くんには会えないよ。私の何が南雲くんを傷つけるか分からない。だったらもう…会わないのが一番の正解でしょ?』

扉の奥から震える様な声が響く。か細くて、それでも扉を挟んだのが嘘の様にその場にいる全員に届いた。香織の言葉はそれ程に必死に搾り出されたものだった。

『南雲くんは優しいから、私を許すかもしれない。でも…そうすれば南雲くんはまた傷つく。今度は死んじゃうかもしれない』

『だからもう私と関わらないで…そして、私を許さないで』

それは香織にとっては苦渋に満ちた選択だっただろう。それでも香織はハジメを傷つけたく無い一心で、その道を選んだ。ハジメとの仲を修復しないという事を決めたのだ。

故にその覚悟の丈は計り知れない。香織の好意を知る雫、メルドはそれだけの想いを察した。全貌は理解していない愛子や優花でも、押し黙るだけの覚悟を見せた。

果たしてその想いを直に受けたハジメはどうか。皆の視線が扉の前に向く。

しばらくハジメは何も言わなかった。香織から受けたその想いを咀嚼していたのか、はたまた己の中での香織への感情を見直しているのか。はたまた別の何かか。

やがてハジメは扉の奥へ届けと口を開いた。

「最初は僕、白崎さんの事を不思議な人だっと思って思ったんだ」

『……………』

「誰とでも仲良く出来て、いつも明るくて、僕とはまるで生きてる世界が違う。それなのにいつも僕の所に来ては、何度も何度も構うんだから…本当に不思議だった」

『…』

「僕は僕でオタク趣味中心の生き方を変えるつもりは無かったから、君の言葉をろくに聞かなくて…そんなだから非難轟々だったんだろうなあ」

『…』

「確かにさ、白崎さんが僕に構わなかったら今までみたいな目に見える  
た虐めなんて無かったと思う。学校で何とも無い日常を送って、家に  
帰って趣味に生きてたんだろうな。こっちに來てからも…こんな  
目に見えて邪険にされなかつたと思うよ」

『……………だよ。そうだよね…』

それは香織が知る由も無かつた、ハジメからの香織の印象だつた。  
ハジメは一人、懐かしむ様にぼつりぼつりと語っていく。

そしてハジメが香織の言う様な『もしも』の話をし始めると、香織  
はその声を更により暗く落とした。やはり改めて本人に肯定される  
と、辛かつたらしい。更に深く彼女は悲しみに暮れた。

そんなあんまりな物言いに周囲が眉を顰めた。だがそんな様子も、  
すぐに晴れる事となる。

「でも、僕は救われた」

『——』

「クソツタレみたいなのこの世界で、君は変わらず僕に接してくれた。  
味方でいてくれた。笑顔でいてくれた。そんな君に僕は何度も何度  
も…数えきれないくらいに救われた」

『——違うよ！ 私はそんな人じゃ無い！』

「何より——君があの日。僕を『強い人』って言ってくれた！ だから  
僕は迷わず戦えた！」

『ダメツ！ 私を、私を許さないで！』

そう、ハジメは救われた。全てが変わつたあの日、それでもなお香  
織だけはその変わらぬ笑みを向けてくれた。怒濤に押し寄せる非日  
常と理不尽の中、ハジメを肯定してくれた。

しかし香織はそれを否定する。また今までの様に戻れば、ハジメが  
傷ついてしまう。それを恐れて、己を許そうとするハジメに怒鳴つ  
た。

「…でもこのままの僕じゃ君のそばにいれない。今のままじゃ僕はま  
た誰かにやられて…君を悲しませてしまう」

そう、今のハジメは弱い。世界どころかそこ等の子供にさえ負ける。周囲は敵だらけで、いつまた傷付く事になるか分かりやしない。そうなれば悲しむのは香織だ。つい先、気絶する直前に見たあの香織の暗い顔を、またさせてしまう。

だから――

「だから…どうか待ってて欲しい」

『……………え？』

今度こそ、香織はハジメの言葉により呆気にとられた。

しかし構わずハジメは続ける。

「今の僕は弱いから…君に並べるだけの力も名誉も才能も無い。それに誰かを傷付けるのも、ボロクソにやられた今でも嫌だ」

ステータスは子供並み、民衆には「裏切り者」のレッテルを貼られ、天職は何処にでもいる【錬成師】。力も名誉も才能も、どれも香織に届く訳が無い。

しかもこの世界という現実を理解していてもなお、ハジメは人を傷付ける事を恐れていた。

「それでも！ それでも僕は君のそばにいたい！ 君が僕の生き方を教えてくれた！ 僕の今までが間違ってたなんて教えてくれた！ 僕は君から…数え切れないほど沢山の物を貰った！」

だがこの世界での平穏は常に彼女の傍にこそあった。こちらまで明るくなる様な笑顔でいてくれた。己が戦う為の覚悟も彼女から貰った。

香織こそは気づいて居ないが、ハジメにとってはそれらは掛け替えもない様な物だった。

故にハジメは強欲にも願ってしまふ。天と地程に離れた場所にいる彼女の隣を、求めてしまふ。

「だから――僕は強くなるって決めたんだ!!」

だからこそ――ハジメはあの日漠然と願った夢を宿すのだ。

「力も名誉も手に入れて！ 才能なんて関係なくなるくらい強くなっ

て！ 世界が認めたくなくても認めざるを得ないぐらいに成り上がって——僕は君の横に立つ！」

この世界は理不尽だ。才能がおおよそ全てを決め、弱者は満遍なく蹴落とされる。上を向く事など許されない。事実、ハジメは何度も何度も理不尽を喰らっている。

故に己が欲望を叶えるには強くなるしか無い。

誰も傷つけたく無いという思想も、地球に帰りたいという願望も、そして白崎香織の隣に居たいと願う理想も！ それら全てを叶えるには、周りが有無を言わない程に上に行くしか方法は存在しない。

きっと目指す未来は目を凝らさねば見えぬ程に細いだろう。だとしても構わない。生憎ながらハジメは理不尽をよく食らっている。今更の話だ。

そうハジメは決意する。そしてその決意の丈を、扉の向こうで閉じこもっている彼女に響かせた。

「だから……どうか高くて遠い、遙か先で待っていて欲しい。太陽みたいに明るくて優しい君のまま、僕の好きな君のまま待っていて欲しい！」

『——ッ!!』

ハジメは息を切らす程に声を張り上げた。体の体力も全て出し切ったのか、これを言い終わる頃には地面に倒れ込む形となって居た。

すると扉が開く。そこから現れた香織は頬を赤く染め、両目から涙を流して居た。しかし、それ等が数時間前の様な悲しみによるものではないことなど、この場の全員が理解して居た。

そして香織はハジメを抱きしめて、笑った。

「うん……待ってる。絶対に、南雲くんが来てくれるまで。いつまでも待ってるから！」

「……うん。待ってて、白崎さん。必ず、必ず君の元までたどり着くから」

——最初の月下での契りは、世界が破り捨ててしまった。

——しかしここに新たな契りが交わされた。

——そして天はその契りを祝福する。曇天は晴れ、地平線から照らす朝焼けの陽光が二人を包んだ。

——ここから始まるのだ。

——世界から虐げられた【無能】が愛した者の傍に立つ為の物語、その一頁目が。

# 一章：『弱』『輩』『勇』『者』

## 1、これからの事

再び朝が来る。

果たして自分はどれだけ寝ていたのか。体のダルさから長期間眠っていたのは確実。関節を動かす度、ポキポキと音を鳴らした。

それでも体に痛みや違和感はない。寝ている間に治ったようだ。恐らくは彼女のお陰であろうと、感謝を捧ぐ。

そして動けるならば——いかねばならない場所がある。

——譲ることの出来ないこの想い、そしてあの日誓った新たな約束の為に。

もう後ろは振り向かない。

少年は再び立ち上がったのだから。

「——なので僕に特訓を付けてください！」

「開幕土下座か、坊主!？」

そして起きて早々、ハジメはメルドに土下座をかましていた。

そう、ハジメはあの日強くなる事を決めた。あらゆる逆境に耐え得る為、力や名誉を手に入れて見せると宣言した。

しかしハジメの天職は非戦闘職たる【錬成師】、おまけにステータスや技能も凡庸以下。あんな決死行を繰り返したというのに、ステータスプレートに大きな変化は見られなかった。

そして肝心の戦闘方法だが：魔法適性がない以上、接近戦という手段の他無い。一応「錬成」も魔法にカテゴライズこそするが、発生速度が遅く、範囲効果が狭く、攻撃性皆無であるため、戦闘面において活用するのは難しい。

ベヒモス相手で成功したのは単純にベヒモスの行動パターンが単純かつ遅いのが理由だ。あと何割か幸運も作用しているだろう。



兎も角、ハジメの戦闘手段において接近戦以外はあり得ない。そしてその接近戦を教えてくれそうな相手がメルドただ一人だったのだ。一応他にも零という選択肢もあったが、『使徒』との接触は控えるのが今の最善である。

一方メルドは『使徒』の監督役という側面もあり、現在ハジメも接触だけならば許されている。だからこそこうして対面し、話を出来ている訳だ。：ハジメの面は地面と平行の状態ではあるが。

だからこそ請い願うのは個人的な訓練、その監督である。現在、懲罰自体は執行されていないハジメではあるが、極力の接触は咎められているのが現状だ。すなわちハジメは通常の訓練にすら参加出来ない。

ならば一人でできるかと言えば、まあ素人であるハジメに出来ようはずがない。そこでメルドである。

とはいえメルドは『使徒』の監督と同時に騎士団長。彼の日常スケジュールは多忙極まり無い。この願いは無理も承知のものだ。そこで放たれたのが、南雲家相伝の必殺技「土下座」。交渉材料が無い現在、誠意を表す他方法が無いのだ。

かなり無理がある話だが、ハジメが頼れる相手はまず少ない。きつと断られようと第二第三のハジメが土下座しに来るだろう。

ただそんな覚悟は杞憂だとばかりにメルドは頷いて見せた。

「まあ、分かった。とは言え昼や夜にはやるべき事が多い。出来るとすれば早朝のみだ。そこで良いならば受け入れよう」

「ありがとうございますー！」

再び土下座を見舞うハジメに「もう良い、席に座れ」と座るように促すメルド。それに従い席に着くと、今度はメルドが頭を下げた。

一国の騎士団長が己に、冤罪とは言え罪人に、頭を下げているという事実にはハジメは思わず狼狽する。

「な、何してるんですか!？」

「まず坊主…いや、ハジメ。すまなかった。あの時、俺はお前を守ってやるなどと言ってやったというのに、結果はこのザマだ。お前は期待以上の戦果を見せたというのにな…本当にすまなかった」

あの時、というのは迷宮での話だろう。確かにあの時、メルドは作戦を実行しようとするハジメの背にそう語りかけたことを思い出す。

メルドは本気でその事を悔やんでいるようだ。見れば膝の上に置かれていた拳に凄まじい力が込められているのが見て取れた。それを見て普段は豪放磊落な彼だが、義理人情に厚い人でもあるのだと知った。それこそ王国が罪人とした今もなお真摯に向き合う程に。

そんな彼に少し感動しながらハジメはメルドに頭を上げるように促した。

「大丈夫です。その言葉だけでも嬉しいですから。それで納得出来ないなら…それこそ僕を強くしてください。なかなか難題ですよ。なんて言っても非戦闘職、凡ステータス、固有技能無しの三拍子ですから」

「…ふっ、あい分かった。必ずお前を強くすると約束しよう。だが朝のみというのもある。かなり厳しい内容になるぞ。覚悟はできてるか？」

「ええ、とつくに出来てます」

なお訓練自体は二日後の朝から、と言うことになった。当然ハジメが起き立てというのもあるが、訓練メニューを細かく考える為というものもあるらしい。そもそも王国の騎士団は才能ある者ばかりだ。ハジメレベルの人間に訓練を付けることはまず無い。そのため、メルドも細かくハジメに合ったメニューを考えたいそうだ。

何ともありがたい話だ、と感傷に浸るハジメ。そんな彼の目の前にパンツと紙の束が置かれた。どうやら何かの資料の様だ。

「よし、それではお前の今後の話だ。まずお前に科せられた冤罪、その懲罰自体は半年後に延期だ。その間にお前の行動なりを見て、最終的な判断を下すところの事だ」

「あれ？ 思ったよりも期間ありますね」

「リリアーナ姫や畑山愛子殿が協力してくれたからな。特に畑山愛子殿は【豊穰の女神】として国民に名を馳せている。そんな彼女の言葉を教会が無碍には出来なかった、という所だ」

「なるほど…」

愛子の思考の主軸は生徒だ。空回りする事も多くあるが、その全ての行動には彼女なりの思いやりが存在する。そしてどうやらその性ははこちらに来てもなお変わる事は無いらしい。

はたまた感動していると、メルドが二つの指をハジメに向かって立っていた。

「そしてお前を無罪とする方法は主に二つだ。一つはお前が無実だと言う証拠を見つけ出す事。だがこれは現実的に考えて困難だ」

「王国と教会がその証拠を揉み消すから、ですよね」

「ああ、そうだ。その上、下手に証拠を出して向こうを刺激するのも悪手だ。お前が犯人だと言う捏造された証拠を出しかねん。そうやってしまえば宣伝力がある教会や王国の独占場だ。こちらち勝ち目は無くなる」

畑山愛子という名声も王国と教会のタッグの前には明らかに霞んでしまう。延期を行えたのも下手な衝突を避けたかった向こう側の思惑故の物。こちら側に賛同する者が少ない以上、その条件下でハジメが無実を勝ち取るのはまず不可能だろう。

メルドは立てていた指の内一つを折り曲げた。そして残り一つ立てられている指。それが最後の可能性を暗喩する。

「故に主軸となるのもう一つの手段…裁く事自体を困難な状況を作り出す事だ」

「……………うん？ 変わらなく無いですか？」

「ふむ…言い方が悪かったか。すまん。順を追って説明するぞ？」

そうしてメルドはより詳しく説明を行なっていく。

「まず現状、良くも悪くもお前は今多くの人々から注目を集めている。そして同時にお前の『罪』は知っていても『南雲ハジメ』という人間自体を知っているわけでは無い。そう言った民衆はどうしても自分の目で確認したがる。本当に悪人かどうかをな」

「…確かに、そうですね」

地球にいた頃、メディアで醜態が暴かれた芸能人に対し、多少ながらも視線が行っていた事を思い出す。まさか自分が暴かれる側に行くとは当時思いもしなかったが、状況としてはかなり近いだろう。

「だからこそもしお前が公の場で揉み消せない程の『偉業』を成し遂げた場合、それは民衆に素早く伝わる。そして王国や教会は民衆の支持にて成り立っている。その地盤を危うくする様な真似はしないでらう」

「…つまり罪自体は被った上で、教会や王国が僕を赦さざるを得ない状況を作る…という事ですか？」

「そうだ。悪いが俺が考えた限りはこれが最善だ。」

迷宮での決死行、あれを王国が揉み消せたのはその場にいたのが王国騎士や『使徒』という御し易い相手だったというのが挙げられる。僅かながらハジメの味方を主張する『使徒』や騎士もいるが、なんせ絶対数が少ない。

だが流石の王国も民衆の目がある場所で『偉業』を為されれば、欺く事が出来ない。百聞は一見にしかずという様に、人は伝聞した物よりも遙かに見た事実を信頼する。

確かにそれが出来るならば、向こう側はハジメに刑罰を下す事が困難となる。そのプランには納得出来る。

ただ問題は数多く存在する。

まずハジメ自体に掛けられている「裏切り者」のレッテル。これが正確にハジメを判断する事を妨害する。現に今のハジメの状況は『使徒』の虚言により作られた物だ。同じ様に色眼鏡で見られ、正当な評価を受けられない可能性が高い。

次に王国や教会が妨害を行う可能性がある、ということだ。ハジメに罰を執行しないという事は即ち、神の意思に背くことに他ならない。確かに公の場でハジメが『偉業』を成し遂げたならば覆す事は出来ないが、その状況に持ち込ませない事ならば不可能では無い。

そして何よりも：ハジメが【無能】という事実、それこそがこのプラン何よりも問題だ。

ステータス、天職、技能…これらはこの世界における絶対的な序列。これらの優劣がその者の人生を左右する。

ただ一つ劣っていたとしても蹴落とされる様な世界だ。ましてや三つ全てが凡庸以下のハジメではまず『偉業』など成し遂げられる訳

がない。

そんな事は賢い者ならばまず分かる。抱く夢の色も褪せて、現実を知る。そして背を向けて、世界における己の役割を果たしていく人生を送るのだ。地球でさえもそうだった。上から下が隔絶している世界ならば尚更だ。

ただ、だ。メルドは確信している。目の前の男はそんな常識的な、賢い人間などでは無いと。あの迷宮での戦い然り、先日に見た少女への宣言然り。

「上等ですよ、やってやろうじやないですか。周りの奴ら全員、ぎゃふんって言わせてやりますよ」

——この男は、どうしようもなく愚かしい。前を見ている

大胆不敵にハジメは言つてのける。そして目には消える事の無い闘志を宿していた。

そして実際にそう応えて見せたハジメに、メルドはニヤリと笑みを浮かべた。

「お前ならばそう言うだろうと思つたぞ、坊主。だが具体的にはどうする？ 言つては悪いがお前は戦いの方面では功績は残しづらいだろうが…」

「力を付けたいのは護身的な理由と個人的な拘りですからね。『錬成』か学問の方になりますかね…後者に関してはもしかしたら…つていう『アテ』もあります」

「ふむ…『錬成』ならばお前にピッタリな指導者に心当たりがある。進捗があれば連絡しよう」

「ありがとうございます」

強くなりたいたいという思いに間違いは無い。しかし最優先はそちらでは無く、罰を免れることだ。それが無ければ強くなろうと意味が無い。その為、力を付けることは最低限にし、半年の大部分を学問等に当てる事が良いだろう。

「しかし、てつきりお前さんはあまり周りの事を気にしないとばかり思っていたが…そうでも無い様だな」

以前までのハジメは究極の事勿れ主義。他人からの評価を気にせ

ず己を貫く人間だ。今もそれはあまり変わらないが、それ故にメルドはハジメの「ぎやふんと言わす」という宣言に少し違和感を感じていた。

するとハジメはにっこりとした笑顔を浮かべた。：額に青筋を立てた笑みを。

「僕は聖人君主なんかじゃ無いですから、そりゃお腹も立ちます。知らない罪被せられるわ、散々心無いこと言われるわ、殴られるわ蹴られるわ……。終いには白崎さんも泣かされましたしね。ぜつつたいに教会も！ 王国も！ あとクラスメイトのみんなも！ 全員見返してやりますよ！ ……まあ、この上なく子供っぽいですけど」

「むしろ普通なら一生恨むレベルだと思うがな…」

「まあ、そもその原因は僕が馬鹿にされる様な人間だったって言うのもありますから全面否定は出来ないですね。：流石にこのレベルはやり過ぎですけど」

どうやら流石のハジメも堪忍袋の緒が切れたらしい。笑顔から「ぜつてえみんなの目ひん剥いてやる…」という覇気を感じる。ただ今までの理不尽に対し、復讐や裏切りに走らないハジメは途方もなく善人ではあるが。

するとメルドは何か思い出したのか、ハジメにある話をする。それは積もり積もった鬱憤が弾けていたハジメを、再び冷静にするには十分なものだった。

「まあ、お前さんを気に掛けている連中も居たぞ。香織や雫は勿論だが：龍太郎や優花達もしよっちゅうお前を気にしている。他にも『神の使徒』やあの場に居合わせた部下の何人かもお前を心配していた。：まあ、そいつらは立場もあって現状中立と言った所だがな」

メルドの説明から察するに、『使徒』間における現状のハジメを巡る賛否は以下の通りだ。

味方：白崎香織、八重樫雫、坂上龍太郎、園部優花

中立：永山重吾、野村健太郎、遠藤浩介、辻綾子、吉野真央、相川昇、仁村明人、玉井淳史、菅原妙子、宮崎奈々、清水幸利

対立：天之河光輝、谷口鈴、中村恵里、檜山大介、中野信治、斉藤

良樹、近藤礼一、その他全ての『使徒』

中立派の意見は様々だが、要は煮え切らない状態と言えよう。完全に味方もしなければ敵対もしない。敢えて言うならば様子見と言った所か。

メルド曰く、中立派殆どの者はハジメに悪意は持っていない。しかし己等が対立組と敵対する事を避けている者達、との事だ。まあ無理もない。ハジメの味方をすると言う事はイコールで、王国・教会に逆らう事となる。

『使徒』と言えど子供。その様な真似は避けたいのが当然と言えよう。ハジメからすれば、己の言葉に責任を持った上で、冤罪を掛けてこないだけ、全然マシだ。

ただハジメからすれば意外だったのは味方派の龍太郎と優花の存在だ。優花は学校でまず接点も無かったし、龍太郎に至っては嫌われていると思っていたためだ。

ちなみに言っておくとハジメは先日の記憶を、香織への宣言以外大体忘れている。体が限界にも関わらず動かし代償とも言えよう。愛子や優花、メルドがあそこにいた事すら記憶の彼方に行っている。「龍太郎、優花の二人は迷宮の件で何かしら思う所があったらしい。今度会った時は中立性の奴等も含め、何かしら話してみると良いだろう」

兎に角お前には今、味方が必要だならな、と付け足すとメルドは席を立つ。そして掌をハジメに向けて、部屋から出て行ってしまった。

後ろの時計を見ると長針が真上一步手前だ。一般的な『使徒』における訓練の時間だ。どうやらメルドは時間をギリギリまでハジメに割いてくれたらしい。

それ程、自身に力を注いでくれるメルドに感謝を捧げながら、ハジメもまた席を発つていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『無意識的な非干渉領域生成説』、『属性魔法の発動プロセスとその簡略化』、『技能分類絵図』……うーむ、何とか読み進める程に己の才能の無さを自覚するな」

今、ハジメがいるのは【ハイリヒ王国】において1番の蔵書量を誇る王立図書館だ。子供向けの絵本から学者向けの論文まで、様々なものが置かれている。

そして一般人が読むにはあまりにも凄まじい文字量を誇る論文の数々が、ハジメの目の前では山を築いていた。

頭を悩ませながらもそれらの論文を読み進めていくハジメ。というのもここに来てハジメの数少ない技能、「言語理解」が日の目を浴びていた。

「言語理解」は『使徒』専用、具体的に言えば異世界から来た者のみに与えられる特殊技能だ。それ故に技能発見からの日は浅く、『使徒』間での認識は単純な翻訳技能とされている。

しかしその真髄は文字通り言語を理解することにこそある。

流石に単語のルーツや歴史、また個人ごとの思想の違いや異種生物間の言語を理解するのは不可能だ。しかし単語の意味、用途などは『見る』、『読む』、いずれかを通して理解する事ができる。

また多少記憶補正もかかるらしい。これにより『使徒』のメンバーは詠唱文の記憶や騎士達の動きの模倣トレースに役立てている様だ。

そして今、ハジメはこの技能を辞書代わりに論文を読み解いている。なお技能による理解度は本人の知性に比例するが、ハジメレベルならば難なく読み解けた。

余談だがここでの知性とは記憶能力などとは異なり、理論展開能力の事を指す。要は理屈屋な者ほど良い、という話だ。

これこそがメルドに話していたハジメの『アテ』だ。普通ならば必要な単語ごとの記憶という過程を飛ばし、知識を広げられるというのは学問という方面に置いて絶対的なチートだ。単なる時間のショートカットのみならず、齟齬が発生しないという点も凄まじい。

そしてその技能を持つ『使徒』は基本的な勉学のリソースは少ない。世界の常識は勉強するが、それ以外はと言われれば社交場でのマナーや詠唱の暗記・発展を行う『詠唱基礎』や魔法ごとに使い分ける魔法陣を知る『魔法陣基礎学』ぐらいである。とても「言語理解」を有効活用出来ているとは言えない。だからこそハジメは学問を本格的に



学んでいるわけだ。

ちなみにハジメが読み解いているのは魔法の発生過程を理論化する『魔法応用学』や魔力の可能性を説く『魔力環境論理学』、多種多様に渡る技能への見聞を深める『技能収集学』：要は魔法や技能などのプロセスを学ぶ、実践的では無い学問だ。

そもそも『使徒』達が『詠唱基礎』や『魔法陣基礎学』しか学んでいないのは、戦いにおいて余分な知識は必要ないからだ。むしろその発生過程などを考え始めると、ノイズが掛かることが多いのが魔法という代物。

魔法とは突き詰めればイメージだ。確かに正解となる魔法の発生過程は存在するのだろうか。そこに行き着く事が出来れば、魔法は更なる発展を得られるだろう。

だが逆に間違えたプロセスで魔法を理解した場合、魔法は良くて弱体化、最悪使用不可能になる。脳内における魔法プロセスと現実に発生する魔法プロセスが齟齬を起こし、結果現実への干渉が弱まってしまふ為である。

現にトータス史において名のある魔法師達が真の魔法過程を求め、研究を行った結果廃れていったという事例は少なくない。故に国定魔法師や貴族の魔法私兵等はその研究を禁じられている。それこそが『使徒』にそう言った学問が伝わっていない理由だ。

だがハジメは魔法が使えなくなったとしても「錬成」のみ、更に『使徒』の称号は実質無くなった様なものだ。学んだとしても誰も文句を言う者はいない。

しかし学問で功績を残す以外にも、別の目的がハジメにはある。それは強くなること、それに他ならない。

ハジメは戦略面ではこの世界から見れば最底辺。例え努力をしようとして、才能ある者達には追いつけない。そもそも上位にいる者達も努力をしていない訳がないのだ。多少努力が上を行ったからといって、実力が超えることなどあり得ない。

故にそもそもステータスの不利、これを覆す様な手をハジメは探し求めている。とはいえそんな事は今まで模索されてきたのは想像

に難くない。それでもなお方法が確立されていないのだ。幅広く、深く学んでいく必要があった。

ただ調べてみた結果、より己の無能さを知らしめられただけだった。より実感した頃には外も暗くなっている。

進捗も無く、やるせない気持ちになりながらも帰路に着く。途中罵声なども浴びせられた事もあったが、それらは全スルーして真っ直線で己の部屋の前へと辿り着いた。

(取り敢えず暫くは魔力の方に焦点を当てた方が良さげかな。属性魔法とかは適性が無いと発動も現実的じゃ無いし、魔力の体内操作の精度を上げる方が力を付けるには効果的な気が——)

そしてハジメは鍵を開ける事なく、ドアのノブを捻った。己担当の侍女は実質職務放棄しているので、部屋の片付けなども自分でしなければならぬ。己の時間が削られるのを億劫に思うと同時に、地球にいる母の有り難みを感じながらドアを押して部屋に入る。

ここで違和感に思うべきだったのは鍵が元々開いていたことだ。他の『使徒』に比べてハジメの部屋のセキュリティはガバガバだ。だからこそハジメは部屋に侵入されない様、必ず鍵を閉めてから外に出ている。それは今日の朝も例外では無い。

だというのに今このドアは開いていた。つまりそれは別の誰かが部屋に入る、もしくは何かを仕組んだ可能性がある訳だ。

しかし今、疲労からハジメは思考をこれからのプランのみにしか当てられていない。ドアへの違和感をも忘れて、地面に一度体を放り出さんとして——

「ゴブフオオ!!?」

——ものの見事に目の前の埃やら丸められた紙などの山に体を突っ込ませた。

当然目覚めてすぐにメルドの所へ向かったハジメに、そんな山を作る時間は無かった。ならばこの山は一体誰が作ったものか…

そこまで思考を巡らせて、ゴミの山から頭をひっぽ抜くと山のすぐ隣に箒を持った誰かがいた。衣装から城の侍女である事はわかったがどうも見覚えが無い。顔立ちは大人びており、全体的にT H E メイ

ドといった感じを醸し出している。

「申し訳ありません、南雲様。無断での掃除を行った挙句、御身を汚す真似を…言葉で済むとは思っておりませんが謝罪させて頂きたく存じます」

すると彼女は流れる様にハジメへ頭を下げた。普通の侍女と違いやらされた感じが無い。自発的に自然と謝罪している、そう思わされる様な所作だった。

最近見てきたメイドとかは舌打ちとかそもそも謝罪しないとかばかりだったので衝撃を受けるハジメ。それが酷い慣れである事を己は気づいていない。

そんな衝撃を受けたとは言え、気になるのは彼女の正体だ。己の担当を務めている侍女は先日罵詈雑言と汚水をぶっ掛けて来た者達だ。決して目の前の超エリート風なメイドではない。

ハジメの脳裏に浮かぶそんな疑問符の数々を読み取ったのか、侍女は今度は謝罪とは異なる角度のお辞儀を見せた。

「改めまして南雲ハジメ様。此度から貴方様の代理侍女をさせて頂きます。名をヘリーナ、リリアーナ様の「傍付き」にて御座います」

どうぞよろしく願います、と軽やかな笑顔を見せるヘリーナ。だというのにハジメの背筋には、何故か悪寒が走るのだった。

## 2、午前は実践訓練　　くく筋肉痛と頭痛を添えてくく

昨晚、急に現れたりリリアーナの腹心にして、ハジメの専属侍女代理となったヘリーナ。彼女についてハジメは少し考え事をしていた。

まずリリアーナの腹心がわざわざハジメに付く事となったのは、先日侍女二人がハジメに対して暴言、迷惑行為、更には迷惑行為を行ったことが理由と事。

懲罰をまだ受けていないハジメはレットテルのみではあるが『神の使徒』。その様な無礼は許されるものではない。

結果、二人は減給及びしばらくの謹慎を喰らっている。少し甘い気もするが世間の評価上、仕方がない所だ。

そうとなればハジメに対して誰かしら別の侍女を当てる必要がある。しかし侍女のほぼ多くが聖教協会の信者であり、彼女らの二の舞となる可能性がある。

そこで目をつけられたのがヘリーナである。リリアーナの腹心たる彼女はリリアーナの命に背くことが無い。唯一ハジメに危害を与えないだろうと、リリアーナは判断した。

そのためハジメにあった専属侍女を探し終えるまではヘリーナが担当を務める事となった、とここまでがヘリーナがハジメに昨夜伝えられた理由である。

ハジメの目から見てもヘリーナは優秀だ。昨夜掃除が終わった後、部屋は劇的ビフォーアフターを迎えた。部屋にこびり付いていた赤い汚れ等も今や痕さえ見えない。それに赤く乾いていた服も真っ新しい新品の様に早変わり。赤色が滲んでいた木のベッドも、その色が見事抜かれていた。

：先程から汚れの種類が主に赤色な何かしかないが、何も気にする必要はない。掃除していたヘリーナにちよつと気の毒そうに見られたが、本当に気にすることではないのだ。

まあ、そう言った風に今までの生活が嘘の様に快適になった要因であるヘリーナ。ただ彼女に関して少し、疑念を拭えずにいた。

(何か：ヘリーナさんが来てから妙に落ち着かないんだよな…)

それは対女性による緊張と言ったものではない。言うならば不安から、だろう。ハジメは敏感に何かを感じ取っていた。

ただそれが何かは分からず。一夜挟んだ現在でもなお頭を捻らせざるを得なかった。

「…で？　話は聞いていたか、坊主？」

「……………すみません、聞いてませんでした」

今現在は深夜四時。まだ朝日も昇らない時刻ハジメとメルドは訓練場に来ていた。流石にこうも早いと人は来ておらず、紛う事なきマンツーマンだ。

昨日から現れたヘリーナについて考えていたハジメは、ついうっかり目の前の優先事項を聞き漏らしていたのであった。

メルドはそんなハジメに「まったく…」とだけ文句を言うと、すぐに先程まで言っていたであろう言葉の反芻を開始する。

「王国式の剣術にはそもそもその前提が存在する。例えば…筋力、敏捷が一定レベル高い事などな」

「ぐぬう——っ。やっぱりステータスの低さがネックですか…」

「当然と言えば当然だ。王国騎士には素質のある者を吟味した上で更に振るいを掛ける。ある程度は技術でカバー出来るとはいえ、お前クラスの低さはまず王国騎士にはいない」

「…まあ、そうですね」

メルドは強くステータス至上主義を断言した。改めて低すぎる己のスペックを恨めしく思うハジメ。しかしメルドの言葉には続きがある。

「ただ…坊主、お前には得難い素質が…二つ程ある。勇気と瞬時における把握能力だ」

「おおー！　…おっ！」

メルドに認められるほどの才能があつた事をハジメへ素直に喜んだ。が、同時にそのメルドが言う才能に心当たりが無く、疑問符を浮かべた。

分かりやすい二重のリアクションにメルドは顔を俯け、呆れた。そしてもう少し自覚を持てと叱咤する。

「お前さんは自覚がない様だからな、敢えて言おう。迷宮での戦い、あの時大概の者は我が身の保全の為闇雲に骨の兵と戦っていた。光輝達の場合撤退が視野に入っていなかった。俺に関しても光輝達を守る事を優先した。雫も薄々気づいていた様だが、場に吞まれて言えなかったのだろうな。要は冷静に成れている者がほぼ居なかった訳だ。——お前さんを除いてな」

メルドがハジメを指さした。不思議と拳がぐっと握られていた。王国騎士団長の称号は伊達などでは無い。メルドのその言葉一つ一つには、有無を言わさぬ説得力が込められていた。

「お前さんは弱い。そして生憎軍官の様な指揮能力も十分とは言えんだろう。あの作戦には柔軟性が無かった上、行き当たりばったりのものだ。それは言うまでも無い事実だ。だがお前さんは未曾有の危機の中でもなお思考を巡らせる事ができる。弱者でもなお窮地に難なく飛び込める勇気がある。…だからこそお前さんはこの思考を鍛えるべきだ」

メルドの目は真つ直ぐハジメを捉えている。その視線が外れる事もなく、恥ずかしげも無くハジメの『特別』を称える。

我ながら単純すぎる、とは思いがハジメは見事メルドに乗せられている。だがそれはメルドが本心から己を認めてくれるが故だろう。目の前の男の偉大さの一面を覗いた気がした。

「王国式の剣術は一对一の戦いになれば非常に強力だ。相手が複数居ようと相手取る事も難しくは無い。しかし型の指導である分、騎士はどうしても対応性が足りなくなる。そして対応性が削られるのは坊主、お前の本分では無い。故に：俺は敢えて技術を教えない」

「——!?! な、なんで!?!」

ハジメはてつきり漫画でよく言う「力が無いなら技を磨くまで!」的なスタンスで行くとばかり思っていた。それで強敵を倒すまではいかないが、時間稼ぎなりは出来るとは思っていたからだ。

だからこそメルドの言葉には驚かざるを得なかった。

流石にこれはメルドも悪いとは思っている様で、しっかりとハジメに説明した。

「恐らく俺が下手な事を教えれば、お前さんにとっては思考の枷になる。お前さんは常に思考すべきだ。どうすれば相手から逃れられるか、どうすれば相手の隙を突けるか、そして相手を倒せるかをな。故に行うのは実践形式での戦いだ。武器は…片手を空けて短剣にしよう。下手に大きな武器を使うより回避も取りやすい上、攻撃後に粗が出づらい」

そう言ってハジメに渡されたのはシンプルなデザインの短剣だ。刃渡りは40センチあるかどうか。簡素な作りではあるが、グリップは手に馴染み、確かな実用性を備えている。

「とは言えだ。技術や思考を得た所でステータスの高さには勝てん。現に俺は技術だけならば光輝より上だが、“限界突破”を使ったアイツに勝つのは…そうだな二、三割程度と言った所か。後に完敗する事になるだろうがな」

「…ええ」

身も蓋もない話に、じゃあ今までの話は何だったの？ という不満とステータスが明らか上の光輝くんに勝てるメルドさんって化け物？ という畏怖の籠った声が口から漏れ出てしまう。

「ははは！ それは当然だろう。技能、技術、アーティファクト、様々な揃め手はあるが、一番重要なのはステータスだ。…ところで話は変わるが坊主、戦闘職と非戦闘職の大きな違いは何だと思う？」

「え？ …普通にステータスの高さじゃ無いんですか？」

「それだけか？」

「技能の得られる種類とか、魔法適性の高さ…ですかね？」

「そうだな、それもある。他には？」

「…天職の発生確率とか」

「まあそれに関しては一概には言えんがそうだな。だが俺が欲しい答えじゃ無い」

「……………すみません、分からないです」

「まあ仕方ない。これは世間にも伝わっていない上、理屈もよく分かかっていない話だからな。じゃあ別の問題を出そう」

戦闘職と非戦闘職、確かに区分されてこそいるがそこにあまり着目

したことは無い。一応世間一般で言われていることを挙げてみたが、やはり違う様だ。

「実は俺の部下の一人には非戦闘職の騎士がいるんだ。ただそいつはお前さんと違って高いステータスの値を持っていたがな。そこは勘違いするなよ?」

「今日だけで僕は何度ステータスの低さを憎めば良いんですか?」

「機嫌を損ねるな、済まなかったな。…さて話を戻すがその騎士と同じステータス値で、『剣士』の天職持ちが居てなあ。ちようど技量も同じぐらいだったから二人に手合わせをさせてみたんだ。ああ、ちなみにどっちも『剣術』の技能は持っているぞ? するとどうなったと思う?」

「:イーブンくらいじゃないですかね? ステータス値も同じで、技術も同じぐらいなら」

「まあ、そうなると予想するだろうが、結果は『剣士』持ちの圧勝だった。技術レベルは分からなかったが:鏢迫り合いで『剣士』の方が壁まで相手を押さえ込んでなあ:。そこからは滅多撃ちというわけだ」

「:ステータスは変わらないですよ? それで力負けしたんですか?」

「ああそうだ。:じゃあここで問題だ。何故力負けしたんだと思う?

ちなみに接近戦技能は双方それ程変わらんぞ?」

ハジメが最初に思ったのは身体強化系の技能の差、しかしそれは無いと言われてしまった。それでは天職自体に武器を扱う差が発生するのか、とも思ったがメルドが言っているのは『力の差』だ。主旨が異なる。

それならば天職によって発生する違いは――

「――見えないステータスの差があった?」

「まあ、そんな所だ。厳密には体に流れる体内魔力、こいつの流れが戦闘職の方が速く流れるらしい。王宮魔術師がそう言っていた。それで何故強くなるのかは分からんが:重要なのは理屈じゃ無い。わかるか、坊主?」

体内魔力の流れの違い、確かに何故それで身体能力に差が出るかは



分らない。人間でいう所の呼吸の様なものだろうか、と一瞬思考する。

しかしそんな理屈はメルドの言う様に二の次だ。本題は魔力の流れの速さによる身体能力の強化、それにこそある。すなわち――

「体内魔力をコントロール出来れば…身体能力をカバー出来る?」

「恐らくは、だがな。それにお前さんの場合は魔力の全体量が少ない事を考えるとそれ程の影響は出ないと思われる。が、それでも可能性としてはあるだろうか?」

今から自分がするのは戦闘職が自然に行なっている事を頑張つて真似することだ。しかもそれによる成長の見込みも非常に低い。されど成長の兆しは見える。

同時に本気でメルドが己に合った訓練方法を考えてくれたのだと感じる。今までメルドが持っていたであろう常識をまかなぐり捨てて、ハジメを強くしようとしてくれている。

「それで? 坊主、あとはお前さんの覚悟だけだ。俺はお前さんのミスには口出しするが具体的な攻め方は何も言わん。普通ならば一から教える所を省くんだ。お前さんの負担は普通じゃない。それでもこの訓練を受ける覚悟はあるか?」

メルドが木製の直剣を握り締めて構えた。切先はハジメに向けられている。その剣はハジメの短剣と違い、刃が落とされている。それでも十分に質量はあるし、一流の武芸者であるメルドが握れば間違ってもなく凶器だ。当たれば手加減があろうとも、少なくともダメージを負うだろう。

「…僕の短剣、刃が付いてますけど」

「お前さんは人を傷つけるのを躊躇いやすい。悪いが慣れる。言っておくが本気で振れよ? 加減して当てられる程俺は甘くは無いからな?」

どうやらハジメの短剣の刃はワザと付いているらしい。他人を傷つける事勿れ主義ぶりがメルドにはバレているらしい。日本などの平和な世界では美德だが、このような世界では足元を掬われかねないそれをメルドは矯正しようとしているわけだ。本当にこの人は自分

の事をよく見ている、と思わされる。

更に言えば護身術程度の訓練でなく、ハジメを本気で強くしようとしてくれている所からもそう思わされた。彼女に追いつけるほど強くなりたいというハジメの願いを知っているかの様だ。

ならば応えない訳には行かない。

体内魔力の循環、は良く分からないがそれでも絶えず意識する。そして右手で短剣を握りしめ、左手をそつと添えた。体は低くして、すぐに動ける様準備する。

そして一声。

「お願いします!!」

叫んだハジメにメルドはニヤリと笑う。そして示し合わせる事もなく二人は足を踏み込んで――

「あぐっ!?!」

「あつ…すまん、坊主」

一戦目は一合のみの決着となった。メルドが手加減してもなお、反応できなかったのだ。ちなみに今のメルドの動きをステータスで示すならば50程か。ハジメの4〜5倍程である。

「…もう少し、遅くするか」

「すみません、お願いします」

何とも前途多難な開始となるのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「いててて…まだちよつと痛むな」

朝9時、個人的な訓練が終わりメルドと別れた後、ハジメは食堂に來ていた。所謂エネルギー切れというものである。ただ正直腹に入る気がしない。精神的にも、物理的にも。

修行は本当に過酷だった。体を動かし、魔力を意識し、相手の動きから最適な動作を予想して行う。まあ、戦闘どころか武芸さえも初心者なハジメは無惨にもメルドにボコスカ殴打された。

ちなみに寸止め形式にしないのは「痛みが無ければ反省もし辛いだろう」というスパルタな理由から。改めてメルド師匠は容赦がない、そう思わざるを得なかった瞬間である。

結果、ハジメの身体中には痣ができ、足や腕は筋肉痛、頭は体内魔力操作や瞬間思考の連続により頭痛で痛み、お腹はポーションを飲み続けた結果膨れていた。

なおこの世界でのポーションは「飲んだら怪我がすぐ治る！」とか「魔力回復が速攻で！」と言ったものには無い。どちらかと言えば回復を促すものであり、改善までの時間が短くなるだけのものだ。

とは言え飲まなければ、この修行中にハジメは二桁に及ぶほどに死んでいただろう。味もかなり不味いのだが、迷宮での決死行に続き飲み続けた結果、特に気にならなくなりつつある。もはや慣れ親しんだ味とも言えた。

ただまあ当然ポーションは薬品の部類であり、決して食品では無い。朝ご飯をこれだけにすると、何か詰め込まねば後々に響くだろう。

ハジメも食費など最低限の生活ができる程度には、今も国から援助を受けられている。一応無くなったも同然だが『使徒』、無下にする訳にはいかないと本当に最低限の金額がハジメには与えられている。

ただ今は腹に詰めることが先決。一番安い黒パンを買う事を決意する。アレは量の割に腹が膨れるが、残った分は昼に食べればいいと日本系ママン達な感性でハジメは行く。

するとギリギリとこちらに向く視線の数々。そのどれもが害意、敵意に溢れたそれである。一人や二人でも気分が悪いだろうが、それが幾十人もから向けられたとなれば中々に堪えるだろう。

(またやってるなく、そんな事より食事だな)

なお本人としてはもう割り切った事であり、もはや恒例行事。気味の悪さや恐怖よりも食への使命感を優先させた。ちなみに体内魔力の循環は未だに意識しており、そちらに意識が散漫していた、というのもある。

ただ本人としてはそうでも、周りは違う。むしろその余裕ありげな態度が気に食わないとばかりに騎士の一人が席を立つ。そしてハジメの方へと歩いてくる。

「おい！ 【裏切りも——】」

「あつ、南雲！ 何でこんな所いんのよ、早く行くわよ！」  
「へ——？」

怒号をハジメに浴びせようとする前に、不意にハジメが何処かへと連れていかれる。ハジメ本人は何が何だか分からないが、ステータス差により外へ連れて行かれる。ハジメは名残惜しそうに黒パンの屋台を見つめていた。

「たく、時間ぐらいちゃんを見てなさいよ。約束の時間に間に合っていないじゃない」

「???」

騎士や食堂の人間全員が瞬く間に食堂の奥へと消えていったハジメと『使徒』を見つめて、ポカンと口を開けるのだった。

そして食堂から多少離れた城の野外、その一角。そこにハジメと彼女はいた。

ただハジメとしては正直彼女と約束した事も、絡まれる覚えもない。そういえばメルドさんが言ってたなあとは思っているが、その実接点がハジメの中で無いのは確かだ。

とりあえずこの状況が何か尋ねようと声を掛ける。

「え——つと、園部さん？ これ、どういうこと？」

視線の先にいるのは『愛ちゃん護衛隊』のリーダー格にして、メルド曰く味方陣営の園部優花、その人だった。

彼女は切長の瞳をギリリと光らせハジメを睨む様に見える。そして数秒、「ああもう！」と栗色の髪を乱暴に掻いてから口を開けた。

「何やってんのよ、南雲!? 何で食堂にノコノコと姿表してんのよ!？」

周りアンタに危害加える気満々の奴等よ!？ またベッド送りにでもなりたい訳!？」

「なりたく無いよ!？」

まさかの物言いに反論するハジメ。ただ確かに彼女の言っていることは正論である。

もしかして心配してくれたのか、と頭に過ぎるハジメ。そんなハジ

メとの距離を一步詰めて、優花はヒートアップする。

「だったらもうちよい隠れるぐらいはしなさいよ！ 一触即発寸前だったじゃ無い！ そうなったら本気でベッド送りよ！ いや、アンタが悪く無いのは分かっているけど…こんな状況なんだから！ また白崎さんが悲しむわよ!？」

語調は荒く、言葉の選びは攻撃的。されどハジメを思っただけで言っているのは確かだ。現に言葉の端々に優しさがこもっている。

敵意に慣れ切ってしまったことや思考が足りなかったのだろう。堂々と人前に現れるのは、確かにハジメの警戒不足だ。香織の泣き顔を思い出しつつ反省する。

優花は恐らく、何かしら心配してくれていたのだろう。理由は分からないが、それでも素直に感謝しようとは思えた。

「そっか、心配してくれたんだね。ありがとう、園部さん」

「いや別にお礼とか良いわよ。こんぐらいの事で。助けて貰った恩もあるし…」

「……………助けた？」

優花の言う『恩』にどうも心当たりが無い。そもそも話した覚えすらもほぼ無いのだ。果たしてそんなもの有ったか…、と記憶を辿る。

するとハジメの内心を察したのか、「それもそうかあ」と優花は頷いた。

「ああ…まあ色々あったもんね。そりゃあ忘れてて仕方無いわ。…六十五階層で骸骨に殺されそうになった所をアンタに助けられたのよ。あとはデツカイ魔物も足止めしてたでしょ？ そう考えたら二回もアンタに助けられてるって訳」

ハジメの脳裏に蘇る記憶。確かに光輝に駆け寄る前に、一人、鍊成“でトドメされ掛けている所を助けた様な…”と思い返す。

正直その後、ベヒモスの足止め、味方の誤爆、香織による救助、冤罪、被虐、そして昨日の約束…と怒涛の様にトラブルやらが押し寄せまくったハジメ。つついその記憶を忘却し掛けていた。

「助けてくれなかったらまず私は死んでた。それに足止めしてくれなきゃ、多分私以外にも死んでたわよ。周りの奴らがどうしてアンタ

を貶してるのか分からないけど…それでも私は覚えてる。感謝してる」

風が吹く。そらに煽られて、彼女の栗色の髪がふわりと浮いた。視界にふと赤いゼラニウムの花びらが映る。

そんな中、園部優花は顔を少しだけ赤らめて、ハジメの目を見る。その見つめる目にハジメは自然と視線を引き寄せられる。

そして破顔して間もなく、彼女は言った。

「—あんがと、南雲。私はアンタが助けてくれた事、絶対忘れないから」

ハジメがあの時走ったのはあくまでも己の為だ。他人の死を見たくない、誰かに傷ついて欲しくない。そんな独善で死地に己を放り込んだ。

ただそれでも冤罪を掛けられることは理不尽だと思っただし、あの戦いで己の認識を改めてくれる人が居なかったというのも僅かにショックだった。

だからこそ、純粹にその言葉は嬉しかった。

あの戦い以降本当にロクな事はなかった。全員無事に助けられたものの、得られた物も改善された事も何も無い。ただ傷つけられ失っただけだった。

何とも単純な話だ。しかし、彼女に認められた事によりあの時の戦いが誰かの救いに成れたのだと、ハジメは気づく事ができた。

それが少しばかり照れ臭くて。それでも紛う事なく嬉しくて。ハジメは頬を掻きながら破顔した。

「こつちこそ…僕がやった事が無駄じゃ無いって思った。だから…ありがとう、園部さん」

すると優花は何故かそんなハジメを見て、一瞬硬直する。目を見開き、頬を赤く染める。そして硬直が解けるとすぐ目線を逸らしてしまった。

「…別に、そんな大した事言っていないじゃない」

「ううん。僕にとってはきつと大事な事だったから…」

「そう…なら良かったわよ」

目線は逸らされたままだし、口調がまたもや素っ気ないものに戻っている。ただ口元に僅かに残る微笑みは隠しきれていなかった。それがまたハジメにとつては嬉しかった。

するとそんな風に気が抜けたからだろうか。何とも間抜けな音がハジメの腹から鳴り出した。

時間が経った為か、ポーションによるお腹の膨らみも無くなっていく。マトモな飯を寄越せと、ハジメの胃はご不満の様子である。

「…そういや食堂向かってたんだっけ？」

「うん、朝からちよつと訓練してたから、どうもお腹が減っちゃつてさ」

「でもまだあんま時間も経ってないだろうし、騎士連中もまだいる時間帯よね…」

本来なら食堂に行つて黒パンなり何なり買いに行くのだが、いかせん優花に注意された直後だ。行く事がどうも躊躇われる。

仕方が無いが、今日は朝飯を抜きにしようとした所だった。優花がハジメに背を向けたのは。

一体何だとハジメが気付いた所で、優花が急停止。そしてハジメの方に振り向いて指さす。

「ちよつとそこで待つてて、南雲！」

「えっ？ アツハイ」

「5分…いや3分で戻るから！」

「りよ、了解です」

ハジメがそう言うのと、今度こそ優花は背を完全にハジメに向けて駆け出した。

流石は戦士系の天職持ちと言うべきか。優花はパルクールの様な動きで、城の二階に着地する。そしてその先の廊下へと走り出した。ハジメから見えない程に遠くへと行くのにはそう時間は掛からなかった。

先程無理矢理引き摺られた事といい、あまりものステータス差に若干のショックを隠せない。

すぐにハジメは意識し忘れていた体内魔力の回転を、再び意識し始

める。単純に対抗意識が出てしまったのだろう。そういつたところはまさしく男子である。

やがて頭痛が再発した頃、優花が二階からハジメの元へと飛び降りて来た。重力を感じさせず音もなく着地した優花は、手に持っていた何かを「ん」とだけ言つて差し出した。

どうやらそれは木製のバスケットの様だ。花柄の布で蓋をされており、何やら芳しい匂いがする。

優花に許可を取り、その布を取ると現れたのは色鮮やかなサンドイッチが姿を現した。卵、レタス、ハム、照り焼き、ホイップクリーム：一品ごとに異なる具材が挟まれており、手が混んでいる物だと察する事ができる。

「流石に朝飯抜きは可哀想だしね。それ、食べて来なさいよ」

「えっ!? 悪いよー!」

「何? 一応それが作った物よ? 流石に食べる前から不味そうつて決めつけるのは酷くない?」

「違うよ! って園部さんが作った物なの!? なら余計悪いよ! 僕なんかこんな手間暇掛けたものくれるなんて…」

見た目があからさまに手作りの範囲を通り越しているサンドイッチに、かなりの遠慮を見せるハジメ。悲しいことに彼は人の好意という物に甘える事に慣れていなかった。

しかし優花は遠慮するハジメをかえつて鬱陶しそうにしながら、受け取るよう迫る。

「問題無いわよ、それあくまでも試作品だし。私、趣味料理だからさ。適当に作ってみんなに配つて、感想聞こうつてただけだったから。だからそれがアンタの手に渡っただけだし、何の問題もないわ」

「でも…」

「それにもし南雲が食堂戻つてベッド送りになったり、昼飯抜いてそこから倒れられても困るからね。受け取つてよ」

「…園部さん、僕のことなんだと思つてるの?」

「火中の虫より儂い生物」

「それは流石に酷くない?」



「良いから受け取りなさい。もし甘えるだけじゃ悪いって言うなら感想でも教えて。これでも飲食店の娘だからね、リピートは欲しいのよ」

「ま、まあそれじゃあ…頂きます」

見事に押し切られたハジメは、サンドイッチを一つ頬張った。ハムとレタスのサンドだ。シャクシャクとレタスを食む音が口から鳴る。見た目に劣らぬ美味しさ。

続いて手を伸ばしたのはチキンの照り焼きサンドだ。味のしつかりした照り焼きソース、そして飽きさせない様辛子が所々に散りばめられている。

思わず目を輝かせるハジメ。そしてハジメが気付かぬ間に、優花は胸を撫で下ろしていた。舌に合わない、と言った事が無く安心した様子だ。

そうして割と量があったにも関わらず、バスケットはものの見事に空となった。一人で完食してしまったのを謝ったが、優花は「製作者としては嬉しいわ」と上機嫌で言った。

その後、多少強引に押し切られる形で、今後の昼飯は優花が作ってくれる事となった。好意に甘える形で悪い気もしたが、美味しかったのもあって一日の楽しみが一つ加わる形となった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

十分に腹を満たし優花と別れた後、訪れたのは昨日と同じく王立図書館だ。メルドに教えられた事もあり、今日は魔力方面について調べようとしていた。

…が、ここで一つ問題があった。

「魔法関連の書籍って…やっぱメインは魔法そのものなんだよなあ…」

目の前の本棚には『火属性魔法・初級魔法詠唱文』、『風から雷への進化方法』、『幻の神代魔法を求めて三千里』など…、本当に魔法そのものの書籍しか無い。

仮にタイトルに魔力とある物を見つけても、『魔力光による告白法』といったもの。…いや、これはこれで何かは気になるが…。

「うーん。魔力魔力魔力：何か無いかなあ」

やがてハジメはそう呟きながら本棚を舐め回す様を探す。側から見ると明らかに不審者だ。現にそんなハジメから目を逸らして本探しをする人も少なく無い。司書さんが僅かに眼光を鋭くした。

ただそんな周りが見えていないのか続けて呟きながら搜索を続けるハジメ。そんな彼にトントンと何かが肩を叩いた。

集中していたところにそれだった為、目を向いて飛び退くハジメ。そして体を翻し、叩いた者を見る。その人物は予想外に見た事のある人物だ。

特徴的なのは顔にあるそばかすとその顔を覆うフードだ。髪は目に届く程で、余計陰気な雰囲気醸し出している。

——【闇術師】、清水幸利。

メルド曰く中立派。しかしその中でも取り分けハジメの話題に興味を持たなかった、とされている。

そんな彼を少し警戒して見ていると、幸利は一冊の本を差し出して来た。

「これ：魔力関連の本。：探し終わったよな？　なら退いてくれ」

その本のタイトルは『魔力とは』という如何にもシンプルなタイトル。これならばハジメが求めていた内容とさほど変わりはないだろう。

同時に邪魔になる訳にはいかなないと横にずれて、清水に場所を譲る。そしてハジメは図書館の勉強机へと向かおうとして、清水の声をふと聞いた。

「何で生物干渉に関する本がねえんだよ、畜生：何処だ何処だ何処だ：」

ぶつぶつとそう呟く清水は先程のハジメ同様、不審者扱いされている様だ。清水の場合服装も相待って尚更だろう。人々が逃げる様に離れていく。

だがハジメはその声を聞いてある本を取り出し、清水の元へと行く。距離を詰める途中、清水が「また来たのか」とうざったらしそうな目を此方に向けて来た。だがハジメが持つ論文を見て、反応を変え

る。

『無意識的な非干渉領域生成説』…』

「これ、清水くんが探してた物に割と合致すると思うんだけど…どう？」

「お、おお」

ハジメが取り出して来たのは前日読んだ論文、その一つだ。その太さはかなりのものであり、他の論文と比べ時間を取られた事をよく覚えていた。

兎も角探していた関連の書籍を差し出され、困惑しつつもそれを取ろうとした清水。しかしその前にハジメがその書籍を引っ込めた。

どう言うことか、と懐疑的な視線を向ける清水。それに対してハジメはある提案を行った。

「これは提案なんだけど…この論文って無駄な内容が多いんだよね。神様関連とか独りよがりな発想とか。多分さつき清水くんが渡してくれた本もそうだったでしょ？」

この世界では地球に比べ、物事を客観的に観測するという視点は培われていない。宗教が根強く広まっていると言うのもあるのだろう。

この論文にも「つまり神エヒトが我々に与えてくださった形無き鎧であり…」と言った独りよがりな供述が数多くあった。そもそもそう言った内容が半分以上だった。地球であれば「素人質問恐縮ですが…」とボコボコにされるレベルだ。最も本人の思想による水増しが多いだけで、考え方などはまともであったが。

そう言った打算もあったが、ハジメが誘った理由としてはもつと直感的な何かだ。敢えて言うならばメルドに話すのを勧められていた事が挙げられるかもしれない。

兎に角、清水を引き止める為に誘うハジメ。そんなハジメを清水は胡乱な目で見た。

「お、おう。それが何だよ？」

「だからさ、ちよつと教え合わない？ お互いに読む時間も少なくなるし、新しい視点も取り入れられるだろうからさ。…どうかな？」

「…やなことだ。お前に付き纏われたら面倒しかねえだろ」

「ちなみに僕、これ以外にも幾つか生物干渉に関する論文読んでるよ？」

「お前【錬成師】だろ!? 何でだよ!」

「いや…普通に読み物として面白くて…」

※普通に地球で言う大学数学レベルの難問です。 “言語理解”があっても割と難しい分野です。

清水は非常に面倒臭そうにハジメを見る。恐らく内心葛藤しているのだろう。手を取る事によるメリットとデメリット、どちらが強いかを。

ハジメ自身を嫌悪しているわけでは無いことは中立派であることからよく分かる。プラスの感情は無いだろうが、同時にマイナスも無いと言った所だろう。今面倒くさがっているのも、ハジメと共にいる事に対してと確信している。

やがて清水は面倒臭げなものには変わらないが、チラリとハジメの顔を見る。そして勉強机へと向かった。言うまでもなく、ハジメの席から向かい側の場所だ。

「…よろしく」

「うん、よろしくね。清水くん」

こうして午後の勉強会が幕を上げる。

### 3、午後は魔法講義　　くく僅かなる閃きを和えてくく

「抑する光の聖痕、虚より来りて災禍を封じよ。——汝の首を跳ね落とせ、縛光刃・断頭」

勇者パーティーは午後現在、【オルクス大迷宮】34階層にいた。群れる魔物に囲まれる中、香織は詠唱を完結させた。

すると魔物の頭上で降臨するのは純白の十字架。それ等は吸い寄せられるように魔物達の首へと落ちた。血が幾つも舞い、魔物達は断末魔を上げる暇もなく絶命する。

神系天職最上級の一つである【聖女】。その真髄は光属性魔法の派生形態の一つである“治癒魔法”や“結界魔法”に高い適性を持つ点にこそあり、その凄まじさは魔法系天職のある種の究極地点と言えた。

だが同時に通常の“光属性魔法”に対しても非常に高い適性を持つ。

“光属性魔法”の攻性魔法の特徴として、対魔物への特攻性が挙げられる。その理由は未だ解明されていないが、一説としては魔物を邪悪として神が定めているから、というものが主となっている。

なおこの特攻性は他の生命体には発生しない。それが事実を如実に示している訳だが、聖教教会の人間は未だ気付くことは無い。

さて、香織が発動したのはそんな“光属性魔法”の中でも攻撃と共に敵の束縛を行う魔法である“縛光刃”。しかしそれに加えられた付属詠唱、“断頭”。

“断頭”は攻撃できる範囲を首に絞る代わりに、その攻撃にクリティカルを発生させる補助魔法である。これにより本来ならばそれまで強力な攻撃性能を持たない“縛光刃”を絶命レベルの攻撃へと落とし込んでいる。

付属詠唱ほどの魔法にも分類されない、敢えていうならば魔法の技術の一つである。自らが行う魔法操作、それに予め何かしらの『戒め』を定める事により主体の魔法の性能を向上させる。

存在自体がマイナーであり、定めた『戒め』を破れば魔法は不全を

起こし、強制解除となる。故に誤れば魔力を浪費するだけとなってしまふ為、そのリスクを恐れて扱う者は極少数だ。

だが香織には今、何を取り込んででも前へと進む理由がある。

思い浮かべるは朝焼けの中、誓った約束。己が知らず知らずに傷つけていた少年の、真っ直ぐな瞳。そして耳朶を打ったその決意。

きっとハジメは約束を守るだろう。ステータス差はこの世界に置いて残酷な程に絶対のルール。されどハジメならばという信頼、それだけで香織はいずれ己の横にハジメが辿り着くと確信していた。

だからこそもうハジメの事は心配していない。彼が己の横に立つ日まで、香織は待ち続ける。

それまでは対面して会う事も出来ない。ハジメと香織の仲を疎む者がいる以上、前の様には行かない。それは香織にとつて本当に辛い。

しかしきつと来るであろう未来を心の中で描くと、不思議と笑みが溢れた。そして同時に強くならねば、と己を叱咤するのだ。

きつとハジメは強くなる。一段一段積み上げて、高みへと手を伸ばすだろう。

ならばそんな彼の隣に居たいと願う己は何をすべきか。そんな事は言われずとも決まっている。

(強くならなきゃ…今度こそ南雲くんを守り切る為に！)

—— 純白の炎は再起する。瞳に映るはかの憧憬。

「天恵よ、彼の者に今一度力を——『焦天』」

—— 其の視線は遙か彼方へ注がれていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

場面は移り変わりにて王立図書館、読書スペースのとある一角。そこでは山程の本と異様な雰囲気が発せられていた。

そして異様な雰囲気の中、二人の少年達は怒涛の勢いで知識の共有を行っていた。

「まず魔力は万能のエネルギー、その源だ。この世のあらゆる物質、事象に作用を及ぼす事が出来るってされてる。主に魔力が及ぼす影響は『生成』と『操作』、『付与』。古代魔法なら話は別だが、現代魔法に

関しちや、これらをプロセスにして魔法は成り立ってるってされてる。また魔力の種類は主に二つ。自然魔力と体内魔力に分類される。じゃあこの違いは何だ？ 分かるか、南雲」

詳しく説明すると『生成』は火、水、風、土…などの属性を生み出す事、『操作』は生み出した、もしくは元々あつた属性を意のままに動かす事。『付与』はバフやデバフを一時的に対象に発動する事を指す。現代魔法はこの三つの要素のいずれか、もしくは複数により成り立つとされている。

そして清水は指を2本立て、ハジメへとその指を向けた。その問い掛けにハジメは記憶を辿り、答えた。

「自然魔力が世界全体に存在する基本的な魔力。それを個体ごとに扱い易い形に調整したのが体内魔力…であってる？」

「それで大体正解だが、一応最近の方だったらステータスを肉体に付与してるのが体内魔力なんじゃねーか、とも言われてるな」

「…あーなるほど。だったら僕らがこっちの世界に移ってきた時に力を与えられたのは体を作り替えられた、とかじゃなくて単純にこの世界に来た事で魔力を獲得したから、って考えたらいいのかな？」

ハジメ達がトータスに召喚された際、体が分解される感覚などは特に無かった。魔法という代物が超常のものである以上、確信は持てないがその仮説は十分に有り得る。

清水もハジメの考えに「そうかもな」とおざなりにではあるが頷く。どうやら清水の琴線には触れ得なかったらしい。

「つーか脱線したな。で、だ。自然魔力は別名『万能魔力』とも言われる。大体の魔法に適性を持つてるからな。アーティファクトとかでその魔力を回収して、大儀式魔法に利用するって言うのも少なくともい。ただ用途が多過ぎて、人間の頭じゃ使いきれないって言われている」

「だから体内魔力があるんだよね？」

「そうだ。個人のステータスに合わせた出力、量、質に変質したのが体内魔力って言われてる。人間、動物、魔物、植物…それら全てに体内魔力は宿る。これが身体に巡る事で体にステータスが付与されてる

んじやねーか、つていうのが最近の主流な説だ。こいつは技能や詠唱がねーと操作が出来ねえ。体内魔力を自分の好きに操作できる奴なんざ：魔物かそういう技能を持つてる奴しかいねーよ」

要は自然魔力が汎用性が高い代わりに利便性を失った魔力、体内魔力の用途が狭まり、使用者が限定された代わりに利用が容易くなった魔力と言った所か。

ただそう考えると自分の体内魔力、用途狭め過ぎでは？と考えざるを得ない。多少虚しさが胸を穿った。

心無しかしんみりとした気持ちを抱きつつ、何か違和感がハジメの底で燻っている。ただその正体が分からぬ現状、ハジメは別の疑問を唱えた。

「だけでもしその説だとしたら、魔力が尽きたらステータスは消失するって事になるんじやないかな？」

「まあそうだろうが：こっからは俺個人の仮設だが、まず完全に尽きるってのが起こりづらいんだろうな。本人が全部出し切ったつもりでも、脳がセーフティを起こして一部だけ体に魔力を残してんだと思うぞ。魔力がゼロになるとか生命活動に支障しかねーからな。そのセーフティをぶっ壊すのが『限界突破』だって話だ」

『限界突破』：概要程度ならばハジメでも知っている。体内魔力をほぼ全て魔力外骨格とし、身体能力を強化。そして残りの魔力で演算能力の活性化や技能・魔法の強化を行う。さらには身体能力が三倍、と正しくチート中のチート技能。

デメリットとしては使用後に時間と比例した疲労と倦怠感が襲いかかり、尚且つ弱体化する事。恐らくは体内魔力の著しい消費の為だろう。だが勇者である天之河光輝が持っているならば、そのデメリットがあつたとしても無問題だ。

「なるほど：確かに道理が付く。流石だね、清水くん」

「：雑に褒めんな。続けんぞ。で、魔力の循環についてだが：」

「それは知ってるよ。まず生物が呼吸によって自然魔力を体内に取り入れる。それを体に馴染ませて、変質させることで体内魔力を補充する。魔力のポーシオンとかはこの変質を早める効果があるんだよね



？」

「あつてんな。一方で体内魔力が個体のコントロール下から解放された場合、外部に発散されて自然魔力へと還っていくんだ。魔法使った時とかにな」

するとそれまで聞いてきた話を踏まえ、ハジメはとあるアイデアを思い浮かべた。地球の頃、よく小説で見たようなアイデアだが、聞いてみる価値はがあると、清水に尋ねる。

「うんうん。…一応質問んだけど他人の体内魔力を取り入れたら、強化出来ないかな？ ほら、異世界小説とかでも強い奴とかの肉食つてパワーアップとか良くあるし」

「カニバリズムかよ？ 動物同治かよ？ やめとけやめとけ。魔物の肉もそうだが、異なる体内魔力同士は基本的に反発する。自分よりも弱い奴の体内魔力なら取り込めなくも無いが、技能の獲得もなく反発を抑え込むのに無駄に魔力を使うだけだそう。良くは知らねーけど、魔物の場合はその反発性が一層豊かとの事だ。だから食ったら毒になるんだとよ」

「そつか…やっぱり強くなるのに楽な道はないなあ」

魔物は他の生物の体内魔力を取り入れても何の問題もねーけどな、と付け足す清水。魔物は発生のルーツからしても外部の魔力に対する受容性は非常に高い。格上の体内魔力だとしても、問題無く取り入れられるだろう。…ただし、その技能が使える様になるかと言われれば当然否となるが。

すると清水は面倒臭げに頭を掻きむしる。そしてジト目をしつつ、その手でハジメを指差した。

「魔力の話はこんぐらいでいいか？」

「うん、ありがとう。本当にわかりやすかったよ。凄いね、清水くん」

「…あ、ああ。俺が親切丁寧に説明してやったんだ。お前もちゃんと説明しろよ」

「了解！ まずこのタイトルにある『無意識的な非干渉領域生成』。これはさっきまで話してた体内魔力に関連した話なんだよね。この体内魔力があることで、他者が個人そのものに対する魔法干渉が難しく

なってるんだよ」

「…おん？ すまん、もつと詳しく説明してくれ」

頭に数多く疑問符を浮かべる清水。ハジメは頷くと、更に自分の思考を咀嚼して理屈を説明する。

「人が無意識にコントロールしてる体内魔力は、他人の魔法のコントロールを困難にするんだよ。多分さつき清水くんが言ってた『体内魔力同士の反発』、これが体内魔力と魔法でも多少は適用されるんだと思う。だから火魔法なら体内発火とか出来ないし、水魔法なら他人の水分を抜き取るって事も出来ないんだと思うよ」

「つまり対象を起点として魔法を発動させるのは、難しいって事か：なら何で『治癒魔法』とか『精神干渉魔法』は発動出来んだよ？あれどっちも対象を起点としてるだろうよ」

魔法での攻撃は基本的に手の元から生み出した物を、敵へと撃ちだす形となる。姿形こそ例外はあれど、その発生に変化は無い。

しかし治癒魔法、付与魔法、精神干渉魔法。これらはそもそも個人を対象として発動を行う魔法だ。打ち出す形で発動する物もあるが、生物内部から魔法を発動するものも無くはない。

清水はそれを不思議に思ったのだ。

「うーん、それに関しては多分魔法自体の起源が違うからじゃないかな？ 確か『治癒魔法』は『再生魔法』、『精神干渉魔法』は『魂魄魔法』が起源なんだよ。他の攻性属性魔法は基本『重力魔法』が起源らしいんだよね」

「は？ 火とか水とかに重力の要素あるかよ？ ってかその違いが干渉に関係あんのか？」

「全部の技能、魔法は『神代魔法』っていうのが起源になるらしいんだよね。その中でも他生物干渉が得意な魔法と苦手な魔法があるって話。『再生魔法』、『魂魄魔法』、『変性魔法』、『昇華魔法』っていう魔法は得意で、『重力魔法』、『空間魔法』、『生成魔法』の三種は苦手って話。…まあその魔法の概要すらよく分からないんだけどね」

全ての魔法・技能のプロトタイプとされる『神代魔法』。その存在

には未だ謎が多い。概要程度ならばもしや分かるかもしれないが、詠唱や魔法陣に関しては一切書が残っていない。

出来ればもう少し知りたいんだけどね、とハジメが付け足すと、清水は胡散臭げにハジメを見ていた。

「そもそも『神代魔法』って『古代魔法』の一つだよな？ 結構マイナーだろ。何でそんな詳しいんだよ？」

「…部屋の掃除してたら、いつの間にか漫画全巻読んでたって記憶無い？」

「…脱線したんだな？」

「…案外面白かったから」

ちなみにその前にハジメが読んでいたのは『錬成に潜む奥深さ』というエッセイである。『錬成』でサバイバル生活を行った内容が記された本で、著者の頭の柔らかさに感心させられた事を覚えている。

ハジメはわざとらしく咳をすると、話を戻す。清水のジト目が痛かったのだ。

「まあ、『治癒魔法』も『精神干渉魔法』も他干渉は出来るけど、その分難易度は高いっばいよね。普通の魔法とはかなり特殊な操作になるらしいし」

「そーだな。だから干渉し易くなる様な方法を探してるわけだが…無いか？」

「うーん、多分清水くんが求めてるのって『精神干渉魔法』の方だね？ 体内魔力は『治癒魔法』みたいに害が無いものなら受け入れやすいんだけど、害があるものなら抵抗が強いんだよね。だから補助系統の『精神干渉魔法』ならまだ楽だと思うよ？」

「一応なんだが…洗脳系ってやっぱ無理か？ 意のままに操る的な」

「コントロールの奪取って相当の難易度だと思うよ？ まず最初は難易度軽めの『精神干渉魔法』をやってから、鍛えていった方が良くと思うけど…」

「まあ、そうなるか…。近道はねーな」

「あつ。ただ魔物相手なら出来るかも」

「……………何でだ？」

“闇魔法”の中でも最上級難易度とされるコントロール権の奪取。人間からすれば最も害とも言えるそれに、体内魔力と言う名の自衛システムが反抗しない筈もない。

すつかり諦めムードとなり、席を立とうとした清水。しかしそんな彼の腰をハジメの言葉は縫い止めた。

「さつき清水くんが言ってた事から考えると魔物って他の魔力に対する受容性が人間よりも強いって考えられるんだよ。そもそもルーツ自体、単なる動物が魔力を取り込んで変質した者だから、物理的な害の攻性魔法は兎も角、精神干渉なら効果は見込めると思うんだよ。あと余計な知能が魔物は少ないからね。十分に可能性はあると思うよ。…まあ、あくまでも推論だから参考程度でよろしくだけど」

「…いや、魔物か。確かにそつちに着目して来たことは無かったな。今から試して見るか。えーっと洗脳系の詠唱本は…これか。今までの詠唱をこう変化させて、ここの部分を減らせば…よし行ってくる」  
「とは言え相手は魔物だから周りに迷惑が掛からない程度にね？」  
「…おう」

闇魔法の詠唱本を脇に挟み、忙しく外に出ようとする清水。何やら今までとは別のアプローチ法を考えついた様だ。詠唱文を即座に推敲し、走り去ろうとする。

その行動力に呆気にとられたハジメだが、すぐに気を取り直し清水へと声を掛けた。清水は雑にもその言葉に反応を示し、背中を向けて…そしてその足を止めて振り返る。

疑問符を浮かべるハジメに清水は一言。

「あー、何だ。ありがとうな、南雲」

「こつちこそ。お陰でだいぶ楽に魔力について理解出来たよ。教えてくれたのが清水くんで良かったよ」  
「……………」

言い慣れていないのか、すこしぎこちない礼を言う清水。一方のハジメは何の遠慮もなく感謝の念をぶつけた。

清水はそれに返答することもなく、今度こそ王立図書館から抜け出した。後衛職ながらも一般人のそれより遙かに速く、あつという間に

その背中が豆粒の様に小さくなる。

ハジメはそれを確認すると両腕を天に掲げ、うーんと唸る。そしていつもより一回り元気な声で己を激励する。

「よしっ！ あともうひと頑張りで行こう！」

そして体内魔力を体に巡らせることを意識しつつも、更なる知識を求めて本を取ろうとして：

「……………あれ？」

不思議そうにハジメは頭を傾けた。

それは清水が体内魔力について話していた時に抱いた違和感。思考を硬直させたものの正体。

——体内魔力は技能や詠唱がねーと操作が出来ねえ

「…なんで僕、技能も魔法も無く体内魔力の動きを意識出来るんだ？」  
憧憬の隣へと伸びる遥かなる道。暗く閉ざされていたその足元がぼつりと明かりを灯した、そんな気がした。

駆ける、駆ける駆ける。

後衛職とは言え『使徒』。清水は人混みを次々と横切っていく。向かうは王都の外。魔物に魔法を掛ける為に城下町を駆け、下つていく。

その道中、王立図書館からかなり離れた場所。彼は走りながらも、首だけ振り返って一人でに眩く。

「…馬鹿だろ、アイツ」

まるでそれは悪態の様で。ただそれでは誤魔化し切れない程、彼の口角は上がってしまった。

脳裏に浮かんだのは果たして誰か。何を思ってしまったのか。

それは彼以外に知る由も無いのだろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…むむむ」

とある一室。そこでは机にて呻き声を上げるメルド。日頃では書類仕事をパパッと軽く済ませる事から、部下達が奇異な物を見る様な

目を彼に注ぐ。

失礼極まりない視線の数々。メルドのこめかみにあるシワがより一層の深まりを見せる。

ただそれでも叫ぶ余裕が無い、とばかりにメルドは書類に視線を向ける。それはある一枚の推薦状、しかもメルドが直筆した物だ。

そこに記された名は南雲ハジメ。『使徒』唯一の裏切り者と揶揄される少年。同時にメルドが注目している少年の名である。

一度メルドはこめかみを揉み、何度目か分からぬほど繰り返した最終確認を行う。

文章に目を通し、ハジメの名に目を通し、己の名に目を通し…そして最後のソレに目を通す。

やがて決心した様にその便箋を封筒に入れ、蠟を溶かして封をす。そして両手でそれを持つと、憂鬱そうに溜息を溢した。

「何とかややはりというか…奴以外に適任者は居ないか」

その封筒にはある男の名が記されていた。それは宛名だ。

——【王宮工房棟梁】ウォルペンⅡスターク殿

その名はハイリヒ王国に於いて有数の王宮錬成師、その棟梁の一人にして曰く付きの男のもの。そしてある種のど阿呆。

「彼処に坊主を放り込むのも些か不安だが…仕方がない、か」

坊主なら馴染めるかもしれない、とその可能性に賭け、メルドは遂にその推薦状を送り届ける事とした。

#### 4、ただ望みて

「——ふう」

訓練開始から一週間が過ぎた。何かと慣れた物で、座学・訓練共に前程の負担は無い。：未だに頭痛は鳴り止む気配は無いし、打撲の痛みは減る事が無いが。

そしていつも通りの戦闘訓練直前、ハジメは訓練場の床にて座禅を組みながらそう考えていた。体内魔力を練り上げ、操作していく。一つ一つを意識して、流れの本流を作り出すのだ。

これがまあ、何とも難しい。腕が千本出来て、それを絶えず操作している様なものだ。頭痛が酷い。

ただ体内魔力の操作が己の数少ないアドバンテージであることは理解している。なぜ自分は出来るのか、それは分からない。本来ならば「魔力操作」が無ければ出来ない芸当だ。魔法に才の無い自分が出来るというのは何ともおかしい話だ。

（何回も倒れたからか？ …いや、予想しても仕方ないか。そもそも体と魔力の関係性はブラックボックス、考えても仕方がない）

ちなみに試してみたのだが、「錬成」の無詠唱は出来ない。あくまでもハジメができるのは体内魔力の流れ、それを意識する事だけだ。好きに操れる、と言うわけでは無い。あくまでも詠唱や技能を使わずとも体内魔力を意識出来るだけに過ぎない。

ただこの意識を鍛えていけば、そう言った操作にも繋がるかもしれない。そんな期待からしよつちゆう座禅を組んでは意識をして、体内魔力の流れを操ろうとしている訳だ。

ちなみに座禅は精神統一も兼ねてのものだ。思考を他に寄せない為にも静かな場所で、瞑目しながら座禅をし集中する。

部屋でする際はヘリーナの目が少し気になるが、何の妨害もして来ないのでありがたい。終わって目を開いたら部屋が凄まじく綺麗になっていた、と言うこともある。音も無く家事を済ませるヘリーナは改めて侍女として万能だと実感した。

ちなみにヘリーナは掃除や洗濯のみならず夜の飯も作り置いてく

れている。朝はあまりにも早すぎるので、迷惑だとハジメが断つたのだ。

そもそもオタクエリート家系に生まれたハジメとしては、朝飯を抜く程度問題無い。その後の訓練で中の物をぶち撒ける事もあるのだから、尚更だ。

メルドさんの訓練、スパルタだからな。そう思いつつも体内魔力の制御を尚も試みるハジメ。

すると背後から掛かる声があった。

「よう、南雲」

待ち合わせていたメルドとは異なる声に振り向く。そこにいたのはクラス一の巨漢。同時にハジメにとっては意外な人物だ。

「…坂上くん？」

「おう、南雲。久々だな」

にかりと笑い、ハジメに手を振る龍太郎。釣られてハジメも手を掲げる。以前から特に関わりの無い相手である龍太郎、少しばかりハジメの胸に緊張が走る。

「どうしたの？ こんな朝早くに」

「メルドさんから聞いてな。南雲が朝から訓練してるってよ。だったらオレも強くなりてえし、一緒に受けさせて貰えねえかなって」

「ああ、なる程」

龍太郎は良くある体育会脳、すなわちやる気至上主義である。そんな彼は特に己へ過酷な修行を課す。一度大会で負け、山籠りをしたと噂が流れる程だ。そんな話を聞けば飛びつくだろうと、寸分の疑いもなく納得する。

そうして静寂が流れる。特に交流も互いに無い相手だ。メルドが来るまでは恐らくこの空気は続くだろう。座禅を続けながらハジメはそう判断する。

しかしハジメの予想を他所に、龍太郎はハジメへ話し掛ける。

「…なあ、南雲」

「？ どうしたの、坂上くん？」

「…ありがとよ」



龍太郎の目は訓練場の奥へ。されど言葉はハジメへと向けられた物。

ぶつきらぼうだ。丁寧さなどかけらも無い。されど込められた感謝の丈は確かだ。

「言つちや悪いが、今まで俺は南雲はそんな人間じゃねーって思ってた。学校じゃ寝てばっかで、部活もしねーし。トータスに来てからも鍛えようとさえしなかった。香織や光輝が言っても構いやしねー：根性のねー奴だと思ってた」

それは紛れもない事実だ。あの頃は今の様に切迫しておらず、オタク生活を全ての指針として掲げていた。褒められた態度でも無かつただろう。

恐らくはあの頃に戻っても、ハジメは学校では顔を机に突っ伏せるだろう。ただ香織への対応がぞんざい過ぎたかとは思う。それは深く反省している。

ただそれ以外に関しては譲る気がまあ無い。なのでそう思う人もいるだろうなあと諦めて、龍太郎の言葉にうんうんと頷いている。

龍太郎は「お前が頷くのかよ」と愚痴を吐き、それでもと付け加えた。

「でも、お前はベヒモスと戦った。弱い癖に。根性無しの癖に：戦えた。俺らが全員じゃなきゃ出来なかったのに、お前一人で足止めした。本気でスゲエって、そう思った」

龍太郎にとってハジメが正しい間違っているなどはどうでも良かった。嫉妬、謀略、恥辱。龍太郎にそれらは無縁。彼の思考はもつとシンプルだ。ただ一言で示せる。

「俺は、そんなお前がカツケエなってそう思ったんだ」

にかりと龍太郎はそう言って笑う。

香織、メルド、優花：ハジメを認めてくれる者は確かにいる。ただあまりにもストレートな言葉。思わず「おおう」とハジメは仰反る。ハジメの気分は目の前の『陽』により目潰しされた気分だ。「目がア！目がアア!!」だ。

そしてにかりと歯を出して、眩しいほどの笑顔でハジメを見る。

「だから南雲！もし手伝える事があつたら言つてくれ！手え貸すぜ！」

「っ——!!? おぐう…背中があ」

「おお、悪りい！平気か!!」

バシンツと龍太郎の掌がハジメの背中を叩く。本人としては悪気のない、ただのコミュニケーションのつもりだろう。しかし貧弱たるハジメにはよく効いた。

蹲り背中をさするハジメ。手のひらを合わせ、謝る龍太郎。

何とも締まらない絵面のまま、そこにメルドがやって来た。メルドは目を丸くしたが、かつてよりも遥かに近くなった二人の距離に笑みを浮かべた。

なお、その後起きたのは騎士団長と『使徒』きつての近接戦エリートが付いての訓練だ。

当然ながら飲むポーションの量は増え…結果、優花に会って早々心配される事となるのだが、それはまた別のお話。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

それはそうと6日前、メルドは訓練後にある事をハジメへと伝えた。それは——

「——ウォルペン工房への紹介、かあ」

「へえ。それって凄い事じゃないの？」

「とは言えメルドさんの推薦あつての話だけどね…」

メルドの推薦先、ウォルペン工房は数ある王宮工房の中でも異色の工房と言われている。その理由は技術の革新、それへのあまりもの積極性故である。

ウォルペンは技術の糧になると思えば本気でやらかす。例えば盗賊、罪人、奴隷…他にも様々なアウトローを「技術があるから」それだけの理由で工房に引き入れる。そして引き入れた者達を己の息子娘と言ひ出す始末だ。

もしもウォルペンに“錬成”の実力が無ければ却下も言い渡せるのだろう。しかしウォルペンの実力は元から標準の遥か上であり、そうした人材を取り込む度に進化を続けている。また工房全体の技術

力もトツプクラス。

結果王国の上層部は何も言えず、ウォルペン工房は実質無法地帯となっている訳だ。

ちなみに言っておくとメルドⅡロギンスとウォルペンⅡスタークは互いに昔からの知人らしい。ただしロギンス家が貴族の名家であるのに対し、スターク家は王都の住宅街に家を構える平民の家と真反対。それでも二人の豪放磊落な性格が見事に合致し、長年良くやっている訳である。

とは言えウォルペンのマイペースぶりはメルドの頭を痛める程。伝言の際に「出来る事ならば奴の所にお前を行かせたくは無かった」とメルドが苦虫を噛んだ様な顔になっていた事をハジメは思い出した。

「:本当に僕、どうなるんだろ?」

「大丈夫? あとサーモンサンドどう?」

「バジル? がアクセントになってて美味しいよ、本当にありがとうございませす」

「大袈裟よ、やめなさい」

メルドを曇らせる程のヤベー奴に戦慄しつつも、優花作の昼飯をハムハムする。やはりサーモンサンドは人類の叡智。当然美味しい。

ハジメがリスの様に頬を膨らませ、サンドをもぐもぐしているのを見ながら、優花はふふつと笑う。

「だいじょーぶよ、アンタなら。どうせビツクリ人間同士波長合うでしよ?」

「園部さ:いや、その扱いは何?」

「同じ班の清水から聞いたのよ、魔法学の知識量がおかしいって。で、その上メルドさんの訓練受けて、今回の工房行きでしょ? 無尽蔵体力持ちのビツクリ人間に違いはないじゃ無い」

「清水くうううん!!!?」

励ましと見せかけた罵倒。しかも予想外の所で裏切りが発生していた事に目を見開くハジメ。あれ以降勉強会を続けており、何だかんだ仲良くなったが故の弊害か。

サーモンサンドをぶつくんして、ご馳走様をしてから嘆くハジメ。優花の微笑から「ぷぷつ」と声が漏れた。

ハジメがムスツとすると優花は片手で謝罪を軽く済ませる。そして思い出したかの様に清水の話題を出した。

「そういや、私が弁当あげた日から清水と南雲って仲良くなったのよね?」

「あ——、うん。勉強会はその日から何だかんだやってるね。今日は工房の件があるから、予めゴメンって言うておいたけど」

「あの日からのよね。清水が気持ち明るくなったのって」

「…そうなの?」

「そうなのよ」

ハジメの問い掛けにうんうんと頷く優花。優花と清水は同じ『愛子ちゃん護衛隊』のメンバーだ。彼等は迷宮探索の代わりに【豊穣の女神】畑山愛子の護衛として責務を全うしている訳だ。あの日からまだそれ程経っていない為、初仕事はまだだが近い内にはあるだろうとされている。

まあ、同じ班である事を考えれば優花と清水が交流しているのは当然の話。そしてハジメとしては最近仲良くしている清水の話は多少ながら気になるものであった。耳を傾けているのもそれ故だ。

「清水って元々、コミュニケーション取る気あんのかってくらい無口だったのよね。…口聞いたのって精々詠唱の時とかぐらい」

「へえ、そうだったんだ」

「ただ…推定アンタと関わってから喋れる様になったのよね」

曰く、この前南雲が本棚に頭ぶつけた上、本棚が倒れかかった。曰く、南雲が『パヌティチキーの法則』を10回連続で噛んだ。曰く、南雲が座ってた椅子が急に壊れて尻餅ついた際に、勢い余って後転した。…などなど。

ハジメにとっては隠したい系の話であった。ハジメは思わず片手で顔を覆う。そして恨言を告げる。

「…清水くんめ、僕の恥ずかしい話ばかりして」

「でも、お陰でちよつと安心したわよ? アンタもアイツも『友達』居

るんだって」

「……………とも、ダチ？」

思えば自分、南雲ハジメに友人という者は居ただろうか。ハジメはそう思考し始める。父さん母さんの部下、小学校の頃話し掛けて来た同級生、引越した隣のゲーム好きなお兄さん…どれも友人とは違う気がした。

そして思考してわずか、ハジメは気がつく。己に友人が今までいなかったこと。そして清水との関係性は割とそれに近い事を。

その事実思わずハツとするハジメ。雷にでも打たれた気分だ。

「…今気づいた、みたいな顔してるわね」

「僕は…今まで友達がいなかった？」

「…何言ってるのよ？」

予想だになかった事実には、わなわな震えるハジメ。しかしそれを聞くに先ほどまで慈悲にあふれていた優花の顔が、不服を露わにした。

「私も、アンタの事そう思ってるわよ？」

「……………僕と、園部さんが？」

「そりゃあこつちに来るまで接点は無かったけど。それでも私はそう思ってるわ。傍にいて面白いからね」

南雲はそう思ってくれないの？と優花はハジメに口を尖らせた。

ハジメは今までの人生経験上友人経験がゼロだったが故に、『友人』と言う概念を神聖視している傾向があった。しかし確かに清水や優花との対話ではそれほど気を使っていない。素に近い自分でいられる。

優花の言葉。それを咀嚼し、理解し、納得した。

「…そっか、これが友達かあ。何て言うか…凄くしつくり来た」

「そ？ なら良かったわ。こつちの一方的な勘違いだったら羞恥ものよ」

優花そう胸を撫で下ろす。彼女なりに緊張したのだろうか。顔も僅かに朱色が差していた。

ただ、同時に思った。優花という時は素でいられる。彼女との友人

という関係性も言われてみればそうだと、すつと合点が行った。きつと清水も…あと雫や龍太郎に対してもハジメはそう思っている。

しかし、彼女は違った。彼女には見栄を張りたくない。格好をつけたい。心のどこかで、そう思っている。

(…僕は、白崎さんの事をどう思ってるんだろうか?)

闇の中瞬く憧憬だ。嵐の中導く指針だ。これに嘘偽りは無い。

ただ己にとってそれでも言い表し切れない。それ程に白崎香織は特別で…。

ならばどう香織は特別なのか。その答えは今のハジメには分からないことであつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「で、……か…」

工房は王城から離れた場所にあつた。炉を温めているのか、排煙管から灰色の煙が上昇している。キンコンカンコンと鉄を打つ音、匂いがそこら一体に広がっている。ハジメの目のハイライトがキラキラ輝く。

「うおおおお…」

そして何よりも…入り口より先はハジメにとって誇張なしに宝の山だつた。

滅多にお目に掛からないような鉱石の数々が棚に並び、煌めいている。フラム鉱石、感応石、魔銀鉱…。レアもレアな代物ばかりだ。

こんな夢の光景(錬成師視点)が工房の入り口からすぐに広がっているというのだ。ハジメの目が更に光を帯びたのは言うまでもない。もはやピッカピカである。

「…坊主、感動しているのは分かったが早く行け。ウォルペンが待つてるのだぞ」

「すみません。今までショーケース越しにしか見たことが無かつたので」

「…言い方は悪いかもしれんが、このような石ころがそれほど貴重な物なのか？」

「そりゃあそうですよ！ こちらのタウル鉱石なんて滅多に見れない

代物ですよ！ それにこの緑光石もオルクス迷宮でしか取れない物  
でして、更にはこちらの――」

「あー、分かった分かった。分かったから早く進め、坊主」

ハジメが異世界に来て間もなく鉱石オタクになつてすることにメル  
ドは半端諦め気味にスルーしながら、ハジメに先に行くよう促す。確  
かに待たせるのも悪いのでハジメも渋々と云った様子で進み始める。

「っ?! アザンチウム鉱石?! グラム単位で幾万ルタとする代物がこ  
んな塊で!? 流石王宮の工房！ 凄い！」

「さっさと行くぞ！ 坊主！」

超激レアな鉱石にハジメが「異世界来てから最高潮じゃね？」クラ  
スの大興奮を見せる中、遂にメルドが切れた。鉱石オタクの蝸牛の如  
き歩みの遅さに耐え切れなかったらしい。

それでもなお棚に張り付こうとするハジメをメルドはズリズリと  
引っ張った。まるで我が儘なペットと飼い主の様子だ。先程よりも  
深い溜息がメルドの口から漏れた。

「だがまあ、貴様のその様子ならウォルペンとも良く出来るだろうな」  
「...?」

「似た物同士、と言うことだ」

メルドは「俺には理解出来んがな」と溜息をつきながら、数多くの  
錬成師達を傍目に真っ直ぐ突きすすむ。錬成師達はメルドという王  
国最高クラスの権威を持つ者相手にも関わらず「お疲れ様です」と一  
言。そしてすぐに手元の作業に没頭した。

「相変わらずだな」とメルドがボヤク中、ハジメは錬成師達の仕事を横  
切る度に目に焼き付けようと見た目、そして息を呑む。

（これがっ、最高峰の仕事!?!）

ハジメの「錬成」で張り合えるとすれば速さだけであろうか。無  
駄の無い魔力の煌めき、彫られた魔法陣の滑らかさ、機能美、そして  
一切損なわれない見た目と全てが絶妙なバランスの上で成り立って  
いる。

錬成師達の仕事がハジメに語りかけている様だ。一流の仕事とは  
こういうことだ、と。

ハジメが引き摺られながらもそれらを観察していると、不意にメルドが足を止めた。前を見ると他と比べてもなお格が違う作りの扉がそこにはあった。

「着いたぞ。ここがウォルペン専用の工房だ。大体奴はこの部屋に二十四時間いる」

「どうやらハジメが職人達の腕に酔いしれている間に目的の場所へと辿り着いたらしい。」

メルドは「お前が先に入れ」とアイコンタクトで促した。確かにこれから工房に入ろうとしている身だ。自分の手で扉を開けるのが筋という物だろう。

ゴクリとハジメの喉が鳴る。そして自身の手で部屋の扉に手を掛けた。

すううと息を吸ってハジメは扉を開き、澁刺と大きな声で挨拶をした。

「初めまして！ ウォルペンさんの工房に入門を希望します、南雲ハジメといいま——」

「ふははははは！ できたぞう！！ これこそが剣杖融合準アーティファクト、『エクニール』だあ！！」

「えっ!? 何それ、浪漫！」

「おおつ、テメエ話分かんない！ こつち来い！」

「はいっ!! わー、魔法陣の形成が綺麗！」

「あつたりめえだろ！ 俺あ棟梁だぞ！ こだわらねえ奴もいるが、やっぱ【錬成師】に求められるのは丁寧さだ！ そう思うだろ？」

「加工用の魔法ですからね、素早さよりも丁寧さが求められるのは必然ですよね！」

「そうだそうだ！ お前【錬成師】だろ!? これに『錬成』やってみろ！」

「へ? 『錬成』! :うわっ、全く加工出来ない!? これって:」

「刀身の部分が封印石なんだよ! これにより魔法を斬るっていう対魔対策が一つ増え——」

「なる程、封印石なら魔力を弾く性質が——」



ワイワイガヤガヤ。秒殺で馴染んだハジメにメルドは死んだ目で  
眩く。

「…連れてきて正解だったか」

結果、この男の浪漫語りは一時間に亘り繰り広げられる事となつた。なお途中から別の職人も混じり出し、更なる喧騒を見せた。それによりメルドは終わる頃にはげっそりとしていたそう。

「えーっと、若干話し込んでしまいましたけど…改めまして、南雲ハジメです」

「丁寧な小僧だな。分かっちゃあいるだろうが俺がウォルペンⅡスタークだ。よろしくな」

二人は散々ロマンを語り合った後、ようやく本題を思い出したのか事務室へと入り、挨拶を交わした。メルドの「若干は違うだろう」と言うぼやきは無視する事とする。

名前を聞けばハジメが王都で【裏切り者】とされているその人だと分かる筈だというのに、ウォルペンは顔をしかめる事もなく単に頷いた。

元々接点があつた人間は兎も角、初対面の人間からはその外聞により邪険にされる事が多々あるハジメ。だがウォルペンはハジメの外聞など気にしていないとばかりに話を続ける。

「で？ お前は俺の工房に入りたい、そうだよな？」

「はいっ！ それで試験は一体何で——」

「そんじゃあ合格。これからよろしくな、小僧」

「……………はい？」

「…むっ？」

事前に聞いていた話とは全く異なるスムーズさに目を丸くするハジメ。そしてハジメほどでは無いが、メルドもまた眉を顰める。

「何だ？ 文句あんのか？」

「いや、いつものお前なら『最良何か知らん、とりあえず実力見せろ』とか言いそうだったからな。意外だったのだ」

「ああ、なる程。とは言えもうテストは済んだ様なもんだしなあ」  
「そうなのか？」

ほら、さつき武器の話してただろ？ と嘯くウォルペン。まさかあれが試験だとは思っていなかったハジメ、メルドの二名は「あれか!？」と今更になつて気が付いた。

「まあ何よりも『上位世界人』ってトコだな。要は文化が根本から違うんだ。新しい道具のアイデアとかバンバン出せるだろ。こっちからすりやそれ程魅力的なモンはねえからな」

当然ながらトータスと地球では文化が乖離している。主要なエネルギーも当然だが、需要や独自性、デザイン。何もかもが異なる。そしてハジメがいれば、その異なる文化が容易に得られるだろう。ウォルペンはそれを求めているのだ。

ただし引つかかる部分もある。ハジメが抱いたそれは代わりにメルドが言語化した。

「ほう？ つまりはアイデアマンとしての雇用か？」

そう、要は技術を求められたというわけでは無いという話だ。雇用以上を求めるのは我がままだと思うが、それでも…と複雑さがハジメの中に宿った。

しかしそのメルドの言葉をウォルペンが訂正する。

「落ち着け、主目的がそれだけだったら他の『使徒』に協力依頼して終わりだ。わざわざ給料渡して雇わねえよ。コイツにや将来性を期待してんだよ」

「将来性とな？」

「ああ、この小僧は『錬成』の知識量も十分だ。鉱石、魔法陣制作、錬成作業…さっきの俺の話題に簡単に乗っかれる程度にはある。知識がねえ奴はいつものお前みたいに頷くだけだ」

「気付いているのなら俺に研究成果を論じるな、ストレスなんだぞ…」  
「で、コイツの『錬成』は現状独学だそうだな。確かに粗もある。とても一流とは言えねえ。…だが独学で魔物を止められるぐらいの『錬成』を出来るつてのは十分バケモンだ。それにさつき封印石に『錬成』をやらせたが、変形はできなかつたものの基本五式の段階は

しつかり出来てた。将来性に賭けたくなるのも頷けるだろう?」

ちなみに基本五式とは属性・威力・射程・範囲・魔力吸収（消費する魔力量）の事である。『錬成』の場合、威力は変形の度合いに代わるがおおよそ違いはない。

一見ただの基礎のように思えるが侮ることなかれ。これらの調整はかなり困難だ。普通ならば何年も何年も時間をかけ最適解へと近づけていく。独学ともなれば下手な癖がつき、その矯正にも時間がかかることが多いのだそうだ。

しかしハジメにはその癖が少なく、かつ適切な処置も行えているのだそうだ。ウォルペンは続ける。

「恐らく少ない魔力量だからこそ自然と最適解を求めたんだろうな。ハツハア！ よく一か月も満たねえ程度でここまで研究したもんだ！」

わしやわしやと雑にハジメの頭をなで、ウォルペンは笑う。それは裏表の無い豪快なものだった。

「小僧、お前の魔力量は錬成師の中でも少ない方だ。そんなもって錬成師にも魔力量主義の奴はいる。これから差別も受けるかもしれない。噂聞いて馬鹿にしてくるかもしれないねえ。そんなオメエにアドバイスをやろう」

ウォルペンの笑みが悪ガキの様な物に変化する。ただそれは同時に覇者の笑みでもある。この世で飽きるほど存在する【錬成師】、その頂点に君臨する者の顔。

「実力で黙らせろ。コネコネうるせえ奴らも、神神言ってる奴らも黙らせるぐれえにだ！ うちの工房の奴らは全員そうして来た。だからうちに入るってならそんぐらいには成って貰うぞ」

ウォルペンの瞳がハジメを捕らえる。吸い込まれるほどのカリスマが、傲慢さがその眼光に込められている。

そしてその言葉は酷く野蛮だ。弱肉強食にも程がある。以前までのハジメならば返事に戸惑ったかもしれない。

しかしハジメはそのウォルペンの言葉に——犬歯を剥き出しに笑った。

——力も名誉も手に入れて！ 才能なんて関係なくなるくらい強くなつて！ 世界が認めたくなくても認めざるを得ないぐらいに成り上がつて——僕は君の横に立つ！

あまりにも似ていた。あの日、彼女へと捧げた言葉に。己の指針、そのままそっくりで。

「いいですね、それ。凄く僕好みです」

気が付けばハジメはウォルペンにそう言っていた。

爛々とハジメの目に眼光が灯る。楽しげで、愚かで、何よりも鬨争的な瞳。その目にウォルペンはニヤリと笑みを返す。

「そんじやま… 錬成」耐久テストだ。魔力が尽きるまでこの鉱石に出力し続ける」

「——はいっ!!」

置かれた鉱石は先ほどハジメが触れた封印石。難易度は最上級。駆け出しの錬成師がするものではない。ハジメもよくそれを知っている。

しかしこんなところで躓いて良い筈がない。

蒼く蒼く。ハジメが魔力を両の手、その手袋へと宿す。そして声高くハジメは叫んだ。

「錬成!!」

蒼く蒼く。火花が散る。

その輝きは鮮烈にハジメの網膜を焼いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ヘリーナ、南雲様はここ最近どうですか？」

——お嬢様にそう問われ、私は答えるのに少し困ってしまった。

私、ヘリーナはリリアーナお嬢様の「傍付き」にして、現在南雲ハジメの専属侍女を務めている。

初めはただただ監視を務めるのみ、侍女の役割はそれのカモフラージュにしか過ぎなかった。

しかしどうも南雲ハジメという人間はどうも危なっかしい。

というのも初日部屋の至る所に茶色く変色した、中には真新しい、血痕が残っていたこと。魔法陣が書かれた紙が剥き出しの上、山積み

で放置されていたこと。更には睡眠時間の豪快な削り方：年頃の男子がこれで良いものかと、監視している私が思うほどだった。

：睡眠時間に関してはお嬢様もだ。私が主とする人間はどうしてこうも睡眠を怠るのか。

兎も角気が付けば監視を忘れ、南雲ハジメの助力をしていた。

当然監視も忘れてはいない。：ただ監視を進める程に、ただの心優しく臆病で、それでも一生懸命な子供なのだと思わされた。

恐らく教皇の言っていた宣言、あれは偽りなのだろう。私もお嬢様もそう考えている。

だとするならば、南雲ハジメ。彼はどれほど理不尽な状況にあったのか。そしてそれでもなお立ち上がろうとしているのは何故なのだろうか。

今南雲ハジメは戦闘訓練、座学、そして“錬成”。多種多様、そして多忙極まりなく彼は努力している。

そしてそれほどの中、なお南雲ハジメの瞳はまっすぐだ。それこそお嬢様を彷彿とさせるほどに。

「そうですね。まず朝は——」

報告しつつも私は思う。私にとって一番目に大切な時間はお嬢様に仕える時。それは絶対だ。過去十数年の中誓った忠誠、それが色褪せることなどありえない。

ただ二番目は？と尋ねられたなら、今の私はこう答えるだろう。南雲ハジメに仕える時だと。

南雲ハジメは見ていて飽きが来ない。我武者羅で真っ直ぐで、楽しげで。ついつい目を奪われる。

だからこそ不躰ながらもこうも思う。もしお嬢様の婚約者が南雲ハジメになれば、私にとつてそれほど良いものは無いだろうと。

お嬢様と南雲ハジメは似ている。真っ直ぐで自己犠牲が強く、なんといつても我が強い。だがその我は常に大切なもののためにある。

勿論不可能であることは知っている。お嬢様には既に帝国に婚約者がいる。愛のない、そして恐らく不自由なものが。

私の忠誠に陰りは無い。どうなろうとお嬢様が私の全て。

だからせめて、せめて願いたい。あと僅かなお嬢様の自由が一生の  
思い出となることを。

そして願わくはお嬢様の自由を。

そして願ってしまっている。お嬢様に掛かる楔、それを誰かが解く  
ことを。

…誰よりも矮小な彼に望んでしまっているのだから。

## 5、乱(らん)！亂(ラン)！爛(ran)！

その日の朝、ヘリーナは非常に頭を痛めていた。

正確に言えばその頭痛は幻痛だ。精神的な負担、それこそが真のヘリーナが抱える物だ。

とある王女の部屋で一人。ヘリーナはまるで呪う様に呟く。

「…お嬢様、一体何をされるおつもりで」

その両手には小さな手紙が握られている。メモ用紙にも勘違いしてしまいそうなそれには、何とも簡潔なメッセージが綴られている。

『社会科学見学行って来ますわ by. リリアーナ』

お前の身分を考えろ、と言いたくなる様な内容にヘリーナは無表情ながらも頭を抱える。

そして思うのだ。何故自分の主達は己の平穩に無頓着なのか、と。

黄昏た視線は窓の先、城下町へと注がれていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ハジメがウオルペン工房に入り、おおよそ一ヶ月半。ハジメはさまざまな事を学んだ。

効率の良い「錬成」のアプローチから始まり、合金の生成方法や鍛冶、魔法陣の彫り方、果てには準アーティファクトの制作まで、様々な事を行なった。

ちなみに準アーティファクトはアーティファクトの一步下に及ぶ魔道具の事を指す。

アーティファクトの特徴としては『その道具其の物が特殊な力を持ってる』事が挙げられる。例えば光輝が持つ聖剣、そのステータス全上昇及び対魔への特攻能力。例えば教皇が使ったヴィーケン・リード、その洗脳能力。

どれも出鱈目で、かつ所有者が魔力を流すだけでそれらの機能は扱える。それが現代では制作できないとされるアーティファクトという代物だ。

一方で準アーティファクトは今の【錬成師】が作れる劣化版アーティファクトの事を指す。例としてはハジメが持つ「錬成」の魔法

陣が刻まれた手袋、これも準アーティファクトとなる。

名こそ大層だが、そう大それた物では無い。『使用者の魔法補助を行う道具』、それが準アーティファクトだ。

要は魔法陣が刻まれただけの道具であろうと、準アーティファクト扱いとなる。人間にとつて魔法陣が無ければ魔法が使えない、と考えたとそれだけでも『魔法補助』は出来ている訳なのだから。

魔法陣の彫り方は「錬成」で使用する魔法の円陣を刻み込むというこれ以上なくシンプル。

ただそれが【錬成師】の誰でも出来るか、と言われればそうでは無い。魔法陣に求められるのは『完全な円型』とされている。そして作られた円の中、もしくは周囲に式を刻み込んで行く。もしその円形が崩れれば、式が成り立たず魔法の成立が破棄される。

また専用の紙に魔法陣を刻む様な単発使用の物とは違い、準アーティファクトは使い回しが絶対だ。そして式の欠損や歪みは単発の魔法行使ならば問題無いが、回数が増すに連れてエラーが蓄積する。そのエラーは魔法陣の機能を低下させていき、やがて停止させる。

更に言えば感覚的には普通の「錬成」とは異なり、ただ溝を作るよりも時間を要する。何が具体的に違うのかは未だ分かっていないが、それでも通常の「錬成」とは異なることは間違いない。

その上、純粋な「錬成」の技術の他に『魔法陣学』の履修が必須。基本五式は当然の事、必要に合わせて様々な式を刻んで行かねばならない。

故に魔法陣を刻むという作業は現代の【錬成師】にとつて一つの登竜門。出来ると出来ないとはその者の【錬成師】人生を大きく左右するだろう。

ハジメはそれを一ヶ月半で習得出来たのだから凄まじい。まだまだ技術では上位に辿り着くことは出来ていないが、そこは現代知識により補っている形だ。

【錬成師】としての訓練と同様、他の修行も順調だ。その証左が他ならぬステータスプレートにある。

|||||



|| || || ||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：21

天職：錬成師

筋力：30

体力：30

耐性：30

敏捷：30

魔力：30

魔耐：30

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+複製錬成」「+高速錬成」「+圧縮錬成」「+鉱物分解」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+消費魔力減少」・言語理解

|| || || ||

一見すれば大した事もない、平凡的なステータス。レベルの上昇に關しても現在光輝のレベルが40に突入した事を考えれば、あまりにも低い。技能も二つ、しかも非戦闘技能と情けの無い物である。派生技能があれど、戦力としてはまず使えないという判定が下されるだろう。

しかしハジメの異常性はそこでは無い。非戦闘職でありながら一ヶ月でここまでレベルを上げている事が問題なのだ。

以前メルドが告げた魔力の循環速度、それ以外にも戦闘職と非戦闘職では様々な違いが存在している。武器の扱いへの補正、動体視力の強化、痛みへの耐性、そしてレベリングのし易さだ。

そもそもトータスで言うレベルとはゲームで言う様な『経験値を一定以上積んだからステータスが上がる』と言う都合の良いものではない。レベルは証左だ。その人間が己の限界に近づいた事を示す他ならない物だ。

つまりの所、『レベルが上がったからステータスが上がる』のではなく、『ステータスが上がったからレベルが上がる』と言う事となる。

そして戦闘職は自然と戦い方と言う物を理解できる。己の動きを

頭で理解し、どう改善するかを普通の人間よりも呑み込みやすい。だからこそ鍛える事が容易く、レベリングが効率的になる。

だがハジメの様な非戦闘職はそうでは無い。動きの上達にどうしても試行錯誤が必要となる。己の動きを知り、問題を理解し、改善する。戦闘職よりもレベリングに遥かにプロセスを要するのだ。

だと言うのにハジメは異世界生活約二ヶ月にしてここまで辿り着いている。しかも前半の辺りはほぼ寝たつきりであるにも関わらずだ。

それにはやはりメルドの戦闘訓練の方針が大きい。常にハジメに思考させ、より多くの手を考えさせながら実践形式を繰り返す。その結果、段々とハジメの動きは最適化されていった。そしてその思考に応える様に体も鍛えられたのだ。

とは言え、ハジメにとってメルドは当然格上。その相手にめげず何度も挑み、それでもなお思考を止めない。それがあってこそこのこれ程のレベルの上昇速度なのだろうが。

他にも派生技能をいくつも手に入れ、ここ最近給料も（ハジメ視点では）案外ウハウハ。何だかんだと良い風が来ている。

「…これさえ無ければ、だけどさ」

ハジメの目はちよっぴり悟った感じが見受けられる。そしてウォルペン印の商品が積み上げられた荷車を引きながらも、空を見上げる。

そんな彼にチクチクと忌避の視線が刺さる。ただし城の連中と異なり、遠慮気味、もしくは戸惑いも混ざった物だ。

現在ハジメがいるのは「ハイリヒ王国」王都、その城下町に当たる場所だ。そして荷車から分かる通り、現在ハジメは下町で納品を行なっている。

ウォルペン工房はスタッフがヤベ個性豊かエ奴らである事や技術平均がかなり高い以外にも、下町での仕事受けが良い事でも有名だ。

他の工房は「武器製作こそが『錬成』の華」とばかりにブランドの武器や貴族用製品に尽力する傾向が強い。それ故に高価な代物となる事が多い。

一方でウオルペン工房は棟梁自体が好奇心旺盛な影響か、幅広い商品を取り扱っている。如何にすれば製品をより小さくできるか、使い勝手が良くできるか、安くなるか…その追求の結果と言っても良い。ウオルペン工房はスタッフの人柄以外においては概ね下町から好評を頂いているのだ。

そして今回、その下町での納品担当となったのがハジメだった、という話である。これは当番制なのでまあ避けられない。ウオルペン曰く「顧客の奴らは今更気にしねえから大丈夫だ」と言っていた。

確かに前回一度納品をした事があつたが、依頼人の皆様はハジメを見ても大した反応をしない。むしろ悟った笑みで、「まあ、ウオルペン工房だしな」と頷く。それどころか「君はあの工房の人間の割に接客が出来ている」と誉めてくる始末だ。

先輩方は果たして一体何をやらかしたのか…。彼等のヤベエ武勇伝を知りたくなつた様な、無くなつた様な…そんな感じの心境であつた。

ただ悟っている工房の顧客はあくまでも特殊例だ。普通の城下町の住人はハジメを遠巻きに見つめている。ある者は疑念を。またある者は恐怖心を。そしてまた違う者は目を逸らす。露骨に悪意を向けてこないばかりに、返つて城の連中よりもやり辛い。

当然ながら学校でも多くの陰口や視線を浴びて来たが、初対面の間からこうも多くの集中を浴びるのは初めてだ。嫌とまでは言わないうが、その様な感覚に少し気を置いてしまうのは確かだ。

だがハジメは帰るわけには行かない。何故なら仕事の真つ最中だ。最近給料を貰えたのでプロ意識が上がっているハジメは、めげずに次の物件へと進む。

(えーつと次の納品場所は…『アスタマリア食堂』。商品は大きめの鍋三つと包丁五本、あと砥石か)

なおハジメはあくまでも顧客としてしか知らないが『アスタマリア食堂』は今庶民に大流行の勢いのあるお店だ。『使徒』のメンバーも割と足を運んでいる。安い上にボリユーミー、そして旨いと大絶賛だ。あと接客も良いと噂だ。恐らくは工房のイカれ共ユニークな方々と契約しているか

ら、と言う理由もあるだろうが。

しかしそんな事も知らないハジメは店の名前に気を止めない。単純に「あそこの店主、冒険者上がりらしいけど気前良いよなあ」と思う程度だ。荷車をゴロゴロとしつつも進む。

しばらく進むとその店の看板が見えた。木製の、敢えて古風な雰囲気醸し出している建物だ。女性の好みはよく知らないが、こう言った物をオシャレと言うのだろうかと感じた。

その店の前には何やら人集りが出来ていた。ハジメは行列か何かだと思い、気にも止めずその人混みをかき分けていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

人混みの中、『アスタマリア食堂』の店前では豪華な鎧を来た男とエプロンを着た黒髪の少女が対面していた。男の方は顔を顰め、少女の方は見事な笑顔を見せている。

「…つまり貴様は私とコイツら庶民を…同じ扱いにするつもりか？」  
「何度も申し上げた通り当店のマナーです。予約されたと言うならば話は別ですが…されてませんよね？」

男の方がクレーマー、少女の方がそれに対応する店員と言った所なのだろう。だがそれだけならば第三者が男に物申せば良い話。ペンは剣よりも強し、質より量だ。周囲が男を同様に責めれば問題は無い。

しかし周囲がそう簡単に介入できない理由が、どうやらある様だ。男が顔を一層険しくし、少女へと怒鳴りつける。

「巫山戯るな！ 私は誉れある王国騎士、それに選ばれた男だぞ!？」

貴様等の様な凡庸な者達に私の意向を邪魔する権利など無かろう！  
「ふむ…王国騎士に貴方が言う横暴な権威は無かった、と記憶しておられますか？」

「ハッ、貴様等と一緒にして貰っては困る。我々は国の為、国王様の為血肉を削り鍛錬しているのだ。多少ならば黙認される…そう言うものだ」

どうやら男の方は王国騎士となる事が決定しているらしい。それで浮かれているのか、それとも生来からの横暴さなのか。だからこそ

人々が何も言えない状況となっているらしい。

王国騎士、その名があるだけで王家の後ろ盾がある様なもの。例えばそれを王家が認めておらずとも、一般人はそれを聞くだけで竦み上がるだろう。

「…そうですか」

「分かったか？ ならばとつとと入れろ。今日は私が王国騎士になった祝杯を上げるのだ。私以外にも五人ほどの席を用意しろ」

「再度申し上げます。列にお並び下さい」

「…聞こえなかったか、小娘？」

ただ少女の方はその威圧を物ともしない胆力があつた。笑顔での対応を続ける。

「むしろ貴方のその耳が節穴でしょうか？ 私は何度も申し上げているはずです。当店のマナーだと。そして…お客様皆様に分け隔てなく対応する事を心掛けております」

「融通を利かせろと言っている。飲食店なのだろうか？ その程度出来るはずだ」

「当店ではマナーを守らぬ客に気を利かせる程、客に媚びた接客はしておりませんので。むしろ貴方、その様な接客しか受けた事が無くて？ …風俗にしか行った事がありませんの？」

「なあつ?! き、貴様ア…」

どうやら少女の胆力の方が強いらしい。一切崩れぬ笑顔の少女に対し、男の顔は情けない程に恥辱と怒りで染め上がっている。側から見ても男の方が明らかに余裕が無い。

すると男の表情が急変する。険しく歪んでいたその形相が、何かか吹っ切れたかの様に笑みを浮かべたのだ。人を不快にさせる様な、そんな笑みを。

「この私に恥をかかせて…ただで済むと思うなよ、女あ…」

そう言つて男は腰に収まっていたナイフを抜く。まさかただの言い争いがこうなるとは思ひもしなかったギャラリーは騒然とする。

只事ではないと店主が飛び出てくるが、その店主の顎に男の拳が差さる。倒れる店主に誰もが血の気を引く。飛び出そうとしていた

ギヤラリーも、それにより腰が抜けた様だ。

また少女からも息を飲む音が聞こえた気がした。そして半歩後ろに下がる。それに男はニヤリと笑う。

「ハハッ！ 今更悔い改めたか？」

「正気ですか？ 店主への暴行、私への暴行未遂…流石に誤魔化せないと思いませんか？」

「どうとでもなるさ。何なら貴様等に冤罪でもかければ良い。周りの奴らにも『話』をして合わせれば、その程度出来るだろう。多少手間だがな」

「…最終忠告です。納めなさい」

「貴様、未だに立場を分かっていない様だな…傷の一つや二つ、覚悟しろ」

男はどうやらなおも強気を崩さない少女が気に入らないらしい。余程短慮だった様で、正気を失ってしまったている。

そして男が一步、少女の元へと歩みを進めようとして…

「うわっ、店主さん!?! 大丈夫ですか!?! …軽い脳震盪かな？ 取り敢えず安静にして貰うとして…」

この場にそぐわぬ緊張感の無い第三者。畏怖もクソも無い言葉に、再び苛立ちを覚えた。

「今度は何だ!?!」

それはつい先ほど己が殴った店主に駆け寄る形で現れた。荷車を引くのを断念し、店主への応急措置を最優先する黒髪の少年。彼のその正体を、この場の多くの者が知っている。ザワザワと更に騒ぎが大きくなる。

それは他でもない騎士の男も知っている。…ただし悪評と言う意味で、だが。

これ以上無いと言うほどの侮辱と蔑みを込めて、騎士の男は彼へと言葉を投げ捨てる。

「…これはこれは。【裏切り者】の、南雲ハジメ様ではないか」

「…うん？ 何この状況？」

その少年、南雲ハジメはようやく周囲の異様な雰囲気、そして黒髪

の少女に気が付いたらしい。目を点にしている。

だが己が明確に『下』と見下している人間がその場に現れた事で多少溜飲が下がった様だ。騎士の男は一旦、誹謗中傷のターゲットをハジメへと変える。

「気分は如何かな？ 犯した罪を甘んじて許されながら、コネで工房に入らせて貰った気分は？」

「えーっと…何でここに？」

しかしハジメの目は騎士の方に向いていない。じつと少女の方を見ている。呆気に取られた様子で、騎士の男の言葉には一寸たりとも反応を見せない。

これがまあ、騎士の逆鱗に触れた。彼にとって格段に格下であるハジメが己を無視した為だ。一旦収まっていた青筋がビキビキと音を立てて現れた事からよく分かる。

「貴様も…くたばれえええ!!」

下に向けていたナイフを再度握りしめて、男はハジメへと振るう。ギャラリー達はこれから展開されるであろう悲惨な光景に目を覆う。少女は何かを唱えようとしたが、あまりにも遅い。

ナイフはハジメの寸前まで来ていた。ハジメがステータスが弱い事は誰もが承知済み。絶命するかもしれないと未来を思っただろう。

ただ男は運が悪かった。何故ならばそのナイフは鉱石で、相手は他ならぬ【錬成師】なのだから。

ハジメはチラリとそのナイフを視認すると、片手で刃の側面に触れ、一言。

「——『錬成』」

瞬間、そのナイフは男の手から消えた。否、分解された。

『錬成』の派生技能、『鉱物分解』。その名の通り、鉱石の結合を解き、ミクロ単位まで細かくする事ができると言う物だ。本来ならば数多くある『錬成』の派生技能の中でも後期に発生するとされている。

しかしハジメは【錬成師】の中でも特殊例。迷宮然り、メルドとの訓練然り。戦闘に『錬成』を使用すると言う異常者だ。イレギュラー本来の派生

技能の獲得する順番がまるで異なる。

“鉋物分解”は戦闘訓練の中で、ハジメが手に入れた戦闘手段の一つだ。大まかに言ってしまうえば『敵の武器を利用する』という手段。それはこの様に単に武器破壊するだけには留まらない。最速最短距離でハジメは騎士との距離を詰める。格下に武器を破壊された事に驚愕していた騎士は見事反応が遅れた。

そして所謂発勁の様に両手を男の鎧に打ち付けて、再度魔法の鍵言を告げた。

「錬成」

瞬間ハジメの手の甲が、正確にはそこにある魔法陣がより蒼く輝く。眩い光に相對する騎士までもが目を瞑る。

やがて光が止む。ハジメは後方に飛び、騎士との距離を取る。そして何かを確認したのか頷くと、騎士から目を逸らした。

だがここでおかしいのは騎士の容態だ。何と言っても何も損傷が無い。傷も打撲の感触も、それどころか痛みさえも全く騎士の男には感じない。

だと言うのにハジメの方はもう、戦いが終わったかのように店主の男に駆け寄っている。また少女の方も今の様子を見て問題無いと把握したのだろう。店主に近づき、回復魔法の詠唱を始める。

これに納得しないのは騎士の男だ。双方共に血祭りに上げるつもりで前へと進み、気づいた。

「……は？」

——己の体が思う様に動かない事に。

普段の様に動こうとした男は動きを制限された事により、無様に肢体を地面に投げ出した。また手を動かし起き上がろうとしても、何かに手を拘束されている様だ。

「な、何をした？ 貴様ア!!」

「何って…暴れられても色々困りますし、拘束しただけですけど？」

「拘…束？」

そう言われて騎士の男は漸く気が付いた。己の動きを制限する物の正体が鎧にこそある事を。



客観的に見ればその鎧は今や奇天烈に変形している。関節部分はどれも固定されていて、可動性を無視している。また腕と胴体、脚と脚の装甲が癒着してしまっている。

最早鎧が鎧としての機能を持ち合わせていないのだ。騎士の男はまるでミノムシの様にしか動く事ができない。

これこそがハジメが培った戦闘スタイルの一つ、「錬成」による束縛だ。これは相手が鉱石の装甲を纏っている時にしか使えないと言う制限はあるものの、ハジメの必縛技となっている。

当然一流のアーティファクトの鎧ともなれば話は別だ。あれ等は対魔性能が非常に高い。故に干渉性能が低い「錬成」ともなれば、全く変形出来ないだろう。

しかし男の鎧はただの鉱石の塊。ならば工房で鍛え上げられたハジメにとつてはあまりにも変形は容易だ。一度触れば出来る。

とは言え通常の「錬成師」にこれが出るかと問われれば当然否である。そもそもこれには相手の懐に入ると言う前提が存在する。後衛職ならばまだしも、前衛職相手に錬成師が近づくともなれば余程の度胸が必要だ。

またこの一瞬での変形は派生技能、「高速錬成」がなければ不可能。そして鉱石の癒着には「鉱物融合」も必要となってくる。

即ち接近戦を習得し、「錬成師」としてもかなりのレベルに立っていないければこれ程の早業は不可能。正しくハジメ限定の技術と現状、言えるだろう。

ただ油断もあつてか『己が負けた』と言う事実を飲み込めない騎士の男。彼は無様にも喚き、ハジメや少女を睨む。

「貴様等ア!! 私を無視するな! 第一何をした! 【無能】と蔑まれる貴様が私に敵うはずも無かろう! 卑怯だぞ! 恥を知れ!!」

「…ぎゅうしつと」

ガチャガチャと鎧の成れの果てを鳴らしながら、本人もガヤガヤする騎士の男。ハジメとしては普通に正当防衛をしたただけなので、半目で引いている。

それを怖気ついたと判断したのか、騎士の男は更にヒートアップす

る。

「こうなれば結構だ！ 【裏切り者】である貴様も！ その女も！ 私の地位を持って追い詰めてくれる！ 私は王国騎士に選ばれただけでは無い！ 貴族なのだ！ それも後継筆頭の名！ 震えて覚悟するが良い！」

「えっ…」

どうやら騎士の男は貴族の息子らしい。それに加えて王国騎士と言う職につく事が出来た為、余計調子に乗っている様だ。血走った目で冤罪を掛けると宣言して見せた。

ハジメはそれに目を見開く。その反応を見て更に勢いを増そうとする男の舌。

「もう結構です」

しかしそれが嘘のように凍り付いた。たった一言。要したのはそれのみ。

放たれた言葉は単純。しかしそれに込められた冷気とカリスマ性が男を本能的に静止した。

場が静寂を満たす中、呟いた黒髪の少女はにっこりと笑っている。

…ただし目の奥を除いて。

少女は続ける。

「先程から聞いていれば…貴方は権威を振りかざすだけ。貴方の親やこれまでの王国騎士が活躍を見せてきたのは確かでしょう。ですが、それは彼等の功績であって貴方の物では無い。正しく『神の名を騙る娼婦』と言った所ででしょうか？」

「な、にをお…」

『神の名を騙る娼婦』はトータスにある諺の一つだ。日本で言う所の『虎の威を借る狐』と同義。他者の威厳で強く見せかける事を指す。

要は言っている人間は小物だと遠回しに言っている様なもの。男は襲い掛かる威圧感プレッシャーに冷や汗を流しながらも、恨みがましそうに少女を睨みつけた。

続けて何かを男が言おうとしていたが、その時人垣の中から現れたある人物。彼女の乱入により、男の口は静まらざるを得なくなった。

「…漸くですね。見つけましたよ、お嬢様」

「思ったより早かったですね、ヘリーナ？」

「長い付き合いですから、当然です」

「ふふふつ、ですが丁度いいタイミングです」

世情に疎いであろう騎士の男でも知っている。「ハイリヒ王国」第一王女、その【傍付き】たるヘリーナだ。その有能さは侍女の中でも超一流。王女の名声と伴って、知れ渡っている。

そしてそんなヘリーナが『お嬢様』と呼び、己が主と定める人間は、ただ一人しかない。その場にいた誰もが、そのヘリーナへ気安く話しかける黒髪の少女へと視線をやる。

唯一顔を知っていたハジメは除くが、他の人間は全ては思った。「まさか…」と。

皆の心の声に沿う様に、黒髪の少女はそのウィッグを外し…その金髪を露にした。そして明かされたその素顔に、男は顔面を蒼白にした。

「改めまして、偉い偉い王国騎士見習いの貴族様。私はリリアーナⅡ SⅡBⅡハイリヒ…仮にもこの国の王女をさせて戴いております。どうぞよろしくお願い致します、ね？」

「あ、ああ…」

恭しい華麗な会釈を男へと捧げるリリアーナ。本来ならば誉れにもなろうそれが、今は帰って男の顔に一層絶望を刻み込むのみ。

物言わぬ廃人となり掛けている男に、笑顔で追撃をリリアーナは放った。

「それで？ 王国の後ろ盾が貴方にあると仰られましたが…その様な事を王国は承諾した覚えはありませんよ、エルクⅡナイアン？」

「わ、私の名前を…」

「ええ。当然です。今年の入団試験に受かった者の名前や顔は記憶しております。ただ…残念ながら期待していた様な人材ではなかった様ですが」

「いえ！ 私は王家の盾となり矛となる事を誓っています！ 今回はあくまでも王女様と気付かなかっただけで…」

「…どうやら貴方はとんだ思い違いをしていらっしやる様ですね？」

「お、思い違い…？」

リリアーナの正体に気づいた途端、先程までの横暴な態度が嘘の様。鎧の束縛により傅く事も出来ないが、それでも懸命に己の王家への忠誠を示そうとする。

しかしそれにもまた溜息を吐くリリアーナ。

「王国騎士団は確かに王家の盾であり矛。我々が下す命令を忠実にこなし、国を守る。そう言った組織です。ですが、それ以前に我々王家も騎士団も：国民を守る事が前提にあります。その本質を忘れ、国民に権威を無闇に晒すなど：恥を知りなさい」

「ああ…」

そう、意識が違うのだ。リリアーナにとっては王家とは国民の為にあるもの。もし国民に不安を晒す様な事があれば、それは最早『王』として機能を成していないただの暴君だ。だからこそ己をも律している。

正しく男は逆鱗に触れたのだ。最初に『平民』を見下し、己の身分で他者を蔑ろにした時点で時は遅かった。

それを悟ったのか男はその首を力無く落とした。そんな彼に最終通告をリリアーナは耳元で呟いた。

「ああ、ご安心下さい。この件に関しては後々騎士団長様の方に通して置きますので。だって：誉れある王国騎士の行動ですものね？」

にこやかな、しかし明らかに黒い笑みを浮かべてリリアーナは遂に男に背を向けた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「さて。この度は御助力頂き感謝しますわ、南雲様。貴方がいなければもつと多くの国民が傷ついていたかもしれません。改めて礼を申し上げますわ」

明らかにショックを受けている騎士の男が運ばれていく中、リリアーナはハジメの下にやって来た。

なおリリアーナがやってくるまでにハジメはヘリーナと情報共有を行っていた。ヘリーナ曰く、リリアーナがここにいたのは定期的

な城下町の探索の一環だった様だ。様々な形で街に溶け込み、自然な様子を見るのだとか。

全く持つて国民想いで自由奔放な王女様です、とヘリーナはこめかみを押さえながら言っていた。何故かハジメにもジト目を注ぎながら。

なお脳震盪を起こしていた店主はリリアーナの「治癒魔法」によって、全快だ。むしろ王女直々に施しを受けた事は店に人を呼ぶキツカケにもなるだろう。更なる繁盛が予想される。

取り敢えず周りのギャラリーも一安心した様子だ。…ただ僅かにハジメへと不審な視線が向けられているが。

「いえ、こちらこそです。権力勝負になったら僕に勝ち目無かったですし：改めて王女殿下、有難うございました」

「ふふふっ、やめて下さい。『使徒』の方でそこまで余所余所しいのは南雲様だけですよ？」

「でも僕はもう『使徒』じゃない様なものですし：」

「謙遜は止して下さいまし。先程のエルクとの戦い、御見事でしたわ」  
パチパチと小さく拍手をするリリアーナ。それに周囲の雰囲気安らいだ気がした。彼女程の人間が褒め称えるならば、もしかすればハジメは悪人では無いのでは無いか、そんな仄かな同調圧力をリリアーナは作り出している。

とは言えハジメは教会が直々に定めた「裏切り者」。そんな単純に疑いの視線が無くなることはな——

「流石は——私の騎士ですわ」

『『『『………はい？』』』』』

ハジメと民衆ギャラリーの音がシンクロする。そしてありつただけの動揺と疑問を露にする。

その疑問の込められた言葉に対し、リリアーナはただただ微笑むだけであった。

——この日から、城下町に於けるハジメの印象は大きく変動する事となる。

そして王城にさえも僅かに影響を及ぼす事となるのだった。

## 6、行き先は霧に隠れゆ

城下町での軽い騒ぎから一ヶ月経った朝。ハジメは相変わらずメルドと剣を交わしていた。ただしその応酬は以前とは別物。その成長は正しく飛躍とも言えた。

メルドの横薙ぎをナイフで逸らし、同時に横倒れになったまま空いた片手で地面に触れた。

「鍊成——」

するとメルドの片足が瓦解する。それにより崩れるメルドの重心。

ハジメは腕を折り曲げ、そのまま勢い良く己が体を突き飛ばす。片手と言えど筋力値推定70。チーターのそれに匹敵、或いは超えるだろう値は簡単にハジメの体をメルドの頭上へと跳ね上げた。

メルドも直ぐにそれに対応しようとする。しかしすぐ眼前から迫って来た鋼線。

この鋼線はメルドの足場崩しと共に作られた物だ。出来は早急故にお粗末。しかし鋭さは明らか。メルドは回避を優先させられる。

だがこの鋼線は攻撃そのものであり、布石。空中に舞い踊るハジメの手に確かに握られている。そして鋼線のその先は地面と癒着している。

ハジメは力の限りその鋼線を引く。するとピインと音を立てて張り詰める鋼線。それがまたもやメルドへと襲いかかる。

そして同時にその反動によりハジメの体も下へと舞い戻る。そしてその落ちる先にはメルド。

ハジメはその勢いに従い、ナイフを逆手にメルドへと繰り出す。

鋼線とナイフ。同時に放たれるハジメの攻撃。どちらも受ければタダで済まないだろうそれをメルドは視認して——

「甘いっ！」

瞬間、メルドから放たれたるは二重の斬撃。片方は鋼線を斬り碎き、そしてもう一撃はナイフを捉えた。

メルドの一撃は強力だ。例え罅迫り合いだとしても、まずハジメの実力ならば手を負傷してしまう。

だからこそハジメは敢えてナイフを手放した。そして空中で回るとその遠心力を乗せて、蹴りをメルドの頭部へと放つ。

だが所詮悪足掻きだ。メルドは屈んで避けると、ハジメの腹部を剣の持ち手で殴る。空中故に踏ん張れる筈もなく、ハジメは吹き飛んで地面へと転がり落ちた。

地面に落ちた時点で起き上がるものの遅い。その首にはメルドの刃の無い剣が添えられている。動ける筈もない。勝負ありだ。

そしてふーつと二人とも息を吐くと共に、泥の付いた手で汗を拭つた。やがてハジメの方は地面へと倒れ込んだ。

「くあ——!! 勝てないですね!」

「そりゃあ俺も騎士団長だからな、負けるわけには行かん。だが身のこなし・工夫どちらも及第点だ。非戦闘職である事を踏まえれば凄まじい成長だぞ、全く」

「ありがとうございます」

このメルドの言葉に偽りは無い。何と言ってもメルドとしても最近は危なげなく、と言うことが無くなりつつある。『錬成』を接近戦に組み込むとか言うトチ狂った様な戦闘スタイルは、正しく初見殺しのオンパレード。メルドとしても目新しい物が多い。

また体内魔力の循環の精度の上昇、それにより得た本来のステータスのおおよそ二倍という破格の恩恵。ハジメ自体のステータスが低い事もあるだろうが、一時的にでもステータス70程の動きが出来るのは脅威だ。

更にはハジメの戦闘スタイルは武術特有の流麗さこそ無いものの、最適化をし続けた物。無駄を省き、合理的に仕上がったそれはとても我流と思えない程の精度だ。

手加減はしているものの、最初に比べれば全く違う。メルドにとつての通常の手合わせ並みの物。要は彼の部下、王国騎士に施すそれと同等レベルだ。

当然イコール王国騎士と同等、と言われれば答えは否だ。ハジメの戦いの前提には魔力循環促進による身体強化がある。即ちそれは体内魔力が減れば減るほど弱体化は免れない事を意味する。



魔力循環でミスをすれば魔力量は当然減る。更に「錬成」を使つて戦う以上、魔力がそう長くは持たない事は自明の理だ。

当然魔力回復のポジションを使えばもう少し長く勝負もできるだろうが、それで王国騎士達と互角レベル。とても長期戦には向かない、と言うのがメルドとしての総評だ。

ただハジメはあくまでも【錬成師】。かつて【無能】と呼ばれた男と考えれば、雲泥の差だろう。メルドとしては十分に合格ラインだ。

(ただ——)

『力も名誉も手に入れて！ 才能なんて関係なくなるくらい強くなつて！ 世界が認めたくなくても認めざるを得ないぐらいに成り上がって——僕は君の横に立つ！』

あの日、閉ざされた扉の奥で叫んだハジメの言葉。あの時からその眼は真っ直ぐだ。奈落の底で見た時よりも、遥かにだ。

そしてその言葉に偽りは無い。ハジメは今も先程までの己の動きを頭の中で反芻している。恐らくは次には改善してくるだろうそれは、あまりにもその向上心を如実に示していた。

改めて恋心とは恐ろしい物だ、とメルドは見ている。そしてこんな人間だからこそ、姫様も力を貸そうと思えるのだろうかとも。

ブツブツ呟くハジメ。その気付け代わりにメルドはハジメを今巷で流行っている二つ名で呼ぶ。

「ほら。とつとと起きろ、【王女の騎士】」

「——違います!!」

そのハジメの叫びは、虚しくも鍛錬場に木霊した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——【王女の騎士】。その名は城下町でのハジメの人気を示す二つ名である。

そのきつかけはあの日の爆弾発言だ。あれが本当に悪かった。

人の噂と言う物は信頼できる様で、中々難しい代物だ。その理由は小さな嘘が積み重なる事で、何処までも肥大化していくからだ。

そう。即ちリリアーナの「私の騎士」発言も、凄まじい肥大化を見せたのだ。しかも小つ恥ずかしい方向に。

曰く、姫を庇って勇猛にも愚かな騎士と戦った。

曰く、元々ハジメとリリアーナは騎士を試すつもりで共謀していた。

曰く、目にも止まらぬ速さで騎士を気絶させた。

曰く、リリアーナとハジメは絶大な信頼で結ばれた主従である。

曰く、かの教皇の御言葉も本当では無いかもしれない。

…まあ、何とも凄まじい掌返しだ事だ。とは言えこれが広まっているのはあくまでも城下町での事。貴族間や使徒間では未だ【無能】と蔑まれている。

だが城下町でのリリアーナの評判は絶大。逐一街に下りては、人々との交流を行っている。そんな彼女がハジメの事を「私の騎士」と評すれば、素早い掌返しも仕方が無い物にも思える。

更にリリアーナと同様、街の人々と良く交流している優花の存在も大きい。彼女もまたハジメについては言うまでも無く高評価だ。「助けて貰った」、「恩人だ」と良く言っているらしい。

故に聖教教会が絶対だとしても、人々は訝しむ。彼女等が言っている事は嘘なのか、と。

だからこそあれから一週間。前と同様、納品の為城下町へと向かったのだが…

「あら、リリアーナ様の…お仕事頑張って下さいね」

「仕事お疲れさん！ 果実のオマケだ！ 持っていきな！」

「ウォルペン工房の人間も…悪かねえのかもねえ…今度納品の依頼してみてくださいいいかしら？」

「にーちゃんのヨメってリリアーナ様なの？ ユーカ様なの？」

この代わり様だ。悲しい事にこっちの世界では初対面の人間からは負の感情をぶつけられる事が多いハジメとしては、それらの言葉はあまりにもむず痒い。思わず仰け反ってしまう程だ。

…まあ、最後の質問に関しては素で「何で？」と返してしまったが。

だがいずれにせよ今の状況は居心地が今までに無く良い。何せ生活環境が変わったのは城下町だけでは無い。城でも面倒が減ったのだ。

と言うのも、城下町で流れるハジメとリリアーナの噂。それを耳にした貴族や侍女はこう考える。南雲ハジメへの侮辱は王女リリアーナSⅡBⅡハイリヒに対する反意に値すると。

例えばハジメの背後にある人物が『使徒』ならば嫌がらせに問題は無い。彼等は確かに強い。戦う事になればまあ勝つ事は不可能だろう。

しかし同時に彼等は統治者でも、為政者でも無い。言うならば、ただの戦士である。

そして【ハイリヒ王国】は決して無法国家では無い。下手に暴力・権威に訴えれば、逆に彼等が追い詰められることとなる。ましてやハジメの評価は使徒の【裏切り者】。虐めは暗黙の了解であり、それを妨げる行為は教会への反意に等しい。

要は敵対したとしても裁かれる事が無いため、ハジメを虐めた所でデメリットが少なかった、と言う話である。

また愛子の場合はいよいよ農地へと出向いている事もあり、王都にいる事が少ない。それ故にハジメを虐めたとして愛子の耳には届きづらい。

だが背後にいる人物がリリアーナならば話は異なる。

リリアーナは若き女傑だ。齢14にしなから勉学、楽器、魔法に社交術、それら全てにおいて優秀の一言。社交会に一步踏み込めば、その美貌と所作により誰もを魅了する。

何よりもまだ学園に通っていても可笑しく無い歳でありながら、両親を支える程に政治にも明るい。即ち為政者という立ち位置にリリアーナは存在する。

またリリアーナが持つ人脈はあまりにも広い。メルドも多いがその比では無い。貴族、騎士や侍女は勿論、冒険者ギルドの団員に国民、商人、終いにはスラム街のならず者達まで彼女を慕っている。

だからこそリリアーナに敵対すると言う事は、下手すれば龍人に遭遇するよりも恐ろしい。何せ圧倒的な人数が己と敵対するに等しいのだから。

だからこそハジメに対する侮辱の視線はここ一週間で嘘の様に無

くなつた。またそれらの感情をハジメに直接ぶつけると言つた事も減つてゐる。それに反比例する様に陰口やらは増えている様だが、ハジメとしては実に心地良い。

『私は当然の事をしたままでです、南雲様。むしろ一時期は貴方を疑つていたのでから…この程度の事で感謝は必要ありませんよ』

先日ハジメがリリアーナに感謝の土下座をしに行こうとした際に、リリアーナが静止。そしてそう言つてくれた。良い人だ、と拙い語彙力でそう思わされた。

そう思わされた。

とは言え残り四ヶ月。それまでにハジメが大きな功績を残さねばならない事には変わりない。あくまでも今回のリリアーナのそれは一時的な改善に過ぎない。たかが王国騎士見習い一人を捻つた程度、功績にも成りはしない。

またリリアーナも所詮は王女。国王であるエリヒドよりもその権威は乏しい。教皇イシユタルとは比べ物にもならないだろう。

タイムリミットはジリジリと迫つてきている。既に三分の一を切つた。だと言ふのに打開策が一つも思い浮かばないというのは、何とも情け無い話である。今溢した溜息も仕方が無いだろう。

焦つてゐる。二ヶ月は短いと言ふ者も多いが、ハジメの努力は二ヶ月と言ふ範疇で留まる物では無い。だと言ふのに未だに一寸の光も見えない。

その焦りを誤魔化す様に、道中貰い受けたリングゴもどきを乱暴に齧つた。マナーの悪いながらの食事であるが、心境的に気にしている余裕も無い。シャクシャクと皮ごと咀嚼する。

「…南雲？」

リングゴもどきの芯ごと噛み砕き飲み込んだ後、背後から声がした。その声にはハジメは冷や汗を滝の様に流した。

何故ならばその声の主はハジメにとって苦手も苦手な相手。暴力や威張ると言つた事は無いが…代わりにとことん話が通じない。根本的な考え方が違うのだろう。そして実力でその説得力を補強してくるのが何とも厄介だ。

ハジメは油を差し忘れたかの様にゆっくり、ゆっくり顔だけを後ろに向けた。さながら蛇に睨まれた蛙か。上擦った声で彼の名を呼ぶ。「…天之河くん、お久しぶり？」

そう、そこに居たのは今【ハイリヒ王国】において最も名声ある【勇者】。今日は気晴らしにでも来たのか、聖剣や聖鎧は無く、腰に準アーティファクトの剣を携えているのみ。服は簡素ながらも高級であるシャツやズボン。さながら高名な貴族の息子と言った所か。

そして鍛えたからこそハジメは理解する。両者間にある途方もない実力差を。

更に冷や汗が噴き出た、そんな気がした。光輝はそんな事知らないだろう。まるで敵の様にハジメを睨みつけた。

「南雲、丁度良かったよ。俺は君に言いたい事が沢山あった。どうせ南雲の事だ。時間はあるだろう？ なら少し話をしよう」

明らかにOHANASHIをするつもりだろうという気迫。そもそもこっちの用事や気持ちは無視か。今仕事だよ、暇じゃないですよ。どーせ、天之河くんにはそう見えるんでしょうけどねー!!

と心の中でぐちぐち言えど光輝に聞こえるはずもない。とは言え本気で只今絶賛納品中だ。荷車にある商品もまだ少なくは無い。

ここで仕事を放棄しては棟梁であるウォルペンに面目が立たない。取り敢えず穩便に宥める事にする。

「僕、今仕事だからゴメンだけどまた今度に——」

「どうせそう言って逃げたいだけだろう？ 南雲はいつもそうだ。それに俺はまた【オルクス大迷宮】に戻らなければならぬ。君と違って時間が限られている。南雲がどうであれ、仲間とコミュニケーションを取る事は大切な事だ。そう長く話す事でも無いんだから、聞く姿勢を少しでも付けたらどうなんだ？」

怒涛の責め言葉にハジメは白目を剥く。こちらの事情を聞く気がまるで無い。ついでに言えば間違いなく長くなるので面倒だ、という経験則からの判断もある。

脳裏に無視し続ける選択肢が出てきたがすぐ様棄却した。何せ相手は一国の期待をその身に背負う【勇者】だ。折角楽に暮らせる様に

なった城下町でまた視線を浴びる事になるのは辛い。

前の評価マイナス時点なら無視も選択肢に取れたのになーとちよつと後悔する。

そして折衷案としてハジメの納品作業中は光輝は干渉せず、その移動中に話を聞くと言う事となった。仕事は大切、という事を主張し何とかそうした形だ。

結果…

「君はメルドさんや他のみんなに迷惑を掛けている自覚はあるのか？

メルドさんは騎士団長だ。当然君なんかよりも到底忙しい。だよ言うのに個人的な特訓を付けてもらっているそうだな。君は弱いんだ。努力は良いが、他人の迷惑は考慮すべきだ。更に偶にだがその特訓に龍太郎も参加していると聞く。龍太郎も君が憐れだったんだろう。身内には甘い奴だ、その優しさに漬け込むなんて…俺には理解できないよ。それに最近はリリーアナも巻き込んでいると聞く。彼女は君より年下だぞ？ そんな彼女に負担を掛けている事に良心は痛まないのか、南雲？ 彼等は俺の大切な人だ。彼等にはどうか幸せであって欲しいと思っている。だからな、いい加減彼等から自立…：おい、聞いているのか南雲!？」

「うんうん、聞いているよ。…次の納品は『チーズ！ ホットドオツグ！ 一番店』か。名前だけで何が目玉商品かすぐ分かる店名だなあ」

まあ案の定、移動中は一方的なOHANASHIだった。ハジメは磨きに磨き上げたスルースキルをフル活用。光輝の声を右から左へと流しながら、手元の納品書に集中する。

お客さんには奇異の視線を一瞬向けられたが…やはりウォルペン工房の顧客は強し。何事もない様に話はスムーズだった。

そして仕事が終わるまでの間、光輝の言葉責めとハジメのスルーによる合戦が城下町で繰り広げられた。この無駄に壮絶な応酬はリリーアナの「私の騎士」とは別の方向性で後々話題となるのだが…：それはまだまだ後の話である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「御免なさい、南雲くん！」

「え？ 八重樫さん!? 何々!」

そしておおよそ夕方辺りだろうか。部屋に戻ろうとしていた廊下の最中、ハジメの目の前で雫が頭を下げていた。

ハジメとしては特に雫が己に害を成した事は無く、疑問符ばかりが浮かぶのみ。だが雫は構わず謝罪を続けた。

「お昼、光輝が南雲くんにちよつかいを掛けたって言うのを…本人から聞いているわ。光輝自身は誇らしげだったけれど…仕事中に申し訳ないわ」

「ああ…別に良いよ、八重樫さん。適当に聞き流したし、僕自身にはノードメージだからさ」

「そう言うわけには行かないわよ。身内の問題なんだから。…まあいつも通り都合のいい様に解釈したみたいだけれど」

「あはは…いつもお疲れ様だね」

まるでお母さんみたいだ、と心中呟くハジメ。もっともそれを直接言えば雫は不満を露わにするだろうから、声に出す事はしない。ハジメは空気を読める男なのだから。

そんなハジメの内心は知らず、眉間を揉む雫。見ればその目の下にはくつきりと隈が出来ていた。もう片方の手で腹を押さえている事からも、よつぽとストレスが溜まっていく事が察せた。

過度なストレスによる睡眠障害、腹痛…それ以外にも様々な負担がある事が予想できた。

確かに雫がストレスを抱える事は多い。だがここまであからさまにするのも珍しい。ハジメがついつい尋ねる。

「八重樫さん、何かあった?」

「…何も無いわよ?」

「流石に分かるよ、隈とか様子で。八重樫さんには地球の頃からお世話になってるし…聞かせてくれないかな? 悩みを聞く程度の力には成りたいって思うから」

「で、でも南雲君だって大変でしょ? なのに余計気を利かせる様な事は…」

「むしろ八重樫さんがそんなのじゃ他の事に集中出来ないし…ね?」

「……………南雲君って偶に強情になるわよね？」

雫はハジメに負担を掛けることを躊躇ったが、何せこう言う時のハジメの押しは強い。「こつちが愚痴を言うのは申し訳ないけれど…」と前置きしながらも、話し始めた。

「まあいつも通り光輝とかみんなの事もあるのだけれど…最近、「ヘルシャー帝国」に行ったのよ」

「ヘルシャー帝国」、その名を聞きハジメもまた顔を顰めた。

軍事国家である「ヘルシャー帝国」は元々傭兵団から国へと発展した些か特殊な国家である。その分形式と言った物には縛られず、聖教会の教えも「ハイリヒ王国」程の浸透を見せていない。

それ故に「ヘルシャー帝国」では奴隷制が執行されている。一度訪れば人間、亜人、龍人、吸血鬼…様々な奴隷の痛ましい姿が見られる事だろう。

なお「ハイリヒ王国」で奴隷制がほぼ無いのは単に聖教教会と密接な関係性を持つ為だ。教会では亜人とは見る事すらも唾棄する様な存在とされている。その為、奴隷として身近に置く事すら嫌悪する。だからこそ良くも悪くも「ハイリヒ王国」では亜人の姿が見られない。「泣いてる人、憔悴し切ってる人、目を尖らせている人…怪我をしている人なんて数え切れないくらい。子供だって…沢山居たわ」

百聞は一見にしかず。伝聞と実際の経験とはまるで物が違う。ハジメも悲惨だろう事は知識から知っているが、その光景や感情は同調出来るはずもない。

「光輝は何とかしようと思起になつていたけれど…相手は国。力を持つていても所詮私達は子供で個人。それに私達にとつては奴隷制は残酷な事だけれど、帝国側からすれば当然の事。奴隷制を止める様叫んだ所で罪人はむしろ私達。…せいぜい心の中で祈る事しか出来なかつたわ。見て見ぬふりだなんて相手からすれば加害者と変わらないのにな？」

かつての日本とは倫理観がまるで異なる。帝国人はまるでペットに餌をやる様に、己の奴隷を嬲る。動けと恫喝する。そしてその尊厳を折るのだ。



だがそれは罪では無い。ただハジメ達日本人と帝国人で他者の価値が違うだけ。責めた所で「可笑しい」と揶揄されるだけだ。

一国を相手取れる様な権威が、力があるならば話は別なのだろう。しかししたかが個人では限界があるのは当然だ。

そして責任の行き先は【ハイリヒ王国】にも向くだろう。たかが一個人の考えで巻き込める筈も無い。それを考えれば黙り込むのは感情だけで動かぬ冷静さを持つ証左だ。

だが、雫に限ってそう己を楽観視する事は無いのだろう。クラスで横目に見て来た程度でも、ハジメはそう察する事が出来た。

「寝ようとする度に思い返すの。あの時出来ていた事は無かったのか、声だけでも掛けられなかったのか、ってね。責めてしまうの、私自身を。それを思うと…寝れなかったのよ。我ながら弱いわね」

だが雫は人一倍責任感を持つ。忍耐こそはあれど、思考の切り替えが苦手。抱え込んだ悩みを捨てる事が出来ない性分だ。

それでもなお耐え得る忍耐は凄まじいが、そう言ったタイプはふとした拍子に限界が来る。自殺者にも突然やつて来た衝動に身を任せ、という事も多い。

だからこそハジメはその心を安らげよう言葉を選んで…やめた。そして代わりに選んだのは謝罪。

「ごめん、八重樫さん」

「…いきなりどうしたのよ、南雲君？」

「いや、さ。ちよつと酷い事言うから」

「…？」

雫は不思議そうに首を傾げる。普通ならば慰めの言葉やら同調やらが来る様な所での謝罪だ。当然そうなる。

「八重樫さんはさ、凄いよ。普通だったら自分は悪くないって言い訳する。僕ならそうする。そして安眠する」

「…そうなの？ そうは見えないのだけれど」

「本当に言い訳だらけだよ。何なら昼間天之河くんに言われた事だつてさ」

「仕事中、光輝に言われた。お前は他者の迷惑を考えない、と。」

ハジメは聞き流しつつも思った。おっしやる通りだ、と。

「僕は甘えてるんだよ、皆の善意に。冤罪喰らいたくないとかつて言うエゴの為だけにさ」

「で、でもそれは南雲君は悪くないじゃない！ 実際あんな罪無いのに…」

「いや再度ゴメン。やっぱりそれも嘘だ。尤もらしく飾った皆を巻き込む理由。そりゃあ冤罪なんて嫌だけど、本当はもつとエゴだらけな…『強く成りたい』っていう凄く個人的な理由だよ」

そう、やはりそれに行き着く。ハジメの今の根幹はそれだ。

冤罪を免れる為ならば大人しく【錬成師】としての修練を積むのが最適解だ。何せそれがハジメに唯一与えられた才能。それを活かせる道に行くべきだ。

しかしハジメはそんな賢い選択をしなかった。そして他人を巻き込んでいる。

雫が意外そうに目を開く中、ハジメは自嘲気味に話を続けた。

「凄く今更かもしれないけど…格好付けたいんだ。僕の事を最初に認めてくれた人に。頑張つて強くなつて…隣に立てるぐらい」

だから他人を巻き込む言い訳をする。冤罪や理不尽に立ち向かうと言う大層な理由にすげ替えている。

我ながら情けの無い事だと思う。同時に雫が改めて凄いとハジメは思った。

「だからって言うのも何だけど、僕は八重樫さんの事凄いつて思うよ。逃げずに自分自身を責められる君は、凄く強い人だよ。間違いない」  
雫がそうやって関係の無い事でも、手の届かない物であつても抱え込めるからこそ、頼りにする人間が多いのだろう。

それがどれだけ負担になろうと投げ出したりしない。正しく善人だ。ハジメとしては己にない物を持つている人だと感じる。

そして同時にこれは『抱え込む』事を是としている。それ故に雫は苦しんでいると言うのに、ハジメはその苦しみさえも肯定してしまっている。

それに気がついたのか、雫はキョトンとする。そして一変、その口

から笑い声が漏れ出した。

「ふふっ…普通落ち込んでる人間に、そんな事言うかしら？」

「でも八重樫さんはどう言おうがそういう性分だろうし…あと個人的にそれが凄い事だつて認めて欲しかったつて言うのもある」

「…確かに抱えて生きるのにはやめられそうに無いわね、私は」

多少気分は晴れたのか、先程までよりも表情は明るい。

そしてついとばかりにハジメは片手を雫へと差し出して、微笑んだ。

「まあ、それでも耐え切れなかった時は…また相談してよ？」

愚痴ぐらいは聞ける技量はあるつもりだからさ」

「そう…それならまた頼む事になるかもしれないわね？」

「その時は歓迎するよ。いつもお世話になってるし、八重樫さんには幸せになって欲しいって思ってるから」

「…………それはやめておいた方が良いわよ、南雲君？」

「…………何が？」

雫がハジメと握手をしつつも、「あれ？もしかして南雲君つて光輝と同じタイプ？」と呟く。それに疑問符を浮かべるハジメ。

互いに何か釈然としない感じを残しつつ、己の部屋に戻ろうとしたその時だ。

廊下の奥から何かがやって来る。それはハジメにとつては物凄く見覚えがある人物で…そして猛スピードかつ雄叫びを上げてハジメへと迫っていた。

「見つけたぞー！小僧おおおおおおおおおおお！！」

「棟梁？！」

「え？あの人が南雲君の…」

ハジメがウオルペンのその様子に目を剥き、雫はハジメの師がこんなだとは思っていなかった様で意外そうに反応を示した。

だがまあウオルペンは意に返さない。ハジメの目の前で急停止し、そしてキラキラと目を輝かせて告げた。

「小僧！めでてえな！遂にお前に直接依頼だ！」

「えっ!? 本当ですか!!？」

「ちよ、直接依頼？」

直接依頼は本来ならば工房に仕事を受注する所を、更にその工房の職人個人へと依頼するシステムである。それが無い職人は二流という風潮もあり、ハジメは目を煌めかせる。

ウォルペンとしてもハジメは素行不良も無く、真面目かつ特異性のある職人である事から、評価されて嬉しいのだろう。先程までの爆進がそれを如実に示している。

「ああ、本当だ！ …まあ、場所的にかなり長期の依頼になるが…大丈夫か？」

「そりやあ勿論！ 折角の御指名ですし！」

断る筈も無い。今のハジメは「錬成師」見習い。失敗は恐ろしいがやはり経験は重要。にべもなく承諾する。

「重畳！ まず依頼主様は工房の顧客の一人だな。そいつが面白そうだからって推薦した結果だ。場所は湖畔の町、ウル。な、中々遠いだろ？」

「そうですね。移動はどうしましょう？」

「それに関してはアテがある。問題ねえ。…つてもお前も良く知ってるだろうがな」

「知ってる？」

何故だろう、警鐘がした。ウォルペンは確かに色々エクセントリックで危なっかしいが、流石に移動手段でおかしい物を出して来れる筈がない。しかし何故か脳裏で鳴っている。

「そりやあ当然だろ？ 何たって——」

「お久しぶりですね、南雲くん！ 先生は貴方が元気そうで嬉しいです。…あ、そういえば南雲くんには皆さんの事、紹介していませんでしたね。こちら神殿騎士のデビッドさんです。その後方にいられるのは同様に神殿騎士のチェイスさん、クリスさん、ジエイドさんです。優しい方々ですよ」

「…騎士、デビッドだ」

「…同じく、チェイスです」

「…クリスと言います」

「…ジエイドだ」

「ナグモハジメデス。ヨロシクオネガイシマス」

直接依頼出発当日、ハジメの前に立ち塞がるように立つ神殿騎士四名。彼らは愛子が言う「優しい人」とは全く無縁の鋭い視線をハジメにザクザクつとな。目が明らかに「変な動きしたら斬ったらア!!」と語っている。

流石に神殿騎士の殺意は凄まじい。ロボットみたいな話し方になつてしまった。

すると背後から親しみのある声が二つ。

「よう。どうせ向こうに着くまで暇なんだ。馬車の中で魔法議論しようぜ、南雲」

「…アンタら楽しそうね？ 楽しそうで何よりだけど。…ま、今日はよろしくね」

「あつ、うん。二人とも、よろしくね?」

清水と優花だ。二人は片手を上げてハジメに気楽に声を掛けてくる。知り合いがいると言うのは何ともありがたい話だ。ホツとする。

「…その向こう側からやって来る不信の視線さえ無ければの話だが。その視線は馬車の中から来ている物だ。そしてそこで座る残りの「愛ちゃん先生護衛隊」と名乗るクラスメイト達。菅原妙子、宮崎奈々、相川昇、仁村明人、玉井淳史の総勢5名だ。

彼らはデビッド達程顕著に威圧はしない。代わりにあるのは見定め姿勢。そして警戒心である。

まあ、ご覧の通りウォルペンの言っていた移動手段というのは「愛子ちゃん先生護衛隊」の活動に乗じるといふ物であった。どうやら偶々目的地が同じであったらしい。確かに彼等は揃いも揃って実力者達。ここまで安全な旅路はそうは無い。

しかし今はひたすらウォルペン棟梁が恨めしい。今回の行動が懇意からなるものであることは分かっている…いや、あの人だったら何

も考えずにやってるからもしれない。

いずれにせよ、親切な人間は一部いるが代わりに突き刺さる視線の鋭さが凄まじい事に変わりない。

果たして己はキッチンと直接依頼を済ませられるのか。そもそも仲良い子が一部しかいない修学旅行の班みたいな空気は如何すれば良いのか。ハジメは悶々とする。

だがハジメは、そして他の者達も知らない。

——この行き先で『使徒』が一人、堕ちる事となる事を。

——湖畔はその未来を覆い隠す様に、霧を立ち上らせていた。

## 閑話、拝啓前に進む君へ

僅かに時は巻き戻る。

ハジメのウル出発前日、王宮の寝室。その一角にて雫が呆れたような、そんな目をしていた。

目の前にいる相手は親友である香織だ。香織は何やら落ち込んでいる様だ。ベッドに身を投げ出し、枕に埋めた口からは啜り泣きの音が聞こえて来る。

一見すれば落ち込んでいる様子。そんな相手に冷たい視線を浴びせる雫は酷い様にも思える。

ただ雫は思うのだ、勝手にしろと。と、言うのも――

「うう…南雲くんに会いたいよお〜」

「…香織、それ今日何回言ってるか自覚ある?」

「? 五回ぐらい、かな?」

「ええそう。その二十倍よ、おおよそ。何ならもうちよつと多いわ」

「……………もしかして煩いかな?」

「漸く自覚してくれて、私は嬉しいわ」

——この調子である。

せいぜい十回程度ならば雫としても同情の余地はある。香織としてはハジメに迷惑を掛けたく無いという一心で接触を断っている訳だ。これまで突撃少女をして来た香織としては苦渋の決断そのもの。間違いなくストレスである。

その甲斐もあつてか光輝や檜山を中心とするアンチハジメ系列の人間がハジメに害をなす事が減って来ている。光輝の場合また別口で絡んでいる様だが、以前よりはマシだ。

ただ本人等からすればストレスなのは違い無い。雫の視点での推測だが、二人は両想いだ。しかもかなり純粋ピュアな。ただし本人等は未だ己の感情に答えを出せていない様だが…。一度密室に二人で閉じ込めた方が良いのでは?と、中学の頃から恋の成就を（ブレーキは掛けつつも）見守って来た身としては感じる。

まあ、そんな風に二人の関係性は非常に良い。それ故に周囲の目や

噂により近付く事すら出来ないとなれば鬱憤も溜まるだろう。

多少ならば声に出してしまいうのも仕方がないが：何度も聞いていれば気が滅入る。白い眼で見えてしまいうのも当然の結末と言えた。

ただ以前とは異なり、天性の突撃ぶりが悪い方向では改善されつつある香織。やはりハジメが己により被害を受けていたと言うのが大きかったのだろう。多少なり客観的視点を身につけ始めていた。

とは言え怪我をする人を見つければすぐ助けに行こうとするし、仲間のピンチにはその身を投げ出してまで動く。咄嗟の場面での突撃ぶりは未だ健在だ。

だからこそ今の雫の心境も察せし、ハジメに近づく事もセーブしているのだ。：最ももつと早い段階で気づいて欲しかったが。

取り敢えずボヤク事は雫に迷惑になると察した様だ。口を紡ぎ、ベッドに無言で転がっている。しかしやはりと言うべきか、抱かれた枕に込められた力は凄まじい。枕が苦しそうという感想を雫は生きて来て初めて感じた。

そこで雫は思い出した様に香織へと話し掛ける。

「そうそう、香織。南雲君：元気そうだったわよ？」

「…え、本当!？」

「ええ。：まあ光輝が南雲君相手にやらかしてね：そのお詫びをしに行っていたのよ」

「：光輝くんかあ」

ハジメのワードが出た途端香織のテンションが凄まじく急上昇。それに比例する様に上半身もベッドから起き上がった。

しかし光輝の話が出ると先程とは打って変わり、落ち込んだ顔を見せる香織。その上半身は徐々にベッドへと倒れていった。

光輝に関しては香織も雫も、ついでに言えば龍太郎も複雑な所だ。元々かなり親しい友人関係にあり、関わって来た日月も長い。

しかし迷宮でのハジメの決死行。それが三人と光輝の溝を作り出した。

「何で：光輝くん、嘘ついちゃったのかな？ 他の皆もだけれど：南雲くん、あんなに頑張ってたのに：」



「…そうね。私も今、正直光輝は冷静じゃない様に感じるわ。昔からそういう傾向はあったけれど…ここ最近は特に顕著ね」

天之河光輝は自身にとって都合の良い様に物事を解釈する事が多い。自己中心的とも呼べるそれは、本来ならば年齢を積むに連れて他人が離れていく、と言う形で誤った物として認識する事となる。

しかし香織、雫、龍太郎が一般よりも善性で義理を尊重した事。光輝自体にカリスマがあった事。何よりも光輝自身がその事実から目を背け続けた事。それらが組み合わさった事により、光輝がそれを認識する事は無かった。

結果、迷宮でのベヒモスからの逃亡戦後に光輝は暴走した。イシユタルの言葉を切っ掛けにして、迷宮でのハジメの行動を己にとって良い方向に解釈していったのだ。

当然ながらハジメの意思をすぐ側で聞いていた、香織や雫、龍太郎は光輝の解釈を否定した。そして今までに無い程壮絶な口喧嘩をする事となった。

だが結論として、その口論は噛み合う事すら無かった。

理由としては光輝と三人とでは思考の差異。三人がハジメのあの場での行動を『正しい行為』としているのに対し、光輝はそれを『傲慢な行為』として捉えていた。

光輝にとつて南雲ハジメは不要な敵役に気に入らない存在だ。光輝の活躍を奪い、身の程を知らない。

光輝はそんな思考であり、三人がそんな光輝の歪んだ思考を察せる筈もない。そして数時間通しても尚、決着がつく事は無かった。

現在この話は四人の間ではタブーとして扱われている。四人は所詮子供。恐れたのだ、これをきっかけとして完全に仲が破綻してしまふ事を。

出会って数ヶ月程度ならば絶交も視野に入っただろう。しかしそれを選択肢に入れるには一緒に過ごした時間が長過ぎた。それだけの時間があれば親しみも慈悲も湧いて出てくる。それに香織や雫、龍太郎は人との友好関係を中途半端に投げ出す事が出来るほど、利己的で無かった。

だからこそ香織も雫も、そんな風になっていた光輝を思い浮かべ、目を伏せる。静けさが二人の合間を駆け抜けた。

また光輝の言動もあり、今のハジメの状況は正しく絶体絶命という奴だ。

何せ教会、王国、そして勇者がハジメを罪人として扱っているのだ。あまり光輝との関わりを持たず、「王女の騎士」としてハジメを見ている城下町の人間を除いては、芳しく無い印象を持つ者が多い。

またハジメが無罪を獲得するには並では無い功績が必要だ。しかも残り四ヶ月程度という僅かな期間で、だ。

ハジメは『使徒』達と異なり、才能チートを持たない。

それに近い物としては異世界の考えや「言語理解」が挙げられるだろう。学問ではそれなりの功績を打ち出せるかもしれない。

だが『それなり』では駄目なのだ。それこそそれまでの常識を覆す様なレベルの発見で無ければ、無罪は認められない。

そもそも『使徒』は戦う為に呼ばれた存在。戦え無い存在と言うのは本来、『使徒』としては不出来。ましてや「裏切り者」とされたとなれば、学問で求められるレベルと言うのは自然と上がる。

更に言えばトータスには魔法学問は幾つもあるが、重要視はされていない。魔法において重要なのは理論よりもイメージや修練。それこそが現魔法界における常識である。魔法学問というのは本来ならば功績とはされ辛い分野である。

現在、知識だけでは無く武術も身に付けているハジメ。実際雫もついこの前ハジメを見た時、変わったと思わされた。重心の運び、位置取り、気配の感知能力、どれを取っても地球にいた頃のハジメとは別人。

だが所詮は凡夫の域を出ない。数多くいる王国騎士や神殿騎士、更に言えば『使徒』と比較すれば埋もれる、その程度の力だ。求められる様な突出した功績を得られる様な物では無い。

この様に雫が知る情報を並べて見てもハジメの逆転の兆しはほぼ見える事が無い。

そして期間内に功績が得られなかった場合、ハジメは真に人権を失

う。何せ【ハイリヒ王国】という宗教国家の中で、神を裏切る行為をしたと断定されるのだ。そんな人間に慈悲は与えられないだろう。（やっぱりそうと考えると考えると南雲君の味方を増やす事を先決にした方が良いわね。特に『使徒』のみんな。今は私と香織、龍太郎に園部さん、先生ぐらいしか居ないけれど…人数を増やして抗議すれば懲罰の減刑ぐらいは出来るかしら）

雫は最悪のケースを想定し、最善策を思考した。何せ相手が巨大。ある程度の譲歩は考えるべきだろう。

そう雫が考えた矢先だ。雫のそんな内心を見透かした様に言う。

「でもね、南雲くんだったら大丈夫だよ。きつとね、凄い事やってくれるから」

香織は先程までとは打って変わり、につこりと笑う。その笑顔は例えるならば満開の花。香織を見慣れている筈の雫も、思わず見惚れる程に香織の笑顔は眩しく、明るい。誰もが焦がれて止まない太陽のようだ。

そして雫は気がつく。香織はハジメをただ信じているのでは無いと。そんな物よりももつと強く、重い。ただハジメならばやってのけると当然の様に思っているのだ。

香織のそれは見方を変えれば何とも身勝手に我儘だ。逃げる事も、逸れる事も許さない楔となるだろう。される側としては酷く残酷な代物だ。

内心、雫はその相手であるハジメに同情して——でも、と思った。（でもきつと…彼はやってのけるのでしょうかね）

南雲ハジメと言う人間は不思議だ。彼には才能も、力も、何ならカリスマも足りない。ただの凡人だ。

持つ物は度胸と野望。一見すれば身の程知らずか愚者。業火に挑み、焼かれる鼠の様だ。

だが、それでもハジメの一挙一動は人々の脳裏に焼き付く。本来ならば不可能である前人未到<sup>ジャイアントキリング</sup>。それをやってのける、と思わされる。

それは香織や雫だけでは無いのだろう。メルドや優花、龍太郎にリアーナ。彼に協力する者達全員の総意に違いない。だからこそハジメへと手を貸そうとするのだ。

そして香織はハジメの輝きを初めて目に焼き付けた人間だ。誰よりも深く、鮮烈に。

今の香織はハジメに手を貸せない。何故ならば彼女の肩書きは【勇者】である光輝にも比肩する。

天職【聖女】は【神子】や【勇者】に並ぶ伝説級の代物だ。【神子】が『神の身体』、【勇者】が『神の矛』とされるのに対し、【聖女】は『神の錫杖』とされている。即ちそれは聖教教会における絶対的な価値を示している訳だ。

それ故に香織は光輝同様、『使徒』の中でも特に丁重に扱われている。何せ神に近い存在とされているのだ。どの様な事があるろうと穢すなどあり得ない。

そしてそれこそがハジメは冤罪を押し付けられた理由と言っても良いだろう。『使徒』の最底辺が【聖女】と親しいなどあつてはならないから。だからこそ香織はハジメに近づく事すら出来ない。

「でもちよつと、南雲くんって無茶しちゃう所あるから…雫ちゃんも南雲くんのこと見てあげてくれないかな？ 南雲くん、よくトラブルに巻き込まれるのに、自分の事軽視しがちだから」

先程と変わらぬ笑顔。しかし長年付き合ってきた雫だからこそ分かる。香織の笑顔の奥には寂しさが垣間見えた。

誰よりもハジメを信じていて、誰よりもハジメを想っている。だと言うのに手を貸す事も、応援する事も、傍にいる事さえ出来はしない。そんな無力感が香織にはあるのだろう。眉が八の字を描いていた。

その香織に雫は同情して、ある事を思いついた。明日に迫ったハジメの直接依頼の出発。それを思い出して、雫は頷く。

そして雫はその口を香織の耳へと近づけた。

雫が話し終わると、そこには先程以上に満面の笑みとなった香織がいたのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「——だからね、魔力収束って言うのは魔法陣とか導線ラインの無事を確かめる術としてはかなり重要なんだよ。確かに実践とかだったらあんまり意味は無いけど…でも魔法陣をより効率的に扱うなら覚えておいて損は無いと思うよ?」

「はー、なるほどな。あんなクソ地味な技術に何の意味があると思ってたが…魔法陣とセットの技術って訳か。そりゃ魔法メインで調べてる俺じゃ分からんわ」

『ピィー…ピィー!!』

「…アンタら、私を置いてけぼりにするのやめない?」

「ウツ! …ごめんね、園部さん」

「いや、別に俺ら悪くねえだろ。園部のおつむが悪いのが悪い」

「…(シユツ)」

「——あぶなあ!?!」

「次バカにして来たら殴るわよ、清水」

「石ころ投げて来んのはアウトじゃねえかなあ!?!」

『ピィ——!!!』

「手首のスナップだけだからセーフよ」

「【投擲師】のそれはアウトだろ!!」

『ピィ——!!』

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

そして現在、ハジメ達一行はウルの町へと馬車に乗って向かっている。馬車は三つ。そして組分けであぶれたハジメと清水、あと志願してやって来た優花が備品を乗せた馬車に乗っている形だ。

ハジメにとってはこの二人のみがまともに話せる相手だ。取り敢えず行きの旅には不自由が無さそうだと、とホツとしている。

まあ、こうして仲良く話している訳だが、ハジメには一つ気になっている物がある。

ハジメは片手で鞆を漁り、そして一冊の本を取り出した。タイトルは『ゴブリンでも分かる『錬成』のやり方』だ。色々突っ込みたくなるタイトルであるが、重要なのはそこでは無い。と言うのも、これは出発の直前に雫から渡された物なのだ。

『南雲君の旅が安全である事を願って…これを贈るわ』

とにこやかに渡されたのがこれである。本気で待ったを言い渡したかったが、雫は有無を言わさずハジメに渡しその場を去って行った。

だがハジメは昔、本の虫ならざる図書館の虫だった男。こんな物迷宮に行く前に読んでいる。案外わかりやすく、子供でも理解できそうな内容であった事を覚えている。

まあ、つまり雫にしてはあまりにミスチヨイスな本である訳だ。これにはハジメも頭を捻った。取り敢えず鞆に一度入れたが、改めて取り出しても意味が分からない。

そうして手に取っていると喧嘩していた優花と清水が反応する。

「だからな——ん？　南雲それどうしたんだ？　…ってか『錬成』の指南書か？　お前、仮にもプロだろ。そんなの未だに読んでんのか？」

「ご、ゴブリンにでも分かるって…何でこんなタイトルにしたのよ、作者？」

『ピイ？』

「僕も一回読んだ事あるんだけど…八重樫さんから貰ってね」

「八重樫…お前、変に美人と知り合いだよな？」

「清水、変態」

「何でそれだけで罵倒されなきゃなんねえんだよ!!!」

『ピイ——!!』

またもや喧嘩に行き着く二人。果たして仲良いのか悪いのか。

それは兎も角ハジメとしても気になるのでその本を開け、ページを捲る。すると途中、何かが挟まっていたのか馬車の床に何かが落ちる。

それは丁度三人の真ん中に落ち、全員がその正体を看破する。それは丁寧に封をされた便箋。即ち——

「…手紙？」

『ピイ？』

同時に三人と一匹、全員が同じ答えに行き着く。そしてそれにいの



「と、兎に角一旦止まりなさい、清水！」

「アガアアアア!!!」

『ピ——!!』

ハジメの動揺を元に嫉妬の化身と化した清水と、それを食い止めんとする優花。何だか悲しい怪物の様な断末魔が響くが、ハジメはそれを無視して備品の山へと駆け込んだ。そして二人が未だ取っ組み合いをしている事を確認するとその手紙を改めて確認する。

差出人にはやはり香織の名前が記されている。そして一番最初にはハジメの名前が記されていた。少なくともこれで渡し間違いの線は消えた。

同時に雫がハジメに本を渡して来たのも、これを渡す為のカモフラージュであると察した。周りにはあまり違和感に思われない程度に、そしてハジメには違和感を与える様、このプレゼントにしたのだろう。清水や優花は違和感を持ったが、ハジメと親しく無い人間ならば【無能】で通っている為、勝手に納得するだろう。その塩梅は流石だ。

そして出発前に渡して来たのは城よりも監視の目が少ないからだろう。つまり香織との繋がりを周囲から隠す為の配慮だ。今の馬車の様に教会による監視に穴が生じやすい。万が一手紙が見つかったとしても、本を渡した雫からの物と勘違いするだろう。

そこまで考えて香織からの手紙を自分に渡してくれた雫にハジメは心の中で土下座した。南雲家直伝の黄金率の土下座である。ハジメ的にこれが最大級の感謝である。

そして慎重に折られている手紙の一枚目を開ける。久方ぶりの香織からのメッセージに心躍らせているハジメがいる。少し深呼吸をしてから内容に目を通した。

『南雲くんへ』

この手紙を読んでもって事は雫ちゃんが本当に届けてくれたんだね。南雲くんの方は依頼の途中なのかな？ 本当におめでとう。南雲くんを指名して依頼が来てくれた事、自分の事みたい嬉しいよ』  
最初の方にはそんな事が書かれていた。恐らく雫がちよくちよく



ハジメの話を香織に伝えていたのだろうか。己には関係無いと言うのに純粹に喜んでくれる彼女を思い浮かべ、ハジメの顔から笑みが溢れた。

『やっぱり南雲くんはすごいよ。色んな事いっぱい努力して、全部出来る様になるなんて普通の人には出来ないよ。色んな人が嫌な事言ってくるのね？ やっぱり南雲くんは心が強い人だと私は思うよ。そんな南雲くんだからみんな手を貸してくれるんじゃないかな？ 私がそうだったんだから間違いないよ。それに城下町の人達とも仲良くなってるみたいだからね。もつともつと南雲くんはいろんな人に良く思ってる貰える様になるんだよ、きっと。：でも一番南雲くんを良く思ってるのは私だよ？ それだけは絶対だからね！』

：：というか割と褒めすぎである。嬉しくはあるが、同時に恥ずかしくて死にそうである。手紙を読んでいるだけだと言うのに顔が熱い。『普通の人には出来ない』とか『一番』とかフレーズが仰々しくて照れ臭いのだ。

まあその後も暫く怒涛の賞賛が書かれていたが、後々に他愛のない話へとシフトして行った。何気ない話だ。迷宮でベヒモスを倒したやら、最近ホルアドの冒険者とも仲良くしてるだとか、何か拝まれてるなどという特に意味も無い、そんな香織自身の最近の話。

それでもその一つ一つが香織らしい。かつての彼女と何ら変わらないそれらは懐かしさやら微笑ましさやらをハジメへと運ぶ。

『そう言えば最近城下町の方で園部ちゃんとかリイが南雲くんとは良くしてるって聞いたけど本当かな？ かな？』

：：ただしこの部分だけ短いというのに、恐ろしさが滲んでいる。果たしてそれは書いた本人の気迫が乗っているのだろうか。ハジメはそこだけは見ないふりをした。

だがそんな風に綴られている香織の手紙はかなりの量があったと言うのに、もう最後の一枚となった。気が付かなかったがいつもよりも読む速度が速かったようだ。その一枚に名残惜しきを感じつつも読む。

最後の手紙に書かれた文字数は意外にも少なかった。それに余計、

名残惜しさが膨らんだ。

『最後に、あの日の…南雲くんがもう一度約束してくれた日の事を書きます』

目を通すと、今までとは一転。丁寧な言葉で書かれていた。香織にとつてここが一番ハジメに伝えたい事なのかも知れない。そう思いハジメは意味も無いのに背筋を正し読む。

『まず、ありがとう。南雲くんがああやって言ってくれた事、本当に嬉しかった。あの時は自分の事が本当に嫌いになつてたけど…南雲くんのお陰でちよつと許せたよ。本当にありがとうね』

それを読んでハジメは安堵した。あの時の香織は本当に、生気が無かった。己を責め続けて…そして本当に折れてしまいそうな、壁越しから聴こえたのはそんな声だった。

一度外に出て元気になつたところを見たは良いが、その後もそうだとは限らない。だからこそハジメはその想定が杞憂になりそうで安堵した。

『それで南雲くんはいつか私と同じ所まで来てくれるって言ってくれたね。待ってるよ、絶対に。いつまでも何処までも』

そして再び香織は誓ってくれた。待っている。

己の中の炎が勢いを増した事が分かった。あまりにも単純だ。だがやはり自身にとつての風は彼女なのだ。そよ風が火が燃え上がる事を促す様に、彼女の一举一動に自分は決意をより強固にされる。

『だからね、私も今ここで誓うよ。南雲くんが私の所に来てくれるまでに…私も南雲くんを今度こそ守れるぐらい強くなるって』

そして香織は他ならぬハジメに宣誓する。あの日為せなかつた誓いを再び。

備品の隙間からは午後故に太陽と共に月が薄らと見える。太陽の光によつてその輝きは夜ほどでは無い。しかしそこに確かにある。

香織は一度決めれば強かだ。ならばもう折れる事は無いだろう。…とは言えハジメは一応男。今度は守られてばかりはごめんと僅かな矜持でそう思う。

するとその後一文、何か書かれている。それに目を通す。



いる。口早に嫉妬の言葉のマシニングンを放っている。そして枯れた筈の血の涙が再発していた。

一方の優花は何だか手紙を読み進めていく程に目が細められていく。しかも口にする言葉に感情が籠っていない。ただその顔は能面の様に無表情だ。

「…すみません、返してもらえますか？」

後悔先に立たず。己の先を考えない行動を反省しつつも、ハジメは敬語でそう言う。香織からの手紙はただ自分で読むだけでも恥ずかしいのだ。他人に見られたならば…恥ずかしいなんて物じゃない。

わなわな震えつつも、二人が持つ手紙に手を伸ばそうとして…瞬間、清水と優花はハジメから距離を取った。

「……………」

三者の間に静寂が流れる。二人はハジメに視線をやりつつも、手紙を読むという中々器用な事をやっている。というか他人の手紙を勝手に読むなや。

そしてギリギリと機を窺う三人。馬車の中でやる事では無いが…物が物だ。年齢的には学生、重大案件である。

全員の額に冷や汗が流れる。他でも無い緊張故の物。それが段々と流れ、やがて顎まで伝い滴ろうと膨らもうとして――

『ピィー!』

「どらっしやああ!! 手紙を返せええええええ!!」

「誰が寄越すかりア充裏切り者があ!!! 園部、パス!!」

「オツケー、清水! オーライ、オーライ!!」

「投げるな! キャッチするな! 読もうとするな! 返せ!」

「…だが断る!!」

『ピピッ!!』

「誤用だろ! それ!」

清水のペットである白鳩の鳴き声がゴングとなった。ハジメが体内魔力を循環させ、床を蹴る。接近職である優花は後回しにし、後衛タイプである清水を一先ず捕まえようとする。

しかし相手は『使徒』、そんなに甘くは無い。清水はこのままでは

手紙を取られると判断したのか、即時手紙をブーメランの様に園部へと投げた。優花はそれを見事な動体視力によりキャッチする。

こうして開幕した鬼ごっこ。最終的には全員が全員息を切らし、床に倒れていた所を様子を見に来た愛子が発見した。

その風景は馬鹿らしいが仲良さげで…まるで気の知れた友人の様であった、と愛子は後にそう評した。

…なお手紙は最終的にはハジメの手元へと戻ったとの事である。めでたしめでたし。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「今頃南雲くん、読んでくれてるかな？ 思った事全部書きちゃったけど、何て思ってくれるかな？」

「…香織。次書くときはちゃんと推敲した方が良いと思うわよ？」

「へ？ スイコウ？ 何で？」

「……………まあ、貴女が気にして無いなら別に良いけれど」

「??？」

## 7、月下脈動

湖畔の町【ウル】は大陸の中でも一二を争うほど水源が豊かな街である。それ故に稲作が最も豊富。稲作以外でも食糧生産量はトップクラスだ。

その様に実質人族の食糧庫と言える場所である【ウル】は他の文明も豊かである。

例えば魔物による被害を防ぐ為に多く保有される準アーティファクトや大規模な冒険者ギルドだ。そして冒険者の生活に潤いを与える為、宿や街並みも質が実に良い。また観光面としても大河による船のツアーなどが挙げられるだろう。その様な水運により物資の輸送も潤滑に行われている。

つまりは都市程では無いとは言え、その生活はかなり良い。少なくとも生活者に不自由を感じさせ無い程度にはレベルが高い。

しかしそんな【ウル】の発展は二の次である。王国騎士達は兎も角、『使徒』たる日本人高校生達にとってはそんな事どうでも良い。

そう、【ウル】で豊かなのは稲作なのだ。すなわち…米である。

言わずもがなトータスの主食は小麦によるパンやら麺類である。魚類などは魔法による冷凍があるため、金さえ積めば王都でも刺身にして食える。だが…米は非常に珍しいのだ。それこそ…王都であっても『食』として根付いていない程には。

だが【ウル】では米による食生活がメインだ。そしてそれに連なる料理も非常に豊富である。モドキではあるがカレーやら丼物、チャーハンに近い物もある。

まあ王都でも滅多に食えない米。そして日本人として『米』への執着と言う物はやはり持ち合わせている。結果――

『おかわり!!』

「かしこまりました。こちらニルシツシル（異世界版カレー）、九人前となります」

まず【ウル】に着いた瞬間、一行は久々の米料理に舌鼓を打つ事となった。生徒は兎も角、愛子先生までもが元気に店主に声を上げてい

る。

——やはりお米！ お米は全てを解決する！

「……………まあ、旨いな」

「……………そうですね」

「……………だな」

「……………ああ」

まあそんな日本人のシンパシーが異世界人に分かろう筈もない。デビッド達、神殿騎士四名の背中は何処と無く寂しそうだつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『使徒』念願の米。それに皆、食が進む。スプーンを持つ手が残像を出す程にスツルスル。

だがしかし、唯一『使徒』の中でハジメだけはあまり食が進んでいない。見ると周りよりおかわりペースが遅い。折角の米だと言うのに、まだ一杯目。年頃の高校生である事も考えると、まだまだ食べ足りないだろう。だと言うのにスプーンで掬い上げた米は僅かだ。

果たしてその理由は何か。

馬車酔いして胃が細くなっているから？ ——違う。

ニルシツシルの味が日本のカレーとは程遠かつたから？ ——違う。町の人々の視線が疑念を孕んでいて、何となく食べ辛いから？ ——

——違う。

隣のテーブルにいる神殿騎士達が放つ威プレッシャー圧が怖いから？ ——それもあるにはあるが、違う。

では何が理由か。それはハジメの両サイドを見ていただければ御理解して頂けるだろう。

「で？ 肝心のリア裏切り者充サマは白崎さんと何処まで行かれたのでしょうか？ A？ B？ もしやC？」

『ピ。ピイ。く。く。？』

「いや。違うよ、清水くん。白崎さんとはそんな関係じゃ——」

「へえー。そんな関係じゃ無いのに南雲つてば手紙貰ってデレデレしてたんだ。私の料理にそんな反応しない癖に」

「お、落ち着いて…」

「落ち着いてますが？」

「ヒエ」

『ピィ』

右に座る清水がめつちやくちや嫌味を含んだ質問をハジメに投げ掛ければ、左サイドにいる優花が冷ややかなジト目を放つ。これがまあ、怖い。他の理由が些細な事になる程に、ハジメの胃を痛めつけてくる。

と言うか両者共にこの依頼でハジメが混ざるまで、コミュニケーションを取った事が無かったと聞いていたのだが…息がピッタリだ。阿吽の呼吸でハジメの冷や汗を量産しに来る。

何故こんな事になっているのか。それはハジメの鞆に入っていた一通の手紙が原因である。

雫がハジメに出発直前に工夫を凝らし手渡してくれたのだが…その内容と言うのが香織が書いた物だったのだ。

香織がハジメの憧憬である事や、その色々凄まじい内容によりそれはもう心がピヨンピヨンしたハジメ。ここまでは良かった。嬉しかったし。

しかし興奮により寝転がっている隙に、あろう事か二人が内容を読んではまったのだ。その結果清水は愛に飢えている為、嫉妬の化身に進化。優花は謎の圧力を帯び出したのだ。

何とか手紙を取り戻す事は出来たが…二人の様子は「ウル」に到着した後でも戻る事は無かった。そして今の現状がある、と言った過程となっている。

ハジメ的には清水は兎も角、優花が何故怒っているのかも分からない。また清水の方は恐らくハジメと香織がそういう関係だと勘違いしているのだろう。一応、違うと言っているのだが、清水は聞く耳を持つつもりが無いらしい。

結果、ハジメのテーブルは隣に二人がいるだけで、向かいには誰も居ない。他のテーブルに避難したらしい。正しい判断だ、畜生め。

なお愛子先生は「どうしたんですか!？」と近付こうとしてくれたの



だが：神殿騎士がハジメに近づく事を許さなかった。そのまま連行され、現在別テールで心配そうにハジメの方をチラチラ見ている。

あ！ あいこがぬけだそうとした！

しかししざんねん！ でびつどがさきまわりした！

どうやら救いの主が現れる事は無いらしい。つまりハジメ一人でこの問題を解決するしか無い。

ハジメはここ最近学んだ事を一つ一つ思い返して行く。戦闘法、駆け引き、魔法学、*「錬成」*、魔法陣、顧客の情報：、何も今の状況で役立つ気がしない。冷や汗がダラダラと流れる。気分はまるで下弦の陸。そんな事を僕に言われても、である。

そんな風にハジメが無量空処状態になっていると、両サイド二名は同時に溜息を吐いた。

「ま：別にいつか。応援してるわよ、南雲」

「俺はまだ問い詰めた所だが：依頼もあるしな。後回しにするか」  
「どうやら自身で自己解決してくれたらしい。清水に関しては後回しであるが、一先ずは解決。ハジメはホツと胸を撫で下ろした。」

『ピィピッ』

「うおっ。ふふっ、ありがとうピーちゃん」

するとそんなハジメの肩に一羽の鳩が乗り、ハジメの頬を「良かったな」とでも言う様に撫でた。見た目は掌サイズの小さな白鳩、実際には魔物の一種である。名をピナ。清水のペットである。

と言うのも清水の*「闇魔法」*による魔物の洗脳、その記念すべき成功例一体目の個体だ。そのステータスは魔物と思えない程に非力。王都での飼育を問題無いとされる程である。

戦力にはほぼならない個体なのだが、気に入ったのだろうか。清水は洗脳して一ヶ月半程ずっとピナを飼育している。最近では肩に乗せて歩き回っており、城下町や図書館では「鳩の人」と呼ばれている程だ。

：ただこのピナ、洗脳されている気配が全くしない。普通に自立行

動をする上に、物凄く感情豊かである。洗脳されていればこうもならないだろう。発動者である清水さえも「コイツめっちゃやくちや勝手に動くんだよな…」と呟くのだ。普通に懐いてる説が強くなりつつある。

とは言え可愛らしい事には変わりない。頬を撫でてくれるピナにハジメはほわあと和んだ。

「…ピナ、ハウス」

『！・パイ!!』

すると自分のペットが他人に懐いている様子が入らなかったのか。清水は人差し指を差し出し、ピナに声をかける。ピナはそれに素早く反応。ハジメから直ぐに離れ、清水の指に止まった。

「…懐いてるね」

「…懐いてるわね」

「その穏やかな目、ヤメロ」

『パイ!』

やはり普通に懐いているようにしか見えない。ハジメと優花の意見は物の見事に合致した。微笑ましいやら何やら、菩薩の様な顔で清水の方を見た。

清水は口振りでは嫌そうだが、やはり小動物に勝てる人間はいないらしい。僅かに口角が上がっている。つまりは中途半端にニヤニヤしていた。

ただ恥ずかしいのは間違い無いようだ。菩薩スマイルをする二人の気を逸らす為、清水は別の話題を提示する。

「ゴホンッ。そういや俺らの方は先生の護衛だが…南雲の仕事は何なんだ？ 一応【錬成師】の仕事らしいけど、具体的にどう言う事やるつもりだ？」

「うん？ そうだなあ、単純に言えば準アーティファクトとかの定期メンテナンスみたいな物かな。普通だったら他の王宮工房の仕事らしいんだけどね。ウル出身の顧客の人が推薦してくれたらしくて、僕に直接依頼が来たって形だね」

「何で南雲の…ウォルペン工房は普通依頼されないのよ？ 技術レベ

ルは高いのよね？」

「……………先輩方がちよつと独特でね？」

「あ——」

『ピ——』

納得顔で頷く二人と一匹。実は二人も別々にはあるが、一度工房に訪れた事があるのだ。その際にまあ、色々あったのだ。二人が言葉を濁らせながらも頷いた。

部屋の一角が危うく全焼仕掛けたりとか、男装した女が女に刺される現場を見たりだとか、借金取りから逃げる為窓から飛び降りる職人だとか…本当に色々あったのだ。二人の目が死んでいるが、本当に色々…あったのだ。

その点、ハジメは世間の評価を除けば普通に腕も性格も良い職人だ。ウオルペン工房の職人に慣れ切った顧客が過敏に評価してしまうのも致し方の無い話である。

「あとそれ以外にも余裕があれば技術を教えたりとかかなあ。期限は十日間。みんなの任務と期間は一緒だよ」

「じゃあ帰る時も同じ頃合いね。…何事もトラブルが無ければ、だらうけど」

「園部さん？ 何で僕の方を見てくるのさ？」

「そりゃあオメーがトラブル大魔人だからじゃねえか？」

「いや…僕そんなにトラブル起こしては——」

「異世界来て一ヶ月で三度ベッド送りになった人間が何か言ってるわね？」

「話題に困った事が人生で一度も無さそうな野郎が何を抜かすか」

『ピッピッ！』

「君達、僕を弄る時だけ息ぴったりになるのやめない？」

実際問題、ここ最近は暇な時が無いハジメ。トラブルが少ない方といえは嘘になるだろう。本人としては不本意であるが、一級トラブル建築士である事は認めねばならない。

とは言え不本意は不本意。結託する二人に目尻を上げるハジメ。しかし二人はどこ吹く風。清水はそっぽ向くし、優花は舌を出して

ウインクする。

「まあ、しかし。それなら俺らと南雲は別行動か…や、別に俺は何とも無いけどよ」

『ピッ…』

「そもそも私らの任務は愛子ちゃん先生の護衛だしね。仕方が無い話よね」

「だね。…ちよつと寂しいけど頑張るよ」「御安心ください!!」うわっ!!?」

馬車での大はしやぎなどもあり、短期間であつたにも関わらず馴染んできた三人組。しかし任務は当然ながら別であり、一抹の寂しさがあつた——所を非常に元気な声が遮つた。

その声の主は『使徒』ならば、かの高校の人間にならば誰にでも分かる。誰も座つていなかった席にちよこんと座り込む人物がいた。

「ふふふつ。南雲くんも清水くんもドンドン仲良くなっていますね。園部さんも楽しそうですし、先生何よりです!」

「「愛子(ちゃん) 先生!!」」

『ピ。ピ。ピイ!!』

ぴよこぴよこと擬音を付けたくなる様に身じろぎするのは、我らが畑山愛子である。大人だと言うのにちんまりとした身長、保護欲をそそらせる可愛らしさ。しかし同時に強い精神力と包容力を持ち合わせており、『使徒』全員の心強い味方だ。

天職は【作農師】、非戦闘職であるがその希少性は【勇者】や【聖女】に比肩する程。その力は世界の食糧問題を改新するまでに偉大。人々を飢えから救い上げたその力により、彼女は【豊穰の女神】、神の代行者として信仰を集めるまでに至っている。

なお、愛子に付き従っている神殿騎士はただの護衛では無い。愛子の無自覚攻略により、ガチ惚れした『男』達である。愛子の為ならば信仰を捨てるも辞さないと言うのだから、その覚悟がどれほどかは理解して貰えるだろう。

そんな凄いのには尊敬よりも可愛らしさが勝る謎。ハジメと清水は言わないが、他の生徒は基本的に「愛子ちゃん先生」呼

びである。本当に何故だろうか。

「ところで南雲くんは今回一人で行動するつもりだそうで…ダメですよ？ 君も子供なんです。君はもう少し他人に頼るといふ事を覚えなさいといけませんよ？」

「は、はい…え？ でもこの依頼は僕の単独任務ですし…」

「ええ、依頼の方はこの場において君以上の適性者はいません。しっかりと勉強した事を出し切ってくださいね」

愛子の背後にいつの間やら立っていた神殿騎士達。彼等の顔は何やら不服に染まっている。…特にその内の1人。確かチェイス、と言っただろうか？ 彼の顔が凄く険しい。

何やら警鐘が鳴っている。それも以前のウォルペンの時よりも半端なく。

「ですが君に万が一があつてはなりません。また…一人で心細いと言うのもあるでしょうし、もう少し自身の交流関係を大切にして欲しいとも思います。なので…園部さん、清水くん。君達には私で無く、南雲くんと一緒に行動して欲しいのです。勿論お二人の意思に任せますが…如何ですか？」

「い、いいんですか、愛子ちゃん先生？ 私はその、そうしたいですけど…」

「…まあ、俺もその方が都合がいいな。ストレスもねえし」  
『ピッピッ!!』

「では決まりですね。お二人とも、よろしくお願いしますね？」

——あれ？ 良い方向に進んでる？

この展開はかなり有難い。二人は『使徒』故、かなり強い。しかもコミュニケーションも他のメンバーより断然取れる。ハジメの護衛としては正にSSR。頭の中で虹色演出が光ってらあ。

だと言うのに止まらぬ警鐘。むしろその音量は増している。好転する状況と反比例するが如く、ハジメの冷や汗は噴き出していた。

すると愛子ちゃん先生は笑顔でもう一つ、言葉を付け加える。警鐘の音量はマックスだ！

「あと生徒だけ、と言うわけには行きません。なので君達とは別に…

チエイスさんにも南雲くんの護衛をお願いしています！」

「「…え、？」」

『…ピ、ッ？』

三人と一匹の時間が止まる。特にピナの出した鳴き声が鶏の断末魔の様だった。言葉にせずとも分かる。三人は思ったのだ、「何て？」と。

しかしリアルに巻き戻しボタンは無い。愛子の背後から一人、そう先程めちやくちや不服そうにしていた神殿騎士がハジメに歩み寄る。彼は重々しくただ一言。

「……………宜しくお願い致します、ナグモ様」

「ハ、H A I…」

握手を交わす両者。それにニッコニコする愛子先生。しかしハジメは、愛子のそれが思い遣りによる物だとしても思うのだ。

——やってくれたな、と。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

と、まあこの日はその様な顔合わせだけで終わった。明日からは至近距離でチエイスに目を付けられるのか…と憂鬱ではあるが、メリツトも多い。

何せ神殿騎士だ。神殿騎士団はエリートの中のエリート。人族トップクラスの实力者が集う、そんな場所だ。流石にメルドクラスは神殿騎士団にも数人いるか程度だろうが…それでも安全性が高くなったのは変わりない。

あとめちやくちや頼み込んだらワンチャン試合無いかなども思う。もうハジメの思考は訓練でいっぱいだ。多分ハローマン軍曹に頭がやられてしまっている。

そしてそれを如実に示す様に、今ハジメはシャドーによる訓練を行なっていた。幻視する相手はメルド団長だ。未だに傷一つさえも付けられない彼をイメージする。

ナイフ、魔力循環、〃錬成〃、体術…何もかもを用いてもなお、メルドとの差は大きい。こうやってのシャドーでもなお、想像上のメルドはいつの間にか己から一本をとっている。

側から見ればナイフを振り回して、勝手に倒れているだけの滑稽な姿に過ぎない。それに明日からは直接依頼の仕事だ。体をそれに備えなければならぬのは分かっている。

ただ焦燥がある。自分はこのままで良いのか。まだ出来る事が有るのでは無いか。四ヶ月後に手に入れなければならない功績、それに向ける確かな焦燥が、ハジメにはあった。

だからこそ休まねばならないこの状況でハジメは一人、外で戦闘訓練などしている。体の排熱により出る汗が、地面を斑に彩っていく。

「——フツ！ シツ！ ハアツ!!」

横薙ぎ、回し蹴り、突き。無駄を省かれた数々の攻撃。しかしそれでも尚、胸に宿る不安を拭う事は出来ない。むしろ幻想のメルドにすら一撃を加えられない事により、益々と大きくなるばかりだ。

それを何とか振り切ろうと後ろに下がるメルドの追撃に掛かる。右手に持つナイフを投擲し、それを避けたメルドの足を払おうとして

「あら、申し訳ありません。お邪魔してしまったでしょうか？」

——そのナイフを片手で受け止める誰かがいた。

「いっつ!!?」

シャドーに熱中し、人陰に全く気が付かなかったハジメは急停止。結果現れた人物のすぐ目の前で止まった。

そしてその勢いのまま両足を折り曲げ、掌を膝の前に突く。そしてその手の甲に額を合わせ、ハジメは在らん限りの声を出した。

「すみませんでしたあ!!」

即ち土下座。南雲家直伝のハジメの超必殺である。人にナイフを投げるなどと言う、失礼極まりないどころか殺しに掛かっている行動。謝罪の他あるまい。

ナイフが飛んできたかと思えば、その次にはスライディング土下座。現れた人物が啞然としたのか、何も声がない。

とは言え土下座は根気だ。相手から許されるまでは頭を下げるな

どもつての外。真摯に心からの謝罪を続けなければならぬ。

10秒程時間が過ぎただろうか。くすくすと心地の良い笑い声がハジメの耳に届いた。

「怪我也無かったですし良いですよ。顔を上げてください」

「で、ですけど殺しに掛かっている様な物ですし…」

「あら？　ワザとだったのですか？」

「いえ！　それは無いです！」

「でしたら許します。顔を上げてください。いつまでもそうされてしまつては此方が困りますから」

「で、でしたら…」

予想外にあっさりと許された事を意外に感じつつも顔を上げる。するとそこには――月があつた。

厳密には少女の背景を飾る形で満月。その光は冷たくも華やかに夜を照らしている。

そしてその光に少女の黄金の髪が、真紅の瞳が淡く輝く。夜闇に溶ける見た目とは真逆の妖しい美貌。美という概念を象徴するかの様なプロポーション。月の光から寵愛を受けているかの様な神秘的な雰囲気。淡い光に照らされ、漆黒のドレスを纏う彼女は月下美人そのもの。

そして顔を見上げたハジメを少女はふふつと柔和で意地悪な笑みで歓迎した。

「…ようやく、顔を見せて下さいましたね？」

ごくりと息を呑む。万人が見惚れてやまぬであろうその人。しかしハジメは何故か現実からの乖離を感じた。

何故？　そう聞かれても分からない。ただ一つ分かる事は――少女は己にとつての『未知』である。初対面ならば当然の、それだけは分かった。

そして少女は笑みを携えて、こう言う。

「私の名前は…ティア。ただのティアです。どうぞお見知りおきを」

少女は恭しくも、その手をハジメへと差し出すのであつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆



そして別の場所では、歌が辺り一面に響いていた。獣にとってそれは精神を蝕み、謳う者にとつては力に他ならない。

歌が森に、空に、彼方に響く。雄だろうが雌だろうが、子供だろうが老ぼれだろうが関係無い。歌は獣達を傀儡へと塗り替えていった。謳う者はただ一人。フードで顔を隠し、アメジスト紫水晶の魔力光を立ち上らせる。暗くも輝き、闇くも眩い。あまりにも矛盾したそれは、夜の闇をより幻想的に彩った。

そんな彼の後ろで何者かが、ニヤリと笑う。そして謳う者のその歌の凄まじさへの感嘆か、その瞳は濡れていた。

「嗚呼、素晴らしい！ やはり君の力は…我が国でこそ十全に輝くだろう！」

見ればその男は人族では無い。黒色の肌に長細い耳、そして夜でも尚赤と分かるその髪。

謳うその男以外がその容貌を見たならば…怯え恐怖するだろう。何故ならばその外見は魔族のそれに他ならないのだから。

だが謳う彼は怯える事などありはしない。何故ならば——魔族は己の味方なのだから。

「さあ…さあつ！ その力でこの塵の様にいる人族を！ そしてかの忌々しき女を！ 討ち滅ぼしてくれ！」

「…うつせえよ」

歌が終わる。そして紫水晶の魔力が止み、彼は踵を返す。今日の仕事は終わった。あとは適当に休ませてもらう、と手を振り言う。それに魔族は反論する様子も無い。笑みも変わらぬまま、頷いた。

興奮冷め止まぬ様子で魔族は己が主である魔王、そして魔神への祝福の言葉を告げる。

「嗚呼、我らがいと尊き王よ！ 我らが信じるべき神よ！ どうぞご覧あれ！」

月は低高度に有るのか、紅い。それはまるでこれから来る吉凶を示している様で…魔族は殊更声を張り上げた。

「我らが魔の『使徒』！ 我らが魔の【勇者】！ 清水幸利が齎す…人族の破滅の第一歩をつ！」

その魔人の焦点は何処か別次元の何かを見ているかの様に、散らばっていた。

——かくして月光の下、物語は次の段階へ進む。

——いずれ辿り着くであろうその終着点は…神さえも知らぬ所であつた。

## 8、理に従え

「南雲ー？ 仕事の時間よ、とつとと出てきなさい」  
『ピーー！ ピーー！』

「まるでオカンみてえだな、園部」

「…年増に見えるって言いたいのかしら？」

「アツイエ、違います。違いますのでどうかその木串をしまっていた  
だけないでしようか？」

『ピエツ！ ピーー!!』

「…仕方ないわね」

一晩の休息を挟み、直接依頼当日の朝。ハジメに当てられた寝室の前には優花と清水がいた。依頼開始の時間まで残りわずかだと言うのにハジメが起きないのだ。「あいつにしては寝坊は珍しいな」と思いつつ、二人は部屋まで起こしに来た、と言うわけだ。

ただドアをノックしても、これだけ大きい声で話そうと起きる気配がしない。ハジメはどちらかと言えば睡眠が浅い方であり、これだけ物音が鳴っていれば嫌でも起きる。

二人、特に優花の脳裏に思い浮かぶのはかつての迷宮で満身創痍になった姿。あの時ハジメが気絶した際の全く反応しない状態。

それを思うと気が気で無くなり、優花はドアノブに手を掛けようとした――が。

「――ヤバイ！ 遅れたっ!!」

「ぶぎやっ!!」

「危なっ!!」

『ピピッ!』

瞬間扉が勢いよく開く。清水は紙一重で避けたが、開けようとドアに一層近づいた優花にはクリーンヒット。情け無い悲鳴を上げて、ドアに潰された。

だがハジメからすればそこはドアの死角。気づいた様子も無く、目の前にいた清水の姿を捉えた。

「あれ、清水くん？ もしかして起こしに来てくれたの？ ごめんご

めん」

『…ピ、ピ』

「ぶふっ…お、おう。南雲、オマエ…最高だな」

「うん？ どうしたの？」

吐き出しながらサムズアップする清水。余程腹筋にダメージがいつているのか、腹を抱えてプルプルしている有り様だ。まるで状況をわかっていないハジメはそれに首を傾けた。

すると次の途端、二人の間を何かを通り過ぎる！ 音速をも超えたそれは風を斬る音を鳴らし、奥の壁に深くめり込んだ！

後を追う様にその正体を確認すれば、それは木串。一体どれ程の速度で投擲すれば同質の壁などに減り込むのか…二人は震える。

するとそれは反対側から弩級の殺意。二人は油を刺し忘れたアンドロイドの様にギギギツとその方向へと顔を向けた。すると…。

「そ、園部さん…」

『ピエツ…』

「あら、おはよう南雲？ 随分なご挨拶じゃない。清水も御機嫌そうで何よりよ。…ねえ？」

そちらには普段見ないような満面の笑顔の優花がいた。その顔は扉のタツクルにより赤くなっている。が、それに反比例する様に優花は笑顔。その笑顔はとても魅力的で、怖い。

何故ならばその目の奥は全くと言ってても良いほど笑っていないのだ。ついでに言えば笑顔の端には青筋が見て取れる。ついでに言えば優花が両手に展開する木串で、その怒りはより顕著に感じられるだろう。

二人の脳内でアイディアロールのダイスはクリティカル。そして直感する。

(ヤベエ…キレてる)

ついでにSAN値チエックも行われる。両者成功で1のSAN値減少だ。女子高校生とは言え『使徒』の前衛職。そのマジギレなど…非戦闘職と後衛職に止められる筈はない。

——なので。

「園部！ 俺は悪くねえ！ 全部南雲のせいだ！ 南雲の事は攻撃しても、俺の事は攻撃しないでください！」

「ちよっ!? 清水くん!? 羽交締めして僕を園部さんに差し出すのヤメロオ!!! 多分僕が悪いんだろうけどヤメロオオ!!!」

『ピピピピピ！ ピピピピ!!』

「悪いな、南雲。悲しいけどこれ戦争なのよね」

「こんな一方的な戦争があつてたまるかあ!!」

清水は早かった。ハジメの後方に周り、捉えるとすぐに園部の方へ的になる様に向けた。見事に友人を煮るなり焼くなり好きにしろ、状態である。

一応加害者本人であるハジメは抵抗はするものの、何処か諦めた様子。詳しい状況は理解していないものの、ある程度は喰らう覚悟をしている様だ。まあ、抵抗はしているが。

それに対して優花はその木串を持った両手を躊躇いも無く振るつた。その木串はグネグネと奇妙な軌跡を描き、襲いかかった。

「あいたあ!!」

『ピッ!!』

——ただし、双方どちらも満遍なくだが。

「何でだ!? 俺悪くねえだろ！」

「笑ったじゃない」

「ソレダケツ!」

「私から見ればどっちもギルティよ。さあ、この怨み…ハラサデオクベキカツ！」

「ヤベエ！ バーサークモードだ！ 逃げるぞ、南雲!!」

「了解ッ!!」

『ピー!!』

「あつこら！ ピナ、勝手に一人だけ逃げんな!!」

「それで…御三人共、何故始まる前からその様にお疲れなのですか？」

「……ちよつと心当たりが無いです」

『…………ピピ』

「そんな馬鹿な」

5分後、そこにはちよつと服が穴だらけになっているハジメと清水。そしてバーサークモード後に息を切らした優花がチエイスの前で倒れていた。

まあこの年になって喧嘩ではしやぎました、何て言うのは恥ずかしい。その結果、三人は返事をこの様に照らし合わせた訳だ。

「…………まあ、いいです。早く仕事の方に向かいましょう」

「はーい」

『ピピピ』

このあまりにも子供らしい返事にチエイスは真顔になる。が、チエイスは大人である。余計な散策は避け、取り敢えず先を促す。三人はそれにしれつと従った。

此処から今回の作業場までにはそれなりに距離がある。その為か、バーサークモードが終わった優花がハジメに問いかけて来る。

「そういや、何で今日アンタ起きるの遅かったのよ？ いつもだったらい日か沈んでる時間に起きてる癖に」

「あ——、いや何でも無いよ？ 特訓してたら、寝るのが遅くなっただけだから」

「ふーん。ま、仕事に支障は来さないようにしなさいよね」

「うん、気を付けるよ」

そうして話しながら…思い返す。昨夜出会った彼女と、その会話を。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「私の名前は…ティア。ただのティアです。どうぞお見知りおきを」

そう言つてティアはハジメへとその手を差し出す。倒れている己への配慮だろうか？ 自然に差し出された手をハジメは掴もうとした。

が、その前にティアはその手を引いた。掴む気でいたハジメが僅かにバランスを崩す。見上げるとティアはくすくすと悪戯が成功した

子供の様に笑っていた。

「あの…」

「ふふっ、ごめんなさい。ついつい可愛らしかったもので…悪戯したくなつちやつたんです。あっ、ナイフお返ししますね？」

そう言うと、ティアが手に取っている様に見えるそのナイフを手放すと、一人でにハジメの方へと引き寄せられた。魔法かとも思ったが、現代魔法にこの様な物は存在しない。ならば技能の一種か、とハジメは脳裏で結論付けた。

手に取ったナイフの様子は万全だ。今も尚その刀身は冷たいままだ。

何故かそれにえも言えぬ違和感を抱きつつも、視線をティアへとやる。独特の雰囲気纏う少女だ。美貌が人間離れしている事や、纏う神秘的な雰囲気からしてそう。世界から彼女だけが乖離している様に感じる。

だがその理由を見つけ出せないでいると、彼女が不思議そうに問いかけて来る。

「それにしても貴方…記憶違いで無ければ『錬成』を使っていませんでしたか？　つまりは『錬成師』だと思っっているのですが…何故、戦闘訓練を？」

「えーつと…まあ、追いつきたい人がいると言うか何と言うか…」

「あらっ、色事ですか？　青いですねー、非常に可愛い」

「い、色事…ま、まあ。婉曲して言えばそうなるのか？　そんな所です」

見た目は年端もいかない少女だ。精々小学生後半代と言った所だろうか。ちんまりとしていて幼い。

ただ言葉遣いの一つ一つが丁寧で、上品。常に余裕を持ち合わせていて、容姿とは真逆の大人らしい妖艶な印象を受ける。

まあ、この世界はファンタジーなのだからもしかしたらこう言う種族もいるのかもしれない。そう思う事にした。

「それにしても…貴方の『錬成』は非常にレベルが高い。造形能力や感知能力も中々ですが、何よりも…洗練されていますね。戦闘に組み

入れる為、かなり特訓されたのでしようね。見ていれば分かります」  
「あ、ありがとうございます」

少女の評価に思わず頭を下げるハジメ。見た目はシユールな絵面となつてゐるだろうが、ティアは多分年上。素直に褒められるのが筋だろう。

「ただ、それだけに惜しい。貴方ならば更に先へ行ける」

「…………それはどう言う、事ですか？ ティアさん」

更に先へ、それは今のハジメにとって聞き逃せない話だ。現在、成長を急いでいる傾向が強いハジメ。故にハジメの反応が一転した。

一方でティアは変わらぬ、しかし少しばかり深まった笑みをハジメに向ける。何が嬉しかったのか。ふふふつと声を出している。

「フフツ、何でもありませんよ。ですがこれは慰めでも無い、本音です。貴方にはもつともつと可能性がある。その強固な意思があれば…焦らずとも前人未到のその場所まで辿り着けます」

あつて数秒の、言わば赤の他人。しかし彼女は親指と人差し指で作つた円から覗きながらそう言う。何かを見通している、そんな確信がハジメの中であつた。

「とは言え私が答えを言うのも無粋と言うもの。それから先は貴方が見つけて下さい…とは言え何もしないと云うのは心地が悪いですね」  
そう言うと彼女は空中から何かを出現させ、それをハジメへと飛ばした。異次元過ぎる魔法に目を剥きつつも、飛んで来たそれを掴み…  
驚く。

「えっ!? これっ!?」

「念話石、一応アーティファクトに値するらしいですよ？ 上げます」

「い、一応!! いやだってこれ、幻の…」

「? まだ何か欲しいですか? 3種? アーティファクト3種欲しいのですか? 3種…いやしんぼめ!! ですがちよつとお待ちを」

「いや! 有り難いです! もうこの念話石だけで胸がはち切れそうです! というか何でそのネタ知ってるんですか!」

「そうですか、そうですか(ムフーツ)」

あつさりと国宝級のアーティファクトを渡された事によりハジメ



は冷や汗ダラダラだ。それも二つセットだ。【錬成師】としては阿鼻叫喚ものである。

同時にティアは大人びているが…かなりの変人だとハジメは確信した。行動がまるで読めないし、何よりも何処かズレている。こんなアーティファクトをアツサリと渡す辺り、ほぼ確定だ。あと何故奇妙な冒険なセリフを知っているのか…。

まあ、彼女はハジメに何かを与えられて満足した様だ。心無しか肌がツヤツヤしている。

「フフフツ、私は満たされました。本当に可愛らしい反応しますね…えーっと」

「あ、南雲ハジメです。宜しくお願いします、ティアさん」

「ほほう、ハジメくん…ハジメ…ハーちゃんですか。不束者ですが宜しくお願いします」

「なんでさ」

「あ。あと私の事はティアさんでは無く、ティアでお願いします」

「なんでさ」

距離の詰め方まで独特だ。会って間もない人間の姿か？　これが？

困惑の渦の中いるハジメだが、ティアはウキウキだ。ハジメに詰め寄り名前を呼ばそうとしてくる。

ただまあ、ハジメとしても恥ずかしさやらがあるし…あと呼びたい人は別にいる訳で…。

「むう、中々呼んでくれませんか。やはり強情というか…やりますね」「なにがさ」

「まあ、今回は諦めましょう。ですが顔は覚えました。…あ、あとその念話石、深紅の魔法陣に魔力通せば私の念話石に繋がりますので是非」

「これ…やっぱり国宝級…」

「それではハーちゃん！　また逢いましょう！」

「えーっと…さようなら」

ビューンツ！と空を滑空し、消えていくティア。あまりにその速度

は速く、凄まじい。

低高度なのか赤い月が空に輝く中、ハジメはぼうつとして空を見て  
咳く。

「…嵐みたいな人だったな」

色々疲れたが…得る物も多かった。己には先があると云う慰め、空  
間を歪め空を滑空する魔法の可能性…そして何よりも念話石という  
国宝級アーティファクト。

彼女と会うまでの焦りは吹き飛んだ。しかし代わりに別の興奮が  
ハジメを埋め尽くした。【錬成師】という研究欲の塊が、ハジメを支配  
した。

…という訳で、

「よし…自室に戻って調べよう」

結果、ハジメは時間ギリギリまでアーティファクトの研究に没頭し  
続けた。そして本当にギリギリで我に帰り、ハジメは扉の前に優花が  
いる事も知らず、扉を勢いよく開ける事となるのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

さて、そんな直接依頼。基本的には気心の知れたメンバーとなつて  
いるのだが…一人だけ例外がいる。愛子が送ってきたボディーガー  
ド兼神殿騎士、チエイスである。

神殿騎士はハジメにとつて基本天敵である。何故ならば彼等は  
人々よりもより一層、信仰深い。その為教会が【裏切り者】とするハ  
ジメには一目合えば敵意、次には罵倒とする者が多い。

罵詈雑言には慣れたとは言え、神経を削らない訳ではない。相手を  
していれば疲れるのは当然の話だ。

「さて、南雲くん。私は他の神殿騎士と同様、君を疑っています。愛子  
の教え子と言えど、君まで許すとはいきません」

優花と清水はこれにムツと顔を顰めたが、ハジメは慣れた様に頷  
く。むしろ悪意が込められていない以上、ハジメにとつて幾分かマシ  
な方である。

「ですが同時に君を守る、というのは愛子の指示です。この依頼の間、  
君の護衛という任務はしっかりと果たします。…とは言え愛子の教

え子という立場に恥じぬ様、仕事はしっかりと遂行して下さい」

これにこそハジメは意外そうに目を開いた。てつきりプライドを優先し、ハジメの監視のみを敢行すると思っていた。が、思いの外彼はボディーガードという任を果たそうとしてくれているらしい。

まあ言っている事を要すれば「仕事はするけどちやんと成果出さないと疑惑増すぞ」という事なのだろうが。それを言ってくれているだけマシである。

恐らく他の神殿騎士ならばこれ程ビジネスライクな関係性は築けなかつただろう。まず疑って来て、仕事にならなかつたのが目に見えるようだ。思いの外、愛子先生は適任の人物を護衛にしてくれたらしい。

「それじゃあ…しつかりと働かないと、ですな」

「ええ。宜しくお願ひしますよ」

そう言つてハジメは不敵に笑う。チエイスはそんなハジメを一瞥し、直ぐに前を見る。

気付けば今回の仕事場は目の前だ。【ウル】の市役所、そのホールの扉だ。此処にこの町の【錬成師】達が集められている。ハジメが行う任務は主に二つ。一つは準アーティファクト等の修繕、そしてもう一つは…【錬成師】達への現地指導だ。

一つ目はまだ良い。単なる技術だ。一定以上の知識と技量があれどどうとでもなる任務に他ならない。問題は…二つ目だ。

ハジメが扉を開ける。そこには数多くの【錬成師】が屯<sup>たむろ</sup>している。そしてハジメの姿を捉えると、顔を直ぐに顰めた。

ハジメの顔は、名は有名だ。『使徒』唯一の【裏切り者】。それは王都から遠い此処でも変わらない。むしろ遠い此処だからこそその偏見は益々肥大している。

ハジメに突き刺さるのは数多くの疑いの視線。デマに加えて、見た目が子供である事、この世界にいる時間の短さが起因しているのだろう。誰もがハジメを信頼する気が無い。

何と言つても【錬成師】と言う界限程、実力社会の世界は無い。ウオルペンの様な奇人変人を加える程では無いが、貴族階級という身分が

ほぼ通用しない世界だ。

何せ技量が物を言う世界だ。それこそ実力差がそれこそ目に見えるて分かる。そして下手な物を市場に流せば伝聞により客が寄り付かなくなる。

だからこそ今の所マイナスイメージしかないハジメに対し、「錬成師」全員がその眼光を鋭くする。その多くが筋骨隆々としている事からその迫力は凄まじい。

やがてその内の一人がハジメの方に歩み寄ってくる。その場の誰もが彼に敬意を払っている。そこから彼がこの町の「錬成師」、そのトップクラスだろうと判断できる。

「ようこそ王都の【錬成師】サマ、湖畔の町【ウル】へ。オレの名はジェルノールサルマナだ。よろしく…とでも言うと思つたかい？ 若僧」

黒い肌、はみ出さんばかりの筋肉、スキンヘッドに威圧的な三角眼。それが敵意をまるで隠さず現れる。少年少女が見れば失禁物で無かろうか。

「この町のナワバリはオレ達のもんだ。今まで送られて来た偉そうな奴等も全員向こうに追い返してやったよ。大した実力もねえクセに偉ぶりやがってな。…だからなお一層テメエなんかを信頼できねえ」

ハジメは知らぬ話であるがこの町の依頼はこれまで数多くの工房に託されて来た。どれも王都の有名な工房だ。——にも関わらず成功率はあまりにも低い。

何故か。理由は明解。「ウル」の町はかなりのレベルを誇る【錬成師】の村でもあるからだ。「ウル」は以前説明した様にかなり文明を発展させている。農作しかり、料理しかり、街並みも…そして「錬成」の技術も。

他の工房に回っていた【ウル】の直接依頼がハジメに来たのも偶然では無い。他の工房が失敗続きだったからこそ、超実力派のウォルペン工房に白羽の矢が立ったのだ。

「ただ実力がねえと見た目だけで判断すんのは【錬成師】として御法度だ。そこに神殿騎士がいるもんだしな。多少は腕があるんだろう。ま、どれほどかは知らねえが」

とは言え外聞のみで判断する人物でも無いらしい。先ほども言ったが【錬成師】と言う界限程、実力社会の世界は無い。教会の評価だろうが、歳だろうが、性別だろうが、それを超える要素などこの社会では存在しない。

「だからこそ——【錬成師】の理<sup>ル</sup>…作った物でアンタがどうかを決めよう」

「…判定はどうするんですか？」

「そりゃ此処にいる全員だ。殆どがオレ側だが…そんなぐらいの環境で勝てないなら指導役としては要らんだろう」

「確かに、ごもつともで」

そう、ハジメは単に認められるだけではないけない。指導役として来ている以上、その腕が【ウル】の誰よりも格上という証明をせねばならない。

勝負内容の理不尽など関係無い。そんな圧倒的な技術が、ハジメには今求められている。

ふと後ろを見れば友人二人は少し不機嫌だ。これ程のアウエーを友人<sup>ハジメ</sup>に向けられているからだろうか。そんな風に思いやってくれる仲間がいる事は、本当に今のハジメにとっては有り難い。

一方でチエイスは…見ているだけ、否此処でハジメを見極めるつもりだろう。

チエイスはハジメ同様理解しているのだ。こんな所で潰される程度<sup>チエイス</sup>の力ならば四ヶ月後に迫る判決までに功績を残す事など不可能だと。

だからだろうか。いつの間にかハジメは微笑んでいた。数多くの【錬成師】が睨みを効かせる中、何も恐れていない証左を無自覚に見せる。

「なら…勝たせて貰いますよ、ジェルノさん」

「馬鹿みてえに肝が据わってんじゃねえかよ…若僧がよお？」

力には力で応える。【ウル】の町に於ける第一の試練。ハジメは躊躇う事なく、その試練を開始した。

## 9、消失

「ウル」の職人とハジメが「錬成」の腕比べを始める一方で、愛子はその技能を用いての作物の促進を行っていた。土地の地力を上げ、作物の実りを一段と大きくする、正しく神の真技。

そんな彼女の護衛を務めるのは神殿騎士と『使徒』。ただ愛子は女神同然の存在。村の者は敬う事はあれど、害することなどありはしない。どちらかという愛子に近づき過ぎるのを防ぐことが護衛のメインとも言えた。

それ以外としては魔物や万が一の異常事態イレギュラーだろう。何せ「ウル」という土地は実りの豊富さ故に獣害・虫害と言う物が酷い。それに対応するために発展したのがギルドであり、「錬成」の技術。

ただ：この町に来てからというもの、一度たりとも魔物は姿を現していない。

そこで町の人々から話を聞いてみたりもした。しかしその内容はあまり芳しくない物では無かった。

「この時期だと北上してきた魔物が襲いかかってくるんだけど：子供を安心して外に出せるから有り難さはあるけれど不安ね」

「女神様が来てからかねえ：魔物がうんともすんとも言いやしねえんだ。そのせいで強い魔物にビビって出てこなかった害虫どもが顔出しやがる！ 商売上がったんだよ！」

「魔物がいねえからギルドに来る依頼も少ねえってもんさ。地味な採集系しかねえから、ランクが上がらえな」

近年、魔物のスタンピードは多々として見られる。だが：逆にここまで静寂を見せる事は非常に珍しい。喜ばしくはあるが：こう言った静寂の後には嵐が付き物。

(何も：無ければ良いがな)

騎士達は脳裏に僅かな警鐘を鳴らした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「それではお二人共：準備は宜しいでしょうか」

一方ではハジメと「ウル」の棟梁、ジェルノが鉱石に手を触れ、準

備していた。後は号令さえ響けば二人は「錬成」を開始するだろう。二人が触れる鉱石は古物の残骸と呼ばれる特殊な鉱石だ。要は昔に存在したアーティファクト、それが何らかの理由で砕けた物、その欠片だ。

砕けたアーティファクトは魔法陣などを起動できない為、アーティファクトとしての役割を終える事となる。だがその欠片、古物の残骸を使う事でまた別の形でその役割を担う事ができる。

古物の残骸はそれ単体のみでアーティファクトとしての権能を使用する事は出来ない。しかしかつてのアーティファクトのその能力、それを保有している。だからこそ「錬成師」が再びこの古物の残骸に魔法陣を刻み込む事で、再びアーティファクトとしての形を作り直すのだ。

古物の残骸を使用可能な状態にする事は実質的にアーティファクトの修繕と同義。現存の「錬成師」にとっては最難関とも言える技術だ。

何せ、ただでさえ困難と呼ばれる魔法陣の刻印。それを鉱石に込められた力に合わせねばならないのだ。鉱石に対する的確な「鑑定」、それに見合った魔法陣を選び取る「魔法陣学」、更にはそれを正確に刻み込む「錬成」の「技量」。それら全てが求められる。

だからこそ二人はこれで競い合う事を選んだ。これならば「錬成師」としての優劣がハッキリとする、そう考えた上での判断だ。

再現するアーティファクトは単純に言えば照明。「光球」が付与されている鉱石にその魔法陣を刻み、利用できるように直す。単純ではあるがその実、かなり困難である。

何せ求められるのは『実用度の高さ』、『完成速度』、『特異性』と多岐に渡る。他にも幾つかあるだろうが、求められるのは兎も角これだ。最後の『特異性』は指導役であるハジメだからこそ、特に求められる事となるだろう。

審判役はチエイヌだ。彼は「ウル」側の人間でなく、且つハジメに思い入れがある訳でも無い。他の者達よりも公平に見られる人物だ。チエイヌがハジメとジェルノの前で直立している。一瞬たりとも

二人から視線を逃す事は無いだろう。鷹のように鋭い瞳が其れを如実に示している。

「オレは完璧だ。この若造はどうか知らんが」

「大丈夫ですよ？ 準備は出来てます」

「そうか、それを言い訳にすんなよ？」

「はははっ、そんなみみっちい事しませんよ」

「…なら良い。とっととやろうぜ」

両者の間に火花が散る。と言うよりもジェルノが一方的にハジメを目の敵にしている形だ。ハジメの一言一句に生意気だ、と言わんばかりに顔を顰める。

一方のハジメはまるで何も気負っていないかの様だ。この後を左右する様な競争。だと言うのに、恐ろしい程に落ち着いている。余裕。ハジメを見ればその言葉がどうしてもチラつくだろう。現にジェルノはその態度に益々怒りを募らせていた。

周囲には沢山のギャラリイがいる。「ウル」の【錬成師】達はジェルノを応援し、時にはハジメにヤジを飛ばす。完全アウエーである。

ただし友人である、優花と清水はちやっかり最前列を取っていた。優花が「南雲、勝ちなさいー！」と叫び、清水が行く末を黙って見守っている。

(負ける訳には…行かないなあ)

今更ながら呑気にハジメはその事実を再確認する。負ければ功績がどうのこうのなど言ってられないだろう。四ヶ月後に罰を受けてバッドエンド直行だ。

それにハジメはウォルペン工房の代表としてここに来ている。ウォルペン工房は実力だけで成立している工房。その代表が他の【錬成師】に負けたとあっては面子に泥を塗る事になるだろう。

ただ、今はそんな事よりも…一人に格好悪い所を見せたく無いと言うのが一番強い感情だろう。ハジメにも見栄はある。最近ちよつと復活した矜持が、<sup>プライド</sup>そう思わせる。

「それでは…参ります」

手袋の魔法陣に魔力を込める、その準備をする。体内魔力を手へと



流し、直前で堰き止める。本来なら詠唱が無ければ、人が出来ぬ体内魔力の操作。ハジメが何故か会得したそれを、今存分に活用する。

思考はクリアだ。目の前の古物の残骸を見て、大凡の完成形を幻視する。魔法陣も頭の中に入っている。：速さ重視ならあれを使おうか。

「始めえっ!!」

「『錬成』 えええ!!」

そんな思考を刹那の間で繰り返して。やがてチエイスの声が木霊した。同時に叫ぶはジェルノの鍵言。彼の掌から魔力光が溢れ、古物の残骸に魔法陣を描いて行く。

「——『錬成』」

一方のハジメもまた鍵言を呟く。小さく、しかし確かに。その声は明らかな存在感を放って、周囲へと響き渡った。

ハジメの蒼い魔力光が鉱石を覆う。彼の魔力は無駄に光を放たず、されど鮮烈さを感じさせる。

だが僅か数秒だろうか。蒼い光は直ぐに消えた。その魔力光を幕にして現れた古物の残骸は：形を明らかに変えていた。

そしてハジメは掌を掲げて言う。

「よし、終わりました」

「……は？」

審判役のチエイスも、対戦者のジェルノも、周囲の【錬成師】も。誰もが事態を理解出来ず、硬直する。十秒にも満たぬ作業時間。ジェルノは魔法陣の一陣目を刻み終えた所だ。目にも止まらぬ速度、と言えるだろう。

魔力光が晴れた先にあったのはランタンの様な形をした何かだ。掴みやすい形をした取手、従来のそれよりも小さく書かれた魔法陣、そしてその魔法陣を守る様に付けられた檻。少なくとも物の数秒で変形できる様な作業量では無かった。

誰もが目を点にする中、ハジメは復元したアーティファクトを摘み、魔法陣に魔力を込める。

すると数秒前まで古物の残骸であったそれが、確かな光を放つ。

古物の残骸に込められていた「光球」の魔法が、しつかりと発動している証拠だ。

慌ててチェイスがハジメからそれを受け取り、魔力を込める。すると先程同様、それは光を放った。間違いない、アーティファクトとして起動している。

「あ、ありえん！ 幾ら何でも速過ぎる！ 一体何を——」  
「そうですね…『非部分的錬成法』ってご存知ですか？ それを使っただんです」

「ひ、『非部分的錬成法』だど!? ば、馬鹿なありえねえ！ こんなガキが!!」

ハジメのあまりの「錬成」速度に驚愕を隠せぬジェルノはハジメにそのタネを尋ねた。そしてハジメがあっけからんと答えると、ジェルノや周囲の【錬成師】達はざわめき始めた。

「ひびぶんてきれんせーほう？ 何が凄いのよ、それ？」

「さあ？ お前程馬鹿では無いが、俺も「錬成」の分野には明るくねえからな」

「そんなに木串欲しいの？」

「アイアムノットドM…」

『『非部分的錬成法』ですか…やりますね』

『知っているのか！ 雷電!!』

ただその何が凄いのか、優花や清水は全くついていけない。ぽかーんとした様子で、頭を捻っている。

すると二人の横にいたチェイスが感心した様子で頷く。そしてその技術を知らぬ二人に解説役と言わんばかりに適切な説明を始める。

二人は「審判役の筈だったのいつの間にかここに…」とある意味気が気で無かったが、解説は有難いので黙って聞く事にした。

「本来「錬成」と言う魔法は加工を行う際、部分毎に分けて作業を行います。何せ魔法とは言え、加工を行うのは己自身。一箇所に集中してベストな形へと変えて次へとして行くのが通常の方法です。皆様も何かしらの模型等を作る際にはパーツごとに作って行くでしょう。それが普通です」

そう言われて二人は粘土で像を作るイメージを浮かべた。確かに手で細かい部分を作る際には一箇所一箇所丁寧に作るだろう。それが『錬成』でも同じなのだろうと理解できた。

「ですが『非部分的錬成法』は文字通り全体を一度に整形して行く方法です。技術としてもですが、並列的な思考プロセスや正確な設計能力等が求められる為、『錬成師』の中でも実力者しかやりたがりません。何せこれらの労力に対して、メリットが完成速度のみとあまりにも少ない」

粘土を全体的にこねて、像を作るイメージをする。…無理だ。手で考えているからかも知れないが、自分達ではふにやふにやの像しか作れないだろう。

アイツヤツベ、マジヤツベと心の中で思っていると、さらにチエイヌが解説をしてくれる。親切丁寧である。

「ましてや古物の残骸フラグメントの復元は慎重を期す作業。それで『非部分的錬成法』を用いるなど…正気の沙汰ではありません。流星はかのウォルペン工房の【錬成師】、という所でしょうか」

「ウォルペン工房…」

「あそこ…かあ…」

『ピ——』

「ええ、あそこです」

あそこあんなだけと凄いなだな、と二人が遠い目をする。チエイヌも分かるよ、と言わんばかりに頷いた。神殿騎士もウォルペン工房には迷惑かけられているのだ、仕方がない。

そんな風に妙な形で三人が納得していると、再現されたアーティファクトに寄ってかかっていた【錬成師】の内一人が我大将首を得たりとばかりに声を上げた。

「待て！ この魔法陣、起動式と基本五式しか無いぞ！ 一般人用だと言われているのに、この五式だけでは実用性に欠けるのでは無いかな!?」

「確かにそうだ！ 光属性初級魔法とは言え、適性を持たぬ者も多い。少なくとも拡散率・収束率や抵抗度の式は書くべきだ！」

「速度は特筆すべきだが…やはりそういった知識はまだまだと言うべきか…」

彼の声を聞いて他の者もまたハジメに詰め寄る。年端もいかぬ若造に負けたく無い、という矜持故の発言の数々だろう。

適性を持たぬ者はその分、魔法陣に書かれる式を多く書かねばならない。それは【錬成師】にとっては常識だ。ある程度の適性がある者ならば基本五式で構わないが…案外適性を持つ者は希少なのだ。確かにそれだけならば実用性に欠けるだろう。

速度では負けたが実用性ならば…という彼等の声が聞こえて来る様だ。外間も関係なく、彼等はハジメに詰問する。それに対するハジメは…ただ一つの事実を告げた。

「あの…書いてますよ、他の式も」

「「「…は？」「」」」

改めて彼等はハジメが作ったアーティファクトを確認する。しかし魔法陣はどう見ても起動式と基本五式のみだ。何処にあると言うのか。

しかし思い返せば、確かに「錬成」以外に適性を全く持たぬハジメが起動できていたのだ。他の式も刻まれて居なければ辻褄が合わない。

「すみません、実用性重視だったので小型化したくて…『立体魔法陣』にしてるんです。他の式は基本五式の下にあります」

「「「……………下？」「」」」

そう言われて【錬成師】達は一同に「鑑定」を始めた。すると間もなく彼等は目を開いた。

「こ、鉱石の中に魔法陣が!？」

「しかも…それが表面の魔法陣と連結している、のか?」

「適性がある者は表面の魔法陣のみを…そうで無い者は更に下の魔法陣にも体内魔力を流すのか! こ、これは…」

『立体魔法陣』と呼ばれるそれは、縦に魔法陣を並べ連結された物を指す。本来ならば魔法陣を連結する場合、基本魔法陣の周囲に更に書く事になる。その為魔法陣が陣取る面積はどうしても広くなってしまう

う。

しかし『立体魔法陣』の場合は奥行きこそ必要だが、面積はかなり小さくなる。その為小型化に向いており、ハジメが言う様に持ち運びが容易にし易い形となるのだ。

「こ、こんな技術…一体何処で!? 何処で習ったんですか!？」

「あ、敬語になったわね」

「何か目がキラキラしてんぞ、あのオッサン」

「【錬成師】という生物は得てしてあの様な生態をしているのですね…」

『ピィ、ピピ』

耐えられねえ!とばかりに尋ねるジェルノ。それに若干引く優花清水チエイスのトリオ。それとは別にハジメは慣れた様子で説明を始める。

「まあ、知らなくても無理は無いです。王都で最近生まれた技術ですし。…というよりもウチの工房の先輩が見つけた技術なんです。ちよつとコツは必要ですけど…慣れたら便利ですよ?」

「…「お、おお…神よ」…」

「ついに崇め出したな…」

「傍目から見たらヤベー奴よ」

「いえ、傍目から見ずとも思考が常軌を逸して居るか?」

「おっ、そうだな」

『ピィ…』

職人達が先程までの敵意を霧散させ、平伏している。目が怖かったジェルノさんも「お見それいたしやした! ハジメの旦那ア!!」と土下座している。ヤの付く方々みたいだ。絵面が酷い。

最初からこれである。その日の作業が終わり、晩飯をハジメが食べようとした頃には…

「ハジメ殿、次にこちらのはどうでしょうか!？」 某が三日三晩頭を悩ませて導き出し、更に一週間で形にした濾過用準アーティファクトで

すぞー！」

「そうですね…干渉力、射程、属性の三連式魔法陣まではスムーズに発動できると思われれます。特に魔法陣の組み合わせのレベルはかなり高いです。ただその次の範囲指定の術式で少し雑さが見られます。容器内全部を指定してしまうと容器内の空気も範囲対象としてしまいます。そうなるとうるさかな間隔ですがエラーが発生します。こうなるとこの準アーティファクト自体に少しずつですが綻びが生じます。多分、このエラーがあるかないで準アーティファクトの寿命が二年三年程度は違うでしょう。なので範囲指定を水そのものだけにしておいてエラーが起こらない様対策しましょう。また魔力吸収は予めプログラムしているようですが、水の量に合わせて魔力吸収量を決めるプログラムにした方が無駄が無くなります。こちらがそのプログラムの参考資料となると思われますので、是非とも参考にして下さい」

「は、ハジメ氏!? これ、全部ハジメ氏が書かれたのですか!？」

「僕の研究日誌の一つです。僕の主観に基づいて書かれていますので、あくまでも参考程度でお願いします。ああ、あと魔法陣が少し不均一です。魔法陣は出来るだけ均一な空洞を作れる様に意識してください。難しいかと思われれますが、それをするしなないでは魔力効率が雲泥の差です」

「なるほど…ちなみにナグモ様が一番注意しているのは何処になるのですかな?」

「造形は後から仕込む魔法陣や利用方法に合わせなければならぬのでよく考えて設計してください。次に素材は性質によつてはマイナスの影響を及ぼしかねませんので厳選に厳選を重ねてください。魔法陣は準アーティファクトにおけるシステムを組み立てる必要要素です。必ず気を抜かないでください。魔法陣の陣そのものは先ほど言ったように、失敗すると魔力の無駄が発生します。準アーティファクトの利用者は魔法の適性が低い人間が主ですから、利用者には負担をかける真似は出来ません。油断は禁物です」

「…えーっと、つまりはどういうことでしょうか?」

「全部大切です。楽できる場所なんてありません。全霊を掛けてくだ

やい」

「「「Yes, sir!!!」」」

この有様であつた。

兎も角ハジメは認められた。職人という者は技術が全て。ウォルペン工房とか言う技術の宝箱みてえな場所から来たハジメの一言一句に目をキラキラ。最初の反骨精神は何処に行った、という有様である。

「あ、この枝豆モドキうめえ…」

「こつちのモツ煮つぽいのも良いわよ」

「此方のリニエールも如何ですか？ 美味しいですよ、御二人」

「…何その料理？」

『プレイ…』

バーの隅では草臥れた様子の優花、清水、チエイスがいた。三人で晩飯を共有して楽しく食べている。ただしそのハイライトはとつくの昔に死んでいた。

まあ、それも仕方が無い。興奮した【錬成師】達に「離れてくださいーい」をやつたのだ。どつからその力が出て来た、とばかりに『使徒』越えのパワーを出してきたのだ。当然疲れる。

何なら全員ホルスタインみてえな感じのムツチムチの我儘ボデイなのだ。押し寄せてくる筋肉の津波と興奮した錬成師馬鹿どもの声。三人の神経は摩擦して居た。

そんな訳で三人はハジメとは離れた距離にいた。心無しか心の距離が縮んだ気がする。吊り橋効果みたいな物だろうか？ 親しい友人みたいな感覚が『使徒』二名と神殿騎士の間で築かれていた。

すると【錬成師】の鯨波に変化が生じる。ハジメが何かを言っている様子だ。

「もう夜も遅いですし、皆さんの明日の作業に支障が出たら技術の伝達も出来ません。そろそろ寝ませんか？」

「ですが！ 正直我々試したい事いっぱい、興奮して寝れませんぞ！」

「すみませんがハジメの旦那あ。帰つたとしても俺自身、鉦物弄りす

る絵面しか思い浮かばねえです。他の奴らも同様でしょう。だつたらここで旦那の話を聞いた方が建設的に思え——」

「そうですか、残念です。明日の作業では準アーティファクトが主です。知識だけでなく体でも覚えられるので、そちらに集中していただきたかったのですが…」

「——よっしゃあ！ 俺は寝る！ 健康第一！ 早寝早起きだ！ お前らはどんちゃん騒ぎしていいぞ！ そしたら俺が明日旦那とマンツーマンだあ!!」

「ずるいですぞ、親方ア！ 我々もベッドに飛び込めエ!!」

「「うおおおおお!!」」

ハジメの周りの肉壁達が急に店の扉へと雪崩れ込んだ。ズドドドドツとけたたましい音が鳴り響いてコンマ数秒、そこにはハジメのみがいた。きつと今頃【ウル】の【錬成師】等は全員己の部屋で熟睡している事だろう。切り替えが凄まじい。

そして漸く解放されたハジメは一度屈伸すると、清水達の方へとやって来た。

「今日の分の仕事は終わったよ。園部さんも清水くんもお疲れ。チェイスさんも有難うございました」

「ん、南雲もお疲れ様。このモツ煮っぱいの美味いわよ。ちよつといる。」

「うん、お腹減ってるし欲しいな。有難う」

「おー、お互い大変だったな。褒美だ、この枝豆モドキをやろう」

「はは〜っ。謹んで頂戴致します…あ、うん美味しい」

今日のハジメの仕事量は膨大な一言だ。故に優花も清水も労いの言葉を投げ掛ける。ついでに己のご飯を別の更に盛り付け、ハジメへと渡した。

一方でチェイスは一度気まずそうに目を逸らし…やはりハジメへと向き直した。真っ直ぐとハジメを見据え、口を開く。

「…お見事でした、南雲殿。正直貴方がここまでの腕を持っているとは思って居ませんでした」

「あれ？ やけにあっさり認めてくれますね？」



「少なくとも愛子の教え子としては相応しい、と認めざるを得ませんでしたので。それなりの敬意は払いますとも」

「そうですね。なら良かったです」

そう言われると実感できる。一步だけだとしても彼女に近づけていると。今までの修練に価値があつたと思える。

そしてやはりチエイスは実力主義的な部分が強いらしい。他の神殿騎士三人よりもハジメに対しての忌避感という物が少ない。他のメンバーならば認めない、とムキになっていただろう事が容易に想像できるので尚更だ。

「う、うえええええええん!!!」

そうして話しているとふと外から鳴き声が響いて来た。幼い少女の物だ。

余程の人間不信でなければ流石に反応せざるを得ない。真つ先にハジメと優花が外へと飛び出し、そして清水とチエイスがそれに続く様に駆けた。

飯屋から十メートル程先だろうか。声色と遜色のない幼女が泣きじやくっている。それを静止しようと母親が叱りつけているが、尚更泣き声は強くなるばかりだった。

話を聞くとどうやら、少女が大切に持って居たぬいぐるみを無くしてしまったらしい。しかも今日少女は森を散策して居たらしい。最近森に魔物が居ないとはいえ、流石に夜は危険だ。

その為明日にしようとして母親が言ったのだ。しかしそこで少女が駄々をこねてしまい、結果この現状との事だ。

「確かにこの夜の中探すのはなあ…」

「魔物が出てもね…」

【ウル】の町は魔物が多い方に該当する。特に人間が寝静まった夜に活動する個体が多い。その為夜の中動くのは成人であろうと危険視される。

もし森の中でなく、町の中が範囲だったならば魔物避けのアーティファクトが起動している為危険性は少なかつた。だが外となれば対策が少ない。

そのためハジメと優花も説得に回ろうとした。が、ここで説得以外の手を使おうとする者がいた。

「なあ、君。それどの辺りに落としか分かるか？」

「…おにいちゃん、とりにいつてくれるの？」

「場所を言ってくれ。何とかはする」

「えーっとね…」

清水は屈んで少女と視線を合わせる。清水の対応に希望を持ったのか、泣くのを止め、ぬいぐるみを落とす前の出来事などを少女はたどたどしくも述べて行く。清水はそれにちよつとおざなりさは見せつつも、真剣に頷く。

「なるほどな…ついでに聞く。それって君でも片手で持てるか？」

「う、うん。ミツニーちゃんはすぐかかるいよ」

「何だそのギリギリな名前は…まあ良い。それなら…ちよつと待っててくれ。この鳩さんが何とかしてくれるんだ」

話を聞き終わると清水は己の肩に留まっているピナに話しかけ始めた。

「ピナ、すまんが仕事だ。後でエサはやるから…そうだ、取りに行ってくれるか？」

『ピピッ!!』

ピナは清水の問い掛けに高らかな鳴き声を上げた。そして翼を広げて、空へと飛ぶ。体躯の小ささに反して、その羽ばたきは力強くかつ速い。あつという間に見えなくなってしまった。

そして暫くするとピナは帰って来た。その足にしつかりとネズミのぬいぐるみを掴みながら。

少女は己のぬいぐるみが帰ってきた事やピナという可愛らしい白鳩に夢中だ。泣き止むどころか、より一層元氣そうだ。

「ハトさんすごいねー!! ぬいぐるみありがとー!」

『ピピッ!』

「おにいちゃんもありがとー!」

「お、おう」

そして少女はぶんぶんと手を振る。彼女のお母さんも清水へとペ

こぺことお辞儀をして、帰っていく。ピナはその翼をバサバサと鳴らしながら振り、清水は照れ臭そうにそっぽ向いた。

あまりこう言った純粹な感謝に慣れていないのだろう。視線を逸らしながら、頬を掻いている。

やがて少女とその母親が角を曲がり、見えなくなる。清水がそれに合わせて帰ろうとして…

「へー、清水…優しいわね」

「……………アツ？」

「流石清水くんだね！」

「……………何のことやら」

優花とハジメの言葉に、目に見えて硬直する。そして先程と同様、その視線をそっぽ向けた。

その清水の対応に優花は面白そうに目を細めた。

「あれ？…もしかして照れてるの？ 顔真っ赤よ？」

「はあっ!? てれっ!? 違うに決まってるんだろ!!」

「凄く慌てるじゃない…可愛いわねー。なでなでして欲しい？」

「ふざけんな！ いらねーわ!!」

優花と清水は口喧嘩をする事が多いが、大体五分五分の戦いをする事が多い。これほどまでに優花がマウントを取りっぱなしなのは非常に珍しい物だ。

そして5分後。満足したのか気持ち良さそうに汗を拭う優花と顔を真っ赤にして蹲る清水がそこには居た。ハジメが仲裁に入る暇も無い怒涛の攻めだった。優花さん、恐ろしや。

ただ優花は先程までの意地悪そうな笑みとは一転。柔和な笑顔で清水の顔を覗く。

「でも…アンタが居なかったら、あの子泣き寝入りだったわ。やるじゃない、清水。散々揶揄ったけど…これはちゃんど本心よ？」

「僕も、清水くんの事凄いつて思うよ。それに清水くんがあの子の助けになりたいって思ってくれたから、助けられた。ありがとう、清水くん」

「…揶揄うなよ、ホントに」

清水が居心地悪そうに顔を顰める。しかし嫌では無い様で二人の間から抜けようとはしない。

こうして「ウル」での直接依頼、一日目は何とも平和に幕を閉じた。しかし彼等はこの時、知る由も無いだろう。

——三日後、直接依頼四日目の朝：清水が「ウル」の町から失踪してしまふ事を。

## 10、弱体化・表

——認められたい。

それだけの理由で俺は今、ここにいた。自分勝手な我儘だ。自己中心的な夢想だ。だが異世界という浮世染みた場所に来た時点で、そうなる<sup>と</sup>決まっていたのだろう。何となく、そんな確信があった。

作戦開始まであと数日。それまで俺は洗脳する魔物をより増やすのみ。コツさえ掴めば簡単だ。詠唱して、魔力を滾らす。その繰り返し。

「おお…やはり君の力は素晴らしい。きっと君は【ガーランド】の英雄になるだろう」

そんな俺の姿を見て魔人の男は大袈裟に感嘆する。目を潤め、両手を天に仰ぐ。

そうだ。俺は上に行ける。【勇者】なんかよりもっと上手くやれる。俺こそが特別だ。

だから…俺がいるべきなのはあそこなんかじゃ無い。

あの…大馬鹿二人の間なんかじゃないんだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

清水幸利失踪から三日が経った。搜索は行われているものの、結果は芳しく無い。現状の所、足取りをも掴めていないのだ。

搜索は主に神殿騎士の面々が行なっている。理由としては【ウル】での護衛は然程必要ではないと判断されたためだ。

以前までなら兎も角、今の【ウル】には魔物がほぼ存在しない。特異な状況ではあれど、それはイコールで【ウル】の中では危険性が無いとも言えた。

ある程度異<sup>イレギュラー</sup>常は想定しておくべきだが、相手は【豊穡の女神】。少なくとも人族で害を為す事は無いだろう。そう言った事から、魔物がいると思われる外での搜索を神殿騎士が務める形となった。

ただし清水の失踪は大々的に発表されていない。知っているのは愛子、『使徒』、そして神殿騎士の面々だけだ。

理由は余計な混乱を避ける為だ。『使徒』は現在、信頼を獲得している最中。神の寵愛を受けている、とされていても見た目は子供。そんな彼等への信用の度合いはまあ高く無い。

だと言うのに失踪したともなれば、「逃げた」という印象を受ける。つまりは信用が遠ざかる。

【錬成師】に抜群の信頼を得るハジメ、コミュニケーションが上手い優花、そして農業に於いては革新の一言である愛子。彼等はまだ良い。

だが他の面々は学校と言う閉鎖的環境にいた戦闘職。適したコミュニケーションも持たず、魔物がいない故にその実力も発揮出来ない。単純に言えばアピール不足だ。

だからこそ清水の一件は情報封鎖されている。愛子としてはその様な面子よりも、生徒の命第一。当然反対したが、神殿騎士の強い説得と他の『使徒』の信頼の維持という名目により、しぶしぶ認めた。

またハジメも搜索メンバーに加わりたかったが、そういう訳にも行かない。ハジメには直接依頼があったためだ。この役目は他の誰であろうと代用不能だ。

それ故にハジメは直接依頼の仕事を全うし続けていた。以前の様に反対する【錬成師】は居らず、全員素直である事から依頼自体はつつがなく進んだ。

準アーティファクト生成の順序をある程度教え、皆が実践しているのを遠巻きにハジメは見つめていた。彼等は全員、新たな技術に興奮を隠さない。目を爛々とさせ、浮き足立っている。

「皆さん、『錬成』の際は冷静に丁寧にです。どれだけ興奮してもそれだけはお忘れ無く！」

「「「Yes sir!!! やったるぞおおおお!!」「」」」

「……はあ」

喝を入れてもこの有様だ。【錬成師】という種族は本当に単純な事この上ない。それを改めて実感する。

だが、そんな彼等が羨ましい。ハジメは確かにそうも感じていた。少なくとも工房にいた時は破茶滅茶な先輩達とあんな風に盛り上がっていたなあと懐かしむ。

だが今は違う。気が気でないと言うべきか。心が落ち着かないのだ。理由は、あまりにも明白。

「清水くん、だよなあ」

たった一人欠けただけでこのザマだ。魔法講義をするだけの仲、数ヶ月仲良くしただけの男友達。その一人がハジメの素知らぬ場所へと行った、ただそれだけの話だ。

更に言えば今は優花もいない。明日にある【ウル】の収穫祭、通称『湖信祭』の運営の手伝いに向かった為だ。今のハジメならばまず【錬成師】との喧嘩は無いだろう、と護衛を外されたのだ。

つまりはハジメは現在、孤独だった。かつての己にとってはそう珍しく無い話だ。そもそも地球にいた頃には友人など居なかったのだから。

ただその時とは違って、吹く風は何処か乾いている様に思えた。

「…地球にいた時は、平気だったのになあ」

弱くなったな。頬杖を突きながら、ハジメはそんな事を嘯くのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ハジメは町の離れへと移動していた。いつもの様にトレーニングを行う為である。

ティアと出会って以降の夜はアーティファクトの解析により、特訓の時間が取れていなかった。しかし前日、ついに魔法陣の把握…そして分裂は出来た。という事でひと段落として、久々の特訓に勤しむ事としたのだ。

(まあ、眠れないって言う理由が強いけれど)

胸騒ぎがするのだ。ベヒモスと対峙した時や冤罪を掛けられた時よりも遥かに凄まじく鼓動が鳴るのだ。

今の【ウル】には異常な点が多い。魔物は姿を現さず、清水も消えた。しかもその時期が『湖信祭』という特殊な時期。鈍くても何かがあるのでは、と疑わずにはいられない。

『湖信祭』は【ウル】の湖に宿る精霊に収穫の感謝を伝える独自の祭りだ。他にも【ウル】独自の祭りは幾つか存在するが、『湖信祭』の規模

は段違い。

ハジメは兎も角、愛子や『使徒』が呼ばれた理由の一つには『湖信祭』における来賓という側面もある。「豊穰の女神」たる愛子や神工ヒトが地上に齎した救世主はゲストとしても十分。特に愛子は神の化身とも言われている為、その名が霞む事は無いだろう。

そんな時期にトラブルが相次いでいるのだ。何らかの関連性があるのでは無いか、と疑うのは当然の話だった。

〔『湖信祭』に何かがある？ …いや、『湖信祭』そのものじゃ無いのか？ 何だ。清水くんはどうして姿を…〕

ハジメは思考の渦にいた。瞑目し、集中しながら今己の中にある情報を捌いていく。ただ今のままでは正直思考が落ち着かない。それも含めて特訓をしようと歩いて来たのだ。

そして先日立った平野まで辿り着くと、岩にもたれ掛かる陰があった。金色の美しい髪を靡かせている。そして彼女はハジメに気がつくくと、喜色を明らかにして微笑んで来た。

「——お久しぶりですね。フフツ、元気でしたか？ ハーちゃん」

「……………何でいるんでせう？」

ハジメの反応に彼女は舌を見せ、笑う。まるで悪戯の成功を喜ぶ少女の様だ。同時にやはり蠱惑的で、不思議と魅せられる。

「何でも質問しては駄目ですよ、ハーちゃん。レディには秘密が付き物なんですから」

「あ、そうですね。すみま——」

「それで理由ですけれど——」

「何で一回断る素振り見せたんですか？」

「この前友達にそう言われました。カツコ良かったので言ってみたかったです」

「アツハイ」

やはり何というか独特だ。最初は裏があるのでは無いかとと思っていたが…どうも彼女は会話自体を目的としている節が見られる。相手との会話そのものを純粹に楽しんでいるのだ。

ただ世間知らずなのか、その方向性はハジメの予想だにしない方向



に向かうが。是非で言えば悪く無いのだが、会話でどつと疲れるのだ。

もう投げやりになりつつあるハジメ。それを全く意に返す事無く、ティアは話を続けた。

「単純に言えば確認、ですかね？　ちよーつとだけ、気になった事があつたんです」

「気になる事？」

ニコニコと笑顔を絶やさず話を続けるティア。しかしハジメの問い掛けの後、その笑みは嘘の様に消えた。

「最近、この辺りに魔物が見られない事はご存知ですか？」

「…はい」

「貴方と会った後、観光がてら【ウル】の町を見て回っていたんですが…どうも魔物の姿が見られない。それがとてもとても不思議ですね。私なりに調査していたんです」

「…それで、如何になりましたか？」

嫌な予感がした。とてつも無く、頭の中が煩い。耳に入るであろう言の葉を拒絶しようとする。

だがいつの間にかティアはすぐ側に居た。自然とその唇をハジメの耳元に寄せる。逃げる事を許さない至近距離からの声は、これ以上無く明白に響いた。

彼女は囁く。

「魔法の痕跡が見られました。『闇魔法』の物ですね。恐らくは洗脳の類。魔物のコントロールを奪い、操っているのでしょう。この町から魔物が居なくなるレベルですから頭数は百を優に超えますね。相当の腕である事が窺えます」

「ッ…」

——清水幸利、その四文字が思考にて明らかに存在感を放った。

「その者に心当たりは…聞くまでもありませんね」

清水の天職は闇術師、『闇魔法』に適性を持つ後衛職だ。その腕は並大抵の物では無く、洗脳によるコントロールを可能としている。

ティアから齎された情報とハジメの知る清水。脳裏下で結び付く

のはいとも容易い。ハジメはその正体を実質的に看破した。

ハジメの動揺が伝わったのだろう。ティアはハジメと目を合わせ  
る。つい今迄の様な無邪気な笑みはそこに無い。真摯にハジメを見  
つめている。

「お応えくださいますか？ その者が誰か」

「それは…」

「その者は貴方の大切な方かも知れませんが…何せしでかしている事  
があまりにも大きい。百を優に超える魔物の群れを率いるのです。  
放つていけば…最悪人死が出ます。そんな事態を望んでいる訳では  
無いでしょう？」

「……」

「私達は人々を守る、その為に在ります。これから起きるであろう被  
害を出さない為にも、その者の名を仰ってください」

「…でもっ！」

続きの言葉を言おうとした。例え我儘だったとしても、それはハジ  
メにとって譲れない物。だからこそ啖呵を切ろうとした。

だがその前に、視界を染め上げる黄金の光。その輝きと共に厳かに  
も、女王の命令が放たれた。

「——我が名、ティアの名において命じます。その者の名を告げなさ  
い、南雲ハジメ」

「——ッ!!? あ…」

ズクンッ、と心臓が鳴った。そして次にはその舌が動き始めた。

何らかの魔法か。しかしその魔法が一体何なのか、まるで分からな  
い。確かに分かる事は一つ。己の舌のコントロールはもう、彼女の掌  
にある事のみだ。

「し…」

「良いですよ、その調子です」

彼の一文字目を口が紡ぐ。抗おうとしても逆らえない。凄まじい  
強制力。身体を強張らせ、汗が噴き出すが変わらず口は動こうとす  
る。

そしてその名を言ってしまうば、彼は終わるだろう。目の前にいる

彼女はそれこそ『使徒』など相手にならない様な、絶対強者。無詠唱による魔法の行使、従来の魔法体系とはかけ離れた強力な魔法。それだけで分かる圧倒的な実力差が彼女にはある。

清水とは短い付き合いだ。異世界に来てから関わり始めた。何処かへ遊びに行く様な仲でも無い。四六時中ずっといる様な関係性など無い。

だが、深く無くとも関わりはあった。数ヶ月であろうが共にいた。そして——絆が、確かにそこにはあった。

「……………」

「如何されました。さあ、早く……」

「い……」

「？」

俯き、口を抑えるハジメにティアが囁く。だが促そうとハジメは何かを小さく呟くのみ。それを違和感に感じつつも、ハジメの口に耳を添えて……。

「い……や、だ」

ティアは確かに拒絶の声を聞いた。小さくて、か細くて。それでもなお、確かな拒絶。

ティアは僅かにその真紅の瞳を揺らした。

「……………何故？」

しかしその動揺を持ち直してすぐ、ティアは尋ねる。

「とも、だちなんだ。初めてできた……バカをやれるような。失いたくないんだよ。彼がなにをするのかは……わからない。けど、けれど……」

——死んで欲しく無いんだ。

それはあまりにも単純な理由だった。正義感も、打算も、なんなら同情でもない。単純な我儘。

だがそれではティアは納得しない。剣？に瞳を細め、瞳の真紅に眼光を齎した。口にする言葉は静かであるものの、威圧的でした。あつた。

「であれば如何すると？ 起きるであろう事件をみすみす見逃せとも言うつもりですか？」

ティアの言う事はもつともだ。清水が何をしようとしているか分からない。もしかすれば【ウル】を襲うつもりは無く、深い事情があるのかもしれない。しかしそれは良くて、の話だ。最悪の場合は魔物のスタンピードが町を覆うだろう。町には『使徒』や神殿騎士がいるが、それも構わず群れは尽くを喰らうだろう。

先程も言ったがハジメのそれは単なる我儘だ。そしてティアからしてみればそれに己を合わせる道理は無い。

「僕が、止める」

「…貴方が？」

「誰かが傷つく前に、僕がぜつたいに止める。もしもの時は…この命だって、賭けてやる！」

もうティアの魔法による舌の不自由など無い。堂々とハジメは言つてのける。己が意をありつたけ叫ぶ。

変わる事なくハジメは自身の意思を貫く。それは愚かで、阿呆で。しかし他に無い程己を偽らない。

ティアはそんなハジメを見ると、剣？だった表情に温かみをこさえて呟いた。

「英雄に苦難は付き物、ですか」

「……………」

「御安心を。なんて事は無い、ただの独り言ですよ」

風に掻き消えるティアの声。ハジメは首を傾げるものの、その言葉を繰り返す事はなかった。ふふつといつも通りの笑い声で誤魔化した。

そして再びハジメを見詰めると、こめかみを抑えて溜息を吐く。一拍を開けてから、恨みがましそうにジト目をぶつけた。

「仕方がありません。条件を付けます。期限は今夜、闇が明けるまで。

そして【ウル】の町にて一人でも被害が出たならば…その時点でその貴方の御友人を仕留めに掛かります」

「——っ！」

「私に無理を通すのです。この程度の条件は呑んでいただきます」

もう疾うに太陽は落ちていく。月の位置からして精々五時間程か。

清水の居場所も分かっていない条件でのその短さだ。ハジメが「錬成師」という非戦闘職という前提も考えると、難易度は並大抵では無い。もしかしたら目の前の少女は自分を騙し、清水を殺めるつもりかもしれない。ティアが約束を守るという保証は無い以上、最悪もあり得る。

だが、それでもハジメは口端を上げて、言ってみせる。

「…やってやりますよ」

☆☆☆☆☆☆☆☆

そして数分後。月夜の下でティアは空にて浮かんでいた。

ハジメに出した条件である「ウル」の町への被害、それを見逃さぬ様にするには上から見るのが彼女にとっては一番融通が効き、楽だった。

まあ、そもそも彼女自身が神殿騎士達に姿を見られるわけにも行かないため、目に映りづらくするという意味合いもあるのだが。

空に舞う様にして浮かぶティア。きつと誰かがその姿を見たとしても、月の精霊か女神かと思うのだろう。それ程の神秘的な美しさが彼女にはある。

しかし今の彼女は無邪気で楽しげだ。近づけば分かるが鼻歌を歌う程に。

不安はある。かの少年と交わした約束で誰かが死ぬのでは無いか、と。

後悔はある。もしやすればもっと良い選択があったのでは無いか、と。

されどそれ以上の期待が、彼女にはあった。愉快さがあった。信頼も、愛情も。そして何よりも確信が、その胸に秘められている。

だからこそ彼女は少年の目の前でも魅せなかった、妖しく火照った笑顔を浮かべる。そして手を翳すと、延長線にいる少年を愛おしげに指でなぞった。

まだ矮小な身。我らに、彼等彼女等に及ばない。しかし才覚が、土台が。そして何よりも強靱な意思が彼にはある。

ならば魅せよ。魅せてみせろ。この私に。

「さあ。試練ですよ、ハーちゃん。この程度、乗り越えて下さいね？」

——月の玉座にて彼女は全てを睥睨していた。  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

そんな視線などついぞ知らず。ハジメは月下、森の中を駆け回る。あれから一度己の宿屋に戻り、ナイフや念話石と最低限の物だけを回収した。

(まあ、後で怒られるだろうけど)

ハジメが今している事は危険行為に他ならない。非戦闘職が「ウル」という安全区域をたった一人で抜け出したのだ。本来ならば護衛の一人は付けていくのが普通だろう。

ただティアとの約束上、時間が惜しい。しかも最悪清水と敵対する事となるのだ。話は複雑で不明瞭。他人に訳を話し、納得を得ている間に夜など開けてしまう。

取り敢えず帰ったら優花と愛子からのお叱りはあるだろう。ハジメもそれを自覚しつつも森を駆け抜ける。

ちなみに無意識であるがハジメの動きは地球で言うパルクールに近い。木の幹の反動を用いて跳び、崖を全身で衝撃を流して飛び降りる。メルドとの訓練で鍛えられた「考えて動く」事を実践出来ているのだ。

〔ウル〕で潜伏、しかも大量の魔物を連れているとなれば…まず森しかない。他なら人目に着く。そうなれば今まで情報が無いのが可笑しい)

神殿騎士は清水の搜索中、ギルドでの搜索願いを見る機会があつたらしい。その依頼は何なら従来よりも少ないほど。清水、もしくはその魔物と遭遇すれば十中八九殺されるだろう。そのため、清水の操る魔物による殺害はほぼ起きていないと考えていいだろう。

そのため、清水とその魔物の群れは上手く隠れられている。だが平地などならばまず人目に着く。それが騒ぎにならないなどあり得ない。故に、森が候補として考えられる。

〔ウル〕近くにある森はあまり整備がなされて居ない。魔物が多い為、

あまり山道を開き難いのだ。また地形は凹凸が多く、「ウル」から見て低い箇所も多く存在する。そこならば魔物も隠れられるだろう。

そうやってハジメは予測し、走っている。体内魔力を循環させた身体能力は決して低く無い。そして動かし方ならば並以上。木々の合間合間を駆け抜けて行く。

順調に進んでいる、そこまではそうだった。

しかし次の途端だった。目の端に、木々の奥に何か映った。赤い、何かだ。

（――魔物ツ!?）

ティアから齎された情報により、ハジメはソレを魔物と判断した。ソレから離れる様地面を蹴り、腰からナイフを抜き逆手で握る。

刃をソレへと向け、構えた所で漸くハジメはそれを注視した。そして、目を疑った。

「…何だよ、これ」

ソレは、肉塊だった。

鳥か、虎か、狼か、魔物か。原型も分からぬ程砕かれ、潰れた魔物達が山の様に重なっている。一部にはまだ脈打っているモノも有り、それが無情にもより地面に赤い水溜まりを作っていた。

むせかえる程に重厚な鉄錆の匂い。思わず口を抑え、喉から逆流し掛けたそれを呑み込む。冷静に見ると、一応人の腕らしいモノは無い。それに少し安堵する。

その肉塊があった方向に音を立てぬ様気をつけて進むと、その様な肉塊が幾つも転がっていた。見えても相当な個体数が死んでいる事が分かる。

——この町から魔物が居なくなるレベルですから頭数は百を優に超えますね

ふとこの言葉を思い出す。流石にそれだけの数には満たないものの、その過半数の死体はここにあるだろう。完全にミンチになっているモノもある事から、ほぼ数が合うだろうと予想される。

（何で死んでるんだ？ これも清水くんが？ でも、こんな奥で…しかもこれだけの個体数を倒すことに何の意味が…）

先程までは清水はテロか何かでも起こすつもりでいるのかと思っていた。しかしこんな光景をみて、その考えを改める。清水の意図が、状況が、まるで読めない。

赤黒く染まった周囲とその匂いが気持ち悪さを促進する。だがこの様なモノを見ている間にも時間は過ぎて行く。

もう一度走り出そう。そうしようとした時だ。

『ピィ——!!!!』

「——ッ！この声は?!」

空から聴き慣れた鳴き声が響いた。そしてその方向を向くと、その声の主は小さな両翼を羽ばたかせていた。

「ピィちゃんー!」

『ピィッッ！ ピィッ!! ピィー!』

「清水くんは——」

清水の使い魔であるピナはハジメの肩に乗って早々、翼をバタバタと忙しなく動かしている。それに比例する様に鳴き声もまあ、多い。

ハジメはそれを不審に感じたが、不意に脚に括られている物に気がつく。それは魔法紙と呼ばれる特殊なインクを用いる事で魔法陣の製作を可能とする準アーティファクトだ。後衛職が己の武器が無くなった際に用いる事が多いそれが、ピナの脚に結び付けられていた。

何かの手掛かりになるかも知れないと、ハジメはそれをほどこきを覗く。そして、ものの見事に固まった。

手紙の内容は何ともシンプル。しかし引っ掛かりを覚える物だった。

——逃げろ

たったそれ三文字だ。どう言う意味なのか、ハジメには理解が出来ない。

しかしハジメを硬直させたのはそのメッセージその物では無い。そのメッセージを記している、文字の色と質感だ。

その色は、質感は、つい先程嫌と言うほどに見たソレに似ている。赤くて。

それでいて黒も混じっていて。



触ればヌチャと嫌な感触を肌伝え。

鉄錆の、匂いがした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あー、こんちくしょうめ…」

暗くて狭い洞窟の中。一人の男が独り言を呟く。

何て事はない。ただの弱音だ。心の弱い彼は、そうでもしなければ心の平常を保てない。

今だって心の中で言い訳と問い掛けを繰り返している。くだらない自問自答だ。呆れて、笑えもしない。

いや、やはり笑える。というかこれは笑わなきゃやってられない。くくつ、と小さく微かに笑う。

何度も、繰り返し何度も短く微かに笑い声を上げる。下手な笑い声しか上がらない。

汗が頬を伝う。それに気付くと深呼吸をした。己の行動の支離滅裂ぶりを自覚し、取り敢えず落ち着こうとしたのだ。

めいっばい肺に空気を送り込む。そうした後、洞窟の壁にもたれ掛かって、彼は…清水幸利は独り言を続きを口にする。

自重気味にただ一言。

「…俺って、超馬鹿だったんだな」

その右脇腹からは赤い液体が一滴一滴と溢れ、流れていた。

## 11、弱体化・裏

清水幸利にとって、異世界転移と言う物は焦がれて止まなかった代物だ。ありえないとは思いつつも、「もしも」と空想をしては悦に浸った。それを示す様に彼の部屋には美少女のポスターやフィギュア、薄い本までが敷き詰められていた。

クラスでの清水は、彼のよく知る言葉で表すなら、まさにモブだ。特別親しい友人もおらず、いつも自分の席で大人しく本を読む。話しかけられれば、モソモソと最低限の受け答えはするが自分から話すことはない。元々、性格的に控えめで大人しく、それが原因なのか中学時代はイジメに遭っていた。当然の流れか登校拒否となり自室に引きこもる毎日で、時間を潰すために本やゲームなど創作物の類に手を出すのは必然の流れだった。親はずっと心配していたが、日々、オタクグッズで埋め尽くされていく部屋に、兄や弟は煩わしかつたように、それを態度や言葉で表すようになって、清水自身、家の居心地が悪くなり居場所というものを失いつつあった。鬱屈した環境は、表には出さないが内心では他者を扱き下ろすという陰湿さを清水にもたらした。そして、ますます、創作物や妄想に傾倒していった。

だからこそ異世界転移が実現した時は夢心地に感じた。何度も夢見た世界が眼下に広がっていたからだ。ここならば。そう清水は周囲のクラスメイトが騒めく中、胸を期待に膨らませていった。

ここならば『特別』になれる、と。

だが所詮妄想は妄想。理想と現実はい違う。スペックは世界基準で見れば高かったが、クラスメイトの中で特別秀でていたとは言えなかった。全員が同じようなレベルならば良かったが、中には【勇者】と【聖女】と言う例外中の例外がいた。注目を集めるのも彼等であり、地球にいた頃と何ら変化は無かった。

更に【オルクス大迷宮】でのトラウムソルジャーとの戦闘は彼の脳裏に『死』を刻み込んだ。それは己が『特別』であると言う自負を消し飛ばすには十分過ぎた。結果、誰も死ぬ事は無かったが、清水は浮ついた心を地に叩き付けられる事となった。

そして地球と違い、トータスには現実逃避を助長する創作物など無い。古臭い歴史物や神話・御伽噺だけだ。濃厚なサブカルチャーに浸り続けた彼に、それで満足しろと言うのはあまりにも酷な話だった。それでも心を壊さぬ為の術としてか、彼は己の適性魔法である闇魔法関連の本をひたすらに読み続けた。後衛職にとつて己の魔法の知識という物は必要不可欠。毎朝毎晩、何かから逃れようとする様に頁を捲る彼を止めようとする者は居なかった。それによつて益々孤立していったのかも知れない。

——清水くん、大丈夫ですか？ 先生の声は聞こえていますか？

——飯食べてるの、清水？ あとちよつとは顔出しなさい。一応心配してるんだから。

：いや、一応止める者はいた。またその読書の途中、何らかのスピーチを教皇が言っていた気もした。しかし当時の清水にとつてはどうでも良かった。当時の彼は耳を傾ける事なくただただ文字の羅列を頭へと収めるばかりだった。

闇魔法は主にデバフや精神作用、呪詛などを中心とした魔法効果を持つている。他の属性魔法と異なつて物理的なダメージの発生は起りづらく、代わりに搦め手が多い。『死』が頭によぎつて以降、陰鬱としていた清水であったが、僅かにその恐れを知識は埋めてくれた。

そして読んでいく内に清水はある可能性に辿り着く。この内の精神作用、これを極める事で『洗脳』を行う事が出来るのではないか、という物だ。この発想により清水の黒い感情は爆発した。その衝動のまま、清水は図書館へと駆け出し、研鑽に明け暮れた。

ただ前人未到の難題は容易くは無い。清水は何度も何度も頭を捻らせた。時には魔法理論の破綻により、魔法が使えなくなつた時期もあった。それでも彼は洗脳魔法習得の為、知識を貪つた。その途中で魔人族とも接触でき、己が【勇者】となる道筋も見えて来た。

そんなある日の事だろうか。

いつもの様に彼は図書館に向かった。理由もいつも通り、闇魔法への理解を深める為だ。ただ単に闇魔法についての知識を付けるだけでは間に合わないと判断し、その日は魔法自体の仕組みを調べる事と

した。

——だからさ、ちよつと教え合わない？

まさかあんな阿呆がいるとは、当時図書館に入った瞬間には分かっていたいなかったのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…ん？ ああ、寝てたのか。俺」

薄暗い洞窟の中、清水幸利は目を開いた。事態の急展開に追い付かず、頭が休憩を求めているらしい。もしくは単純に失血のせいかもしれないが。

地面に着いた手を動かすとピチャと音を鳴らした。見れば血溜まりが出来ている。それに応じて漸く痛みが再来する。腹に出来た抉れた傷、それを頭が思い出したのだ。

そう言えば、と清水は懐を探りポーションを見つけ出す。あくまでも回復を促進する物にしか過ぎず、抉れた腹を治せる程良質な物では無い。だが無いよりは断然マシだ。容器を掴むと、その液体を躊躇うこと無く喉へと流し込んだ。

プラーシーボ効果のお陰か痛みが和らいだ気がした。ただ一呼吸すれば、また痛みは元に戻ったが。意味ねえと心中愚痴った。

すると洞窟の奥から何やら音がする。足音だ。恐らく一人の。アレらは居ないのかと思つたが、どちらにせよ絶体絶命。なーんでこうなったかなあ、とぼんやりと呟いた。

「見つけたぞ、清水幸利」

やがて足音の元、魔族の男が姿を現した。清水と元々協力関係にあった彼だ。確か名はレイスと言ったか。オールバックの髪型をした男の魔人だ。

そして彼にはかつて清水に向けていた興奮やら畏怖は無い。代わりに冷酷なまでの殺意を晒していた。

「御苦労様だな。もう帰ってくれて良いぞ？ 休みたいだろうしな」

「それがそうとも行かないのだ」

「そりゃあ残念だ。俺は休みたかったよ。今にも意識がイツちまいそうなんだ。実際ついさつきまでそうだったしな」

「…ならば殺すには都合が良い、か」

レイスが掌を清水へと向ける。そして輝く手袋に刻まれた魔法陣。確か「破断」だったか。中級の水魔法であり、簡易的に言うならウォーターカッターの様に水を飛ばす攻撃魔法。

「…」応聞いていいか？」

「一時とは言え共に道を歩んだ身だ。聞こう」

「何で、俺を殺そうとしてるんだよ？ 狙いは先生の筈だろ？ まさかお前の黒い四つ目狼が勝手に俺を噛んだ、とか言わねえよな？」

ハジメが予想した様に魔物の洗脳を行なっていたのは清水だ。その目的はこの町に来ていた【豊穡の女神】、畑山愛子を殺す為。

【勇者】である天之河光輝や【聖女】である白崎香織の様な『個』としての絶対的な力では無い。代わりに人族の底上げを容易とする力が【作農師】である彼女には有った。それがどれだけ魔人族にとって厄介なことか人類史が示している。力が有ろうとも十分な兵糧が無く、負けたという例はざらにある。その可能性を無に返せるというアドバンテージはチートそのものだった。

清水がレイスと接触したのは迷宮の件から僅かに経った頃、簡易的な依頼でたまたま単独になった時期だ。その際に愛子を殺す事を条件に【ガーランド】へ高待遇で迎え入れられる事を契約したのだ。その実行が今日だった。なお今までその殺害を視野に入れてこなかったのは愛子の護衛が手堅かった為だ。【神山】のお膝元である【ハイリヒ王国】、そこに所在する愛子の護衛は凄まじい数だ。殺せたとしてみすぐに捕らえられるのが目に見えていた。だからこそ護衛の数が減る遠征、それをレイスと共に狙うというのが今回の作戦だった。

しかし順調に魔物を集め、大進攻を起す前にレイスが元々使役していた黒い四つ目の狼達が清水を奇襲。咄嗟の判断により噛まれた腹を千切り、抜け出す事が出来たがそれにより今清水は死にかけている。

恐らくこれまで使役した魔物の多くもレイスと四つ目狼達により殺されているだろう。清水の力は魔物から自由意志を奪う。即ち自立行動に疎くなってしまう。逃走に必死で魔物達に指示など口々に

出して居なかったのだ。とつくのうちに死んでいるだろう。

だからこそ一応、清水は己が殺されかけている理由を尋ねている。とは言えある程度予測は付いているが。

「此方は常日頃戦場に居た身だ。お前の心に宿る反意、それを誤魔化せると思ってたか。最初の頃は私に殺意を向ける事など無かったと言うのに：いつ頃からか裏切ろうとしていたのはよく分かった。幸い私の事を漏らす様子は見えなかったのな。ここまで利用させて貰ったよ」

「そつか。んじや、俺に演技の才能は無かったか」

「断言しよう。無い」

「そりや残念」

やはり勘づかれていたらしい。何か証拠でもあったか、と思っただがまさかの気配。長く訓練を積んでいる兵士でも無い清水には盲点であった。

やっぱチートは違うな、と心の中で苦笑する。そして己もそうなれていたらなあ、と存在する筈のない可能性を思い浮かべる。

すると颯め面はそのままだが、何処か腑に落ちない所でもあったのか。神妙な顔持ちでレイスは壁にもたれている清水へと近寄った。

「どうせだ。遺言ついでに私も一つ、君に尋ねよう」

「…何だよ？」

「何故私を、【ガーランド】を裏切ろうとしたのかだ」

「……………」

どうやらレイスは清水の裏切りが全く解せないらしい。レイスは他の魔族よりも選民主義が多少ではあるが薄い。でなければ清水を評価する事も、ましてやその清水を本国に招こうとするなどあり得なかった。

「貴様には我が国で英雄と崇められるまでの才能があった。知識も豊かで、『使徒』側の情報も良く知っている。選ばれた我々魔族としても評価せざるを得ない力が貴様にはあった。それこそ高待遇を得られるまでの、な」

「お褒めの言葉、どーも」

「だからこそ解せん。貴様の目的は成り上がる事であった筈だ。忌々しき【勇者】や【聖女】を超え、世界に名を知れ渡す事だただらう。ならば【ガーランド】にて英雄となる事が一番手っ取り早い。数多くいる『使徒』の中で埋もれる事を脱却せねば成らなかつた筈だ。我々魔人族に価値を示す事が一番だつただらう?」

かつてレイスに伝えた己の目的。それは誰かに己の力を認めてもらう事だつた。かつて夢見た様に成り上がつて、ハーレムを作つて、己だけのハッピーエンドを築き上げる事だつた。

「…そーだな。多分、それが一番手っ取り早い。正直俺も何でこんな事をしたのかは…よく分かつてねえんだよ」

「ならば何故!? 貴様の力ならば——」

「強いて言うなら…何となく、か?」

「…それ?」

「闇魔法」は聖教教会に於いて多少ではあるが忌避されている。理由は単純に精神干渉という『卑怯』とも言える搦め手の様な性質故の物であるからだ。別に使用が規制されているわけでも無いが、マイナスイメージは付き纏い易い。それ故、それだけで英雄となる事は少なくとも魔族側では割と困難であつた。しかも比較対象が【勇者】や【聖女】とあつては尚更難しい。

だが魔族陣営ならば「闇魔法」は彼等にとつての信仰対象である魔王が得意とする権能の一つ。魔族の中でも得意とする者は多いポピュラーな属性魔法だ。そして「闇魔法」のチートたる清水は人族であろうと、種族さえ変えれば尊敬の的でしか無い。成り上がるならばこれ以上の場は無いと言える程だ。それだと言うのに清水はその道を投げ捨てた。正しくそれは愚行に他ならない。

それでも理由は何となくなのだ。気まぐれみたいな物だ。

「俺には馬鹿がいるんだ。それも二人。男女それぞれ一人ずつだ。馴れ馴れしいし、事あるごとに俺に構つて来る。そんな大馬鹿達だ」

脳裏に浮かぶのは笑顔の二人だ。一人は冴えない平々凡々な同類、もう一人は何だかんだと面倒見が良いリーダー気質の女子だ。

話し始めたのはいつ頃だつたか。数ヶ月前だと言うのに覚えてい

ない。人生のほんの僅かだと言うのに、随分前に感じるのだ。

「だってそうだろう？ 俺はかなり前から人族を裏切ってたんだ。ただ目が節穴何だって話だろう？ 俺が魔族側にいる事を知らずにへらへら笑って、オカンみてえに口煩く関わって来て：鬱陶しいたらありやしねえ」

清水がレイスとの、魔族との接触を開始したのは迷宮直後、つまりは二人とよく会話する様になる前の話だった。つまりは仲良くなった頃にはとうに清水はスパイになっていたのだ。

だと言うのにアレらは話掛けて来た。日に日に会話の文字数が増え、距離が近付き、躊躇いも無くなってきた。馬鹿な話だ、自分は裏切り者だと言うのに。

「俺を見つける度に嬉しそうに駆け寄って来て気持ち悪いし：しれっと距離詰めて来んなや！ 楽しそうにしやがって：バツカじゃねーのか、アイツら!? 大して会話上手でもねえ、俺と喋って楽しい訳ねーだろ！ あと罰代わりなんだろうが木串痛えわ！ 加減しろや、あの鬼畜女！ 南雲も南雲でラブレター貰ってんじやねえよ！ 裏切りやがって！ 俺の親近感返せ！」

段々と、その何気無い話に力が籠っていく。常日頃から思っていたのか、鬱憤か何かが荒々しく吐き出されていく。これには僅かにレイスも戸惑う。

腹の痛みが吐き出される声に伴いジンジンと熱を帯びる。痛くて辛くて仕方がない。だがそれよりも、この衝動を声にしたいと無視する。

「園部は気持ち悪いぐらいにこっちの気持ちを把握してくんな！ 疲れる時は軽い挨拶程度で済ませるし：そうじゃなくても俺が話易い様に向こうから話題提示してくるし：エスパークか、アイツは!? お陰で昔よりかは話しやすくなったよ！ ありがてえ！ 何なんだ!? あと飯も偶に食わせてもらうけど、うめえし：気さくで緊張せずに話せるんだよ、アイツはッ！ ぜってえアイツの飯屋繁盛するわ！ そりゃそうだわ！」

するといつからか。清水の視界が滲み始める。痛みから来た脂汗



だろうか。目に染みる。思わず掌で目を覆った。

「何で南雲は【錬成師】のクセに魔法の知識も多いんだよ!? 俺の立場は何処だ!? だっつーのに、俺が説明した時は真剣に聞いて、ちゃんと理解しやがる! 俺が特に教えたい所は聞いてくれるし:聞き上手かつ!? あと漫画とかにも詳しいから喋り易いし:ジョ○ヨネタにもすぐに反応するし:本当に馬鹿だよ。アイツ、何だかんだ優しいからなあ:そりやモテるわ、クソツタレが」

汗がいつになっても収まらない。目を押さえても、歯を食いしばっても止まらない。それに合わせて喉も震え始めた。情けないっただけありやしない。

「それによ:アイツら、事あるごとにスゲエスゲエって言うてくるんだよ。インコかってぐらいな。ちよーつと何か手伝ったぐらいで褒めてくんじゃねーよ、甘ちよろ共がって心の底から思ってたさ」

——流石だね、清水くん

——本当にわかりやすかったよ。凄いね、清水くん

出会って間もない頃、南雲あの馬鹿はそう言った。心にもねえ事を言うなと思ったが、生憎あの男は割と純粹だ。きつとあれは本心からの物だったのだろう。本当にタチが悪い。

——おにいちゃんもありがとー!

小さな少女がぬいぐるみを抱えて言った。

——やるじゃない、清水

園部陽キヤが俺の髪を雑に撫でながらそう言った。

——僕も、清水くんの事凄いつて思うよ

……本当に馬鹿か、アイツら。

「そんな訳ねえだろ? 俺から闇魔法を引いたら何もねえ様な屑だつてのは分かってんだよ:。家族から見放されて、特に秀でた部分もねえ屑なんだよ、俺は:」

かつての地球で清水は孤独だった。兄弟は気味を悪がり、両親も清水に接するのを避けていた所があった。それにより清水はより妄想や二次元に入り浸り、余計に家族とは疎遠になって行ったという繰り返し。学校でも人と関わる事は無かった。もしかしたら話し掛け

ていれば友人の一人や二人、出来ていたのかもしれない。だが酷い扱いを受けるハジメを見て、もしオタバレしたらと思えば恐怖があった。結果、清水は黙々と教室の隅で本を読むだけでいた。

だがそれでも清水は妄想に浸り込む事でそんな現実から目を背け続けていた。少なくとも、この瞬間までは。

今頃、そう今頃だ。魔族の英雄になれるその直前に清水はあんな馬鹿達の大切さを知った。有り難みを知った。離れたくないと、本気で思った。

「だから…そんなアホみてえな褒め言葉に絆された俺も大馬鹿野郎、なんだろうなあ」

ポタポタと血とは別の何かが血溜まりに落ちて跳ねる。頬を伝い、落ちた何かのせいだ。清水はその正体を知らない。

「結局の所…理由は何となくだよ。お前は俺の力を求めた。そこでアイツらは俺を見てくれた。そこで…何となくアイツらを選んだって話だよ」

「…そうか」

ずっと魔族は清水では無く、その力を求めていた。己も前まではそれで良いと思っていた。だが最後の最後で気分が変わって、このザマだ。本当に馬鹿らしい。

「だがそれでも命は惜しい筈だ。今ならばやり直せる。此方にもう一度来い。以前言っていた待遇よりは窮屈になるかも知れんが…死ぬよりはマシだろう?」

「…イエスって言わなきゃ殺すつもりだろ?」

「ならば死を選ぶか?」

「……………」

死は…怖い。それは異世界に来て随分と実感させられた事だ。漫画やらではバンバンと人が死んでいっても、悲劇の一言やらで済む。だがここは現実。死ぬばやり直しは効かない。

もしかしたら死んでから発動するループの力があるのかも知れないが、生憎そんなギャンブル好きな性格を清水はしていない。

「本当に…本当に命は、助けてくれるのか?」

「約束しよう。貴様の力は失うには惜しいからな」

「そうか…」

ならばこそこの場で選ぶべき選択は、嘘だろうと協力を誓う事だ。もしかすれば役目さえ終わればまた殺しに来るかも知れない。だが生きられる可能性があるだけマシだろう。隙があればそれに乗じて逃げるのもアリだ。

プライドなんざ要らない。生きたい。

だから清水幸利は――

「――だが断る」

――そう言うが残る体力の全てを込めて、清水は中指を立て付けた。

すると本日何度目だろうか。しかし今までのそれとは比べ物にならない程、レイスはぐしゃぐしゃに顔を顰めた。

「…どう言うつもりだ？」

「どうもこうも…この清水幸利が最も好きな事のひとつは自分が有利だと思っている奴に「NO」と断ってやる事だからな」

レイスは啞然とする。全く合理性も何も無いセリフを返されたからだ。清水の言う意図が分からず、立ち尽くす。

すると中指を立てる事に体力を使い果たした清水は腕を地面に落とし、そして笑った。それは盛大に。愉快気に声を上げて笑った。

「ハハッ、マジで言う機会あるもんだな…一回言っただけ見たかったんだよ。サンキューな、これで心残りはないわ」

「そうか…それが貴様の遺言か」

「遺言が俺の憧れのオマーージュなら悔いはないね」

血が出過ぎたのだろうか。ポーシオンを飲んだと言うのに手の感覚が無い。頭が回らない。こんな状況で目の前の魔族から逃れるなどまず不可能だろう。

再び目の前の魔法陣が輝き始める。詠唱も始まった。残り僅かで清水は死ぬ。今まで積み重ねて来た清水の人生は此処で途絶える。

——お終いだ。

「…死にたくねえなあ」

天井を見上げ、ぽつりと呟く。迷宮で実感した死の恐怖。死にたく無い。こんな惨めなままで終わりたく無い。体が、本能がそう叫んで止まない。

さっきの言葉なんて嘘だ。死にたく無い。心残りなんか幾らでもある。こんなモブのまま死にたく無いし、ハーレムだって築きたい。ちやほやされたい。それに地球に帰って気になっているゲームや漫画の続きも見たい。

…それに、もう一度アイツらと馬鹿騒ぎをしたかった。

そんな悔いだらけだ。やはり自分は物語のキャラの様に綺麗には死ねないらしい。こんなに未練が残っては何とも格好が付かないでは無いか。

だが同時にかつてとは違う想いも溢れた。最後の最後で、『自身』では無く『他人』を選べた。その自覚こそは無いが、その事実には清水は僅かに口端を釣り上げて——

「——破断」

——放たれた。

「大丈夫？ 清水くん？」

痛みがいつまで経っても来ない。意識がいつまで経っても途絶えない。それに違和感を感じ、清水はゆっくりと瞼を開けた。

そこに居たのは…一人の男の背中だった。清水はその背を、姿を何度も見ている。だが一瞬、それが誰なのか清水には分からなかった。一拍を置いて、漸く理解が追いついた。

次に溢れたのは何故と言う疑問。お前はそこにいちやいけな、という怒り。そのためにわざわざ手紙も書いたと言うのに。

力も無い癖に。才能も無い癖に。心中、清水はそう憤慨した。

「…何だ？ 貴様は？」

だがそれでも。その背中は誰よりも逞しく…彼は間違い無く英雄<sup>ヒーロー</sup>だった。

服は枝による切り傷が目立つ。肌も汗と泥で塗れている。ここま  
でどれだけ彼が急いで来たのか、清水はふと想像した。

魔法によりひび割れたナイフ、そこに蒼い稲妻が走る。するとその  
ナイフは修繕され、銀の輝きを放つ武器へと還った。

そしてそのナイフをレイスへと構え、彼は彼の尋ねに応えた。誇ら  
し気に己を、「無能」たる所以を叫ぶ。

「——【錬成師】、南雲ハジメ」

——他に無い親友を背に、ハジメはその白刃を煌めかせた。

## 12、ありふれた言葉

——コツコツ、コツコツ

「——うん？ 何かしら」

ハジメが清水のいる洞穴に辿り着いた同時刻、窓から響くその音に優花は目を覚ました。音は絶えず部屋に響いている。一瞬だけならば二度寝する事も出来ただろうが、何せけたたましい。優花はそれを無視出来るほど図太い神経の持ち主では無かった。

布団を払い除けると、窓に近づく。月の逆光が窓にその陰を映す。少なくとも人間では無い。サイズも小さく、威圧感はない。そしてその魔物はよく見知ったシエルエツトであった。

優花はそれで気が付く。

「…ピナちゃん？」

『ピィ——!!』

それは清水の使い魔であるピナだ。その嘴で窓を突き、己の存在を優花に知らせていたのだ。

「どうしたのよ、ピナ？ 今は夜よ？ 清水は何を…」

ピナの勝手な悪戯とでも解釈したのか、優花は宥める様な声を掛ける。そして窓を開けて…ふとそこで気が付いた。

白い筈の羽毛を固める血の色に。

それに少くない動揺と不安が立ち込めるが、同時にピナの足にある物にも気が付いた。一つは手紙、そしてもう一つは…

「…石？」

それは結晶の様に澄んだ鉱石。白磁に輝くそれは丁寧な形を作られており、それを加工した者の腕が伺える。

窓から月の光が差し込む。その光は…彫られた魔法陣の輪郭を浮かび上がらせた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

場面は戻り、血の匂いが充満する洞穴の中。そこにてハジメは魔人の兵士、レイスと対面していた。

レイスは動かない。いや、様子を伺ってるのか。【錬成師】と言う名

前を言えば油断すると思っていたが、レイスがハジメから視線を逸らす事は無い。

何と言ってもハジメはレイスの「破断」を弾いたのだ。部外者が来る事がレイスの予想外だったとしても、それは十分な実力の示唆に当たる。大小は兎も角、レイスがハジメを『敵』として認める理由はそれで事足りた。現にレイスは魔法陣の刻まれた掌をハジメへと向けている。

レイスを視界に入れつつも、清水を見る。彼はハジメを睨み付けている。何故ここにいるのかと困惑、共に怒りがあるのだろう。それはハジメも同じだ。

そして彼の腹に滲む血。服の布切れで覆われているが、それでもかなりの物だと推測される。睨み合いに時間を使うのはかなり惜しい。(…まずは逃げるのが先決かな)

魔族は強い。素のステータスも人族よりも断然高く、魔法の適正にも恵まれている。少なくともハジメがタイマンで勝てる様な相手では無い。勝つならば神殿騎士二人か三人はいるだろう。

搦手を使えばもしやすければ勝てるかもしれない。だが、それには多量の魔力を必要とするし、一か八かの賭けだ。最悪清水も自身も死ぬ。

逃げるにしてもレイスが入り口側を塞いでいる。入って来る際は自身一人だった為、天井を駆ける事でレイスを躲した。だが清水を負ってであれば不可能だろう。

だからこそハジメの選択は早かった。逆手に構えていたナイフ。それを最小の動きでレイスの腹へと投げつけた。

魔法の準備をしていたレイスはそれに多少の意識を割かれる。半身になって避けようとする。その時には既にハジメは動き出していた。

「うおっ!？」

「清水くん、捕まって!」

左片腕で清水を担ぎ、ハジメは壁に右手を叩き付けた。唱えるは彼唯一の魔法。与えられた才能。

「『錬成』！」

瞬間、壁は砂となつて爆発する。威力は無い。代わりに砂塵が洞穴の中を埋め付くした。

こうなればレイスの目は機能しない。そしてハジメは予め、走行ルートに目を付けていた。それに従いハジメは逃走を開始した。

魔力循環はこれ以上無く好調だ。土壇場故の覚醒か、清水一人抱えていても壁走りならば出来る。ハジメはそれを用いて、レイスの横を抜けようとした。

だがその寸前、ハジメは砂塵を貫く視線を感じた。ぞわりと肌を舐める様な悪寒。それに従い、身を捻った。

「――『破断』」

瞬間放たれる水の斬撃。それはハジメの頬に確かな傷を付けた。

敵は歴戦の猛者。戦闘種族たる魔人族の中でも選りすぐりのエリート。視界など無くとも耳が、肌が、経験則が砂塵の中からハジメを暴き出したのだ。

危うく脳を貫かれる所、ハジメは冷や汗をどつと噴き出した。死の気配が隣にある。【オルクス大迷宮】以来の恐怖だった。

だがそれに恐怖すれど、縛られる事は無い。ハジメは知っている。止まれば『死』は簡単に訪れる事を。だからこそハジメは己が身を前へと押し進める。

やがて洞穴を抜け、森に入る。後方を見ても追いかけて来る気配は無い。

――ピュイイイイイイ!!!

代わりに来たのは指笛の音。恐らくは風魔法で音を広範囲に響かせているのだろう。何かにレイスが呼び掛けている、それだけがハジメには分かった。

分からない、だが嫌な予感がする。ハジメは更に魔力を激らせ、駆けようとした。

「――南雲！ 右だ！」

「――ッ!？」

だが清水の声がそれを遮った。ハジメは言われた通り視線を傾け



る。そのお陰で気づいた。

——四つの眼光。それが草を隔て、現れる瞬間を。

魔族が使役する黒い四つ目狼、通称『グロル』。それが牙を剥き、ハジメへと襲い掛かった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

砂埃が晴れた洞穴、そこからレイスはゆったりと現れた。周囲に人の気配は無い。大分遠くに清水とその仲間は逃げた様だ。

「…【錬成師】、か」

本来ならば非戦闘職の男など視界にも入らない。それ程に戦闘職と非戦闘職では格が違う。

だがつい先程の対面、そして見事己から逃れて見せた事実。それがレイスの思考を何処までも冷徹とする。矜持<sup>プライド</sup>を突き放し、一人の『敵』として認定した。

だからこそレイスは指で輪っかを作り、それを啜える。そしてそのままに彼は口笛を吹く。

これは合図だ。総勢十体。その内の三匹への攻撃命令。音が鳴った時間こそは短い、口笛の段階<sup>ステップ</sup>ごとの音程が詳細な命令を『グロル』に伝える。

——清水幸利という男を半殺しにしろ

命令内容はこう言った物だ。油断は無い。だが同時に己が優位に立っていると言う自負はある。また『グロル』は己の上司から貰い受けた特殊な魔物。生半端な者ではまず勝てない。

かの【錬成師】は【ガーランド】にとって価値は無い。だが人質としてならば十分に価値が見込める。レイスは先程の清水の話を出す。

——俺には馬鹿がいるんだ。それも二人。男女それぞれ一人ずつだ。

レイスが見るからに、清水は決して人族側にいる事自体が重要で無い。彼にとって重要なのは二人の友人。彼等が人族側にいる事だろう。

そしてかの【錬成師】が現れたその時、清水は確かな動揺を見せた。

死の瀬戸際よりも尚、大きな動揺だった。そこからアレが清水の友人の一人であると察せた。

清水幸利は【ガーランド】において非常に有用だ。魔族が長年、人族に劣って来た物量と言う名の武器。それを己が上司と共に更に進化させられるだろう。

清水幸利は確かに勧誘の手を離れた。だが、友の首に刃が突き立てられて尚、彼はその手を払い除けられるか？ 彼にとっての『大切』を手放せられるか？

「その為には…もう一人の女も捉えねばな。使命が増えるばかりだが、これも我らが魔王様が為…止む無し」

【豊穡の女神】愛子の殺害、清水幸利の再勧誘及びそれに伴う友人二人の人質としての確保。その為、レイスは再び口笛を吹く。それは残る七匹の眠りを醒ます音であった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ぐっ！ぬおっ!? はいやあっ!!」

駆ける、駆ける、そして駆ける。

絶えずハジメは脚を回転させる。全力で走り続けて十分やそこら。疲労が徐々に溜まりつつある現状。されど今のハジメに止まるという選択肢は存在し得ない。

『『ウオオオオオオ!!』』

後ろから迫るは三匹の『グルル』。彼等はそこらの魔物を軽々と超える力、そして狡猾さが存在した。

群れ、地形、そして敵の視線<sup>ハジメ</sup>。全てを冷静に観察し、逃げるハジメを追い続ける。追尾式のミサイルにでも追いかけられているかの様な恐怖がハジメを駆り立てていた。

その内一匹に対し、ハジメは地面に手を当て、<sup>錬成</sup>。そして創り出したナイフを投げ付けた。だが『グルル』はそれを予め予想していたかの様で、慌てる様子も無く回避。そのままハジメとの距離を詰める。

そこでハジメはワイヤーを生成。それを枝に引っ掛け、木と木の間を振り子の要領で移動する事でそれを回避。

こうした木々、壁等を駆使した立体的な逃走により、身体能力の差を何とか埋められている現状。だがこの現状はハジメにとつてそう芳しい物ではない。

今は体内魔力やスタミナが十分にあり、かつ距離がまだある為冷静でいられている。素のハジメならば無茶も考えられたが、今は死に体の清水を左腕に抱えている。清水が巻き込まれる事、片手が埋まっている事。これらを考えると、そう無茶も出来ないのが現状であった。

そして『グロル』達は正しくそのスタミナ切れを狙っている。所々で『グロル』達から余裕が見られるのは、ハジメの疲労が確実に来る瞬間を待って温存している為だ。稀にハジメに攻撃を仕掛けるのは、ハジメに全力での逃走をさせる為。

このままでは体力切れに至り、その瞬間ハジメは殺られるだろう。(どうする!?) このままじゃ距離も詰められる。〃錬成〃で落とし穴でも作る…いや、あの狼達は賢い。そんなチンケな罠じゃ無理だ。余裕がある内に応戦…それもしリスクがあまりにも高い! 考えろ…考えろっ!)

そう思考を巡らす間にも『グロル』達は横に間隔を空け、走っている。ハジメの意識をより広範囲に広げる為の策だろう。自身の集中力が削られていく感覚が鮮明に感じられる。

ハジメの体内魔力の循環は技能による〃身体強化〃や天職自体が与える恩恵とは異なる。身体強化の倍率、魔力消費量の効率の良さなども挙げられるが、その真髄は強化の恩恵を受ける者が自ら操作するか否かだ。そしてハジメの場合は前者。それは即ちハジメは一時たりとも集中を欠かす事が出来ない事を示している。

〔ウル〕に逃げ込むか!? ただティアさんとの契約がある。下手に〔ウル〕のみんなを巻き込んだら、最悪清水くんが死ぬ! …何か無いのか! 方法は!)

「…ぐも」

「何、清水くん!? もしかして傷が痛むの!? でも今止まったら死—」

「俺を、置いてけ」

「…は？」

思考を巡らす中、清水が己を置いていく様に言う。走る事は止めなかったが、それは十分にハジメの思考を停止させた。何を言っているか、まるで理解出来なかった。

「俺を、置いてけって…そう言っただよ！ 馬鹿野郎！」

「何言ってるの！ 死ぬよ!? 後ろの魔物が見えないのか!? だから

——

「俺は——裏切っただよ！」

「ッ……………」

ハジメが理解していないのがよく分かったのか、清水は再度告げる。今度こそは清水の言葉を理解出来たハジメ。しかし納得は無い。

馬鹿な事を言うなと怒鳴るハジメ。しかしそれを封殺するように響く清水の叫び。それは事実の宣告。清水自身が自ら背負った咎。

「お前は馬鹿だろうから気付いて無いんだろうよ!? 全部説明してる！ 俺は魔族側に着いたんだよ！ 目的は愛子先生の殺害！

その為に今日まで作戦を練って、魔法を鍛え上げて来た！ そして護衛が薄くなる今日を狙っただよ！ 今日奇襲するのを提案したのも俺だ！ 魔族は俺の口車に乗っただけ！ そんな俺にお前が救う程の価値があるか!? また裏切るかもしれないに!? お優しい事で！ 反吐が出る！」

これらは全て事実だ。かつて清水が夢見た「勇者」。それになる為に目論んだ事。魔族は清水の補助をしていたに過ぎない。最終的に清水が再度裏切っただけで、それが無ければ清水は「ウル」と「豊穡の女神」を葬っていただろう。

その間にも『グロル』は襲い掛かる。牙が、爪が、体躯が。一度擦りでもすれば致命傷。ハジメの不規則な動きにも慣れて来たのか、その攻撃は徐々にハジメへと近付いていた。

「それに俺は死に体だ！ 生き延びたとしても失血死する可能性が九割がたは超えてる！ ここで死ぬのと何ら変わりねえ！ むしろ一瞬で死ぬるだけ、こつちのがマシかもな！ 使い物にすらならねえ俺を抱えて走るよりもお前一人で逃げた方が幾分もマシだろ!?」

これは不器用な願いだ。清水はとうに袂を分かっていたのだ。かの日、魔族と手を結んでしまった日から。清水の手は汚れ始めている。

人は殺していない。けれど魔物の尊厳を奪った。

人を犠牲にはしていない。けれど一度しようとした。

人を辱めてはいない。けれどそれを夢見ていた。

清水幸利はエゴイストだった。ハジメや優花の様な他者を助けられる様な人間では無い。己が要求に従い、恐怖に慄く。一言で言えば小物だった。

今は違うかもしれない。成長出来たかもしれない。だが…二人はあまりにも眩し過ぎる。

「こんだけ言えば分かるだろう？ お前は どうするの が一番なのか」

——だから、ここでくたばるのは自分だけで良い

——とつとと俺を置いていけ

清水はぶつきらぼうな口調で、そう願った。どうか、自分を見てくれた二人に生きてくれと。

そう言つて清水は目を瞑つて——

「——ふんっぬ!!」

「グハツ!!」

——右腕でハジメに殴られた。

「な、何すんだ!?! 捨てろとは言つたが、おま——」

「君さつきから、ごっちやごちやうるさい!」

「んなっ!?!」

犠牲になる覚悟は出来ていた。しかしハジメ本人が攻撃してくるのは覚悟していなかった。清水はすぐに抗議を開始する。

しかも清水史上一番の覚悟。それをまさかのうるさい呼ばわり。

清水は呆気を取られた。

「やれ何だ裏切ったから置いてけだの、重傷だから置いてけだの、お前だけでも生き延びろだの…嫌い! 僕に関係ない事こんな状況で言

うなよ！」

「てめっ!？」

関係ない？ 巫山戯るな。大ありだ。ハジメが清水を捨てるか捨てないかで、ハジメの生存率は大きく変わるのだ。それを関係ない？

清水は停止していた頭を熱くした。

だがそれを吹き飛ばす程のハジメの怒号。それが絶えず此方にぶつけられた。

「いいか!? 僕はヒーローなんかじゃ無い！ 聖人君子でも、仏でも、ましてや【勇者】でも無い！ ちっぽけな…ただの【錬成師】だ！」  
「…は？」

「だから世界の事情も、王国も、教会も知らない！ 僕は僕の為にある！」

「だから何だよ!？」

「まだ分かんないのか!？」

「分かるかっ!！」

「ならハッキリ言っつてやる!！」

清水は何とかしてハジメの腕の拘束を逃れようとする。しかしハジメの腕は非戦闘職のそれとは思えない程に硬い。己が失血しているせいか、それともハジメが全力で清水を抱えているのか…それは恐らく両者だろう。

だがここでふと清水は気がつく。もしやハジメには——清水を置いていくという可能性が存在しないのではないかと。

清水は逃れられない。そしてそのままハジメは構うものかとその声を大にして叫ぶ。

「僕は——君に生きて欲しいからここに来たんだよ!！」

「ふざっ、ふざげんな！ この後に及んで揶揄うな！ 第一何でお前がそこまで俺に——」

「決まってるだろ!！」

かつて言っつて欲しい言葉があった。孤独な男が望んだ言葉だ。

両親からも、兄弟からも、周囲からも。何処の誰とでも彼とは埋められない距離があった。

彼は空想の中で色んな物に憧れた。冒険、英雄譚、成り上がり、ハレム…。

本当に、多くの物を望んだ。

だけれど掛け替えの無い人に自分自身を見て貰って彼は、満足したと…そう錯覚していた。

——違った。

彼が、本当に望んでいたのは——

「——友達だからに、決まってるだろ！」

「——ッ」

そんな、あまりにもありふれた言葉だったのだ。

「あと…君は自分が裏切り者とか言ってたけど…僕は『使徒』全員を危機に追いやったテロリストだ。今君を助けた所で僕の名前に傷は一つも付かないよ」

だから、とハジメは先程までの烈火の様な怒りが嘘の様に。穏やかな笑みを携えて清水を見た。

「だから僕は君の味方だよ。自分だけ犠牲になるとかそんな寂しい事言わないでよ…手伝わせてよ。それで…一緒に明日も馬鹿やろうよ」

「…あ」

何だか瞳が熱い。何故だ。何故だ。そんな理由、もう分かっている。

嗚呼、困った。死ねなくなった。死にたく無い。さつきまでは諦めていたと言うのに。もう、一寸たりとも死にたく無い。

清水の頭が、体が、魂が、そう訴える。

『こら、男子共。勝手に二人でイチャイチャして燃え上がってんじやないわよ』

「してないよ（ねえわ）!?!」

すると途端に声が響く。二人は反射でツツコミを入れるが、すぐに違和感を持つ。

その声は二人にとって馴染み深い声だ。「ウル」に来てからと言う

ものの、常に側にいた人間の声だったからだ。だからこそ清水は今居る筈のないその声に辺りを見渡す。だが誰もいない。

一方でハジメは気が付き、『それ』を懐から取り出した。

現れた『それ』は一見すれば澄んだ鉱石だ。見ようによれば宝石にも見紛うだろう。しかし良く見れば、その鉱石には魔法陣が刻印されているのが分かる。

——アーティファクト：念話石

月下の日、ティアから貰い受けたアーティファクト。それらピナにより彼女の手元へと無事届けられた様だ。届けられた事実とピナが無事だった事にハジメは安堵し、呼び掛ける。

「遅くにごめんね、園部さん。寝てた…よね？」

『そりゃあ寝てたわよ。しかも起きて電話？したら男共が友情してる所、散々聞かせられて…まあ、清水が無事っぽくて何よりだけど』

「園部…」

園部優花の少しばかりぶつきらぼうな、しかし確かな温かみを感じる声が念話石から発せられる。二度と聞けないと思っていたその声に、清水は聞き入った。

『一応言っとくけど、私だってアンタの事友達って思ってるし、死んだら殺すつもりだったわよ？ 次、自殺志願したら私が直々に葬ってやるから覚悟なさい』

「南雲：俺、二度とあんな事言わねえわ。すっげえ反省した」

「それが良いよ、清水くん」

何だかんだと優花は恐ろしい。それがこの二人の共通認識だ。ここ数日でそれを身を持って理解している。例え二人は魔王に歯向かえたとしても、優花には打ちのめされるだろう。それ程に二人は尻に敷かれている。

命大事、と頷く清水。それに更に賛同するハジメ。なお二人は今、『グロル』に追われ、命の危機真っ最中である。

「それで…大体は把握してくれた？」

『アンタの手紙とこのアーティファクトを通してね。あとピナちゃん が名状し難いボディランゲージで説明してくれたわ。説明はしづら



いけれど分かりやすかったわ』

「何だそれ？ 俺知らねえぞ？」

「ああ、分かる。名状し難いけど分かりやすいよね、ピーちゃんのボ  
ディランゲージ」

「知らねえよ？」

どうやら清水の知らぬ所でピナが変な技術を手に入れたらしい。  
何だか『名状し難い』という枕詞があまりにも不穏なのだが…清水は  
目を背ける事にした。

『まあ、兎に角こっちにも魔物が来る可能性が高いのよね？ 清水が  
寄越した魔物が』

「いや、俺の魔物はほぼ全滅だ。ピナ以外は多分くたばってる。問題  
はレイスの『グロル』だ」

『「グロル？」』

ハジメと優花の二人は初めて聞くその名に首を傾げる。一方で清  
水は魔人族から手に入れた情報を元に、『グロル』の詳細を語り始め  
る。

清水の情報によると『グロル』は魔族側が生み出した、特殊な魔  
物の一種との事。強力な身体能力のみならず、知性、そして固有魔法  
として“予測”と呼ばれる少し先の未来の可能性を見る力を持つて  
いるとの事。これらのシナジーが相当までに厄介との事だ。

「でも僕、さつきからかなり避けてるよ」

「そりやお前が変な動きばっかしてるからだろ。それに“予測”はそ  
んな完璧な技能じゃないらしい。しかもちよつと賢いつつても魔物  
の知性だ。何個もある可能性を全部使いこなせる訳じゃ無いんだろ  
うさ」

「なるほど」

『待ちなさい。アンタ今、どんな動きしてんのよ？』

「コイツ凄いで。チンパンジーでもこんな活発に動かん」

「清水くん？ 僕の事馬鹿にしてない？」

だが実際片腕に清水、片手に念話石を持った上で木の上やら地上や  
ら谷やらを立体的に走り回っているのだ。実に変態的…もとい超絶

的な技術である。

なお走りながら普通に喋っているのは体内魔力の循環は肺器官にまで強化を及ぼしているからだ。

「ちなみに今回あの魔人が連れて来た個体数は十だ。今こっちに三体いる事を考えると…残りは【ウル】に向かつてるかもな」

『なる程ね。面倒な事になったわね。流石トラブルメイカー共。やってくれるわ』

「……………あ」

ここまで言われてふと思いつく。ティアの折衷案の内容の一部を。

——【ウル】の町にて一人でも被害が出たならば…その時点でその貴方の御友人を仕留めに掛かります

今現在、【ウル】を襲おうとしているのは決して清水では無い。だがそのきっかけは清水で間違い無いのだ。「二度と起こさぬ様に」と殺される可能性は十二分にあり得る。

ハジメは血相を変えて念話石に叫んだ。

「園部さん！ 【ウル】の人達に被害、絶対出さないで！」

『そりゃ勿論そうするけど。何でそんな慌てて…』

「詳しくは説明出来ないけど…最悪清水くんが死ぬ！」

『何がどうしてそうなった!!?』

詳しくは言えない。何たつてティアはハジメ自身もよく分からない存在なのだ。しかも「誰にも言うなよ？」的なプレッシャーもあった。ハジメは黙秘した。

『…はあ、ホントこのトラブルメイカー共は。取り敢えず帰って来たらみんなに心配と迷惑を掛けたお仕置きとして木串の刑+αだから覚悟しなさい』

「ヒエッ」

「南雲…俺もう帰りたく無い」

もうさつきまでの覚悟が決まっていた清水はいない。優花様々々である。彼女が清水に再び恐怖を取り戻したのだ！…まあ、ハジメも恐怖に駆られるがそれは些細な話である。

『まっ、取り敢えずこっちは愛子先生とかに掛け合ってみるわ。一旦

切るわね』

「うん！　ありがとうね」

どうやら「ウル」の方は町中を巻き込んだ総決戦になりそうだ。敵は二桁にすら及ばないが相手が相手。魔族に加えて新種の魔物七匹。それだけの警戒でもなお、期間余りある存在だ。

ただそれでも優花の言葉の一つ一つには揺らぐことの無い強固さがある。任せられると、ハジメは思えた。

そして念話石の機能を切ろうとした、その瞬間。ぽつりと小さな声が向こうで呟かれた。

『…帰って来なさいよ、馬鹿二人』

「…うん」

「…おう」

次には魔法陣の輝きは消え失せた。恐らくこの戦いが終わるまで、また輝く事はないだろう。そんな余裕がそもそも無い。

そしてこの追いかけてこもいよいよ終盤だ。

「さて…それじゃあ先ずは、ここを打開しないと、ねっ！」

痺れを切らしたのか『グロル』はこれまでに無く迫力と勢いを乗せ、ハジメへと迫る。恐らくは先程までの念話石での会話を挑発と受け取ったのか。それとも『グロル』の動きに慣れつつあるハジメを厄介と判断したのか。

兎も角、ここを乗り越えねば明日の日の出は拝めない。ハジメは舌で唇を舐め、正念場へと身構えた。

すると脇に挟まれた清水が声を出す。先程までの死への覚悟では無い。死ぬ気での覚悟だ。

「南雲…案がある」

「よし、乗った」

「はえーよ!?　ただかなりリスキーだ。ミスが一つでも有れば二人仲良く地獄行き。…やれるか?」

ハジメは思い返す。異世界に来てからと言うものの死へ近づく感覚は幾度となくあった。

オルクス迷宮、檜山達による暴行、メルドとの訓練、ウォルペン工

房：本当に幾度となく経験した。恐らく一歩間違えれば死んでいた物ばかりだ。

それと今は何ら変わりない。変わっているのは近くに頼れる仲間がいる事か。何と心強い事か。

ハジメは口を三日月の様にして、念話石をしまいナイフを取り出した。

「生憎：逆境には慣れてるからね」

「ホント：：こう言う時に、お前は心強いな」

——【ウル】での死闘はこうして火花を散らした

### 13、『始まりの戦い』上

「——なる程、町の方の魔物は仲間に対処を求めましたか。悪く無い判断ですね」

月明かりが照らす夜空。そこに浮かぶは幻想的な少女、ティアだ。彼女は空中を浮遊し、脚を組んでいる。本来ならばあり得ぬ現象。されど彼女はそれを苦とする様子も無い。ただただ地上を優雅にも見下ろすばかりだ。

「ですが、まず貴方を追う魔物はただで済まされる様な相手では有りませんよ？ ……不可思議な動きで避けていますが」

森の中を覗くと、木の上で体操選手ばりの動きをするハジメとそれを散らばり対処する魔物達の姿が捕捉された。良くも人を抱えながらもあの様な動きを出来るものだ、と感心する。

「それにしても…やはり魔人族本体は従来のソレと変わりませんが、魔物が非常に厄介ですね。流石、としか言えませんね」

同時に地上の魔物の中でも上位に食い込むであろう『グロール』を見つめ、彼女は呟いた。まだ【真の大迷宮】の魔物には程遠いが…それでも今後の成長を考えたならば脅威には違いない。

やはりあの男は厄介だな、と嘆息するティア。しかもこれで発展途上なのだ。タチが悪い事だ。

もっとも一番の反則的な存在たる彼女にはそんな事を言われたくは無いだろうが。

「嗚呼、それと…」

ふと、ティアは己の背後を見返した。肩越しに視線をやる彼女は非常に芸術的だ。しかしその視線の先には何も有りはしない。

一見すれば、にしか過ぎないが。

彼女は尋ねる。

「何の御用で？ 『神の使徒』」

するとふと空間が歪む。否、ソレが姿を露にしたのだ。

ソレは白を基調としたドレス甲冑のようなものを纏っていた。ノースリーブの膝下まであるワンピースのドレスに、腕と足、そして

頭に金属製の防具を身に付け、腰から両サイドに金属プレートを吊るしている。その姿はまるで神話でのワルキューレのようである。

特筆すべきはその背にて輝く一対の翼だ。銀光を纏った翼は魔力により編まれた物。背後に月を背負い、煌く銀髪を風に流すその姿は神秘的で神々しい。ティアとは別種の浮世離れた美しさと魅力を放っていた。

だが、惜しむらくはその瞳。彼女の纏う全てが美しく輝いているにも関わらず、その瞳だけが氷の如き冷たさを放っていた。その冷たさは相手を嫌悪するが故のものではない。ただただ、ひたすらに無感情で機械的。人形のような瞳だった。

「…やはり本調子で無くとも、私を看破しますか。神の器」

「大袈裟ですね。高い自己評価は身を滅ぼしますよ？ 貴女、それ程隠れるのは上手く無いでしょうに」

「…」

銀の少女はあいも変わらず無表情。しかし恐らくは多少なりともティアの言葉は彼女の癩に触ったのだろう。その口からギリツと噛み締めた様な音が、確かに聞こえた。

だがなおも彼女は淡々と進める。瞳を細めつつ、本題へと話を移した。

「要件はただ一つです、神の器。：器を何処に隠したのですか？」

「それは、答える義理がありませんね」

「そうですか…」

銀の少女のガントレットが開く。そして手に取るは鏢無しの銀の双大剣。二メートルをも行く剣を軽々と握り、背にある翼を在らんとり広げてみせる。

一方でティアの周囲を二匹の龍が取り巻く。それは燃え盛っていた。それは紫電を纏っていた。『蒼炎龍』と『雷竜』。ティアの代名詞ともされる魔法だ。

「我が名はフィースト、『神の使徒』として貴女に罰を与えましょう」

「フッフ、御冗談を。貴女こそ今日は月が綺麗なので、取り敢えず死んだらどうですか？」

「戯言を…」

地上にて各々が動き出す一方。月夜の空の中で神の領域の闘いが幕を開いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「バリケード足らねえぞ！」

「トラップはこんなもんか？」

「や、もつと殺傷力を…」

「即席で良いんだよ！ そんなのより数だ数。魔物の動きを止めることを優先しろ！」

【ウル】の町では魔物の襲撃への対処に追われていた。当然きつかけとしては優花の知らせ。ハジメからの報告を通し、彼女が円滑に話を進めた為である。

しかし、やはり優花は一人の少女。「魔物が来たから戦え」と急に、しかも夜に言われても、士気はそれ程望めなかっただろう。

だがそれは…【神の化身】が居なければの話だ。

『町の皆さん！ 時計台の周囲に集合を！ 散らばっては行けません！ 此方には『使徒』が…そして神殿騎士の皆さんがいます！ 落ち着いて避難を！』

「おお！ 我らが【豊穰の女神】！」

「その意に我らは従いまする！」

「どうか御身の声を我らに！」

風初補助魔法の「風音」を用いて、その声を町中に響かせるのは【豊穰の女神】畑山愛子だ。彼女は時計台の見回り台で己の声を響かせる。

愛子は非戦闘職。しかし規格外の天職、そして魔力量が存在する。攻撃魔法ならばまだしも補助魔法ならば彼女は十全に使用可能だ。

これには民衆も跳ね起き、命に従う。何せ彼等は己の信仰に真摯だ。今も時計台の元で愛子を見上げ、崇めている。こう言った場合に彼女の名声は凄まじい。

また【錬成師】達は簡易的なバリケード、堀などで時計台を囲んだ。ここに『使徒』や神殿騎士達の攻撃が混ざれば、かなりの防御力とな

り得るだろう。

更に【農作師】の能力により城壁には肥大化した蔦が敷き詰められている。これは『ネイラソウ』と呼ばれる植物で、潰れると粘液を外部に吐き出す。魔物が壁を登ろうとした際を考慮した自然のトラップだ。

「うう。優花あく、奈々あく。ホントに魔物来るの？」

「らしいわよ。しかもかなり強いのが」

「らしいって…優花、それ誰情報？」

「南雲と清水。ちよつと電話？ 念話？ があつてね」

「電話ってんなわけ…そんでその二人は何処だよ？」

「今は…遠い所よ」

「…「死んでるの!!」」」

「生きてるわよ。じゃなきゃ私が殺すわ」

「…「ヒエツ」」」

そのバリケードの上に立つのは『使徒』の六人。近接職業の者も少なく無いが、魔法が使えないわけではない。彼等は中距離、遠距離からの魔物の行動の妨害を主軸として配置されている。

では誰が魔物と直接立ち向かうのか。それはバリケードから外で布陣する四人の神殿騎士。近中遠全てに優れた戦闘職である彼等だ。今も腰に差している剣に籠手を当て、来るであろう魔物に備えている。

「…本当に来るのか？」

「恐らくは。魔人族が相手とならば、十中八九目的は愛子か『使徒』。その全員がここに集合している以上、ここに来るしかないでしょう」  
「だ、だが」

「南雲ハジメはこんな状況で『魔人族が来る』などと言う嘘は吐きませんよ。教会の定めた罪人とは言え、愛子の教え子。それ程腐つてはおりません」

「むう…」

デビッドは未だにハジメに反感を買っている様だ。それ程教会への信仰が深いとも取れるが、逆に言えば頭が硬い。チエイスはこめか



みを揉みつつ、必殺とも言える言葉を放った。

「第一：その言葉に従うと決めたのは他でも無い我らが愛子です。その言葉を信じずしてどうすると言うのです?」

「っ!? …そうだな。そうだったな。よし! いつでも来るが良い、魔物共! 私が斬り伏せて見せよう!」

「ちよっつろろ」

「ん? 何か言ったか、チエイイス?」

「いえ、何も?」

愛子の決定だと再認識した途端、デビッドは覚悟をメラメラと燃やした。非常に分かりやすい。バリケードの上にいる『使徒』達も呆れていた。チエイイスはそれにフツツと顔を逸らして笑う。

各々が決意を固める。未だに魔物が来る兆候は無い。バリケードの中にいる民衆は「本当に魔物が来るのか?」と僅かにだが疑い始めている。

しかしバリケード製作完了から二十分と経たない頃だった。それは、現れた。

『皆さん! 魔物です! 数は…六体! お気をつけて!』

「『『『『ツ!!』』』』」

「…来たな」

「ええ。残念ながら…南雲ハジメの報告は事実だった様で」  
「そうだな」

見張り台にいる愛子が森から『グルル』の群れを発見する。それに『使徒』達は少くない緊張を、神殿騎士達は戦意を露わにした。

『『『『グルルル…』』』』』

『グルル』は唸る。今の主が彼等に与えた命に従う為に。その爪牙を光らせ、地を踏み締める。

バリケードを覆う様に散開する『グルル』。それに伴い各方向にばらける『使徒』と神殿騎士。

そして互いに相見合う。この場の緊張を示す様に静寂する事一拍。一陣の風が彼等に吹く。

『『『『グオヲオオオオ!!』』』』』

「『螺旋』！」

「『天翔閃』！」

「『雷蛇』！」

それが——戦いの合図となった。

後に『ウル』攻防戦』、そしてその更に後に『始まり戦い』と呼ばれるこの一戦が、表面上はここで幕を開けた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——よし！ 南雲！ 作戦決行するぞ！」

「上等！ 死ぬなよ、清水くん！」

「お前こそなあ!!」

そして本当のこの戦いの幕開けは、終わりの一途を告げていた。

迫る『グロル』三体は変わらずハジメの右後ろ、左後ろ、木の上と散らばって追いかけて来ている。互いに視界を共有し合う様な形だ。やはり清水の予測はあっているのかと思考しつつも、ハジメは止まらず移動。生憎立体的な動きによる逃走に『グロル』は慣れつつあり、厳しくなりつつあるのが現状と言えた。

だがそこでハジメは、逃走中にも関わらずしっかりと地面に手を付けた。

『グロル』は学んでいる。ハジメが地面に手を付けた時には『何かしら』を起こすと。ナイフ生成、鋼線生成、段差形成…、【錬成師】の力を今の今までフルで活用した方が故に『グロル』は警戒し、彼等の固有技能である『予測』を使用。

だから彼等にはコンマ数秒先の未来が視えた。

そしてだからこそ、彼等は後ろに下がった。

何故ならば今回のハジメの『錬成』は道具の生成でも地形の形成でも無い。ただただ単純な、レイスに一度見せた煙幕だったからだ。

だがレイスは食らっていても、『グロル』達にとつては初見。視界だけで考えたならば何かが迫って来る図にしか思えない。『グロル』はそれを攻撃だと判断し、大袈裟に後方へと逃げた。

そして彼等の『予測』の通り、煙幕がハジメを中心として発生する。その頃には『グロル』は煙幕範囲から外にいた為、あまり視界を

塞ぐという効果は無いだろうが。

だがこの煙幕は『グロル』等の視線を遮る。別に煙幕の中でも戦う事は出来るだろう。だが煙幕が無くなってからの方が確実だろう、と迅速に判断。結果、『グロル』は砂煙が上がってから、攻撃する事とした。

砂煙はすぐに開けた。何せこれは多少の改造があるとはいえ、『錬成』。物の変形を主としているこれは『土砂を立ち上げる』ということにしか特化していない。

即ち立ち込めてから後には魔法の影響は無い。開け始めたのは精々七秒あったか無かったか。土砂の向こうに見える二人の影。そしてその時を待っていたとばかりに『グロル』は駆ける。

何せこれはチャンスだ。二人は『グロル』が動いて尚、一步も動かない。先程まで奇妙な動きで走り回っていたハジメさえもだ。だからこそ『グロル』等はそれを他ならない隙だと判断した。

砂煙が僅かに立つ中を『グロル』達は掻き分け、進撃する。

この時、『グロル』は気付かなかった。砂煙の中から僅かに響く『歌』に、ぼんやりと光を灯す円陣に。

『グロル』は知性を持つ。狡猾さを持つ。いつのタイミングで攻撃をするか、そのタイミングを早めるための戦略を、彼等は知っている。

しかし『グロル』は知恵を持たない。弱者故に回し続ける知性を、死の際まで足掻く一手を、掴み取る奇跡を。彼等は知らない。

だからこそ、『グロル』はその『歌』を間近で聴いた。

「惑わし、微睡む、気分屋な案山子<sup>カカシ</sup>。彼は今君の目の前に——『起異』」

そしてその爪を、獲物から遥か遠くで振るった。まるで遠近感覚も分からなくなっただかの様に。

闇属性下級魔法『起異』。これの効果はあまりにもシンプル、相手の感覚をズラす。ただそれだけだ。正確には五感に作用するのではなく、相手の意識を何となくそちらへと追いやる魔法だ。

誘導力・干渉力が低く、違和感も視界や聴覚などで補填出来る程度。更には効果範囲も術者から5m以内と、後衛職の役割にはそぐわない

物だ。それ故に凄まじい集中が生まれやすい戦場ではまず役に立たない事が多い。

ただ砂煙は『グロル』から正確な視界を奪った。また「敵の隙を突く」という油断が、彼等から皮肉にも集中力を削いでしまった。

故に一匹残らず『グロル』は清水の寸前で停止してしまった。先程まで一糸乱れぬ連携を行っていた三匹の魔物。その動きに綻びが生じた瞬間だった。

そしてそれを逃す事なく清水は叫んだ。

「――南雲っ!!」

瞬間、砂煙すらも晴らす程の光が地面から発せられる。それは何処までも蒼い魔力光。それが魔力の円環を巡る。

その魔法陣は半径2 m程だろうか。成人男性二人でも寝転べる程の大きさを誇る魔法陣。並の【錬成師】ならば三十分は掛かるであろうそれを、ハジメは砂煙が発せられてから晴れるまでの間に製作した。

そんな【錬成師】として神業とも呼べるそれを成し遂げつつ、ハジメは『錬成』では無い詠唱を唱えた。

「彼の意志は折れず砕けず鉄の様。その刃の如き意志よ、光に宿りて敵を切り裂け――『光刃』」

蒼く、淡く輝く光。それがナイフの刀身を覆う。詠唱の通り、正に曲がらぬ意志を宿している。

本来適性が無いハジメには簡易的に『光刃』は使えない。だがそれは実践的では無いというだけで、通常の魔法陣よりも詳細かつ大きい魔法陣を使用すれば発動が可能となる。

そしてハジメはそれを握りしめ。魔力循環と側にあった木を蹴り加速。『グロル』の内一匹は避けようとしたものの、『起異』はナイフからの距離感を狂わせる。避ける間も無く刃が首にある魔石へと突き刺さった。

同胞が矮小な人間により殺された。その事実を認知出来ず、『グロル』等は思考を停止させる。だがその間にも二人は動く。

「――『錬成』!」

「――『起異』！」

再び立ち込める砂煙、発せられる『歌』。今度はあつさりと砂煙に呑まれる二匹。そして束の間に一つの断末魔が響いた。

瞬間一匹の『グロル』の『予測』は発動。そして見えるは己の死の瞬間。それによりこの場所は危険だと、逃れようとする。

先程言った様に『起異』はある程度の集中力で振り解ける。だからこそ死の際だと悟った『グロル』の本気に『起異』の干渉は弾かれた。

しかし――

「――逃がさねえよ」

己の脚部の爪。それに敢えて腕の肉を引つ掛けた清水。筋力値の低い後衛職と言えど人一人分。敏捷に偏るステータスを持つ故、軽量へと進化している『グロル』には十分な重り。

そしてハジメが辿り着くには――あまりにも時間があり過ぎた。

「肉を切らせて骨を断つ……なる程、中々有効だな」

そんな声を聞きつつ、三匹目の『グロル』は魔石の碎ける音と共に絶命を迎えた。

「そう言えばさ、何でこの作戦だったの？」

「ん？ ああ、そうだな……」

清水の腹部に応急処置をしつつ、ハジメはふとそんな事を尋ねた。

清水が提案したのはそう作戦と呼べるものでは無かった。清水がハジメに伝えたのは「『錬成』で煙幕を張り続ける」、「その隙に自分のナイフに『光刃』を使え」の二つだった。

清水の失血が酷く、出来るだけ早急に手当をしなければならなかった為、訳は聞かないまま戦っていたハジメ。しかし三体の『グロル』を倒し終えた今ならば問題は無い。

清水も回復ポーションを口に含みつつ、順に説明を始めた。

「まず俺達が『グロル』攻略に必要な物……それは『予測』の攻略、攻撃力、それで攻撃をぶち込む一瞬の隙だった」

「改めて考えると何だかんだ条件厳しいね」

「ま、この内の一つでも欠けてたら死んでたしな」

清水が指三本を順に立てる。ハジメは無茶したなあ、と遠い目をしつつ清水の腕に包帯を巻いていた。この数ヶ月で応急処置にはすっかり慣れた。もつとも他人よりも自分への手当の方が得意だが。

そもそも割と危なげなく倒す事ができたが、『グロル』は本来格上だ。三匹で1/2ベヒモスと考えればその脅威も分かるだろう。それを二人で倒したのだ。割と健闘である。

「まー『予測』に関しては…そういう類は基本『視覚』から働くらしいからな。『先読』とか『見切り』とか。それと同じ部類って考えれば…視覚さえ封じれば、『予測』が塞げるんじゃないかかって考えたんだよ。そもそもお前の動きが幾らめちやくちやだからって五感で未知れるなら見失う訳がない。だからこそ『錬成』での煙幕だ」

「へー、そうなんだ」

「昔の神殿騎士が戦った何かにそういうのがいたらしくてな。やっぱり何でも知識は役立つな」

「それはそう」

ハジメは物凄く頷いた。そもそもハジメの即時魔法陣形成も『錬成』の知識を蓄え続けた結果だ。更に言えば使うと思っただけじゃなかった『光刃』もこうして使ったのだ。知識は武器、それが二人の総意である。

「そんで…攻撃力に関してはまあ、言うまでも無いな。『グロル』は普通に硬いからな。そんでまあ、俺は攻撃手段無いからお前『光刃』使えねーかなあって。まあ、まさかお前が一瞬で魔法陣作って『光刃』発動するとは思って無かったけどな？」

「逆に作れなかったらどうするつもりだったのさ？」

「つーか、『光刃』に関しては俺自身無い物ねだりで言っただけだったからな？ 本当だったら『錬成』で質量武器作って、とかで考えてたよ」

「ハンマーとか？」

「斧とか」

「チエーンソーとか？」

「それは違うな？」

「ドラゴン殺しとか？」

「それは漢の浪漫だ」

そもそも「光刃」の様な補助魔法の魔法陣はハジメにとってまだ馴染み深い。例えば「火球」などの攻撃魔法の魔法陣ならば五分や十分は時間を食っただろう。ついでに言えば満足に発動する事も厳しかっただろう。ヒョロヒョロな火の粉が上がるだけだ。

「それで最後は攻撃のチャンスを作る事だな。これはまあ：俺が頑張ったな、うん」

「それで怪我増やしたら世話無いよ、まったく…」

「お前の頭にブーメラン突き刺さってんぞ？」

「：まあ、作戦の意図自体は良く分かったよ。ありがとう」

「スルーすんなや、お前」

ハジメのスルースキルは異世界生活で鍛えられている。今だって清水の抗議の声を完全無視出来ている。取り敢えず手から消毒液を滑らせ、清水の傷口にたっぷりと流し込んでおく。清水の声が聞こえるがこれも無視。

「まー、あと穴だらけにしたのも臨機応変にする為だな。お前アドリブ得意そうだし、良いかなって。つーか正直、『グロル』側の意図がよく分からなかった。完全に殺しに来るならお前が念話石で喋ってる間に殺しに来れば良かったのに、その時点でもアイツらはお前の体力を削ぐのに集中してた。：いや、もしかして念話石自体を警戒してたのか？ やっぱ分からん。何だったんだ、あの動き」

ぶつぶつぶつぶつ。清水は独り言の様に、考えを張り巡らせている。『グロル』との戦闘はもう終わったと言うのに、未だなお思考を続けられるのはやはり流石だとハジメは思わざるを得なかった。

そうして処置が終わり、取り敢えず立とうとした時だ。

ハジメは森の奥に、かなり離れたそこに先程まで睨まれ続けた眼と同じモノを見つけた。

「――『グロル』!？」

「——嘘だろ!？」

それは一匹の『グロル』だ。一瞬倒し損ねたのかと考えたが、周囲に死体が三つある。つまりは別個体。追いつちとも言えた。

ハジメはすぐに床に刻印した魔法陣に魔力を込める。清水も闇魔法発動の為、『グロル』に視線をやった。

確かにこの追い討ちは効果的だ。ハジメも清水もかなり疲労やらダメージやらを蓄積している。そこにさらに一匹と言う事実は、かなり効く。

しかしそれでもたった一体だ。ならば倒せる。幸い攻撃の手筈も整っている。あとは隙を作り、一撃をぶち込むだけだ。

そうして二人は構えて：『グロル』は急速に踵を返した。

違和感を持つ二人。それに対して『グロル』は口から何かを落としながら、その場を去った。ハジメの目にさっきの三体には無かった錆色の何かが首にあるのが見えた。

「：何だったんだ？」

「取り敢えず：何か落としたよね。見てみよう」

周囲に『グロル』がいない事を確認してから、ハジメは落ちた何かを拾う。それは帯により丸められた紙だった。一見して文書とも思えるそれには、目を引く文字が綴られている。

「：『清水幸利へ』？」

何故これを『グロル』がわざわざ持ってきたのか。

やはり名指しされ清水の方も気になるのか、その手紙を受け取り開く。

「：レイスの野郎からか。何だ？ 今更また勧誘でもする気か？」

中を見て最初はそんな事を嘯いていた清水。しかし目が下に進んでいくに連れ、その表情は険しいものとなって行く。

何を見てそんな表情となるのか。ハジメも横から見ようとして、その前に清水が頭を押さえた。

「あ——!!!」

「うおっ!? 何!?!」

「ミスった! 意味がわかった! クソツタレが! 乗せられた!」



「何!!? 一体何!!?」

腹の傷に構うものかと叫ぶ清水。だが彼自身、上手くいったと思っただけに己の大きな計算違いに頭を抱えていた。

「南雲! 今すぐ手当中止だ! そんなで村に戻るぞ!」

「へ? でも園部さん達が【ウル】の防衛してくれてるから——」

「その園部が問題なんだよ!」

「園部さんが?」

「最悪だ! レイスの野郎…方針を変えてやがった!」

ハジメと清水は勘違いをしていた。レイスの目的は愛子・清水の殺害だと。だからこそハジメは全力で『グロル』から清水を守り、優花に愛子を守らせる様に言った。

だがレイスの目的は既に異なる。正確には優先順位を変えている。文書の内容は実にシンプルだ。再度の清水の勧誘。そしてそれに従わない場合の処置。

「さっきまでの『グロル』達の動きも納得が行った! あれは殺す為なんかじゃない! 時間を稼ぐ為だったんだよ! もしくは捕まえる為か! どっちだつて良い! 問題は——」

敵の目的を勘違いしていれば、最悪敵の手助けをしている事もある。例えば将棋のルールを勘違いしている男が居たとする。その男は『王』の駒では無く、『飛』の駒を取った物が勝つと勘違いしている。その場合、『王』の駒を最悪捨て駒とし、強力な駒である『飛』を後方に煙らせる事となるだろう。それが相手側への手助けをする事となるにも関わらず。

そう、ハジメと清水はレイスの目的、その手伝いをしていた。他でも無い、園部優花を『戦う側』に回してしまった事。それこそが一番の悪手だった。

「——レイスの目的は俺を魔族側に取り込む事! そしてその為に…園部を人質に取る気だ!」

「——ツツ!?!」

ハジメ達は、みすみす『王』<sup>弱点</sup>を前線へと引き摺り出していた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…三体の『グロル』が死んだか。あの方から頂いた物だったのだが…  
今回ばかりは捨て駒とするのもやぶさかでは無い」

ハジメ達の目の前から逃げた『グロル』は戦闘用では無い。代わりに盗聴器の役割を持った錆色のアーティファクトを持たせ、今までハジメと清水側の状況を把握する為利用していた。

あの『グロル』は何もあの瞬間に二人に近づいた訳ではない。ずっと一定以上離れた距離から二人を追いかけていた。三体の『グロル』は目を引く為の囮であり、かつ突き放す為の罠。

ハジメ達は確かに戦いに勝った。しかし同時に【ウル】の町から遠のいていた。

今から急いでも遅い。【錬成師】の男は確かに天職の割には早い。しかしこの距離をすぐに詰めれる程ではない。

そしてレイスは『グロル』のアーティファクトを通して『女』の声を聞いた。清水幸利のもう一人の『友人』。その声を聞いた。

『ツ——！。ちよこまか動くわね！。この狼共！』

「…アレだな」

視界に映るのはバリケードの上からナイフを投げる女。なる程肝が据わっている。清水が気に入るのも何となく気に入った。

【錬成師】の男は遠隔からでも話すアーティファクトを所持している様だが…もう遅い。

森に身を潜めつつ、レイスは指笛を吹く。騒音が響く戦場でも尚明確に響き、『グロル』の耳に届く。

彼等に言い渡された命令は…ただ一つ。

——ナイフの女を持って来い

夜明けまで…あと一時間。

## 14、『始まりの戦い』中

畑山愛子は生徒を第一として重んじる。生徒を守り、寄り添う事を使命とする。それはある種、異世界に飛ばされるといふ摩訶不思議な現象に対して、正気を保つ術でもあった。

愛子は決して強く無い。大人で強い意志を持つが、「生徒を守る」というアイデンティティが僅かにでも欠けたならば…その瞬間愛子は折れるだろう。

だからこそ優花が愛子達に知らせた話は愛子を動かすには十分だった。

『清水が魔族に襲われています』

『同時に南雲も清水を助けに行つて、ピンチなんです』

『愛子先生と「ウル」を潰す為に、魔物が何体かこっちに向かっています』

『理由はよく分かりませんが、被害が少しでも町に及べば…清水が死ぬらしいです』

そこからは早かった。周囲の者達は動揺や疑惑を優花の言葉に抱いたが、愛子はすぐ様にそれに従った。元々の善性に加え、生徒らを守るというアイデンティティ。今更躊躇う訳が無い。【豊穰の女神】の名を利用し、すぐに人々の避難やバリケードの作成などを進めた。

愛子は途中ハジメと清水を守る為、神殿騎士の一人を送ろうとした。が、それを否定したのは他でも無い優花だった。

『アイツらは弱いですけど、しぶといですから絶対帰つて来ます。心配しなくても大丈夫です、愛ちゃん先生』

根拠も無い言葉、しかし定められた絶対的な信頼に愛子は頷いた。己も信頼すべきだと、愛子は感じたのだ。

そうして即席の砦を作り上げ、防衛を行なっている現在。愛子は見張り台から戦場を見下ろしていた。戦いは順調だ。未だ六匹の魔物は健在。しかしじわりじわりと追い詰めている。

「粉碎せよ！ 破碎せよ！ 爆砕せよ！——『豪撃』！」

神殿騎士のデビッド、その腕の筋肉が隆起する。そして放たれる一

閃。『グロル』は紙一重で避けるものの、その頃には返す刃が迫る。あまりもの早業に『グロル』の前足が一本吹き飛んだ。

強化魔法に類する「豪撃」は魔力により一瞬の身体強化を行う魔法だ。少ない詠唱により得られる身体強化は神殿騎士ともなれば絶大な効果を発揮する。

「其は怒り。罰と名乗りて破壊を下す。生まれ落ちよ——」  
「紫雷」  
！

別の方角では神殿騎士のチェイスが腕を空に掲げた。そこに浮かぶはパチパチと弾ける稲光。それは徐々に光量を増し、やがて『グロル』を貫く槍と成る。

凄まじい音を響かせ、落ちる落雷。敏捷ではかなりの数値を誇る『グロル』でさえも逃れる事ができない。鳩尾を焼き、骨を砕いた。

加えてクリスやジエイドも続々と『グロル』に確かなダメージを与えていく。ハジメと清水が策を弄して戦ったソレに難なく正面から。

このままでは勝てぬと判断したのだろう。残り二体の『グロル』がバリケードへと向かう。

だが何も神殿騎士だけが相手では無い。バリケードの上から押し寄せる魔法やナイフ、鞭。己等を殺し得る攻撃の数々に『グロル』は回避を選択させられる。

「思ったより速いわね」

「ここからでも鞭って届くね…やはり鞭、鞭は全てを解決するっ！」

「やばいよ優花…妙子の化けの皮が…」

「ふふふ…もつといたぶらなきや…痛めつけなきや…」

「「ヒエツ…」」

「妙子ー、男子がビビってるよー」

それもその筈。バリケードの上にいるのは『神の使徒』たる六人だ。非戦闘職であるハジメや後方支援職である清水と異なり、戦闘職の者達が多い。近接職の者達もいるが、攻性魔法はこの中の誰もが容易く使用可能だ。

『グロル』は強力な魔物だ。それでも『神の使徒』の攻撃は難なく回避、と言うわけには行かない。それが鯨波の如く押し寄せたとともになれば

…尚更だ。

結果、『グロル』の肌に刻まれて行く傷の数々。反撃を試みるが何せ『グロル』は遠距離からの攻撃手段を持たない。故に近づく他には攻撃に繋がる道は存在し得ない。そして『神の使徒』の総攻撃を潜り抜けるのは困難を極める。

正しく勝ち筋が出来ている。全ては順調、その筈だ。

(…ですが、何か)

しかし愛子は何かが引っかかっていた。それはもしやすれば全体を俯瞰で見られる見張り台だからこそ、分かる事だったのかもしれない。

そう、違和感は『グロル』にある。その視線の先が…愛子に向けられていない。

魔族にとって【豊穡の女神】の名とその力は障害そのものだ。信仰の上昇と食糧不足の解消、それらだけでも戦争を有利に運べてしまうのだから。

だからこそ当初、魔族側の目的は愛子の殺害だと思っていた。事実神殿騎士や『神の使徒』はそれを疑わず、愛子をバリケードの中へと押し込んだ。見張り台に立っているのもその一環。

しかし…それにしてもは魔物から愛子へ向けられる視線の数があまりにも少な過ぎる。時折魔物等が一瞥する程度で、それ以上に向けることは無かった。

(では…いったい何処に?)

それを意識し出すと、見つけるのは早かった。『グロル』達の向ける視線はほぼただ一人に向けられている。

「…園部さん?」

今もバリケードで投擲を行う園部優花、彼女へと注がれている。その事実は魔族側の目的を探り出すには十分だった。

清水と同様、愛子も優花が狙われている事実を理解し、「風音」により声を飛ばそうとした。しかしもう一つ、愛子は気が付いた。

それは陽炎。揺らめく何か。

それが優花の足元の壁にまで、辿り着いていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——やれ」

静かに、森の奥で。厳かに彼は命令した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

戦いは順調だ。少なくともその瞬間まで優花はこの状況をそう把握していた。優花の投げるナイフは『グロル』に少なくないダメージを与えている。即時とは言わないが、後々倒れる事は予測できた。

すると戦場に鳴り響く口笛の音。それと共に森の奥から、十体目の『グロル』が姿を現した。

だが『グロル』の個体数は既に把握済み。優花は焦ることもなく、言葉にするだけだ。

「清水の話通りね…あれが最後の一体よ！」

「えーつとつまり…七体？」

「あと南雲と清水の方に三体いるから合計十体ね！」

「何っ—か、終わりが見えてきた——」

相川昇がそう言った途端の事だ。

『園部さん！——逃げて!!』

「風音」に声を乗せ、あらん限り叫ぶ愛子。周囲の『神の使徒』、そして優花がそれに何事かと驚いたが——

『グオLLLLLLLL…』

突然足元から響いた鳴き声に、全員がしめし合わせたかのように焦燥を抱いた。

そしてソレを覆っていた隠れ蓑は晴れる。そして現れる十一体目の怪物。真正銘、清水にさえ存在を秘匿したレイスの隠し札。

ソレは『グロル』とは異なる獣だった。見た目は虎に近く、しかし数多くの生物を混ぜたかのような外見は正しく異形其の物。その上数百キロはあるだろうと思わせる巨体。

——何故これ程まで近づくまで気が付かなかったのか？

皆が抱く疑問を他所に、『キメラ』は鈍い眼光を優花へと放つ。優花も身を捻り避けようと試みるが、あまりにも遅い。

『グオオオオオオオオオ!!』

「——ッッッ!!?」

優花の目の前に躍り出る『キメラ』。そして振り下ろすは、丸太を彷彿とさせる剛腕。凄まじい轟音を響かせ、バリケードごと破壊する。

優花は直撃こそは避けたが、何せ風圧が凄まじい。その為、その身を地面に叩きつけられる結果となる。

人々はバリケードが破壊された事により、絶叫を上げて逃げ惑う。『キメラ』の様相が非常に醜悪である事もこの混乱に発破を掛けている。

ズシンツ、ズシンツと地面が揺れる。恐らくは『キメラ』の歩みによるものだろう。その重量に耐え切れぬのか、歩みに乗じて地面が凹んだ。

「優花から、離れろっ!」

「乱れ咲け! 白く眩く!」  
“氷華”!

「クソツ! 硬え!」

その進行を止めようと背後から『神の使徒』達が総攻撃を『キメラ』に放つ。それは『情』がある人間故の判断。見捨てられぬ人の性。むしろ圧倒的な破壊を見せた『キメラ』に対し、攻撃を放てる度胸は賞賛にすら値する。

されど——この場では明らかな失敗だ。

『グヲオオオオオ!!!』

「しまっ!」

遠距離攻撃により行われた移動の阻害。それらが無くなった事により二体の『グロル』がバリケードを飛び越え、現れる。その二体の目標も同じく優花だ。

正しく先程までの優勢から一転。優花は絶命の危機に瀕している。先程の衝撃によるものか、額から流れる血が優花の右目を赤く汚す。平衡感覚も曖昧なまま、何とか『グロル』の突撃を避ける。

しかし先程も言ったが『グロル』の敏捷は並大抵では無い。優花が地面に倒れる頃には『グロル』は既に着地を終え、次の跳躍へと備えていた。

次の攻撃は間違い無く当たるだろう。クラスメイト等も対応しよ

うとしているが、『キメラ』への対処に追われてしまっている。神殿騎士達もまず間に合わないだろう。地面に倒れ込んでしまっている己ではまず、回避も何も出来ない。

園部優花は言うならば巻き込まただけだ。責任感があるだけで、命を賭ける理由などありはしない。そもそも村人一人に被害が出たら清水が死ぬ、というのも訳が分からない。根拠も理由もないのに優花はこうして死地に放り込まれた。

阿呆らしいものだ。こうして死ぬ気で戦っているのもあの馬鹿男子二人の為。何とも阿呆らしい。実際に死にかけているのだから、本当に優花は阿呆なのだろう。

だが優花はきつとこの決断を後悔していない。何故ならこれは自分の為だ。二人の話を聞いて逃げようとするなど…そんな者は『園部優花』では無いをだからこそこれで良い。

そして毛頭死ぬ気だつて無い。だから——  
「死ねつつつ、るかあああああああ!!!」

——懐のナイフの刃をその手で握り締めた。

血に塗れた優花の顔。されどそこから覗く眼光には明確な殺意が潜む。差し違えてでも殺す、と言う明確な意志が『グロル』等に確かな間を作り出した。

その時間はたかが一瞬だ。己と相手の戦力差をよく理解している『グロル』はすぐに脚を屈め、突進を繰り出そうとする。

しかしその一瞬は、人が一人、落下するには十分な時間だ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

レイスに油断は無かった。

何せ神殿騎士等と優花の距離の確保。『神の使徒』に『キメラ』の存在を気取らせ無い為の囮の準備。更には魔物の洗脳を得意とする清水、型に嵌まらない戦闘を行うハジメを【ウル】から引き離す事にも成功していた。

正直ハジメと清水に対し三体も送ったのは過剰だったとも思ったが、それでも敗れた事を考えるとそれも悪く無い判断であった。実際、それよりも少なければもつと早い段階で『グロル』は殺され、ハ



ジメと清水は「ウル」に今にも帰っていたかもしれない。

だからこそ今レイスの心中を驚愕が満たしているのは、決して慢心によるものではない。

それもそうだ。目の前のソレが可笑しいのだ。

——【豊穰の女神】が見張り台から飛び降りるなど、予想が出来てたまるものか。

そう、レイスは心の中で愚痴を呟いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——怖い怖い怖い恐ろしい恐ろしい嫌だ怖い無理だ死ぬ逃げたい泣く震える何でこんな目に死嫌怖無理

弱音ばかりを吐く心中。されど愛子はそんな警鐘全てを無視して、その足を手すりに掛けた。何故ならこれが一番皆の場所に、そして敵の元に行くのが速いから。

だから躊躇いは無い。民衆も、騎士も、魔物も、魔人も、白鳩も。全てを仰天とさせつつ、彼女はその身を空中に投げ出した。

見張り台はこの町で最も高い建物だ。その高さはおおよそ六階建てと言った所か。マンションがありふれている地球ではそれ程高くない方ではあるが、決して飛び降りて無事に済む高さでは無い。

しかし愛子は詠唱する。生徒を守る。その為に死ぬ気で己が信念を遂行する。

愛子は攻撃魔法に適正を持たない。それは彼女の天職【農作師】に定められた縛り。規格外の魔力量と引き換えに戦闘能力を持たない様になっているのだ。

この縛りを愛子はどれだけ呪ったことか。自分に戦う力があれば生徒等を戦場に出す事など無かっただろう。危険に晒させる事など無かったと、愛子は自身を何度責め立てた事か。

しかし彼女には「風魔法」と「土魔法」の幾つかに適性が存在した。当然何方とも攻撃魔法は使えない。しかし補助魔法ならば彼女でも小さな魔法陣で発動する事が出来た。

いつか、目の前で生徒が命の危機に晒された時。後悔しない為にも。愛子は陰ながらにしてそれらの補助魔法全てを記憶し、習得し

た。

思っていた活用法とはまるで異なるが——その成果がここに来て開花する！

「神よ、無形の翼を私に与えたもう——『来翔』！」

瞬間、地面に叩きつけられそうになっていた所を、上昇気流がふわりと持ち上げる。僅かに落下の勢いは残るが、それでも大事には至らない。たかが片腕を奇妙な方向に曲げた程度。これならばまだ立てる。命を賭けられる。

痛みに脂汗を流しつつも、愛子は息を吸い込み、そして『風音』と共に叫ぶ。

「私が——【豊穰の女神】！ 畑山愛子です！」

ただそれだけの簡潔な言葉。愛子の存在に気が付いた『神の使徒』は例外無く驚くが：それ以上の驚愕を見せる者達がそこにはいる。

そもそも第一目標として優花の確保が優先されたのは愛子に対するガードが嚴重である為だ。優先度としては愛子の方が勿論高い。優花はあくまでも清水への人質、それを考えれば優先度の優劣は明らか。

しかし愛子が狙われるなど神殿騎士や『神の使徒』は百も承知。つまりは難易度が恐ろしく高い。だからこそ容易く、かつメリットが大きい優花の確保を先としたのだ。

だがもし無防備な状態で【豊穰の女神】が現れたとするならば？ それら話が異なる。

魔物にとって生け捕りよりも殺害の方が容易い。そして小さな手柄よりも大きな手柄の方が絶対的に良い。あまりにも単純な話だ。故にすぐ側に現れた大将首に魔物等は思考を奪われる。作戦を崩される。

故に——生じる隙。

「シィッ!!」

舌舐めずりをする『グロル』の内一匹の目にナイフが突き刺さる。

「えいっ！」

「オラァッ!!」

また別の『グロル』の眼前に迫るは鞭と曲刀。直撃とまでは言わないが、微かに血の色が見えた。

「眼前の尽く。邪悪なる眼よ。私はその全てを白き<sup>ひつき</sup>柩に運ぶ。——」  
凍柩“！”

『キメラ』は非常に強力な敵だ。しかし行動の障害に特化した上級魔法の前には、その動きを止めざるを得ない。ピキピキと音を立て、凝固する足を切っ掛けに氷が『キメラ』を封じていく。

僅かな間に突かれた攻撃の数々。だが彼等はただの魔物では無い。『神の使徒』の攻撃を直で受けてもなお、『グロル』は倒れる気配が無い。『キメラ』もその巨体で氷を無理やり引き剥がそうとしている。

宿る殺意は尚も高まる。

だがそれも：バリケードの向こうから光が現れるまでだった。

「二万翔羽ばたき、天へと至れ——」  
“天翔閃”！”

光魔法上級魔法、  
“天翔閃”。地面を抉り、迫る極光の刃が二つ。それはそれぞれの『グロル』へと放たれた。外にいた『グロル』を文字通り灰塵へと化した力が猛威を振るった。

通常の状態ならば或いは避けられたのかも知れない。しかし少ないダメージを負い、しかも相手は神殿騎士。手負いの魔物相手に逃れられる筈がなかった。

結果は直撃。つい先、外で繰り広げられた一撃と同様に二体の『グロル』は吹き飛んでしまった。

そして二人の神殿騎士がそのまま着地。そしてすぐ様に愛子の方へ向きやると、必死の形相で叫んだ。

「愛子！ 無事ですか!?!」

「一体何を為されているのですか!?!」

「すみません。クリスさん、ジェイドさん。ですがこうするのが一番速いかと…」

確かに愛子の判断は神殿騎士をバリケードの中へと駆け付けさせる手としてはかなりの最善手だ。単に言葉で言うよりも、駆け付けねばならない理由を作る方が手っ取り早い。魔物に隙を作り出す事も兼ねると悪い手では無い。無いのだが…。

「愛ちゃん先生腕折れてるよ!!」

「そんな事よりも園部さんの治療を！」

「骨折はそんな事じゃ無く無い!? 私よりも愛子ちゃん先生を早く！」

「どっちも大人しく治療受けてくれないかなー!?」

「ははーん。もしや愛ちゃん先生って見た目の割にヤベーな？」

「異議無えわ…」

あまりにも愛子が自分に無頓着過ぎた。今も片腕がぷらぷらとしているにも関わらず、素知らぬ顔で優花に駆け寄っている。

一方で優花も優花で流血沙汰になっているにも関わらず愛子を優先しようとしている。先程まで死の縁にいたと言うのにこれである。

女子二名のそのメンタルの硬さに戦慄するのは『神の使徒』男子組だ。これに関しては男子が意固地なしと言う訳ではない。単に二人が度の過ぎたお人好しなだけである。

「それにしてもデビッドさんやチェイスさん達は…?」

「彼等は十体目の魔物仕留めに行っています。二人掛かりですから直ぐに終わるでしょう。強くはありましたが…アレは群れてこそ強さを発揮する類ですね。単独撃破ならば何の問題も無い」

「あとは魔族の同行も調べて来る模様です。ですが恐らく芳しい結果とはなるでしょう。今の所姿すら晒して居ませんからね。…ああ、奈々殿。私も手伝いましょう」

だが神殿騎士の助力もあり、『キメラ』も完全に凍った。攻撃には凄まじい耐久性を誇ったが、対束縛系魔法に対しては耐久性があまり無かったらしい。まだ意識はあるのか、時折氷塊は動く。だがそれも間も無くの話だろう。

魔族は見つかっていないが、それでもほぼ全ての戦力を削いだ。敵もまだ隠し手札が無い限りは何もして来ないだろう。

何処か勝利のムードが漂い、気が緩み出す一行。

その雰囲気断絶する様に、バリケードの遙か向こう…空から、水弾は降り掛かる。

——ドドドドドドドドドドドドドドドドドツツツ!!!!

「——散らせっ！　『風壁』!!」

優れた勘により、ジェイドとクリスは荒ぶる乱気流を生み出し、『水弾』の一部を弾く。しかし何せ弾丸数が多い。愛子や『神の使徒』達に被弾せぬ様、その一部を己等の鎧で庇った。

神殿騎士の鎧は準アーティファクト。魔力さえ滾らせれば優秀な魔力耐性を発揮する。しかしそれでも尚鎧は剥落し…彼等の体からは血が噴き出していた。

「ジェイドさん!?　クリスさん!」

「我々は良い！　それよりも一体何処から——!」

射撃はバリケードの向こうから放たれた。バリケードは一部『キメラ』により破壊されているものの、未だ尚健在。外部からの視界をシャットダウンしている。

適当に放っている？　しかしそれにしては射撃は精密だ。ほぼ全弾愛子らへと狙撃されていた。神殿騎士等が居なければ全滅していただろう。

しかも『水弾』は一つ一つカーブを描き、射撃者の位置を特定しない様に放たれている。更にはバリケードの向こうよりも遙か遠くから放って尚、確かな威力が込められていた。

(そもそもそんな腕があるなら——何故これまで使わなかった!?)

『水弾』の雨は一度止まる。恐らくは場所を特定されない為の移動だろう。その間に建物の壁へと隠れるが…先程の精密さを見るに大した意味は無いだろう。

そうして間も無く…二回目の掃射が行われた。

その『水弾』は攻撃では無かった。だが——この状況では最悪の一手だった。

空より振り捧ぐ『水弾』は、『キメラ』の水の枢を尽く砕く。全身が凍って間も無くの為、『キメラ』は僅かな身震いをする、再び進撃を始めた。

誰かの——息を呑む声が聞こえた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——ふむ。忌々しき神殿騎士め。まさかこの私が出る事となるとは

な…」

暗い暗い森の中。片方の目を閉じながら、レイスは掌の魔法陣を輝かせる。

レイスが手袋に仕込んである魔法陣は二つ。一つ目は「破断」、防御の貫通に置いては数多い中級魔法の中でも最上位クラス。逃げるハジメに用いた魔法だ。

そして今回使った魔法はあまりにもシンプルな初級魔法、「水弾」。レイス程の実力者でもなおたかが初級魔法。しかし連射性とコストの低さに於いては…ご覧の通りだ。

同時にレイスはもう一つ魔法を使っている。闇属性初級補助魔法「共眼」。その性能は『使い魔との視界共有』だ。そしてその使い魔とは唯一の生存個体、『キメラ』に他ならない。

『キメラ』はタフだ。先程の氷の中でも悠々として生存していた。だからこそバリケードに覆われる砦に、レイスは「水弾」を正確に放つ事が出来た。

「共眼」は対象との距離が離れている程魔力を消費するが、それに関してはレイスは割り切っている。もう使い魔のほぼ全てが死んでいるのだ。躊躇う必要が、もう彼には無かった。

神殿騎士二名が此方に向かっていているが…意味は無い。レイスの魔法はあまりにも小規模。しかも発射地点をカーブにより誤魔化している。つまりは特定があまりにも困難だ。

一箇所に留まっていたならば話は別だろうが、生憎レイスは度々移動を繰り返している。射撃者の基本ではあるが、これだけで居場所の特定はずつと難しくなるものだ。

『キメラ』も解放した。そしてレイスも畳み掛けるように「水弾」を放ち続けるのみだ。

「さあ、長かったが…終わらせよう」

そして——掌の魔法陣に魔力を循環させた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「清水くん!? それ正気!? 出来る気しないんだけど!」

「分かってらあ! だけどこれしかもう方法はねえんだよ!」

深い深い森の奥。「ウル」からは残り1キロ程。走れば着くが、今起こっている事態を考えると、着く頃には終わってしまったている可能性が高い。

彼等は今、周囲の中でも一番高い木の上にいる。高さは「ウル」の見張り台程か。川の周囲にあるこの木は他よりも一段と高い。

ではここから何をする気か。それは清水が語る。

だがそれはあまりにも：現実味の無い、言ってしまうえば子供の狂言にも聞こえた。

だが清水はそれを、言つてのける。

「ここから：レイスの野郎に一発かますぞ!!」

——夜明けまで残り二十分。

——『始まりの戦い』は、今正しく終点へと向かっていた。

## 15、『始まりの戦い』下

『ピイー…』

ピナは現在、滞空していた。狭く無い土地である【ウル】を俯瞰出来る程の高さ、逆に言えばそれほどかけ離れた場所にピナはいる。状況を俯瞰するにしても遠過ぎる距離。

しかしそれは全て主が命に従ったの事。

ピナの種族は直接的な戦闘能力を持たない。魔物にしては直接的な被害は少なく、単体としては脅威にすら値しないとまでされている。

しかし代わりに使い魔、特に闇魔法使いにとってはこれ以上無く優秀とされている。それはピナが持つ固有魔法が起因しての事。

——『千里眼』

能力はあまりにもシンプル。遠くからでも物が見える、ただそれだけの技能だ。

しかし戦場の状況理解やスパイ、暗躍にはこれ以上無いアドバンテージを誇る。当然ながら魔物故普通の人間には得た情報の共有は不可能だが…一部の天職を持つ物ならば話は異なる。

【闇術師】はその一部に類する天職だ。その有用性は闇属性のある魔法により保障されている。

——『闇属性初級魔法『共眼』』

それはある生物の視界を別の生物へと共有する魔法。そして何とも偶然な事に、レイスと同じ魔法を今清水は使用している。

そしてその組み合わせにより、清水幸利はレイスを見下ろしている。遙か遠くから、獲物を睨み付けている。

『ピュイイイ!!』

戦場の動向を法螺貝で知らせる様に、ピナはその小さな身の丈とは反した鳴き声を夜空へ響かせた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「もう時間がねえ！ 手短かに説明すんぞ！」

「…了解」



「つつても単純だ。お前が投擲武器『錬成』して、ここからアイツにぶち当てる。以上だ！ さあ、やんぞー！」

「待て待て待て待て待て待て待て！」

確かに清水は手短かに説明すると言ったが…あまりにも簡易的過ぎるし、無茶振りだ。ハジメは全力で静止の声を張り上げた。

「無茶にも程があるでしょ！ まずあの魔人何処かもここからじゃ見えないし！ 見えたとしても筋力も、コントロール性能もないし！ 小学生でもそんな無茶な作戦出さないよ!！」

続々と無茶だと言う理由をピックアップしていくハジメ。だがあまりにもその通りである。清水の言う作戦とは現実性の無い、言わば「あんな事いいな出来たらいいな」という無い物ねだりである。

しかし清水はそう抗議するハジメを他所にローブに刻まれる魔法陣を血色に輝かせた。

「だったら一つ一つ解決してやる…其の瞳は私の物——『共眼』」

瞬間、ハジメの片目に映る光景が先程までとはまるで違う物となった。遙か上空から何かを、「ウル」を見下ろしている。そんな非現実的な視界だった。

すると森の浅い場所に魔族の姿を見つけた。密やかに森の間を縫って移動している。追っ手である神殿騎士の目を逃れる為、魔族は一箇所には止まらない。

そして奇妙な事にハジメとその魔族の距離がどれだけ離れているか、どう言う方向にいるか、それらが何となくではあるが理解出来た。

「ピナとの視界を共有した。これでどうだ？」

「…確かに場所は分かるよ。不思議な感覚だけど…ここからの相対位置も理解できる」

「よし、そんじや次だ。お前に『縛解』って魔法を掛ける…単純に言えばリミッター外しだ。闇魔法上級魔法…しかも珍しい事に強化系統だ」

「ちよっ!? はあ!?!」

素直に感心していたハジメであったが、続く清水の言葉には驚愕と

疑念が湧いて出た。

だがそれも仕方が無いだろう。何せその「縛解」とやらがあれば【ウル】に今にでも辿り着けた筈だ。ついでに言えば『グロール』との戦いもすぐに済ませられたかもしれない。それを今の今まで隠していた訳だ。何故黙っていたのか、と疑うのは当然の帰結であった。

そしてそれを悟ったのか、清水は「縛解」のデメリットを簡易的に説明した。

「すまねえが、縛解はとんだじやじや馬魔法なんだよ。発動時間は一分。効果は魔力暴走だ。強化魔法なんて名前だけ…しかも使用条件も厳しい。闇魔法における欠陥品だ」

「おお…」

「しかも魔力暴走だからな。使用後は使い物にならなくなる。まあ、体内魔力が活性化するって事だからステータスは全体的に向上するが…一度っきりの強化だ。ぶっちゃけ「限界突破」よりもよほどピーキーだ。ま、そんなだけやっても一か八かだけだな」

「それなら行けるかな？」

「俺が言うのも何だが躊躇いねえな、お前」

「それ以外に僕らがやれる事は無いんだよね？」

「…おう、俺らがやれる事は無い」

「ならそれで行こう」

「…つくづく思うが、お前は話が早くて助かるよ」

魔力暴走はかなり重いデメリットだ。過剰な魔力は体に恩恵と共に確かなダメージを与える。強制的な身体制御の解除、発熱、発汗、一時的な色弱、痙攣、平衡感覚の喪失、血管の破壊など…上げれば本当にキリが無い。

また距離を把握し、身体強化が得られたとしてもここから魔族までの距離は1km程。正直に言って無謀とも言えた。

だがこれ以上時間を掛ける事はできない。何せ魔族の攻撃は今に『神の使徒』達を殺し兼ねない。今は神殿騎士達が守っているからこそどうにかなっているだけだ。背丈の高い木も今目の前にある木以上の物は見渡す限り存在しない。

故に大一番の勝負。ハジメは地面から投げ槍を「鍊成」した。

そして清水がハジメの背に掌を乗せる。そして血色の魔力を激らせる。と、「縛解」の詠唱を開始する。

「人は傀儡。糸を切れ、眼を写せ、意を担え」

「其は憧憬。枷を解き、声を上げ、意に従う」

「故に宣言する！ 解放は有りて！ 届かぬ蒼穹に願いを馳せよ！」

「縛解」は長文詠唱だ。人の体内魔力に干渉するのだから、当然それ相応の魔力量が必要となる。故に必然的に詠唱の節数も多くなる。

「縛解」の由来は少し、他の魔法とは毛色が異なっている。本来魔法の開発とは王宮魔法師などの様な名のある者達が神話から言葉を引き出す。神話から引用された言葉の数々は力を持ち、魔力を宿すのだ。

しかしこの魔法は「反逆者」に感化された一人の青年が生み出した魔法なのだそう。結果その男は聖教教会が裁きを下し、終身刑を迎えた。

その男の知識はとても良いとは言えず、それ故にお粗末な出来となっている。魔力消費の効率化、干渉力の増加、効果制御、全てが低レベル。上級魔法と言うのも単に使用する為に求められる技量が高いから、というだけで分類されている。

それでもなおこの魔法が成立しているのは、かつて凄まじい力を持って神に歯向かった「反逆者」。彼等の力を借りている事に起因する。力を持っていた者の名は、逸話は詠唱者に力を与える。神話も結局の所、エヒトの名を借りて成立しているのだ。実在の人物でも十分に成り立ち得る。

しかしお粗末な出来なのは変わらない。清水だって、この魔法を見つけた時使うなどとは思っていなかった。

だが今は、僅かにだがこの詠唱に共感を覚える。

製作者は憧れたのだろう。理不尽や他者を顧みず、己が道を突き進んで見せた「反逆者」の事を。だからこそ彼は、己の意志を詠唱に乗せたのだ。

そしてそれは無力ながらも走り続ける【鍊成師】その物で――

そんな事を考えていると、少しだけ笑みが溢れた。かつて彼が持ち得なかった『信頼』と『勇氣』。それを持つて最後の節文を語る。

——場面は整った。

「汝の戒め、今は在らず！ —— 『縛解』!!」

——さあ、最終局面だ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「汝の戒め、今は在らず！ —— 『縛解』!!」

瞬間、ハジメの身体から蒼色の魔力がこれでもかと言う程噴き出す。

同時にピナと共有していない方の視界が揺れた。色褪せていき、モノクロとなる。『縛解』の副次作用、それが早速現れたのだ。

急上昇するステータス、己の体の中で暴れ回る魔力。それを体内に留めつつも、ハジメは一つの確信を覚えた。

——未だ、足りない

確かに『縛解』の力は凄まじい。この距離からでももしかすれば届かせる事が出来るかもしれないと思うほどには、今ハジメは全能感を覚えていた。痛みや気持ち悪さはあるものの、その程度は我慢出来た。

しかし、飛ばす事は出来ても魔人族にはまず当たらないだろう。槍が着弾する頃には、その速度は容易に視認可能になるまで、落ちていく筈だ。

故にハジメの選択肢はただ一つ。その膨大さのあまり溢れ出る体内魔力、それを循環させ始めた。

「—— ツツツ!!」

循環は強化であると共に、毒だ。日頃ハジメが行う魔力循環は量が少ない故に単純な強化として成り立っている。しかし魔力暴走により丈を増やした魔力は更なるダメージをハジメへと与えていた。

全身に走る痛み。されどまだ、まだ足りない。幾度と無く循環を繰り返す。槍を肩より上に掲げ、投げる準備をしつつも鋼の精神で循環を行う。

やがて体内魔力によるダメージは外傷にも現れる。ベリベリと脆

い表皮が剥がれ始めたのだ。頬や首元、四肢の皮が血を嘔き、露出していく。

(まだ——まだっ！)

体内魔力はそれに従い外部へと顕著に現れる。ハジメを覆う様に溢れ出した体内魔力。蒼く静かに、されど荒々しく。魔力は天へと遡る様に放出された。

視界がチカチカと火花を散らした。歯を食い縛り続けたあまり、バキリとひび割れた。情報処理に限界が及んだのか、目から、鼻から、耳から血が流れる。

だが——

(まだっ——足りないっ!!)

足りない。大切な者を守る為には。この手から零さぬ為には。意地を貫き通すには。

初めて出来た友達だ。失いたく無い物だ。例え一度裏切り掛けたとて、ハジメには関係無い。

ただ単純に、明日も共に居たいと願うから——

「まだ、だあああああああああ!!!」

蒼く蒼く、眩くも輝く。そしてやがてそれは世界への侵略を開始した。

そして戦場に立つ尽くは『それ』を見た。

時間にして刹那。一瞬にも満たぬ、秒針の合間。

本来ならば有り得る筈の無い現象。魔力暴走に陥り、それでも尚先へ進もうとしたが故に与えられた奇跡。

それはまるで満天の蒼穹の様で。

南雲ハジメを中心として自然魔力の力場が円球を描いてみせた。

「何だ、あれは?」

「…綺麗」

「まだ、夜だよな?」

バリケードの中で喧騒に包まれていた民衆を見た。

「まさか、そんな事が…?」

「南雲殿…ですよね?」

森を突き進む神殿騎士達が見た。

「何だ…何が来ると言うのだ!?!」

予想を遥かに超えた事象を魔族が見た。

『ピピ…』

遥か上空の白翼の観察者が見た。

「…嗚呼、なんて素晴らしい…」

その更に上空、月の麓にて黄金の少女が目を輝かせる。

「…南雲君?」

生徒を守りつつ【豊穰の女神】はその蒼い光に誰かを見た。

「…おっそいのよ、あの馬鹿」

流血に寝そべる【投擲師】は悪態を付いた。

「——やっちまえ、南雲」

そして万感の感情と一途な信頼を込めて、親友の背中を押した。

だから、もう恐れる事は何も無かった。

自然魔力の力場が南雲ハジメというただの一点に収束する。それにより活性化された体で、跳躍した。

その節に脚が嫌な感触を伝えた。だが無視する。

皮が千切れるほどに握りしめる槍。極限まで後ろに引いた。

蒼は更に集う。槍を握りしめる拳へと。圧倒的な力を伝える。

魔人族は呆けている。否、ハジメの気迫に押され、何が来るのか怖いっている。

その刹那の隙を、南雲ハジメは見逃さなかった。

「あああああああああああああああああ!!!」

獣の咆哮を上げ、身を捻り振りかぶる。そしてハジメはその槍を振り抜いた。

槍は魔力の残滓を残し、突き進む。それはまるで流星の様で、蒼い尾を描きながら夜空を駆けた。

そして槍は一直線に飛び、魔人族へと迫った。魔人族が回避を試みようとした頃には、槍は眼前まで迫っていた。

「くっ——!?!」

眼を開き、脚を折り曲げ跳びのこうとするが——遅い。

槍は魔人族の指先を掠め、その左腕を吹き飛ばした。

——だが、譲れないのは互いに同じであった。

「貫け!・水の弾丸——ツツ!!」

魔人族、レイスは最後の足掻きを開始した。

ピナとの“共眼”によりそれを理解するハジメ。だが魔力暴走に重ねて自然魔力まで取り込んだハジメの肉体は、既に限界を迎えていた。

「…くそっ」

跳躍の勢いも失せ、ハジメは森の奥底へと失墜した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

レイス自身には魔族としての矜持がある。覚悟がある。

だからこそ想定外の一撃により死の瀬戸際に追いやられようと、レイスはバリケードの中へと「水弾」を放とうとした。

レイスは己の死を確信している。ここは人族の領域「ウル」、己の仲間は誰もいない、正しく四面楚歌。だからこそ清水を魔族へ引き込む選択肢は捨てた。

だがこの口が動く限り、殺す事に支障は無い。せめてもと【豊穰の女神】を撃ち抜く弾丸を創り出した。

「――「水弾」!!!」

そして口が詠唱を紡ぎ終わる。残された片腕に装填される「水弾」の数々。それが一斉に放たれた。

（――殺った）

そんな確信がレイスの頭を過ぎった。

「ああ、そうだ。レイス。俺と南雲はお前に負けた。完敗だ。俺達じゃお前を止められなかった」

森の中腹、ピナと視界を共有する清水は呟く。その視界には今にも魔法を「ウル」へと放とうとするレイスの姿が映っていた。

それはハジメの一撃でも尚、レイスを止め切れなかった事実の示唆。そして字面だけ見れば清水の独白は諦観を受け入れたとしか思えない、小さな呟き。

「ところでだ、レイス。俺は執念深いタイプだ。だからこそやられたからにはやり返す主義でな……」

清水は遙か遠くのレイスに語り掛ける。一時は仲間であり、イフを考えたならば戦友となれたかもしれない相手。そんなレイスに清水は僅かな親しみを込めていた。

だが道は違った。

清水にはもつと大切な馬鹿達があった。

清水自身を見つめる仲間がいた。



だから清水は——寸分たりとも絶望していない表情で言つてのけた。

「試合には負けた。だが…勝負には勝たせて貰うぞ、俺達全員でな」  
そして清水はレイスと二人の騎士を見下ろした。

「——は？」

レイスは思わず目を開いた。計算外、予想外…そんな事は幾らでもあつた。

清水幸利の裏切り、南雲ハジメという乱入者、「豊穰の女神」の囮、『キメラ』の弱点の早期発覚、『グロル』の全滅。極め付けにはつい先程の槍。幾度と無い異常事態イレギュラーに少くないダメージを受けつつも、レイスは己が務めを全うした。

しかし、それでもだ。

「——ようやく、見つけましたよ。魔人」

「手間を取らせおつて…『使徒』を、愛子を傷つけた罪！ 償つて貰うぞ！」

掃射された“水弾”の数々が一つも残る事無く切断された。神殿騎士のデビットとチエイスだ。その荘厳な鎧は赤く染まっている。ただしそれは全て道中に斬り伏せて来た魔物の返り血であると悟つたのはすぐの事だ。

レイスは彼らを見て思う。何故これほど早く、自分を探し出せたのかと。

レイスの潜伏は徹底していた。“水弾”は常にカーブを描き、発射箇所を誤魔化し続けていた。それに掃射を終える度、レイスはその場から離れていた。

偶然かもしれないが、それにしても奇襲が完璧であつた。レイスの“水弾”は容易に全て捌き切れるものではない。だと言うのに神殿騎士達は一つも残らず斬り伏せて見せた。

(ならば何故——ツツ!?)

思考を巡らせ、やがて気づく。己へと投擲された槍、その真意に。

「正直に言って、お前を倒す事は出来ない。お前は一流だ。ボロボロの俺達がお前に接近戦を挑んだとしても先ず無謀だ。だからそれは先ず諦めた」

木々の間を抜けながら、清水は痛みから意識を逸らすためか呟き続ける。もしくは作戦が上手くいったが故の興奮から来るものか。そんな事はどちらでも良かった。

「ならば遠距離から狙う方法だ。一撃程度なら喰らわせるかも知れないって一瞬考えたが…無理だな。そもそも当たるかも怪しい。届いた所でダメージを与えられるだけの攻撃力もないだろう。何ならお前は確実に急所は外してくる。ぶつちやけ攻撃としては意義が薄いだらうと考えたよ」

レイスは強者だ。魔人族は通常の人族の数倍のステータスを優に誇る。それ故に個体としては最強の種族なのだ。だからこそ倒す、という前提がある程度初期から清水は諦めていた。

「だから考え方を変えた。攻撃手段じゃなく、罠として遠距離から攻撃する事にした。他でも無い、お前のやり方だよ。レイス」

時に攻撃は何よりも意識を奪う罠になる。それはつい先の『グロル』との戦いにより身を持って実感している。例えば攻撃その物が当たらずとも、だ。

「お前は狡猾だ。目に付く違和感、それら全てに何らかの対策を講じる。そうじゃなくとも警戒を行う。だからこそ油断を突かれない限り、お前は隙を見せないんだらうな」

数多く存在しただらう異常事態<sup>イレギュラー</sup>。それでもなお任務が継続できる状態に出来たのは他ならぬレイスの手腕だ。予めの対策、もしくは新たに策を練る。厄介だ。しかしそれも意識出来る相手のみに限られる。

「だがお前にとって俺達は意識外の存在だ。何故ならとつくの前に戦いの場から突き放した存在だからだ。だからこそお前は俺達に気を

張る必要が無い。そして——唯一、俺達だけがお前の油断を突けるんだよ」

必要だったのは会心の一撃では無い。レイスにとっての意識外の一撃。当たらずとも良い。必要だったのは『考慮していない戦力がレイスを狙っている』と言う事実。

「南雲に作戦全部を伝えなかったのは時間が惜しいのもあるが：一番は『魔人を倒す』って言う気迫が欲しかった。その方が：お前もビビるだろ？」

あからさまに意識を釣ろうとする一撃では意味が無い。その一撃こそが真意であるとレイスに思い込ませ、本気で対処させねばならない。

だからこそハジメには「一撃をぶち当てる」事をオーダーしたのだが、見事ハジメは清水の想定を飛び越えてくれた。レイスの意識を完全に奪い取る一撃を、もの見事に繰り出した。

「そんでもって神殿騎士達は優秀だ。潜伏に徹しているお前なら兎も角、動揺を見せたお前なら見つけられるだろう。だからこうさせて貰った」

その結果が清水の右目の視界に広がっている。

「あー、本当に：一か八かの勝負だったよ。まあ、成功して何よりだが」

一か八か、というのは決してハジメの攻撃が当たるか否かでは無かった。ハジメはそう捉えたのだろうが、清水はそんな風に言ったつもりは無い。

レイスが動揺してくれるか、そして神殿騎士がその動揺を感知出来るか。そう言った意味の一か八かの大勝負だった。

「悪いな、レイス。大人に頼るのは子供の特権なんだ」

やがて騎士達の剣が眩しいまでに光を発する。それは神殿騎士達の信仰を如実に示す必殺技。『神』の名を冠する光属性魔法の奥義――

『―――』  
『神威』!!』

「だからどうか：数の暴力の前に沈んでくれ、レイス――」

当然、レイスにその声は聞こえる筈もない。ただ清水の呟きに応える様に、レイスは光の一撃に吹き飛ばされ：戦いは終結した。

それは、夜明けから残すところ十五分前の事であった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あー。あいつ何処に落ちた？ …くそつ、痛つてえな」

清水は脇腹を押さえながらも歩いた。深い怪我、多量の魔力消費、頭を回し続けた事。それら全てによる気怠さを良く感じながらも清水は歩く。

というのも戦いには勝った。だがその際にハジメは大分高くまで跳躍していた。そしてかつ足の骨を折っていた。

そんな状況で着地が無事に出来る筈もない。だからこそ一刻も早く見つけなければと茂る森の中、歩を進めた。

「死ぬなよ南雲…俺を生かしてくれやがったんだ。責任は取つて貰うぞ」

清水の表情には憎まれ口とは裏腹に、焦燥が良く見て取れた。せつかく気づいたのだ。己に取つて大切な者を。失いたく無いも思う者を。

「聞こえるか、南雲！…元気があんなら返事しろ！」

本来ならば魔物に見つかる可能性を講じ、荒げないであろう声。しかし今はそんな事に気を張っている余裕が無かった。何度も繰り返して呼び掛ける。

歩く足の幅が損なわれるスタミナとは反比例して大きくなって行く。それが今の清水の心境を良く示していた。

そして段々と地平線の境界から光が差し込み始める。それが時間の経過を実感させる。

「南雲———!!!」

堪え切れず清水は今日一番の声を張り上げた。遠くまで、地平線の彼方にまで届けと。

「——こんにちは、ハーちゃんのお友達さん」

それは、不意に現れた。

銀の破片が月の光を乱反射する中、月の化身は一レッドカーペットを歩むかの様に堂々と清水の元へと歩む。その出立ちからは妖しさと清廉さ、相反する二つを感じざるを得なかった。

木々の合間から差し込む月光を一身に浴びる彼女は、まるで夜を司る女神の様。彼女が目に入った途端、清水は思わず顔を赤らめてしまう程だ。

だがもう一点目を張る場所がある。それは彼女の隣で浮かぶ一人の男子。ねじ曲がっていた筈の脚や腕の痕跡も無い。ただ疲労があるのかすすうと寝息を立てていた。

「南雲っ！」

無事だったか、と涙ながらに近づこうとしたその時だ。

「戯れるな、ガキ風情が」

「——あ」

——気が付いた頃には跪いていた。

ついの先程まで寝ぼけていた身体が覚醒する。滝の様な発汗、音に聞こえる様な血の引き。：一瞬にして体に恐怖を刻まれた。

「まずは褒めておきましょうか。先程の魔法に策、実に見事です。攻撃に見せかけた陽動。自分達の力量を把握して居なければやり遂げる事は出来なかつたでしょう。素晴らしい、花丸を挙げます」

にこやかな笑みを携え、賞賛する美少女。本来ならば赤面なり何なりする所なのだろうが、今の清水にはそんな余裕が無い。

ひたすらに恐ろしかった。目の前にいる少女が。

体が、脳が、魂が、臆病に震えていた。レイス相手には燃やせた勇氣。だが今は心の奥底で燻ってしまった。

絶対的に隔絶した実力差。それが両者間には存在する。工夫次第でどうこうなる相手では無い。恐らくは彼女にとって清水は羽虫とそう変わらない。潰そうと思えばいつでも潰せる存在だ。

恐らくは彼女がつい先の戦いに一度介入したならば、一瞬の合間に終わっていただろう。

ならば何故今の今まで介入して来なかったのか。その理由を推測しようとしたが、思考は彼女の言葉により遮られた。

「ですが貴方が一度仲間を裏切り、私欲のままに争いを起こそうとした事実は変わらない」

不意に抜け落ちた表情。代わりに絶対零度の瞳が清水に向けられた。だがその奥底に確かな怒りが垣間見えた気がした。

「我々は他ならぬ人が好きです。何気の無い平穏が好きです。皆が肩を組み合う事が好きです。何よりも人の意志が、大好きです。その為ならばこの身がどれだけ穢れようと構いません」

胸の前に両手を添え、手を握る。人に対する想い。それを胸に、彼女は生きている。それこそが恐らくは彼女の意志。

「だからこそ…私は貴方に聞きたい。貴方の嘘偽りの無い意志を」

不意に清水と目があつた。その視線に清水は言語化し難い不快感を感じた。

だが清水の思考など考慮もしない。少女は尋ねる。

「貴方はもう人族を裏切らないと、そう誓えますか？」

その質問は質問とも言えない程シンプルな物だった。待っている答えはそうだと誓う事だけ。

しかしそれは清水の本心ではない。何かまたあれば人族を裏切るかもしれない。そんな自分本位でどうしようも無い男が自分だ。

そして目の前の彼女には、字面だけで語れど見抜かれる。そんな確信があつた。

ならばどう答えれば良いと言うのか。

——ただそんな意思に反し、口は迷う事無く開いた。

「俺は…断言出来ません。正直に言つて裏切る可能性は低く無いと思います。また何か企んで、地位を掴もうとする様な気もする様な…。未来の事だから…此処でそれを誓えつて言われても正直無理です」

少女の眉が胡乱げに上がった。どう言う心境なのかは読めない。だがまだ首は繋がっている。どうやら即殺と言うわけでは無い様だ。だから続けて言葉を紡いだ。

「でも……これだけなら言い切れる。俺はもう大切な者を裏切らない。あいつらには……もう心配を掛けない。それだけは必ず守るって……この場で、誓います」

「……………」

これが紛れも無い清水の本音。もう、二人を裏切りはしないと云う事だけは誓える。もう『大切』を自ら手放す真似はしないと、己の魂に刻み込む。

それに対して少女は俯いたまま黙っている。表情が見すら見えぬまま、時間ばかりが過ぎて行く。正直恐怖でどうにかなりそうだったが、ありつただけの忍耐で耐える。

やがて何分経っただろうか。それとも数秒だったのだろうか。

「…フフツ」

「!?」

一声目は吹きこぼれた笑い声だった。上品に指で口を押さえつつ、堪え切れなかったのか笑っている。

場違いな反応に清水は思わず驚く。その一方で何事も無かったように、少女は最初のニコやかな笑顔を見せた。

「…失礼。此処に来てから本当に面白い事ばかりだと思ひまして。普通殺されかね無い所で嘘偽り無く話します? 本当に貴方達はお馬鹿さんばかりですよ。ああ、面白くて堪らないです」

貴方達、というのは恐らくそこでプカプカと浮かんでいる南雲アホを含めての話だろう。何となくそれだけは分かった。一緒にされるのは不本意だが納得は出来た。清水は頷く。

「申し訳ありません。貴方は思っていたよりも真面目な方なんです。ね。悪びれてるだけで、ちゃんとした良い子です。ハーちゃんが気に入るのも分かります」

「は? え? っていうかハーちゃんって?」

急なベタ褒めに照れが隠せない清水。あと遅れながらも、『ハーちゃん』という呼称が耳に引っかかった。ついつい尋ねてしまう。

だが少女は当然の如くスルー。そして空間に穴を開けると、その中から一冊の本を取り出す。

「貴方は正直者ですね。褒美に治癒魔法とハーちゃん、あとこの特秘魔導書…全部あげちゃいます」

「泉の女神様か何かですか？ 有り難いですけど。というか異世界人が何でイソップ物語知ってるんですか？」

「乙女に秘密は付き物ですよ？」

「アツハイ」

すると清水の体が黄金の魔力光に覆われる。一瞬慌てたがそれが癒しを齎すものだとすぐに分かった。清水の脇腹や手に出来た傷が違和感が無いレベルまで回復を果たした。

そうして五体満足に返った清水の元に一冊の本とハジメが浮遊して差し出された。後どうやら『ハーちゃん』はハジメの事で良いらしい。清水は内心「ふーん、ほーん」となった。

何だか「コイツ、このまま此処に置いて帰っていいんじゃないかね？」と清水が思い始めた頃、少女は楽しげに清水へと語り掛ける。

「フッフ。散歩はやっぱり良いものです。面白い物がいっぱい見られました。とつても満足しました」

「えーっと、それは何よりで？」

「ええ…むむっ、ですが楽しい時間もこれで終わりですね。帰る時間です」

少女が見詰める方向を見ると、太陽の光が清水の瞳を焼いた。あれだけ長かった夜が、終わりを迎えていた。

それに感慨深さやら達成感やらを感じていると、背後から声が掛かった。

後ろを向くのは何故だか憚られた。見ては行けない、と本能でも無い何かを訴えかけた。

「ハーちゃんをどうか宜しくお願いしますね？ きつとハーちゃんは無茶ばかりしちゃうでしょうから…良き友として、相棒として隣に居てあげて下さい」

「…最後に一つ聞いて良いですか？」

「若さの秘訣かい？」

「違います。つーか、本当に何でサブカルチャーに詳しいんですか？」



「乙女に秘密は付き物ですよ？」

「それでゴリ押す気か」

凄いなのか、それとも単なる愉快犯なのか。清水にはよく分からない。もしかしたら両方なのかも知れないが、考える気には特にならなかった。

そんな事よりも、清水には聞きたい事があつたから。

「何で…そんなに南雲に味方するんですか？ アンタは、南雲に何を望んでるんですか？」

「…なる程、確かに貴方にとっては気になる事かも知れませんが」

それはハジメの友を名乗るからには尋ねなければならぬ事だった。少女はハジメを懇意にしている。だがそれが悪意に利用する為になっている事ならば、清水は死んでも止めねばならない。

少女は一瞬黙り込んだ。陽の光が差す中、僅かな静寂が訪れる。

「今は答えられません。それを知るにはまだ早過ぎる。我々の目的を大々的に知られる訳には行きませんから」

やがてその沈黙は破られた。しかしその答えは清水にとって満足のいく物では無い。背後を振り返ろうとして——半透明の少女は笑っていた。

「——ですが敢えて言うならば、私が彼のファンだから。それだけです。それが嘘偽りの無い私の、精一杯の本音です」

その姿とは裏腹に声は明確に辺り一帯に響いた。耳にただけでも分かる、様々な感情がその一言には詰められていた。

やがて太陽が地平線から全身を出す。眩しいまでの陽光が、「ウル」の森に新たな朝の訪れを伝えた。

そして彼女は完全にその姿を消失させた。置き土産として、短い言葉だけを残して。

「それでは。ハーちゃんにも伝えてください。またいずれ会いましょう」と

まるで幻想の様に、もうそこに彼女はいなかった。夢でも見ていたのでは無いかと思うが、完治した体や手に持つ魔導書が彼女の存在を実感した。

彼女は何者なのか。それは分からない。だが「またいずれ」と言った。ならばまた己らの前に姿を現すのだろう。そんな確信があった。「…たく、コイツ呑気に寝やがって。次日覚ましたらあの美少女について根掘り葉掘り聞かなきゃな」

地面で寝ているハジメを引つ掴み、背負う。有り難いことに先程の治療で清水の体は癒えた。精神的な疲労などは未だあるが、1Km背負って歩く分には…まあ、何回かに分けてやれば問題ないだろう。

「…ん。清水、くん？」

すると背負った際の振動で起きたのか、背中から声が掛かった。この数ヶ月でよく親しんだ、『大切』の声だ。

「何だお前、起きたのか？」

数時間前の自分はもう一度こんな風に話せるとは思っていなかった。そんな当たり前を有り難く感じつつも、一切表面に出すこと無く清水は答えた。

「うん、起きたよ」

「そつか。なら降りろ。もうこっちもへトへトなんだ。お前だけ休むなんて理不尽あってたまるか」

「あはは。そうだね、そうしよう。よいしょつ、と」

結局背負ったのは一瞬だったな、と思いつつも二人並んで歩く。互いに治療はされているが、精神的な疲労が酷い。ふらふらとゆっくり歩を進めて行く。

「ああそうだ。南雲、帰ったら聞きたいことがあるんだよ。根掘り葉掘り事情聴取するから覚悟しとけ。なお拒否権は無い」

「え？ 何？ 怖いんだけど」

「俺だって怖い目あったんだから、フェアだな」

「僕が寝てる間に何があったのさ？」

くだらない話ばかりだ。激しい戦いの後とはまるで思えない。高校生の会話。そんな何気ない話を繰り返しつつ歩く。

『南雲ー！ 清水ー！ 何処いんのよー!?!』

『ピピッ！ ピピィー!』

『白鳩さんがこっちだと言っていますよ！ 多分!』

『グツジョブです！ 愛ちゃん先生！』

すると己らが進む先から声が複数聞こえて来る。馴染みのある声ばかりだ。そこでようやく強く実感する。生き残ったのだと。

ハジメも清水と同じ思いだったのか、互いに顔を見合わせる。あまりにその息が相過ぎていて、少し気持ち悪かった。そんな所もぴったりで、二人揃って噴き出した。

そんな些細な事でひとしきり笑った後、正面を向く。

「さて…帰るか、南雲。俺達の居場所に」

「うん。帰ろう。きつと皆んなが待つてる」

陽光が満ち満ちる森の先へと二人は歩く。

きつと少しした後、森に喧しい声が響くだろう。ご機嫌な鳴き声が幾度と無く聞こえるだろう。何度も何度も五体満足か確認されるだろう。

だがそれらが終わると、きつと皆んなが口を揃えてこう言うだろう。

——お帰りなさい、と。

## 16、誇りを胸に、罰を背に

「二人とも、反省してる?」

「はい、バツチリしてます。なので木串は勘弁を、園部様」

「園部さん。南雲くん達がすぐ様土下座しましたが、一体何が…?」

『ピエツピツピ!』

「まあいいけど…ちょっと待ちなさい。そのエゲツない量の血は何よ?」

「…カエリチダヨ? ネ、シミズクン」

「ソウダゾ? ジツサイオレタチニハキズヒトツネエヨ?」

「…服を見るからに内側から滲み出てるわね? どうやって治癒したかは分からないけれど…説明お願い出来る?」

「僕は悪くない! 清水くんが悪い!」

「俺は悪くねえ! 南雲が悪い!」

「君(お前)、売りやがったな!」

『アホや、アホがおる…』

「良く死にたがるわね、馬鹿共…二人とも説教よ。——先生」

「はい、園部さん。お手伝いします」

「ヤメロー! シニタクナアイ! シニタクナアイ!」

「助けてチェ○ソーマン!」

「チェンソー○ンでも心臓くり抜けば死ぬわよね、確か」

「女子がそんな事言っちゃいけません!」

ニコニコと迫り来る恐怖<sup>二人</sup>。ハジメ達は後ろに下がりつつも逃げるが、精神的にボロボロ。間も無く転んだ。

万事休すか、そう思った時だった。

「見つけましたよ。愛子、皆様」

「…ふん。無事か、【錬成師】も」

「デビッドさん、チェイスさん。ご無事で何よりです」

現れたのは二人の神殿騎士、デビッドとチェイスだ。森でレイスを仕留めてからここに来たのだろう。ハジメと清水とは違い、鎧には凄まじい量の返り血が付着していた。

二人は愛子の方に向き、「恐悦至極」とばかりに拳を作り胸に当てた。そしてハジメ達を一瞥し一拍。指差して愛子達に尋ねる。

「それで……この状況は？」

「無茶の過ぎるお二人に説教を始めます」

「人をハラハラさせてくれましたから。タダで返す気は無いです」

「なるほどなるほど。それは良いですね。このチェイス、参加させて頂きます」

「ならば私もそうさせて貰おう。覚悟するが良い、貴様ら」

「増えたり!」

「なんでさ!」

二人は戦慄した。最早殺意すら垣間見える、己らを囲い込む四人に。当然逃げる事など出来やしない。包囲網を抜ける間も無く捕まってしまうだろう。

だが同時に二人の神殿騎士の反応に違和感を覚える。彼等が忠誠を誓う愛子、彼女への対応が少しばかり上の空の様に感じられたのだ。優花に対しても同様だ。ふと感じたそれにハジメ達は首を傾げる。

その回答は間も無く訪れた。

「ですが……それならば愛子達も当然説教されるべきでは？」

「園部優花、君もだな」

「……………WHY?」

まさか自分達がタゲられるなど思いもしなかった優花と愛子。二人は普段ならしない様な、少しばかり頓珍漢な反応を示した。

一方でハジメ達はもう自分達がタゲから外れられないと分かっている為、女子二人を巻き込む事にシフトした。お目目ギラギラ。逃がさねえ!

そんな男子お馬鹿二人を他所に神殿騎士達はまず優花の方に向く。身構える優花。しかしそんなファイティングポーズも……直ぐに剥がれた。

「優花殿は最初の一撃は兎も角、負傷してからも普通に魔物と戦っていましたよね?」

「……………」

「視線を逸らさないで下さい」

「おい、南雲。偉そうに言っときながらコイツ、俺らと同類だぞ？」

「そうだね。完全に自分を棚に上げてたパターンだよね？」

「だな。よし園部こっち座れ」

「Welcome!!」

「これが…ミイラ取りがミイラになるって事なのね…」

ハジメ達と完全同類である事が悲しかったのだろうか。優花は地に四つん這いとなり、伏した。ただ男子二人の煽りにはムカついたのか、木串が各一本ずつ飛び交った。当然刺さった。痛い。

そして優花も並ぶ様に正座となった。三人仲良く並んでいる。なおその目は死んでいる。見事なシンクロであった。

神殿騎士達は止まらない。続いて愛子へと視線を飛ばした。

「愛子：君は言うまでもなくだ」

「何故ですか!? 私は何も変な事は——」

「飛び降り自殺未遂」

「…」

「囧として魔物を誘導」

「……」

「なお非戦闘職」

「……………(スツ)」

「確かに箇条書きして行けば、愛ちゃん先生が一番アウトね」

「流石は俺たちの先生だな！」

「蛙の子は蛙と良く言ったもんだよ！」

「清水幸利も、そうだそうだと言っています」

「アンタらはいったい何なのよ」

愛子は抵抗も無く正座した。正しい大人は己の過ちを認められるという物。彼女も例外では無い。生徒の手本となるべく、綺麗な正座を果たした。

全員巻き込めたハジメと清水は謎のハイテンション。当然優花が白い目で見ってくるがスルー。イエーイとハイタッチだ。

「…静粛にしろ。今回ばかりは愛子もだ」

「アツハイ」

「…この馬鹿達に絆されたせいよ、絶対」

「うう…」

「静粛に、と聞こえないか？」

「…」

だがその喜びも束の間。神殿騎士デビッドの睨みにより、全員がビクツと震えた。

抵抗の意思など、もう有りはしなかった。全員がハイライトを消し、これから先にあるであろう説教地獄を受け入れた。

なおこの説教は計二時間に及んだ。当然ながら肉体的にも精神的にも限界の来ていた四人は終わる頃には屍のよう。それに対しデビッドは「やらねばならない事だった」と悔いの無い顔をしていたと言う。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

その後は全員が死んだように眠った。

殆どの『使徒』にとつては「オルクス大迷宮」以来の実戦。それがどれだけの精神的な負荷となるだろうか。更に言えば数ヶ月前までは高校生だったのだ。よくも乗り越えられたと賞賛されるべきだろう。

町は『湖信祭』への最終準備を進めていたが、その賑わう音にも彼等が目を覚ます事は無かった。そして当然、町の人々も彼らを起こす様な真似はしなかった。

唯一神殿騎士達は『使徒』達の守護の為、眠る事は無かった。扉の前で依然として仁王立ちし続けた。町の人々はそれにより、益々神殿騎士達へ畏怖を募らせていった。

「ふわあゝ、よく寝たゝ」

「ねー。あつ、男子も来てるじゃん」

「おう。お先に昼飯食ってんぞ」

「よく入るねゝ。あ、ニルシツシルくださいー」

「私もー」

「女子組めっちゃ食うじゃん。あんな戦いの後なのに」

「菅原も宮崎ものほほんとしてるけど強メンタルだよな」

「異論ねーわ」

やがて昼過ぎに『使徒』の面々は起き始めて行った。菅原妙子と宮崎奈々が腹をすかせ、最寄りの食堂へと足を運ぶ。するとそこには相川昇、仁村明人、玉井淳史の三人が早くも飯にありついていた。

そこからは普段の様に気の置けない会話をした。ニルシツシルが上手いだとか、依頼も終わるから米とはサヨナラだとか、『湖信祭』が楽しみだとか…そんな他愛もない話だった。

だがやがて彼等彼女等は空いた席を気にし始めた。幾つかある空席。護衛を未だ務める神殿騎士の分を除けば…それは四つ存在する。誰が初めにその席へと目をやったろうか。釣られる様に皆がその席に気付いていく。僅かに訪れる静寂。やがて奈々がぼそりと呟いた。

「愛ちゃん先生に優花は…まだ寝てるんだよね」

「…アイツらもか」

「…おお」

「うん…」

『アイツら』が誰か、と言うのは皆一様に気付いた。ただこれまでの事もあり、直接名を呼ぶ事は憚られた。

思い出すのは先日魅せられた『蒼』。そして【オルクス大迷宮】での同じ光の輝き。

果たしてそれらが彼等の目にどう映ったか、言うまでもないだろう。

「…助けられたんだな、俺たち」

「二回目、だよな？」

「うん。【オルクス大迷宮】でも助けてもらったんだよね」

「今考えれば…何で味方になれなかったんだって話だけだな」

「なんて言うか…情けないね、私たち」

「だな」

「本当に、そうだね」

彼等彼女等は決してハジメが【裏切り者】だとは思ってはいなかった



た。何せ己を賭して本気で守り抜いてくれたのがハジメだ。疑える筈もない。

しかし同時に彼等彼女等はたかが学生。そして周囲はハジメへの疑惑を疑う事は無かった。一部抗議の声を上げる者もいたし、沈黙を突き通す者達もいた。自分達も後者だった。

だが前者になる事は出来なかった。周囲の同調圧力、それに真つ向から反する事が出来なかった。本気で南雲ハジメの味方だと言えなかった。

年端も行かない少年少女には仕方の無い話、しかしそれを悔いる事もまた仕方の無い話だった。

しかし同時に彼等彼女等は決心する。今度こそは、と。

「もう、裏切れねーな」

「というか、一生返し切れないぐらい恩がある気がするんだよね…」

「だったら南雲の気が済むまで味方で居ないとな」

「愛ちゃん先生護衛隊兼南雲支援隊に名前変更か？」

「一応、園部と清水の意見を聞く意味は…無いな」

「…いや、二人は逆じゃ無い？」

「確かに」

「流石は南雲支援隊の特攻隊長と参謀、伊達じゃねーわ」

「誰だよりリーダー？」

「白崎さん？」

「ぐうの音も出ない完璧な回答止めろ」

否定する者は誰も居ない。彼等彼女等は守られてばかりでいいと思う子供<sup>ガキ</sup>では無い。確かな力と覚悟を持つ『神の使徒』だ。

味方になれなかったという過去の彼等彼女等への罪はあまりにも重い。少なくとも己等自身にとつては限り無く。これからも幾度と無く自責を繰り返すだろう。

だから「正しい」と思った道を見て見ぬふりする訳には行かない。

「取り敢えず…次南雲くんが起きた時、みんなで謝りに行く？」

「異論なし！」

「…許してもらえるかな？」

「いや、別に南雲が俺たちを許さなくてもいいだろ。俺たちがずっと南雲の味方で居れば良い話だ」

「…そりゃそつか！ うん！ そうしょ！」

「いい事言うな！ 昇！」

相川昇の言葉に皆頷く。そうだ、己等はハジメに許される為に味方になるのでは無い。これ以上ハジメが苦しまぬ様にする為に助けたいと、そう思ったのだ。

だがそれはそれとして謝罪の言葉は必要だろう。今まで見て見ぬふりをして来た事、味方になり切れなかった事を詫びずして味方になるうなど厚顔無恥にも程がある。

過去に戻り清算する事など出来はしない。そんな事が出来るならば『後悔』などありはしない。

しかしだからこそ、人は悔い改めるといふ事が出来るのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「うぎぎぎ…身体中が痛いな」

もうじきに深夜へと突入しようかとする頃、ようやくハジメは目を覚ました。身体中の怪我は清水曰く、ティアに治療して貰ったらしい。…その際般若の様な形相で此方を見ていた事は、ハジメの記憶からは消えている。

ただそんなティアの治療でも不意に訪れる身体の軋みが存在した。筋肉痛などの様な物とはまた異なる痛み。それを疑問に思いつつも、ハジメは気怠げな体を起こした。

「ようやく、目を覚ましたか」

「へ——うわっ!？」

「全く…騒ぐな」

「(こくこく)」

「それで良い」

するとすぐ側、ベッドの脇には神殿騎士デビッドの姿があった。不意をつく様な彼の存在。あと寝る前に起こった説教タイムも思い出し、ハジメは慄いた。もつともデビッドの言葉により、すぐに黙らされたが。

ハジメの脳裏には疑問の声が幾つも浮かぶ。何せデビッドは神殿騎士の中でもハジメに対して険悪だ。何度彼に仇の様に睨まれた事か…数えてもキリが無い。

詰まるところハジメはデビッドに苦手意識を持っている訳だ。まあ、マイナスイメージしか無い相手に好感を抱けと言うのも無理な話だ。

ベッドの上、デビッドと向き合いながら後方に下がるといふ微妙に器用な真似をするハジメ。そんな彼にデビッドが声を掛ける。

「…昨夜の蒼い光。アレは…お前か？」

「蒼？ 昨夜？ うん？」

「魔族を攻撃した光の事だ！ アレはお前かと聞いている！」

「ハイ！ 僕です！ あと光じゃ無くて槍です！」

「そこは聞いていない！」

「すみません！」

それを聞かれるとはまるで思っていなかったハジメは言葉を濁したが、デビッドの喝により反転。キビキビと言葉を発した。やはり恐怖が身に染みてしまっている。

まるで今朝の再現の様だが、違いは他に叱られるメンバーがいない事だろうか。

だがハジメの返事を聞くとデビッドはまるで苦虫を噛んだ様な顔をした。不本意です、と言わんばかりの顔だ。ハジメにとっては疑問符しか浮かばない。

「お前か。そうか…」

「ええっと、何か不都合がありましたか？」

「……………」

「??？」

デビッドが周囲を見渡す。当然ハジメの部屋なので誰も居ない。というかデビッドが居る事自体がおかしいのだが…今は気にしてはならないのだろう。

そしてハジメに向き直り数秒。時間が増すごとに増えるデビッドの眉間のシワ。流れるハジメの汗。僅かな時間だが緊張も相まって

かなり長く感じられた。

やがてデビッドが端的に言う。

「……………良くやった」

「……………へ？」

「良くやった、と言ってやったのだ！ 喜べ！」

「…ええ」

ハジメは困惑の声を上げた。というのもハジメにとってデビッドは尊敬出来ない大人、と言う物だ。そんな相手に褒められても素直に喜べないのは何だかんだと人の性か。偉そうに言われるのだから、尚更の話だ。

しかもデビッドからも「渋々です」と不満ありありの様相が見て取れる。ぶつちやけた話、嬉しさが微塵も湧き出ない。

だがまあ無視するのもまたデビッドの機嫌を損ねそうなので、反応は返す事とした。

「えっと…ありがとうございます。ですが、デビッドさんや清水くん、皆さんの助けがあつての事です。僕がやったのは大した事じゃ無いですよ」

結果ハジメは自分を下げつつ、皆の手柄も誉めると言う手段を取った。というかハジメ自身、そう思っている所が強い。デビッドの名を強調したのは故意だが、それ以外は全てハジメの本音である。

ただまあデビッドはプライドが強く、ハジメに敵意に近い物を持っている。こうやって謙遜という手段を取った事は過ちでは無いだろう。そう判断した。

「本気で…貴様がやってのけた事は大した事ではないと、そう思っているのか？」

「え？ まあ、はい」

しかし何故か。デビッドの眉間に皺が増していた。それに理解が及ばぬハジメ。一方でデビッドは叫んだ。

「巫山戯るな！」

「……………え？」

デビッドから噴き出したのは憤怒一色の叫び。思わずハジメが仰

け反る程の大声だ。恐らくは外にも余裕で響き渡つただろうと思える程、凄まじい大声量であった。

何故怒るのか。脳が真っ白となるハジメを他所にデビッドは続ける。

「今回貴様がやり遂げた事は多い！ 魔物の襲撃の危険を伝え、魔族の魔物を仕留め、我々に魔族の居場所を知らせた！ これだけの事をやってのけて、大した事で無いと…貴様は本気で言うのか!？」

「で、でもそれ等は僕一人だけの力じゃ…」

「くだい！ 確かに貴様一人では出来なかつた事かも知れん。一人の功績では無いかもしれん。だが…同時に大した事のないらしい貴様一人が居なければ…我々はより危機に陥っていたのは言うまでも無い事実だ」

何もハジメの存在が必要不可欠であつた訳では無い。恐らくハジメが居らずとも最終的には魔族を倒す事は出来ただろう。ハジメの活躍はあくまでも支援などがメインだった。大凡ハジメが無罪を獲得できる様な功績では無い。

だが恐らくは幾人もの犠牲者と引き換えに、だ。それだけの犠牲を無とする事が出来たのは間違い様も無く、ハジメが関わっている。

例えハジメが認めずとも、他の者達は間違いなくそうだと認めるだろう。それだけ必死にハジメは戦い続けていた。

「愛子から聞いた。貴様は上を目指していると。より高みに行かんと常軌を逸した研鑽を積んでいると。そして今回の件でそれを遺憾無く証明して見せた。少なくとも…不本意ながらこの俺が認めざるを得ないまでにはな。それだけの事を貴様は成した!」

デビッドは自他共に認める意固地な性格だ。それ故に一度断じた者を再度認め直すと言う事が非常に稀。それだけにデビッドは例え口が減らずとも、内心はどうしようも無いほどに認めているのだ。

そしてデビッドは知っている。より高みを行くならば『自信』と言う物は確実な財産となり得る事を。だからこそデビッドは不器用ながらも口添えする。

「確かに他者が貴様を褒め称える事は出来る！ そうした声がやがて

明確に信頼や実績という物に形付く！ だが：それも他者の声だ！  
貴様自身が認めずしてどうする!? 貴様が胸を張らずして何を証明する!？」

実績を成せば人々は褒め称えるだろう。だがそれは自己肯定では無い。他者からの肯定を自己の中心に据えた人間は何とも脆い。現代社会に蔓延る闇の様に：そうで無くとも自己犠牲と言う形にもなり得る。

だからこそ――

「真に己を誇る事が出来るのは――己自身しか居ないのだぞ!？」

「――ッ」

永遠に自身を肯定出来る事が確約しているのは己という一人しかない。それはありとあらゆる人間に認められた権利であり、為さねばならない義務だ。

それは当たり前前の話だ。しかし今のハジメにはその言葉が心に響いた。

何と言つてもハジメは冤罪により周囲から多くの罵詈雑言を受けた。理不尽を受けた。勿論今のハジメはそれらをスルーしているが、全く心に傷を付けずに済む訳ではない。

例え浅い傷だろうと積もればキリがない。元々ハジメにある、いざという時の他者中心さもあり：浅慮にも己を棄てる箇所があった。特に最後のレイスへの一撃は自己を顧みない諸刃の一撃だった。

それを今になってようやく自覚した。

――うん：待ってる。絶対に、南雲くんが来てくれるまで。いつまでも待ってるから！

あの日の彼女の言葉を、無に帰す所だった。

(そっか：今、気付けて良かった)

自分が生きていなければあの約束は果たせない。そんな当たり前前の事を今、ハジメはその頭で理解した。

すると少し落ち着いたのか。デビットはハツとハジメに目をやる。そして頭を押さえ、踵を返した。

「……少しばかり熱が入った。失礼する」

「待つてくださいー！」

「？」

今も変わらずデビッドの事は苦手だ。高圧的な上に意固地、それに自身の意見を押し付けて来る。正直に言っただけでハジメの苦手なタイプだ。

ただ――

「ありがとうございます。お陰で大事な事を思い出せました」

こればかりは感謝せねばならなかった。

「…ふん。それならば良い。せいぜい励め、南雲ハジメ」

「――はいっ」

デビッドは振り返らずにそう言う。よく思えば彼に名前を呼ばれたのは初めてだった。

そうして直ぐに扉は閉まる。デビッドは部屋から出て、ハジメだけが取り残された。すると身体の気息さが思い出したかの様に表れた。それに従い、ハジメはベッドに横になる。

寝転がっていると、部屋の外からは祭囃子が流れているのが良く聞こえた。民衆の声からは辛気臭い雰囲気は一切無い。死者の一人や二人が出ればこんなムードにはならなかっただろう。

そんな音にハジメは頬を緩ませた。

「…守れたんだなあ」

デビッドの言葉もあり、漸くそれを自覚し…誇る。自分も町を守るのに貢献したのだと、胸を張れた。それだけで良い。

かつての【オルクス大迷宮】での戦いでは誇る事も出来ず、理不尽にも一度地に落とされた。成し遂げたと胸を張る事など許されなかった。

だから今になって漸く報われたかの様な…そんな風に思えた。まだ判決に対する功績は不十分、終わりでは無い。それでもなお込み上げる物がハジメにはあった。

「…良かった」

だからこの言葉は自分に言い聞かせた嘘じゃ無い。心からの、南雲ハジメの吐露だ。

仰向けになつてなお頬に流れる物を手で押さえ付けながら、ハジメは震えた声でそう言った。

すると廊下の向こうからドタバタと喧しい喧騒が響いてくる。聞き覚えのある声の数々だ。少なくとも十は超えているであろう足音に、ハジメは目を拭つて扉の方を見る。

「御無事ですか、ハジメの旦那あ——!!」

「目覚めたと聞いているの一番にやつて来たで御座るよおお!!」

「「「うおおおおおお!!」」」

「あ、皆さん。大丈夫です、無事ですよ?」

「そりゃあ何よりで! 俺あ心配で心配で…」

「凄まじい怪我と聞いておりましたがそこはハジメ氏クオリティー!

平然としておりますな! さ、さす、流石なんですな!」

「「「うおおおん!! うおおおおん!」」」

「えっと…皆さん静かに」

そして扉がバーンツと開き、そこから現れたのはナイスミドルな叔父様方。詰まる所【ウル】の町の【錬成師】の皆さんである。

余程心配してくれたのか、無事なハジメの姿を見て号泣している者も多い。髭を生やすナイスミドルがうおんうおん涙を流す姿は、ハジメとて汗を流さずして見れなかった。

というか彼等の中でのハジメの評価が非常に気になる。何か「ハジメ氏だったら問題ないんですな!」とか言ってる人がいたり、崇め出す人がいたり…非常に反応がオーバーである。もしかすれば神とすらお思いかも知れない。

取り敢えず数多い【錬成師】の皆さんを宥めっていると、ピョコツと彼等の背後から見知った顔が現れた。

「一応大事は無いつぽいわね。元気そうで何よりよ、南雲」

「園部さん! えっと、頭の怪我は?」

「痛むけど無事よ。あと数日もしたら塞がるでしょうし、それまで我慢ね」

「そつか…なら良かった」

「そつちこそ怪我は無いけど全身が筋肉痛とかとは違う痛みを訴えて



るぽいけど大丈夫?」

「園部さん、エスパ―!」

「顔に出てるわよ」

「そこまで普通出るかなあ!」

現れたのは園部優花だ。『キメラ』による攻撃により頭部を負傷していたが、現在は包帯も巻かれ出血も治っていた。本人からも疲労などの様子は見られなかった。

ただ一目で今の自分の容態を見破られたのは正直怖かった。デビッドや【錬成師】の皆々様が気付いていないので全員が全員気付くわけでは無いだろう。取り敢えずそう思う事にした。

「清水も誘おうと思ってたけど部屋に居ないしいいか」

「うん? どうしたの?」

「あー、えーつとね南雲……暇?」

「今で良いんだよね? うん暇だよ」

「そっか……なら、いやでもうーん……」

優花は何やら迷っている。釈然としない様子で頭を捻り、時には落ち着かないのか首のスカーフをくるくると指で巻いている。

なお【錬成師】の皆々は黙って見守っている。ムツキムキな筋肉の壁がハジメと優花を覆っている構図……控え目に言っても地獄だ。ムードも赤兎馬の速度で逃げ出すだろう。

だが不思議な事にムードは成立している。何故だろうか?

するとハジメが何かを思い出した。そして未だにうんうん、と迷いに迷っている優花へと話し掛けた。

「あ、そう言えば園部さん。一個聞いて良い?」

「な、何よ南雲! かかって来なさい!」

「何でファイティングポーズ取るのさ? いや、そうじゃなくてお祭り一緒に行かない?」

「……………うん?」

優花の時間が静止する。目が点だ。

だが事態を掴む事が出来たのか、優花は間も無く頷いた。

「いやどうせだし、皆んなで行きたいなって……駄目かな?」

「…勿論良いわよ。っていうか珍しいわね」

「何が？」

「アンタから誘って来るの。基本遠慮しがちじゃない」

「意識した事無いけど…確かにそうかもなあ」

ハジメは会話や提案に於いて、基本的に受け身の姿勢である事が多い。死地などにおける思い切りの良さは例外とし、そう言った自発的な行動を苦手とする。それは単純に己に自信が無い事から来ているのだろう。

「何？ 心変わりでもしたの？」

「…そうだね。うん、そうかも」

「あやふやね。まあ良いわ。さっさと行きましょ？」

「うん、行こう」

廊下に出る。そうすれば妙子や昇が出会い頭に謝って来た。凄まじい勢いだった。まあ、そもそも所ハジメ自体、今更冤罪の件をねちっこく言うつもりは無いのでアツサリと許した。

更に宿を出る。すると屋台の数々が華々しく迎え入れる。稼ぐだけ稼いで使ってこなかった工房の給料を使って行く。初日では考えられない程、「ウル」の住民は優しく迎え入れた。

焚き火が灯る。業火は組み木を焦がし、天に煙を上げた。やがてこの煙が雨に還る事を祈り、人々は踊る。ハジメ達もまたそれに加わった。

祭りは刻一刻と進んで行く。子供は家に戻り、大人は酒を口に流した。

『神の使徒』等もまた口に肉をいっばい頬張り、遊びに興じる。昨夜とは真逆の、楽しい時間が流れる様に過ぎていく。

だが…それでもまだ、清水は来なかった。

「これで：俺が知ってる事は全部だ。チェイスさん」  
「：なる程、証言ありがとうございます。お陰で色々と楽に事が進みます」

「：それで俺の事はどうなった？」

「ええ。残念ですが：」

「：……そっか」

「やけにすんなりと受け入れますね？」

「それだけの事をやらかしたんだ。覚悟なら出来てたさ」

「そうですか」

「：なあ、チェイスさん。アイツらにはこの事、言わないでくれないか？」

「南雲殿や園部殿の事ですか？」

「ああ。きつとアイツらはこの話を聞いたら何とかしようとするからな。そんな事すりやアイツらの立場が悪くなる。だから：頼みます」

「：承りました。この件を彼等には伝えないと我が騎士道と神に誓いましょう」

「ありがとうございます」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——ハイリヒ城下街新聞の一部より抜粋

『かくして、『ウル』の町での魔人族の襲撃は【豊穰の女神】の名の下、『神の使徒』と神殿騎士により守られた。死者はおらず、被害も一部の『神の使徒』のみとの事。なお彼等も既に戦場復帰可能であり、戦闘訓練を再開したとされている。』

『ただしこの襲撃は『神の使徒』清水幸利の企てにより魔人族を巻き込み、行われた物とされている。途中、一部の人間の説得により人族側へと戻って来たが、一度裏切ったという罪は重いと教会は判断した。』  
『この為、教会は清水幸利に与えられている『神の使徒』の称号の剥奪。及び故意による王城・教会への立ち入り、『神の使徒』との接触を禁じる物とした。』

『なおこの判決の執行は既に執り行われたとの事。ただし【豊穰の女神】はこれに対し、——』

## 17、新たな一歩

気づいた時点では、もう遅かった。

一週間もの時が流れた。話していた彼はその陰すら王城から消していた。幾日も王都を駆け回ったが、やはり居ない。段々と、彼と言う人間は何処かに行ってしまったのだとハジメは認めざるを得なくなっていた。

功績は果たした。しかし失った物はハジメにとっては大きかった。訓練の方は【ウル】の一件もあり休養を言い渡された。メルドなりの心配なのだろう。そしてもう一つ、工房での仕事の方はと言うと：『ブーツとしてんなら邪魔だ。【ウル】の町での仕事内容を見て文句言う奴もいねえだろうから、その腑抜けぶりが治るまで休んでろ、ハー坊』

と、ウォルペンが特別依頼の給料をハジメに押し付けて言った。強く成りたい一心のハジメではあるが、今は気持ちが揺らいでいる。まともな仕事も出来ないだろう事から、その暇を有り難く貰い受けた。そうしてハジメは連日、図書館にも足を運んでいる。適当に取った魔法書の一ページを開け、頬杖を付きつつ眺めている。

次回の端の方にぼうっと人陰が映る。するとハジメはすぐに其方へと視線を移した。

「!？」

しかしまた違った。顔どころか背丈すら一眼で違うと振り向いた後で分かった。彼は急に振り向いて来たハジメに驚いたのだろう。肩をビクツと振るわせ、避ける様に図書館の奥へと進んでいく。

連日、ハジメはこんな状況が続いている。一言で言えば追い詰められていた。

もう彼が、清水が居ないのは分かっている。ハジメもまた仮にも『神の使徒』。清水との接触は許されない。

「故意に」という制限はあったが、案外と真面目な清水の事だ。なるべくハジメ達と会わない様な場所へと行っているに違いない。回らない頭でもその程度の事は理解出来た。

だからこそもう、忘れなければならぬ。ハジメには香織との約束がある。立ち止まっている暇は無い。だと言うのに…

「…辛いな」

こんな時に限って楽しい思い出が頭の中、残響する。記憶が、心が、忘れる事を否定したがっている。

心が休まらない休養の中、やがてどれだけ経ったのだろうか。やがて夕焼けが沈んだ頃、ハジメはいつもの様に開いていた魔法書。それを閉じて小さく呟いた。

「…帰るか」

その魔法書は今日もまた、一ページたりとも続きを捲られる事は無かった。

「あ！ 久々で、【王女の騎士】様！」

「…その呼び名はやめて下さい。むず痒いです」

「む…それでは南雲様で」

「出来れば様付けもやめて欲しいんですが…無理ですよね？」

「無理な相談ですねえ。こちらとしては助けて貰った恩がありますから」

城へと帰る道中、一人の男がハジメに声を掛ける。彼はかつてハジメがリリアーナと共に、王国騎士から救った食堂の店主だ。ハジメに直接助けられた恩もあり、他の民衆よりも一層ハジメに対し尊敬の念を抱くようになった。なおその為か、『アスタマリア食堂』は前よりも増してウォルペン工房の利用頻度が増えたそうだ。

まあそんな訳でハジメを見つけた途端走って、頭をすっかり下げた挨拶をわざわざしてくれる店主。お目目キラキラ、今のハジメにはあまりにも眩しい。

ただまあ、この店主のみに限らずここ最近は前にも増して民衆のハジメへの評価は上がって来ている。その理由となるのが先日の【ウル】での直接依頼の達成、及び戦いでの活躍だ。

【ウル】での直接依頼は基本、難易度が高いと言われている。それは

【ウル】の【錬成師】達が現場で着々と技術を積み重ねている事に由来する。王宮の方はどちらかと言えば研究者肌の【錬成師】が多く、純粹な腕で比較すれば現場仕事の【錬成師】の方が有ったりする。

しかしそれにも関わらずハジメは【ウル】の【錬成師】の畏敬と仕事の完遂を掴み取った。これは十分に評価に値した。特に【錬成師】の界限では早くもハジメがルーキーとして注目され始めている。

【ウル】での戦いの件も言うに及ばず、ハジメは遺憾なくその力を発揮して見せた。その活躍は一部の改竄こそあれど、新聞に載せられ居た。教会としては不本意であっただろうが、愛子の声もあり、事実の歪曲は出来なかつたのだらう。そうした結果、この様な視線がハジメに集まって来ている。

「活躍はお聞きしましたよ。流石としか言えません。まさか魔人を退けるのに一役買うとは！」

「…ありがとうございます」

目的には着実に近づいて来ている。しかしそれでも誤魔化せない傷がハジメの心には深々と刻まれている。目の前の店主がハジメを褒め称えるが、嬉しさは無かつた。

確かに客観的に見れば、ハジメはやる事は成したのだらう。しかしそれ以上の無力感がハジメを苛む。

(守り、切れなかつた)

正確には守り切つたつもりで居たのだ。あの戦いを全員で潜り抜け、全員が無事で終わったと錯覚していたのだ。

この件に関してはハジメができる事は無かつた。無闇矢鱈に首を突つ込めば、ハジメもまた余計な物を負つたかもしれない。清水がハジメにこの件を明かさなかつたのはそう言った面もあつたのだらう。

分かつている、そんな事は。だがそんな理性的な考えはハジメの感情としては無意義。

ハジメの感情はただ一つ。一緒に居られるよう、助け切りたかつた。

だからこそ、そんな些細で脆い願いを守り切れなかつた己を悔いている。

「な、南雲様!? 手から血が!？」

「…あ、本当だ」

「す、直ぐに手当てを!」

いつの間にかやら爪が掌の皮を千切っていたらしい。ポタポタと血が地面に滴り落ちていく。店主がすぐに店へと道具を取りに行く間、ハジメはその抉れた掌をぼうつと眺めていた。

「…痛いな」

果たしてその言葉はどちらの傷に向けられた物だったのだろうか。気付けばそんな独り言を呟いていた。

滴り落ちる血は、僅かにもハジメの熱を空気へ溶かして行った。

コツコツと足音を鳴らし、再びハジメは王城へと進んで行く。

好奇、畏敬、嫉妬、憤慨、不信…進む度に増える視線は様々な感情を織り交ぜていた。以前より正の感情は含まれているが、どちらもハジメは気にさえしなかった。

門を潜り抜け、訓練場を目指す。こんがらがった思考を振り切る為にも、動く事を手段として用いる事とした。

夕方遅くの為か人は少ない。そもそも『神の使徒』の大半は「オルクス大迷宮」での実戦だ。こちらにいる事は殆どない。騎士の幾人かは居るが、ハジメに関わろうとする人間は居ない。【王女の騎士】の名が効いているのだろう。

【王女の騎士】の名は王女リリアーナが自ら与えた二つ名。すなわちそれを害する事はリリアーナの意向に歯向かうも同じ。王国騎士とは言え雇われの身。そんな真似をするのは余程の正義漢か阿呆の二択だ。

改めてリリアーナに感謝を

そして人行きが少ない奥へと向かう。今は、あまり人とは関わりたいく無かった。

そうして進むと見覚えのある人物が居た。彼女もまたハジメと同じ様に何かを振り払おうとしている。無意識にもハジメが彼女を見

つめていると、やがて彼女はハジメの事に気がついた。

滴る汗をタオルで拭き取り、すれ違いざまに話し掛けて来た。

「…明日ちよつと話しましょ、南雲」

「…うん」

ちらりと見えた彼女の目からもまた、失意の念が感じられた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

翌日の朝、中庭の隅っこで並んで座る。二人の間には丁度一人は入れそうなスペースが空いていた。その隙間が何処か物足りなさを増長させる。

「…清水の話、聞いた？」

「聞いたよ。嫌でもあんなに話題になってたら、耳に入らない筈がないし」

「そりやそつか」

清水の事はこの一週間、よく話題になった。何せ『神の使徒』で初めての追放処分だ。ハジメも似た状況とはいえ、罰の執行までは行っていない以上、話題性は酷く高い。コミュニケーションの範囲が少ないハジメでも一日目でその事は知った。

二人は目を合わせない。同じ方向、中庭の方を見ながら話している。自責故か、相手と目を合わせるのを避けている。

「…僕達、どうするべきだったんだろう？」

「どうするもこうも、アイツの責任よ。バカね。私達が出来る事なんて、何一つたりとも無かったわ」

「………うん」

それはどうしようも無い事実だ。『神の使徒』とは言え子供。そして清水への罰には正当性がある。それを覆す事など出来ない。

もしかすれば魔族に罪を被せる、と言った事は出来たかも知れない。そうすれば世論は清水の味方になっただろう。だがこれは恐らく清水自身が決め、己に下した罰。そんな事は他でも無い清水が認めなかったに違い無い。

だから何も出来なかったのは間違いでは無い。恥じるべき事でもない。どうしようも避けられない、残酷な真実だ。



「…寒いわね、南雲」

「…うん」

陽光が差し込み、二人を照らしている。しかし優花は小刻みに震えている。顔を合わせていない為、その顔は見る事が出来ない。

ただ恐らく明るい表情では無いんだろうな、と察するぐらいは出来た。

「…ねえ、一人にしないでよ」

それは優花にしては珍しく、絶る様な物言いだった。

「僕が居なくても、園部さんは一人じゃないよ」

「でもアンタらはアンタらだけよ。アンタ達二人だけ。妙子とか奈々みたいな仲良い友達はそりゃ他にも居るわよ。でもこっちに来てから気を置かないで済む相手になったのは…アンタら二人だけよ」

優花は孤独ではない。コミュニケーションが得意であり、人の輪に混ざる才能を持っている。実際ハジメや清水と言う別タイプの人間とまともに話せるのは十分に才能だ。

だがそれでも、仲良くしていた人間が居なくなるのは当然辛い。どんな人間でもそれは変わらないだろう。

更に言うならば優花が此方に来てまともに友人と言えるレベルまで仲良くなったのはハジメと清水のみだ。クラスメイトとの交流はハジメの一件によるいざこざにより、一部とは敬遠。近づいて来る異世界人も年齢が高い事が多く、社交的な事が多い。

なんて事はない話だ。寂しい、それだけの事。

だから優花は願わない。代わりに言の葉にした。そうしなければ<sup>もう一人</sup>ハジメも何処かに行ってしまう気がしたから。

「…だから負けないでよ、南雲。神様の決定なんかには屈しないでよ?」

「…うん。約束する」

「絶対よ?」

「うん、必ず」

ハジメも誓う。かの朝焼けの誓いと、今契られた新たな約束を胸に。進まねばと他ではない己に叱咤した。

今度こそ、何も失わない為に…ハジメは立ち上がらなければならな

い。

空を見る。木の葉が散っていた。葉を失った木々はやがて幹すら枯れる。季節を超え、そして少年達は進むだろう。

『ピィ——』

空を飛ぶ白鳩。甲高い鳴き声を響かせ、その新たな誓いを祝福す—

「うん？」

ここで二人は頭を傾げた。そして空を再び見上げる。今なお両翼を広げ、滞空している。その眼は間違い無くハジメ達を見つめている。

その白鳩の姿を二人が見間違ふことは無い。何故ならば彼の肩でよく止まっていたのだから。

「……ピナ？」

『ピッピィー！』

その白鳩の名を二人は看破する。「大正解！」と言わんばかりに白鳩、ピナが鳴いた。

相変わらず元気そうなピナ。それに和みつつも、二人は疑問やら混乱で頭が一杯。さつきまで頑なに目を合わせなかった二人が、「どういうこと？」「さあ？」とアイコンタクトで確認するが互いに何もわからない。

何故ピナがここに居るのか？ その答えは…向こうから現れた。

朝日と重なる様に一人の陰が中庭の門を潜り抜ける。敢えて挙げられる特徴の無い、中肉中背の男だ。纏っているフードが風に流れされる。以前まで目を隠す程長かった髪は切られ、以前には無かった清涼な雰囲気を感じた。

彼は端的に言う。

「え——つと…久々だな、二人とも」

「」

「」

「…せめて何か言ってくれ」

それは他でも無い、【闇術師】清水幸利だった。彼は若干の気不味さ

とそれでも隠せない喜色を滲ませ、控えめに手を振る。

それに対してハジメと優花はただ沈黙を貫く。というよりも完全に呆けてしまっている。清水の方を見つつ、全身が硬直していた。

そんな雰囲気なのが気まずいのか、清水は口を開く様懇願する。ただそれでも二人は何も言わない。硬直は解けた様だが、それでも顔を俯けるばかりだ。

反応が全く無い事が不安になって来たのか、清水は慌て始めた。

「お、おい！ どうしたんだよ、お前ら！ 何だそのリアクション!?

せめて何か一言ぐらいは——」

「新聞の件は…何？ 嘘だったの？」

「ん？ 新聞の…あれか。嘘じゃねーよ。実際俺はもう『神の使徒』じゃねーし」

「なら…此処にいるのもアウトだよな？ 通報した方が良い？」

「ちよつと待て！」

何かが噛み合っていないらしい。手でハジメを静止しつつも、清水がこめかみを押さえて必死に頭を回す。何も知らないハジメと優花はその様子に首を傾げた。

やがてそのハジメたちの知らない何かの目星がついたらしい。ふとハジメ達の方を見ると、その目星について問いかけた。

「……………もしかして南雲。お前先生から何も聞いてねえのか？ 園部も」

「先生？ ……最近見もしないわよ？」

「そうだね。忙しいらしいよ」

「あ——、よし。理解した。ちよつと待て説明する」

何かに納得したらしい。清水は再びこめかみグリグリ。此処にいる理由を説明し始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「愛子…今回の件、かなり無茶をしてくれましたね」

「チェイスさん。すみません、ご迷惑をお掛けしました」

「いえ。我々は愛子の剣にして盾。この程度造作も有りません。…ただ以前の捨身と良い、もう少し自分の安全に頓着して欲しいと、そう

言っているだけです」

「フフフツ、そうですね。ですがすみません。こればかりは譲る気が有りません」

王城の廊下、そこで話すのは【豊穰の女神】畑山愛子とその護衛騎士、チエイスだ。チエイスはかの説教時と同様に目を尖らせている。しかしそれに愛子が屈する様子は無い。

何故ならば愛子にとって、それは必ず成し遂げねばならない事だったから。

「清水幸利に罰を与えた上で、一人の冒険者として【豊穰の女神】が雇い入れる…批判も一部ありましたよ。全く…」

教会の発表はあくまでも『故意による王城・教会への立ち入り、『神の使徒』への接触』の禁止だ。逆に言えば誰かが命じたならば、その禁は簡単に破れる。

ましてや命令者は名高い【豊穰の女神】。『神の使徒』への献身高さなどの噂もあり、世間的に見ても納得が行きやすい人物だ。

当然ながら人族と魔族の溝は深い。裏切り者である清水を雇い直すと言うのは批判もあった。何せ愛子は神の化身。清浄な存在が、穢れた男を救うなどあってはならないと言う声は少なく無かった。

しかし同時にそれは深い慈愛の証明。多少実話を弄れば、それは美しい美サクセスストーリー談となる。

【豊穰の女神】は清水幸利の裏切りに誰よりも早く気が付いた。そして説得を行い、改心させた。その後『神の使徒』や神殿騎士を従え、魔族の撃退を果たした。その後断罪されるべき清水幸利に罰を与えつつも、深い慈愛にて赦し再び迎え入れる…信者からすれば擬似的に神の懐の深さの証明ともなるでしょうね」

「その分、ありもしない功績を私が背負う事は非常に心苦しい話ですが…清水君を一人にしない為です。幾らでも偽善者になりましょう。それに聖教教会の皆さんもそうすれば認めざるを得ませんから」

「それはそうでしょうが…」

教会が裏切った清水を再び受け入れる事を赦したのはこれが理由だ。詰まる所、【豊穰の女神】の名の威光を強める事が出来る…それだ

けでも教会が認める価値はある。

更に言えば清水幸利という戦力は人族としては魅力的だ。魔物の使役に精神干渉。本音を言えば教会としてもそれだけの才を手放すのは惜しい。だからこそ教会としても愛子の提案は美味しい物だった。

「今回の問題は、表面上愛子が教会に貸しを作った事です。今までより一層愛子は教会の道具として利用されやすくなった…これがどれだけ危険な事か分かっていますか？」

「理解はしています。ですがそれは生徒を犠牲にして良い理由にはなりません」

「……………全く貴方は」

ただ教会にも『魔族側に一度裏切った』と言う口実がある。その為あくまでも愛子からの要請として、この話は通すしか無い。つまりは教会に恩を作る形とせざるを得ない。

教会の上層部は控え目に言って腐敗している。何故ならば彼等は『人の為で無く『神』の為に己が役目を果たす。また神に認められる為、他者を蹴落とす事も厭わない。

プライドは強いが正々堂々としているデビッドや物事を組織の損得で考えるチエイイスは教会の中ではかなりの人格者の部類に入っている。…まあ、愛子の影響により改心した面もあるが、そこは割愛する。

結論を言えば教会に貸しを作るなど、危険極まり無い行為だった。ここ一週間それにかかりつきりでロクに生徒とも話せなかつたほどに困難でもあった。一つ間違えていれば本気で愛子は破滅していた可能性だつてあった。

だと言うのに愛子はそれを躊躇いも無く実行した。チエイイスの心労も溜まると言う物だ。

「清水君は確かに罪を犯しました。ですがそれでも見放さず、成長させていくのが教師です」

異世界だろうと、神の化身となろうと彼女の根本的な役目は変わらない。教師だ。

そして異世界であることなど関係ない。彼女は教師としてその身を砕く決意をしている。だからこそ彼女は迷わず進み続ける。

中庭を見れば、三人の少年少女が話をしている。清水は困りつつも、嬉しそうに話している。

愛子からすれば、それだけでも価値があった。慈悲に満ちた笑みを携え、愛子はその光景を見つめる。

「それに、子供から青春の権利を奪う事なんて…誰であろうと到底赦される事ではありませんからね」

そう言つて愛子は次の責務に向けて、歩いていくのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「まあ、そう言う訳だ。多分愛子先生もソレ関係で忙しかったんだろ  
うな」

「…なる程。確かに雇用されての命令だったら『故意』ではないのか」

「アンタは一休さんか？」

「それなら愛子先生が一休さんになんぞ？ 禿げるぞ？」

「愛ちゃん先生はストレス的には禿げそう」

「確かに」

『ピーー？』

説明を粗方終える頃にはハジメと優花はいつもの様な態度に戻っていた。シヨックが抜けてきたとも言える。

「でもそれだったら一週間もこっちに居なかったのは…」

「ああ。流石に冒険者としての格が無いのに『豊穡の女神』の護衛になるのは、不満を持たれるかも知れなかったからな。冒険者ランク『黒』になるまで上げてきた」

「えーつと…『黒』つて…」

「確か上から三番目ぐらい…だったよね、清水くん？」

「おう。キツかったぞ。一週間まるごと依頼ばっかだったからな。しかも『神の使徒』の給料で考えたら達成金の安いなの。労働って大変だわ」

「分かる」

「実感エゲツないわね」

ちなみにハジメは王宮錬成師なので給料は割と入って来る。ただ生産者であると同時に接客業でもあるのだ。良くない噂があるハジメともあらば当然クレームは何十何百とある。

販売して五年ほど経った商品を値段が高いと返品しようとして来た時はどうしようものかと思った。しかも大分使っていた跡もあり、何かを殴打した痕跡が見受けられた。見た感じもう天寿を全うしていたフライパンだった。

心の中で愚痴を吐きながらも土下座したのはハジメにとって思い出深い話である。当然マイナスのイメージで、だが。

「アンタ後衛職なのによく上げれたわね…」

「最近手に入った使い魔で無双した。採集系統もピナで無双した」

「ピーちゃん優秀だね、相変わらず…」

『ピー！』

「それどっちかって言うを使い魔の実力じゃ無い？」

「最高級ペットフードをあげてるから問題無いと信じたい」

ちなみにその魔物は今、畜舎に入れているらしい。ピナと違って戦闘能力が高いので無闇矢鱈に外に出せないらしい。ちなみに名前はポチとの事。

「じゃあ今の清水くんは元『神の使徒』兼【闇術師】兼ランク『黒』の冒険者兼愛子先生の雇われ騎士なのか」

「多いわね。もっと簡潔な纏められない？」

「『神の使徒』から追放されたランク『黒』の【闇術師】は【豊穰の女神】の配下となる」

「もつと長くなつたし、何ならラノベっぽいわね？」

「悪いがもう一つ肩書きあるぞ、俺？」

「何で肩書きそんな多いのよ？ 主人公なの？ …あつ、ごめんやっぱ取り消す」

「俺は主人公の器じゃねーってか？ 自覚はしてるけど俺を虐めんな」

「清水くんの場合、正当なヒーローじゃなくて、裏で暗躍。そしてその実力を知ってるのは一部だけって感じの主人公だよな」

「何かそつちのがしつくりくるわね」

「あつ、俺そう言うのめっちゃ好きだわ」

ちよいちよいおちゃらけつつも、会話は進む。昔の清水ならば優花の言葉には腹を立てたかも知れないが、今は違う。もう主人公それに清水は固執していない。

だからこそネタにして流しつつ、清水は最後の己の肩書きを…己の仲間仲間に告げる。

「改めてまして、だ。お前らのパーティーの一員になった【闇術師】清水幸利だ。宜しく頼む」

「……………うん？」

「だから俺と、お前ら二人のパーティーだ。愛子先生からの指示でな。お前らの補助の役目になったんだよ」

「え？ 本当に？」

「あ——、そう言う事ね」

「え？ 園部さんも分かったの？ 僕だけ？」

優花は何かを察した様だ。こくこくと頷く。

そして清水の宣言の時点でも割とパンクしているハジメに追い討ちを掛けた。

「なら私も…愛子ちゃん先生護衛隊を抜けて、南雲の護衛としてこつちのパーティーに来たわ。【投擲師】園部優花。改めてよろしく」

「うん?? 僕の護衛？」

「そつ。さつきも言ったけど、アンタに負けてほしく無かったからね。その手助けとしてアンタの護衛を志願したのよ。ちなみに雇い主はリリイよ。お願いしたらオツケーして貰えたわ」

「王女様何してんの!？」

ハジメは王城に向かって吠えた。空の向こう側にリリアーナのいい笑顔が見えた気がした。

ちなみに世間体としては功績を徐々に上げて来ているハジメには護衛が必要とリリアーナが判断した、と言うことにしているらしい。色々不可思議な点もあるが、そこは王女スマイルで吹き飛ばしたとの事。ちなみに愛子の方も以下同文である。



改めて【豊穰の女神】と第一王女の力を思い知り、戦慄したハジメ。確かに功績を挙げつつあるのは本当だけど…といった心境だ。有り難いが色々と情報過多である。

「もう一人自己紹介して無い奴が居るわね？ 名乗りなさい」

「一人だけしないって不公平だろ？ ほら早く言え」

『ピッピピー？ ピピ』

「君達のこう言う時の連携って何なの？ まあ言うけど」

別に改めても何も自己紹介するまでも無いのだが。何せその場のノリと言うものがある。別に拒否する理由も無いので、ハジメもまた二人になぞり言う。

「僕は【錬成師】南雲ハジメ。改めて宜しく、二人とも」

「簡素ね」

「簡素だな」

『ピー』

「えー、二人ともこんなもんじゃ無かった？」

「大トリには誰も期待するものよ？」

「オチ付けろよ」

「知るか」

何故か関西的なノリを強要されている事実にはキレつつ、ツツコミを連打するハジメ。この二人は偶に連携してボケてくる事があるので微妙に疲れる。まあ、それも楽しさの一因ではあるが。

ただこれで全員が漸く全てを飲み込めた。互いに見合い、小さく笑った。

「ただまあ、これで【ウル】のメンバー再結集かな？」

「基本的にこのメンバーで行動してたからね。何か慣れたわね、このトリオ」

「確かに」

「……」

「うん？ どうしたの清水くん？」

「いきなり黙ってどしたのよ？」

心配も無くなったが故に、安らいだ様子で王城の食堂に戻ろうとす

るハジメと優花。しかし清水が何を思ったか、立ち止まっている。それを不審に感じ、二人は振り返り尋ねる。

何拍か経った頃、漸く清水は言うか迷っていた言葉を吐き出した。

「…今回、俺がここに戻ってこれたのは愛子先生のお陰もあるが…そもそも【ウル】の町で誰か犠牲が出てたら、それこそ無理だった。今回は死者が居ないかつ、【ウル】の住民に負傷者が居なかったからサクセスストーリー美談として昇華出来た。だからその…何だ…」

そう例えば犠牲が出ていれば例え元『神の使徒』だろうと才ある者だろうと赦される事はない。暗部に引き込まれる、という可能性もあったかもしれないが、その場合は拝めない様な生活になっていただろう。どの道バッドエンドだった。

清水は口籠る。恥ずかしさやら何やらで。だがやがて決心したのか。精一杯の勇気を込めて、幸利は言う。

「ありがとな。ハジメ、優花。お前らのお陰で俺はこうして居られる。感謝してる」

それは幸利にとってどれほどの覚悟が必要だっただろうか。幸利は今まで友達を有した事が無かった。だからこそ距離の詰め方知らない。もしかしたら嫌われるかも知れないとも思った。

しかしそれでも、もう少し近く有りたいと願うから。幸利は二人をそう呼んだ。

ただまあ、恐れる必要は無かっただろう。何故ならばもつと近く有りたいと願うのは、二人も同じだから。

「別に改めて言わなくても良いよ、そんな事。友達の為なんだし」

「そーね。お互いに迷惑掛けて行くもんよ、友達ってのは。これぐらいどうって事無いわよ」

「…お前ら」

二人はすんなりと受け入れる。それに少し涙ぐむ幸利。そして二人の後を追おうとして――

「だから…行こうよ、ユツキー」

「おん？」

「とつとと食堂行くわよ、ユキ。朝飯が冷めるわ」

「ちよつと待って？」

—— 幸利を遥かに超えて距離を詰めてきた。

しれつと言った二人が幸利の静止の声に「うん？」と振り返る。

幸利としても不満は無い。何なら人生初渾名だ。割と嬉しい。

ただ一点、そこに行き着くまでの順序が幾つか吹き飛んだのが非常に気になった。

「いや、おかしくね!? バグってね!? 何でいきなりその呼び方なん

だよ！ 普通に幸利ゆきとしで良いだろ!？」

「普通よ、こんぐらい。ねえ、南雲」

「うん。園部さん」

「そんでお前らは呼び方一切変わんねえのかよ!？」

「だって今更だし…!」

「これを機に変えろや!」

「ええー!」

「息ピツタリか、馬鹿野郎!？」

『ピーピーピピ、ピツピツ!』

「えーつと、それよりも早く行こう?」

「そーね、行きましょ」

「あつ、こらー！ お前らちよつと待てー!」

少年少女は再び走り出す。失ったと思った物は、決して失われてな  
ど居なかったから。

沢山の人々の支えが有った。振り与えられた天運が有った。それ  
らに感謝し、そして胸を張って彼等は行くだろう。

—— 新たな冒険に、胸を躍らせて。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

少女はいつもの様に新聞を捲る。地球にいた頃には無かった習慣  
だ。しかし会うことの出来ない『彼』を求めて、少女は文字の羅列を  
読み進めて行く。

『彼』はちっぽけだ。しかしそれでもなお乗り越える力があるからこそ、少女は憧れたのだ。だからこそ今日とて今日とて、『彼』がその名を響かせる事を確信して待っている。

いつもの様に捲り続けて四枚目。気を引く記事があつた。タイトルには【豊穰の女神】、つまりは先生の名があつた。

少女とて『彼』以外の知り合い全てに興味が無い訳では無い。寧ろ周囲の人間を良く気にするからこそ、【聖女】などと言う二つ名を名実共にしているのだ。

だからこそ、その記事を読み進めて行く。

「…あはは」

そして、笑つた。

何て事は無い。たった一文だ。教会としては不都合な内容故に最低限の情報に留めた一文。されどそれだけで少女の心を満たすには余りある程だ。

少女はその文章を白磁器の様に美しい指でなぞり、微笑む。黒真珠の瞳を輝かせ、唇が『彼』の名前を紡ぐ。

「南雲くん…」

——約束の日はまだ遠く。

——されど着実に、その一步を『彼』は踏み出したのだ。

## 閑話、表の英雄劇と袖幕の影

ハジメ達が「ウル」で活躍を見せた一方で、その他多くのクラスメイトは迷宮で実戦訓練を行い続けていた。

本来の世界線  
原作と異なり、ハジメが奈落が落ちなかった為か『愛ちゃん先生護

衛隊』以外は「オルクス大迷宮」から離れていない。ベヒモスに対しての恐怖は未だに顕在だが、『神の使徒』のスペックはチート。いずれ乗り越えられるだろう事は明白であった。

人数が多く、怠けも出始めたが故に原本来の世界線作よりも訓練や「オルクス大迷宮」の攻略速度は遅れが出ているが…逆に延びている部分もあった。

それは他ならない【聖女】白崎香織の爆発的な成長にこそある。「轟音を連れ、速く疾く裁きの光を——『雷光』」

「オルクス大迷宮」64階層。緑鉱石の灯りのみが頼りの暗闇を、白く眩い稲妻が裂く。強力無慈悲である筈の魔物等も抵抗の暇すら無い。貫かれ、絶命に至った。

——圧倒、そんな言葉がその場にいた全員の脳裏に浮かぶ。

迷宮の攻略には多くの騎士、使徒が関わっている。しかしここ最近はこの状況と同様、彼女の圧倒的な実力に押され気味だ。

本来ならば【聖女】は強力な天職とは言え支援職。味方の強化パフや回復ヒールに注力するのが普通だ。事実、香織も三日前、「オルクス大迷宮」に再突入する日まではそちらに集中していた。

だが再突入当日。香織はメルドに対し直接、あるお願いをした。

『65階層の戦い…私一人にやらせてくれませんか？』

それは無謀とも言える話だった。何せ65階層には、かのベヒモスがいる。

ベヒモスはこれまで倒せた者がいない魔物だ。恐らくはかの皇帝ならば倒せるだろうが、アレは人族の中でも例外中の例外。普通の人族が単体で挑む相手では無い。

しかも香織の天職【聖女】は後方支援職だ。その真価は仲間がいる事で発揮される。適性としては攻撃魔法もあるが、殺生能力が低い物

が多い。

唯一殺生性が高い固有魔法もあるが、何せクセが強い魔法だ。そう言った点からも認めるわけにはいかない。

だからこそメルドは己の役目を果たした上で、それだけの力がある事を証明しろと条件を付けた。実質的に断つたとも言えるだろう。

香織は確かに二ヶ月で成長を見せた。その名に恥じる事の無い魔法の技術と覚悟を携えている。

だが戦場にいる人間の支援サポートだけでも気を張る。それに加えて単体としての実力を誇示するなど、まるで正気の沙汰の行為ではない。まあ、メルド自身無理難題のつもりでそれを言ったのだから当然の話だ。

信念と実力は伴わない。例え考えがどれだけ高尚だろうと、強い意志があろうと。結局この世界は何かしらの実力主義だ。メルドはそれを長い経験から知っている。

それを知りつつもハジメに協力しているのは、そんな凝り固まった考えを彼自身否定したかったのかもしれない。或いはハジメならば：と思わされたのか。それはメルド自身も知らない話だ。

結局の所、ベヒモスを単体で相手にするのはまだ危険リスクだと言うのがメルドの結論だ。『神の使徒』の中でも【勇者】、【聖女】は最重要の人材。メルド自身の情もあり、冒険させるにはまだ早いと思っているのが現状だ。

だからこそ無理難題を押し付けた。そして今は諦めさせようとした。

ただ香織はそれに飛びつく様な早さで領いた。当時メルドはその反応を、一か八かの物なのだと思っていた。

そう思っていた結果が：目の前の光景だ。

「……………嘘、だろ？」

メルドは騎士団長としての体面をも忘れ、呆然と呟く。

香織の仕事は完璧だった。支援・防御・牽制・攻撃。彼女の真価の一つである筈の『治療魔法』はこの三日間、ほぼ使われる事は無かった。精々疲労回復程度。肉体治療はこの実践訓練において、詠唱文す

ら聞こえなかった。

また香織自身の攻撃も凄まじい物であった。詠唱は淀む事が無く、放たれた魔法は他の物を傷つける事なく、敵のみを灼いて見せた。その結果、下手な戦闘職の二倍を行く討伐個体数を立ち上げた。

「やっぱ、白崎さんがいるだけで安定感全然違うわ」

「動きやすいんだよなあ。強化魔法あるだけでパフォーマンスが段違い」

「何て言うかさ、強くなっただって勘違いしそう…」

多くの『神の使徒』の声が聞こえる。恐らくは香織の事を言っているのだろう。それらを聞いてメルドは思う。彼等は香織を過小評価している。

香織と他の支援職の強化魔法には隔絶した差は無い。その他も同様だ。障壁も、牽制も、攻撃も…精度や威力は凄まじいが、それ等自体は他の者を遥かに超えている、という訳ではない。

同時並列で行った上で、他の者の専門分野を超えている事にも驚嘆すべきだろうが…彼女の行う支援全てが他者への妨害になつていない事。それが一番の異常だ。

飛び交う魔法は時に人の動きを妨げる。視界に他者の魔法が入るだけでも不快感が出来るのはありふれた話だ。また強化魔法ならば動きへの違和感、障壁ならば動きの障害などのデメリットが発生し始める。そしてその采配は人数が増える程難易度を増す。

だからこそ違和感や不快感を欠片も見せない『神の使徒』は気付かない。白崎香織の補助が既に一流のソレを大きく画しているという事実に。

(暫くは香織に補助をさせん方が良いかもしれんな…)

規格外は光輝もだが、彼はあくまでも個体としての規格外だ。『限界突破』や『剣術』、『魔力感知』などの強力な固有魔法に加え、聖剣や聖鎧などのアーティファクト。今はまだ未熟だが、いずれは人族の英雄となる資質を確かに持っている。

そして個体として収まっているが故に、あくまでも皆を率いるだけですむ。彼が直接影響を及ぼせるのは士気だけだ。プラスの効果の

方が大きい。

だが香織は違う。広い視野と多様な手段。それ等を用いて行われるは軍団の強化。文字通りその場にいる味方全員の能力を底上げしてしまう。

本来ならば連携には何かしらのガタが発生する。この実戦訓練にはそのガタを、創意工夫で埋め合わせるという目的もあるのだが：香織がいてはその練習にならない。最悪香織がいない状況下になってしまえば、パフォーマンスも連携も低下してしまうだろう。

その為、香織の補助を暫くは取りやめにすべきか、とメルドは内心呟いた。

「メルド団長」

「…む？ 香織か」

そうしてメルドが香織への評価を更に高く更新し直していると、その香織がすぐ目の前まで来ていた。

「団長、約束は覚えていますか？」

「…決意は変わらんか？」

「はい。お願いします」

彼女は先日と同様、覚悟を決めた顔をしている。ここでメルドは有耶無耶にする事は出来ないと思った。

当然65階層単独攻略など正気の沙汰では無い。今の光輝ならば「限界突破で無理矢理倒せるだろうが、無しならば怪しい」としか言えない。『個』として完成されている光輝ですらそうなのだ。香織ではあり得て一割あるか無いか。

だが香織にとって65階層は、階層主ベヒモスは避けては通れない宿敵だ。そうして勝敗関係無しに一人で戦う事こそがターニングポイントであると言う考えにメルドは至る。

だからこそ、メルドに残された選択は彼女の背中を押す事だけだった。

「……………分かった」

「！」

「だが危ないと思えばすぐに助けに入るぞ、いいな？」



「——はい！」

香織が力強く頷く。メルドはそんな変わらぬ彼女に笑みを零しつつも、振り返り全ての『神の使徒』に告げた。

「続いての65階層だが、他の者は指示があるまで手を出すな。最初の方は香織だけに行かせる」

「「「「っ!」」」」

当然、全員から無言の動揺が響く。65階層はここにいる全員にとつての悪夢<sup>トラウマ</sup>。それ故、掛ける思いは大きかっただろう。だと言うのに行かせるのは【聖女】<sup>ブライド</sup>とは言え、一人の女子のみ。その事實は彼等の矜持を刺激するには十分だった。

「メルドさんの判断でもそれは納得出来ません！ それなら俺が行きます！ 香織一人であんなに…とつても納得出来ない！」

「そうだ、白崎！ 俺達全員でやった方が安全だろ!?! な！」

「鈴も行くよ！ カオリンを一人で行かせるなんてダメだよ！」

真つ先に抗議したのは光輝だ。持ち前の正義感により、香織の無謀な挑戦を防ごうとしている。

そして多少の良心があるならば光輝のこの声に賛同するだろう。

檜山、鈴に続き、他の『神の使徒』も香織を止めようとする。

「ごめんね、みんな。でも…行かせてくれないかな？」

「香織…でも」

「行かなくちゃ、ダメなんだよ」

「!?!」

ただ、そんな言葉だけで止められるならば、彼女は彼女たり得ない。彼女は生来から行動力は人一倍持ち合わせている。

光輝は香織の言葉に静止する。否、その眼の向く先に呼吸をも忘れる。

彼女の目は、他ならない65階層に向けられている。しかし何故か彼方を見ているかのようだ。

では香織は今、何を見ているのか。誰を見ているのか。

光輝はどうに見つけ出している答えから目を背け、再び説得を試みる。行かせてはいけない、なるものかと叫ぶ心の声に従い、止めよう

とする。

「それでも香織一人で行かせるなんて——」

「光輝。行かせてあげなさい」

「!? 雫!? でも——」

「いざつて時は私達が駆け付けなければいいわ。それぐらいなら許してくれるわよね、香織?」

「うん。でも…勝つよ?」

「フフ、そう。それなら勝って来てちょうだい?」

「うん!」

しかしそんな光輝を今度は雫が止めた。それに対し、光輝は何故だと掴み掛かる様に尋ねた。

「雫、何で香織を行かせるんだ!? 心配じゃ無いのか!?!」

「勿論心配はしてるわ。でもここで止めたら駄目。それだけは分かるわ」

雫は香織と常にいるからこそ知っている。

心配をされない様に布団を被りながらも、魔法の特訓を毎日行なっている事を。

【聖女】の真髓である魔法的な訓練のみならず、基礎体力のトレーニングも過剰と言えるまでに行なっている事を。

何よりも、いつも何処かで彼の影を見ている事を。

香織はここで止まれない。その事実を雫はこの場の誰よりも知っていた。

だからこそ、せめてもと雫は香織の背中を押すのだ。

「それじゃあ、みんな。行ってきます」

階段を降りる。一步一步。踏み外す事なく香織は一人、進んで行く。もう彼女の目は、意識は『神の使徒』を映していない。

ならば何を映しているのか、その答えは瞬く間に現れる。

香織が65階層に足を付けた途端、橋の上で二つの魔法陣が黒く魔力を滲ませる。そして空気を軋ませ、魔力光の先でその輪郭が見えた。

香織の目の先にて骸骨の死兵、トラウムソルジャー等が傅く様に出

現する。以前壊した魔法陣も復活している。自然修復機能でもあったのだろうか。

そして頭を垂れるトラウムソルジャー達の背後。そこには巖の様に硬く、この世の物とは思えぬほど恐ろしく、灼熱を灯す角を持つ怪物モンスターがいた。

階層主ベヒモスはただ見下ろす。動く気配も無い。入って来た挑戦者とトラウムソルジャーの行く末を、ただ見守っている。

「さて…どうなる事か」

トラウムソルジャーは一体一体は弱いが、何せ数が多い。時間を取られれば消耗は確実。故にメルドは香織がどう動くかを注視する。

香織が、詠唱を淡々と紡ぐ。そして――

「――『光爆』」

一撃目は、塵殺から始まった。

香織からボツと音を立てて、発生する膨大な魔力の鯨波。魔力の波動がトラウムソルジャー達を瞬く間に飲み込み、砕いて行く。

――邪魔をするな

彼女のそんな内心が見て取れる。一瞥も下されぬまま、トラウムソルジャーは戦闘開始数秒で魔法陣ごと消滅した。

そして65階層に残されたるは一人と一匹。香織はこの瞬間、この戦いの合間だけ、ベヒモスに全神経を注ぐだろう。そしてベヒモスもまたフロアにたった一人佇む香織のみをその瞳に映していた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

ベヒモスは歓喜する。強者との戦いに、新たな獲物との遭遇に咆哮を上げる。トラウムソルジャーの瞬殺など気にも留めない。この階層の主は他ならぬベヒモスなのだから。

ベヒモスの咆哮は遠くにいる『神の使徒』をも震えさせる。かつて刻み付けられた悪夢トラウマを、脳裏に残響させるのだ。

そして唯一の敵対者である香織は――

「――『縛煌鎖』」

――寸分も臆する事なく、開戦の始まりを告げた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——ズドドドドツツ!!

幾つもの鎖が地面から顕現し、ベヒモスを強襲する。避ける暇も与えない。光属性捕縛系統上級魔法「縛煌鎖」は瞬く間にベヒモスの外皮を突き刺し、四肢に巻き付く。

この「縛煌鎖」自体は攻撃手段足り得ない。だが攻撃に移る為の手としては最善。瞬時に香織は新たな詠唱を紡ぐ。

だが——

『グオ? グオオオオオオオオオオオ!!!』

(——浅い!?)

ベヒモスは容易に鎖の戒めを振り払い、突進を開始する。まだ外皮に突き刺さる「縛煌鎖」もあるが、ベヒモスは意にも返さない。

ベヒモスが強者たる所以として、その尋常に無い硬さとタフネス、そしてパワーが上げられる。

確かに「縛煌鎖」は外皮を貫いた。しかしそれは何重にも渡る外皮の幾つかを貫いた程度。重なり合うが故に鉄の鎧を彷彿とさせる外皮こそ、ベヒモス最強の盾にして矛。

『グオオオオオオオオオオ!!!』

外皮の下に敷き詰められている筋肉が膨張する。ズン、ズンと音を立てて直進。香織へと弾丸の如く迫る。

詠唱の猶予など——皆無!!!

『グアアアアアアアアアア!!!』

「——ツツ」

床を蹴り、身を投げ出す事で何とか直撃を免れる香織。しかし突進によりひび割れた岩盤の一部が香織の身体をくの字に折り曲げる。

この橋は攻撃手段が突進に特化しているベヒモスの為に作り上げられたステージだ。逃げ場が少なく、万が一避けたとしても碎けた礫が敵対者を襲う。今の香織の様に、礫を喰らい死んだ者も数少なく無い。

香織の場合、死にはしなかった。代わりに戦闘<sup>バトル</sup>衣が無惨に引き千切れた。そして香織の脇腹が赤く露出していた。

そしてベヒモスは身を翻し、再び香織を睨む。

「香織！」

もう無理だ、と一人突貫しようとする光輝。他の『神の使徒』も同様だ。仲間の危機に駆けつけねば、と詠唱や武器を準備する。

こればかりは仕方がないとメルドも足を踏み込もうとして：違和感を覚えた。

香織が口ずさむ詠唱の言の葉が、あまりにも場にそぐわなかったから。

「光を放て——“光球”」

それはただの光属性初球魔法。ただ光を放つ魔力弾を生み出すだけの魔法。そして物理的な魔法的な攻撃力を持たぬ、言わば非戦闘用魔法の一種だ。

普通この場で詠唱をするならば防御系か、迎え撃つ為の攻撃系、後は避ける為の強化系バフのいずれかだ。

だからこそ、メルドは違和感を抱き：やがてそれはあまりに異常な光景を生み出した。

戦場に、純白の魔力光が満ち満ちたのだ。その正体は数え切れないほどに浮かぶ“光球”の数々。

それはその場にいたあらゆる者の目を潰し、ベヒモスさえも受容仕切れない光量に平衡感覚を失わせた。

血迷ったか？ 否。

目潰しか？ 否。

これは攻撃の布石。

白崎香織は幾度と無く魔法の訓練を行って来た。“光球”は彼女が訓練において数えるのも億劫なまでに使用して来た魔法だ。短文詠唱で、かつ攻撃性も皆無。それ故に出力を調整して訓練を積み重ねて来た。

そうして段々と“光球”の数は増え、発動範囲は広がり、速度は加速、操作も極まっ行って行った。

やがて数百に渡る“光球”を操作する中、香織はある発想に至る。

——これで魔法陣は作れないのか、と。

魔法陣は何も【錬成師】だけが作れる物では無い。例えば血や屍、地

脈：こうした物でも魔法陣は作れる。それ等に何の統一性があるのかはまだ分かっていないが、これでも発動できる事は明らかになっている。

だからこそ香織はそのアイデアを生み出し：そして試行錯誤の結果、その企みは成功する。

当然、体内魔力を魔法にした上でもう一度魔法を発動するのだから、体内魔力のロスが発生する。単純に魔法を発動するよりも、必要魔力量は増えてしまう。

更に言えば成立させるには澱みない操作精度が必要不可欠。並外れた集中力が、香織には必要となる。

ではそこまでして得られる恩恵とはいったい何か？

それは――

「――『聖絶』、『縛煌鎖』、『天灼』」

『グオ!? グッ! グガアアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

――『魔法の遠隔発動』と『擬似的な詠唱破棄』、そして『魔法陣の補填』、主にこの三つに起因する。

ベヒモスの正面に展開された『聖絶』がベヒモスの動きを阻害し、地面から現れるは『縛煌鎖』。先よりも嚴重に絡まるそれを解こうとするがもう遅い。空に浮かぶ純白の魔法陣から稲妻が降り、ベヒモスの四肢を麻痺させた。

詠唱は魔法陣へと魔力を流す為行われる技術だ。しかし一方で『光球』は体内魔力を放つ魔法。それで魔法陣を作って仕舞えば、詠唱の必要性は無くなってしまう。

更に魔法は原則として魔法陣付近で発動する。ならば『光球』による魔法陣を遠くに作って仕舞えば、香織は遠隔発動が可能。当然敵の近くで魔法陣を作れば：最短最速の一撃が繰り出せてしまう。

尤も香織はそんな理論は理解していない。ただ単純に『便利な攻撃手段』としている。

だがそうして放たれる数々の速攻魔法は、無詠唱ベヒモスのあらゆる動きを阻害する。一刻の猶予すら許さず、動きの出を潰す。

瞬く間に地面に伏したベヒモス。その事実には『神の使徒』全員が目

を見開く。

「これは…なんて…」

「すごい」

「…綺麗」

誰かがポツリと呟いた。無理も無い。この場の誰もが今、彼女に見惚れている。

「光球」がダイヤモンドダストの様にキラリキラリと空に舞う。時にそれ等は円環を描き、一部は香織の周囲を泳いでいる。現実離れたそんな光景は、最早神話の一言にすらも思えた。

だが、ベヒモスはまだ死んでいない。「天灼」がその背を焼いたが、絶命には至らない。いずれ死ぬだろうが、目には灼熱の殺意を宿らせている。

——せめてお前も道連れに

迷宮の怪物モンスターとしての意地が、ベヒモスの四肢に活力を与えた。

「聖絶」がひび割れ、「縛煌鎖」が砕けた。『神の使徒』の悲鳴を無視して、その巨体をたつた一人の少女に向けて加速させた。

一方で香織は、逃げない。

この世界トータスに来て、香織は幾度と無く自分の無力を責めた。無知を罵った。

香織はハジメにこれ以上無く憧れている。弱くてちっぽけで、それでも不屈で優しく…この世の誰よりも強い人。

彼は強くなろうとしている。誰かを傷付ける為ではない。『大切』を守る為、彼は果てない道を歩いている。

彼はきつと辿り着く。そして更に先へ進むだろう。

その時、彼の隣にあるのは自分が良いから。その場所を誰にも譲りたく無いから！ 彼を守るのは他でも無い、自分で有りたいたいから！

「——負けたくない」

残り全ての「光球」を己の周囲に集めた。そして展開される幾重にも重なる魔法陣。彼女の背後に描かれる円環の数々。それはまるで神々が携える後光の様。

「南北東西、天上天下、世に秘める神々よ。いざ、我を見よ」

詠唱が始まる。しかし既存の魔法には見られ無い特殊な詠唱。それにメルドは眉を八の字にする。

「瞬く命。万色の魂。此の燎を、我は番う」

香織は左腕で杖を前に構えると、逆の手を後ろに構える。それは所謂弓道の構えによく似ていた。

「闇よ、我を恐れよ。此の灼光から逃れらる事は無いと」

すると香織の右手に矢が創られる。同時に杖の端に光の鋼糸が出来、それを振り絞る様に香織はより一層、右手を後ろにやる。鏃は、ベヒモスへと向けられている。

「光よ、我に仕えよ。我が指が捉えられぬ光は有らんと」

これは白崎香織が生み出したオリジナル魔法。誰よりも速く、何よりも強く、仇を貫く為生み出した光属性特級魔法。

「二射当千、今戒めを解きて——」

光属性最上級魔法『神威』をも超える一撃が、放たれる。

「——天穿・天叢雲弓」

音も無い、衝撃も無い。

ただ純然たる光の軌跡が後追いで描かれる。あまりにも速すぎる一撃は、光さえも置いてきぼりとしてしまう。

そんな一撃にベヒモスが反応出来る筈もない。

自慢の外皮も、分厚い筋肉をも貫く。そうして出来るベヒモスの魔石の小さな、しかし致命的な風穴。

魔石の破壊により生命活動を不可能としたベヒモスは、今度こそ地面に沈み：灰へと還って行った。

ベヒモスが消滅し、やがて『神の使徒』の面々が歓声を上げる。フロアを満たす興奮と絶叫。それらを一身に受ける香織は天井を、その先にいる誰かを見つめる。

「…私、ここまで来たよ」

——だから、必ず追いついて

…それが、誰に向けられたものかなど言う必要も無いだろう。手に持つ細やかな指を握り締め、その手を空に掲げる。

白崎香織、二ヶ月ぶりのリベンジは——圧倒的な勝利を持って収め



て見せた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「まさか……ここまでとはな」

メルドは香織を正しく評価していたと、そう思っていた。香織は支援職としては完璧だが、『個』として完成された存在では無いと。

だがかの強大な怪物を倒して尚、余力を見せる香織。つい先の一撃も合わせ、その判断は完全に誤っていたと判断する。

例えば光輝と香織が戦った場合は辛勝で光輝が勝つだろう。何と言っても光輝には『限界突破』、そしてその先がある。タイマンでの戦いならば、『勇者』という天職はこれ以上無く有効性を発揮する。

ただ香織は支援を中心とした天職にも関わらず、だ。才覚を無視し、鍛え上げられた確かな力が、今の彼女にはある。

「全く……俺も老碌したものだ」

メルドはそう自嘲し、今日はここで引き上げる事を皆に伝える。明日は香織を支援に徹させた上で、全員でベヒモスを倒す予定である事も伝えた。

クラスの士気はこれ以上無く上々。香織の圧倒的な力は皆の心に確かな熱意を灯した。

「光輝くん、大丈夫？ 私の肩使う？」

「あ、ああ。大丈夫だよ、恵里。ちょっと疲れているだけだ。じきに元気になるさ」

「そ、そう？ それなら良いんだけど……」

いつもならば戦いの最前線に行く光輝。しかし帰りは『神の使徒』の殿に付いていた。何という事はない。ただ単純に足が重い、それだけの話だ。

光輝はその足の重みを疲労から来る物だと、思い込もうとする。

だがフラッシュバックする様に、先程の光景を思い出す。香織が、一人で過去の宿敵を乗り越える、その瞬間を。

「……………んじゅ？」

そして香織がベヒモスを倒したその瞬間。彼女は何を見ていたのか。何を目に映していたのか。

今日まで見ない様にしていたソレを…光輝は垣間見た。

それは他でも無い。「裏切り者」と呼ばれるアイツで…。

「……何で」

——ベヒモス<sup>怪物</sup>を倒すのは自分で無ければいけないのに…

——ヒロイン<sup>香織</sup>は自分を見ているはずなのに…

光輝にとって当然であるべき事が、崩れていく。いやよく言えばずっと前からかもしれない。

香織、雫、龍太郎…親しい人間との距離を近頃感じる。三人と疎遠になっていくわけでは無い。だが以前の様な場所では無くなっている。確かな変化が感じられるのだ。

それだけでは無い。ある者を中心として人が集まり始めている。それは香織の眼に浮かんでいるであろう男と同じ人物で…。

「…何でツツ！」

「ヒッ!?!」

隣の恵里がびくりと肩を揺らす。そんな簡単な事にも、今の光輝は気が付かない。

ドロリドロリと胸の中で何かが動いている。ごちゃ混ぜに心を掻き乱す。光輝はその答えを知らない。光輝はその感情を、知らないふりをする。

「………南雲オ」

ボソリと一人でに、光輝は呟く。

ただ一人にしか聞こえないその声は…普段の彼からは発せられない様な、ドスの効いた声であった。

そしてこの2日後の事だ。「ウル」の騒動が、そして少年の新たな話題が降って湧いたのは。

——静かに。されど明確に。物語は新たな盤面を生み出す為、蠢いて行く。

☆☆☆☆☆☆☆☆

場所は「ウル」に戻る。時間はハジメ達が『湖信祭』に出向いていた、その時だ。

「ウル」の秘奥、魔物の鳴き声すら聞こえない樹海の中。静謐な自然の中、残酷なまでに赤い水溜まりが闇の中でも確かに見えた。

血溜まりに沈む彼は、されど意識は明確に存在する。そしてその意識で思う。何故生きているのか、と。

彼は死んだ筈だ。祖国と神の為、身を砕き…されど負けた。蒼い光に。そして騎士達の「天翔閃」に吞まれて、死んだ。

だと言うのに、今自分は意識がある。呼吸が出来ている。体温が、感じられた。

「何…が？」

「あら、漸く起きられましたか。随分お寝坊さんですね？」

「誰か…いるのか？」

焚き火がパチパチと爆ぜ、己ともう一人を照らす。身体が死に掛けているが故に、良く見えない。ただ声から少女であると推測する事が出来た。

「もしかなくても死に掛けです…仕方ありません。取り敢えず回復でもしましょうか。『焦天』」

瞬間黄金の魔力光がボヤけた視界の中、輝いた。そして瞬く間に彼は、レイスは千切れた腕を除き、全快を果たす。精度は高くない。代わりにふんだんに注ぎ込まれた魔力が無理矢理回復させてみせたのだ。

消費された圧倒的な魔力量に戦慄しつつも、回復の恩を言葉で返さうと彼女を見て…絶句した。

「は？ な、何故キサマが？」

「もしかして私の事、知ってくれています？ ここ最近私の事知らない人ばかりでしたので嬉しいです」

あり得ない、あり得ない。絶対に、それはあり得ては行けない。

レイスという個体の、遙か前の記憶。僅かに古い文献を読んだ際、目の前の少女を示した絵が有った事を覚えている。

だからあり得ない。あり得ない筈なのだ。

そうだろうか？ 何故なら…

「何故貴様が生きています!? アレーティアⅡガルディエⅡウエスペリ  
テイリオⅡアヴァタール!!」

トータスというあまりにも広大な世界。そんな世界の遥かに高き  
頂上、そこにかつて君臨した吸血鬼族の女王。

そして百余年前に裏切りに会い、姿を消したはずの女。

表舞台では、もう死んだとして扱われている伝説。紛う事なき世界  
最強、その一角。

そんな彼女、アレーティアは冷徹に、されど愉しそうにレースを見  
下ろしていた。

## 18、過去最大のピンチ(？)

——【鍊成師】南雲ハジメ

数ヶ月前、その名は絶対的な悪として名高かった。【無能】、【落ちこぼれ】、【裏切り者】。呼び名はどれをとっても酷く、民衆貴族関係なく矢面に彼を立てていた。

それ故、少年は常日頃から疑念や義憤の籠った視線に突き刺される事となる。【聖女】や【豊穰の女神】等、庇う者も多かったが逆効果。それもまた虎の威を借る狐としてやっかみを受ける結果となった。

事実、彼には実力が無かった。他の分野ならば目を引く点もあっただろうが、なんせ『神の使徒』に求められるのは戦闘力。だからこそ南雲ハジメはただただその悪評のままに、潰されるのを待つことしか出来ない…その筈だった。

しかしこの数ヶ月で南雲ハジメへの評価は大きく変動する。

王宮鍊成師の工房の中でも異色にして実力派、『ウォールペン工房』への加入に始まり、

王都で暴行未遂を犯した王国騎士の捕縛と、リリアーナ姫からの二つ名の献上を受け、

鍊成師の間でも達成困難とされる直接依頼、【ウル】での指導を十二分に果たしルーキーとして名を上げ、

果てには【豊穰の女神】と共に、魔人族の打破に貢献した。

また当初は少なかった支持者も着々と増えている。特に『神の使徒』である【愛ちゃん先生護衛隊】や神殿騎士たるデビッド等が支持者として加わった事は、民衆に小さく無い影響を与えた。

加えて愛子、リリアーナ等がこれらの功績を受け、南雲ハジメに護衛を付けたのもプラスのイメージを与える一因となっている。

当然貴族等や王国騎士、教会関係者には支持者は少ない。【教皇】イシユタル、国王エリヒドが南雲ハジメを罪人としている以上、その意向に反抗することが難しいためだ。しかし流れが来ている事は確かだ。

こうした結果、当初とは別の意味合いで南雲ハジメという人物は注



——そう。噂の張本人、南雲ハジメは打ちのめされていた。他でも無い、レポート提出に。

判決まで残り二ヶ月。南雲ハジメに立ち塞がるはある意味「錬成師」としての一番の試練、『魔法学理論発展論会』。

単純に言って仕舞えば…研究発表会が迫っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『魔法理論学発展論会』は「ハイリヒ王国」にて年に一度行われる学者の祭典だ。祭典とは言っても煌びやかな物では無い。あくまでもその本質は研究の発表にこそある。

魔法学の研究者は非常に少ない。またそれによる発展の度合いも低い。

魔法学はあくまでも理論だ。魔法がどの様に成り立つか、魔法の分別はどの様に行われるべきか…：そう言った事を研究する。地球での科学と似て非なる分野だ。

魔法学は科学と比べて、理解の必要性が低いという欠点が存在する。

魔法は最終的に言って仕舞えば想像・演算の力だ。大元となる魔力そのもの、詠唱による魔力操作、魔法陣や想像による魔法の構成。これら三つにより成り立つ。

そして魔法学は時に、魔法の構成の邪魔ノイズになり得る。その理由が『魔法構成の一部を人間の脳が行なっている』という点にある。

人間はコンピュータの様にも何度も正確な演算を行う事は出来ない。ましてや一瞬の思考ならば尚更だ。詰まるところ重要なはその思考を乱さない事だ。

だがもし魔法学で既存の魔法解釈が間違っていたとされた場合、思考に迷いが生じる。既存の解釈と新しい解釈、どちらが合っているのか。そして…失敗する。

魔法は理論が間違っていたとしても発動可能。何故ならば魔力と魔力操作、そして構成さえ合っていれば解釈やメカニズムなどどうでも良い。

だからこそ魔法学は人々からあまり求められない。ただ数十年に

一度、編み出された理論が実を結ぶ事もごく稀にある。だからこそ『魔法理論学発展論会』がある訳だが、廃れているのは確かだ。

だが逆に言えば魔法学の論者が成り上がれるのはそこにしか無い、とも言える。彼等にとつてこの発表会は己の功績を訴える特別な場だ。この為に心血を捧げ、研究を行うという者も少なく無い。

それ故に『魔法理論学発展論会』は盛り上がりを見せる。他ならざる論者達によつて。

そしてこの発表会は王城の全ての研究者や発明家が参加を強制される。

当然ながら、「錬成師」もその例外では無いのだ。

「…もう僕は、ダメだ。立ち直れない」

「スゲエ。大迷宮でも魔人族でも折れなかったハジメの心が、遂に折れたぞ」

「折った相手がレポート提出つて…ベヒモスと魔人族全員に謝りなきいよ」

結果、王立図書館にて一つの屍が出来上がっていた。

ハジメは机に頬をベターツと貼り付け、呻き声を上げている。顔を見ればまあ、酷い。目の下にはくつきりとした隈があり、何処か痩せ細っている。睡眠も食事もかなり削っている様だ。

優花も幸利もそんなハジメを心配しなくも無いが、現在のハジメの侍女はあのヘリーナだ。ワーカーホリック仕事バカの扱いを心得ている彼女ならば、ハジメのギリギリを見積もつてくれていることだろう。その為、心配は二人ともあまりしていなかった。

そうして思う事を口々に発した二人だが、優花の発言に思う所があったのか、ハジメは続けて言葉を発する。

「と言つても…これで作ったレポート六つ目だし。それ全部アウトはちよつと…へこむ」

「多いわね？ それ全部理論破綻してんの？」

「いや…全部理論とかは成り立ってるよ」

「？ 成り立ってんなら何で全部アウトなのよ？ そのまま提出すれば良いじゃない」



「違うんだ。もつと…もつとすごい発見じゃ無いと…」

「あー…そつか。何か手伝える事ある？」

「いや、今は良いよ。心配ありがとう」

ハジメがこれまで書いて来たレポートは決して杜撰な物では無い。その道の人間が見れば分かることだが、十分に目新しい内容だ。ハジメの年齢でこれだけの物が描けるとあれば、中々だと【錬成師】達も評価するだろう。

だがハジメは全く満足しない。むしろ焦っている。その様相で優花はハジメが焦っている理由を察した。

「…行き詰まってるから、ちよつと新しい本出して来る。何かのヒントになるかも…」

そんな優花を他所に、ハジメは忘我の様なふらついた足取りで本棚へと向かっていった。

残されたのはハジメが消えた曲がり角をぼうつと眺め続ける幸利と優花の二人だけ。数秒間眺めて、やがて互いの心境を共有し始める。

「…やっぱ、アイツ。かなり追い込まれてるわね」

「そりやな。何たって…冤罪回避のほぼラストチャンスみたいなもんだからな。メンタル鋼のアイツでも、キツイもんはキツイだろうな」  
「そりやそうよね」

先程も言ったが『魔法理論学発展論会』は学者系統の人間にとって、滅多に無い躍進のチャンスだ。ましてや…非戦闘職にとっては生命線とも言える程に。

そして判決まで残された猶予は二ヶ月間。この間に『魔法理論学発展論会』以外の大きなイベントは存在しない。

もしくは【ウル】の一件の様な異常事態イレギュラーがまた起きたならば可能性はあるかも知れないが…そもそも願う物では無いし、そう起きる物では無い。

迷宮攻略を行うという路線もあるが、あそこでは何せ光輝達の様な反対派が多くいる。雫からの情報提供によると、ここ最近光輝は機嫌が悪そうなので会わない方が良いとのこと。これらの情報から妨害

行為が何かしらあるだろう事から、現実的なプランとは言えない代物だ。

だからこそハジメにとって『魔法理論学発展論会』は文字通りラストチャンスだ。そしてそこで功績を挙げるには…並外れた視点からの、そして革新的な発表でなければならぬ。

例えば地球の様な電化製品の知識…などでは意味が無い。確かにその知識はトータスの人間にとっては並外れた理外の知識。しかしそもそも電気というエネルギーを理解する事に時間が掛かる上、魔法で事足りる部分も多い。それ故革新的とは言えないのだ。

ハジメが頭を悩ませるのは正しくソレだ。それまでの固定概念を覆し、人々が求めて止まない様なそんなアイデア、それを出力させようとしている。

そんなハジメの心労を心中底から想いつつも、ふと優花はある事が気になった。

「そう言えば…今更だけど一つ言っている？」

「おん？ どした？」

それは優花の頭に長い間引つ掛かっていた疑問だ。今更といえば本当に今更なのだが…頭の中で燻らせておくよりは、恥をかく方が幾分かマシだ。

そう判断し、優花は意を決して幸利へと疑問をぶつけた。

「何で南雲って冤罪掛けられてるんでしょうね？」

瞬間、幸利は机に勢い良く頭をぶつけた。付いていた頬杖から頬が滑り落ちたのだ。

優花が尋ねるそれはもう既に四ヶ月も経った本筋の話、その原因への疑問であった。濃密な月日を過ごした幸利にとってはあまりにも昔の話。

故に幸利は優花に聞こえる様に、わざとらしく深く溜息を吐いた。ピクツと優花が眉を顰める。

そして「やれやれだぜ」とでも言いたげに目を閉じ、俯く。そして数秒後目を優花に合わせて、一言。

「……………今更が過ぎませんかねえ？ 優花さん？ 脳味噌バツ〇

トウザー・フューチャーでもしました?」

「いや! でもだつて改めて考えたらおかしくない!? だつて私達: 65階層で南雲が必死に食い止めてたの見てたじゃない! あの場にいた全員がそれ見てた筈だし: 普通だったら恩義の一つや二つぐらい感じてもおかしくないでしょ? 当時は疑問に思うよりも不気味さが勝つてたから考え付かなかったけど: 改めて考えたら滅茶苦茶おかしいじゃない!? だからよ、だから!」

「早口過ぎて草」

『芝生える』

「アンタ等の舌、木串で貫いてやろうか?」

「凶星だからつて暴力に訴えるのやめて貰えますう?」

『ラブ&ピースじゃよ:』

「宥めつつ煽んな! バカ主従!」

「はーん!? 俺は兎も角ピナは馬鹿じゃないですがあ!」

「アンタのバカ思考に汚染されてるのよ、可哀想に:」

「よーし買った! その喧嘩ダース単位で買ってやる!」

「かかって来なさいよ、ベットショップ店員闇術師!」

「上等じゃあ——!!!」

「泣き晒しなさいッ!!」

友人故に発生する言葉のボクシング、その1R目が幕を開け——

「図書館ではお静かに、御二方。ピナちゃんも、ね?」

『「アツハイ」』

いつの間にかゼロ距離縮地していた司書さんがニツコリ。優花と幸利は思考のクールダウンを強制させられる。表面上は素晴らしい司書さんスマイルだが: 目の奥が笑っていない。「テメエら黙れ」と威嚇しているのが非常に良く分かる。

ペタツと己の席に再度浮いていた尻を乗せ、双方共に暫く静まる。この年にもなつて騒いで注意を受けるのは恥ずかしい物だ。ピナも翼で己の頭を覆っている。どうやら顔が見せられないらしい。反省が見られる。

「: やっぱピナちゃん賢いわ。アンタと違って」

「ああ、賢いな。お前の単細胞脳味噌と違って」

「……………」

『喧嘩辞めなさいよ、子供じゃ無いんだから』

レスバは怒られるので、二人は黙って睨み合う。本気で怒り合っている訳ではない。これは彼等なりのコミュニケーションだ。そして同時に心がキレると叫びたがっているのだ。

ちなみに本来はここでハジメが宥めに掛かる事で、案外話がスムーズに進む。ハジメも悪ノリで喧嘩腰になってくる場合もあるが、根本的にはお人好し。仲裁役を買って出る事が必然的に多くなるのだ。そして彼がいない弊害が、今ここになって現れた。

一応、ピナが宥めに回った事により喧嘩のノリが収まる二人。そして話は優花が切り出した冤罪の話に戻る。

「そんでハジメのアレか…まあ、ぶつちやけ人の心の理解なんぞ俺は苦手だが…おおよそ嫉妬と劣等感、そこからこじつけた疑心。これが主な理由だろうな」

「いやそこまでは分かるわよ、私も。白崎さんと仲良くしてるからっていう嫉妬でしょ？ めんどつちいわね」

「そつちもあるんだろうが…それに加えてベヒモスを一人で足止めしたってのも不満を買ったんだろ」

「……………は？ どう言う事？」

「ハジメはクラスの奴らにとって見下される事が前提の人間だ。それに恋愛絡みの嫉妬があるとは言え、学校でのアイツは真面目さも無く、協調性も無い。しかも与えられた才能も遙か真下。そんな奴が上に行くなんて腹が立つ。だから言い訳する事にしたんだろ。『裏切り者』だから、畏とか下拵えでベヒモスを倒した』ってな？」

それは男女問わずの話だ。男ならば己等の憧れが【無能】に好意を向けている事に対する苛立ちが、女ならば香織に向けられている好意に反応を示さなかった事から生じた不満が大なり小なり生じている。

そんな男がシンデレラストーリーを描く？ 『神の使徒』の多くはそれに反発した。恐らくは無意識下で、己の行動を正当化した上で。

言い訳は人が持つ武器の一つだ。それがあって人は簡単に正

義にも大悪にも化ける事が出来る。

だからこそ教会の放った言葉は好都合だった。証拠は無い、根拠は無い。だが権力者が放ったその一言は——確かに『神の使徒』を暴走させた。

アーティファクト『ヴィーケン・リート』の効果もあつた。あのアーティファクトこそが人々の中のハジメへの疑心を増幅させ、ハジメの敵へと落とし込んだ。

だが落ちる事を選んだのは…悲しい事に彼等彼女等本人だ。

「勿論俺達はハジメと何度も関わってるから、アイツがアホみてえなお人好しだって事をこれでもかってレベルで理解してる。だが生憎ながらハジメは基本コミュニケーションは受け身だ。知り合いなら兎も角、単なるクラスメイトって程度で自分から話し掛けには行かない。掛けられる悪態にも無言で返すのがアイツだ。だからアイツの善性からクラスの奴らは目を背けられる」

「…助けられたのにな？」

「そもそもの事故自体をアイツの所為にしてるからな。感謝する理由も無い程度に思ってるんじゃないか？ まっ、正直だいたい推測で話してるから、もしかしたらちゃんとした理由もあるかも知れんが…どっちにしろアイツに対してはやり過ぎだ」

「ええ。間違い無いわ」

人は見たいものを見る。もしかすれば精神が成熟して来たならば、見たく無いものから目を背けずに済むのかもしれない。だが一介の高校生にそれは無理な注文だ。

だからこそ増長した。香織の涙も、雫の叱咤も、愛子の言葉も尽くを無視した。

更に言えば彼等側には光輝が居た。カリスマや才能を持ち、己等と同じくハジメを『悪』とする人間が…居てしまった。そして彼が率先してハジメを責める。

その後に続くのはあまりにも簡単で、そして甘美であつた。

結局、幸利の推測は殆ど当たっていた。『ヴィーケン・リート』の存在に気づいていないが、現状を説明するには十分過ぎた。

改めてクラスメイトからハジメに向けられる、容赦無い悪意に目を細める優花。改めて集団での思い込みは厄介だ、と思わされる。

「…ちなみにアンタも南雲と仲良くなる前はそう思ってたの?」

「そもそも俺はその頃、他人に然程興味が無かったからな。無視してハーレム目指す為に『闇魔法』の改良を——オイコラ。今は改心してるから、汚物見るような目すんな、優花」

「あ、うん。分かってる、分かってるわよ、清水…」

「呼び方から距離出来てるのは明白なんだよなあ——」

それまで怒りやら悲しみやらで混雑していた優花の心が、たった一つに纏められる。即ち「キモイ」のただ一言だ。

一応友人の情けはある。直接は言わない。ただちよつと接し方を改めようかと思っただけだ。

…ただ、面倒なので直ぐに呼び方は戻す事にした。

「…あれ? でも中立派ってまだ居たわよね。ユキも護衛隊のみんなもこつちに引き込めたけど…」

「確か永山班だな。ただ…ぶつちやけアイツらは今、どっち側にも引き込めないのが現状だ」

「何ですよ? 中立派って事は少なくとも単純に南雲を嫌ってる訳では無いんですよ? 護衛隊のみんなも同調圧力にやられてただけだし、誘えばこつちに來てくれる可能性だって——」

「忘れたか? 遠藤が失踪してるのを?」

「……………ああ、そうね」

「安心しろ、俺も偶に忘れる」

「あつ、やつぱり?」

遠藤浩介、元々永山班に居た天職【暗殺者】を持つ『神の使徒』の一人だ。そして彼は地球にいた頃から、【暗殺者】の如く存在感が無かった。…ただし本人の意図に関係無く。

失踪とはかなり大事の筈なのだが、優花も幸利もちよいちよい忘れ。何故か。何故なんだろうか。二人は首を傾げるしか無い。

ただまあ、今遠藤の存在感の話をする気は無い。問題は彼の失踪による副次効果だ。

「単純に言えば永山班の奴らは警戒してる。遠藤が失踪してから四ヶ月近く。だってのにまだ痕跡さえも掴めていない。遠藤は存在感こそ薄い『神の使徒』。それを見つけられてないってのは余程犯人の手際が良かったか…それとも国絡みか…。どちらにせよ警鐘を鳴らすには十分だ。疑心暗鬼になるのも、必然の話だろう?」

「つまり、南雲は警戒されてるって事?」

「ハジメもそうだが王国も教会も、だろうな。悪魔の証明とはよく言ったもんだよ。ハジメが攫った可能性をアイツらの視点からゼロにするのは、現状まず無理だ。そして恐らく教会側もその疑惑は晴らせない。だからこそ、永山班は完全な中立派なんだ」

愛ちゃん先生護衛隊の場合は同調圧力に負けた事で、沈黙を貫くという結果になった。精神的にはハジメ達寄りで有った為、協力を得られる様になったのだ。

一方で永山班はどちらもを疑っているが為の、結果的な中立派だ。故にどちら側にも組する事は無い。恐らくは遠藤が発見されるその日までは、彼等は全員を疑う事だろう。

「なるほどね…まあ、敵にならないだけまだマシか」

「だな。出来ればこっち側に引き摺り込みたかったが…事情が事情だ。無理に引き込めば、不満も募る。見えた地雷は避けるのがセオリーだ。無視して行けば良い」

そう引き摺り込めない事は残念だが、逆に敵にならない事もほぼ確定している。ならば現状、考慮する必要も無い。

「…ま、今でも勢力は割と増えてる。ハジメが功績さえ立てれば、何とか無罪放免されるぐらいには出来るんじゃないか?」

「この前の【ウル】も功績あった様な気がするけど…」

「あれは先生がメインの功績だからな。世間様にハジメがメインの功績だつてアピールしねーと、無罪放免は難いんだよ」

「そうやって来ると…本気で南雲が頑張らないとダメなのね、改めて」「そうなんだよなあ…」

この話が終わって丁度、本棚の向こう側から見覚えのある人物が現れる。ただし見事なまでにゴミの様だが。

「タスケテ…タスケテ…」

ヨタヨタと雑魚ゾンビの様に歩いて来るハジメを見つめつつ。

「…行けると思う、ユキ?」

「無理じゃねえかなあ?」

『南無』

不安を覚えるのは仕方がない話なのではないだろうか。少なくともこの場において自信満々で居られる者は居なかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あつ、そう言えば南雲。朝メルドさん達と戦闘訓練してるのよね?」

「あーうん。偶に坂上くんとかも参加してくれるよ? 最近はデビッ

ドさんとチェイスさんも来てくれるから充実してる」

「あの二人トコトンお前を気に入ってるよな、ハジメ」

「デビッドさんは未だに言葉は厳しいけどね」

「ツンデレね」

「ツンデレだな」

「ツンデレかあ」

『ツンデレ乙』

さて『魔法理論学発展論界』が迫っている現在だが、戦闘訓練は未だに行なっている。というか神殿騎士の助力もあって、むしろ充実して来ている。

ちなみにこれはデビッドが「愛子に恥はかせられん。鍛えてやるから、覚悟しろ」と、チェイスが「興味がありますので。宜しいですか?」と、自ら申し出てくれたのだ。ハジメとしても有難い申し出であった為、間髪無しで頭を下げた。

言わずもがな。デビッドはツンデレ。間違いない。

この話になってから少し元気になりつつあるハジメ。紛う事なく訓練馬鹿である。二人は多少呆れている。

「まあ、アンタが楽しそうで何よりだけど…その訓練私も参加させて貰えない?」

「有難いけど…朝早いよ?」

「そこは全然大丈夫よ。割と早起きだから、私」



「それが良いなら、是非お願いするよ。また明日朝訓練場で」  
「ええ。宜しく」

天職【投擲師】は戦闘職の中でも珍しい『中距離戦闘職』に類する。武器の扱いに長けた近接職や高い魔法適性を持つ魔法職とは異なる。良く言えばオールラウンダー、悪く言えば器用貧乏なのが【投擲師】だ。

主武器たる投擲に加え、近接戦や初級魔法による戦闘で組み立て行く事を得意とする。その為決定打は足りないが、対人戦では有利性を持つというのが【投擲師】の評価だ。

訓練に加わってくれるメンバーとは別のタイプであろう戦闘スタイルは、ハジメとしては非常に有難い。是非是非と優花の参戦を歓迎する。

「……………コホンッ」

『…ピエツ』

「!?」

するとわざとらしく幸利が咳き込む。何だろうか、と振り向くが幸利は何も言う気配が無い。改めて明日の訓練に関して話を進め――

「コホンッ、コホンッ…」

「…ユツキー、風邪引いてる?」

「……………引いてねえわ」

何度も何度も咳き込む幸利。てっきり風邪でも引いたのかと思っただが、どうやら違うらしい。ハジメは首を捻った。

「あ――…南雲、察してやりなさいよ」

「うん? 察する? ……ああ、そう言う事かあ」

すると察した御様子の優花がハジメに目を向ける。暫く唸っていたハジメだったが、どうやら察する事が出来たらしい。二人揃ってニッコリする。

そして二人揃って幸利の肩をポンポンと叩き、言う。

「寂しかったんだね、ユツキー。一緒に訓練しよ?」

「悪かったわね。案外アンタ私達の事大好きよね?」

「はあ!? 違いますう――!! そう言うんじや無いですう――!! 誤

解しないで貰えますう!？」

『「ツンデレ乙」』

「黙れ馬鹿ども！」

「お客様？」

なおこの後再び司書さんが来襲し、菩薩スマイルを三人と一匹にかました。何とも素晴らしい笑顔で：思わず震え上がったと三人は後に供述した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「最近南雲様の調子は如何ですか、ヘリーナ」

「そうですね：レポートに関しては詰まっている様ですが、他は万全かと。あと少し寝不足などでは有りますね」

「それは頂けませんわ。寝不足は健康最大の敵ですのに：」

「お嬢様がそれを言いますか：」

「何か言いました？ ヘリーナ」

「いえ、何も」

「？ まあ、良いですわ。それで：近づいて来ようとしている相手は？」

「少しずつですが確実に」

「全く：私は兎も角、【豊穰の女神】の庇護下にいる相手に手を出そうとするのは浅慮が過ぎません事？」

「では如何致しましょうか？」

「そうですね：そう言えば南雲様はそろそろ学会に出られますわね？」

「ええ。功績を上げる為、勤しんで居られます」

「：所で南雲様ってマナーレッスン受けておられましたか？」

「始まる前に実質的な『神の使徒』追放処分を受けておられますから、受けておられません」

「それならば：どうせです。私が出ます」

「お嬢様自身が、ですか？」

「ええ。そろそろ【王女の騎士】の二つ名を疑われ始めていますしね。その補強の為に、直接会いますわ」

「かしこまりました。すぐに南雲様のスケジュールを確認致します」  
「頼みましたわ、ヘリーナ」  
「ええ、お嬢様も」

## 19、本日尚も訓練日和

「……………南雲」

「……………うん、園部さん」

まだ太陽も上がらない早朝。寝る者も少なくない時間帯でもなお、少年等は起き上がっていた。

ただ少年等は静止していた。二人のみならず、同じく訓練に参加する龍太郎、デビッド、チエイスマも同様にだ。ちなみに今日、メルドは業務上の関係でお休みだ。訓練相手が増えた以上、何の問題も無いが。

何故静止しているのか。それは決して恐怖から来る硬直では無い。単純に驚き呆れているだけだ。更に言うならば、目の前の現実を容認しきれず、現実逃避を繰り返しているだけだ。

ならば何故驚いているのか。何故現実逃避をせねばならないのか。それは幸利が連れて来たもう一匹の使い魔にこそある。

「はあ、寝みいな。…ハジメも優花もお早い事で」

「うん、おはよう。ユツキー。ところで後ろのその子は何かな?」

「……………ああ。まだ会わせてなかったっけ? コイツが『ポチ』だよ」

「その子が…ポチなのね…」

「……………ポチ、かあ」

「何だ? 何か文句あんのか?」

『ピッピ?』

ポチと言う名前は以前聞いた事がある。愛子の雇われの身となる為、幸利が冒険者ギルドに通い詰めた時期にタイムした使い魔の名前の筈だ。採集系の依頼をピナ、そして討伐系の依頼をそのポチで無双したとの話だ。

話だけ聞いており、その正体や姿は知らなかったハジメと優花。だが今ならば思う。コイツなら確かに無双も出来るだろう、と。

ただ同時に、二人は凄まじい衝動に駆られていた。喉のストレスままで、ある言葉が迫って来ていた。

それをなるべく堪えて堪えて…やはり無理だと息びつたりのタイ

ミングで、二人は叫んだ。

他ならない幸利と、すつつつごく見覚えのある『ポチ』に向かつて。

「その見た目でポチはねえだろ!!」

『はじめまして♪』

『側室やで』

様々な肉食獣を強引にかき混ぜた様な醜悪な見た目をした魔物。かつての「ウル」での戦いに於いて、唯一捕縛しか出来なかった魔物『キメラ』は、幸利へと甘ったれた猫の様な声で鳴いていた。

そしてネーミングが適当過ぎるだろ、と二人は叫ぶ。

なお幸利のネーミングセンスはこれが限界である。彼なりにカッコいい名前を付けたつもりであった。

「なるほどね…『ウル』で捕縛されてからはアンタの手に渡ってた訳ね」

「ちなみに教会と王国にはコイツは俺が冒険者やってた時にタイムした事にしてる。『ウル』での敵側の生き残りは居ないって事に先生がしてくれたからな。お陰で俺の戦力がアップしたって話だ」

「ユキ。アンタ先生に無茶苦茶お世話になってるわね？」

「そろそろ菓子折持つてくわ」

「そうしなさい。尤も先生の事だから生徒のみんなに配りそうだけど」

「…もうそれしか想像できねえ」

呑気な会話とは裏腹に、二人は瞬間に打撃と斬撃、魔法の応酬を繰り広げていた。

幸利はピナとポチの使い魔を主軸にした戦闘スタイルだ。タフなポチを前衛に置き、幸利自体を後衛に据えて戦闘を行う。ピナには直接的な戦闘能力は無いが、「共眼」により俯瞰的な視野を味方全員に共有する事が出来る。それにより幸利とポチの連携の練度を強めて

いる訳だ。

一方で優花は付かず離れずの距離を保ちながら、ナイフ等の投擲を行っている。単純にそれだけの、極めて単純なスタイル。だが特筆すべきは単純故に穴も多いこの戦闘スタイル。それを実質的な二対一であろうと、こなしていると言う点にこそある。

ポチはタフで、前衛としてはかなり強い。しかし遅く、鈍重だ。ならば捉えさせぬと留めなく、優花は訓練場を駆ける。

そして同時に四つのナイフが投擲される。ナイフは訓練故に刃を潰されているが、重量は本物。一撃でも喰らえば致命的な隙を晒す事になるだろう。

「——ちいつー！ あぶねえなあ！ 夜の灯、尽く暗幕に隠れ——ッ!」  
それをしやがむ事で回避。しかしあと十メートル程の距離まで優花は迫って来ている。

ならばと黒の煙幕を作り出す闇属性初級魔法「暗煙<sup>あんえん</sup>」を唱える。これにより優花の視界を奪い、勝負を仕切り直しに持ち込もうと画策した。

だが後頭部を確かに揺らす衝撃が、幸利の詠唱を許さなかった。

(しまっ——さっき投げたナイフか!?)

天職【投擲師】が底上げするのは単に投擲の威力だけでは無い。届き得る距離、精密なコントロール、そしてそれによる物理法則を無視した様な軌道の投擲を、優花は行う事が出来る。

魔法も中断され、幸利自身も瞬間的に身体のコントロールを失う。ポチも間に合わない。優花は風を切り、幸利へと飛び掛かる。

空中で幸利の腕を捕まえ、肩を脚で絡め取る。そしてそのまま地面へと落とした。幸利が身体のコントロールを取り戻した頃にはもう遅い。プロレスで言う所の腕ひしぎ十字固めがもの見事に決まっていた。

「あ、いだだだだだだだだだだだ!!!」

「ほくら、ユキキ? 降参は?」

「参りました参りました! だから手首は捻らないでででででででで!!!」

『ピエ——!!?』

『グオオ!?!』

※腕ひしぎ十字固めは普通に関節外れる可能性のある技ですので、良い子は真似しないでね? 悪い子もやめようね?

当然絞め技故にポチが攻撃する隙はある。だが優花の場合、わざわざ絞め技にせずとも、ナイフによる刺突で幸利を仕留められた。詰まる所、絞め技を決められた時点で幸利はこの試合に負けた形となっている訳だ。

「たくお前は加減を………」

「どうしたのよ、急に黙って?」

「いや、もしかしたら女子に関節技決められてたのって役得だったのかと——」

「もう一回いる?」

「勘弁して下さい」

どうやら幸利に雄豚になる才能は無かったらしい。普通に拷問は拷問だと感じられる人間だったらしい。ほら見ろ、全身が震え上がってる。関節がガタガタだ。

「はい。私の勝ち。七戦七勝ね」

「お前…対人戦やたら強いよな」

「アンタが接近戦弱過ぎるのよ。もうちよい鍛えなさい」  
「ぐっ、ぐぬう……」

優花の物言いにぐうの音も出ない幸利。優花の言う事も確かで、幸利は接近戦が非常に弱い。典型的な魔法使いのスタイルであり、己自身が前衛となる事を苦手とする。

正確には魔法による攻撃は可能だ。幸利の適性は何も闇属性魔法だけでは無い。多少なら、他の属性の攻性魔法も使い熟せる。だから何も攻め手になれない訳では無い。ただ接近戦に間合いに入られたならば、そんな詠唱の余裕などありはしないが。

だからこそ幸利自身も「そろそろ体を鍛えた方が良いか…流石に女子に負けるのも嫌だし…」と心中ぼやいているのだ。流石に幸利にだって男子としてのプライドぐらいあるのだ。

そうして言い返さずに幸利が顔を顰めていると、横で断続的な鉄のぶつかり合う音が響く。

其方を向くと吹き飛んでいるハジメと、それを追撃しようとするデビッドの姿が見えた。

デビッドは叫ぶ。

「どうしたア、南雲ハジメエエエ!! 実戦のつもりで戦え! 気を抜くな!!」

「ッ——! 〃錬成〃 え!!」

「温いッツ!!」

迫るデビッドを、〃錬成〃により創り出した壁が阻む。だが土属性魔法による補正も掛かっていない土壁などデビッドには無意味。瞬く間にデビッドはその壁を拳で砕いた。

だがその砕いた先に、ハジメは居なかった。

(——ッツ!?)

一瞬で消えた様にも錯覚出来る光景に、デビッドは混乱する。ハジメが何処に行ったのか、それを導き出そうとしている。

創り上げられた土壁は単なる防御の一手では無い。それは一瞬でもハジメを見失わせる障害であり、デビッドへの攻撃を繰り返す為の足場だ。

即ち——上だ。

「フツ!!」

「ッツ——!!」

裂帛の呼吸と共に放たれる回転蹴り。反応が僅かに遅れたデビッドに避ける余裕は無い。

そのままデビッドの後頭部へと一撃が——

「ぬんっ!!」

「——つて、えええ!?!」

——着弾する前に、デビッドはその蹴りを己の頭蓋で受け止めた。自ら攻撃を喰らいに行くと言う、恐怖をかなぐり捨てた所業。しか



しその一手は、ハジメの蹴りの加速を食い止めた。

とは言えノーダメージでは無い。仮にも頭で受け止めたのだ。それならば脳を揺らす程度の事は出来ている筈。そう断じてハジメは体を捻り、拳を握り締める。

だが神殿騎士と言うものは頑丈で、そして規格外なのだ。瞬間、ハジメの目には空が映った。

急変する光景に動揺するハジメ。しかし背から響く衝撃が、何が起きたのかを彼にありありと知らせた。

「ガッツッ!!?!」

肺から酸素が吐き出される。視界が点滅し、火花が散る。

投げの起点は脚だった。デビッドは額で受け止めた脚を直ぐ様捕まえ、そのまま叩き付けたのだ。

ハジメが理解出来なかったのは何もステータス差による問題では無い。魔力循環により強化を行なっているハジメのステータスは精々、デビッドに一步及ばぬ程度。決して見失う程の実力差では無い。

だからこそ分かる純粋な技術の差。重点の移動、動きの緩急、自然な誘導<sup>フェイント</sup>。そう言ったある種答えの無い、故に対応し続けねばならない分野。それ故に経験と思考こそが物を言う部分だ。

「この程度で伏している場合か！ 次だ、南雲ハジメ！」

「ッ！ はいー！」

一朝一夕ではまず不可能。だからこそデビッドはハジメを叱咤する。ハジメにより経験を積みませようとする。

そしてまたハジメも応える。『学会』の件もある。だがあの日の約束を、「追いつく」事を止めるつもりは毛頭ない。二兎追うものは一兎も得ずと言うが、何せ時間が無い。

一秒たりとも無駄に出来ない。再び南雲ハジメは構える。

「よろしく願いますー！」

それに対しほんの僅か、デビッドは口端を上げた。

「ふん…ならば行くぞー！」

幾回にも及ぶ剣戟が、懲りる暇も無く繰り広げられた。

「…アイツ、やっぱヤベエな」

「というかデビッドさんの叩き付け、マジだったわね…」

「本気で殺そうとしてんじやねーかな、デビッドさん」

そして戦いを遠巻きに見つめる優花と幸利が若干引いていた。

側から見ればデビッドのそれは、本気の殺し合いに見える。彼の一撃一撃は敢えて痛み付ける様な攻撃のオンパレード。

一応デビッドが敢えて痛みがある様に攻撃するのは、本気で戦わせる為の処置だ。ハジメにはかなりの反骨精神がある分、下手に甘やかすよりもスパルタで訓練を行う方が早い。その辺りはメルドも概ね同意している。そして日頃の訓練でハジメは多少の頭ならばオールグリーンだ。

…まあ、ハジメの思考もイカれてきているのは確かだ。

そんな訳で客観的に見ればヤベー奴とヤベー奴。二人は引く程度で済んでいるが、下手すれば通報レベルのやり取りだ。正直理解したく無い。

「お——、やっぱ南雲の奴根性あんなー」

「デビッドの方も…どうやら気合が入っている様ですね」

「チエイスさんに坂上。そっちも休憩？」

「おう！ 五戦二勝だ！ やっぱつえーな、チエイスさん！」

「私としては子供に二回負けたのはショックだったのですがね…」

そうやって脳が理解を拒んでいる内に、残る二人の戦闘訓練も一旦終わりを迎えたらしい。

『神の使徒』きつての武闘派である龍太郎はやはり強かったらしい。勝ち越しているとは言え、ギリギリまで拮抗している辺りが流石だ。チエイスはやはり悔しいのか、目を伏している。恐らく頭の中で先程までの戦いをシュミレートしているのだろう。やはり色々真面目である。

「それにしても…デビッドさん、怖いぐらいに気合入ってるんですけど…」

「御三方相手ならばもう少し加減や思いやりもあつたでしょうが…南雲殿相手だからでしょうね、あそこまで厳しいのは」

「…やっぱりデビッドさん、南雲を認め切れてないんですかね？」

「いえ…むしろ逆でしょうね。期待しているから、でしょう。これはデビッドに限った話ではありませんが、神殿騎士は教会の言葉を絶対としています。『神の使徒』とあらばどんな者でも敬い、神の敵とあらば隣人であろうとも憎む。今は愛子の言葉によりその考えを改めましたが、以前の私もそう言った考えでした」

宗教という物は人の思考を染め上げる手段の一つ。偶像を崇めさせ、人の行動原理を定める。人の拠り所としての機能は確か。だが同時にその信仰の度合いが強ければ、その人間の思考を狭めてしまう事も確かな事実だ。

この世界における聖教教会は特に、その後者の傾向が強い。神を盲目的に信じる人間が多い。そしてその神に仕える者ならば尚更。何と言つても神の言葉に従い、その為に命さえも差し出すのだ。その信仰は最早狂気とも言い換えられるだろう。

だが【豊穰の女神】畑山愛子の言葉は、彼等のその様な認識を改めさせた。他者を思い遣り、寄り添う事を真に出来る彼女だからこそ、神殿騎士四人は彼女に剣を委ねているのだ。

それは間違い無く、彼等自身の意思による物。決して教会の決定に従っているだけでは無い。

「ただ考えを改めようと、これまでの認識が完全に裏返る訳では無い。だからこそ我々は当初南雲殿を目の敵にしてしまっていましたからね。今でこそ認められています、やはり難しい物です。デビッドは我々の中でも特に信仰深い人間でしたから尚更です。その為か愛子に従つてからも、「神の言葉は絶対」という認識を切り離せておりませんでした」

認識の改めには時間が掛かる。一朝一夕で自然の理が覆らぬ様に、人生を歩んだ上で人は学んで行く。そして成長して行くのだ。

だがデビッドは良くも悪くも意固地であった。教会へ陰りの無い信仰を捧げ続けていた彼は、愛子の言葉を受けてからも教会の理念以

外の視点で物を見る事が出来なかった。

チエイス等にも名残はあったが、他の視点の理解は時間を掛けて行っていた。デビッドだけが、取り残されていた。デビッドだけは、神の下僕のままだった。

それを——たった一人の矮小な少年が破ったと言うのだから噴飯物だ。

「だからこそ南雲殿はデビッドにとって、初めて認めた『神敵』。あの男はそれだけに南雲殿に期待しているのです。ですからああして熱心に入り込んでいるのでしょね。尤も言葉にするのは恥ずかしい様なので、罵倒混じりですが」

「ツンデレだあ」

「ええ、正しく」

『せやな！』

『ごしゅじん！ ただしい！』

ハジメはデビッドの常識をあつさり破壊した。デビッドからして見れば、天地がひっくり返る様な思いだっただろう。神の敵として見ていた少年が、友を助ける為邁進する姿は痛快に違い無い。

だからこそデビッドは内心、叫ぶのだ。お前はその程度では無い、と。常識を吹き飛ばす男なのだ、と。

まあ、何とも不器用な尊敬の念が、デビッドには確かにあった。それを戦友であるチエイスは嬉しそうに語る。聞いている三人も、それにまた微笑んだ。

「ちなみにチエイスさんは南雲の事、どう思ってるんですか？」

「そうですね：私も期待しておりますよ？ 彼には【勇者】殿とはまた違うカリスマがある。誰も彼もを率いる将のそれでは無い。されど何かと手を貸そうと思わせる引力。滅多に無い才能に違いありません」

御三方もそうでしょう、とチエイスが視線で尋ねた。龍太郎は直ぐ様頷き、優花と幸利は居心地悪そうに目を向こうにやった。何も答えないが、否定はしない辺りおおよそ同意なのだろう。何とも正直である。

二人が照れ臭さやらで沈黙を貫き始める。チエイスも空気を讀んで黙るが、二人を優しく見ている。

ただ此処には一人、空気など知った事が無い人間脳筋がいる訳で…

「ハハツ、やっぱ南雲周りはおもしれえなあ」

「ちよつと待って、坂上。私の事イロモノ扱いしてない?」

「そうだぞ。イロモノはハジメと優花だけで十分だ」

「…もう一回、ボコして欲しいの? ユキ?」

「上等だ、オラア! 下剋上覚悟しやがれ!」

『下剋上取つたらア!!』

『とつたらー!!』

やはり喧嘩がコミュニケーションの主軸たる優花と幸利は照れ隠しも兼ねて、再び訓練へと戻る。

後はハジメとデビッドの白熱ぶりに感化された、と言うのもあるだろう。強くならねばならないという意志に、薪が焚べられた。冗談紛れではあるが、確かに二人の瞳には鋭い眼光が宿っている。

それを見て、龍太郎もチエイスも笑った。

「いい奴らだなあ、二人とも」

「ええ。南雲殿は良き隣人に恵まれたかと」

「そんじや、チエイスさん!」

「ええ。もう一度訓練と行きましようか。今度こそ全勝させて頂きますよ!」

「俺こそ勝ち越してやりますよ!」

「良いでしょう。覚悟なさい、坂上殿」

そうしてまだ朝日も見えない内に、全員が全員全力を出し尽くす結果となる。常連組は慣れっこだが…初参加の優花と幸利に関しては、食堂で昼寝をしているのが見られたと言う。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「南雲様、研究の程は如何でしょうか? あと何もお飲みになっていないかと思いましたが、紅茶を用意致しました。是非お飲み下さい。あと小腹も空いているでしょうから、つい先程焼いたスコーンをどうぞ」

「あ、ありがとうございます、ヘリーナさん。あと…研究は…」

「どうやら進捗は宜しくない様で」

「うぐう…」

午後、先日と同様にハジメは『学会』用のレポートをまとめている。場所を変えればリラックスして、斬新なアイデアが出て来るのではないかと自身の部屋に籠っているが…結果はご覧の通り。これまた先日の再現の様に机に伏している。

やはり書けはするのだが…どうも目新しさが無い。一目は置かれるかもしれないが、功績と言うには及ばない物ばかり。

認めよう。完全にどん詰まり状態だ。取り敢えずヘリーナから紅茶を受け取り、口に傾ける。上品な香りが口一杯に広がる。…果たしてお値段はお幾らだろうか？

続いて齧ったスコーンも非常に美味しい。紅茶との味合わせは見事と言う他無く、舌に残る余韻が心地よい。…ハジメは頭の中で算盤を弾き始めた。

当初の頃は緊張やらもあつたが、最近のハジメとヘリーナは上手くやっている。掃除や身支度は他人に任せるのが申し訳ないのか、ハジメが自身で出来る限りはしている。

ただやはり侍女のプロたるヘリーナは違う。掃除の範囲は同じだろうに、部屋は眩く見える。またハジメが支度し忘れていた物も、いつの間にか鞆に入っていたりする。

そして特にハジメが有り難いと思っているのは、食事面だ。【錬成師】という半ば研究職に近いハジメは度々夜更かしする。そうすると今の様に飲み物や間食、夜食等を小腹が空いた時を見計らって作ってくれるのだ。優花が作る昼飯と言い、ヘリーナの間食と言い、どれも美味しいので舌が肥えそうなのが目下の悩みだ。

なお、世間一般ではこれを『餌付け』と呼ぶ。優花は兎も角、ヘリーナに関しては内心ペットに餌を食わせる気分にかなり近い。今もハジメの後ろに立ちながら、ジイツと頬張るハジメを見つめている。

どうやらヘリーナさんはハジメが可愛くて仕方がないらしい。断じて恋愛感情では無いが…こう、湧き上がってくる物があるらしい。

「ご馳走様でした。これでまた集中出来そうです！」

「恐悦至極に御座います。…ところで一つ尋ねたい事があるのですがよろしいでしょうか？」

「？ 何でしょう？」

「それでは失礼ながら…南雲様は『神の使徒』の皆様用に開かれたマナー講座を受けておられませんか？」

「……………何て？」

「此方の世界のマナーを知っておられますか？」

「……………」

ハジメは栄養をとった事で加速した思考により、記憶を急速に遡る。いやいや、幾らなんでも四ヶ月近くこっちで暮らしてる訳だし、マナーは知ってる筈……………。

「……………僕こっちのマナー、知らないですね？」

「せめて言い切って下さいませんか？」

「そもそも僕、クラスメイト全員見たのが遠い昔にしか思えないんですよね…」

「古傷を抉ってしまいましたか？ 申し訳ありません」

「いえ、友達はいるので大丈夫です」

「追加のスコーンは如何ですか？」

「戴きます」

——もぐもぐもぐもぐ、ぐっくん

『魔法理論学発展論会』は何もレポートだけではありません。それを元に第一線の学者の皆様を前に、発表を行う必要があります。一番重要な物は研究内容に違いありませんが、マナーが悪いと判断された場合聞かない人間も出て来るでしょう。特に南雲様は悪い噂が多いのも確かですので、第一印象は必ず好印象で無ければいけません。更に言うならば、南雲様の目標はずっと遠いと認識しております。ならばマナーはその際に必ず武器となり得ます」

「それは…そうですね」

「柑橘系の果物でジャムを作りましたので、付け合わせとして是非」  
「あ、はい。ありがとうございます」

——もつもつもつ、ぐっくん

「そう言った理由もあり、南雲様には個別でマナーレッスンを受けてもらう必要があります。幸い教育係に適任者が居られますので、時間さえ宜しければ晩食後に会って頂きたいのですが宜しいでしょうか？ ——後、此方のブドウモドキのジャムは中々面白い味わいとなるかと」

「食べ物のお話を真面目な話の間に混ぜて来るのやめてくれませんかねえ!? 集中出来ない!!」

「如何ですか？」

「会いますし、戴きます！」

「教育係の方を？」

「ド下ネタア!!」

真面目な話と食事の話が交互に飛び交う故にハジメは混乱する。これはヘリーナなりのジョークなのか？ 否、単に『餌付け』へのリビドーが迸っただけである。

なお【傍付き】ヘリーナさんは、普通ならば仕事で物を語る侍女オブ侍女だ。みんな憧れるThe.メイドさんだ。決して主に次々と飯を食べさせようとする困ったさんじゃ無い。

正確にはリリアーナ相手ならばこう言った一面も出て来るのだろうが、それ以外ならばハジメ以外にはいない。つまりは化けの皮が剥メイドフェイスがれる程度には、近しくなったという話である。

ただまあ、そんな事実を知らないハジメは取り敢えず新しく貰ったジャムをスコーンに乗せて、もぐもぐぐっくん。

そんなハジメにヘリーナさんは満足気に頷かれたそうなの。

そして今度こそスコーンを完食し、少し膨れた腹を撫でるハジメ。その興味は再びマナーレッスンの方へと向く。

「ちなみにその教育係の方ってどんな人なんですか？」

「優しく、一生懸命な御方です。気軽に接してくだされば、宜しいかと思われます」

「へー、ちよつと楽しみです」

「それはそれは」



これまでも様々な技術を学び、習得して来たハジメ。そしてここに  
来て新たにマナーが加わる。

履く草鞋の数も増えて来て大変だが、同時にハジメは好奇心と言う  
物が非常に強い。教育係の相手も含めて、ハジメは期待に胸を膨らま  
せて――

「お久しぶりですわ、南雲様。此度教育係を承りました、リリーアーナ  
S||B||ハイリヒですわ。どうぞ良しなに…如何されました？ 私  
の騎士様？」

――とんでもねえ相手がそこには居た。

確かにヘリーナの言う通り優しい人だ。それに努力家であろう事  
も、接点が少ないハジメでも理解出来た。

ただ…ただだ。

「ちよつとヘリーナさん？ こつち来て貰えますか？」

「申し訳ありません、南雲様。このヘリーナ、持病の難聴が…」

――取り敢えずハジメは激怒したのだ。必ず、かの愉悦部たる侍女  
を叱らねばならぬと決意したのだ。

## 20、騎士と姫の輪舞曲（ロンド）

とある話を聞いた人々は第一にこう思った。

——またお前か、と

良くも悪くも話題に事欠くことが無い少年。同時に話題に挙げられるのは彼との関係が一部では噂されている少女。二人は同様に世間の話題を集める存在であり、ならば当然新聞に書かれたならば大きな話題とならないはずがない。

「…最近王女側からの奴へのアプローチが無かったが為に、名を貸しているだけかと思っただが…思ったよりも奴にお熱な様だな」

「下手にあの男へ手を出せば敵に回る可能性が高いな」

「あの娘は教会われわれほどでは無いが、影響力がある。妨害工作は考えぬ方が良いか？」

「おのれ…神に反逆するつもりか？ あの小娘めが…」

ある者は彼女の寵愛の信憑性が増した事により、少年への手出しが難しくなつたと頭を悩ませる。

「あつ！ 王女様だー！ 兄ちゃんも載ってるよー！」

「へえ、すごいわねえ。【ウォルペン工房】の唯一の良心だし…頑張つて欲しいわねえ」

「へー、あの兄ちゃん、逆玉の輿か？」

また城下町では、はたまた二人への好感度が上昇していた。もはや教会の弁もあまり気にしていない様で、その話題に盛り上がりを見せていた。

「フア——！？」

「何やってんだ、アイツ!? 何やってんの、ホントに!？」

「つーかアイツの周り、地味に女子多いな？」

「優花はどうなるの!？」

「まだまだ！ まだだよ、妙子！ まだ優花の勝負は終わってない！  
多分！」

「奴め…目を離せば色恋に怠けおつて…」

「いえ、これは恐らく記者側の私情も入っている類の記事でしょう。」

それはそうと、あの二つ名はやはり…」

「先生はそんなふしだらな事は認めませんよー!!」

新たに出発して間もない愛ちゃん先生護衛隊では皆が騒ぐ。ある者は胸の内にあるジエラシーを燃やし、またある者は友人の色恋に思いを馳せる。またある騎士は不真面目だと怒り、またある騎士は冷静に状況を理解していく。

そして先生は不純異性交遊じゃ無いかと、子リスの様に頬を膨らませた。

「へー、ふうん、はーん、ほーん、なるほどねー」

「あー、畜生！ あの屑野郎はまたフラグ立ててやがるし！ 園部は怖いし！ 俺は虚しいし！ 俺が何をやったってんだ、神のバカヤロー!!!」

『タスケテ…タスケテ…』

『こわいよ…』

また王城の一角、畜舎の前では一人の少女が能面の様な無表情となっていた。感情も何も無い、ただの無表情。ただし目の奥は違う。そこには凄まじい圧力が発せられていた。

その怒りを一身に受ける、話題の少年と目の前の少女の親友は非常にビビっていた。彼も彼で怒っているが、足が子鹿の如くガクブル。目尻には涙が溜まっていた。彼の使い魔達も同様だ。少年の陰に隠れ、その怒りから逃げようとしていた。

「フフフフ…ハーちゃんも話題に尽きませんねえ」

薄暗い道で新聞に目を通す金髪の少女は、いつかの様に小さく笑う。ただしそこらにあるゴミをベキベキと魔法で潰しながら。その真意は分からないが、兎も角彼女は笑っていた。

「またアイツか…今度…：…：…：…は？」

「…目を離せばこれか」

「これは…どう言うつもりなのかしら？」

「今週のミレちゃんもおもしろいな」

ホルアドから王都に帰る途中であろうと新聞は届いた。【勇者】は抱いていた負の感情やらを一旦強制解除され、騎士団長は頭を片手で

覆った。【剣士】の少女は「そんな事はないだろう」とは思いつつも、真意を掴め無い。そして【拳士】の男は新聞の毎日連載4コマ漫画『叛逆れ！ ミレちゃん』を読んでいた。

一人だけこの話題から蚊帳の外だが、兎も角も皆がこの新聞のとある記事に目をやっていた。

それはとある侍女が敢えて広まる様に流した物。当事者達は許諾し、かつ侍女が務め半分愉悦半分で改竄したたった一つの噂。それは良くも悪くも皆の心に刻み付けられた。

その内容が以下の通りである。

『女王リリアーナ、噂の【錬成師】と密会か!? 彼等彼女等の今後に迫る!』

記者名：ヘリオトロップ』

地球で言う所のスキャンダルという奴である。しかもその項目にはご丁寧にも一組の男女が抱き合っている様にも見える絵が添付されている。絵は捏造かもしれないが、インパクトのある衝撃的な内容により、人々はつい鵜呑みにしてしまう。

そして…それはとある【聖女】も同様に、だ。

「……………まったく南雲くんってば、ねえ?」

【剣士】の肩に頭を置き、記事に目を通した【聖女】は、その二つ名に相応しい清廉な微笑を浮かべていた。

その笑みの威プレッシャー力がどれだけの物であったかは…語るまでも無いだろう。その場に居た『神の使徒』は残らず、部屋の隅でガクブルしていたとだけ供述して置く。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

一方その頃、王城のとある一室。

「ヘリーナさんの大バカ者は何処に行った!? 出てこい!」

日頃の優しさが一ミリたりとも窺えない、ブチギレた南雲ハジメが

そこには居た。頭には幾つもの燃えた蠟燭を括り付け、両手には一對の日本刀が握られている。単純に言うならば、殺意が高かった。

まるで某派出所の部長を彷彿とさせるハジメは、正しくキレていた。

「あら？ ついさつきまで此処にいたのですが…」

ただしそこには既にヘリーナは居ない。その逃げ足たるや某警察官の如く。既に影すらも見当たらない。

出来る侍女は逃げ足さえも速いのだ。それを今此処にて痛感したハジメは頭を抱えた。今度会ったらどうしてくれようか、と。

「ところでどうされたのですか？ それ程腹を立てられて」

「新聞見てないんですか!? アレですよ、アレ！」

「…もしかして、あの如何にも誤解を招きかねない記事の事ですか？」  
「招きかねないって言うか…もう積極的に招きに掛かってますよね、アレ!? 書き方が明らかにゴシップ記事でしたし！」

ハジメが言う様にあの記事の内容には凄みがあった。内容自体は馬鹿馬鹿しい物であり、よくよく目を通せば推測でしか語られていない適当な物である事がよくわかる。一見、情報誌として何の意義も為していない様な記事に見える。

だがそこは書き手の腕の見せ所。とある記者様侍女が情熱パッションにより書き上げた嘘記事99%は、ものの見事に人々の心を掴み取った。

…まあ、詰まる所センテン○スプリ○グである。スキャンダルに目が無いのは人間社会の常。それを利用し、記者ヘリオトロープはハジメとヘリーナの仲が良い、と世間に過剰にアピールしたのである。

ハジメの【王女の騎士】としての名をより強固にすると言う点では、ベストに近いアンサーだが…生憎ハジメは年齢純潔彼女無し少年。文しゅ○砲は彼にとつて致命傷を与え得る一撃であった。

「ですが、ただマナーレッスンをしているだけと伝えれば効果は薄いですわ。だからこそあくまでも匂わせに走ったのでしよう。少なくともこれだけやれば、私わたくしとハジメさんが表面上だけとは皆さん思わないでしょうし」

「でもヘリーナさんのお父さんとかは何も思われませんか？」

新聞だけ見れば知らぬ間に僕が娘さんとくつついてる訳ですし……」  
「お父様もこれを鵜呑みにする程、愚かでは無いでしょう。それにあの新聞自体に証拠がある訳ではありませんしね。精々仲良くしている程度に思われるくらいでしょう」

とは言え作戦自体には何の支障も無いのは事実。この新聞会社自体、そう言った内容に特化しており、フィクションだろうが関係なくブツコム事で有名。あくまでも内容自体は『ハジメとリリアーナが知人よりは明らかに上の関係』と言う事のみ。何ら問題は無い。

また何も無い所からいきなりこの様な内容が降って沸いたならば、国王や教会も注意出来るだろう。しかしハジメとリリアーナの関係の良さは、下町の一件から既に広く伝わっている。それに今更口出しするなど愚の骨頂。城下町の民からは不満の声が響く事だろう。

なので作戦自体はつつがなく、と言うよりも予想より遥かにスムーズに進んでいる。なので問題は無い。……そう、問題は無いのだ。

ただしここで、男子高校生的な悩みを持ち合わせていたハジメに、助け舟がリリアーナから提示される。

「それに南雲様は優しいお方ですから、嫌ではありませんわ。それとも……南雲様は私の事お嫌いですか?」

「それは無いです! ただ……」

「ふふふ。御安心を、南雲様。友人の方々への説得は私も手伝いますから。誤解されたら嫌なお方がいるのでしょうか?」

「……すみません、何から何まで」

「いえいえ。これも『神の使徒』皆様への助力の一環ですわ。お気になさらず」

誤解が解けるならば、と静まるハジメ。もともとヘリーナに対する怒りが収まったわけではない。面白半分で作っている事は確定しているのです、会ったら速攻で抗議してやると決意している。

……ただ彼女の場合、速攻で論破されそうな予感しかしないが。

「それは兎も角、今はマナーレッスンの御時間ですわ。準備は宜しくて?」

「はい! 出てきます」

本日はマナーレツスン四日目。おおよそのマナーに関して（リリアーナが案外スパルタだった事もあって）一通り教えてもらった段階だ。

そんなハジメの装いは普段の物とは異なる。基本的にハジメの服装は質素なシャツとパンツ、コートが中心だ。手には魔法陣の描かれた手袋、髪は見苦しくない程度に整えている。

よく言えば悪くは無いのだが：逆に言えば面白みの無いフアツシヨンド。ハジメ自身の顔も、素材は悪く無い以上磨けば輝く。

だからこそ：今のハジメを見たならば彼の友人等は間違い無く驚くだろう。

黒い紳士服に身を包み、髪は整髪料で丁寧に整えられている。手には白い手袋がはめられており、清潔感を感じさせた。立ち姿も四日間のレツスンにより様になっており、無理に胸を張っている雰囲気がない。

ハジメの顔立ちは大人びたものではない。されどこの厳粛な装いはハジメが生来から持つ、優しさと真面目さをより際立たせる。故に服に着せられている感は無。

誰よりも純真な紳士がそこにはいた。

紛う事なき紳士となったハジメは、その掌をリリアーナに向けて差し出す。そして恭しく頭を下げ、優しく微笑む。

「僕と一曲踊っていただけませんか、淑女？」レディー

リリアーナはその差し出された手に、己の手を重ねる。そして、ニコリと笑みを浮かべて、

「はい。喜んで」

ハジメの左手とリリアーナの右手が互いを結び合う。そして部屋の中央、ダンスホールへと二人は歩を進めた。

——言うに及ばない可能性があるが、新聞に添付されていた絵は紛れも無い事実の光景だ。

——ヘリーナが先日二人のダンスを絵に留めた、それだけの事だ。

——それ程今の二人の姿は、様になっていた。

——数秒後

「南雲様、テンポが速くなっております。落ち着いてくださいませ」

「はい！」

「私わたくしに合わせようと意識し過ぎです。リードは男性側が行う物なので  
すから、もう少し大胆に」

「はい！」

「とは言っても大雑把にやって良いという訳ではありませんわよ？」

「Yes, sir!!」

「ma, amですわ！」

先程までの絵になる二人が嘘の様。不細工なステップを踏むハジメと、ジト目を放つリリーアナがそこにはいた。

というのも地球に居た頃から、ハジメは何もマナー知らずと言うわけでは無かった。むしろ親が親故に、よく知っていた側の人間だっただろう。

何せ親は大手ゲーム会社社長と売れっ子ベテラン漫画家。現代社会ではめつたに見られない様な会食は、案外身近にあった。そして当然二人の子供たるハジメもよく付いて行つては、着実にマナーを学んでいった。

食事のマナー、挨拶の作法、客席での立ち振る舞い。そう言ったマナーは異世界でも大きな差は無く、幾つか直しただけで終了した。「手慣れている」とリリーアナやヘリーナから太鼓判も見事頂いた。

されど、そう上手くは問屋が下ろさない。ハジメには一つ、致命的な弱点が存在した。

それこそが今練習を積んでいる社交ダンスである。

現代社会ではまず滅多に行われない代物だ。上級社会や海外ならばまだしも、ハジメが暮らしていたのは日本。しかもオタク方面の社会である。そんな彼等が果たして社交ダンスを踊ろうか、否踊らない。



一応両親はハレ晴れユ○イならば踊れる。両親曰く、ハ○ヒは平成オタクの嗜みとの事。オタクエリートたる両親はやはり伊達では無い。コスプレも普通にするし。

ただハジメはオタ活の中でも体を動かす類にはあまり馴染みが無い。学校でもダンス経験は授業と学園祭のみ。しかもみんなで踊るタイプなので、適当に踊れば誤魔化せた。結果、本気でハジメにはダンスの経験値が無い。

正直、現代日本ではダンス経験が無いのはそこまで問題にはならない。しかしここは中世西洋に近い文化の異世界。貴族社会が完全に成り立っており、社交ダンスも当然の如く存在する。ある種、マナーとすらこの世界では言える訳だ。

足をたたら踏むハジメに、リアーナは声を張り上げた。

「困惑しようとする顔は絶やささない様に！ 多少のミスならば、堂々としていれば誤魔化せますわ！ 基本の姿勢は崩さず、自信を持って！」

「はいー！」

ハジメとリアーナの距離は近い。ハジメが空いた片手でリアーナの腰を支えている以上、抱き合う様な距離。そんな至近距離で厳しく指導を行うリアーナに、ぶつちやけハジメはビビっていた。

なおリアーナはハジメよりも三歳年下だ。何処からか「ハジメよ：年下に怒られるとは情け無い」という清水ゲスの声が聞こえた気がした。無視する。

とは言え一応ハジメも成長している。最初の方はちゃんとした直立姿勢すらも苦戦していたし、ステップを覚えるのにも時間が掛かった。昨日に漸くリアーナと合わせる様になれた事を考えれば、かなり成長した物だ。

ただ未だにリアーナがリードする側となってしまうているのは、早急に改善が必要だろうが。

すると不意にリアーナはハジメへと尋ねた。

「南雲様、もし…もしですが教会が貴方への処分を下す場合、どうされるおつもりですか？」

「…藪から棒にどうしたんですか？」

「もしそうなってしまった場合、本当に私の元わたくしに来られませんか？」

例え教会から罪が下されようと私の配下としてならば、今と変わらぬ生活が送れるでしょう。当然、不自由は多いでしょう。ですが…」

リリアーナの申し出は、非常に優しい物だった。教会から処分が下された場合、何の後ろ盾も無しではハジメは野垂れ死ぬだろう。清水の時の様に愛子が庇護下に置くと言う事も出来るだろうが、短期間で二度も罪人を雇い入れると言うのはあまりにもやり過ぎだ。恐らくそうした場合、反感を買う者が出て来る事だろう。

だがリリアーナならば問題ない。城下町での一件といい、今回の新聞といい、下地は出来上がっている。ならば庇うというのは何も不思議な事では無いと世間は思うだろう。

そう、何の問題の無い提案なのだ。これが効力を発揮するのはハジメが罰を執行された時のみ。もし上手くいけばその提案は白紙となり、ただ名を貸してくれるだけに留まる。

だからこそ問題は無い、筈だが…

「すみませんが、それには応えられません」

「…何故かお聞きしてもよろしいでしょうか？」

ハジメは頷く訳には行かない。必ず。頑固としてその首を縦に振る訳には行かない。

理由は——遙か先にいる少女が示してくれた。

「だって…約束しましたから。だから冤罪程度乗り越えないと、僕は彼女に顔向け出来ない」

そう。リリアーナの言葉に頷く事はすなわち、ハジメに「乗り越えられないかもしれない」という判断があるという事を意味する。

そんな訳がない。乗り越えられない？ 馬鹿を言え。南雲ハジメはそれ程、賢い人間などでは無い。

愚かで、馬鹿で、ただひたすらに手を伸ばす。それが南雲ハジメの本質だ。

だからこの愚者男は、アツサリと当然の様にリリアーナの申し出を断ったのだ。

「…ふふっ、そうですか。実に南雲様らしい答えですね。勇気を出したつもりだったのですが…簡単に振られてしまいました」

「人聞きの悪い様に言わないでください…」

「勿論、冗談ですわ」

それに対してリリアーナは笑った。何となくハジメの周りに人が集まるのも理解できる。

鮮烈で、純真で、人格者で。それでいて強欲かつ傲慢、そして愚かな人間。それこそが南雲ハジメだ。

そう、改めてリリアーナは再評価する。そして改めて謝罪を口にした。

「すみません南雲様。私は今にもなって貴方の覚悟を見くびっていたみたいです」

「いえ。お気遣いありがとうございます」

「気遣いなどではありませんわ。これは償いです」

「？ 償い？ どう言う事ですか？」

「…面白い話ではありませんわよ、南雲様」

「…聞かせてくれませんか？ 僕の内に留めておきますから」

「ですが…」

「お願いします」

雰囲気が変わった。リリアーナの表情に陰が確かに落ちた。それを知覚したハジメはダンスを続けながらも、その眼でリリアーナを見つめる。

何度も断りを入れるリリアーナ。償いともあらば応えたく無い内容なのは明白。人には隠したい物があるのは必然。むしろ探ろうとするハジメがあまりにも野暮と言えた。

だが、目を背ける訳には行かないと思った。ハジメは目の前の少女に恐らく幾度と無く救われている。そしてこれからも、きっと彼女はハジメの窮地を救ってくれるだろう。

だからハジメ自身も力になりたいと思った。せめて一つでも、リリアーナの力になりたいと。

そうして繰り返していくとやがて、リリアーナが先に折れた。ぽつ

りぽつりと呟く様に告白する。

「ええ。私達が貴方方を巻き込んでしまった。本来ならば平和であった筈の貴方方に闘わせようと呼び寄せてしまった。特に貴方に関しては何れも理不尽に扱われた。それなのに私に出来ることはこうした少しばかりの手助けのみ。それがあまりにも心苦しいのです。先程の言葉も、その様な罪悪感から来た物。…本当にどうしようも無い人間ですわ、私は」

それは以前リリアーナがヘリーナの問いに答えた、その先。かの日は『王家の務め』である、とヘリーナに伝えた。それも確かにリリアーナの内にはある。しかし全容では無かった。

そうして秘めて来た、誰にも漏らす事がなかった自責の念を、リリアーナは口にした。言い終わった後で、本当に何故言ってしまったのかと後悔して。

「申し訳ありません。こんな話を聞かせてしまって。ただでさえ貴方は様々な物を背負っていると言うのに…」

「……………えっと、リリアーナさん」

「…はい」

リリアーナはハジメの顔から目を伏せていた。王族としてハジメがこれから言うであろう言葉は聞かねばならない。分かっている。真つ向から受け止めねばならないのは。

しかしリリアーナとて未だ年端も行かぬ少女。己の本心を言った上で、平静を繕う事が出来ずにいた。

これからの答えを聞くのが恐ろしいと、顔で顕著に答えて——  
「何か勘違いされてるっぽいんですけど…僕、今幸せですよ？」

「……………はい？」

ハジメは間の抜けた答えを返した。

リリアーナはそれに困惑する。責められると思っていた。或いはその場凌ぎの慰めの言葉が掛けられるのだと思っていた。だが帰って来たのは、単純なハジメにとっての事実だった。

思わぬ返答にリリアーナは目を点にし、扉の奥からふふつと声が聞こえた。

構わずハジメは続ける。

「そりゃあよく分からない誹謗中傷とか敵意とかはありますが、それに關しては元々あった様な物ですし。そんなに気にしてません。どっちかと言うとヘリーナさんの新聞の方が精神ダメージに來ました！」

「そっちの方がデカイのですの!?!」

「思春期男子にとっては大ダメージですよ!」

恐らくこの場に『神の使徒』男子総員を呼んでアンケートを出しても、同様の答えが返ってくる事だろう。

男子は案外恋愛にウブなのだ。悪辣なイジメより、案外そっちの方が心に來たりする。

「でも向こうじゃ慕われる事も少なかったですし、友達なんて皆無でした。だから白崎さんとか八重樫さん、坂上くん、ユッキー、園部さん、工房のみんなにメルド団長…あと愛ちゃん先生護衛隊のみんなとか城下町の皆さんと仲良くなれたのは間違い無く、召喚されたからです。辛い事とかもありますけど、それよりも沢山大事な物が出來ました。だから…」

そう、ハジメは地球にいた頃からはまるで変わった。かつては家族とそれ以外で基本的に完結していた。ハジメ自身に積極性が無かった事もあり、生憎と交友關係と呼べる者は無かった。

だが異世界に來てからハジメは変わった。他人の暖かみを知り、一緒にいる楽しさを知った。友を失いたく無いと本気で思い、再会に全身を喚起させた。

それを教えてくれたのは、この理不尽な世界とあの少女だ。

トータスに關しては憎たらしい事この上ないが、だがそれ故に知る事が出來たのだ。だからこそ、ハジメは言う事が出来る。

「ありがとうございます、リリアーナさん。僕をこの世界に連れて來てくれて…沢山の大切を教えてくれて、ありがとうございます!」

「!」  
単なる同情から來る慰めならば、きつとりリアーナは返って傷ついたり。気に負わせてしまったと。

だがハジメは純粹にリリアーナへと感謝を注いでいる。上部の皮を感じさせない言葉は良く、リリアーナの耳に響いた。

「だから聞かせてしまった」なんて寂しい事言わないでください。むしろ色々言つてください。一応僕、歳上ですし。聞き相手ぐらいにはなれますよ」

「…は、はい。宜しいのなら」

「全然宜しいです。僕ばかりお世話になってますから」

最初はハジメの罰の延長措置から始まった。それからヘリーナをハジメに付け、城下町でのハジメの評価をひっくり返し、優花をハジメの護衛に付け、果てにはこうしてマナーを真摯に教えてくれる。

ハジメの目から見ただけでそれだけあるのだから、恐らくはもつとハジメの手助けをしてくれていたのだろう。

だからこそそのハジメの言葉だったのだが…何故かリリアーナは俯いてしまった。先程の様な陰りは無い。されど、明らかに目を合わせるのを避けていた。

(…もしかして他人に頼るのに慣れて無いのかな?)

慣れていない事をしているばかりに照れ臭くなっているのでは、とハジメは自己の中で結論を付けた。

そう思うとやはりリリアーナはまだ歳下なんだなあと感じられた。大人びていて、完全無欠。それでもまだまだ成長過程で、未熟な箇所も存在する。

そう思うと少し…失礼かもしれないが、目の前のリリアーナが可愛らしく思えた。

「そう言えば…僕召喚されて無かったら、こうしてリリアーナさんとも会えてませんか?」

「へ? ま、まあそうなりますわね」

当たり前の話だ。ハジメは地球で、リリアーナはトータスで産まれたのだから。こんな異世界<sup>イレギュラー</sup>召喚がなければ、会うなど先ず不可能であつたはずなのだ。

そんな当たり前前の事を聞かれ、リリアーナは再び困惑を見せる。し

かしその困惑はハジメの次の言葉で更に増す事となる。

「なら僕、やっぱり召喚されて良かったです」

「——ッッ」

その時、頑なに目を合わせなかったリリアーナが顔を見上げた。ただしそこにはいつもの様な冷静沈着なりリアーナの表情は無かった。

目は在らん限り見開かれ、うるうるすると熱を孕んでいる。眉は八の字に吊り上がっていて、彼女の動揺を顕著に示していた。口は固く結ばれ、声を上げる事を防いでいる。

そして彼女の肌は…赤く染まっていた。

「……………へ？」

目の前の想定外の表情に呆けるハジメ。ハジメの思考に出来る一瞬の余白。

それを突く様にリリアーナは結んでいた手を放し、ハジメから距離を取る。その速さは電光石火。目にも止まらぬリリアーナの動きに、ハジメは目を剥いた。

そしてリリアーナはハジメに背を向け、立ち止まり一言。

「きよ、今日はここまでに致しましょう。そ、それでは失礼致しますわ  
！」

「えっ!? ちょっと!?!」

「失礼! 致しますわあああああ!!!」

絶叫! 続いて全力疾走! マナーもクソもありやしない! 面  
目をもかなぐり捨てた逃亡がそこにはあった。

もはやうまびよいレベルの走り。固有スキルでも発動したのか疑  
う程に、リリアーナは限界を超えた。

ハジメが気を取り直す頃にはリリアーナは、廊下の先に消えてい  
た。

「……………どうすれば良いんだろ、これ?」

たった一人残された空間で、ハジメは自身に尋ねる。だが生憎なが  
らハジメは自己を正しく見つめる才が欠如している為、その解が浮か

ぶことは無い。

そしてどうしようものかとただ一人、立ち尽くすハジメ。そこに掛かる声が一つあった。

「ええっと、南雲君？　今凄い速さでリリイが通り抜けて行った気がするのだけれど…」

「あれ？　八重樫さん？」

扉からびよこりと顔を出しているのは、クラス一の苦勞人こと八重樫雫だ。「オルクス大迷宮」での探索を一先ず終わらせて来たらしい。怪我も大層な物は見られず、元気そうだ。

そんな彼女はついさつきリリアーナが走り抜けて行った方向を見ている。どうやらリリアーナと雫はすれ違ったらしい。もつとも先程の速さならば、残像しか追う事は出来なかつただろうが。

「えーっと、リリアーナさんは…今日は大変だったはいよ、多分。ところで八重樫さんは何をしに来たの？」

ただリリアーナの先程の反応はハジメも良く分かっていないのが現状。取り敢えず話を逸らす事にした。

だがハジメは気が付いた。その話をした途端、雫が剣？な瞳でハジメを睨み付けた事実。

思わず「ヒエツ」と声を上げるハジメ。だがハジメがすぐみ上がった事実など、今の雫にとってはあまりにも些細。そのままズシンツ、ズシンツとハジメへと迫ってくる。

逃げようとするが雫は「無拍子」を駆使し、ハジメをすぐに壁際まで追い詰めた。そしてハジメの顔の真横に手をダアンツと叩きつけた。俗に言う所の壁ドンである。胸がドキドキする。恐怖的な意味合いで。

心臓が喉から飛び出そうになるのを抑えていると、雫は懐からある物を取り出した。

それはとてーも、ハジメにとって見覚えのある…とある侍女様特製の新聞記事であった。

あつ、とハジメがその新聞記事に愕然している内に、鼻と鼻がキスしかねない距離まで迫った雫。そんな彼女は二大女神たる所以を見



せつけるが如く、とても美しく微笑んだ。：ただし目の奥は笑っていないが。

「南雲君？　これ、どういう事か説明して貰えるかしら？」

取り敢えずハジメは一瞬で思考を巡らせる。やっぱ誤解されるよねとか、おのれヘリーナさんめとか、弁解してくれるはずのリリアーナさんが居ない！とか、八重樫さんマジオカンとか…

そう言った感情でごちゃ混ぜになりつつも、ハジメは取り敢えず一言。

「ちや、ちやうんすよ！　ちやうんすよ、八重樫さん！」

動揺のあまり関西弁になりながら、ハジメはスピーディーに土下座を開始した。

非常に延長戦が予想される、誤解を解くが為の戦いの火蓋が切つて下された。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「はあ、はあ、はあ…」

胸が痛い。身体中が熱い。頬が、まるで私の言う事を聞いてくれない。

それ等は決して全力ダッシュしたが故の物ではないでしょう。むしろこの鼓動は、熱は、頬の緩みは走ってなお明瞭に感じてしまう。

何で？　どうして？　何が起きている？

私の知らない未知の感覚に、脳がどうにかなってしまっそうで…

ただ、それ程の動揺だろうと、彼の姿が離れない。彼の声が脳裏に木霊する。

——　そう言えば：僕召喚されて無かったら、こうしてリリアーナさんとも会えてませんか？

——　なら僕、やっぱり召喚されて良かったです

「——　ツツツツ!!?!」

そしてその声がまた私を狂わせる。私に熱を灯す。

恐らく、次もう一度彼に会ったならば、私は今までの様に冷静では居られない。こんな風に狂ってしまうでしょう。

でも…

「…彼の、南雲さんの力に…私は、なりたい」  
そう思うのは、王家としての誇り故か、罪悪感故か。  
それとも――

## 21、光明は紅茶の香りと共に

「まったく：理由は分かったわ。紛らわしい真似をしてくれたものね」

「誤解は解けましたでしょうか、八重樫様？」

リリアーナ逃亡後、ダンスホールでは、黄金比の土下座を遂行するハジメと仁王立ちで見下ろす雫の姿があった。外からフフフと笑い声が聞こえるのは気のせいだろう。それが何処かの侍女さんの物の様な気がしたが、雫は侍女さんのマトモな所しか知らない。故にこんな所にいるはずがないと自己完結し、気を取り直した。

雫が此処に来たのは単純に、新聞で話題になったリリアーナとハジメの関係である。あれが話題になってからと言うものの、香織の背後バックにユラユラと、何かが蠢くのが見えるのだ。

後に『般若さん』と呼ぶ事となる香織のス○ンドは、それはもう威圧感が凄かった。例えその姿が顔だけであり、半覚醒だったとしても：雫が怯え、光輝が鎮まり、龍太郎が弱音を吐き、メルドが目を見逸らした。正しく怪物その物。

いつもならば「オルクス大迷宮」には一週間以上は少なくとも留まるのだが、今日は例外。香織を除く全員が体調不良を訴えた為、即時帰還となった。メルドまで「俺も衰えた様だ：帰りたい」と言っていた事からその異常性が分かるだろう。香織だけは「少し当たりたい気分なんだけど：ダメかな？」なんて言っていた。怖かった。

なお現在香織は多くのクラスメイトの尽力により機嫌を直している。勿論この話題を聞けば再度般若さん出現となるだろうが、見事な連携により情報はシャットダウンされていた。

素晴らしきかな、友情は。それを『神の使徒』達が思い出した、今日この日であった。

その為、雫はかなりハジメに対して譲歩していると言えるだろう。本気でムカついているならば、此処に香織を呼べば良いのだ。約束なぞ知るものかと、般若さんをハジメの目の前で顕現させて仕舞えば良い。

それをしないのは雫がハジメと香織の関係を良い状態のままに保ちたいからだ。二人の関係にヒビを入れない為にも、雫は尽力していた。

取り敢えず例のスキヤンダルは嘘だと分かり、ほっと一息付く雫。ただそうなれば気になつて来るのは、すれ違つたりリアーナの事だ。「さつき通り過ぎて行つたの……リリイで合っているわよね？ 何で逃げたのか、心当たりはあるかしら？」

「えっと……多分恥ずかしかつたからだと思います」  
「……恥ずかしかつた？」

八重樫雫、ここで嫌な気配を感じる。長年、トラブルメイカー共と関わり続けた苦労人としての経験が警鐘を鳴らしたのだ。

だが此処で引いては女が廢る。雫は更に一步踏み出す。

「具体的には何が恥ずかしかつたのかしら、リリイは？」

「甘えて良いんだよ的な事を言っちゃつて……そしたら逃げちゃいました。今思えばかなりクサイセリフの様な気もするけど……その所為かもしれないです、ハイ」

「……………」

「あと……………こつちに來れたから、リアーナさんに会えたんだから良かったよつて……言いました」

「……………ちよつとタイムをくれないかしら？」

「あ、ハイ。幾らでも」

雫は思った。

(やつてくれたわね……南雲君)

スキヤンダルの何が嘘だ。ほぼ事実では無いか。リリイ自身が自覚しているかはどうかは分からないが、確実にそう言う話だ。

雫はハジメが、光輝とはベクトルの違う……だが結果は同じジゴロ野郎である事は重々承知している。光輝の場合は『助ける』というヒーロー精神から来るジゴロ具合だが、ハジメの場合は優しさ120%の全力フルスウイングだ。

光輝のそれは広く浅く、万人に彼自身が理解できる程度に助ける。だが、ハジメの場合は本人が相手側の意図を汲み、そこを着実に突い

てくる。故に者によつてはクリティカルしてしまうのだ。

雫の近くにはその実例があるのでよく分かる。香織といい、リリアーナといい…本当にやってくれる。

取り敢えずこの事は確実に香織に漏らさぬ様にせねばと心に決めつつ、眉間を揉む。同時に己の周囲に於けるトラブルメーカー率の高さを改めてよく感じた。

ただこのマナーレックス自体をやめろという訳には行かない。ハジメには直に『学会』が迫っている。そこで無様を晒せば、内容が良くとも落とされるだろう。「ウォールペン工房」が技術的には凄まじいのに、世間的な評価は五分五分で落ち着いている事からも理解できるだろう。マナーを正しく理解するというのはそれ程に重要なのだ。

だからこそやめさせる訳には行かない。そんな事香織も本意では無いだろう。ならば――

「南雲君、一つお願いがあるのだけれど良いかしら?」

「へ、へい。僕めに出来る事ならば如何なることでも…」

「小物ムーブ辞めなさい。それでなのだけれど――」

雫は一応周囲を見渡す。香織、般若共にいない。一安心。そして少し前屈みになって、未だ正座するハジメと目を合わせる。

「私もそのマナーレックスに参加させてくれないかしら?」

☆☆☆☆☆☆☆☆

そして現在、八重樫雫はある種の後悔していた。

雫の目的はハジメとリリアーナの関係の監視だ。少し出歯亀感もあるが、事が事だと雫は自身を納得させた。

そうして昨日と同じダンスホールまで来た訳だが…雫の予想を遥かに超えた光景がそこには待っていた。

「リリアーナさん!? どういう事ですか、今日はステップオンリーだなんて!? 昨日までペアでやる事の重要さをあれ程言ってたじゃ無いのですか!?!」

「いえー! 今日はこちらで行きますわ! 申し訳ありませんが、昨日から心臓に何かの病気があるようで――」

「えっ!?! それをすぐに言ってください! 今すぐ病室に行きましよ

う！」

「た、大した事はありませんわ。ちよつとした痛みがあるだけですし……」

「大した事ないなんて思ってたら一大事になるんですよ！ 昨日、頼ってくださいって言ったの覚えてないんですか!? 行きますよ、ほら！ 早く！」

「な、南雲さん!? て、手を握らないでくださいまし!? 今南雲さんに触れられたら余計心臓があ……」

「エツ!? 僕アレルギー!?!」

「と、とりあえず、てを……はなして……」

「はい！ 離します！」

「——あ……」

「？」

「お嬢様と南雲様のすれ違い、堪りませんね。この素晴らしい光景はやはり絵にするに限ります」

「………なあと、これ？」

そこは正しく混沌カオスであった。

ハジメは昨日に引き続きリリアーナをバグらせ、ジゴロっていた。またリリアーナも自分の思いに気が付いていない様で、病気だと本気で思っているらしい。二人の鈍感バカがそこにはいた。

そしてリリアーナの言葉を真に受けたハジメはすぐに掴んでいたリリアーナの手を離れた。しかし雫は見逃さない。その瞬間に、リリアーナは惜しげに、離されたハジメの手を見つめた事を。

更には二人の従者であるヘリーナは何処から取り出したのやら、立派なキャンパスに筆を叩きつけている。どうやら彼女のパツションが刺激されたらしい。と言うか、雫からすれば「ヘリーナさん、素はこんな感じなのね……」と評価を改めるに至った。当然マイナス方向に。

「私は王女。私は王女。私は王女私は王女王女王女王女王……」

ついにリリアーナが本格的にバグってしまった。壊れたオーデオの如く、同じ言葉を繰り返している。これが今現在の彼女が平静を

取り戻す策であるらしい。至近距離で呪詛の如き呟きを聞いたハジメは、少しばかりビクツツとしていた。

雫は確信した。この王女、確実にやられてやがると。

時間が経つ度にハジメへの視線にジト目が含まれていく。無遠慮に本人に不満をぶつけるSSRの雫さんがそこにはいた。ハジメはなお一層汗を流した。

そんな訳で色々どうするんだ、みたいな雰囲気になった静寂（とある侍女さんの筆の音は変わらず聞こえる物とする）。

それを破つたのは他でも無い。豪快に開かれた扉と、一人の小さな少年であった。

「此処かああああああ!!!」

「!!?」

「ふむ? この声は——」

突如響く叫喚に目を向くハジメ、リリアーナ、雫。全く事態に着いて行けていない。唯一、外部者が来た事でハジリリ狂信者からパーフェクト侍女に早変わりしたヘリーナさんだけが現状を素早く理解出来た。

「覚悟するが良い、余の怨敵めがああああああああ!!!」

「いらつしやいませ、ランデル殿下。南雲様、御来客です」

「御来客の勢いじゃないんですが、それは!?!」

「危なそうでしたら手伝いますので。南雲様、これもマナーレツスンの一環ですよ、一環」

「嘘こけ、外道侍女ツツ!!!」

儀礼用の剣を振るい迫るは【ハイリヒ王国】第一王子、ランデルⅡ SⅡBⅡハイリヒだ。その顔には「野郎ぶつ殺してやる」という明確な殺意が書かれていた。

そんなランデルをヘリーナはさつきり通す。そしてハジメにひよいつと任せた。いきなり擦りつけられたヘイトに、ハジメはキレた。失敗したら王族とのバトル展開になるマナーレツスンなど有ってなるものかと心の底から叫んだ。

この侍女もうダメだ! と、この一週間で幾度と無く繰り返した心

中の叫びをもう一度。そしてランデルと向き合った。

「よく分かりませんが…止まってください！ …ええつと〜」

「南雲君、ランデル殿下よ？」

「そう！ 止まってください、ランデル殿下！」

「誤魔化せんぞ?! 余の名を忘れてたの全く誤魔化せておらんからな！ この畜生めがッ！」

どうやらハジメは名前を覚えていなかったらしい。頭をウンウン捻り、雫の助言により漸くランデルの名を口にするに至った。つまりはガチで忘れだ。

これにはランデルもお怒り。王族故に真正面から忘れられる等と言う不遜は初めての体験だったのだろう。フガーッと顔を真っ赤になる。儀礼剣を振るスピードも加速。ランデルは今、限界を超えた！ こうして何が何だか分からぬまま、王宮錬成師VS第一王子という異色のマッチングが始まったのだった。

「おのれえ…おのれえ…」

「え——つと…苦しくないですか？ ちよつと緩くしましょうか？」

「南雲様、それでは煽ってる様にしか聞こえませんか」

「だって王族捕縛なんてした事ないですから！ ちよつと混乱の一つや二つしますって…」

「捕縛自体は随分手慣れてるわね、南雲君…」

「へ？ そりゃあ手慣れないと聖教教会の信者に殴られるし…」

数十秒後、ランデルはぐるぐるになって、泣きべそをかいていた。

儀礼用の剣はご丁寧に地面に溶接され、体はダンスホールの床の鋳石から生み出された鋼糸により雁字搦めとなっていた。

才に恵まれたランデルと言えど、齡十歳。経験の少ない彼には、定石を彼方に投げ出したハジメの戦闘スタイルに対応できなかつたらしい。

「ランデル？ まったくどうしてこんな事したのですか？」



これ以上ハジメが話し掛けては刺激する。それを理解した雫、リリアーナ、ヘリーナは顔を見合わせ：姉であるリリアーナが理由を尋ねる事にした。

するとプルプルとランデルが震える。泣いているから？ それもあるが：彼を振せるのはそれを遥かに超える、怒りだ。

「どうしたも何もありません、姉上！ このクソ野郎、噂によれば力オリにソノベユウカとか言う『神の使徒』、それに姉上にまでその毒牙を向けていると言うではないですか!? そんなもの：許せる筈が無いでしょう!？」

これに頷くは雫とヘリーナだ。確かに今のハジメを側から見れば、三人の女性に股を掛けるヤベー奴だ。ランデルがキレるのも無理は無い。

そうだよ。この男、一回ぐらいはお仕置きされとくべきだよ。とランデルの言葉を否定できなかった。当の本人であるハジメだけが首を傾げ、「やけにそう言われるよな」と鈍感力を全開。

もう潔くぶん殴られるよ、と雫とヘリーナがハジメを見つめる中、もう一人の当人と言えるリリアーナはと言うと――

「わ、私が、南雲さんに!? そそそそそそんな訳ありませんわあ!!」―― どうやら毒牙にやられている訳では無いらしい。

私王女！ だからやられてなんか無い！ と反論するリリアーナ王女。背後から若干二名からの微笑ましい視線が突き刺さるが無視。ハジメがそうだそうだと拳を掲げるが……これも無視。リリアーナ姫は弁解を最優先とした。

しかしその前にランデルにより鋭い一撃が放たれる。

「それに昨日！ 隣の部屋から姉上の嬉しそうな奇声が聞こえて来ました！ 間違いなくこのクソ野郎が姉上に何かしでかしたに違いありません！」

「!?」

大正解だった。昨日、耐え切れずに全力ダッシュした姉上様は、そのままベッドにダイブ。そして枕に顔を沈め、身の衝動のままに叫んだのだ。一応部屋には防音対策が施されているものの、音量が音量。

隣の部屋には聞こえていたらしい。

そしてランデルのお言葉により、昨日の光景がフラッシュバックしちゃったらしい。姉上様の顔が真っ赤に染まる。尤もランデルのお怒りとは別種の、だが。

「今日の朝食もそのクソ野郎の部屋の方ばっか見てましたし！」  
「!？」

今朝から姉上様は気分が上の空だった。日頃のしつかりしたカリスマが嘘の様にほわあとしていた。しかし本人に自覚は無い。エツマジでえ!?! と言う顔で驚いている。

そしてランデルは止まらない。ビシッとリリアーナの顔を指差した。面食らうリリアーナに、ランデルはとある事実を突きつける。

「更に言えば今もちよつと照れながら笑ってるしい!!」  
「!!？」

によによだった。本当にこれ以上ない程、姉上様の顔からは幸福感で溢れていた。姉上様は頬に手を触れ、ムニムニするが口角は強情だ。全く言う事を聞いてくれない。

ムニムニ：によによ…ムニムニ！ によによ！

ムニムニムニムニイ!! によによによによ!!

…ダメだった。本当に口角は治らなかった。

リリアーナが訳の分からぬ冷や汗を流す。すぐそこに彼が居るが故の焦燥感。断じて自分は彼に恋などしていないのだが…このままランデルに好き勝手言わせれば、どうしようもない程マズい気がした。

一方でランデルは何処ぞの「異議あり！」ばっか言う弁護士の如く、再度指をビシッとした。

「今までの姉上ではこんなの有り得ません！ ですから姉上はこの男の毒牙に——むぐう!?!」

「申し訳ありません、皆様。ランデルと二人で『お話し』して来ますわ。少しばかり、お待ちくださいませ!？」

「「アッハイ」」

更に言葉を紡ごうとしたランデル殿下の口を右ストレートで塞ぐ

！そしてそのまま雁字搦め状態のランデル殿下を脇で持ち上げる。今のリリアーナには気迫があった。王族の威光が後光の如く放たれている。有無なんざ言わせねえ！ という凄みがあった。そんなんだからリリアーナに反論を出そうとする者など居なかった。どうぞどうぞだ。

そして三人ともダンスホールから出て、扉を閉じる。そしてダンスホールのある方からは耳を背け、三角座りする。

「……………私達って無力ね」

「……………雲一つ無い快晴ですね。洗濯物が良く乾きそうので何よりです」

「……………ランデル殿下に今度おもちや作ってあげようと思うんだ、僕」

三人の目は何処までも遠かった。

数分後、ダンスホールの扉が開いた。そこにはニコニコ王女スマイルなりリリアーナ。そして――

「申し訳ありませんでした、南雲様。宜しければ先程の私めの発言は是非とも聞かなかった事にしていただけませんでしょうか。本当に、本当にお願ひ致します…」

と変わらず鋼糸で雁字搦めのまま、ガクブル土下座する王子がいた。周囲には水溜りが出来ている。果たしてその水は何か…取り敢えずちよつと匂ったとだけ供述しておく。

ある種、世界初であろうその光景にハジメは…

「……………『錬成』」

せめて鋼糸だけは解いてあげるのであった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふふっ、今日の紅茶も美味ですわ。ヘリーナ」

「お褒めに預かり光栄です、お嬢様」

「本当に美味しいわ。私の家じゃこう言うのは飲めなかったからとても新鮮よ」

「零ってばいつもそればかりですわね」

「うむ！ やはり姉上の【側付き】の技量は凄まじいな！ とても美味しいー！」

「恐悦至極に御座います、殿下」

「……………」

マナーレツスンの方は非常に姉様継がブチギレーション困だった為、急遽休みとなった。というかりりアーナ自身は続きをしようとしていたのだが、他のメンバーがそんな気になれなかつたと言える。

そんな訳で急遽開催されたのはお茶会だ。主に鋼の王女スマイルとなつたりりアーナとぐずぐずになつちやつたランデル殿下を宥める為に三人が誘導したのだ。

結果、二人ともある程度元の調子に戻つて来た。りりアーナは一応ハジメともコミュニケーションが以前の様に取れて来たし、ランデル殿下も今は子供の様にはしゃいでいる。少なくともつい先程までの居た堪れない感じよりは数百倍マシになっている。

しかし一つハジメには別問題が生じていた。ハジメが目の前にあるワツフルに恐る恐る手を伸ばす。

——パシイッ！

瞬間、隣の席のランデルの目が変わる！ テメエに渡すかとハジメの手をはたいた！

「…」

「…」

無音の見つめ合い。再度ハジメがお茶会の品に手を伸ばす。

そーっと。——パシイッ！

「……………」

「……………」

そー、パシイッ！ そー、パシイッ！ そそそー、パシイッ！  
ランデル殿下、むっっちゃ弾く。ハジメがお菓子に手を伸ばそうとする度叩く。こら、その侍女！ 笑うな！

「ランデル！ 行儀がなつていませんわよ！ あと単純に失礼ですわ！」

「そうは言いますが姉上！ やはり余はコイツと相容れるなど不可能です！」

そう、姉上にブチギレーションされようとランデル殿下のハジメへ

の敵意は折れていなかった。

何故これ程までに頑ななのか、理由は単純明快。

「余のカオリがこのクソ野郎の事、何度も何度も話すんです！ 許せる訳が無いでしょう！」

どうやらランデル殿下は噂の【聖女】様に御執心らしい。ランデルからすれば楽しく話している時に、別の男の話を度々されるのだ。しかもその男の悪い噂も多い事。良い噂もあるが、ちよつとシスコンも患っているランデル殿下的にはカオリと姉上のツアアウト。そうしてハジメを『クソ野郎』認識している訳だ。

なのでランデル殿下は止まらない。言つてやらねばならぬう！と幼い故の矜持や嫉妬の暴走が彼を無理矢理突き進める。

「カオリは凄いいんだぞ！ 六十五階層の悪夢、ベヒモスを初の：しかも単独撃破！ “光球”で魔法陣を創り出し、オリジナルの光属性特級魔法を三つ生み出し、更には「フューレン」の魔物の大進軍で怪我を負った冒険者達を一日も置かず全快にした！ 人柄、容姿、実力！ どれらを取つても完璧！ 貴様との噂もあるが、余は貴様なんぞにカオリを譲る気など一切無いわ！」

「ちよつと、ランデ——」

突然だが、南雲ハジメは決して顔に出るタイプでは無い。

雫のハジメへの評価の一つに『聞き上手』と言うのがある様に、基本イラついても笑顔でコーティングして対応するのが彼の基本。親しい仲の相手ならば彼も積極的になるが、それ以外は基本受け手として丁寧に捌くのが彼だ。

だから、だ。それは間違い無く南雲ハジメとして異様だった。口は微笑んでいる。立ち姿も何ら普段と変わらない。

しかしランデルを見つめるハジメの目は、全く笑っていないかった。目とそれ以外の箇所が、尽く矛盾している。そのあべこべさが異様で、かつ不気味であった。それに気が付いた全員が普段とは全く異なる彼に、押し黙る。

やがてハジメは口を開いた。

「御忠告痛み入ります、ランデル殿下。確かに僕と白崎さんは不分相

応かもしれません。その意見はごもつともかと」

口調は丁寧で柔らかだ。身振り手振りも実直で、偉ぶりを感じさせない。しかし目は変わらない。彼の目だけはじいっと見開かれ、ランデルを見下ろしている。

「ですが申し訳ありません。僕にとつてそれだけは譲るつもりがありません。彼女の側を諦めるなんて事は、僕には出来ません。例えどれだけ厳しい道だったとしても…僕は乗り越えて見せます」

南雲ハジメは断言する。自分は白崎香織の側に必ず立つと。そんな大馬鹿で、ランデルの言う様に分不相応な夢物語を語る。

嗚呼、何と愚かか。されどこの男はその為にここまで来ている。だからかだろうか。

「ぐぬぬぬぬ…やはり余は貴様が嫌いだ！ ナグモハジメ！」  
ランデルは笑わなかった。

彼はまだ矮小な子供だ。自己中心的で、矜持プライドが高い。終いには物事への思い込みが激しく、よく暴走する。正しく子供だ。

だが、同時に彼は器だ。次期国王としての素質が確かに存在する、小さな雛だ。

ハジメがもし先の言葉を表面上だけで騙ったならば、ランデルは笑つただろう。しかしハジメのそれは違う。ありつたけの執念と覚悟。それ等をハジメは背負っている。

だからランデルは笑わない。代わりにハツキリと『嫌い』と言う。それが非常にハジメには新鮮だった。決まって初対面の相手には、舐めて掛かられる事が常だ。だからこそ、彼はつい目を丸くする。

そんな事が少し可笑しくて、ハジメはやがて吹き出した。  
「ぷっ…はははは、偶然ですね。僕もですよ、ランデル殿下」

「余、一応王族ぞ!? ちょっとは躊躇わない!？」

「いや、殿下も僕の事散々言いますから、これぐらいなら良いかなつて」

「ぐぬう…生意気なクソ野郎めがああ…」

ランデル殿下、ムカついたのか菓子に手を伸ばす。やけ食いするつもりらしい。適当にワッフルを鷲掴みにしようとする。

——ペシッ

だがその手は弾かれた。

弾かれた己の手を、丸い目で見つめるランデル。そして横を見ると、ハジメがにこつと笑っているながらワツフルを食べていた。

ピキッと青筋を立てるランデル殿下、物申す。

「貴様ア!? 仮にも歳上だろう!?! 余のした事をまんま返すとは、何と狭量な野郎なのだ!?!」

「生憎ながら殿下。高貴な身分故に知らないのでしょうか、食卓は戦場ですよ?」

「知らんわ!」

もう一度、ランデルがワツフルに手を伸ばす。ランデルは王族の血筋故、子供でありながらステータス値が高い。全力を駆使してビュンッとワツフルを取りに行く!

だが甘い! ハジメは体内魔力を循環させる! ペシイッと派手に音が鳴った。ついでにワツフルを取って口に入れる。うん、美味しい。

再び無言の見つめ合い。ランデル殿下、ラツシユを繰り出す。ハジメも同じく腕を瞬時に閃かせる。

——ビュン! ペシッ! もぐう! ビュン! ペシッ! も

ぐう! ビュビュンビュン! ペペペペシイッ!! もぐもぐもぐもぐ!

「五月蠅い!」

「痛ア!!」

男子(10歳)と男子(17歳)の頭に拳骨が落ちる。お茶会にも関わらずマナーのマの字も気にしない男子二人は、キレられるには十分だった。

意識外からの攻撃を喰らい蹲る馬鹿二名。女子はそれに仕方の無い人達だと、呆れた目を向けた。

やがてふらふらとランデル殿下は復帰する。そして立ち上がり、踵を返す。全員がランデル殿下の行動に「?」としていると、やがて殿下は口を開いた。





ルを無理矢理口に詰めても反応は無い。

ヤベー、ガチで壊れたか？ と三人が遂に医者を呼ぼうとした途端、ハジメは動く。

「八重樫さん！」

「え!?! ちよつ？ 南雲君!?!」

「聞きたい事がある！」

「こ、怖いだけけど？ 一体どうしたのかしら、南雲君？」

襲いかかる様に雫の肩を捉え、己の眼前に固定するハジメ。雫もついついハジメの勢いに引いてしまう。それ程に今のハジメには気迫があった。

雫の視界の隅ではリリアーナがむすうつとしている。明らかに嫉妬です。ありがとうございます。

だが目の前の男はそんな事に気が付こうはずが無い。尋ねようとしている事に夢中な様で、視線なんぞ何のそのだ。

「八重樫さん！ 白崎さんは『光球』で魔法陣を作ったって言うのは本当!?!」

「え、ええ。本当よ？ 嘘じゃ無いわ。あんな事出来るんだって私も驚いたもの」

視界に映るリリアーナさんが余計むすうつとした。ハジメ御執心の相手に、ちよつと苛立ちが欠かせない様だ。隣のヘリーナに指でツンツン。ヘリーナは主の可愛らしい嫉妬に尊死した。復活した。

「魔法陣に関しては〔錬成師〕の間でも詳しいメカニズムは理解されていない。あくまでも感覚的で、詳しい理論は立てられていない。正直非効率だとは前々から思っていたけど、それを理論立てれば………：だつたら魔法陣の導線はいったい何なんだ？ 何か特定の鉱石がある訳でもない。魔法陣の導線は『錬成』により生み出される。当然『錬成』以外にも手段は存在する。血に、地脈、魔法紙……後は白崎さんが生み出した『光球』。それが現状の魔法陣を構成し得る候補。これ等に何か共通点があると考えた方が良さ。……ただ此処から考えても『錬成』はあぶれている様にしか………いや、そもそも『錬成』の前提を僕らは間違えてる？ 魔法陣の構成要因が鉱石側に無い以上、『

鍊成〃の方に何か違いがあると考えるのが正しい判断：ならば〃鍊成〃は——」

「南雲君？　ちよつと南雲君？　大丈夫？」

するとハジメはもう雫には用がない様で、肩から手を外し、再びぶつぶつぶつ。

こりやあもう駄目だ。誰かがそう言おうとした所だった。

「……ハハッ」

ハジメは破顔<sup>わら</sup>った。

犬歯を剥き出しにし、猛禽類の如き眼光を煌めかせる。眉はこれ以上ない程釣り上がっているのは、凄まじいまでの歡喜の示唆だ。普段のハジメでは先ず見られない凶暴な笑みに、気付けばその場に居た者達は尽く引き込まれていた。

やがて虚空を噛み砕く様に、ハジメは口を閉じた。ガリイツと歯と歯がぶつかり合う音が響く。

「取り敢えず、まずは実験。：いやその前に目に見える实例を見つけしておくべきかな？　ただの推論だけで述べてたら、先入観だけで反論されるのは目に見えてる。ならそつちが優先：いや、その前に説の立証だけはしておくべきかな？　立証方法は：こつちの方が良いだろうなあ。目に見えるのは別の実例で示せば良いから：その方が今後に役立つだろうし：うん、これが良い。そうしよう」

そして言葉を紡ぐのを止める事なく、ハジメはお茶会の会場を抜けて行った。走る事はしない。折角生み出されたアイディアを溢さぬ様にする為か、ハジメはゆっくりと歩を進めた。

ランデルとは異なり、ゆっくりと小さくなるハジメの背を三人は消えるまで目で追った。追っている事自体に合理性や意味は無い。単に惚けている、それだけの話だった。

やがて：三人の内の誰だっただろうか？　兎も角、その内の一人が小さくか細い声で呟いた。

「……反則でしょ、あれは？」

残された三人の中で、それに反論出来る者は居なかった。

## 22、『魔法理論学発展論会』――開幕

「おお！ ウオルペン！ 会いたかったよ！」

【ウオルペン工房】棟梁、ウオルペンⅡスタークが廊下を歩いているとある男に呼び止められる。無視しようとしたが、生憎その声には聞き覚えがあった。

それ故か、ウオルペンは無視しようと言う気になれなかった。大人しく振り向く事となる。

そこに居たのは装飾の多い外套を身に纏う褐色の女だ。豊かな胸には幾つもの勲章が輝いている。この勲章は新たな発見・発明を行った者に送られる、確かな技量の証左である。

「…あん？ テメエは…確かシャクナ、だよな？」

「おお！ 覚えてくれていたか！ 我が婿！」

ただ一つ問題がある。この女、ウオルペンにホの字なのだ。

「やめろ！ 俺は嫁を取るつもりはねえ！」

「何も問題無いと思うが？ 私と君は双方共に王宮工房の棟梁！ ならば私の家に婿入りするのもまるで何の問題も無く――」

「うっせえ！ 俺は婿入りする予定はねえ！」

「ならば私が嫁に行っても良いのだぞ？」

「話が違う！ そうじゃない！」

シャクナⅡアルソンス。王宮工房の一つである【アルソンス工房】の棟梁であり、同時に「錬成」による武器製作を生業とする、古くから続く【錬成師】貴族の血筋でもある。

それ故に凝り固まった『平民差別』があるのが、通常の【錬成師】貴族という物である。一応教育設備が整っていると言う面で、平民の【錬成師】よりも優れている場合が多いというのはある。

ウオルペンは現在成り上がり、【錬成師】貴族となっている。だが元は平民。新興の工房である【ウオルペン工房】、その棟梁であるウオルペンとは本来不仲になるはずなのだが…シャクナはそうでも無い。

シャクナはそう言った面は結構緩く、技術さえあればOKというウオルペンに似た実力主義者だ。他の兄弟とも精神面では隔絶して

おり、あまり親しくないのだそう。まあ、本人自体がかなり飛んでいくタイプなので、無理は無い。というかウォルペンと同様、貴族らしくないので本当に仕方がない。

と言うか工房とかマジで関係無く、ガチで一目惚れなのだ。全【錬成師】中適当度No. 1のウォルペンさえも「頭おかしいんじゃない?!」と幾度と無く叫んだ程だ。

「あつ、そう言えば我が婿。新婚旅行先、何処が良い？ 個人的には珍しい鉱石が多い【エリセン】がオススメだぞ？」

「もう突っ込まねー、突っ込まねーぞ」

「まあ、結婚後の事は後に置いておいて」

「置くな、捨てる」

なおウォルペンは知らない。シャクナとの噂に関してはもうかなり外堀が出来ていると言う事実を。【ウォルペン工房】の職人の過半数もまた、仲を認めている事に。

そもそもウォルペン自身が嫌がって尚も話をするというのは非常に珍しい。基本はスルーが主軸の対応のウォルペンだ。それこそ普通に会話出来るなど、興味が無いなら有り得ない。つまりは、そういう事である。

それはまた後のお話

### 閑話休題

「君の所の子は大丈夫かい？ 確か…：そうそうナグモ君。彼、【超新星】<sup>ルーキー</sup>とは呼ばれているが、経験は半年も無いのだろう？ それで良い評価取れって…無理ゲーじゃ無いかい？」

「おん…：ああ、その辺りは問題ねーぞ。少なくとも俺は心配してねー」

「ほう？ 君がそれほど言うとは…冗談でも無いのだね？」

「生憎俺は嘘は言わねえ主義だ。何たって——」

ウォルペンは目を瞑る。そして瞼の裏について先日の光景を浮かべた。そこには目を輝かせるハジメがいた。

その一瞬を思い返し、ウォルペンは喜色半分、悔しさ半分で笑みを溢す。

そして続きを口にした。

——この俺でさえも喰われちゃまったんだからな

その言葉にシヤクナもまた、齒を剥き出しに笑ったのも言うまでも無い事だろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…なんて言うかさ、ユキ」

「厳粛が過ぎねーかな、この祭り？」

「それよね、ホント」

『ピエピイ…』

そして『魔法理論学発展論会』当日、優花と幸利はその会場に訪れ…文字通り固まっていた。二人の顔にはありありと文字が浮かんでいる。「何が祭りだ」と。

一応『魔法理論学発展論会』は【ハイリヒ王国】を代表する祭典の一つだ。会場の付近には見物客を金ヅルとして目を輝かせる店主達だっている。

だがこの祭典は祭りは祭りでも『学会』だ。浮かれ調子で行く様な物では無い。

見るが良い。会場の天井に吊るされるきめ細やかな作りのシャンデリアを！ 紳士服やドレスに身を包む観客を！ 広く輝かしい、果てまで届きそうな廊下を！

…ハッキリ言つて、規模が凄まじ過ぎて目眩がした。

一応二人もマナーレッスンは合格済み。ここまでキチンと振る舞いを正して来た。それに幸利は漆黒の燕尾服、優花は蒼色のドレスに身を包んでいる。そのため、決して浮いていると言うわけでは無い。

だが、想像の五倍くらい豪華なのだ！ メンタルがぶるぶるしているのだ！ 蝶ネクタイだけ付けたピナも蕁麻疹が出てるのだ！ ぶつちやけ帰りてえ!!

しかしこの祭典の結果でハジメの今後が決まる。ならば友人として、それを見届けねばと二人は奮起し直す。

「あー！ 優花ー！」

「うわー、可愛いドレス。優花にピッタリじゃん！」

「奈々!? 妙子!？」

不意に聞こえて来た自身を呼ぶ声。それに優花が振り返るとそこには彼女の友人である菅原妙子、宮崎奈々の姿があった。

同時に隣の清水にも、声が掛かった。

「よう！・清水！」

「清水元気かー？ 相変わらず細かいけどちゃんと飯食ってるかー？」

「肩のピナちゃん可愛いな。：モフって良い？」

「おお、おはよう？ 元気だけどそれはオカンの反応だろ…あとピナは触らせねえ！ ピナはウチの子だ！」

『身も心もご主人様の物です！』

其方には相川昇、仁村明人、玉井淳史の三人が幸利に近付いていた。何だかんだと同じパーティーのメンバーである幸利を気に掛けていたのだろう。幸利の反応も少し人見知り感はあるが、他に比べ断然ラフであった。

どうや愛ちゃん先生護衛隊は此度の遠征からも無事戻って来たらしい。むしろ本人達曰く、「ウル」の一件ほどトラブルになる事はま  
ず無い」との事。まあ、あの時はとびっきりの某南雲トランプルメイカー共と某清水がいた  
為、仕方無い話だ。

そうすると当然彼等もいる。愛ちゃん先生護衛隊の後ろに続くのは四人の騎士と一人の女神だ。

『「先生！・」』

「今日は南雲君の晴れ舞台ですからね。先生少し頑張って、予定よりも早く帰って来ましたよ！」

「ちなみに此度の遠征で愛子が消費したポーションの数は23本です」

「更に言うとなんて最高級だ」

『「先生エ…」』

愛ちゃん先生、相変わらず捨て身が過ぎる。どうやら徹夜敢行して来たらしい。化粧で誤魔化されているが、目の下に隈が出来ている。「ウル」での説教から何も学んでいない…なら良いのだろうが生憎、愛子先生はちゃんと反省出来る大人だ。つまりは反省して尚、我が身を斬り捨てていると言う事に他ならない。

思わずその場の全員が愛ちゃん先生にジト目を送る。忠臣？ 護衛隊？ そんな物は関係無い。是非とも今、反省してくれ！ という怒りのみがこの場に渦巻いている。

愛子先生もその視線に気付いたのか、周囲を見渡す。一面に広がるジト目。愛ちゃん先生は頷いた。

「大丈夫です！ 先生は丈夫ですから！」

「「「「アホタレがああああ!!」「」「」」」

「な、何でですかあ〜？」

爆発。

小動物の如くワタワタする愛子。だが『神の使徒』も騎士も気にも留めない。自分を労りやがれ、という人徳故の怒声がフロアに響く。するとその声が呼び水になったのか、また別の者達がその場に集まった。

「おお！ その声は【豊穰の女神】様！ そして『神の使徒』御一行ではありませんか！」

「この野太い声は！」

「エゲツねえ程興奮してやがるこの声は！」

「波打つ筋肉を彷彿とさせるこの声は！」

『デデンデンデデン！』

「ピナさん？」

順に優花、幸利、チエイス、ピナが反応する。無理は無い。彼等彼女等にはトラウマがある。そう、それこそパ行の鳴き声しかない、ピナが思わず某BGMを鳴いちやう程には…どゆこと？

兎も角も同様を隠せない四人に、筋肉モリモリの彼等は迫り来る。

「お久々で！ 南雲の旦那の護衛の皆様！ このジェルノ、旦那の発表があるって聞いて駆け付けて来ましたぜ！」

「ふひよひよひよひよ！ 楽しみですなあ、南雲氏の研究発表！ きっと世紀の発表になりますぞー！」

「異論なしですなあ！ いやー、楽しみ過ぎて朝も寝れませんでしたよおー」

「「「あっははは、間違い無い！」「」」」



「間違えてないかしら？ 昼夜逆転してるわよ、あの人達？」

「オタクは得てしてあんな感じだぞ？」

「業深えなあ、オタクって」

そう、彼等とは他ならない【ウル】の【錬成師】の皆様だ。もはやハジメを神として信望するレベルの彼等が当然、ここに駆け付けない筈が無かった。日頃のボロボロの作業着とは打って変わった礼服を纏い、会場にて闊歩している。

ただ礼服がピッチピチしているのは、如何な物か。飛び出さんばかりの筋肉で礼服が苦しそうだった。さつきから『神の使徒』の視線が彼等の筋肉にしか行っていない。

「それにしても…南雲ハジメの準備は十分なのか？ 此度の結果次第で、奴は『神の使徒』の名を破棄されるのだぞ？ 奴は万全なのか？」

こう言ったのはデビッドだ。【錬成師】達が研究に関して供述し始めた為、思い出したのだろう。字面は高圧的だが、確かに心配していることがよく分かる。

「えーっと、今回の研究に関しては全く教えて貰えなかったんですけど…」

「流石に教会側の妨害も考慮しなきゃなんねーからな。アイツも教えるのは最低限にしてるんだろ。ただまあアイツは…」

それに答えるのは優花と清水だ。つい昨日に言われた言葉を二人は思い返す。

「『取り敢えず全員ぎゃふんと言わせる』って言ってました」

「…フンッ、相変わらず生意気なガキだな」

「それは本当に楽しみです。南雲君の発表に期待しましょう」

受付嬢に入場許可証を見せ、発表会場の扉を騎士達が開ける。すると先にも中に入っていた観客達からの騒めき声が聞こえた。

【ウル】の【錬成師】達は例外だが、現在この一行は有名人名ばかりだ。【豊穡の女神】に、神殿騎士、『神の使徒』、果てにはランク『黒』の冒険者【魔物の歌い手】までいるのだ。目立つのは無理ない。あと何故この面子の中で【ウル】の【錬成師】の皆様は緊張の一つも無いのか。その辺りも注目の理由になりつつある。

だが何も有名人は彼等だけで無い。この会場には数多くの知名人が居る。

「はてはて…かの小僧の悪足掻き。果たしてどの程度の物か。見物ですな、ノイント様」

「そうですか、イシユタル皇。此方としては何の感慨も有りません。神の仰せの通り、使命を果たすのみです」

「ほほほほ、それは何とも素晴らしい事で。陰りの一切ない信仰心。全ての信者が見習うべきですな」

「当然です。我々は神の駒なのですから」

「反論の余地もありませんな」

【聖教教会教皇】 イシユタルⅡランゴバルト

【神殿騎士団長】 ノイントⅡエリジュヒト

「ふむ…果たして坊主はどうなのか…」

「フフフ。きつと大丈夫ですわ、南雲さんなら」

「ええ。恐らくは」

「…やけに坊主を信用されていますね、リリアーナ王女。やはり件の新聞は——」

「違いますわ」

「…ならばそう言う事にさせて貰いましょう」

「ええ、そう言う事にしましょう。メルド様」

「フンツ！ また彼奴の話か！ 余は気に入らん！」

「そう言いますけど、ランデル。貴方この『学会』に今まで来た事ないでしょう？ 普通に興味あるじゃ無いですか」

「姉上!? 何を言われるのですか!?!」

【王国騎士団長】 メルドⅡロギンス

【ハイリヒ王国第一王女】 リリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒ

【側付き】 ヘリーナ

【ハイリヒ王国第一王子】 ランデルⅡSⅡBⅡハイリヒ

「うつふーん！ 良いわねえ、この青春パッション！ アタシのオトメゴコロ、ビクビクしちゃうー！」

「相変わらずベルちゃん可愛い反応するわねえ」

「…やはり、キャサリンさんの胆力は凄まじいな」

「何か言ったかしら〜ん？ バルスちゃん？」

「いえ、何も」

【元金ランク】及び【漢女連合マスター】クリスタルベル

【元冒険者ギルド秘書官】キャサリン

【王都ギルドマスター】バルスIIラプタ

「ほら、龍太郎！ 早く早く！ もう少して始まるわよ！」

「南雲の発表、どんななんだろうーな？」

「さあ？ でも彼何か掴んだ様だったから、何かやってくれるんじゃないかしら？」

「？ 最近、南雲と会ったのか？ アイツ訓練も放って、籠ってたって聞くけど」

「ん〜!?! …ああ、いやあくまでも予想よ、予想！ 変な勘繰りは良しなさい、龍太郎！ さもないと斬るわよ!?!」

「俺そんな変な事言ったか？」

【剣士】八重樫雫

【拳士】坂上龍太郎

——そして当然、彼女もいる。

幼馴染二人がそう言い争いながら席に着く中、彼女はずっと椅子に座り幕の閉じている舞台に視線を注いでいる。

それも無理は無い。彼女はずっと待ち続けている。焦がれている。

「…南雲くん」

【聖女】白崎香織

そして——

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——即ちこの詠唱文と魔法陣を用いる事で、私のオリジナル魔法“火狩”が発動出来ます。これは“火球”と同じ詠唱量にも関わらず、おおよそ二倍の威力で放つ事が出来ます。そして手軽な初級魔法の威力を高められるという点は、対人戦などに於いて特に有利に働いてしよう。以上で私の研究発表を終わります」

既に多くの学者が発表を終え、もうじきラストスパートとさえ言える程になって来た。

そこまで行つて初めて『魔法理論学発展論会』を見た『神の使徒』達は揃いも揃つて思った。最早これは偉いさん直々の処刑では無かるうか、と。

「ごめん。君に質問」

「は、はい」

その声に会場の多くの人間がビクンツとした。当然張本人の発表者君もビクンツとした。

律儀に手を挙げ、質問するのは王宮魔法師レミイ・ランテッドだ。大人には思えないちんまりとした腕だ。発表者も若干気が和らいている。

だがその和らぎなど…一瞬で吹き飛んだ。

「その魔法陣、確かに威力は“火球”よりも少し上。詠唱文もそこまですべて破綻してない。けれどその分魔法陣の文字数が明らかに増えている。少なくとも『手軽』と言える量じゃ無い。その辺りはどう考えてる？」  
「えっと…ですがその道の天職持ちならばその魔法陣の問題も解決出来ます！ それならば特に問題は——」

「ふうむ？ それはいけないな、少年？」

続いて言葉を遮つたのは赤い髪をした巨身の男だ。その正体はレミイと同じく王宮魔法師、名をアース・ガゼット。彼は勢い良く拳を振り上げ、叫んだ。

「確かに現代魔法は基本、適性により魔法陣を簡略化するケースが無いわけではない！ しかあし！ その簡略化された演算の一部は発動者自身が行う！ 君のオリジナル魔法、“火狩”は成り立ちはするだろう！ ただ演算が不足している分、未熟な威力になることや発動

者に負担が掛かる事が予想される！ そう言った点でその魔法は問題があると言えるぞ?! 駄目だな！」

「そ、そうなんですね。ありがとうございます。今後の研究に役立てます」

「ああ！ 精進してくれ！」

凄まじい熱量と共に放たれた指摘の数々。発表者君は泣きそうになりながらも堪え、頭を下げる。

これで終わったかと思った。しかし彼には見えてしまった。垂直に手を挙げる男の姿が。

「すまない。私は別に魔法陣をメインに据えた研究をしている訳では無いのだが…何分、一人の【錬成師】だ。そう言った面でも一つ、質問宜しいだろうか？」

「えっ、ハイ」

歴代続く王宮工房最大派閥、「アルソンス工房」。その八代目棟梁を務めるシャクナールソンスは人差し指と中指で発表者を指し、話を続ける。

「失礼する。君は言ったね？ 威力が二倍になると。何故そう確信しと言える？」

「えっと…それは基本五式の『威力』の部分を二倍に上げた為です。それ以上に出力するには詠唱文をより伸ばす必要性が有りましたので…」

「そうなる…やはり基本五式の『威力』以外は何も調整していないのかい？」

「はい。そうなります」

「ならばやはり二倍も無いよ。精々1.2倍程度だろうさ。オリジナル魔法を作る際に良く犯すミスだね。魔法にはバランスがある。威力だけを上げてても、収束率が足りなく目標の飛距離まで届かない、もしくは範囲も狙い通りに行かないだろう。詰まるどころ、新たな詠唱文を見出したのは見事だが、魔法陣の完成度の程度が低い。ついでに言えば詠唱文にも綻びは少し見える。だがまあそれは置いておくとして…追加分の魔法陣は兎も角も基本五式程度はキチンとしておき

たまえ。適性を持つ者でも基本五式の魔法陣程度はよく使う。魔法師でも錬成師でもこの主軸を誤ってはならない。これは基本だ。今後気をつけると良い」

「…はい」

返す言葉が弱々しい。自身を持った研究がここまでボロクソに言われるとは思って見なかったのだろう。緊張する余裕さえ、今の彼には無かった。

そしてまた手は上がる。少数先鋭の新興工房【ウォルペン工房】の棟梁、ウォルペンIIスタークだ。

「つーか、そもそも前提が間違ってたんだよ。ガキ」

「…何でしようか？」

「威力を上げただけのオリジナル魔法なんざ意味がない。そんだけだ」

「……………」

魔法は多種多様に分かれる。属性が同じだろうと、威力・軌道・範囲・消費魔力量がそれぞれ異なり、術師は状況に応じた魔法を使用する。

恐らくオリジナル魔法「火狩」は従来の初級魔法「火球」と然程変わりない。今回審査員が指摘した点を直して行ったらば「火狩」は「詠唱文が変わり、魔力を多めに使用する強めの「火球」となるだろう。そんな物ならば魔力を注ぎ込んだ「火球」と何ら変わりはない。つまりは新規性が無いわけだ。

オリジナル魔法とは代用品が無いからこそオリジナルたり得るのだ。発表者が言った魔法は全くその要素が無い。詰まるところ需要が無いのだ。

こう言われては黙り込むしか無い。今日幾度と無く展開されている光景がそこにはあった。

すると審査員席の中央に座する、現代魔法学の祖父たるゴッドワイドIIハウグストが最後に口を開く。

「新たな魔法を生み出そうとする姿勢は見事。されどまだ知識が圧倒的に足りんな。今日日我々が用いている現代魔法も先人方が研鑽と

失敗を積み重ね、創り上げてきた代物。歴史の積み重ねが最適化まで導いたのだ。それを軽視してはならない。君が新たな魔法を作ろうとするならば、先ずは先人方から学ぶと良い」

「は…はい…」

「? 何も恥じる事はない。君達に残された時間はまだある。一瞬たりとも無駄にしなければ、その努力は実ろう」

「あ、ありがとうございます」

どうやらかなり心が折れたらしい。ゴツドワイドが励ましの声を掛けているが意味がない。笑顔が凄まじく苦しそうだ。どうみても無理矢理表情を作っている様にか見えな。きつとステージ裏に隠れた瞬間、彼は泣くのだろうと会場の皆が察した。

ゴツドワイドは禿頭で、かつ顔の凹凸が激しい：所謂強面の年長者だ。しかも声に抑揚が無いのだから恐ろしい。慣れ親しんだ審査員四人は兎も角、発表者君には完全にトドメとなってしまった。

「これ、南雲大丈夫？」

「ちよいちよい心折れずに済んだ奴らも居たけど…こりやハジメにとっても厳しいかもな」

『ピピッ…』

「南雲っち頑張れーって奴だね…」

「気張れよ、南雲オ…」

何やかんやあつてVIP席に座らされている現十元愛ちゃん先生護衛隊のメンバー。彼等は散々繰り広げられて来たステージでの悲劇を思い返しなが、己等の友人を心配する。

審査員席に彼の師匠であるウオルペンが居るのは一見救いにも思える。ただ、生憎ながらウオルペンは身内贔屓するようなタイプでは無い。典型的【錬成師】の筆頭で有り、技術リスペクトの男だ。ハジメの発表が悪ければ容赦なく、ブチ切れるだろう。

次がハジメの番だ。そしてハジメの次に発表者はいない。単純に言えば『大トリ』と言うやつだ。ちなみにこちら辺は教会どうのこう

のは関係無い。くじ運の悪さである。

今は次の準備の為、幕は閉じている。ハジメの姿は見えない。しかし開いてしまったが最後、ハジメの番が来てしまう。

決して信じていないわけではない。ただミリでもある可能性が頭によぎってしまう。それほどまでに審査員の指摘は的確で、凄まじかった。

強制的シメとなっているハジメを心配し、背もたれに体重を捧げる二人。取り敢えず顔を仰向けにしつつも二人は言う。

「何かアイツって一日一トラブルぐらいあるよな？」

「あるわね。むしろもうちよつと多くない？」

「それはそうだな、うん」

【ウル】の一件や『ハジリリ新聞事件』を思い返しながら、二人は頷く。（ちなみにあの一件はリリアーナの巧みな民衆操作と零の胃をリリースする事により何とかなった。）

思い返すと凄まじく酷く：二人は急に落ち着いた。

今まで死線を幾つも駆け抜けた男だ。どうとでもなるだろう、と。

「：ま、あんな事やらやかしたアイツなら何とかなるか」

「だな。：おつ、始まるな」

最後の幕が開く。会場にいる遍く者達がステージに視線を捧げた。今、話題性が最もあるが故に、ある者は睨み付け、ある者は目を輝かせる。

幕が無くなれば、そこは誰もいないステージ。幾つかの備品が置かれていただけだ。

逃げ出したのか？ 彼を知らぬ人々は一瞬、そう思った。

しかしカツン、カツンと小さく、しかし確かに響く音が彼の存在を示した。

彼の服装はマナーレスンの時と同様、紳士スタイルだ。しかし以前の様な慌てた様子や高校生故の幼さは無い。

初の大舞台、今後の人生を左右する場に於いて、ハジメは異様に落ち着いていた。今迄この場に訪れた誰よりも、ハジメは自然体であった。



足のつま先から頭のとっぺんまで澱みない所作。ぶれることの無い瞳孔。それでいてふわりと優しい微笑。

幾日と積み重ねたレッスンの成果、それがこの場にて覚醒したのだ。だからこそリリアーナやヘリーナが自慢げに笑い、雫が隣をニヤニヤと見つめる。

第一印象は完璧。誰も彼もの視線を惹きつけた。

だからこそ成功の喜びをも抑え、ハジメはまず一礼。そして「風音の基本五式のみが刻まれた魔法陣片手に、南雲ハジメは始める。」

「それでは私、南雲ハジメの研究発表を始めさせて頂きます」

——南雲ハジメ、一世一代の戦いを。

## 23、『魔法理論学発展論会』——現代魔法 “錬成” に 関する新たな解釈

ありとあらゆる視線が、自身に向いている。

これまでに感じたことの無い、夥しいまでの目の筵。この光景が一世一代の大勝負であると言う事実を、ハジメにより実感させた。

だがハジメは踏み出す。臆する事など有りはしない。口を小さく開け、ゆつくりと気付かれない様に深呼吸する。手に持つ “風音” の準アーティファクトに魔力を込めた。

やがてステージの中央に辿り着く。スポットライトが己を照らし、視線はただ一点へと集う。

ここからどう動けば良いかは、体が知っている。全て見てきた。教わった。

自然と動く体。まるで今迄出会った人々全員から背を押されている様な感覚に、笑みがふと溢れる。

ハジメは己の胸に手を当て、頭を垂れる。

さあ、始めよう

「それでは私、南雲ハジメの研究発表を始めさせていただきます」

——他でも無い、僕の戦いを

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「まず私が行った研究は現代魔法の一つである “錬成”、これに関する新たな説の提唱です」

『“錬成”の…』

『かなり研究が進んでいる分野ですが…はてさてどうなる事やら』

ガヤガヤと客席から声がする。トータスにおける『学会』では、観客同士が発表内容を語り合う事は何ら不思議な事では無い。準アーティファクトである “風音” が観客へと声を届ける以上、静かにする意味合いが薄いのだ。

そして観客が言った様に “錬成” は研究が特に進んでいるとされている分野である。その理由としては “錬成” という魔法を使用で

きる絶対数が、他の魔法に比べ断然多い為だ。

【錬成師】は、トータスに於いて十人に一人が持つ天職。対して他の魔法はポピュラーな属性魔法だとしても優に全人口の5%を切る。

更に言えば魔法学という分野が戦闘職に向かない学問である以上、わざわざその分野を好き好んで研究しようとする物好きが少ないのも理由に当たると。それ故、必然的に「錬成」は非常に研究題材にし易い魔法なのだ。

観客達は様子見と言った所だ。散々最適化されて来た魔法に、どのような解釈を持ち込むのか、と。

「『錬成』は数多くある現代魔法の中でも特異な魔法です。攻撃性能を持たず、『変形』の属性を司る。しかもその対象は鉱物のみに適用されるとされています」

誤解されがちだが、「錬成」は何も土属性では無い。『変形』という一つの事象、それを魔法属性に落とし込めたのが「錬成」なのだ。

それを知らなかった興味本位の客は素直に驚き、知見のある者達は当然だと頷く。

「私は『錬成』は鉱物にのみ干渉を可能とする』という点について疑問を感じました。というのも、本当にそれだけの魔法ならば「錬成」は「土属性魔法」の下位互換の存在となる為です。しかし【錬成師】が【土術師】により職を追わせたという事実はほぼ聞きません。この為、私は「錬成」が鉱物以外にも干渉し得るのでは無いかという仮説を立てました」

ここでハジメは敢えて嘘の研究の動機を語る。

理由はあまりにも単純。その動機がこの世界の人間にとつては突拍子も無く、受け入れ難い物であると感じているからだ。だからこそここは恥を偲び、偽りのストーリーを騙る。

当然これを不思議に感じる者はいない。ただVIP席で首を傾げた女性等が三人居たが、誤差なので問題ない。ハジメは研究に集中する。

「その為、まず鉱物に近い固形の物質を対象に「錬成」を行いました。例えば今日、この場に持ってきた氷。これに対して「錬成」を行います

した」

ステージの端の方、台車の上に置かれていたのは二メートル大はあ  
る長方形の氷塊だ。ちなみにこの氷塊は『学会』側の協力により、つ  
い先程作られた代物だ。お陰で溶ける気配は無い。

『学会』のスタッフに心の中で感謝を送りつつ、ハジメは掌を氷塊に付  
ける。一応「錬成」と口に告げ、魔力を魔法陣へと注ぎ込む。

するかどうか。何ら変哲の無かった氷塊が、瞬く間に人の形へと姿  
を変えて行くでは無いか。ピキピキと音を立てて、ハジメの意思に従  
う。「錬成」が、働いていた。

魔法学や「錬成」に学の無い人間は、変化した事に驚く。だがその  
場にいる一流の「錬成師」はそれ自体には驚かず、代わりにその「錬  
成」の精度と速度に息を飲む。彼等は確信しただろう。「ウル」での  
ハジメの成功は嘘では無いのだと。

ついでに客席のとある「錬成師」軍団は「さすがは南雲の旦那！

われわれにできない事を平然とやってのけるツ。そこにシビれる！  
あこがれるウ！」「あく、心がびよんぴよんするんじゃ〜」「恐ろし  
く速い「錬成」、俺でも見逃しちゃうね」などと言っている。ハジメ  
は内心苦笑いした。

取り敢えず十秒も置かず人間大のエヴ○初号機を作り上げたハジ  
メ。唐突に出て来たエ○アに『神の使徒』の一部が噴く中、ハジメは  
平然と説明を発表を続ける。

「結果はこの通り、滞り無く「錬成」を行うことが出来ます。この様  
に生物以外の固体に対し、「錬成」での干渉が可能である事はチガス  
ナIIアートンにより証明されています。その為、ここまでは従来の「  
錬成」の解釈の範疇にあると言えるでしょう」

チガスナIIアートンのこの発表は案外、学者間では有名だ。雪など  
降らない【ハイリヒ王国】では関係ない話だが、地域によっては「錬  
成」により氷の煉瓦を作る地域もある。

その過去の研究について供述しなかった為、学者の一部はてっきり  
ハジメがそれを知らず発表をしていたと思っていたらしい。ほう、と  
感心した声がちらほらと観客席から聞こえて来る。

「ですがチガスナⅡアートンは固体以外の物質に対し、“錬成”での干渉は不可能とされています。実際に彼が行った研究の一つに『“錬成”による液体への干渉について』と言う物があり、チガスナⅡアートンはこの実験結果を失敗と判断しました」

チガスナⅡアートンが行った研究は水槽中に入れた水に対し、“錬成”を行うと言う物だ。そしてチガスナⅡアートンは水槽中の水を円錐状に変形させようとして：“微動だにしなかつた”と言う。

まだ少しの変動も有ればチガスナⅡアートンは「見込みあり」と判断しただろう。しかし存命の助手でさえも「1mたりとも動いていない」としている以上、“錬成”は液体に干渉不可能と『学会』において判断された。

「そこでチガスナⅡアートンの判断は正しかったのか。その検証の為、彼の研究方法に則り実験を行い：“そして実験は成功と判断しました”」

——だがハジメはその結果を否定する。

騒めき始める客席。チガスナⅡアートンは著名な研究者だ。既に他界しているが、それでも彼の弟子は今現在観客席にもいる。

詰まる所、ハジメはその弟子等に対し、思いつきり喧嘩を売りに行った形となる。

『アートン博士に指図するなど恥を知れ！ 貴様ア！』

『黙って聞いていれば偉そうに！』

『待て、お前達！ 静かにしろ！』

『ですが兄弟子!?!』

『奴がどの様な発表をするのか、今は黙って聞くぞ。間違っているならば叩けば良い。だが発表を最後まで聞かず激昂するのは学者の恥だ』

『『ハッ！』』

観客席にはチガスナⅡアートンを信奉する者が多数いたらしい。乱闘上等と言わんばかりに立ち上がり、拳を振り上げようとしていた。一番の兄弟子たる人物が静止の声を掛け、止めてくれた。が、その兄弟子からもハジメに対する苛立ちが確かに見えた。

それを見てハジメは心の中で上等だ、と笑う。

「今日、この場にチガスナIIアトトンが用いた実験の道具を揃えています。水槽と容器を満たす常温の水。これに「錬成」を掛け、変形するか否かを、チガスナIIアトンは調べました」

ステージに予め用意されていた水槽を、台車により中央に運ぶ。それは『学会』側には既に提出されており、何の変哲も無い水槽と水である事は証明されている。

さあ、「錬成」結果は如何に？ と観客達は一同に結果を見守ろうとする。

しかしハジメが「錬成」を行うより前に、『学会』側のスタッフが容器をハジメに手渡した。「ありがとうございます」と簡潔に礼をする。観客の目は当然ながらその容器に集まった。

容器の中に入っているのは赤い何かだ。辛うじて液体である事は分かるが、実際それが何かなのかまでは観客達には分からない。

「ですが私はここに別の液体を投入します。こちらは視覚的に実験結果を確認できる様に着色した油です。質量は水よりも一層軽く、水の上に層を作ります。なおこの油は予め『学会』側の検査により、金属粒子が含まれていない事は証明しています。此方を水槽の中に入れ、実験を開始します。なお周囲の風等の影響を受けない様、蓋を閉じます。それから「錬成」を中の液体へと発動します」

テキパキと作業を行なって行くハジメ。恐らくは何度も何度もこの実験を繰り返して行なって来たのだろう。確かな慣れがハジメにある。

そうして作られたのは油と水の二層に分かれる液体だ。上層が赤く、その色が下層へと拡散される事は無い。この構造が見えた瞬間、一部の者がハジメの狙いに気がつく。

そして本日二度目の「錬成」、魔力光を纏った掌が水槽中の液体に干渉を開始する。

水槽中の液体は先程の氷の様に輪郭を変える事は無い。だが代わりに上層にのみ蓄積していた赤い油、それが水の中へと混ぜ込まれて行く。

疎水性を持つ油は水に溶ける事は無い。水より軽い質量を持つが故に再び上層へと戻ろうとする。しかし生み出された水流の循環が再び下層へと油を押し出した。

観客はこれを一度「水属性魔法」と錯覚した。しかし最前線の学者等はそうでは無いと確信する。ハジメの手の甲に描かれている魔法陣は、「錬成」の物で間違い無かったからだ。

水流を数回転させてから徐々にハジメはその勢いを弱め、やがて静止させた。アツサリと師チガスナIIアートの立証した説が覆された事に啞然とする弟子一同。

念の為ハジメは手の甲の魔法陣を見せる様に「風音」の準アーツィファクトを持つ。そして声を風に乗せた。

「結果はこの様に、油が水と混ざり合っている事が分かるかと思われまます。これは私が液体を循環させる様に、コントロールした為です。なお私が現在持つ準アーツィファクトが「錬成」の刻まれたこの手袋と「風音」の刻まれたこの円盤のみである事から、私が「水属性魔法」を用いていない事は証明できます」

ちなみに『学会』では発表前にボディチェックが入念に行われる。研究内容による観客への被害が出ないか。発表内容を偽装する様な動画を持っていないか。不要な物を持ち込んでいないか。それ等の確認がしつかりと為される。

これにより発表において偽装はまず不可能。だが逆に言えばそれは壇上で語る内容の信憑性を高める助力でもある。

故にこの結果を観客は黙認する他ない。この場で発表を行なっている。それこそが何よりの真実味を持たせてしまうからだ。

「一つ、君に質問」

だがここでちよこんと腕が上がる。王宮魔法師レミィIIランテツドだ。審査員の内の一人が、ハジメの発表に反応を見せた。

「はい。何でしょうか」

「先程、君は言った。チガスナIIアートのこの実験に失敗したと判断したと。でも君は成功している。なら何故彼はこの実験を失敗したと判断した？」

「お応えします。それはチガスナIIアトンと私の変形への解釈が異なっている為です」

「…つまり？」

これに関してはチガスナIIアトンのレポートを読み込んだ時点で想定していた質問だ。脳内でしつかりと反芻した答えをハジメは口にする。

「『錬成』は鉱石、正しくは固体の輪郭を変形する事が可能です。最初に『錬成』した氷も長方形から人型へと変形しています。チガスナIIアトンは、液体もこの例に漏れないと判断したのです」

「…なる程、理解」

レミイはこれを聞き、頷いた。恐らくは元々推測は付いていたのだろう。専門分野で無いとは言え、流石は魔法学の第一線に立つ人物だと感心してしまう。

だが観客のおおよそはクエスチョンマークを浮かべるばかりだ。その為、ハジメは補足の説明を執り行った。

「固体と液体の違いには形を維持する能力、これの大小が存在します。言うまでも無く固体が大であり、液体が小です。また『錬成』は干渉能力が他の現代魔法よりも低く、物理的に不可能な形に変形させると言った事は基本不可能となっています。固体の場合は多少形を変えても、重力にその変形を妨げられる事はありません。しかし形の維持能力を持たない液体の場合は、上ベクトルへの変化に対しては、『錬成』による干渉以上に重力が強く働いてしまいます。その意識に至らなかつたチガスナIIアトンは『錬成』により、液体が重力を無視し変形すると判断したのでしょう。彼は水槽中の水を円錐状に変形させようとした。しかし形の保持能力が低い液体では、その様な変形が不可能。そして輪郭を一切変えなかつた液体を前に、彼は失敗と判断したのです」

「おお、なる程！　そしてチガスナIIアトンのミスに気付いた君は、着色した油を入れる事で『錬成』による干渉、液体構造の『変形』を明確に視覚化出来る様にしたのか！　単純だが素晴らしいアイデアだ！　賞賛を送ろう！」



「ありがとうございます」

そう、ハジメとチガスナ博士は観察項目が違う。水は凍らせない限り、握る事や砕く事、ましてや加工する事など不可能。人間が水の形を意のままにする事など出来ないのだ。そう言った様な『変形』は『錬成』には出来ない。水其の物の操作を行う『水属性魔法』の分野だ。

だが液体中の水粒子を入れ替える…つまりは構造の『変形』ならば重力による干渉も薄い。干渉能力の低い『錬成』でも十分に可能となる。

「念の為、水・疎水性の液体・着色料をそれぞれの働きに合う物質に変え、試しました。詳しくは『学会』側から配布された資料を参考にしてください。時間が無いのでそれぞれの実験の実演は省きますが、いずれも問題なく干渉を可能としました」

ついでに地球の実験における対照実験も行った。ついでに言えば水槽の材質なども変えている。いずれにせよ特に問題なく作用した。なお封印石による水槽の場合だけは普通に失敗した。これにより水流の発生が魔法以外の要因によるものでは無いと証明されたので、むしろプラスだが。

「また同様の方法により、気体への『錬成』による干渉実験も行いました。結果としてはやはり成功。『錬成』は気体への干渉も行う事が出来る事を証明しました」

気体であろうと『錬成』による干渉に陰りは無かった。むしろ流れを作る事に関しては質量の軽さ故に、一層容易でさえもあつた。粒子一つ一つに制限がない為、コントロール自体はしっかりと行わねばならなかった事がただ唯一の難点と言えるだろう。

「逆に固体で合っても魔石、動物、植物、人間、あとは対魔性を持つアーティファクトには効果を示しませんでした。顕微鏡を見ながら実験を行った為、この結果は確かかと思われます」

トータスの顕微鏡は、時代レベルの割にかなり優秀だ。恐らくは機械が無くとも、細かな加工が行える『錬成』があるからこそだろう。だがそのレベルであろうと、『錬成』による変形は見られなかった。

この対象の是非についてはハジメ自身、大体の検討は付いている。だがそれに関してはまだしていない説明がある。その為、ハジメはその説明を後回しとした。

「これまでの結果からまず『錬成』の対象が鉱物以外である事は示せたかと思われます。そして――」

ここまで説明を受け、『錬成』の対象が鉱物のみと意見できる者はいないだろう。事実誰もが反論を行う事はなかった。

「ちよつと待て、南雲ハジメ。一つ質問だ」

――だが、それはあくまでもその事実への反論が無い、と言うだけだ。

手を挙げたのは観客席にいる、『錬成師』貴族だ。粘着質な笑みを漏らしつつ、彼はハジメを見下している。

この『学会』では審査員以外も質問は可能だ。ただ基本的に発表者が発表を終え、審査員達も質問を終えてからと言うのがマナーだ。わざわざ大声でハジメの発表を遮り、質問を行うのは非常識と言える。

だからこそ一同は彼の行動に顔を顰める。だが止める程の無礼でも無い。あくまでも暗黙のルールと言うだけで、不正では無い。男は続ける。

「確かに貴様の語る実験結果は正しいのかも知れない。どの様な手を使ってここにこじ付けたのかは知らんが、まあ見事だ。実験自体は、な」

ふとハジメは思い出す。そう言えば他の工房にあんな人が居たかもな、と。

ハジメは他工房とはあまり関係を持たない。それ故仕方が無い話ではあるが、彼はハジメと同期の王宮【錬成師】だ。【錬成師】貴族故、期待され王宮工房入りし、ものの見事にハジメに話題を持っていかれた男だ。

だからこそ今、彼の心中にあるのは身勝手な逆上だ。ハジメがこれ以上に行くのは見過ごせない、わざわざ声を張り上げる。

「だが、だががしかし！ 貴様の研究、水や空気への『錬成』での干渉は所詮他の現代魔法の下位互換！ たかが水流を生み出すなど、『水属性魔法』初級で可能だ！ 空気への『錬成』も同様！ まるで『錬成』にて代用する価値がない！ つまり貴様の研究には確かな実用性が存在しないのだ！」

「……………」

そう、偉業とは従来では有り得なかった事象を為してこそ。ハジメの研究は確かな新規性がある。しかし言ってしまうえばそれだけ。常識を覆す何かでは無いのだ。

ハジメからの反論は無い。無言を貫いている。それに気づいた【錬成師】貴族はハジメを引き摺り下ろそうと、ヒートアップする。

「第一何だ、貴様は!? 【超新星<sup>ルキヤ</sup>】やら何やらと！ 烏澁がましいにも程があ——」

「黙れ、<sup>わっば</sup>童」

だがその熱は直ぐに冷えた。彼の首筋を通り過ぎたナイフ。それが死を、肌から脳に伝えたが故に。

投げた犯人は審査員席、そこに座る褐色の女傑だ。

「その童。私が機嫌良く人の研究を聞いているのを邪魔するとは良い度胸だ。どうやらそれ程に『首』を飛ばされたいらしい。工房の名を言ってみろ」

王宮棟梁シャクナールソンス。彼女は【錬成師】だが、同時に『冒険者』でもあるという異例の王宮棟梁だ。

その真実は「ただ自分の武器を振るってみたい」という阿呆極まり無い答えなのだが、実力は本物。何せランクは『緑』。非戦闘職でありながらその領域に辿り着くのは十分に変態である。有りとあらゆる武器を一定以上に使い熟すが故、ついた二つ名は【千之武器】。

そして彼女は【錬成師】。実力主義こそ彼女の心情。だからこそ有象無象如きが、見所のあるハジメの研究発表を妨害するなど許せよう筈が無い。

遂に立ち上がり、男の席へと迫ろうとするシャクナ。予想外の出来事に震え上がる貴族の男。周囲も如何様にすれば良いか慌てに慌て

る。

「おい。そこでストップだ。シヤクナ」

「おつつふ」

むんずつ、と掴まれるシヤクナの両肩。彼女の肩を掴むのは、紛れも無いウオルペンの腕だ。キツチリとシヤクナの肩を固定し、逃さぬ様になっている。

シヤクナが捕まり数秒。彼女は寸分たりとも動かない。が、やがて頭だけはグリンつとウオルペンの方に向く。

「…これは『もう逃がさないぞ。オマエはオレの物だ』的な感じと解釈して良いかい？ 彼、ピツピ」

「誰が彼、ピツピだ、誰が。殺生沙汰起こすなってだけだろ。そこのお前も言うなら最後まで聞いてからにしろ。途中で口を挟むのは普通にアウトだ。次やったら権限使って追い出すからな？ やめろよ？」

「…はい」

「よしっ。じゃ、小僧。発表の続きとつとと始めろ」

「はい。棟梁」

腰砕けになり座り込むシヤクナ。腰を抜かし座り込む男。二人が黙り込み、頷くウオルペンはすぐ様ハジメへと続きを促す。

普通ならば劇的な状況に啞然とするのだろうが、残念かなハジメはハプニングには慣れに慣れている。観客が啞然としていると言うのに、普通に話し始めた。

「はい。只今の意見、確かにその通りです。『錬成』が液体や気体を操作出来たとしても、既存の魔法の効果に勝る事はあまり無いかと思われます。そう言った面で、これまで私が行って来た研究はあくまでも『錬成』の可能性を提示する物にしか過ぎません」

男が言っていた事は正しい。それを恥ずかしげも無く、落ち着いたまま肯定するハジメ。

このままではハジメは終わり。そう思った観客席の面々はハジメの肯定に動揺をより一層高めてしまう。

「ですがその可能性を提示出来たならば、この前置きは十分に効果があつたと言えるでしょう」

「…………前置き？」

ざわりと、観客席が震撼する。動じなかったのはハジメの本題を知るウォルペン。一般用観客席に座るとある男。そして彼を信じ抜く少女だけ。他の面々はどの様な形であれ、確かな動揺を孕んでいた。今迄のハジメの研究には十分な新規性があった。あくまでも利用法が無いだけであり、半年も現場を経験していない【錬成師】がここまでやると言うのも前代未聞だ。

だというのにハジメにとってはまだ本題が存在する。あまりにも信じ難い。それ故か、今まで無言を貫いていたゴッドワイドが、初めて反応を見せた。

「大袈裟ですが、これから話す内容はこれまでの魔法学の常識をひっくり返す物となっております。その為、まず『錬成』が鉱物以外に作用する』という点を噛み砕いて説明する必要がありますが、この事です」

「ふむ？ つまりまだ『錬成』が対象と出来る物質がある。そういう事で良いのかね？」

「はい。むしろその為にこれまでの研究は行って来ましたから」

ゴッドワイドが端的に尋ねる。ハジメもそれを是とし、あくまでも今までの話が前座であると改めて告げる。

改めて観客席から騒めきが聞こえる。また何かをやらかすのかと見つめる者。流石に冗談だと嗤う者。平静を装いつつも食い入る様を見る【錬成師】達。いずれも最早ハジメから目を逸らす事は無い。

そんな数多くの視線がある中、一際目立つモノがあった。

それは視界の端から、じとりと見下す視線。【教皇】イシユタルの物だ。隙あらば、仕留めようとする狩人の眼光。ゾツとするまでの威圧感がハジメに押し寄せる。ハジメ最大の敵の一人が、目を離す事なく見つめている。

これでも通じなければハジメは終わりだ。冤罪をその身に背負い、夢に手を伸ばす事を許されない様になってしまう。

緊張が無いと言えは嘘になる。表面上は冷静だが、その実心臓の音がやけに大きく聞こえる。踏み締める脚がまともに地面の感覚を覚えてくれない。今に倒れてしまうのでは無いかと思う程だ。

だが、今のハジメは満ち満ちている。

それは己の冤罪を回避する未来の確信では無い。ましてや今後地獄に陥る等という馬鹿げた恐怖でも無い。

それは良い物を見つけたという、ただの学者としての達成感にだ。だからこそ、視線は揺れない。確かな気品を保ちながら、ハジメは告げる。

「それでは続いて——『鍊成』による自己体内魔力、および自然魔力への干渉。これについての説明を始めます」

——その言葉は観客の樂觀も、審査員の沈黙も、そして教皇の余裕をも。等しく薙ぎ払った。

## 24、『魔法理論学発展論会』——『鍊成』による魔力への干渉

魔力とはトータスにおいても長い間ブラックボックスとされてきた。その理由としては調査を行う事が出来るサンプルが非常に少ない為だ。

例えば体内魔力の場合でも、詠唱が必ず必要となる。加えてその場合、基本的に何かしらの魔法へと変換される。例えば『光球』は体内魔力をそのまま外に放出する事は出来る少ない魔法だ。しかし同時にその魔力の一部を光属性へと変換している。

だからこそ真に純粋な体内魔力を外部へと放出するというのは、非常に難しい行為となる。一応手段としては無くは無いのだが、特殊なアーティファクトや儀式が必要となる為、容易とは言えない。

そして何よりも問題は自然魔力だ。こちらに関しては本当にサンプルが少ない。例えば伝説の鉱石である自然魔力の塊、『神結晶』。もしくは大樹『ウーア・アルト』が放出する自然魔力の干渉を受けた、『フェアベルゲン』の木々。その二択となる。

それ以外の物質にはまず含まれる事は無い。人間は言わずもがな、魔物化していない動植物にすら体内魔力という物は含まれる。何処にでもあるが、捉える事は困難。それが自然魔力と言う代物だ。

結局の所、魔力を調べるにはサンプルが少な過ぎる。加えて言うならば、調べたい魔力のみを取り出すなど現在の技術ではまず不可能。

魔力という物を調べるには、その魔力その物进行操作する手段が必要不可欠。『魔法学』の識者達はその難題に異を唱えんとし、その度にその結論を同様に口にした。

——少なくとも、この日までは

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——『鍊成』による自己体内魔力、および自然魔力への干渉  
そのワードが出た途端、会場は今迄に見ない熱を孕んだ。

それは識者であろうと、愚鈍な者だろうと関係無い。当たり前だ。

ハジメが放った一言はどれ程の馬鹿であろうと凄まじさを理解でき  
る、常識を覆す内容なのだから。

『ま、魔力干渉の術だと!? 馬鹿な、そんな訳が——』

『しかし…先程あの男は液体・気体への干渉をしつかりと証明した。  
ならば、万が一であり得るのではないか?』

『ありえん! ありえんだろう! 【無能】だぞ!? 『学会』で数百年間  
謎とされた干渉方法をあの小僧が導き出したとでも言うのか!』

客席は最早てんやわんやだ。ハジメの語った内容が嘘か誠か。計  
りかねている。教会の狂信者はこそつて否定する。しかしハジメは  
前提の発表ですら十分な内容を持って来ている。反対派はただ勢い  
任せの罵倒しか吐く事が出来ない。

「はっ? はがあ?」

「イシユタル卿、だらし無いですよ。口をそれ程開けるなど。公衆の  
面前なのでですから、ご注意なさい」

「あ、<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>ご<sup>は</sup>があ」

「…確かにそれ程驚くのも無理は無いですが。存外やりますね、あの  
人間」

それは敵だろうと——

「優花、分かっているか?」

「…流石に分かるわよ、私でも。これがエッグい内容だつて事は」

「語彙力な? いや、ハジメの奴が頑張ってるのは知ってたが…予想  
の遙か上を行かれたわ」

「…南雲つち、ヤバくない?」

「よもやよもや…」

「流石、南雲殿ですね。私、こんな未来が来ると思っていました」

「おい、チエイズ。しれつと「自分、分かってました」という態度を取  
るのはやめろ。目に見えて汗をかいているからな、貴様」

「頑張ってくださいーい、南雲くーん! 先生応援しますよー!」

——味方だろうと関係無い。

「ハハハッ、坊主は相変わらずしでかすな!」

「笑って現実逃避しないでくださいまし、メルド団長。それはそうと



これが事実だとすれば、先ずはこの技術の漏洩の阻止を行わねば。特に帝国。というか南雲さんカツコよ。これ程の破格の情報ならば貿易の一つや二つしなくては損。問題は南雲さんがこの研究データをどの様にご利用するか、ですわね。やはり紳士服似合いますわ。恐らく南雲さんの事ですから、データ自体は工房か国に渡して自分の研究に戻るでしょう。ここでの発表こそはあれど、恐らくは研鑽が必要な類の技術。笑顔が眩しいですわね。そしてある程度——」

「お嬢様。せめて仕事モードか乙女モードどちらかに選んでいただけませんか?。」

「さ、流石は余のライバル……やばあ」

「ランデル殿下、本音が漏れていますよ?。」

誰もが高揚し、見入っている。

当然ながら審査員達もまた、狂乱の渦へと吞まれた。

「ハア————ツツツ???? ホントに!? ホントに “錬成” でそんな事出来ちゃうの!? マジで!? そんな事出来るから早く言つてよ! 幾ら注ぎ込めば特別講師として来てくれる? 5はいる?。」

「千万か?。」

「桁が一つ足りないよ、ダーリン?。」

「なるほど、妥当だな」

「ついに、ダーリンである事を認めてくれたかい?。」

「脳味噌出荷したらどうだ?。」

「私の脳味噌と君の籍を交換してくれるなら」

「汚ねえよ。いらん」

「いけずだね」

いの一番に反応を見せたのは王宮【錬成師】であるシャクナだ。ウォルペンと同じ穴の貉である彼女は、ステージに登りかねない程にボルテージを上げていた。

最終的にはいつもの夫婦漫才に落ち着いたが、興奮はやはり冷めぬい模様。爛々と目を輝かせている。

「シャクナ、落ち着く。まだ事実かも分かってない。話を聞——」

「レミイ、君はどんなプランを立ててる?。」

「南雲ハジメの勧誘……と言いたい所。ただ彼は【ウォルペン工房】所属。勧誘は困難と予想。なのでまだ未成熟な学生の【錬成師】の勧誘を行う。青田買いいした上で、魔力の『錬成』方法を叩き込む。従来の『錬成』が身に染みていない、現在の常識に囚われていないならば習得は早いと予想。そうしてある程度恒常的な魔力の研究が可能。私の研究が格段にすす——嵌めた？ シャクナ？」

「十中八九、君自身の自爆じゃあないかな？」

「まあ、お前ら。そんな反応するのも無理はねーが、取り敢えず話を聞け」

「おお！ 未来に胸が躍るな！ 俺は早く続きが聴きたい！ ので、背筋ピーンだ！」

一見は静かに見えたレミイの方もまた、ハジメの発表に興奮しているらしい。軽く小突いただけで、溢れんばかりに腹の内を吐き出した。いつもは言葉数が少ない彼女。故に漏れ出た言葉は他ならない、彼女の動揺の証左だ。

対していつも騒がしいアースは行儀良く椅子に座っている。目線も舞台上のハジメをジ——ツ。動きも言葉も暑苦しいのが彼の常の為、これまた異様な反応であった。

ここで唯一冷静なのはウォルペンのみ。ただ彼は彼で、ハジメからこの話を聞いた時は大いに荒ぶった。詰め寄り、静聴。質問責めした上で、【ウォルペン工房】全員で崇め奉った。

その為、「こうなるのも無理は無い」と判断するウォルペン。他メンバーへの対応がどこか柔らかいのも、同情故の物。すると視界の端で、腕を組む男がいた。

【魔法学の祖父】ゴッドワイドⅡⅠⅠハウグストだ。本来ならば興奮間違いなしの内容を前にして、彼の表情は一変たりともしない。ただ静かに、そこに佇んでいる。

「……………」

「ゴッドワイドのおっさん？ やけに静かだが、どうした？」

「うむ…私事だ。続けてくれたまえ」

「…？ まあいい、小僧。声も静まってきたから続ける。こんぐらい

の騒めきなら『風音』で十分に届く」

「分かりました」

やけに反応が鈍いのが気に掛かったが、このままでは話が進まない。ハジメに続きを促した。

「それでは発表を再開します。まずこの考えに至った経緯をお話します。単純に言って仕舞えば、それは魔法陣です」

『『『』……魔法陣？』』』』』

会場の人間がハジメの言葉をオウム返しした。その言葉を知らない訳ではない。何故この場でそのワードが出てくるのか、不思議で堪らなかった。それだけの話。

「魔法陣の主な製作手段には『錬成』が挙げられます。これは他の手段と異なり、利便性や資源の消費を防ぐ事ができ、かつ魔法陣自体が崩れたとしても修理という手を用いられる為です。ですが、他の手段も当然ながら存在します」

以前から述べているが、魔法陣を形成する手段は幾つもある。血に、地脈、特殊な紙。このいずれでも、問題無く魔法は発動出来る。

しかしいずれも『錬成』による刻印よりも、問題が多い。

例えば血で書く場合、その血は発動者本人の血で無ければならない。またある程度新鮮な血である必要があり、一日もすれば発動は不可となる。その為、この手段を多用する者はまず居ない。緊急時の手段、と言った所だ。

また地脈は魔力が流れやすい大地の筋道だ。人間が利用出来るほどに大きい物は限られ、希少。しかも大地に根付いた物である為、地脈を移動させるなど不可能。【トータス】で、首都の移遷が少ないのはこれが理由だ。【ハイリヒ王国】に張られている結界も、地下にある強大な地脈により魔石の魔力を王都全体に張り巡らせ、発動しているのだ。

加えてフェアベルゲンの木々を加工し作られた特殊な紙、魔法紙は一度の使用で紙が燃え尽きる。その為、連発しての使用が不可能となっている。嵩張らない為、数を用意出来るというメリットはある。しかし素材の希少さからも、上位の戦闘職ともなれば積極的な使用は

見受けられないというのが事実である。

これらから分かる様に利便性が高いのは、鉱物への魔法陣の刻印だ。刻める魔法陣の数こそ少ないが出費コストも低く、手頃だ。習得者も一部の【錬成師】というだけで、数はいるので問題ない。

ただこうして羅列してみれば、一つ疑問が生じる。

「では、これらの共通項は何でしょうか？ 何が作用して、魔法陣たり得ているのでしょうか？」

『変形』を司る魔法、肉体の一部、地形、植物。一見すれば、どれもまるで共通項がある様には思えない。

しかしかの日、ランデルの口からある話を聞いた事で、ハジメはその共通項を導き出した。

「私はこの共通項こそを魔力であると推察しました。そうでは無いかと考えたのは、【聖女】白崎香織が生み出した新たな技術からです」

『か、香織？ 違うわよ、きつと。南雲君は公共の場だからあんな呼び方になってるだけよ？ だからその般若さんの気配を抑えて？』

『……………』

少しフルネームで言うのが恥ずかしくも思ったが、此処は公共の場。未だ罪人認定されているハジメと彼女では格と言う物が違う。なので仕方が無く、ハジメはそう言う。

少し視界の端が軋んだ様な気がしたが気の所為だ。ハジメは見事なスルースキルで集中する。学者の皆様も知識欲で一杯で、その軋みに気付くことが無い。

「彼女は“光球”により、魔法陣を作成したとの報告があります。その“光球”は光属性魔法と：彼女自身の体内魔力により構成されます。そして体内魔力に重点を置き、考えた結果ある法則に辿り着きます」

そしてハジメは審査員席の中央、そこに座するゴッドワイドに視線をやった。その一瞥が無意識から来る物なのかは分からない。しかし、次の話に関係のある事ではあった。

「自然魔力と体内魔力は両者間に引力を持つ、これは他でも無いゴッドワイドⅡTⅡハウグストが導き出した数少ない魔力量則の一つで

す。そしてそこから、魔法陣は周囲と比較し、魔力密度が高い様にする事で魔力の導線となっている、そう予想します」

これらゴツドワイドの研究の一つ、「魔力間における収束性・反発性の証明」からの引用だ。

先程も言ったが、魔力のサンプルは非常に少ない。しかも魔力に直接干渉する術を人は持たない故、研究が進む事は無かった。

だがゴツドワイドはそもそもの着目点が違った。単純に言うならば人体と周囲環境を体内魔力と自然魔力のモデルとして考えたのだ。あくまでもその研究は観察故の予想。しかしその信憑性は非常に高い研究であった。

体内魔力と自然魔力間の引力。これは人間の体内魔力が時間につれ回復する事、そして体外に放出した体内魔力が霧散する事から予想された法則だ。

まず体内魔力の回復は自然魔力を取り入れ、これを体内魔力へと変換する事から成り立つ。これは伝説の代物『神水』が、魔力回復も可能としている事からも常識とされている。

ではどの様にして自然魔力を取り入れているのか。呼吸、と考えても良いが、それはあくまでも自然魔力を取り入れる活動を促進しているに過ぎない。真に自然魔力の流入を行うのは体内魔力が持つ引き寄せる力だ。体内魔力が生命活動に重要な働きを持つ以上、体内魔力の回復に関わる自然魔力を取り入れる能力を持つのは説得力がある。

また体内魔力の霧散も、自然魔力間での引力で証明可能だ。「ライセン大峡谷」の分散作用はまた別口だろうが、コントロール制御の低くなった体内魔力を、自然魔力が引き寄せる事によって分散という現象の形を取るのだ。

これらを踏まえると、魔力密度が濃い事で自然魔力を引きつけるという現象は十分に発生し得ると考えられる。

「また同様に血には体内魔力が、地脈やフェアベルゲンの木々には自然魔力が濃く含まれています。そこから他魔力を引きつける力、魔法陣としての効果を見込めるでしょう」

ここに来て協会側の人間も黙り始める。何せハジメが口にした内

容は魔法学の第一人者、ゴッドワイドの研究を参考にした物だからだ。

下手に参考にした程度ならば罵倒の一つや二つはあるだろう。しかしハジメはしっかりと研究内容を理解し、自身の発表のパーツとして組み立てている。

野次馬気分の外野は口を紡ぐしか無かった。

「血液の魔法陣が本人の物で無ければ機能しないというのも、体内魔力間の反発性を考えれば理解出来ます。同時に時間が過ぎれば魔法陣として機能しなくなるのも、血に含まれている体内魔力の効力が弱まり、魔力が霧散してしまうからでしょう」

『体内魔力間での反発性』もまたゴッドワイドの研究成果の一つだ。例えば魔物の肉には致死レベルの毒性がある。これは魔物の血肉に体内魔力が干渉し、他生物の魔力との反発が発生する為とされている。磁石の同極を合わせた時の反応を想像すれば、理解も容易いだろう。

「これらから魔力が魔法陣を成り立たせる要因であると仮定する事が出来ます。続いて『錬成』が魔力に干渉出来るとした理由を説明して行きたいと思います。【錬成師】が魔法陣を製作する際、導線用の素材を必要としない事、それが理由の一つです」

【錬成師】は魔法陣の刻印の際に、素材を必要としない。必要なのは普段とは異なる特殊な『錬成』、それだけだ。これに関してはあくまでも感覚的な形でしか伝えられない。人によっては『錬成』の範囲を広げる』と供述する者もいるが、具体的に言える人間はまず居ない。「ここで考えられる要因は『魔法陣の形が魔力の導線としての能力を付与する』、『錬成』が鉱物そのものの性質を変える』、そして『空気中から素材を獲得している』。この三つが考えられます。一番最初の推察である魔法陣の形、すなわち『完全な形』を取ることで導線となる、という今迄の考え方です。ですがこれは素材対象や方法が制限されている時点で違うと言えるでしょう。またある程度不細工な形でも魔法陣は成立する事からも、この考えは否定出来ます」

これに関して頷くのは腕のある【錬成師】の面々だ。当然形を整え

る作業は重要だが、同時に形だけでは魔法陣は発動不可能。あくまでもそれが真実の様に語られているのは古い文献のみ。

「次に『錬成』が鉱物の性質を変えろという物ですが…これもまた違うでしょう」

『錬成』の能力はあくまでも『変形』だ。切断・重量など形による能力が与えられる事はあれど、魔法的な性質が付与される事はない。

だからこそハジメは三つ目の説を唱える。

「その為、私が重要視したのは三つ目、空気中からの素材の獲得です。前述の様に『錬成』が気体への干渉を可能としている以上、この説には可能性があります」

現代科学に置いて、空気とは物質の性質に大きく左右する要素だ。気体との反応は有史以来、人間の進歩と隣り合わせであり続けた。

それを考えれば三つ目の説はハジメにとつて十分に期待できる説となっていた。

しかしここまでは推論。ある程度の証拠が無ければ説得力も生まれない。そこで取り出したるは一つの確かなデータだ。

「また魔法陣の刻印前と刻印後の重量はそれぞれ異なります。ほんの僅か…砂粒一つ分もありませんが、差異が発生しています。この事から『錬成』は空気中の物質を魔法陣に結合させている、と推察出来ます」

ちなみに素材に関しては酸化還元・および水和などの様な化学反応とは無縁の素材を用いている。地球に持って帰れば色々凄そうな鉱石だ。実際、ハジメにとつても非常に便利であった。ただまあ、その辺りを観客に説明していると化学分野の話をとータス世界の人間に開示する必要がある為、その説明は省いている。

「加えて現状、魔法陣での刻印が世界の何処であろうと可能とされています。唯一『ライセン大峽谷』は前例がありませんが、それは魔力の霧散効果による物ですので省きます。この為、何処かの箇所のみで多量に空気中に含まれている物質は除外出来るとして考えられます。そして自然魔力は全世界に普遍的に存在する以上、先程の魔力密度による魔力の誘導能力の話も合わせて、『錬成』が自然魔力に干渉して

いる可能性は十分にあり得るでしょう」

当然ながら、この理論は違う可能性もある。もしかすれば魔法陣の魔力の誘導効果は別の物が要因なのかも知れない。

「巫山戯るな！ 出鱈目だろう!? さつきまで実演の一つや二つをしていた癖に、今は何の実演もしていないじゃ無いか！ 変に話をこじ付けているだけだろう!?!」

事実こう言った声上がる。結局の所、世の中は論より証拠。目に見える物は何よりも信憑性を持ちやすい。

「実演…ですか?」

「そうだ！ お前は未だに何も——」

「していますよ?」

「……………は?」

だからハジメはそれだけは確実に調べ上げた。

所詮先程までの説明はハジメにとって付け焼き刃。本命は「錬成」が魔力に干渉する術を持つという事。それ以外は出鱈目だって良い。らしければ良かった。

真剣に考えたのは本当だ。なるべく理論立てもした。実際、ハジメがこの解釈で魔法陣の作成を行なった場合、普段よりも良質な魔法陣が完成した。だからこそ、この説は現実で起きている事に近づいた物である事は確実なのだろう。

しかしそれ以上に、目に見える事実が結局は物を言うのだとハジメは良く理解していた。

だからこそハジメはずっと晒し続けていたジョーカーの手札を明らかとする。

「予めご了承して頂きたいのですが、私は「錬成」以外の魔法に対する適性を全く持ちません。その為、どの様な属性の魔法であろうと魔法の情報は全て魔法陣に刻まなければ私は発動さえまなりません。当然、基本五式だけでは初級魔法の発動さえ不可能です。加えてこの「風音」の準アーティファクトの発動に、魔石は用いていません」

「…?」

適性は魔法陣を省略するのに重要な要素だ。それにより、魔法師は



基本五式、あるいはそれ以上まで魔法陣を省略化し、臨機応変に魔法を発動する。

固有魔法が発動する魔法と似ている魔物の魔石でも、省略は可能だ。そう言った場合は魔物の体内魔力の傾向が近く、適性が高いとして扱われる。

だからこそ逆に言うならば、それ以外の方法で魔法陣は省略出来ない。

その事実まで辿り着いた観客は思う。ならば今、ハジメが「風音」を発動出来ているのは何故なのか、と。

適性が無いにも関わらず、輝く「風音」の魔法陣。広く響く声。

『——あ』

一人が、ソレに気が付いた。

ハジメがこの演説を始めてから身に付けていた準アーティファクトは、何も一つだけでは無い。

ソレをハジメは「風音」の準アーティファクト同様、一度も外す事が無かった。

ソレは常に淡い光の円環を描いていた。

そして——ソレは今も尚、ハジメの両手で輝いている。

『「錬成」の…魔法陣!?!』

誰かが叫んだのを拍子に、会場が今までを遥かに超える動揺に包まれる。理論だけならばこうもならなかっただろう。紛れも無い現実を突き出されたが故の、騒めきだった。

これに対しハジメは微笑を浮かべるが…親しい者は分かった。アレは内心愉しんでるなど。ぐうの音も出させないつもりだななど。

すこぶる良い笑顔に知り合い一同が白い目を向けつつ、ハジメは続ける。

「はい。この様に「錬成」により魔力に干渉する手段を今迄の「錬成」との区分の為、「魔錬」と定義しました。そしてこの「魔錬」により私は自然魔力に干渉し、その魔力を魔法陣へと流し込んでいます。



魔法はイメージから主に成り立つ。故に意識の改革さえ出来たらば習得も困難では無い。されどその意識の改革が一番の難題であり、シヤクナの懸念点でもあった。

だが本<sup>開</sup>祖<sup>祖</sup>にハジメ以外に二人も習得者が居たならば、説得力もあると言う物だ。

「はい。まず一人目は私の師であるウォルペンIIスターク。ですが棟梁は現在、審査員という身分。壇上で実践と言うわけにはいきませんでした。そこでもう一人の習得者をこの会場に呼んでいます。『学会』側からも彼に助手としての参加を許可して貰っています。なので――」

ついでに言うならば教会の目が届きやすい場所では、自身の研究を広めたく無かったという理由もある。このハジメの研究はかなり凄まじい。それこそ教会が気付いたならば、妨害工作の三つや四つは有っただろうと確信できるほどには、だ。

だからこそハジメは研究の全貌を二人にしか話していない。同じ工房のメンバーにさえも、前半の気体干渉までだ。そしてそれだけならば、功績には至らないだろうと判断したのだろう。教会はハジメの思惑通り妨害して来なかった。イシュタルが驚愕していたのもこれが理由だ。恐らく集めさせられた情報だけで判断してしまったのだろう。良い気味だと内心ボヤク。

ウォルペンに話した理由はハジメの研究の粗探しと機密性を保つだけの権力が彼にあったから。ついでに言うならば技術信者の筆頭である為、教会に密告する真似をするはずが無いと信頼した為だ。

では果たしてもう一人は誰か？ それは教会の目が届かない、王都から遠くにいる、かつハジメが信頼に置ける人物。

ハジメは彼を会場から見つけると、声を掛けた。

「――ジェルノさん、壇上まで上がって来て下さい」

「了解しましたア！ 南雲の旦那ア!!!」

『『『』……………は？』』』』』

湖畔の町【ウル】、彼の地に闊歩する【錬成師】の纏め役。ジェルノ  
Ⅱサルマナが飛びつきりの笑顔で立ち上がる。ぶんぶんと揺れる尻  
尾を幻視する観客一同。それ等をさっくり無視し、敬愛するハジメの  
元へと速攻で駆け出そうとするジェルノ。

しかしまあ、それに待ったを掛ける者達がいる。

『ちよつと待てエ!! 棟梁、何でアンタが呼ばれる!?!』

「あん? そりゃあ手紙で旦那とマンツーマンして、  
“魔錬”を習得したからだよ」

『ままま待つんですな? それではここ最近棟梁が受け取っていた  
手紙は——』

「おう、旦那からだ」

『じゃあ今日ここに来たのも……』

「旦那の勇姿を拝むの半分、手伝い半分だ!」

『狡いぞ、アンタ! 南雲師匠からの手紙を黙ってるなんて!』

「ハハハハッ、黙ってるって言われてたからな。ホントは言いたかつたけど仕方ないヨネ!」

『クソ棟梁! テメエ、人の心つてもんが無いのか!?!』

「正直クツツツツソ優越感あるwwwwww」

『これは天誅案件では?』

『誅する? 天誅いつとく?』

『耳を澄ませろ、天がやれって言ってるぞ?』

「おいこら、俺を殺害しようとするんじゃねーよ? 第一、もし仮にお前等が俺と同じ様な状況だったらどうした?」

『へ? それは当然独占した上で後で煽りますが?』

『マンツーマンとか貴重過ぎますからな。お口チャック案件ですぞ?』

『お前の物は俺の物! 俺の物は俺の物!』

「ほら見ろ。同類じゃねーか」

彼等はハジメを敬愛して止まない勢力……即ち【ウル】の【錬成師】一同である。上司であるジェルノに対し、思いつ切り噛み付く。何なら  
闇討ちの計画も立てている。ただジェルノも彼等も同じ技術大好き

な【錬成師】。根本的なゲスさは同等であった。

結局ジェルノは部下達の言葉をまるつきり無視し、ハジメの指示の元壇上まで上がって来た。

「それで南雲の旦那、俺も『魔錬』を使えば良いんですかい？」

「はい。ジェルノさんも魔法適性は基本持つてないですよね？ あ、あとアレ、ちゃんと付けてます？」

「ええ、適性は『錬成』以外ありませんし、例のブツもしっかりと持つてきてます！」

「なら好都合です。同じ様をお願いします」

「承りましたぜ、旦那！」

そう言つてハジメはジェルノに『風音』の準アーティファクトを手渡す。全員の視線がジェルノへと誘導される。そして当然彼が元から付けている準アーティファクトの手袋にも。

『…あれ？』

そして気が付く。その手袋に刻まれている魔法陣、『錬成』の魔法陣の周囲に新たな魔法陣が刻まれている事に。

やがてそれは『錬成』の魔法陣から来る魔力を受け、輝く。そして共鳴する様にジェルノの周囲の自然魔力が光を放ち、『風音』の魔法陣へと流れ込んでいく。

「これで良いですかい？ 南雲の旦那」

ジェルノの言葉は良く響いた。『風音』は紛れも無く成功。そしてそれは『魔錬』が決してハジメ独自の技術では無い事を顕著に示していた。

「お気付きの方も居られると思いますが、ジェルノさんが持ち込んでくださった『錬成』の準アーティファクトには、ある補助魔法陣が刻まれています。これは従来の『錬成』魔法陣を『魔錬』に特化させる補助魔法陣となっています。この補助魔法陣と一定以上の技量があれば、『魔錬』の使用が容易となります」

ちなみに僕は慣れているので必要ありませんでした、と軽く追加説明し、その上でだからこそ再現性は十分にあると結論付ける。

後はゴッドワイドの反応次第だ。会場の誰もが、次の彼の反応を待

つ。

「——南雲ハジメ」

「ツ!? はい!」

ボソリと、ゴツドワイドは呟く。

「着眼点や研究内容自体も見事だ。君の研究は今後の魔法の発展に確かな影響を与えるだろう事も疑い様が無い。：しかしそれ以上に気配りや実演、文献調査などの前準備が丁寧に仕事されておる。非常に説得力がある物を断捨離している事がよく分かる」

ハジメは観客や審査員からされた質問の一つ一つを丁寧に返していた。時には文献を使つて、時には視覚的な事実を用いて理解を誘つた。

それは研究結果だけで満足する人間では到底不可能。弛まぬ努力と繰り返し返した自問自答、それが今回の結果に結び付いている。

だからこそゴツドワイドは単なる結果だけでは無く、それまでの過程を理解し認めた。

「若いと言うのに：見事だ。私、ゴツドワイドⅡTⅡハウグストの名にかけて、君の研究に賞賛を」

——ワアアアアツ!!!

ゴツドワイドの言葉を皮切りに、拍手の鯨波が弾けた。

この喝采はハジメを認めた事の証左だ。何せ世紀の大発見だ。ハジメの価値を人々が認めた、その事実が確かにそこにある。

壇上、ハジメはただ立ち尽くす。研究発表が終わつたと言う事実が、ハジメの肩から力を抜いた。そしてぼうつと観客席を見渡す。

新たな進展に喜びを見出す者、悔しさに歯噛みする者、そしてハジメ自体を祝福する者。それ等は決して一様では無く、非常にまばらだ。改めて会場に人が沢山居たのだと、ここになって気が付く。

その為か、存外自分は緊張していたらしいと分かった。吸い込む空気がより思考を明瞭にする。

そして：見つけた。

（——あ）

かの日の約束からどれだけ掛かっただろうか。どれだけの間、その

姿を追い求めただろうか。

ハジメの視界の端。VIPのバルコニーにて立ち上がり、拍手するただ一人の少女。

（——嗚呼）

思わず彼女の姿を追い、目を其方へ向ける。まだ壇上だと言うのに理性が働かない。

するとハジメが気付いたのにあちらも気が付いたのだろうか。ばああと太陽の様な明るい笑顔を彼女は咲かせる。

此処になってやっとハジメは実感する。遅過ぎる感動がハジメの胸中を埋め尽くす。

——漸く辿り着いた

簡潔な答えがハジメの視界を滲ませ、そして——

「——ッッ!!」

——そしてその衝動のままハジメは拳を握り、振りかぶった。

会場の者達は発表が成功して喜んでいるのだと思っっているのだろうか。そう言う所は年相応だと、咎める声は特に無かった。

だがきつとその答えを知るのはハジメと彼女。その二人だけ。

遠く小さく、会場の喧騒により消えてしまいそうな淡い声。

だがハジメは確かに聞いた。

『おめでとう、南雲くん』

彼女の、白崎香織のその声を。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——ハイリヒ城下街新聞の一部より抜粋

『○月\*☆日、【錬成師】南雲ハジメ氏が『魔法理論学発展論会』最高賞である白金賞を獲得。彼の研究である“魔錬”は『学会』の歴史を考慮してもなお凄まじい発見である事は疑い様も無い。【聖教教会】の執行は困難であると推測される』

『南雲ハジメ氏の研究は主に『魔法陣の構造モデルの説立証』、『錬成“特殊派生魔法”魔錬』の開発』、『“魔錬”の魔法陣の作成』の三つ

となっている。いずれも魔法学に激震を齎すには十分であり、数々の著名人も彼を支持している。今後更なる活躍が期待される』

『当社の新聞では○月◆#日に南雲ハジメ氏へのインタビューを予定している。彼の半年間に渡りどの様な道を進んだのか。彼の師であるウォルペンⅡスターク氏と共に、迫って行きたいと思っている』

『○月☆\$日、【ハイリヒ王国】現国王エリヒドⅡSⅡBⅡハイリヒ陛下、及び【聖教教会】教皇イシユタルⅡランゴバルト猊下が【錬成師】南雲ハジメに終身判決を言い渡した。判決理由は約半年前の迷宮の一件であるとされている』

『これに対し、【豊穰の女神】畑山愛子、リリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒ殿下、ランデルⅡSⅡBⅡハイリヒ殿下、メルドⅡロギンス将軍、【聖女】白崎香織等を中心とした多数の反対意見が出た。王都の民衆にも不信感を持つ者が多く、我々も同様である』

『これらの意見を受け、【聖教教会】は南雲ハジメ氏への再度の判決の持ち越しを決定した』

『そして判決は——『神前決闘』へと委ねられる結果となった』



## 閑話、相入れず、愛有らず

夕暮れに沈む【神山】、その荘厳な一室には教皇イシユタルと一人の『使徒』がいた。

イシユタルはこの世界でも有数の権力者だ。彼が傳く者は本物の『神の使徒』か身を捧げる主のみ。彼の部下もそれは承知で、だからこそ彼は教皇という座にまで上り詰めている。

だからこそその光景は異常だった。

何と言つてもその『使徒』は机に座り、ニヤニヤと嫌らしい笑みで教皇を見下ろしているのだから。

『神前決闘』かあ…ふふつ。かなり強引な手を打ったねえ、教皇サマ？」

「…仕方なからう。今更偽の証拠を出しても、それを掻き消す程の成果を奴が出してしまった。あのクソ餓鬼め…やってくれおるわ。しかし次で終わりではあるでしょうがな」

『神前決闘』は被疑者の判決を下すのに難ありとされた者達に【聖教教会】が執り行う、最終判決手段である。

そして行われるのは、教会が有する広大な跡地での三対三の決闘。同時に勝者が敗者への絶対命令権を獲得する、非情な闘いでもある。

ここで一つ、重要な事実がある。それは【聖教教会】側は歴史上、一度も敗北した事が無い。ある時は神殿騎士、ある時は王宮魔法師、そしてある時は教皇自身が。圧倒的な戦力を持って、被疑者側を斬り捨てる。

そして今回もまた、面子は揃えた。同時にあつらえ向きだと、イシユタルは口端のシワを歪める。

ハジメ側がどう言つた戦力を整えて来るかは分からない。何せハジメには広い人脈がある。神殿騎士や【王国の剣】、【聖女】…それ等が出て来るならば、イシユタルもこの様な余裕を保つのは難しい。

だがハジメは聡明だ。だからこそ、その者達を手札として切る事は出来ない。イシユタルは確信していた。そして『神前決闘』のとあるルールがある以上、万が一にもハジメ側に勝ち目は無い。

もつとも『神前決闘』はかなり強引な手だ。神の名の下、行われる戦いとは言え、民衆への完全な納得はこの手では難しい。だからこそ、イシユタルは苛立ちを隠さずにいた。

すると目の前の『使徒』が嘯く。

「はあ……だーからボクはとつと偽証拠を出して死刑にしちゃえつて言つたんだよ？ 余裕ぶつて『足掻くのを楽しみましようぞ』なんて言つてるからこんな事になったのにさ？」

「っ——！ だがあの状況では誰もこんな事をしでかすなど思いも——」

イシユタルは反論しようとした。南雲ハジメの行動が埒外なのだと、文句を言おうとした。目の前の『使徒』が気に入らない故の反骨心も含め、怒鳴り散らそうとした。

しかし出来なかつた。普段苛立つまでの嘲笑を浮かべる『使徒』が、能面の様な無表情を見せていたから。

言わずとも分かつた。彼の『使徒』は、繕うのを止めるほどにキレていた。

「：ボクは予想してたよ、南雲くんはやらかすつて」

「なっ」

「当然でしょ？」

その表情はたった数秒。しかし繕い直した笑みも、酷く歪んで見えた。

目の奥が、まるで笑っていなかったから。

「アレは厄介だよ。君達が思つてるよりもずっと、ずうつと。君達は『神前決闘』でカタが付くつて思つてるみたいだけど、ね？ ボクもソレなら良いんだけど。……まあ良いよ、精々注意してよね。ボクが尻拭いせずに済むように。何たって——」

——酷くて残酷な、カミサマのお願いなんだからさ？

そう言つて漸く、『使徒』は心地良さそうに笑い、踵を返した。

ソレが帰つてただ一人、イシユタルは偽りの上座に座り込むだけ

だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

死は恐ろしい。

それは死に至る本人は当然だが、見る者もまたそれに恐怖する。

ましてや、自分達がソレに行き着くまで加担している事に気付いたならば、夢から醒めるのも当然の帰結であった。

「な、なあ。大介……流石に冗談だよな？ アレに参加するって……」

「……当たり前だろ？」

「だ、だよな。そうだよな、流石に——」

小悪党組の一人である近藤礼一もまた、その恐怖により目を醒ました者の一人であった。

近藤はハジメを妬んでいるのには変わりない。正直、今でなお見つければ虐めるだろうぐらいには嫌いだ。だからこそ、今日この日まで彼はハジメに処罰を下す事を、冤罪を着せる事に賛成していた。

グループ間の仲間意識とでも言うか。友人が罰を喰らうなら、ハジメに罪を着せる方が全然良い、と判断した点もある。

だが急に湧いて出たハジメの終身刑と言う話。それが近藤の頭を急に冷やした。自身がやらかした事が人の死に繋がっているのだと気が付き、怖気ついたので。

かと言って、今迄の事を「全部嘘だ」と言う度胸も無く。彼に出来る事は精々、「最後まで俺は死刑に加担してない」と誇示する事だけであつた。

実際、ハジメが犯人だと肯定していた者達は多くが近藤と同じ対応を取つた。他者を死まで陥れるチキンレースにビビり、そこで佇む事しか出来なかつた。

ただ言うならば、それはまだ感覚が常識的な者達だけの話。人並みの罪悪感を持っている者達の対応だ。

「——参加するに決まってるだろ、礼一」

「……え？」

——だからこそ、それでも尚ハジメを死刑に陥れようとする者達は、明らかな異常者だ。

脳が理解を拒む近藤。だが友人の状態にすら眼中に無い檜山。

檜山は嗤う。この時を待っていたと、濁った目を見開いて舌舐めずりをする。その顔に、人の命を奪う事への恐怖は1ミリも感じられなかった。

まだ狂気に吞まれていない近藤には、それがまるで理解出来ない。喜色を滲ませる檜山に、ただ震えた。

「だって勝てば南雲が死ぬんだぜ？ あの邪魔な野郎が、コロつとよ。何なら教皇サマ曰く、俺が『決闘』で殺しちゃっても良いらしい。やー、話が分かるぜ。あの爺さんはよお」

「で、でもお前!?! それって人を殺す事に——」

「…ハハッ！ 何言ってるんだ、礼一？ 変な事言うな、お前」

此処で気付く。人の死を極上の蜜かの様に渴望し、飢える。最早それは人のして良い表情では無い。

「——アイツが死ぬ。だったら良いじゃねーか？」

「」

——ソレは悪鬼の、形相であった。

人では無い何かに、近藤が話し掛ける事は最早出来ない。

矮小で、中途半端で、弱い。『神の使徒』などでは無い。只人の彼では、何も。

「ヒヒツ…待ってるよ南雲。テメエを終わらせるのは、俺だ」

——『神前決闘』教会側、檜山大介

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…どういうつもりなんだよ、鈴」

王城の渡り廊下。外の景色が一望できるその場所で、坂上龍太郎は友人である彼女に尋ねる。

「あはは…それじゃ何の話か分からないよ、龍太郎くん？」

するとちんまりんとした彼女は、いつもの様なだらしの無い笑みを浮かべて答える。それが龍太郎にとっては何となくはまるで気に入らない。龍太郎は喉奥まで出掛かった言葉を何とか飲み込み、代わりの言葉を吐

き捨てる。

「…嘘つけ、分かんたら」

「…うん、そうだね。分かっている。『神前決闘』の話でしょ?」

「ほら見ろ、分かっているじゃねーか」

「だって皆んなからずつと、その話されるからさ。流石に察しちゃうよ、鈴も」

「…そうかよ」

——やめろ、やめてくれ

龍太郎は内心懇願する。

変わらない明るさ。それが只々気持ちが悪い。

気兼ね無い距離感が何処か異物地味ている。

だがそれでも龍太郎は足を踏み締める。好きな相手を止める為、逃げ出す訳には行かなかった。

「…なあ、教えてくれ。何で出るんだよ? 何でお前が、やるんだよ?」

「…どうしたの、龍太郎くん? 顔怖いよ? もしかして鈴に興奮したの? まあ、鈴のパーフェクトボディに見惚れても仕方ないけどね!」

「冗談に付き合ってる暇ねーよ、答えてくれ」

「ちよつと待って龍太郎くん。ちよつと鈴泣いて良い?」

「……………」

「むう、分かったよ。でもそんな大した理由じゃ無いよ?」

「ツ——! ……そうかよ」

大した理由では無いという点に引つ掛かりはあった。しかし龍太郎は聞かねばならないとその続きを聞いた。

…聞いてしまった。

「恵里にお願いされたからだよ」

「……は?」

龍太郎は耳を疑った。

目の前の景色と聞こえた声色は変わらない。どちらも朗らかな雰  
囲気を持っている。

ただ言葉だけがあまりに軽く、歪さを感じさせた。  
口を開閉する龍太郎に、鈴が続ける。

「恵里がね、南雲くんの処罰が決まった時にお願いで来たんだ。力  
を貸して欲しいって。恵里は三対三の戦闘形式に向かないけど、鈴な  
ら光輝くん達をサポート出来るって。親友にそう言われたら仕方な  
いし…ね？」

掃除当番の代わりを任された様に、宿題を写すのを頼まれた様に。  
なんて事もない様に、鈴はそう言う。その理由はこれからやる事に対  
して、あまりにも軽過ぎた。

血の気が引ける。同時に龍太郎の中で、ある言葉が反芻される。

龍太郎が普段と様子が違う事に気が付いたのだろう。鈴は龍太郎  
の顔を覗く。いつもと変わりなく、当たり前前の様に。

「どうしたの、龍太郎くん？ 顔真っ青だよ？ 気分悪い？」

「……………なよ」

「？ なんて——」

——限界だった

「——ウツ!? りゅ、龍太郎くん？」

気が付けば龍太郎は鈴の襟元をひっ捕らえていた。龍太郎は近接  
系の戦闘職、そしてその中でも高レベルの男。後衛の鈴を捕まえるの  
は容易かった。

急に襟元を掴まれ、鈴は苦しそうに顔を歪める。だがそれでもな  
お、口端は笑顔を作ろうと上がっている。

何故そうもして笑顔を止めようとするのか、龍太郎には分からな  
い。しかしそれでも、言わねばならないと鈴を引き寄せて叫ぶ。

「——ふざけんなよ！」

頭の中で残響していた言葉。それが遂に口から出た。

だがもう龍太郎は止まらない。口から言葉が洪水を起こした様に  
溢れ出て、龍太郎の意思では制御すら儘ならない。

「何で、何でお前がやるんだよ!? それならお前がやらなくて良いだ

る!? お前…今から南雲を殺すんだぞ!? 自分が何やってんのか、本気で分かってんのか!？」

「……………」

龍太郎は願う、どうかこれで止まってくれと。

まだ現状が正確に理解できて居ないだけで、深く考えず頷いてしまっただけなのだと、信じたかったから、

「何でだよ…お前はもつと普通の筈だろ? 少なくとも人が死ぬのを『大した事ない』なんて言える奴じゃねー筈だ! そうだろ…そうだよな!？」

だから矢継ぎ早に龍太郎は言葉を紡ぐ。鈴の答えを、聞きたくなかったから。

理解している。理解してしまった。

龍太郎は馬鹿だが、愚鈍では無い。情報を下に、状況を理解するのは苦手だ。しかし野生の勘とでも言うべきか、何となくでの冴えは持っているのだ。

だから分かるのだ。もう目の前の鈴は、かつての彼女で無い事に。そしてその答えが残酷にも、本人の口から紡がれる。

「——うん、分かってるよ。でも鈴は恵里の味方じゃなきゃダメなんだ」

「ツツ——何でっ!？」

「簡単だよ。だって——」

帰り道は覚えて居ない。

あの後、何を自分はしたのかも、ちゃんと食事を取ったのかも覚えて居ない。

今の自分はただベッドに寝そべり、怠惰に過ごしている。普段ならば暇など耐えきれず、筋トレでもすると言うのにそんな気分にはならない。

手の甲で両目を押さえると、視界から光は絶える。真っ暗な世界の

中で、龍太郎はポツリと呟く。

「…儘ならねえなあ」

親友も、想い人も。何故ああなったのかも分からない。ああなつて欲しくなかった。

何もかもが滅茶苦茶で、嫌が応でも回らされた思考が過負荷を訴える。

そうして龍太郎の意識は闇に溶けていく。

すると意識の絶える直前に、鈴の最後の言葉が聞こえた気がした。

『鈴は親友の、恵里の事を信じてるから』

「……………バカ野郎」

頬に何かが、伝った気がした。

——『神前決闘』教会側、谷口鈴

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「光輝、馬鹿な真似はやめなさい」

「? どうしたんだ、雫? 一体何を——」

「アンタがやろうとしているのは、人殺しと同じよ? 南雲君を殺そう

としている…それを分かってるの?」

「…ああ、そう言う事か」

訓練場、そこで素振りをする光輝。そしてその後ろから雫が話し掛ける。

雫の苛立ちは目に見えて凄まじい物だった。普段ならば鈍感を貫く光輝でも気がつく程に、雫は目を尖らせている。

光輝はそれに何事かと目を丸めるが、やがて雫が話す内容で得心したのか、何度か頷いた。

「分かってくれ、雫。これはみんなの為なんだ」

「何がよ? 何処が?」

「南雲は…結局一度も謝る事が無かった。あれ程の事をしたにも関わらず、だ。半年も待ったが…残念だ。きつとあいつはまた同じ事をする。…いや、もしかすればもっと酷い事をしてしまうかも知れない



な。そうならない様、予め防ぐ必要がある。だから俺は南雲と戦う。戦つて、アイツを今度こそ正さねばならないんだ」

「…はあ、結局そうなのね」

雫はここで額を押さえた。

光輝の思い込みの激しさは元々強かった。額面だけの正義感と自己肯定によるそれは、表面上はカリスマとして活躍した。しかしその反面、光輝は自己を中心とした世界でしか物事を見れなくなつて居た。

それは雫もよく理解している。それを治させようとした事も多々とあつたが、光輝は聞く耳を持つ事がない。結果、今日日までこの悪癖は残り続けた。

いや、むしろ悪化を見せている。原因は分かっている。ハジメだ。何が光輝にそうさせたのかまでは分からない。しかし光輝の目の前にハジメが現れてから、この悪癖は肥大していった。

その結果、ハジメの事を完全に敵視する様になつてしまった。恐らくどうこう言つても、光輝は意見を変える事は無いのだろう。

そうとは分かりつつも、雫はハジメの擁護を続ける。

「だから南雲君はそんな事してないわよ。彼にそんな事する暇が何処にあつたのよ？」

「南雲は訓練をまともにして居なかつただろう。その時間に幾らでも出来る筈だ」

「彼はその時間を使って『錬成』の練習をしていたって何度言えば良いのよ？ —— 本題に戻るわよ。南雲君はこの半年、色んな事をしてわ。【錬成師】として人々の生活を豊かにして、暴漢からリイを守つて、【ウル】の町で魔族討伐の一役を買つて…しかも前代未聞の発表を成し遂げた。ただただ迷宮を探索して、強くなつただけの私達よりも遥かに世間に貢献してるわ。それを評価する事はできないの？」

「それ等どうこうよりも、アイツの態度の事を言ってるんだ」

光輝はどうやら、今迄のハジメの功績さえも認める気が無いらしい。ただただ、『態度が駄目』と言う事の一点張りをするばかり。ぬかに釘とは正しくこう言つた状態なのだろう。手応えがまるで感じら

れなかった。

雫はそれが気に入らなかった。

少しだけだが知っている。側から見ても長く険しい、ハジメの軌跡を。

泥まみれでメルドと剣を交え続けた時の眼光も。

深夜、人々が寝静まった時間になっても消えなかったハジメの部屋の灯りも。

図書館で本の山に埋もれて眠っていた時の後ろ姿も。

リリイとのマナーレッスンで教えられた事を愚直に何度も反芻していた事も。

それら全てを『それ等どうこう』と言われるのは、嫌だった。自分の事を言われた様に、それ以上に腹が立った。

だから雫の返した言葉が幼稚な返事になってしまったのも、それが起因しての事だろう。

「…逆に南雲君が態度を改めれば良いの？」

「ああ、そうだ。だがアイツはきつと悔い改める事は無いだろう。きつと表面上の反省だけして、俺達を騙してくる。これだけ待って何も言って来なかったんだ。今更アイツを信頼なんて出来ない。だから全てこの『決闘』で決着を付ける。…安心してくれ、雫。雫は優しいから、あんな奴でも傷付くのは嫌なんだろう？俺だってそうだ。『決闘』には勝者に絶対命令権が与えられる。それで南雲に幾つもの制限を付ければ何の問題も無い。俺達も昔の様に進んで行ける。そうだろう？」

そんな訳は無いと言おうとして、雫は漸く、今頃になって気が付く。光輝の言葉は期待を込めての言葉だと思っていた。そう投げ掛けたのだと、勝手に雫はそう思っていた。

だが違う。光輝の目は雫を捉えていない。目が合っている筈なのに、光輝は別の何処かを見ている。

そして光輝の言葉は決して問い掛けでは無い。言わば独り言に近い物なのだと、此処になって理解した。

だからそれを確かめる為に、雫はある質問をする。

「ねえ、光輝。聞きたい事があるの」

「？ ああ、俺で良ければ答えるよ」

「南雲君の長所、何か言えるかしら？」

「無いに決まってるだろ？ あんな奴に」

「…そう。じゃあもう一つよ」

これは思った通りだった。そしてこれは今迄の雫でも想定出来る  
答えだった。

問題は、次だ。

「光輝、私の短所って何かしら？」

「…いきなり何を言い出すんだ、雫？」

「良いから答えて頂戴」

「あ、ああ。分かった」

そして光輝は迷う事も無く、きつぱりと断言した。

「そりゃあ、無いに決まってるじゃないか」

雫はこの言葉を聞いて絶望し、理解した。

光輝が自分が思っていたよりも遥か深くまで、己の世界に沈んでい  
る事を。

「…本当に？」

「ああ、本当だ。…改めて言うのは照れ臭いけどね」

「香織も？」

「勿論だ」

「龍太郎も？」

「ああ………いや、勉強の方は。ちょっと、な」

「ええ、そう。分かったわ」

「分かってくれたか。俺が皆んなの事を想っているって」  
冗談であって欲しいと、願っていた。

性格に難があるとはいえ、光輝は古くからの友人だった。だからこ  
そ期待して何度も確認した。しかし光輝の答えは変わら無い。自分  
達には短所が無いと、本気で答えている。

そんな訳が無い。雫は自分が面倒くさい性格だとよく理解している。探せば幾らでも短所はある筈だ。

それに親友である香織にも短所が無いなど想った事は無い。すぐ突撃するし、ストーリーカー紛いの事もするし、視野が狭い事も多々ある。最近はマシになって来ているが、それでもだ。

そう、他人に関心があるならば、どんな聖人君主だろうと他者の短所など容易に見つけられる。だと言うのに光輝がそれを皆無と答えたのは、あまりに可笑しい。

さつきからの発言や、昔からの光輝の言動を思い返し、雫は光輝の正体に辿り着く。

——主人公は他者に『役』を強要している

ハジメには『悪役』を、香織や雫には『ヒロイン』を。龍太郎には『相棒役』と言った所だろうか。そう言った風に、他人をその尺度でしか図る事が出来ないのだろう。

「？ もう良いか。なら訓練に戻らせて貰うよ。南雲に勝たなくちや行けないからな」

「…ええ、もう良いわ。ありがとう」

もう、光輝に何を言えいいのか分からなかった。というよりも話したく無かった。自分が友情だと思っていた物が光輝にとっては、もつと我欲で塗れた何かだったと気付いてしまったから。

背を向け合う二人から伸びる影は長く、薄く伸びている。

その影は何処までも水平で、交わる先を見つける事など最早出来なかった。

——『神前決闘』教会側、天之河光輝

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「さてさて。教皇サマにはああ言ったけど、きつとまだまだ油断してるんだろうなあ。二度ある事は三度ある、なーんて言うのにね。ほんと馬鹿なおじさんだよ、あの人は」

日光の差し込む余地さえ無い暗く、狭い部屋。封印石の檻が配置されているその部屋は正しく座敷牢。イシユタルと数分前に話していた『使徒』は、その檻の中にいる者へと話し掛ける様に呟く。

檻の中のソレは応えない。代わりにガリガリと、掌で鉞石造りの床を削っている。

「だからね、そーなっちゃったら君を使うつもりだよ。フフツ、楽しみだよ、きつと。外へのお散歩、久しぶりだしね」

ソレは反応を示さない。歯軋りを鳴らし、今も掛かり続ける負荷に目を常に見開いている。

そんな風にソレの動きが一边倒な事もあってか、その『使徒』はつまらなそうに唇を尖らせた。適当に魔法を発動させながら、独り言を呟き続ける。

「ま、こんな事話しても聞こえないよね。あーあ、キミもそろそろ檜山君とかお爺さんみたいに面白おかしい反応してくれたら良いんだけどなー、話し掛けがいつて物が無いよ、全く…まっ、別にいつか」

パツと『使徒』の表情は切り替わる。退屈ですと言わんばかりの顔から、すぐに嗜虐的で怖気の立つ様な笑みへと。

檻の先のソレが、瞬間動きを止める。身に染みた恐怖が、下手な動きをするなどその身体を縛ったのだ。小刻みにふるふると震えてしまっている。

反して『使徒』は立ち上がり、上機嫌になって回る。くるくるくるくと、妖精と戯れるかの様に足を運ぶ。それは艶やかで、幻想的で、それでいて狂気を含んでいた。

笑う、嗤う、破顔う。

どう転ぼうと構わない。その『使徒』にとっては好都合。あまりに出来上がった勝ちレース。鼻歌混じりにその始まりを待つ。

「さあ。全力で楽しもうか、このお祭りを」

その笑顔は、彼岸花を彷彿とさせた。

25、 Sixty—Five

——苦しい

まるで水の中、溺れているかのような息苦しさだ。

水面から差す光に手を伸ばそうとするも、届かない。水流が、何度もそれを阻む。そんな思いだ。

どうすれば僕は認められる？

どうすれば僕はこの苦しきから解放される？

どうすれば僕は、僕は…

どうすれば…僕は、君に届く？

分からなくて、暗くて…

此処は…どうしようも無く、暗いんだ。

「——あ」

そして今日も目を覚ます。

いつもの夢だ。水中で溺れて沈んで行く、そんな悪夢。

幾度見てもなお、目覚めは最悪だ。発汗が止まらないし、服を湿って気持ちが悪い。しかも寝ている間に無呼吸にでもなっていたのか、息苦しさが今も残っている。

【聖教教会】がああ判決を残してからと言うものの、こんな夢ばかりを見る。精神こころが休まる気が全くしない。

——勝てるのか？

不安が、絶え間なく押し寄せて来る。

負ければ死、後は無い。

それに他人に頼る訳にも行かない。

だからこそハジメは寝台から降りて、“錬成”の魔法陣が刻まれた手袋とナイフを手に外に出る。

「…行かなきゃ」

そしてそのまま、ハジメは【ホルアド】の宿から飛び出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「まったく…教会め。やってくれる」

【ハイリヒ王国】騎士団長、メルドⅡロギンス、彼は現在自身に割り当てられた部屋にて、頭を抱えていた。

と言うのも教会が発表した『神前決闘』の事だ。開催まで残り一週間と少しとなったが、正直に言っただけ事態は全く芳しく無い。むしろ最悪と言えた。

ハジメの発表は見事の一言に尽きた。正しく世界を一変させ得る研究であり、功績とされるには十二分の内容だった。

しかしそれをひっくり返し得るほどに、神の意志という物は重い。当然それだけの理由で死刑に持ち込む事は不可能。しかし教会側の目的は『神前決闘』だったのだろう。そこに持ち込まれた時点で、教会側にとっては値千金だった。

メルドは改めて『神前決闘』のルールが書かれた紙を見返す。

|||||

### 【『神前決闘』の規則事項】

一つ、試合は三対三の団体戦で行われる。戦場には教会が保有する広大な跡地を用いる。

一つ、被疑者陣営は本人を含めた三人で構成される。この決定権は被疑者本人に存在する。また教会陣営の構成は【教皇】が決定権を持ち、三人のチームを構成する。

一つ、審判は教会の人員と王城の人員を用いる。審判は教会から与えられるアーティファクトを用いて、注意深く選手の行為を確認しなければならぬ。

一つ、武器や服装、魔法陣の持ち込みは自由とする。ただし予め申告が必要となる。申告外の武器を持ち込んだ場合、その選手に「注意判定」（敵陣営に一点）を与える。また選手は陣営ごとに統一された腕章を付けねばならない。これに違反した場合も、その選手に「注意判

定』を与える。なお武器・装備・魔法陣の情報に関しては敵陣営へ予め公開される。

一つ、『神前決闘』は神聖な戦いである。故に妨害はあってはならない。これを防ぐ為、戦場は外部からの物理的な攻撃を防ぐ結界と結界内の魔力感知装置の二種のアーツィファクトを設置している。魔力感知装置は選手の血を取り、選手登録を行う。そして魔力感知装置は登録外の魔力を感知した際に警報ブザーを鳴らす。そして直ちにどちらの陣営による物かの特定を行い、違反陣営側に「反則負け」の判定を与える。

一つ、『神前決闘』では陣営ごとに【将】一名を決めねばならない。ただし被疑者陣営は被疑者本人を【将】とする義務が存在する。なお教会陣営はこの選択は自由とする。

一つ、『神前決闘』では『撃破』と言う判定が存在する。『撃破』は「地面に十秒間腹もしくは背をつく」、「結界外への逃走」、「降参行為」の三種の内一つを相手選手が行った場合に判定される。『撃破』では一つごとに味方陣営へ二点が与えられる。

一つ、『神前決闘』の勝利条件は【将】の『撃破』、「反則負け」、「判定勝ち」の三種に分類される。

・【将】の『撃破』：これが達成された時点で『神前決闘』は終了する。そして【将】が残った側の陣営が勝利となる。

・反則負け：この判定が行われた時点で『神前決闘』は終了する。そして判定を受けた陣営の敗北となる。

・判定勝ち：各陣営に与えられた点数によって判定を行い、点数が高い陣営が勝利となる。

この三種のどれにも当てはまらない場合、【教皇】の判定により勝敗は決定される。

一つ、被疑者は必ず一度戦闘行為を行い、『撃破』を為さねばならない。これに違反した場合、被疑者陣営に「反則負け」の判定を与える。

一つ、被疑者以外への殺害行為は禁止されている。これに違反した場合、「反則負け」の判定を与える。ただし被疑者の死亡に関しては『撃破』として判定される。





困も質も異なるのだ。

ただこれだけ教会にとって有利なルール。見れば見るほど頭が痛くなる様な内容だが、これには一応理由がある。

——教会の決定は神の決定。それに異を唱えるならば、それ相応の証を示せ

そうして作られたのが『神前決闘』だ。その様なルールである為『神前決闘』は被疑者に対し、不利になる様に作られている。これは『神前決闘』が一般的な決闘としてでは無く、被疑者への『試練』だとされているのだ。

だからこそその理不尽。だからこそその絶対有利。それこそが教会の言い分だ。

地球視点で見れば理不尽以外の何者でも無いが、此処はトータス。そして神エヒトの影響はそれ程に大きい。ハジメが負けたならば、その結果にトータスの住民は渋々でも全員納得してしまうだろう。

加えて協会側は万全だ。選手も決まり、各々がその日に備えている。土気も上々。今こそ神敵を打ち滅ぼすのだと、血気盛んだ。正直に言つて、【錬成師】相手には過剰とも言うべき戦力だ。

負ければハジメに明日は無い。

全く厄介な事になったものだともメルドは思う。そう思うのも仕方がないほど、ハジメの現状は詰んでいた。

だがそれ以上に最悪なのは、現在のハジメの状態だ。

今のハジメは冷静を失っている。完全に精神が追い詰められてしまっている。

最初はいつもの様に努力癖なのだと思っていた。実際ハジメはそうして研鑽を重ねる事で、幾度成長し続けて来た。だから初期の方は何も言わず、見守っていた。

しかし二日三日も経てば分かった。それは最早訓練などでは無く、自暴自棄なのだ。

食事は最低限で済ませ、怪我をしようとお構い無し。休息も頑なに取ろうとせず、終いには睡眠時間をほぼほぼ零にしてしまう始末だ。

『勝たなきゃ…絶対に、勝たないと…』

そう言つて闇雲にナイフを振り回す姿はとてもだが、見ていられなかった。

当然周囲は止めようとした。優花や幸利、メルド、リリアーナ、ヘリーナ、愛子、チェイス、雫……その他にも多くの者が、ハジメを止めようとして——その前に消えてしまった。

住んでいた者が居なくなり、すっかり生活感が無くなってしまったハジメの部屋。その中央に置かれていた手紙を、メルドは改めて思い返す。

その内容は普段の礼儀正しいハジメにしては、あまりに短い物だった。

『必ず強くなって帰ってきます。待っていてください』

恐らくメルドは、ハジメに期待し過ぎていたのだろう。

ハジメは今迄、幾つもの困難を切り抜けて来た。並外れた精神力と人々を惹きつけて止まない在り方で、今後も進み続けるのだと。

だが違った。此処まで来て、漸く気付かされた。

ハジメはまだ高校生だ。どれほど精神力が並外れて居ようと、凄まじい覚悟が有ろうとも。ただの、一人の少年だ。

ハジメはこの半年間努力し続けた。嵐の砂漠を歩むかのような、そんな先の見えない時間だった筈だ。努力の先に本当に奇跡があるのかも分からない道を、それでも尚ハジメは歩み続けた。

そうして勝ち取った栄光を、教会は文字通り一言で掻き消した。

やるせなかつた筈だ。地道に努力を続けた末の結晶、それでさえも不意にされたのだから。

そしてこの様な事がまだ続く可能性もある。『神前決闘』に再戦の前提がある以上、また努力が水の泡になり得るのだ。ハジメが自棄になつてしまうのも無理は無かつた。

同時に『神前決闘』はハジメのみが罰の対象では無い。協力した二人、彼等にも負けければ罰が下される事となる。

『一つ、『神前決闘』の勝者は敗者、および教会に強制命令権を持つ。これは神の名の下、必ず執行されなければならない。』

恐らくはこれが、ハジメにとって一番の圧力プレッシャーだったのだろう。

ハジメはかなり自己中心的な人間だ。そして自己中心的に大切な人を命懸けで守る、そう言った人間だ。「オルクス大迷宮」や「ウル」で的一幕こそが、その代表的な例だ。そう言った際のハジメはとことん自身に無頓着となる。

だが今回は、ハジメ自身が仲間の二人を危険に晒さねばならない。しかも負けたならば、その時点で仲間二人の人権は失われる。強制命令権とは、トータスにおいてそれ程の効力を発揮するのだ。

そしてそうした失意や責任感、そして産まれた焦燥がハジメの背中を押してしまった。

ハジメは真面目過ぎたのだ。積もり積もった不安や苛立ちを、他者にぶつける事が出来なかった。友人や知人のみならず、彼にとつて諸悪の権化である教会にさえも殆ど。それ等を自身を進む為の着火剤として用いてしまった。

結果、ハジメが孤独一人になってしまった。

「…小僧が来てからと言うものの、俺自身がどんどん情けなく思えてくるな」

メルドは頬杖に体重を任せて項垂れる。そして誰も居ない部屋で一人つぶやく。

すると廊下からドタドタと、凄まじい足音が聞こえて来た。真剣に悩んでいたメルドだが、人が来たとなればその様な無様を見せる訳には行かない。日頃はそんな風に気を配る真似はしないのだが、ハジメへの罪悪感による物か。この時ばかりは豪放磊落な自分を見失っていた。

頬杖を解いて、開くであろう扉を見詰める。そして間も無くその扉は開かれ――

「メルド団長!!」

「……………雫?」

――現れたのが想定外の人間で、思わず目を丸くした。

雫はいつも冷静だ。たとえそれが努めて作られた物だとしても、それを彼女が崩す事はまず少ない。だからこそ、彼女の動揺は明らかに見て取れた。

「何があった？ お前がそれほど慌てるのは余程なのだろう？」

「はい！ じ、実は——」

そして雫が告げた爆弾発言に、メルドは目を丸くし……ますます頭を抱える結果となる。面目無く雫が見つめる前で、「何故、何故こんな事に!?!」とつい叫んでしまう程だ。

しかしメルドの口元、それは確かに釣り上がっていて……

窓の外、空を覆う曇天から一筋の光が差し込んでいた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ああああああああ!!!」

『グギイツ!?!』

魔物の喉に刺突したナイフを捻る。ブチブチと血管を切る音が、耳のみならずナイフからも伝わって来た。

苦し紛れか、魔物は爪を大振りで振るう。それを避ける余裕はない。魔物の鋭い切先が腕に赤い線を刻みつけた。

だがそれが限界だったのだろう。生命活動を維持できなくなった魔物は、すぐに崩れ落ちる。血の海を作り、素材となる身体を大迷宮の床に投げ捨てた。

「……」

ハジメは、それに見向きもしない。絶命したのを確認すると、ひび割れたナイフを片手に再び標的を探す。

何時間、いや何日この様な事を続けたのか、もう憶えていない。そもそも最後の休憩も覚えていない。懐に詰められた魔力回復のポーションを一口飲み、虚にハジメは前へ前へと進んでいた。

血塗れの外見に反し、自然魔力の幻想的な輝きが彼を包む。それはハジメの手の甲、“錬成”の魔法陣の円環に従って流れを作っている。

—— “魔錬・武装”

【錬成師】という天職の適性により、体内魔力の操作を今まで行っていたハジメ。ただそれでは循環を促す事は出来ても、加速はあまり出来なかった。

しかし “魔錬・武装” は、その循環を加速させて身体能力の更なる

強化を行う。それに加えて体外から自然魔力を取り入れ、擬似的にステータスを高めるのだ。これによる恩恵は破格で、苦戦する筈の迷宮の魔物も瞬殺して見せるほどだ。

当然デメリットはある。本来ならば時間を掛けて体内魔力へと変換する自然魔力、それを体内に取り込んでいるのだ。身体に掛かる負荷は尋常では無い。

加えて「魔錬・武装」は魔力の流れを強引に速め、操作している。その循環を誤れば、身体に軽く無い傷を負う。実際、ハジメの左腕や右目周辺、脇腹は火傷したかの様に爛れている。操作を誤った事による魔力暴走が原因だ。

他にも魔力暴走により、鈍痛が全身を蝕んでいる。視界は色弱によりモノクロで、獲物を持たない左腕は痺れた様に感覚が無い。呼吸をすると空気が熱く、煮湯を飲まされた気分だった。平衡感覚など最早無く、揺れる世界を慎重に歩く。

たかが数回の失敗、それだけでこの有様だ。単なる「身体強化」では有り得ない自傷が幾重にも、様々な形で刻まれて行く。

これだけの傷を負いながら、ハジメは止まらない。むしろ——  
「シッ！ フッ！ ラアアッ!!」

——ハジメは加速していた。

数々の傷、狭まれていく感覚、凶暴さを増す魔物の群れ。時間が経つ程にあの世へと近付いて行く。

だがハジメはその度に打開策を生み出そうとする。動きが鈍いならば、より最低限の動きへと。平衡感覚が意味を持たないならば、本能を頼りにして。魔物が増えたならば、より強力な一撃を。

ハジメは己を洗練化し続けた。何か欠ける度、ハジメは進化した。

——止まるな、進め

ひび割れた銀閃が加速する。

——逃げるな

蒼の輝きが激しさを増す。

——前へ！

掠れた咆哮が上がった。

命の灯火が揺らぎ、細くなりながらもハジメは止まらない。

強くならねばならないという意志が、踵を返す事をハジメに許さなかった。前進のみを肯定させた。

だから何度も繰り返し返した様に、ハジメは次の階層に進む階段を降りて――

「……………此処は」

――気が付けばハジメは其処にいた。

その場所を、ハジメは知っている。

忘れない、忘れる筈がない。

始まりの場所を。此処を。

石橋にて輝く円環を。

「――ッ！」

円環は二つ。ハジメの手前、そして奥に一つずつ。

手前の魔法陣からは溢れ出さんばかりの骸骨兵、トラウムソルジャーが出現する。瀕死の挑戦者に対する嘲笑だろうか。カタカタとその頭蓋を揺らしている。

そして……奥。魔法陣の輝きがその巨体を照らす。大木のように頑丈な四肢。鎧の様に黒光りする堅牢な体皮。そして灼熱を孕む雄大な角。

あらゆる物を射殺す眼光を、忘れはしない。

「……………ベヒモスッ」

『……グルオ』

堂々と魔法陣から姿を現したベヒモスは、挑戦者たるハジメを睥睨する。ハジメは視線を合わせる様、睨み返す。

正直に言つてこの戦いは無謀だ。顔に死相が映る程の傷、決定力の圧倒的不足、そして単独<sup>ソロ</sup>。

勝てるはずが無い。それが分からないハジメでは無い。状況は絶望的。死が前提となるこの場所で、ハジメは冷静になる筈だった。

――勝て

しかし……ハジメは止まれなかった。

果たしてそれは使命感故か矜持故か。はたまた単純な思考放棄か。いずれであるかは誰にも分からない。

ただ事実の一つ。ハジメは死闘を選んだ。

呪われたかのように歩みを止めないハジメに、トラウムソルジャー達が蠢く。内一体がガチャガチャと腕を掲げ、獲物を振り下ろした。

ハジメは最早視界がかなり不自由な状態となっている。モノクロの景色は人と背景すらも曖昧にし、己を斬ろうとする剣でさえもまともにも視認出来ない。

「——ッ！」

にも関わらず、ハジメは紙一重で避けて見せた。

『魔錬・水音』、自己の周囲に魔力を広げ、それにより周囲の状態を知覚するという離れ業。五感が失われ、それでも尚戦い続けたが故に獲得した一つの技術だ。

半径1メートル、それが現在ハジメが遠近感覚まで把握出来る領域。その外まで行けば、単純に「遠い」という事しか判断出来なくなる。

だが十分。ハジメはそう断じる。その証明に、一体目のトラウムソルジャーの魔石をナイフで砕き、仕留めてみせた。

半年前からの成長を僅かに感じつつも、己に放たれた横薙ぎを知覚。それをしやがむ事で回避。

そして再びナイフを振おうとして——

「……………え？」

——ハジメの脚は、そこで止まった。

ガクリツと脳の命令に反し、膝をつく己の体。

限界が、訪れていた。

無理は無い。何せ寝ず食わずの上に精神的な安らぎも無く、己の体を酷使し続けたのだ。「戦わねばならない」という使命感はハジメに一種の興奮作用を及ぼし、精神に疲労を感じさせる事は無かった。

だが当然、体はそうも行かない。戦闘職であるならばまだしも、特殊な固有技能を持たない単なる非戦闘職では、この帰結は当然だった。



隙ありとばかりに押し寄せるトラウムソルジャー。剣が、斧が、戦鎚が迫る。

「ッ——!!」

折り曲げた右腕で自身を弾き、それ等の攻撃を何とか避ける。後方に下がり、ナイフを構えようとする、が…

(右腕が!?)

その代償はあまりにも重く、唯一まともに動いていた腕がだらりと垂れ下がった。その手からヒビの入ったナイフがこぼれた。『錬成』による形状維持により、ここまで壊れずに済んだナイフは…今になって非情にも砕けた。

ハジメの基本的な攻撃手段は物理だ。それが一番コストパフォーマンスが良く、かつ『錬成』や『魔錬』との連結がスピーディーに行えるからだ。

だが現状、四肢が動かず、武器さえも砕けた状態では物理攻撃などまず不可能。

トラウムソルジャー達は今のハジメが正に格好の餌に見えたのだろう。余裕を持たせて歩きながら、ハジメの元へと迫ってくる。

そして遂に獲物が届く距離にまで近づいた時、トラウムソルジャーの内一体はそれを聞いた。

「——来たれ、風よ」

瞬間ハジメの、トラウムソルジャー達の足元が蒼く光り輝いた。

そしてトラウムソルジャー達の思考を置き去りにして、ハジメは魔法の名を告げる。

「——『風爆』」

そして爆発的な風が、トラウムソルジャー達とハジメの間で吹き荒れた。トラウムソルジャーはそれなりに強い個体とは言え、骨のみで構成された魔物だ。膂力は確かとは言え、体の軽さはステータスで補完される事は無い。

結果、ハジメよりも明らかに大きくトラウムソルジャー。中には橋から吹き飛び、奈落の底へと落ちる個体も少なくは無かった。

ハジメ自身も風により吹き飛び、地面に引き摺られる事となったが

一時危機は脱した。そして先ほどと同様、地面に魔法陣を刻み込んで行く。

魔力暴走や疲労により、ハジメの手は動かない。しかし地面に接触している。故に「錬成」が橋に魔法陣を創り出していく。魔力量の節約の為、詠唱を告げて魔法の発動を準備する。

トラウムソルジャーは愚鈍ではあるが、馬鹿では無い。「風爆」を再度行ったとしても、剣を橋に突き刺すなりして距離を離そうとするのを防いでくるだろう。

ならばと、ハジメの頭にある現代魔法の中から最適な物を選び出す。

「――速き水流よ、数多を切り裂け！　「破断」！」

かつての「ウル」での戦い。そこで魔人族が使っていた魔法、それを今ここに再現する。

そして地面から放たれたウォーターカッターは、トラウムソルジャーの第一陣の魔石を砕いてみせた。

「破断」は初級魔法でありながら、コストパフォーマンスと殺傷性、更には捕捉人数の多さも尋常では無く強い。理由としては魔法発動地点から水を圧力で押し出すだけで、それ以外の干渉がほぼ無い為だ。その為、他の魔法と比べて効果的な距離が短くなる。

逆に言えば、中距離戦ではかなり重宝出来る技となる訳だ。魔法陣を足元に刻んだ事で、魔法の連発は魔力の限り可能。ハジメは「魔錬」により練った自然魔力を魔法陣に注ぎ、発動を繰り返す。

だが：

(数が、一向に減らない！)

トラウムソルジャーの脅威が、時間が経つに連れて明白となった。今も黒く蠢く魔法陣。そこからは新たな骸骨兵が這い出ている。

そしてつい先程も言ったが、トラウムソルジャーは馬鹿では無い。ハジメが繰り返す「破断」も、第一陣までしか殺せない事は把握したらしい。地球で言う所のフランクスの様に歩を揃え、ハジメに迫り始める。

トラウムソルジャーの際立つ特徴は、群れが勝利の為に犠牲を許容

すると言う点だ。迷宮の『挑戦者を排除する』という使命に従い、多  
を捨てて一を潰す事が常套手段として用いられる。生存本能を完全  
に無視した魔物、それがトラウムソルジャーだ。

このままの状況が続けて行けば負けるのはハジメだ。魔力はかな  
り少ない。持久戦はまず不可能。

ジリジリと、死が背中に迫っている。それが魂で感じられる。

此処を切り抜ける手段は一つ、中級魔法による範囲攻撃だ。トラウ  
ムソルジャーは一体一体の耐久はあまり無い。

だが問題は二つ。一つは魔法陣の大規模な書き換えが必要である  
事。もう一つは初級魔法に比べ、多量の自然魔力が必要となる点だ。  
どちらもこの極限状態ではまず難しいだろう。

ベヒモスは未だに動かない。トラウムソルジャーを切り抜けられな  
い者には、自身に挑む資格など無いと言わんばかりに不動を貫いてい  
る。

それは今は好都合。兎に角目の前のトラウムソルジャーの全滅を  
第一目標とする。選択する魔法は火属性中級魔法「螺旋」。渦巻く  
高火力の炎を放つ魔法だ。

そしてハジメはすぐに魔法陣の書き換えを開始する。

「暗き炎渦巻いて」

ハジメの魔力に合わせ、「破断」の魔法陣が形をみるみると変化さ  
せて行く。

「敵の尽く焼き払わん」

トラウムソルジャーに最早油断は無い。ハジメに隙があると見る  
やトドメを刺す為に、走り始める。

そしてその内の一体が、その剣を破竹の勢いで振り下ろした。

「——ッ！」

身じろぎにより、頭への一撃を躲すハジメ。代わりに右肩へとその  
一撃は落ちた。

深々とした傷が作られる。剣は右胸にまで達し、正しく致命の一  
撃。肺に血が混じったのか、吐き出す息に血が混じる。

「——灰となりてッ!! 大地へ帰れエッ！」

だがハジメはその口を止めない。『錬成』によりトラウムソルジャーの剣を根元であり、連撃を許さない。

同時に他のトラウムソルジャーも追い付き始める。数秒もすれば物言わぬ肉塊になるであろう、圧倒的な物量。それを前にハジメは――

「『螺旋』 ツー！」

――魔法陣を、完成させた。

そして地面から放たれるは炎の柱。今にも迫ろうとしていたトラウムソルジャー達を呑み、天井に至った。

ガガガツと天井を螺旋と爆炎が削り取って行く。それにより天井にヒビが入り、やがて崩壊する。

ガラガラと降り掛かる天井の残骸。

炎と瓦礫が視界を埋め尽くす中、ハジメは逃げる事も出来ず崩壊に巻き込まれようとした。

だがその螺旋の焰を、一体の骸骨兵が切り抜ける。確実にトドメを刺さんとひび割れた体を伸ばし、ハジメに刃を放った。ハジメにそれを避けるだけの余力は無い。中級魔法を放った事で、ハジメの体内魔力は零も同然だった。

(くそっ……)

心の中でボソリと悪態をついて、そして――

「てんしょう天照・あまのむらぐものまがたま天叢雲勾玉」

——眩い光の弾丸が、トラウムソルジャーを消滅させた。

「——ッ」

それはあの時と同じ光。

奈落に落ち掛けた己を救った、純白の光。

足掻いて、もがき続けて…それでもまだ見え無い彼女。

「ごめんね。遅くなっちゃったね、南雲くん」

彼女の周囲に漂う光の輪、それがハジメの真上で弾けると彼の傷の数々を癒して見せた。

瞬く間に魔力以外は全開に至ったハジメ。息苦しかった喉も、最早問題無い。

だからこそ、ハジメは彼女の名を口に出した。

「…白崎さん？」

「——うん！ 久しぶりだね、南雲くん！」

——叩き落とされた絶望の淵で、高嶺の花は再び咲き誇る

## 26、『原点』

——君を傷付けたく無い

そう思ったから、私は君から離れた。

すごく寂しくて、悲しかった。

けれど約束してくれた。いつか私の所まで来てくれるって。

だから待とうと思った。君を助ける力を育てながら、ずっとずっと。

でもね。もし君が傷付いてるなら。ボロボロになってまで進もうとするなら。

私は、もう一度約束を破るよ。

だって私は——

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

意識が浮上する。

気怠い理性が、起きる時間だと瞼を持ち上げた。

それでも心地良い覚醒だった。ここ最近は悪夢を見てばかりだったから。

何処か思考もクリアで、それでもまだやらなきゃいけない事を思い出して目を開けた。

開けて一番に見えた物は、薄暗い天井。そして不均一に点在する緑色の光だった。

ハジメはそれに良く見覚えがある。それは日光でも、照明でも無い。【オルクス大迷宮】にて見られる鉱石の一つ、緑光石だ。

そこでハジメは気絶する前に【オルクス大迷宮】で特訓していた事を思い出す。同時に特訓途中で気絶してしまった事実を理解した。

ただそれ以上の記憶が思い出せない。何処で気絶したのか、何があったのか、まるで記憶が白紙になった様に。

そこでハジメは状況を理解しようと体を動かそうとして…身じろぎしか出来なかった。どうやら相当身体が酷使された後の様で、ピクリとも動かない。

今回は何をやったんだっけか？ と過去の己にジト目を向けなが

ら、五感に意識を飛ばす。一部の感覚は身体と同様、ロクに使えなかったが、大部分は無事で事態を理解するには十分だった。

そして情報収集する五感の内、触覚がハジメに異変を訴えた。

場所は後頭部。そして違和感の内容は…ヤケに温もりがあるとの事。

「……………うん？」

続いて嗅覚。訳が分からんが、花の様な香りがすると言う。

更に聴覚。誰かの呼吸音が己の近くで聞こえて来ると…

「……………」

霞がかつた記憶が、僅かに喚起する。死に掛けた自分を救った陰を。焦がれた陰を。

そこまで思い出してハジメは不意に思う。彼女は今何処にいるのかと。

視覚が呼吸音とは真逆を向く。その理由は上げればキリが無い。恥ずかしさやら動揺やら照れ臭さやらで、束の間の現実逃避を行う。

しかし無駄だ。彼女にそんな中途半端な逃げは通じない。

「あ、南雲くん！ 起きたんだね！」

「……………」

視線を逸らすなど無駄だと言っているかの様だ。覗き込む姿勢で、視界に入ってきたのは他でも無い、白崎香織だ。

そして彼女の存在を認識したからこそ分かる。後頭部の温もりの正体が、触れる太腿の体温であるという事を。

俗に言う——膝枕だった。

「取り敢えず精神汚染とか魔力回路は治癒したよ。後は神経とか傷口とかを治すだけだよ」

「…ハイ、アリガトウゴザイマス」

「ちなみに此処は65階層前の階段だよ。『聖絶』で一带を覆ってるから、襲われても大丈夫だよ。ところで南雲くんの顔赤いよ？ 大丈夫？」

「イエ、ナニモモンダイナイデス」

「？」

確かに周囲を見れば薄い純白の光が見える。これが光属性最上級魔法の一種に数えられる「聖絶」だとするならば、果たしてその維持に掛かる魔力量は如何程か。…ハジメにとっては、途方もない程の魔力に違い無い。

遠くから魔物の雄叫びが聞こえるが、結界が軋む予兆は全く無い。香織自身も平然としており、この場はそう言った意味では安全である事が良く分かる。

だがそんな事はどうでも良い。問題は後頭部に収束している。めっちゃ危険だ。

実行犯である白崎香織氏は特に気にしてもいない様子だ。何せ元が猪突猛進よろしくの突撃娘。実行した事がよっぽど無い限り後悔する事は無いし、後悔するにしてもかなり後というケースが殆どだ。

しかしハジメはそうでは無い。躊躇い無く危険地帯に突貫するイカレ野郎でこそあれど、割と恋愛感情や異性との距離感に関してはウブだ。優花との距離感やリアーナとのダンス等は、友人関係というフィルターや持ち前の集中力故に気にする事は無かった。

だが相手が香織、ましてや寝起きドツキりに限りなく近い形での膝枕。

このままではあまりに恥ずかしいのでハジメは即刻、起きあがろうとした。しかし香織の言う通り神経が傷付いてるらしい。身体が本気で言う事を効かない。

「あ、もうちよつと待っててね。まずは傷口の方を治すから」

「…マジっすか?」

「うん!・ 本当だよ!」

「…そっかあ」

しばらくこのままかあ、と視線の先が遠くなるハジメ。

役得ではある。間違いなく役得だ。

しかしその遙か数十倍、恥ずかしいのだ。現役思春期男子たるハジメにとっては、蛇に睨まれた蛙にも劣らない。それ程の圧倒的プレッシャーが存在するのだ。



結果、緊張状態にあるハジメの頬を、香織の手がそつと触れた。純白の光子が目には映る事から、回復の一環だろうと分かる。それはそうとハジメの鼓動は高鳴るが。

バクバクと忙しない心臓。それを知らぬ香織は呟く様に、ハジメへと言葉を放った。

「それに…南雲くんは動ける様になったら、すぐにまた無理しそうだからね」

顔は見えない。身動きが取れないハジメの視界には、香織が覗き込んで来ない以上、大迷宮の天井しか映らない。

しかし分かる。声色から良く分かる。多分今香織はニツコリと笑っているだろうと。…目の奥を除いて。

「…白崎さん。もしかしなくても怒ってます?」

「ふふふ、答えなきや分からないかな?」

アツ、怒ってるなコレ。ハジメの思考は瞬時にそう、判断した。

恐らくは無理をしたが故だろう。香織の怒りの訳をそう判断したハジメは、その怒りを宥めに掛かる。

「一応もう大丈夫だよ。気絶する前に比べたら思考がクリアになったし、ある程度は慎重に行って、鍛えようと思ってるよ」

今のハジメの思考はクリアだ。迷宮では使命感のみに囚われていたが、今はしっかりと判断が付く。だからこそハジメは今の状態を問題無いと、そう断じた。

すると香織は何故か、笑みをより深めて一言。

「でも一人で戦うつもりでしょ?」

「ツ…そんなつもりは無いよ」

「嘘。それぐらい、すぐに分かるよ」

「……………」

香織は見通していた。ハジメが未だに無茶を貫き通すつもりでいる事を。外的な呪いは取り除けたが、全ての呪いを取り除けたわけでは無いと。

そう、未だにハジメは『神前決闘』を一人で戦う気でいた。

耐えられないのだ。己の為に他人を巻き込む事が。もし負けたら

と思うと、気が気で無いのだ。

「南雲くんは優しいから。他人を巻き込むぐらいなら、一人で背負い込もうとする。ベヒモス戦<sup>日</sup>だって、神前決闘<sup>今</sup>だってそう」

「違うよ。僕はそんな善人じゃ無い」

「そうだね。今だって私達の気持ちをも、一ミリだって考えてくれて無いんだもん」

「…?」

香織が「善人でない」と断じるのは滅多に無い。彼女は基本的に他者を否定する言葉を積極的に使う事はしない。むしろ苦手である。

故に彼女がそう断じたのは、紛れも無く凄まじい意志があつての事だ。

「だって…あの夜、言ったでしょ? 『私が南雲くんを守る』って」

「…それは」

それは紛れも無い、最初の約束。

まだ碌に力も覚悟も無かつた頃のハジメが頼み、香織自身が放つた言葉だ。

「あの約束は守れなかった。他ならない私自身が、南雲くんを傷つけていたから。…でもね、南雲くんを護りたいっていう意志自体を、私は一度も嘘だって思った事は無いよ」

かの約束は一度途切れた。香織という存在自体がハジメを傷つけていたから。一度離れるべきだと、香織は覚悟したのだ。

しかしもし、ハジメが独りで足掻きもがき苦しんでいるならば…香織は大人しく待っているお姫様<sup>ラプンツェル</sup>などでは居られない。だってそうだろう。

香織の願いは初めから同じ。ハジメの助けになりたい、そんな想いなのだから。

だから香織は此処に来た。此処にいと確信していたから。

「それに…寂しいよ。私も、きつとみんなも。あの日みたいに頼ってくれない事が、すごく悲しい」

「……………」

「私達みんな待つてるよ。南雲くんがもう一度、ああやって言ってくるのを」

——守ってくれないかな

ハジメは煌めく月の下で、香織にそう言った。忘れる筈が無い。彼女との繋がりを。

それを思い出して、漸くハジメは気が付く。

きつと同じなのだ。ハジメが大切な人達に願う感情、大切な人達がハジメに向ける感情。そのどちらもが相手を思い遣る物なのだ。「無事で居て欲しい」と言う単純な願いなのだ。

思い出すのはかつての「ウル」での戦い。一人、命を投げ出そうとした清水に、ブチ切れた事を思い出す。

人の心を完全に知る事など出来ない。だが、もしかすれば優花も幸利も、皆が自身にそんな風に怒っているのかもしれない。あの日のハジメと同じ様に。目の前の香織と同じ様に。

きつと迷惑とも何とも、彼等は思わないだろう。

何故ならば彼等彼女等自身が、そうしたいと思つた事だから。

やらねばならない事など無かつたのだ、最初から。ハジメが勝手にそう思つただけ。

「…馬鹿だな、僕は」

そうして思い出す。目的を、願いを、辿り着きたい果てを。

罪とか罰とかそんな事はどうだって良いのだ。

——パリンツ！

“聖絶”が砕け散る音が聞こえた。

互いの声しか聞こえなかつた静謐。それがたちまち入れ替わる様に破碎の轟音が続く。

その轟音は下の階層からだ。ナニか、は見るまでも無い。

「！…まだ生きてたの!？」

強大な四肢で階段を崩しながら猛進し、迫る。灼熱を宿す突角の何と雄々しい事か。その身を覆う鋼の如き表皮も何故か全快している。迷宮から賜りしその名はベヒモス。香織が倒した筈の個体は尚も

健在であつた。

本来ならば迷宮の魔物は同じ階層に留まり続ける。それはあくまでも彼等を創り出した迷宮の目的が、挑戦者への試練にあるからこそ。加えて言うならば…迷宮の魔物には思考能力が基本的に無く、自我が薄い事も挙げられるだろう。

しかし【聖女】白崎香織の一撃に加え、何かしらの干渉もあり、ベヒモスには強烈な自我が生まれた。

——コロスツ

それは魂の喝采。

——コロスツ!!

あるいは祝福。

——コロスツツ!!!

その名は殺意。

迷宮の理から、支配から外れたベヒモス。ソレはもう止まらない。漲る力を脚へ注ぎ込み、己をここまで追い詰めた敵。香織を目指す。狙われる香織は、ただ見つめる。ベヒモスでは無く、目の前の少年を。

傷は塞がった。神経や魔力回路も十分に癒えた。だが精神はもうズタボロ、の筈だった。

「…行っちゃうの?」

「うん」

少年は立ち上がる。力強く。他ならぬ己の為に。

「そつかあ…南雲くんてば、仕方ないなあ」

「大丈夫、目は醒めた。一人で立つなんて事、もう言わないよ。ただ…ここは譲れないってだけで」

「そうだ、譲れない。この想いだけは。譲れる筈がない。」

「むう…意地悪だよ」

「でも、納得してくれるでしょ?」

「…仕方ないなあ」

「だってそうだろう。南雲ハジメの原動力はいつもそれだ。」

「それじゃあ、勝ってくる」



段という不安定な地形と、ハジメが位置的に上を取った事。それらが上手く起因した結果だ。

あいあって一合目。ベヒモスカ踏み締める階段が砕け散り、下の階層へと再び戻って行く。

死んでは居ない。ただただ下の階層に落下しただけだ。時間が経てばかの怪物は再び戻って来るだろう。

当然逃げる事は出来る。自由意志を得たベヒモスも、何処までも追って来る事はないだろう。あの巨体だ。全力で逃げれば撒ける。

だからハジメは：ベヒモスと同じ様に下り落ちる。

宙を舞う瓦礫等を蹴って、無事かつての石橋に着地する。階段の崩壊により、階層に雪崩れる砂塵。しかしその中でも尚、紅蓮に燃ゆる突角が褪せる事は無い。

かの怪物は尚も健在。ハジメ史上最強の一撃でもなお、ベヒモスは平然としていた。

その様子に少し衝撃ショックを受けつつも、ハジメは笑う。爛々と目を輝かせ、犬歯を剥き出しにする。ゾクゾクと身体が小刻みに震えた。

それは決して気が触れた故の物では無い。ましてや戦いに喜びを見出した訳でも無い。

あの日、恐怖した怪物はやはり強いのだと、そう再認識し直した。ただそれだけだ。

「再戦リベンジだ、ベヒモス」

ベヒモスはハジメを見下ろす。かの怪物にもはや慢心は無い。己とぶつかり合い、地形も関与したとはいえ押し負かしたハジメ。自我を形成したベヒモスはハジメを凡百の『挑戦者』としてでは無く、『敵』として認定した。

吹き荒れる殺意。しかしハジメは変わらず、その言葉を発した。

「僕の糧となれ」

この程度、乗り越えてやる。

ハジメは『錬成』で新たな直立剣を用意しつつ、見据えた。

——半年の刻を経て、65階層の試練が：再び始まる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…久しぶりに様子を見に来たけれど、これは面白い」  
見下ろす陰は一つ。

黒鉄を纏ったナニカが、試練の行く末を見詰める。

「さあ、見せてくれ。新たな可能性を」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「だああああああ!!! 64階層、突破ア!!」

『ピイイ!!』

『グウオウ!』

「やったわよ、清水<sup>アホ</sup>!」

「おお、やったぞ! 優花<sup>チンピラ女</sup>!」

「…仲良いわね、二人とも」

「此奴らなりのコミュニケーションだ。気にするな。お前達も早く行くぞ」

「二了解です!」

『ピイ!』

『グルルウ!』

一方、階層を繋ぐ階段前。そこでは四人と二匹による臨時パーティーが騒ぎ立てていた。

アホとチンピラは互いの右腕を組み、喜びを分かち合う。白鳩と魔獣が二人に合わせて騒ぎ立てれば、それを特異そうに見るのは髪をポニーテールで束ねた少女。慣れた様にスルーするのは壮年の騎士だ。

彼等は単純に言うならばハジメ+香織搜索隊だ。ハジメだけならばメルドがわざわざ出向くなど許されないが、香織が追いかけたとなれば話は別。あっさりとは此方に向かう事ができた。

その分、国にとって重要な【聖女】がどっかに行っただけという事実は何枚も書類が必要に成る程ヤバイ話なのだが…。

メルドはこれから書くことになるであろう書類の束を思い返して、白目を向いた。基本書類関連に関しては不真面目なメルド。人格者である事は間違い無いが、その辺りは話が別である。

まあ、搜索隊と言っても別に二人を心配しているわけではない。一心心配してはいるが、精々全体の感情一割以下程度。あの二人なら、

意地でも生きているだろうという信頼が、彼等にはあった。

では何故ここまで来ているのか、それは単純に言うならば…怒っているからだろう。

「まあ、今はアンタに構ってても仕方ないわ。あのバカ雲に一発かますのが私の使命よ」

「そうだな。俺も取り敢えずあの安本丹にボディーブローを一発入れるつもりだ」

「…まあ、そうね。今回ばかりは南雲君に非があるわね」

「ああ。…俺も一喝してやらねば気が済まん」

香織が言った様に彼等は待つていたのだ、ずっと。ハジメが自分達に信頼を預ける、その瞬間を。

それを何だ。自分一人で抱え込むわ。手紙を置いて、勝手に何処かに消えるわ。挙句の果て、自分達に待つていろなどと言って来た。

当時、これによつて怒髪天にまで至つたのはバカトリオの幸利と優花だ。

『あのド馬鹿野郎』

『…遂に筋肉バス〇ーをお披露目する日が来た様ね』

…あの時の二人はヤバかった。多少セリフがふざけている気がしなくも無いが、ガチで二人はキレていた。

ただまあ、二人ほどでは無いが雫もメルドもムカついていた。当然、リリアーナも頬を膨らませていたし、ウォルペンも珍しく煙草を吹かす程度にはムカついていた。

そんな訳で「文句を言いに行くから、ついでに助けに行こうぜ」というのが、このパーティーである。助ける事がついで扱いされているのは如何な物かと思わなくも無いが、その辺りはハジメの生存力を信頼しての話である。

それはそうとして  
閑話休題

「にしても…えらいボロボロだな、階段」

「つい前来た時はこんな事にはなつて無かつたわよ…何かあったのかしら」

「まあ…十中八九アイツが原因でしょ」



「だろうな」

「否定出来んな」

「待って、香織の可能性も否めないわ」

「八重樫さん、思ったより親友信頼してねーのな？」

「お前さんが言うか？ 幸利」

64階層から65階層へと続く階段は、もはや見る影も無い。まるで災害の一つや二つが此処を通ったかの様だ。

普通ならば何があったのかと驚く所だろうが：此処にいる者は全員屈指のトラブルメイカーとの関係者達。この光景を見た瞬間に「ああ、またか」と何処か納得した様に頷いた猛者である。

とは言え、この破壊痕は見たところ出来て間も無い。そして下からビリビリと振動が足を伝って感じ取れる。そこから下に彼等がいると確信出来た。

ならばチンタラしている暇は無いと、全員が全速力で駆ける。唯一体力が無い幸利はポチの背に乗り、下へと下る。

そうして65階層の入り口へと辿り着いた面々。その入り口で彼等は搜索対象の一人を見つけた。

「香織ー！」

「？ 雫ちゃん、何でここにいるの？」

「二人を心配したに決まってるでしょう、まったく：それで南雲君は――」

親友を見つけ、取り敢えず一安心した様子の雫。しかし香織が見詰める先を追い、そして息が詰まった。

他の三人も同様だ。魔力光が、音が嫌が応にも視線を其方に導く。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

雄叫びが、轟いていた。

片や怪物。堅牢な表皮に身を固め、巨軀にて圧倒する紛う事なきモンスター。

片や少年。あまりに頼りない一対の双剣。されどその覇気は衰える事が無い。

絵面だけを見れば一方的な戦いに見えるだろう。ベヒモスの連撃に、ハジメは避ける事ばかりを選択させられている。人が見れば、臆病だと判断しても仕方がないだろう。

しかしハジメは避けはするが、逃げる事はしない。張り付く様にベヒモスの側に留まり続けている。また隙があると見るや、ハジメはその度に風をも斬る連撃を叩き込んでいる。

体格差はあれど、これは紛う事なき近距離戦。一瞬の油断が命取りになる、正しく死闘である。

『ググツ、グガアアアアア!!』

「——ツ!!」

「! ああのベヒモス!」

「ああ…間違いない。考えている」

するとベヒモスが脚による連撃を、肉薄するハジメに放った。ただ乱雑な物ではない。橋の縁へと追い詰める、その思考あつての攻撃であった。

ベヒモスが獲得した自我は決して『知性』と呼べる程、高尚な物ではない。ただの人形から獣になった、それだけの話だ。

しかし産まれた自我は、ベヒモス自身に新たな成長を促した。どうすればより敵を確実に殺せるか、それをベヒモスは思考せずとも、学習しようとしていた。

迷宮の魔物は基本的に行動サイクルが決まっている。それは当然、作られた魔物である為だ。それが野生の魔物と迷宮の魔物の大きな差である。…当然、迷宮の魔物でも例外は多く存在するが、少なくとも現在普通の人間が見ているレベルならばそうだと言えよう。

だからこそ、もうこのベヒモスは明らかに常識から隔絶していた。紛う事なき『敵』を潰す為、一秒一瞬で進化し続けている。迷宮産故の強力なスペックに加わり、『怪物』の名に恥じぬ程となっている。

だがあえて言うならば…それは少年も同じ事だ。

「グッ! オッ! ラア!!」

瞬時に生み出される、槍に斧。そして元から持っている両刃剣。これ等を持って、ハジメは右前足の関節に三度に渡る連続攻撃を放つ

た。

通常部ならばベヒモスの表皮は分厚く硬い鎧のようになっていて。しかし：可動域たる関節部分に關してはそうもいかない。

事実、即席の武器は碎ける事なくベヒモスの表皮を突き破った。ズブリツと関節部分を穿っていた。

「「入った!!」」

舞う鮮血。されどベヒモスはそれでも尚止まらない。

ダメージがあるはずだと言うのに、右前足でハジメを蹴ろうと体を振り回す。巨体故の凄まじいまでの遠心力がつい先程までハジメがいた箇所を抉り潰した。

刻まれている筈だ。だというのに、強大な魔物は尚も力を増長させている。

まるで見えぬ終わり。されどハジメもまた全身全霊で答える。秒速で繰り広げられるヒット&アウェイにより、ベヒモスの巨体を翻弄する。

正しく互いに手詰まりだった。ベヒモスは素早いハジメを捉えられず、必殺の一撃を当てられない。一方でハジメはベヒモスの防御を潜り抜ける攻撃力がまるで無い。

通常で考えるならば、ベヒモスが俄然有利だろう。ハジメは素早くはあるが、防御力が高いわけでは無い。それはつまり、一撃を喰らえばほぼ必死である：と言う事だ。つまり意識を一瞬でも切って仕舞えば、そこで終わりなのだ。

だが：この戦いはどうしようも無く平等に命を掛け合っていた。

ハジメは逃げようとしないうし、ベヒモスも持久戦に持ち込もうとしない。互いが互いの土俵に上がり込み、その上で決戦をつけようとしている。

別に示し合わせた訳でも無い。単純に互いを認め合ったから：なんて言う事もない。ただ単純に、そうして勝たなければ意味が無い。一人と一匹はそんな意志を共有し合っていた。

火花が散る。石橋が何度も軋み、血の粒が斑点を事あるごとに描かれた。

剛腕が少年の髪を掠める。迫る致死を寸前で躲した。再び造られる棍棒の質量武器。ベヒモスは物ともせず受け切った。灼熱の角が服を焦がす。その箇所をナイフで切り取り、火傷を防ぐ。

詠唱が始まる。それを塞ぐのは息つく間も無い怒涛の連撃だ。

それは正しく死闘。単なる殺し合いでは無く、雄と雄の矜持プライドを掛けた戦争。

だからか。その階層にいる者、全てがその戦いを邪魔する事なく見守った。この戦いに手を貸すのはあまりにも野暮な事だと、その場の全員が断じた。

果たしてどれだけの時間が掛かっただろうか。決着の時は訪れる。

やがてベヒモスがその巨体の横を使い、タツクルを行う。

ハジメは避けようとしたが、生憎迫る面積があまりにも広い。それ故にハジメは回避の代わりに、迫るベヒモスをそのまま蹴った。

結果、ハジメもベヒモスも両者共に吹き飛ぶ。体重差故にその距離に差はあれど、互いにダメージはほぼ無い。

そうして二者間に最初以来の十分な距離が完成する。

ベヒモスは四肢を踏み締める。ベヒモスの必殺はやはり十分に加速しての突進だ。本来ならばたかが人間一人の為には行われない、対多数数用の必殺。しかし確かに認めた『敵』を己最凶の技で沈めんとベヒモスは判断した。

それに対しハジメは改めて「錬成」を行う。そして創られたのは、ハジメの身の丈を遥かに超える戦鎚だ。それ等を片手に握り、ハジメは「魔錬」による魔力循環をより活性化させる。外部まで漏れる『蒼』の魔力光は、「ウル」での槍投げを彷彿とさせた。

『……………』  
「……………」

静謐が、世界を満たす。

見る者も誰も、戦いの最後を固唾を吞んで見守っている。

少年と怪物の思考が溶け合う。混ざり合う。惹かれ合う。

最早言葉すら要らない。



それが今正に心臓を貫かんとしていた。

蒼と赫の交差。時間にしてコンマ数秒。

あまりにも一瞬の戦い。その中でハジメは見る。

——灼熱の角が自身の左胸に突き刺さるその瞬間を。

——そして放たれた槍がベヒモスの目を貫き、そしてその奥の十二力を砕く、その瞬間を。

ハジメの呼吸に熱と血が混じる中、心臓に至ろうとした角はボロボロと崩れて行く。

同時にベヒモスの体も灰色になり、やがて瓦解した。

その中央から溢れた魔石は、見事なまでに粉々となり風に乗って散って行く。

「……………勝つ、た？」

刹那のズレで負けていたこの戦い。天運すらも左右するであろう、  
結末。

しかしそれ故に、実感する。自身の勝利を。

「…やっ、た」

ここで再び意識は途切れる。

最後に見えた物は駆け出して来る仲間達と、己の目の前に転がる小さな指輪だけであった。

## 27、開戦の銅鑼は鳴り響く

「予め言っとく。『神前決闘』に出るのは、俺と優花がベストだ」

プルプルと震えるハジメを眼下に、幸利はそう言い放った。

【オルクス大迷宮】での大激戦から一日後のハジメの自室。そこで寝起き早々知り合い全員からブチギレられ、黄金比土下座を四時間決行する結果となった…という経緯が存在するが、今は別の話。

もう開催まで間も無い『神前決闘』について、ハジメ派一同は話し合いを始めているのだ。

メンバーはハジメ、優花、幸利、メルド、雫、龍太郎、リリアーナ、ヘリーナ、愛子、愛子ちゃん先生護衛隊、お馴染み神殿騎士四人、【ウオルペン工房】幹部…とかなり豪華な顔ぶれである。改めてハジメの人の可笑しさが分かる絵面であった。

だが開始数秒にして、幸利は大胆にもそう宣言したのだ。

「失礼かもしれないけれど清水君。少なくとも戦闘力に関しては私達の方が上だと思うのだけれど…」

「清水…俺は鈴を止めなきゃ——」

「訳はちゃんと話す。一旦話を聞いてくれ」

これに待ったを掛けるのは雫と龍太郎だ。二人は勇者パーティーとして最前線を立っている。優花や幸利が修羅場を潜って来ているのは確かだが、実戦の数はまるで違う。

だが幸利は二人の言葉を遮り、加えて説明を行う。

「確かに八重樫さんや坂上を編成する事によるメリットは大きい。単純な戦闘力強化・経験した場数の多さに加えて、親友という立場上天之河に対しての脅しの材料にもなる。普通の戦いなら俺もそつちを採用した」

「雫はそんなつもりで言っていないと思いますわ、ユツキー様」

鬼畜である。

漏れなくリリアーナがツツコミを入れた。引きはしない。そう言う手口は王族たる者仕方が無いと思っっているから。愛子ちゃん先生護衛隊は若干二人に引いた。

「つーかそれ以外にも色々候補は考えた。例えば白崎さんとか。ま、白崎さんはこの前の件もあって、現在教会側が厳重監視中だ。後から言う理由含めてまず無理って考えて良いだろ」

香織は「オルクス大迷宮」での戦いの後、即時教会により連行された。教会側の貴重な人員である【聖女】を失う訳には行かない。そう言った面もあるのだろう。『神前決闘』でもゲストとして扱われる事となっており、まず参加は不可能だ。

もつとも幸利からすれば、そうでなくとも編成する気は無かったが。

話を戻し、幸利は人差し指を立てた。

「まず理由の一つとして…勇者パーティー組は手口がバレてる。選手自身に、或いは教会に。相手に手札をフルオープンした状態でポーカーする様なもんだ。敵側も同じだが、俺と優花が出るならそのアドバンテージをこっただけの物に出来る。それなら後者の方が美味しい」

情報は武器だ。そして情報を知らないという事は余分に敵を警戒する必要が発生する。勇者パーティーはそれぞれのメンバーが互いに手を晒している。それ故に戦いの駆け引きが純粋な戦闘技術でしか行えなくなる。

しかしそれは情報がイーブンの場合での話。此方だけに情報が入っているならば、まるで違う。多少誤差が出るかもしれないが、おおよそ敵のスタイルは理解できる。

だが敵からすれば戦闘中に手探りで情報を集めて戦う必要性が発生する。つまり敵にだけ余計な負担が掛かるわけだ。これは十分にアドバンテージたり得るだろう。

そして幸利は続いて中指を立てた。

「次に全員接近戦で編成を固めるつてのが怖い。言ってしまうえば戦略性に欠ける。ハジメは魔法を使えるが多用出来ない以上、無い物として扱った方が良い。そうやって来るとオールラウンダーの天之河や【結界師】の谷口がいる敵側の方が明らかに手が多い。これは何としても避けたい」



ゲームでは無いが手段の多さは武器だ。遠中近全ての手段があるだけで敵の留意すべき範囲は格段に増す。特に魔法職は一発一発に準備が必要だが、放たれれば遠距離で威力のある一撃を放てる。敵からすれば視界に居らずとも警戒するしか無い。

だからこそバトルスタイルを近接戦で統一してしまうのは避けたい。また近接のバトルスタイルはモンスター戦ならば兎も角、対人戦での連携は難しい。雫・龍太郎とハジメが息を合わせて、というのは無理があるだろう。

「それで…これが一番重要な理由だ。単純に言うなら名前が売れすぎてるって点だ」

「…有名って事?」

「そうだ。今回の『神前決闘』のルールには教皇が試合を何度でも巻き戻せるって物がある。正直に言ってクソルールだ」

「確かにクソね。認めなきゃ負けないんでしょ? 勝ち目無いじゃない」

不条理なルールが多い『神前決闘』、その中でも特に一番の難題。このルールが『神前決闘』で適用された回数歴史を見てもまず少ない。だが適用されたならばその先は地獄。ただ被疑者が落ちるまで延々と試練が行われる、それだけだ。

だからこそ幸利はそのルールを重要視しているのだ。

「そうだな、認めなきゃ負けない。一見すりや完全無欠のヤバルルールだ。歴史上、教会の勝ちが十割なのも頷ける…が、穴はある」

「…何処によ?」

「安心してくれ、優花。それに関しては幸利と共に、我々の方で対策を進めている」

「…「??」」

訳が分からない優花は幸利の言葉に首を傾げた。しかしメルドもそれに賛同した事で訳が分からないとその場のほぼ全員が優花同様、首を傾げた。

「ただそれも小僧が勝つ事がまず前提条件だ」

「それに加えて教皇から出来る限り『言い訳』を奪っておく必要がある

る」

「二人の意見を聞くに…零殿と龍太郎殿の御二方は狛下の『言い訳』に使い易いという事ですか」

「ビンゴです、チエイズさん。何たってかの有名な勇者パーティー。メンバー各々に実績だってある。その力をハジメが借りたとなりやあ…虎の威を借る狐扱いもあり得るってもんだ」

やり直しを行う上で教皇が必要とするのは、『言い訳』だ。

如何に教皇がその権利を持っていようと、周囲の納得が全く得られなければ意味が無い。どのようにして納得を得るのか、それを試合をみて教皇は考えねばならない。

だからこそハジメ側からそのエサを出す事は避けたい。その為にも知名度のある勇者パーティーのメンバーは抜擢し難いのだ。

「対して優花も俺も手柄はほぼ無い。【ウル】の件もあるが、そっちは【豊穰の女神】の先生がメインだ。俺たちはあくまでモブ…ここに来て先生に手柄を集めた事が役に立ったな！」

「うう…先生としては非常に複雑です…」

「でもお陰で清水は罰軽くなつたし、こうして助力に繋がるなら万々歳だよ、愛ちゃん先生！」

「結果論こそ全てだぜ、先生！」

「ありがとうございます、皆さん…」

結果的に見ればメリットの方が大きいし、仕方が無かったのだが、やはり愛子的には生徒の活躍を我が物としてしまった事が辛いらしい。ちよつと涙目の愛ちゃん先生を護衛隊が即時カバーしに行った。

「とは言えさつき言ったように教皇に『言い訳』を作らせる訳には行かない。だから俺に関しては魔族が作ったポチを使う訳には行かねーし、ハジメが何でか持つてるアーティファクト二つもロクに使えない。ピナぐらいだったら許されるだろうが…つまり俺達は外付けの強化をほぼ行えない」

「対してあちらは試練を行う側。教会の全面的なバックアップによって、万全の状態で戦えますわね」

「改めて畜生ルールね」

字面を見ただけでも制限は多いが、その上で『神前決闘』を完璧にクリアする為には必然的に過剰な制限を自ら設ける必要がある。

流石に天職や固有魔法などの個体差までは『言い訳』にはしないだろう。その為、ハジメの『魔錬』などは大丈夫の筈だ。もしそれまで『言い訳』に利用するならば、その時はレスバするだけだ。

とまあ、ここまで話して場はほぼ満場一致の空気となっている。幸利の言葉に反論する者は居ない。

「ま、そんな訳だ。俺達二人が出る事に異論は…無いな」

「そうね。久々に暴れてやるわ」

ホツと一息付く幸利に対し、拳を鳴らす優花。やはり彼女には漢気と呼べる物がある。正しく姉御、下町でいつの間にかファンクラブが出来ているのも頷ける話だ。なお本人は知らない。

兎も角二人は上等だと言わんばかりに立つ。戦闘に参戦しない面子も、心は共にあるかの様だ。

これまで築き上げて来た絆が、此処に集結していた。

「…ねえ、二人とも」

「おん？」

「何よ？」

「ありがとう」

「ごめんとは言わない。きつと皆んな、望んでここにいるのだから。信頼を否定する様な真似を、今更しようとは思わない。」

だが代わりに感謝する事は許される筈だ。だからこそハジメは心の底からこの言葉を吐き出した。

二人はポカンと暫く口を開けたが、やがてハジメへと軽く腹パンやらチョップやらをかました。同時に口を尖らせて言う。

「何処ぞの誰かさん曰く、私はチートらしいからね。この程度チョイのチョイよ。感謝されるまでも無いわ」

「も一つ言っとくと、別にお前の為なんかじゃねーからな。俺がお前に生きて欲しいって気紛れに思っただけだ。その辺り誤解すんなよ？」

——早く前へ。大丈夫、冷静になればあんな骨どうつてことない

よ。うちのクラスは僕を除いて全員チートなんだから！

——僕は——君に生きて欲しいからここに来たんだよ！

ハジメの内で、かつて放った言葉が喚起する。自身があの時、心の底から思っていた言葉がまさか今になって返ってくる事になるとは思ってもみなかった。

「——ハハハッ、そっかあ。そうだよね」

「そうだぞ」

「そうよ」

「「「「??」」」」

それがあまりに可笑しくて。ハジメはついつい笑い出してしまう。幸利と優花もこれに、悪戯が成功した子供の様にニヤリと笑う。他の者達は言葉の真意がまるで分からず、ただ笑う三人を見つめるだけであった。

だがもう迷いは無い。ハジメは二人に拳を突きつける。二人も応じる様に、拳をハジメの物に合わせた。所謂、円陣という奴だ。

「それじゃ、二人とも…いや、皆んなで勝とう」

「おう」

「とーぜん」

『ピッピピィー!』

「そうだね。ピーちゃんも手伝いよろしくね」

『ピッ!』

作った拳の円陣の上にピナが乗り、元気良く鳴いた。

それがあまりに可笑しくて。ハジメの部屋からは笑い声が木霊する事となった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——パアンツ、パアンツ!!

火の華が青空を彩る。

色鮮やかな“火属性魔法”は次々と駆け昇る。『神の使徒』の記憶を元とし、作られた中級魔法“はなび華火”は観客等の心を空と同様、煌めかせた。

今日は『使徒』が異世界トータスに来てから半年、即ち今日がハジメの処刑

日、『神前決闘』の日である。

『神前決闘』の会場は【神山】と【ハイリヒ王国】の中腹辺りの、東京ドームを優に超える広大なコロッセオ。多くの来賓客が客席に座って行く。

このコロッセオの戦場には結界が張り巡らされている。この結界は外部からの干渉と妨害を防ぐ為の物となっている。

効果は二つ。一つは物理的な結界としての効果。これにより『神前決闘』中の外部からの侵入、及び攻撃を防ぐ役割だ。もし砕けたとしても、その際に派手な音を鳴らす為セキュリティー面ではかなりの活躍を見せる事となる。

もう一つは魔力感知の結界だ。これは予め選手から摂取しておいた血をアーティファクト内に取り入れる事で発動する。これにより選手の体内魔力以外が結界内に入った場合、ブザーを鳴らす事となる。この存在に気付いた途端に試合終了、犯人を突き止めそちらのチームを失格とする。

「はあ…奴に招待されたから来たが、またあの【勇者】か。全くもって下らんな」

「お父様、お静かに。今日はあくまでも一般客、お忍びですわよ？」  
「そうだがなあ…」

当然ながら客席には一般客も多く入り込んでいる。当然入場料は取られるが、熱狂的な信者や被疑者の関係者達には関係無い。雪崩れ込む様にして人々は入って行った。

なおコロッセオに入れずとも何ら問題は無い。教会が保有する映像転写型アーティファクト：シユタイガンが、国土全体に渡り見える様、大空に転写している。ただ音に関しては精度が低く、微かにしか聞こえない。それでも観戦するだけならば何ら問題は無いので、作業を止めて空を見つめる者も多いが。

映像により映るコロッセオの景色は敢えて言うならば、廃れた古代都市…とも言うべきか。もはや風化により一部しか残されていない建物の残骸と生い茂る森のみが映り込んでいる。

「はてさて…南雲ハジメ。恨めしいまでに生き延びましたが、此処に

来てはもう終い。楽しませて頂くとしますかのう」

「…本日はわざわざ御足労頂き感謝致します、猊下」

「今日はそこまで畏まらずとも良いですぞ、エリヒド殿。ごもつとも…王女の方は少しやんちゃが過ぎる御様子ですが」

「ええ、私の方からも後々…」

「そうするのが宜しいかと存じますぞ。まあ、これまでの苦勞が今日報われると思うと、甲斐甲斐しい気分になりますがな」

「そう言っ頂けるとありがたいです」

またVIP席には教皇イシユタルや国父エリヒドなど、錚々たる面々が勢揃いしている。かつての『学会』と比べてもまるで規模が違う。正しく国全体が、その試合に注目を集めている。

もはや勝敗に関係なく、今日この日『彼』は世界にとつての『主要人物』である事は疑いようも無い。相対する【勇者】と比べても、彼の知名度は劣る事は無いだろう。

「「「「がーんばれ！ がーんばれ！ な・ぐ・も——!!!」」」」

「清水——!! ぶちかませー!!!」

「優花——!! ファイトだよー!!!」

「愛子ちゃん先生護衛隊もとい南雲支援隊！ 三人を全力で応援するぞお!!」

「「「「うおおおおおおお!!」」」」 頑張ってくださいえ！ 南雲の旦那あああああ!!!」」」」

「…いつの間に【ウル】の【錬成師】の皆様は来られたのでしょうか？

デビッド、貴方は分かりますか？」

「…いや、何かいつの間にか居たとしか」

「皆さーん、もつと声出して！ 南雲君を応援しましょう！」

この応援が果てまで届けと、コロッセオに響き渡る。VIP席から降りて来た愛子先生を中心に、護衛隊に神殿騎士四人、更に【ウル】の【錬成師】等も集まり声を一つにする。

コロッセオの面積はあまりに広い。この声はきつと彼等に届かない。

しかし彼等の思いは届くだろう。勝利を望むこの思いは強く、褪せ

る事など無いのだから。

「やれる事は…全部やった。後は小僧次第だ」

「たく…【錬成師】であそこまでやるたあなあ…。地に伏した御感想はどうだい？　メルド団長殿」

「…ステータスならば兎も角、技術は既に光輝よりも上だな」

「マジかよ。…師匠どっちも半年で素人に抜かされるとは、面目がねえなあ」

「ああ、全くだ」

戦鬪の師であるメルドと“錬成”の師であるウォルペン、二人はVIP席にて戦場を見守る。

最初の頃の様な単純な恩義や利得、もはや彼等にとってはハジメを応援する理由では無い。

ただ興味を惹かれた者の一人として、此処から先をただ見る。

「父よ…貴方が私のした事をどう思っているかは分かりません。私自身、本当に正しい事をしたのかも。ですが…全てこの戦いで決定しますわ」

「大丈夫よ、リリイ。きつと…大丈夫」

「坂上様、気分が優れない様でしたら別室で横になられては如何でしょうか？」

「…いや、見ます。見なきや、俺は…アイツ等からもう逃げたくねえから」

「そうですか。それでは此方の紅茶をお飲み下さい。ストレスの緩和作用があります」

「余的にはどっちもライバルなのだが？　余ってばどっちを応援すれば良いの？」

王族の子孫等は見守る義務がある。

国王であり、実の父であるエリヒドⅡSⅡBⅡハイリヒ。教皇イシュタルとの共謀であるとは言え、彼の企みにより少年は此処に立たねばならない。

【勇者】の輩達は願う。半年間戦い続けた少年の勝利を、そして戦友等が正気に戻ってくれる事を。

戦場に己が立てぬ事を悔やみながら、せめて目を背けてはならないと、ありつたけの精神力を注ぎ込んだ。

「さてさてさーて。この試合、どう転ぶかなあ？ 光輝くんは勝つかな、それとも負けちゃうかなあ？ どっちにしても楽しみだなあ」

コロッセオの近隣にある高い塔。風に煽られながら、『使徒』は啜う。風向きなど関係無い。全ては、掌の上だと信じて止まない。

「フフフツ、ハーちゃんの晴れ舞台！ 前回も素晴らしかった分、今回も期待が膨らみます。…貴方もそう思いますよね、『三代目』」

「…君はとても楽しそうだね、『四代目』」

「ええ、とても。というかこの前、ハーちゃんを見に行ってたじゃないですか。クールに振る舞って実は貴方も楽しみにしているんでしょう？ それに、レイちゃんも気になっている様子ですし」

「……………」

『……………』

コロッセオの遥か上空。そこに在るのは一風変わった三人組だ。彼等は青い龍の上に乗し、会話している。

月を彷彿とさせる吸血鬼、黒鉄の鎧を纏ったナニカ、希少な龍に、そして凡百の魔人族。

統一感の無いチグハグな者達。されど吸血鬼と黒鉄の見下ろす目は何処までも達観した者。隔絶した実力差…否、次元の差がそこには在る。

一つ上の次元で、<sup>ステージ</sup> 彼等は次世代の英雄を見つめていた。

【聖女】白崎香織。貴女はこの試合、どう見ますか？」

「…決まっていますよ、ノイントさん。勝ちますよ」

「…どちらが？」

そして、彼女は見つめる。

VIP席の二画。聖教教会の騎士団長が護衛として座る横で、愛おしげに彼に視線を送る。

もうあの日の様な憑き物は無い。ならば大丈夫だ、と彼女は微笑む。そして尋ねられた問いに、さも当然の如く答えを返した。

「当然、南雲くんが」



あらゆる者達の敵意、期待、そして信頼を乗せて、その視線は『彼』に注がれた。

『それでは、『神前決闘』の開始を宣誓する!』

————ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

イシユタルの宣言と共に、凄まじい音量のゴングが鳴り響いた。

それと共に選手達は各々動き始める。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『神前決闘』において参加者の初期位置はランダムとなる。選手各々が別々の入り口から結界内に入り、バラバラになった状態で試合は開始される。

この入り口から出口の道はかなり複雑で、会場の所有者以外はどの入り口に入れば何処に出るかなど分かる筈も無い。

そう、所有者以外は。

『南雲ハジメの位置はE6：即ちエヒト神像の真下にて御座います』

教会が保有するアーティファクトの一つ、念話石。それをイヤーカーフスの形にした物を教会側の選手は身に付けている。それ故に最速最短のルートで天之河、檜山、鈴の三人はフィールドを駆け抜け、ハジメのいる場所へと向かう。

ルールの一つにある、リーダーの撃破。これさえ成し遂げれば決着は付く。これまで辛酸を舐めさせられた経験もあって、『錬成師』だからという油断は無かった。

教会側のリーダーである天之河光輝も迷う事なく、ハジメの方へと走っている。光輝にとつての宿敵、それがこの先にいるのだと思うと一秒一瞬さえも惜しかった。

(アイツを倒して…そして皆んなを取り戻す!)

光輝は理解していた。旧友の心が自分から離れ離れとなつてしまつている事を。

更に理解してしまつた。逆にハジメの周囲には人が着々と集まつている事を。

耐え切れなかった。どうしようも無く嫌だつた。何故自分に着いて来てくれないのかと、心の中で何度も騒ぎ立てた。

そして天之河光輝の中にある闇は、爆発した。

——ぜんぶアイツの所為だ

天之河光輝は断じたのだ。ラスボス悪役は南雲ハジメだと。だからこそハジメさえ倒せば物語の様に、全て解決するのだと。

常人にはまず理解出来ないほど飛躍した思考回路。しかし天之河光輝の真っ直ぐで歪んだ正義感では、そこで思考は止まってしまっている。

己にとつて相棒である聖剣・聖鎧を装備から外したのも、そんなプライド矜持があつてこそ。そんな物に頼らずとも、ハジメを倒す事が出来る悪と…そう信じているから。

疾走の途中、ふと上から鳥の鳴き声が聞こえてきたが気にも止めない。いの一番にエヒト神像の元に辿り着いた光輝。その目の前には

「来たね、天之河くん」

「…南雲」

意外な様子も無く、ただそこに立つハジメがそこにはいた。その出立ちはあまりに自然体。気に負う物など何一つ無いと言っているかの様だ。

そんな様子も苛立つて…誰も来る気配が無い事に違和感を覚えた。光輝がそんな違和感を持つている事に気が付いたのか、ハジメは光輝へと話し掛ける。

「一応言っておくけど…他の二人は来ないよ?」

「お前!…また何かしたのか!?!」

「まあ、そうだね。君達と同じくやってはいるかな?」

思い返すのは作戦会議。あの時、自分のすべき事は定まった。

「ベストは俺達全員で天之河をリンチする事だが…まあ無理だな」

「向こうが位置を特定する術を持って来てるだろうからね」

「ああ。アーティファクトか魔法か：いずれにせよ戦場全体の状況を理解出来る術は持ってきてるだろうな」

メンバーが決まった後、次に話題に上がったのが具体的な戦い方だ。そして敵が教会側である以上、ハジメ等は敵側にある程度の理外<sup>チ</sup>の術<sup>ト</sup>がある事を想定する。

だからこそ敵は迷い無く行動出来るだろうと考えた上で、此方のアドバンテージを上げる。

「ただこつちも戦場理解は出来る。俺の相棒ピナと “共眼” さえあれば、その辺りはオールグリーンだ。ピナレベルなら一般的な使い魔だし、『言い訳』にもされねーだろ。お前ら、ピナを崇めよ」

「ハハ〜」

『えっへん〜』

「それに向こうは恐らく通信タイプで経路にワンクッションが必要になる。しかも戦場全体を隈なく見れるわけでも無い。位置取り合戦は圧倒的にこつちが有利だ。：だからこそ次に考えるのはどいつとどいつを戦わせるのか、だ」

ピナには “千里眼” の固有魔法がある。そして幸利の “共眼” でピナと三人の視界を共有すれば、リアルタイムで敵味方の位置を知ることが出来る。行動の後手に常に回る敵側の連絡よりも、遥かに早い速度で敵の位置が理解できるのだ。

だからこそマッチングの優先権は間違い無くハジメ達の方にある訳だ。

「まず全員合流して三対三になるのは避けたい。何たって敵側のバランスが良過ぎる。接近戦が十八番の檜山、防御特化の谷口。それで極め付けにオールラウンダーの天之河：しかもアイツらは迷宮組だ。連携は半年間散々やって来てる。連携を取られたらまずこつちが負ける。だからこそ俺達が狙うのは——」

「——三つのloner?」

「その通りだ、ハジメ。それが一番、アイツらに取って全力を出し辛くて、逆に俺たちは実力を発揮しやすい。敵が狙って来んのは間違い無くハジメだ。リーダーが落ちればゲームオーバーなんだ。そりゃ狙

う。…だからハジメと戦わせる奴以外は俺と優花で足止めすりやあ  
良い。そうすりや各々一対一が出来上がる。そんで後は各個撃破  
！ってする方がこつちに有利だ」

迷宮組は多人数での戦闘に慣れ切っている。それ故に『連携』とい  
う物が戦いの前提に存在する。当然メルドの指揮の下、対人戦も訓練  
でこなしているが迷宮での戦闘の方が明らかに多い。

対してハジメ達はメルドの訓練において一対一での対人戦をよく  
行っている。参加するメンバーも多く、様々な戦闘スタイルの相手へ  
の対応能力が培われている。

だからこそ必ず合流させてはならない。それだけは肝に銘じ、遂に  
マッチングを決定して行く。

「で、分担だが…ハジメ。お前が天之河やれ」

「あーそういう…了解」

「速攻で理解したわね、コイツ」

「やり直し案件だよな、それも」

「その通りだ」

リーダーであるハジメが同じくリーダーである光輝を倒す、それだ  
けで『言い訳』はまず少なくなる。何と言っても光輝は敵側のメン  
バーで随一の実力者。それを被疑者であるハジメが単独で倒す…そ  
れが民衆の目にはどう映るか、と言う話だ。

逆にこの勝負を避ければ、「ハジメが逃げた」という言い訳を作るか  
もしれない。かなりこじ付けに近いが、何せ民衆の注目は結論その二  
人だ。避けずに迎え撃った方が良いだろう。

「まあ、僕自身はそう言うのは別に良いんだよ。僕自身が天之河くん  
と戦いたってだけで」

「はあ？ お前、ドMか？」

「言っておくけれど…光輝は強いわよ、南雲君。舐めて掛からない方  
がいいわ」

「舐めてる訳でも、驕ってるわけでも無いよ。ただ、勝たなきや行けな  
いってだけだよ」

すると天之河と戦う方が良いと言い出したハジメに全員が白い目

をぶつける。遂に頭がおかしくなったか、と恐れていた事態が起きたかの様なリアクションだ。

幸利が引き、雫がそんなハジメに注意をする。しかしハジメは曲げる気は無いらしい。真っ直ぐな目で宙を見て、言う。

「だって天之河くんが一番、白崎さんに近いでしょ?」

そう、それだけの理由。

ただ更に一步、香織のいる場所へと近付く為に「勇者」と戦おうとしている。

「…お前、ちよつとヤンデレ患ってるよな?」

「へ?」

「コイツ、いずれ愛の為に世界を滅ぼしに掛かりそうで怖いわ」

「どんな状況!？」

幸利と優花が遂に呆れたご様子だ。特に優花に関してはかの朝焼けの約束から共にいる。そのブレなき加減にもはや恐怖すら覚えていたのだろう。

だがきつとハジメにとっては大義にも勝る理由だ。その目的のため、この半年命懸けの道を取り抜けて来たのだ。

合理性だとか企みなど関係無い。南雲ハジメと言う男は、常にその『原点』に背を押されているのだ。

「…まっ、そう言う事なら舞台は用意してやるよ。お前はタイマンで勝ってこい」

「本当に仕方がないわね。今度適当に何か奢りなさい。それでチャラよ」

「うん。ありがとう、二人とも」

「さてと…悪いわね鈴。此処からは私が相手するわよ?」

「…どいてよ。優花ちゃんは、関係ないでしょ?」

「無理よ。私なりの信念があるもの。そう易々と退けないわ」

見晴らしの良い平地。起伏もほぼ無い、ただのなだらかな大地。地面にカランカランツと落ちたナイフを尻目に、女子二人は言葉を交える。

互いに理由は同じ。『友』の為。

だからこそ鈴は周囲に障壁を展開。対して優花は己の相棒たるナイフを構える。

「そう…それなら鈴は優花ちゃんを吹き飛ばして、先に行くよ」

「ふふつ、単純で分かり易いわね。なら返り討ちにしてあげるわ」

義を尽くし来れるのはどちらかのみ。少女等は勝つ為に魔力を迸らせた。

——『神前決闘』被疑者側、園部優花

「…チツ。相手はテメエかよ、クソ陰キャ」

「お褒めいただき誠に感謝するよ、ド三流のチンピラ」

「…接近職極と魔法職オマエでマトモに戦えるとでも思ってたのか？」

「残念ながら…楽勝だね」

対するは森の中。膨大な数の動物がそこにはいた。それだけならばまだあり得る話かもしれないが、その視線がたった一人に集まっているのは、あまりに特異であった。

その囲まれている男、檜山は木の枝に座る少年を睨みつけた。しかし臆する様子は無い。その程度の恐怖はとうに乗り越えている。

幸利のそんな余裕ぶった態度が癪に触ったのか。檜山は槍を構え、戦闘態勢に入る。

「クソが…秒で死ね」

「語彙も貧弱だな。まあ良い、遊んでやるよ。なあ、ピナ？」

『ピーッ!!』

彼等は共に『罪人』。されど異なる在り方、それが如何なる結末を見せるかは、まだ。

——『神前決闘』被疑者側、清水幸利

「そうか…南雲、悔い改める気は無いのか？」

「無いよ。僕のこの道を、肯定してくれる人が居るから」

「そうか…ならもう言葉は要らないな」

「そうだね。僕等はどうしても分かり合えない。だから——」

廃れた古代都市の跡地。ひび割れた壁に、崩れ落ちた屋根。その上に立ち、二人は睨み合う。

唯一、崩れ落ちていないエヒト神像。巨大なそのすぐ下で、彼等は永きに渡る勝敗を決する事となる。

それは正しく『神前決闘』。片や澄んだ白、片や空の如き蒼。それが二人を中心に渦巻き、やがて衝突した。

「お前は、俺が倒す！ 南雲！」

「僕は、君を超える！ 天之河光輝！」

果たして勝つのは『正義』か。それとも『憧憬』か。

相いれぬ意思を持つ二人は、ただこの闘争に身を投じた。

——『神前決闘』被疑者側、南雲ハジメ

全てを決する戦いが、今——

## 28、誰かが意志の下、暴れ狂え

「フハハハハハハハハハハ!!」

この世界の何処か。トラス或いはその果て。

誰も居ないその場所で、その者は呵呵大笑の声を上げた。大胆に、無邪気に。そして何処までも残酷に。

世界を見渡す瞳の先に映るのは、その者にとってはあまりに矮小な戦い。当然だ。自分はこの世界の頂点に降り立つ者。全ては些事。もしくは茶番だ。

だからこそその者は結果では無く過程を求める。如何に可笑しく、唆られるか。世界をも遊戯と語り、気分が乗れば手を出してみる。そしてお気に入りの駒をへし折り、腹の底から歡喜に満ちるのだ。

その点、この茶番はその者にとっては珍しい類であった。何せこの茶番に己は一切関与していない。だと言うのにこの戦いは招かれた。「あの女、やはり面白いなあ。ここまで我を利用しようとする駒は初めてだ。不遜であるが…それ故に愛おしい」

その者は、『神』は嗤う。

もはや熱に浮かされる事も無い。本物の感情とやらも久しく忘れた。

されど己を満たす物が『盤面』にある事だけは覚えている。

「さあ、偽りの聖戦よ。せいぜい我を興じさせるが良い」

『盤面』の外側。唯一の玉座にて、『神』は見下ろす。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——ギインツツ!!

火花が散った。

続け様に鋭い軌道を描き、飛ぶナイフの数々。それぞれには人をいとも容易く貫くであろうと予想出来るほどの破壊力が込められていた。

ナイフの軌道はあまりにも特異だ。同一方向・同時に投擲されたにも関わらず、敵に対し前方、後方、真上の三方向からの時間差攻撃。少なくとも回避という手段は難しい。



だが敢えて言うならば、それ等の工夫は彼女の前ではまるで無意味であった。

その答えをつい先程とほぼ同じ結果を映す光景が、優花に教えてくれた。

それぞれのナイフは空中にて何か硬い物に衝突したかの様に静止、そして速度を零として床へと自由落下。標的である鈴は顔を一変たりともしない。

「巨人の吐息は、痛く重く、砂礫を渦巻き、叱咤打つ——『飛砂』」

鈴が詠唱を完結させると周囲の砂が急激に巻き上がった。直撃こそは回避したが、何せ量が量。砂礫の一部が優花を削り、幾つもの赤い線を肌に描いた。

「——甘いのよー」

だが刹那も臆する事は無い。むしろ攻撃を行なっている今が好機とばかりに、優花は全力でナイフをスローイング。つい先よりも格段に速い一撃が鈴へと迫る。

避ける暇は無い。優花の一撃は展開されている障壁を砕いた。そしてナイフは尚も止まらず。

——ギインツツ!!  
再び甲高い音が響いた。

ナイフを止めたのは鈴を覆う二つ目の結界。ナイフは繰り返し見た様に地面へとただ落下した。

鈴本人への損傷は皆無。ならばと優花は追撃を行おうと接近し蹴りを放つが、それよりも前に鈴の詠唱が開始される。

「騎士よ、大楯を持って、不動となりて、命果つるまで、守護を担え——『玉盾』」

「——ッ！」

橙色の魔力光が鈴を覆ったかと思うと、その光は凝固を開始する。そして修復された『第一の結界』。それが優花の追撃を完全に阻んだ。光属性中級防御魔法『玉盾』は魔法によって展開される障壁の中で、もつとも近接職に向かず、魔法職に最適であるとされる魔法だ。その理由はこの魔法が空間固定の持続性障壁であるためとされている。

る。

一般的に障壁は発動者の意に従い、移動させることが出来る。代わりに発動中、魔力を流し込む事が必要になるが近接職など移動する者達のサポートとしては最適解となり易いのもまた事実だ。しかしこの「玉盾」はそもそも移動する事がない。代わりに魔力供給は発動時のみであり、その与えた魔力がある限り障壁は持続する。

移動を要する近接職にとっては却って邪魔となり易いこの魔法。しかし移動を無用と断ずる事ができる魔法職にとっては並列で他魔法の発動を行い易い、便利な盾となる。

加えてその下に巡らされている『第二の結界』の正体は障壁自動展開アーティファクト、『ゼーゲン』。このアーティファクトは通常とは異なり、装備者がいる場合に限り周囲から魔力を吸収し、それを糧に障壁を展開する。

これにより鈴は常に障壁を二枚拵えた状態での戦闘が可能。正しく鉄壁と言える防御特化。これを砕かねば優花の一撃は鈴に届く事は無いだろう。

障壁が貼り直された事により、蹴りを放つ位置がズレた優花。それにより地面に降りる際、多少ながら姿勢を崩す結果となる。

「火よ風よ、慈悲は要らぬ、荒々しく獰猛に、迫り来る咎人を、焼き返せ——『衝壁』」

それを隙と断じたのか。鈴は攻性の障壁魔法を展開する。爆風の障壁が優花の目の前で展開された。炎の盾はそのまま爆風により加速。優花ごと轢き殺そうと、地の草木を焼き焦がし、地面に刺さっていたナイフを吹き飛ばして行く。

対人戦において一番凶悪とされる属性は火属性だ。何せ手軽に敵を行動不能とし易い。水・風・土はあくまでも敵に物理的な傷しか与えられない。闇属性は直接的な攻撃とは成り得ず、光属性も後遺症は残り辛い。

だが火は初級魔法ですら、当たらずとも致命傷となり得る。周囲へと放たれる熱波が、生物を構成するタンパク質を焦がすからだ。この世界の住人は体内魔力による火への耐性や治癒魔法により重症とな

る事は少ないが、それでも凄惨たる光景を生み出し得る魔法属性なのだ。

それ故に火属性魔法は対魔物・対異種族が基本とされており、一般的な手合わせでは基本的にタブーとされている。闘技場におけるデスマッチならばまだしも、学園などでは習いはするものの対人戦では無用の品となり易い。

だからこそ鈴がこの魔法を発動した事実は、優花を確実に倒すという意志を過剰なまでに感じさせた。

喰らえば一溜まりも無い一撃。優花は横に体を倒す形で回避する。熱波が優花の肌を炙ったが、中距離職故の魔耐の高さがダメージを軽減してくれた。

「うん、そうだよね、恵里。ちよつと焦っちゃったね？ 落ち着いて削らなきゃ…」

(? …まあ良いわ、取り敢えずやり直しね)

鈴がブツブツと何かを呟く。明らかに正気では無い言葉の数々を疑問に思いつつ、優花は手元のナイフ一本に魔力を流す。すると地面に転がっていたナイフが急に動き出し、優花の手元へと一目散に帰って行った。

このナイフは十二本で一式の国宝アーティファクト。『使徒』として戦う定めを背負った際に王国から下賜された物で、名を『群鳥』<sup>むらとり</sup>と言う。投擲の飛距離を伸ばす効果に加え、仕込まれた感応石により流された魔力に反応し、使用者の手元に返ってくるという効果を持つ。正しく【投擲師】である優花にあつらえ向きの性能をしていた。

その能力故に使用者の手元に一本でも有れば、全てを手間を取らず回収できるという地味であるが役立つ能力は時に不意打ちなどに用いる事が出来る。

だがこのアーティファクト、威力強化などの様な直接戦闘と関わる補助は存在しない。その為、数多くある国宝アーティファクトの中でも、下位に類するアーティファクトとなっている。

「ここに衝撃を望む——『石球』！」

「呑み込め、母なる大地よ——『地浪』」

「遙か高く、蒼穹より落つるは、礫の涙——『落礫』！」  
「ッ——厄介、ねっ！」

そうして次の攻撃準備を行う優花だが、その前に鈴が魔法を矢継ぎ早に発動する。

あまりに早い連射。優花は巧みに身体を動かし、合間を避けて行くが何せ数が数。次々と優花の肌を掠め、数え切れないほどの傷を作り出して行く。

そしてそこで…漸く優花は気が付く。

己が走り駆けたであろう道。それを示す様に赤い斑点が、地面を彩っている事を。

(傷が——!?)

『飛砂』が作り出した傷の数々。それだけでは無い。つい先の連射で出来た傷も。その全てが一切止まる気配が無い事に気が付いた。

これまで戦闘中という状況により、一種の興奮状態へと陥っていた優花。それ故に己の傷の状態確認が明らかに遅れてしまっていた。

——ちよつと焦っちゃったね？

——落ち着いて削らなきや

鈴が先程、呟いていた言葉を思い出す。成る程、鈴の戦闘スタイルはどうやら持久戦を主軸とするらしい。

恐らくこの傷の状態もアーティファクトによる物だろうと結論付けた。よく見れば鈴が手に持つ鉄扇はいつもの装備と種類が違う。そこから見ても、その予想は大きくは外れていないだろうと考えられる。

実際鈴が手に持つアーティファクトは、教会から与えられた物だ。名を『黒扇』、土属性魔法の攻撃に『不治』の状態異常を付与する。

『不治』の状態異常は文字通り、傷の回復を阻害する能力を持つ。状態異常の中でも軽い部類で、回復は容易。初級治癒魔法であつても解除する事が出来る。

(そうなつて来ると目的は私の失血狙いか。こっちの攻撃は障壁で通じないし、アッチは結界内で魔法を打ちまくる。初級魔法ばかりか、けど、その代わりコスパがいい物ばかり選んで魔力を切らさない様に

してるっぽいわね。しかも私はアイツら二人と違って、尖った武器が無い。二枚の障壁を一発や二発で倒すのはまず無理。：回復魔法は効くかもしれないけれど、その隙を見せれば鈴の攻撃でやられる。その為には避けながら倒すのが無難。けどその時間もまず無い)

全くもって不利だ。優花がアーティファクト一つで戦っているのに対し、相手は念話石を含め三つ。しかもそのどれもが破格の性能と来た。

(どうする? どうする? どうやって気付かれない様に準備する?)

園部優花は思考を巡らせる。己が描く一手に如何にして近付けるのか、その道筋を頭の中で描いて行き——その前に鈴が鉄扇を振るった。

「——『岩杭』」

土属性中級魔法、『岩杭』。瞬間、鈴から一定範囲内の地面が波打つ。

当然、それだけの効果の魔法がある筈もない。優花はすぐに鈴の有効範囲テリトリーから逃れようとする。

だが：遅い。踏み出した足の甲から土の針が見えた時点で、優花はその事実を理解した。

——ドドドツツ!!!

突き刺す、貫く、穿ちて、突き破る。

手、脚、腹、肩：急所では無いものの、行動を制限する箇所を的確に、大地は串刺しにして行った。

「…ごめんね、優花ちゃん。鈴にはね、負けられない理由があるから」やがて大地の槍は砕け散る。優花を支える物はもはや何も無い。物言わなくなつた優花は、夥しいまでの血を溢しながら、ただ地面へと崩れ落ちた。

「すぐに：終わらせるから、そこで待っててね」

空からカウントダウンの声が聞こえる中、鈴は優花に背を向ける。

曇った瞳は、もう前だけを見ていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(やっぱアイツ、ヤベエな…)

幸利は森の中、木の上を移りながら眼下に広がる光景を見ていた。そこには――

「ああ、――!! クソがつっ！ 邪魔してんじやねえぞ！」

――暴風を彷彿とさせる刃が、幾重にも閃いていた。

幸利が洗脳した鳥が、虫が、動物が。数の利など関係無いと言わんばかりに塵殺されて行く。槍にこびり付いた血肉を払い、檜山は幸利に吠えた。

「清水！ テメエ、雑魚が雑魚を並べても、雑魚には変わりねえつてのが分かんねえのか!？」

「あれっ？ すまん。俺の『言語理解』がバグったらしい。もう一回言ってくれ」

「ほざけえ!!」

突進。ただひたすら突進。

幾度も無く繰り返される同じ行為に、幸利は正直呆れていた。

(うーん。思ったよりも単調だな、コイツ。ちよいちよい傷ついてんの気に掛ける様子もねえ。【軽戦士】つてもうちよいテクニカルなイメージあったけど、コイツはどっちかっていうと【狂戦士<sup>バイサーカー</sup>】だよなあ)

と、思いながら幸利は闇属性魔法によるデバフを更に重ね掛ける。

するとガクリツとバランスを崩す檜山。その瞬間を周囲の動物等は逃さない。嘴が、爪が、牙が、針が檜山を攻め立てる。

「ツ――！ 邪魔つってんだろ!!」

すぐに平衡感覚を取り戻し、槍を振り回して悉くを吹き飛ばす檜山。しかし今の彼には余裕があまりあるとは思えなかった。

闇属性魔法は敵の魔法に対する耐性、即ち『魔耐』の値によって勝負が大きく分けられるとされている。

そして檜山の『魔耐』の値はかなり高い。少なくとも、並の闇魔法師では何の干渉も出来ないのでは無いかと思う程に。だからこそ檜山も幸利に対して愚直に突貫したのだろう。

要は油断だ。やっぱり舐められてるか、と思いつつも幸利はその油断を嘲笑う。

幸利の闇魔法の腕は他に比べ隔絶している。洗脳する為に闇魔法を研究していた経歴もあり、闇魔法を『魔耐』の値をある程度無視して干渉する事が可能となっている。

流星に人間相手に洗脳までは出来ない。しかし一瞬の意識の余白を作る程度ならば出来る。

同時に森から片っ端集めた動物を特攻させて、チビチビ削ると言うわけだ。

決定打はそこ等の動物に『縛解』を掛けて、突貫させれば十分だろう。そして身動きを取れなくすれば、テンカウント程度容易だ。

(まあ後はアーティファクトを要注意だな。序盤は俺を舐めてただろうから使わなかったんだろうが……ここまで追い込まれちゃ流星に使うだろ。それを警戒しなくちゃな。取り敢えずキルスコアをもうちょい稼いで貰うとするかね?)

幸利に油断は無い。失敗の数々は『ウル』で学んだ。だからこそ慎重に、現在考えられる手を可能な限り予想し、それを潰して行く。

だから……それは決して油断では無かった。

檜山という人物像を見ても、性能を見ても。檜山がその手段を持ち得るなど、まず有り得なかった。

その鍵言を、檜山は告げる。

「戦起こりし心音に安寧を——『夕風』」

——は？

檜山が唱えたのは闇属性初級魔法、『夕風』。効果は簡易、対象者の精神状態を安定させるという物だ。ただそれだけ。敢えて言うならばこの世界の精神科医の必須魔法、と言う程度。後は戦時中は兵士の士気を下げない為、用いられる事があると言う程度だ。

少なくとも接近職の兵士が覚えるという事例は少ない。【闇魔法師】に任せれば良いという風潮が強い為だ。

檜山はその典型例であり、攻撃系統ばかりにしか目が行っていない。幸利はそう檜山を評価していた。苛立ちを力に変え、暴れ回る様な奴だと思っていた。

だからこそ溜まっていた苛立ちごと、檜山自身の精神を整理し直すなど：まるで予想出来なかった。

闇魔法は六大魔法属性の中でも最弱とされている。その理由は先程も上げたように『魔耐』の値にお祈りしなければならぬ相性がある事ともう一つ。掛けられたとしても対処が容易いという点にこそある。

例えば光属性の结界。これの中にいるだけで、闇魔法は十分に防ぐ事が出来る。幸利が鈴との対決を避けたのはそれが理由だ。単純に相性が悪かった。

他にも『治癒魔法』による精神回復、精神メンタルの強さで弾き返す、呪詛返し：など多くの手が闇魔法の対処としては存在する。幸利もそれ等に関してはある程度想定してもいた。

だが今回の檜山の対処方法はかなり無理矢理だった。単純に言うならば檜山は自身の精神を幸利の闇魔法ごと上塗りしたのだ。他人が上塗りしようとしただけなら、幸利の強度には敵わない。しかし自己で上塗りを行うならば、その限りでは無い。

何故ならば人間の精神に最も近いのは、結局の所その物を自身だ。故に魂魄の知覚が他者よりもしっかりと行え、結果的に練度が高くなるのだ。

（誰かの入れ知恵？ だとしたら、一体どいつが？ 教会？ な訳ない。奴らは自分達自身は策謀なりを用意するが、『使徒』本人には頭を使わず、命令だけを伝える。それはアイツ等が他人を傀儡として用いる事を基本としているからだ。国王なんかを見ればその傾向は顕著だ。檜山なんか傀儡としては特に使いやすい。俺もそっち側だから分かる。だからこそ檜山にこんな入れ知恵をしたのは、少なくとも檜山を対等として見ている、もしくはそれらしく振る舞ってるかの二



扱…)

幸利はここで雑念ノイズが入った。今は必要が無い、檜山の背後にいる者の正体の看破を始めてしまった。ある種、それは檜山の隠し手札による副作用とも言えた。だが…

「——何処見てやがる、雑魚が」

「ガッ——!?!」

——鎖デブフから放たれた猛獣を前に、その思考はあまりに軽率過ぎた。彼の景色に映るのは、一瞬で細切れになった動物の群れ。そして幸利の腹に突き刺さる槍の柄。

瞬く間の攻撃に体が浮き、視界に火花が散る。

あまりの衝撃に身体が吹き飛ぶ。痛い。辛い。しかし幸利はそれにより少しでも距離を取れると思考する。

「ここに風撃を望む——『風球』」

「は？——なあっ!?!」

——しかしそうするにはあまりにも思考が遅過ぎる。彼の脚が速過ぎる。

気付けば檜山は横に居た。幸利は未だ着地すらしていないと言うのに。

己をかち上げる様に解放された上昇気流。それが幸利の着地を防ぎ、空中に縫い止めた。

「さて…クソ雑魚が。調子に乗りやがって」

瞬間、檜山の拳が閃く。その拳は幸利の首へと迫り、瞬く間にその首を握り締めた。

強制的に宙ぶらりとなる幸利。呼吸が儘ならぬ為、口を開け閉めするが酸素がまるで捕らえられない。意識が少しばかり曇り掛かる。

そんな中で檜山は嗜虐的に、憤りながら、それでいて冷徹に。矛盾した感情を内包した笑みを浮かべた。

「——蹂躪だ」

そして檜山は幸利の体を空中に投げ、その一瞬で即座に刃で幸利を

浅く切り刻んだ。

瞬間、幸利の全身が受けた傷よりも遥かに激痛を訴えた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

カウントダウンが8まで行き着いた時の事だった。

「ここに焼撃を求む——『火球』」

鈴はそれが優花の最後の一撃だと思い、二重の障壁を全力で展開した。これさえ受け切れれば勝ちだと、そう判断したからだ。

しかしそうでは無かった。

焼いたのは他でも無い、死に体の優花自身だった。

「——へ？」

自爆？ 制御の失敗？ それとも気が狂ったか？

鈴は思考する。しかし思考すれど鈴が答えに辿り着く事は無い。思考を進める度に益々混乱の渦に落ちて行く。それもその筈だ。

たかが狂人にされた者が、狂人を理解出来よう筈が無い。

そして鈴が目を丸くしている中で、園部優花は黒煙を纏って仁王立ちして見せた。

「…なるほどね。やっぱり肌を焼いちやえば傷は塞がるのね」

「…う、うそ？ なんで？」

「それにしても鈴。アンタ、案外まともね？ 頭とか心臓ならまだしも…肝臓とか関節とかには一切攻撃してこなかったじゃ無い。急所だけでも防御しようとしたけれど、来なかったから結局全弾受ける事になっちゃったわよ。とんだ無駄骨ね。何処ぞのバカ二人に笑われちやうわ」

「な、なにいつてるの？」

「まあ、良いわ」

見れば流血はどれも止まっていた。先程の爆炎が無理矢理傷を焼き塞いだからだ。乾いた血の粉が優花の肌にはこびり付いている。

正気では無い。本人は牙を剥き出しに笑っているが、痛くない訳がない。何故そこまでして立つのか。何故倒れてくれないのか。鈴にはまるで分からない。

じりっと鈴の足がいつの間にか半歩、下がっていた。

それは顕著な鈴の心象の現れ。目の前の存在が己に何かを突き付けて来ている様で恐ろしい。見たくも無い物を見せられている気がした。

そんな鈴に対し、優花は12本のナイフを手にする。満身創痍。絶対不利。そんな状況にも関わず、口の端が吊り上がっている。

元来、動物の笑顔は一種の威嚇行動と言われている。故に笑みの本質とは敵を慄かせる事にこそあり、人間の笑みは特殊なケースであるとされている。

優花の笑みは正しくそれだった。隙あらば射殺すと言わんばかりに眼光を鋭くしている。

「覚悟なさい、鈴。私はやられっぱなしじゃ気が済まないタチよ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——ゾクツ

執拗に攻撃していた檜山。その背筋にふと寒気が走る。

状況は圧倒的。ここからは逆転の余地など一切無いだろう。そう思う程に、檜山は事実有利にいた。

だからこそ痛め付けている。檜山の槍型アーティファクト『呪華槍』は、刃の箇所を敵を傷付ければ付ける程相手に激痛を与える能力を備え持つ。本来はハジメを痛ぶる用で有ったが、気が変わった。生意気な幸利雑魚に身の程を分からせる為、その刃を使用した。

周囲に気配は無い。幸利を痛ぶっている途中もしつこいまでに襲い掛かって来たが、全ての動物は亡骸に変わっている。幸利のペットらしい白鳩の魔物は見掛けないが、直接的な攻撃手段になり得ない以上気にする意味も無い。

(…よく思えばもう痛ぶる意味もねえ。とつとと気絶させて南雲の方に行きやあそれで良い)

つい先程までサンドバッグにしていたが、もう気が済んだ。すぐに倒して、南雲の排除に一刻も早く向かう。そう檜山は自身に言い訳をした。

本当は、まだ苛立っている。何故かは分からない。しかし目の前の存在がトコトン気に入らない。

しかしその苛立ちよりも、檜山は南雲を虐殺する方を優先した。傷だらけの幸利にトドメと全力のハイキックを見舞おうとした、が。

「ふんぬっ！」

「…あ？？」

瞬間、先程までの満身創痍が嘘かのように、幸利は檜山のハイキックをクロスした腕で受け止めた。腕には幸利自身を押し出す様に力が込められており、砕けた様な感触と共に、幸利は瞬く間に吹き飛んだ。だがそれでも幸利は足だけで見事着地。隙を見せる様子も無く、二足のみで立ち上がって一言。

「ハッ…あのゴリラ女の蹴りに比べりゃヘナチヨコだな。本気で第一線張ってんのか？」

「…死に損なっただけで調子乗りやがって。倒れるまでの時間が延びただけだろ」

反応した事にこそは驚いたが、問題無い。腕は砕いた。幸利お得意の魔法もこの距離ならば発動前に殴る事が出来る為、意味が無い。

だからこそ檜山はただ仕留めるのに時間が掛かるだけだと判断した。当然、外部から見てもそう思えるだろう。

ただ不気味なのは先程の悪寒。そして幸利に垣間見える余裕。それ等が檜山にとっての不安要素となっている。

そして直ぐに距離を詰めようとしたが、その前にもはや何度目になるか。動物の群れが檜山へと迫る。

当然デバフが無い故に瞬殺。動物の弾幕を切り抜け、再度幸利に迫ろうとする。

その間も会話は続けられる。

「違どうぞ檜山。さっきのがラストチャンスだったんだ」

「何？」

「俺を倒せる、お前にとっての唯一のチャンスだった。それを決められなかった時点で、とっくにお前は負けている」

「…ふざけやがって」

「巫山戯てないぞ？ 何たって巫山戯る意味が無いからな」

そして幸利は、檜山にとってのトンデモ爆弾を投げ込んだ。

「南雲ハジメの脚元にも及ばねえ雑魚程度、どうとでもなるって言うてんだよ」

「……………ああ、ッ!」

それは逆鱗だった。

「夕風」という冷静さを対象に与える魔法の効果を遥かに凌駕する程、激情の炎が檜山の中で燃える。目は血走り、握り締める槍から苦渋の音が鳴る。それにさえ一瞥出来ない程、檜山は怒り狂っていた。

しかもだ。それに加えてもう一つ、目の前の雑魚に苛立つ理由が今、よく分かった。

似ているのだ。南雲に。目に宿る純然たる意志が。

それに気が付くと、もはや我慢など出来なかった。すぐに檜山は話を打ち切り、戦闘モードに切り替わる。もはや口喧嘩という段階を、檜山の中では通り過ぎていた。

「もう邪魔だ。テメエはとっとと消す」

檜山は構える。姿勢を低く、槍の切先を幸利に向けて。

狙いはその構えから容易に推察可能。十中八九、突進の構えだろう。

だが接近職、その中でも速さに特化している【軽戦士】の敏捷は伊達では無い。少なくとも、魔法職が肉眼にて捕らえられる様な速度で無い事は確かだ。

ある種、それは檜山が本気になった事の示唆。たった一人の少年に向けられていた殺意が、僅かながらに幸利にも向いた瞬間だった。

その様子にニタリと笑い、幸利は両腕を広げる。

幸利の黒いローブには魔法陣が刻まれている。これはかつて国から貰い受けた代物であり、今尚幸利が愛用し続ける闇魔法補助のアーティファクト。

そしてその中に一つ、厳密には「闇属性魔法」では無い魔法陣が、大きく描かれている。

その魔法陣が紫水晶アメジストの如く煌めく。

「さて、準備は整った。力貸してもらおうぜ？ 古代のヤベー奴様」

——表舞台の横に於ける、熾烈な二つの戦い。それは今正しく終幕を迎えていた。

## 29、己が意志の下、憧れを叫べ

「よっしゃー!! 下克上じゃ、オラ——!!」

『勝ったど——!!』

『やった——!!』

「嘘…私が、ユキに負けた?」

何日前になるだろうか。『学会』後の、とある朝の戦闘訓練。そこにはガッツポーズを高々と掲げる幸利とその使い魔、そして四つん這いになる優花の姿があった。

これまで優花はその巧みな戦闘法により、一度たりとも幸利に負けた事は無かった。

ポチはタフだが遅いし、ピナに関しては直接的な戦闘力が無い。幸利本人に関しては魔法に才はあるが、その前に優花が体術で倒すと言うのがこれまでの流れであった。

しかし何度も蹴られ、組まれ、地に伏し続けた幸利は何とか対接近戦への対処法を獲得。そしてデバフの数々を重ね合わせ、遂に優花を組み伏せる事が出来たのだ。

「フハハハハ！ これまで散々煽ってくれやがって！ 見下される気分は如何ですか、優花さくん？ 如何なんですか？ 教えて下さいよ〜?」

「このっ、一回勝った程度でっ」

「はーい、聞こえない。敗者の戯言なんて聞こえない」

「本気で勘に触るわね、アンタ!!」

「うん！ 僕はね、煽るのが大好きなフレンズなんだよ！」

「~~~~ツツ!!!」

暖簾に腕押しとは正しくこの事。優花は非常に苛立っていた。他の人間は別に良い。コイツに見下されるのはゴメンだと、内心ブチギレていた。

しかし負けたのは事実。出来る事と言えばせいぜい、負け惜しみを言う程度。当然幸利はノーダメージ、どころかむしろ煽って来る始末。

「ま、優花は動きに意外性が無いな。フットワークは軽いが、大体が常識の範囲内。優等生なだけの動きだ。それなら予想もしやすいし、対処しやすいってんだ」

「アンタはつい最近まで、そんな私にやられてたクセに……」

「お前に散々言われて来たが、俺も接近戦が雑魚だったからな。現段階の俺も『受け』しか出来ねえが……もうちょいで『攻め』の手立ても手に入りそうだ。そうなたら……またお前と差を開けちまうな。あの美人さんには感謝しなきゃな」

「……腹立つわねえ」

だが言う通りだ。

優花は基本的にオールラウンダー。全てをバランスよくこなし、場合に沿って対応するスタイルを取る。

それは一見すれば完璧だ。しかしそれでは格上にはまず敵わない。何故ならばそれは自分の得意分野が存在しない事を指しているからだ。

敢えて言うならば投擲と絞め技だが、それも決め手としてはかなり弱い。

(決め手ね……思い当たる節が無いわ)

投擲、絞め技、敏捷、魔法、感応石込みのアーティファクト。己の武器を再確認するが、どれも決め手にはまず至らない代物ばかり。意外性も無く、ただただ堅実な要素ばかりだ。

(そーういや、南雲の奴は意外性の塊みたいな奴ね。アイツのやってる事真似てみたら何か良い手立ては思いつ……)

「……あ」

「おん? どうした? そんなでつけえ口開けやがって」

「暗に私の顔がデカイって言ってる?」

「流石にその煽り文句は思い付かなかったわ」

「……ま、今はそんな事は良いわ」

「?」

思い付いた、一つだけ。自身の持つ数々の武器で放つ事が出来る騙し手が。



とは言えあくまでも今、優花の中にあるのは「出来るかもしれない」という仮説だ。マトモな学者で無い自分では、その仮説が正しいのかはまるで分からない。

だが試す価値はある。優花の顔に、力強い笑みが溢れた。

「ねえ、ユキ。一つ、私の実験に付き合ってくれない？」

「…嫌な予感しかしねえ」

「大丈夫よ、多分。後でアンタの手伝いもしたげるから」

「不安しかねえな？ ま、受けるけど」

☆☆☆☆☆☆☆☆

——そして今、優花は瀬戸際に立たされている。

「もう…いい加減、倒れてよ！」

「嫌よ。私がそんな殊勝な性格に見える？」

「ツ——『石球』！」

戦い始めて何分経っただろうか？

一時間？ 三十分？ はたまた数分？

どうだつて良い。そんな思考も今は、彼女にとって無駄だった。

(右、上、下の三方向…それらが見せ弾。本命はタイミングをずらした

斜め左上の一撃)

数秒にも満たぬ、瞬く間の駆け引き。戦い始めは失敗も多く、受けた傷は数知れず。無理矢理肌を焼き、塞いだ痛々しい傷。

しかしその傷は蓄積した経験の数と同じ。あれほどまでに苦戦していた弾幕の回避を、優花はもはや息をするかの様にこなしている。あまりに自然で流麗な身のこなしは、精霊の踊りにさえも見えた。

周囲も認める所だが、優花の一番の武器は天職通りの投擲では無い。真の武器は生来から授かっている繊細なボディーコントロールだ。

その腕が、脚が、身体が。彼女の思い描く最善を再現する。

一見すれば地味だがその有力性は凄まじい。普通の人間が動きを再現する為に必要な修練を、彼女は数秒で再現出来る。

彼女に与えられたその天性のセンスは、数多くいる『使徒』の中でもトップクラス。それ故に彼女はオールラウンダーたり得ているの

だから。

もはや何度目になるのか。優花のナイフが結界に衝突する。

凄まじい速度で投げられたナイフであるが、彼女の二重障壁の前では無意味。そうしてナイフは幾度と無く繰り返した様に重力に従い、床へと突き刺さった。

鈴の周囲には同じ末路を辿るナイフが幾つも転がっている。優花が持つナイフは十二本。その内の四本が、障壁を破れずに落ちていた。

もう何度も、優花のナイフは二重の障壁を崩せずにはいた。

——捌はち

「無駄だって、何度言えば分かるの!？」

「分かんないわよ？ 雨垂れ石を穿つって言うしね」

「無理だよ！ 絶対！ 鈴の防御を破れるはずが無い！」

鈴の死角、背後からせめぎ合う音が聞こえた。【投擲師】故の物理法則を無視したナイフの軌道。

確かに【結界師】の傾向として、結界の見えない部分の強度が弱くなってしまふ事は良くあるミスだ。数ヶ月前の鈴も同じ様なミスを幾度かしてしまっていた。

しかし鈴は半年間も『使徒』の中で結界術のエキスパートとしてやり遂げて来た。その程度の対処、今更何の問題も無い。現に鈴の結界は割れるどころか、悲鳴を上げる事すら無い。

——漆しち

「だって鈴は、恵里の信じてた物を信じてる！ 恵里を信頼してる！ だから負ける訳には行かない！ 負ける訳が無いんだよ！」

「そう……」

「優花ちゃんも南雲くんを信頼してるだろうけど、そんなの関係無い！ 鈴は負けない！」

「信頼……ねえ」

次は地を這う様な一撃。されど鈴の障壁には意味がない。また鈴の足元に、新たなナイフの墓標が立てられただけだ。

——陸りく

そんな状況にも関わらず優花は鈴の叫びに一つ、否を唱えた。

「期待に沿えなくて悪いけれど、鈴。私は全く南雲の事を信頼してないわ」

「…へ？」

的確に投擲されたナイフは彼女の思う様に曲がる。そして鈴の障壁と鏝迫り合う。

「だってアイツの事信頼してたらアホらしいもの。いつつも馬鹿やってるし、抜けてるし、放って置いたら勝手に死に掛けて…その癖他人の事は一丁前に助けようとする、そんな奴。そんな大馬鹿、信頼出来る訳ないでしょ？」

先のナイフと時間差で飛来したまた別のナイフ。それは丁度鈴を挟み込むかのような位置に投擲された。

真逆の二方向からの全力の投擲。すると僅かにだが、鈴の一枚目の障壁にヒビが入った。

されどそれ以上のダメージを齎すことは無い。また繰り返す様に二本共に落下する。

——伍ご

——肆し

「だから…アイツの意志に私自身を委ねるなんて出来ない。そんな事してたら…アイツは自分一人で解決しようとして、勝手にどっかに行っちゃうから。そんなの私は、絶対に許さない。絶対に一人なんかにさせない。私は私自身の意志で、南雲の助けになる」

手持ちのナイフは残り四本。だが投擲する手は止めない。

傷だらけの身体にも関わらず、時間が増すごとに優花の投擲による威力は増している。

繰り返す様に放たれたナイフ。それは鈴の一枚目の障壁を遂に砕き、同様に地面へと突き刺さった。

——参さん

「私は他人南雲に私の意志を委ねない。私は私の思う道を行く」

「うるさいよ！ 鈴と恵里の邪魔になるなら…どいてよ！」

鈴は魔法を唱える。土属性初級魔法、“飛砂”。攻撃範囲・

消費<sup>コ</sup>魔<sup>マ</sup>力量・速度は良好。砂を飛ばすだけで、敵の肌に傷を付けることしか出来ない弱点を持つ。しかし傷の回復を困難にする『黒扇』との相性は抜群。

恐らく此方の攻撃に慣れ切った優花ならば、避けるのは難しく無いだろう。

それでも構わない。鈴は持久戦に持ち込めればそれで良い。肌を焼き、傷を塞いだ優花だが流れた血の量は並ではない。待てば確実に行動不可、或いは気絶に持ち込める。

そう思ったが故の、守りの一手に鈴は躍り出た。

それに対し優花は――

「…地を這え、荒れ吹く、雷霆の蛇」

――回避する事なく、突貫。そして詠唱を開始した。

これに驚いたのは鈴だ。現在の状況で回避しないなど、選択肢としては愚の骨頂。其方を選ばれた事は鈴にとって都合ではあるが、同時に予想外故の動揺を孕ませた。

瞬間、残り一枚の鈴の結界が揺れた。

（――なっ!?!）

背後を見ればそこには、障壁を貫こうとする優花のナイフがあった。

当然一度の攻撃程度では碎けない。だが障壁にはかなりのダメージが有っただろうと予想される。耐えてあと二、三撃か。

――式<sup>ニ</sup>

同時に砂塵から突き抜ける陰がある。

優花だ。数々の砂により肌を切り刻まれている。されど膝を屈する様子は無く、彼女は今にも障壁へと迫っている。

此処で鈴は優花の狙いを察した。遂に全霊を掛けて己の障壁を壊しに来たのだと。

ならば鈴にもう攻撃は必要ない。優花が狂った様に攻めている事からして、もう優花の限界は近い。勝負の内容は切り替わったのだ。

優花が防御を崩すか。

鈴が耐え切るか。

魔力を残り一枚の障壁もじきに破られる。火事場の馬鹿力とでも言うべきか。今の優花の攻撃力は凄まじい。それこそ今にこの障壁を破りかねないまでに。

だからこそ鈴がするべき事は障壁を繰り返し展開する事。【結界師】としての本領を發揮するべきなのだ。

目の前の優花がナイフを一本投擲する。至近距離故に威力は絶大。障壁越しても空気が揺れる。

されど障壁は耐えた。ひび割れていようと、形をまだ残している。鈴が詠唱を完結させるには、それだけ有ればじゅうぶ——

「——フツ!!」

——その落ち掛けたナイフの柄を、優花は蹴り付けた。

人カパイルバンカーとでも言うべきか。失った勢いを取り戻したナイフは、障壁を見事破壊。そして鈴へと迫る。

鈴は紙一重で回避。ナイフは鈴の背後の地面に突き刺さった。

——壺いち

だが、これでもう鈴を守る物は何も無い。

優花の拳が鈴を捉えようとして——

「——『聖絶』、全方位展開!」

——優花の拳は最硬の結界に阻まれた。

光属性最上級防御魔法、『聖絶』。今まで鈴が攻撃と並行して展開していた結界とは違う。鈴が防御に専念したが故に扱える、並外れた防御力を持つ結界だ。

これならば一度や二度の攻撃ではまず破れない。鈴が魔力を注ぎ込める限り、この結界は持続する。

そして鈴は消費魔力を軽減するアーティファクト、礼装『天切之巫女』あまきりのみこに身を包んでいる。まず自分が魔力切れするよりも、優花が失血で動けなくなる方が明らかに早い。

(勝った——!!)

コンマ数秒でもズレていれば、優花の拳は鈴を捉えていただろう。

だが己を包んでいた二重の障壁が、そうはさせなかった。優花の猛攻に耐え切り、鈴が完全な防御を整える迄の時間を与えた。

ギリギリの駆け引きがあった故に、鈴の心中を安堵が満たした。  
そして――

「――零<sup>雷撃</sup>」

――優花が持っていた最後の一本のナイフ。そして鈴を取り囲む  
11本のナイフ。それら全ての感応石が、眩く魔力光を溢れさせた。  
そして、雷撃が弾けた。

「――へ？」

鈴は理解出来ない。自身は確かに最硬の結界を創り上げた。

割れない筈だ。砕け無い筈だ。それ程に鈴は全力をその結果の形  
成に注いだ。

だが違う。結界は硝子の様に容易く割れ、鈴は雷に撃たれた。

何故？ 何故？ 何故？

幾度と無く思考を繰り返せど、鈴は結論に至らない。

そして瞬間、優花の腕が鈴を捉えたのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

優花の狙いは元より一つだった。

結界を破るなど、火力が無い己には無理だと分かっていた。

魔力切れを狙う持久戦も圧倒的に不利な上に、性に合わ無い。

だからこそ優花は、障壁を無視して、鈴を攻撃する事にした。

その手段を思い付いたのは数日前。幸利からの助言、そしてとある  
阿呆の研究成果により優花はそれを試し始めた。

必要になるのはアーティファクトのナイフ、魔法、そして何よりも  
己の技術だった。

それはズレてはならない。大きく位置をずらしてしまうと、形が成  
立しないからだ。

それは敵を真ん中に据える必要がある。それが最速で魔法を当て  
るのに最適だからだ。

それは怪しまれてはならない。妨害方法は単純で、何よりも騙し打ちとして一番効果を発揮するからだ。

それは一度しか通用しない。己の武器を全投入し、狙いも分かり易いその騙し手は明らかな初見殺しだ。

そして投擲を十一回成功させねばならない。今の自分では技術が無いのか、それ以上の省略は不可能だった。

だから優花は動き回って戦うスタイルの檜山では無く、鈴を相手に選んだ。

だから「衝壁」がナイフの陣形を崩した時点でやり直しが必要だった。

だから優花は障壁に当て続け、敢えて落下させる事で狙いを悟らせなかった。

だから優花は終盤、無理矢理障壁を壊す様な演技をした。だから——この一撃は通じた。

優花の騙し手の正体は魔法陣の形成。11本のナイフで円を形成し、残り一本のナイフにより魔力を循環させると言う物。

ハジメの研究成果の一つに「魔法陣は魔力により成立する」という物がある。その事実を記憶していた優花は各ナイフに仕込まれている感応石を通じて、体内魔力を11本のナイフに伝導。そうして作り上げられた簡易的な魔法陣により、中央点に魔法を発動する。

結界は外部からの攻撃を弾く事に特化している。当たり前だ。自ら守る盾を壊そうとする愚か者が何処にいる。故に障壁という代物は一度内部から衝撃を受ければ崩壊する様に設定されている事が多い。

そうして考えるならば鈴は優花の騙し手に最適の相手だった。動きもしないし、障壁という当てる壁がある。何よりも彼女自身、非常に純粋だ。

正しく、チュートリアルとしてはちようど良かった。

「三本程度で成立するなら楽なんだけど…その辺りは要練習ね」

11本のナイフで作った回復魔法陣で自身の傷を癒しながら、優花は溜息を吐く。

二、三本ならば騙すのも楽だし、手間もない。簡易的に魔法陣を作れる上に、敵にとつては不可避に近い一撃だ。かなり強くなる。試行錯誤が今後も必要そうだと思いつつも、優花は横にいる鈴をチラリと見る。

鈴はぼうつと空を見ていた。ただ十秒間抑え込んだだけなので、意識は問題無くある。ただ彼女は、もう動く意味が無いだけで。

「…負けちゃった、嫌なのに。駄目なのに。勝たなきゃ…駄目だったのに」

ただ虚に、彼女は呟く。どんな真意が彼女の言葉に込められているのかは分からない。同情する事も、敵だった自分には出来ない。

「儘ならないわね、戦いつて」

優花に出来るのは、残る二人の勝利を祈るだけなのだから。

——勝者、園部優花

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「天地よ、我が業ごうに震えよ」

一風変わった詠唱を、幸利が開始する。魔力光を空に立ち昇らせ、外套が魔力の圧力にはためいた。

対する檜山が選んだ選択肢は、最速の突き。

檜山は学んだ。幸利の戦闘スタイルは罠を幾つも用意し、続々と陥らせて行く…正しく協力者に似た様な物だと。

ならば下手に手を打つのは下策。一刻も早く戦いを終わらせる方向に檜山はシフトした。

だから檜山は低く構えて一拍。地面を蹴ろうとして——

『——ピィ』

——白鳩の鳴き声が耳朶を震わせた。

ただ単純に聴こえただけならば過敏に反応する事は無かつただろう。しかし耳元から聴こえたその音は、生物が持つ危機感を揺さ振るに至る。

結果、檜山は突貫を止め、槍を横薙ぎに放った。

しかしそこに居たのはただの動物の群れ。首を、腹を槍が切り裂く。間違えてもその場所に、幸利の白鳩の姿は無い。



瞬間、檜山は視界の端で捉えた。幸利が口角を確かに歪めた事を。檜山は一瞬、それを幸利が魔法で何かをしたのかと考えた。しかしふと思ひ出す。耳を揺さぶった白鳩の鳴き声に、何か違和感が有った事を。

その違和感が、檜山にその答えを与えた。

(——ッ、イヤーカーフスカ!?)

この闘技場を取り囲む結界は通常の物理的結界と異なり、外へ出る事に関しては全く障害作用が存在しない。

理由としては、教会が完璧で大きい結界を張る技術を要していない為だ。デメリット無しに広大な土地を結界で覆うなど、「ハイリヒ王国」の大結界や「アンカジ王国」の『真意の裁断』以外存在し得ない。だからこそ結界は基本的に足し引きで成り立っている。例えば空気を含むあらゆる物の行き来を遮断する様に設定したり、今回の様に一方向からの移動を自由にしたりとして行くのだ。

その穴を塞ぐ為に『神前決闘』では逃亡を失格としているのだ。

そしてルールには使い魔に関してのルールなど存在しない。加えて言えば、幸利はなるべくピナと接触しない様に、教会に存在を察されない様に動かしている。

理由は変にピナを教会の監視下に置きたく無い為だ。その方が動きの自由度が大きいし、悪巧みも出来る。そして何よりも疑似的にチートを使えると考えたからだ。

例えばそう…結界の外に置いてある何処ぞの吸血姫から貰った念話石から、檜山の念話石に使い魔が語り掛けるなんて事も出来るのだ。

イシユタルはその事実にもまるで気付かない。何故ならばこれは檜山のイヤーカーフスにのみ、発声された物なのだから。

(好きな相手の念話石、ハイジャック可能ってどんだけハイスペックなアーティファクトなんだよ、あの念話石…)

もう明らかにあの美人さん、厄案件だろ…と内心慄く幸利。しかしそれ以上に作り上げられた檜山の空白に、嗤う。

「蠢く闇、潜みし夜、這い寄る混沌、尽く我が後に続け」

空白から意識を取り戻した檜山。それ以上言わせてなるものかと、瞬時に突撃した。

槍は幸利の足元に向かって振られる。足さえ奪えば十秒抑え込むなど余裕だと、そう判断した為だ。

だが遅い。遅過ぎた。詠唱は完結した。

それを指し示す様に、世界を曇天が包み込む。それは予兆。もしくは世界の訴え。今から幸利がその身に宿らせようとしている力の正体に、全てを知る世界は恐怖しているのだ。

幸利は最後の鍵言を告げる。

「我は影の支配者——『影帝』」

そして檜山は見た。

つい先まで幸利のみを見ていた己の視界。それが闇一色になる瞬間を。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

魔法の開発は基本的に魔導書の分析により行われる事が九割九部となっている。しかし稀に神話や歴史書からも行われる事がある。

何故ならば魔法の詠唱は力ある文章を歌う事で成り立っているからだ。

この力ある文章の判定は単純に「人々がどれだけその内容に思いを馳せているか」だ。例えば六大属性魔法の詠唱文の多くは神話から用いられる。開発自体は魔導書により理論付けられる。だがより魔法を強力にしようとするならば、人々が思いを馳せ易い神話が手っ取り早い。

そうして読まれた力ある文章は魔力を宿す。それにより人々は魔法陣に体内魔力を注ぐ事を可能とするのだ。

つまり魔法開発には「魔法の理論を完成させる（魔法陣の作成）」事と「力ある文章を探す（詠唱文の作成）」の二通りがあると考えて良い。そして幸利はその内の後者を先に行った。

というのも何処ぞの吸血姫、ティアから託された魔導書は厳密には歴史書と言える代物であったからだ。

書かれていた内容は遠い昔の、とある種族の王様が歩んだ歴史だ。

彼は名君だった。過去数代に渡って続いた戦狂いの王とは打って代わり、知識と優しさにより民と共にあつた。天職は【魔道師】で、アーティファクト等の扱いに対し強い適性を持ち、力も先代らと劣らない程であつた。

他種族領に干渉する事も少なく理性的。歴代を見ても、稀有な存在であつた。

ただ彼の身体は一時、乗っ取られる事となる。悪しき何者かによつて。そして起こしたくも無い非人道的な実験の数々を行い、あまつさえ無意味に他種族領へ戦争させられそうになつた。

それを救つたのは彼の弟であり、そしてその弟が連れて来たとある組織であつた。

その組織は彼の内に居た悪しき者に競り勝ち、そして彼にその悪しき者に抗う術をもたらしした。

その後彼が、そしてその組織がどうなつたかまではその魔導書には記されて居なかつた。だが幸利が彼への理解を深め、そして組織がどのような物で有つたかを知るには十分の内容であつた。

「…やっぱ、こんな世界間違つてんだよな」

その魔導書を初めて読み終えた日、幸利はそう呟いた。

彼の意志を知つた。しかしトータスは彼の望んだ様な世界になつて居ない。

きつと負けてしまったのだらうと思つた。彼も、そしてその組織も。

本を指先で撫でながらふと思う。かつて相反する事となつたあの男。彼とももしかしたら分かり合う道があつたのでは無いか、と。

「…ま、そんな都合の良い妄想か」

幸利はもう現実を生きている。

甘い夢に踊らされる事はもう無い。自身の意志を裏切る真似はもうしない。

だがこの一冊はそんな幸利の意志に、新たな意志を刻み込むには十分であつた。

「アンタの力のついでにアンタの意志も俺が受け継ぐよ、ラスールさ

ん。だからどうか：気持ち良く眠っててくれ」

彼の名はラスールⅡアルヴァⅡイグドール。【イグドール魔王国】と呼ばれる過去の国を治めた【魔王】。

そして【解放者】ヴァンドウルⅡシユネーの兄であり、【解放者】に救われその在り方に賛同の意志を示した、数少ない魔人族の王である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

エンシエントマジック

幸利の発動した古代魔法、〃影帝〃はラスールⅡアルヴァⅡイグドールが生前用いた権能の一つだ。

その効果はシンプルにして絶大、影を実体化し操るといふ物。形を成した影は時に剣となり、盾となり、そして脚となる。

幸利の弱点は接近戦の弱さだった。絶大な魔法の才能と引き換えに、物理戦ではほぼ出来る事が無いという極端さ故に、優花に何度も辛酸を舐めさせられる事となっていた。

それは脳の思考速度が問題では無い。反射神経や筋肉が単純に幸利の思考に追いつかないのだ。

だからこそ〃影帝〃は幸利に効果以上の恩恵を与えた。

「チィッ!? 何だその訳分かんねえ、影は!?!」

「魔法だよ！ とある王様が使ってた、なあ!」

即ち幸利に、これまでは有り得なかつた接近戦という選択肢を与えるに至ったのだ。

三本の影の剣が檜山を襲う。檜山はそれらを弾き、幸利に一撃を入れんと刺突を繰り返す。

だがそれらの攻撃を幸利は影の脚により難なく回避。それどころかカウンターを入れる始末だ。

ザシユツと檜山の軽装の一部が削れる。アーティファクトと同等の硬さと威力、それがこの影には込められている。

当然、これだけ大きな力だ。発動条件も存在する。

というかそもそも古代魔法とは、現代の手段ではどう足掻いても再現不可能とされている魔法だ。〃神代魔法〃がその代表的な物であるが、この〃影帝〃もこの一種に当たる。

では何故幸利はこの魔法を使えるに至ったのか。答えは「闇魔法の派生魔法」、「降霊術」だ。

「降霊術」には主に二通りの効果が存在する。

一つはポピュラーな死者の魂を降ろす行為だ。死者の記憶や声を聞き、またその魂を死体に宿す事も可能となる。地球で言うサトリやシャーマンに近いと言えるだろう。

そしてもう一つが幸利が今回用いた方法だ。即ち、死者のデータの再現を行う力だ。

これは死者自身にほぼ干渉する事はない。代わりにその死者のデータを「死霊術」により『魂』として仮定し、そして己の身に宿すのだ。

正直に言うところにはかなり非合理的だ。何せ手間が掛かる。死者のデータを自身で集めねばならない、これが問題なのだ。

今回の古代魔法の再現でも情報を集め、その上で考察を幾度と無く繰り返す事が必要だった。それはテイアから与えられた魔導書が有っても難しい事であった。

恐らくは幸利に魔族と関わる経験が無ければ、ほぼ不可能に近かっただろう。

そしてそれらを乗り越えたとしてもそもそもの問題がある。

それは幸利自身の「死霊術」の適性がそれ程高くない、という点にある。

適性が無いにも関わらず魔王級の古代魔法の再現、普通ならば無理だ。「闇魔法」の天才と言える幸利でも、まず無理だ。

だから檜山に殺させたのだ、数多くの生命を。

「死霊術」の根底は死後の世界と自己を繋げる事。だからこそ周囲に現在進行形で死後の世界へと行こうとする魂が多ければ多い程、

「死霊術」の行使は容易となる。

恐らく何十体という頭数でも難しかった。檜山がそれこそ一人で森に潜むほぼ全ての生命体を切り刻んで居なければ、幸利はこの魔法を発動出来なかった。

(動物の皆さんには悪いが…俺も負けられないしな)

冷静に見えてギリギリの綱渡りの上で、幸利は勝機に手を伸ばせる。影が檜山の体を続々と削っていく。

「クソッ！ 何でっ!? テメエなんかには、俺がア!!」

「ああ、そうだ。悪いが…勝たせて貰う」

「俺はッ、南雲を殺して——」

「…ハッ、させるかよ」

影の連撃は凄まじい。素早い筈の檜山が対応に回ってなお、優勢に回れる程に。

聞かん坊の様に喚く檜山。するとその言葉の一部に、幸利は眉を歪める。

それは間違い無く、怒りの表れだった。

「俺はな、あの大馬鹿に狂わされたんだ。きつとお前と同じでな」

そう、幸利はあの図書館で出会ったあの瞬間に狂った。

真っ直ぐに見つめて来て、愚直に称賛の声を上げ、拳句の果てに『友達』などと抜かした。

だからこそ幸利は未だに【英雄】<sup>主人公</sup>になれず、そして生きている。

「アイツを知ってから俺の世界は変わった。クソみたいに一途で、そんで目を離せば突っ走って新しい世界に行ってる。アイツはそんなド阿呆で…そんで愉快的な奴だ」

だが悪くは無い。

空想の様に世界は上手くは行かない。痛い思いはするし、喧嘩も良くする。戦闘訓練では散々辛酸を舐めさせられ、上を見れば自分が惨めになる程だ。

それでも後悔は無い。世界を繰り返しても、清水幸利はきつと同じ様に此処に立っているに違い無い。

アイツらと歩く荊の道なら悪くない、そう思えたから。

「そんな奴、アイツ以外に世界に居るか? 居ないだろ? あんな面白おかしい奴、他にいて溜まるかってんだ。…あ、いやもう一人いるか」

ハジメは荊の道を全速力で駆け抜ける。止まるなんてしない。どれだけ傷だらけになっても、アイツは止まらない。

優花も同じく荊の道を走り抜けている。時に二人の手を取って、こんな楽しい事は他に無いのだと胸を張って進む。

ならば自分だけ取り残されては損だ。あの二人と同じ景色が見たいから。そして進み続ける二人を見ていたいから。幸利は同じ様に鼻歌混じりで進むのだ。

「だから譲らねえよ。奪わせねえ。俺からアイツを。アイツを見る特等席となりを奪わせなんか、絶対にさせねえ。だから——」

影の猛威が増す。指揮者の激情が、その一撃一撃に込められる。

やがて檜山の槍が柄本から砕けた。度重なる大火力の連撃に、細い槍では限界が来てしまったらしい。

その事実を目を剥く檜山を眼下に、幸利は冷酷に告げる。

「——沈め、檜山。お前の望む世界と共に」

それは絶対的な王命の如く、無慈悲に影の拳と共に下された。

「あ——、クツソ疲れた！ 影の操作頭使うんだよなあ！ アー  
ティファクトの所為で傷もアホほどいてえ！ 良く耐えた、俺！」

出来上がったクレーター。埋もれる檜山。

それを尻目に影の鎧を解くと、幸利は勢い良く仰向けに倒れた。

背を十秒間付けば負けになってしまいが問題無い。

アイツが負けるわけが無いと、そう信じている。

「だから……負けんなよ、相棒」

グツと握りしめた右の拳。

それをきつと誰にも届かないであろう応援エールと共に、空へと高く——

——勝者、清水幸利

### 30、イーカロスの翼

ギリシャ神話の人物の一人、イーカロス。

彼は父ダイダロスの協力もあり、自らを閉じ込める塔を脱する為の蠟の翼を手に入れる。この翼により塔から飛び立ったイーカロス。しかしその経験によりイーカロスは慢心した。

そして思った、「この翼が有れば太陽に手が届くのではないか」と。結果、彼は死ぬ事となる。太陽にすら手が届くと慢心したイーカロスを、太陽神たるアポロンは許さなかった。

そうして太陽が放った熱がイーカロスの蠟の翼を溶かし、海原へとイーカロスを叩きつけたのだ。そしてあまりに高くを飛んだ事で、潰れる事となった。

このイーカロスの話は一種の教訓として示される事がある。

人間の傲慢エゴ、それがいずれ自身の破滅を招くと…。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(——速いッ!?)

天之河光輝は驚愕していた。

敵はたかがハジメ。たかが【錬成師】。たかが【無能】。そう思い、見くびっていた。

だからこそ遅れを取った。眼前一杯に広がるナイフによる連撃フラッシュ。それに対応する事に全霊を掛けざるを得なかった。

とは言え光輝も訓練で『受け』は何度も行っている。鎧や両手剣を用いて、上手くいなした。

そして反撃カウンターとして両手剣による突き。それを光輝自身の胴体でギリギリまで隠し、放った。視覚外の一撃。間違い無く決まる。

加えてハジメは鎧を着ていない。当たればそれだけで勝ちはず。故に急所では無く、体幹の基点を押さえに掛かったのだ。

だが——

「『魔錬・水音』」

「なっ!?!」

——この範囲はハジメの領域内だ。



自然魔力を体外に巡らせる事による感知は、ハジメを中心として半径5メートル内となる。当然この距離ならば光輝の全身は感知圏内に収まる事となる。

鳴り響く鉄のぶつかり合い。間も無く繰り返されるそれは、時間を追うに連れて加速する。互いが互いを越えんと力を振り絞っているのが理由だろう。

ハジメと光輝、両者間にある本来のステータスの差は歴然とした物だ。ありふれた非戦闘職の【錬成師】と戦闘職最高峰の【勇者】。どちらが強いかわかれたならば、後者と誰もが断定するだろう。

ステータスだけでは無い。固有技能の数やその質、更には天職自体による補正も【勇者】たる天之河光輝の方が上だ。

しかしハジメはその差を見る影も無いまでに覆している。

それは紛れも無く「魔錬・武装」による身体強化。この倍率は恐ろしく高く、凡百並みのステータスを擬似的に【勇者】のステータスに追い付くまでに昇華している。

加えて半年間、メルド等との対人戦で鍛え上げ続けた駆け引きと技術。更には工房を中心に培った「錬成」というハジメの象徴<sup>シンボル</sup>。正しく光輝から見れば意識外の手を用いて、ハジメは攻め立てている。

「其は猛き光、眩き輝き、地平の先まで、光よ満ちろ——」

予想外の展開に光輝は詠唱を開始する。唱える魔法は光属性中級魔法「光爆」。一定範囲に光属性の衝撃波を放つ、範囲攻撃だ。

ハジメの攻撃スタイルはヒット&アウェイ、自ら攻撃を受ける真似はせず、回避や弾き<sup>パレイ</sup>により、相手の攻撃の直撃を防ぐのが基本だ。

恐らくは弱い時期から戦い続けたが故の癖だろう。現在は「魔錬・武装」により防御もある程度あるものの、そのスタイルが基軸となっているのだ。

だからこそ攻撃を一撃でも当てられたならばハジメの勢いを挫ける。そう判断した光輝は「光爆」により、確実に攻撃を当てようとして——そうした。

チームの二人と同様に、光輝も教会からアーティファクトを貸し与えられている。彼の主武器たる『聖剣』、『聖鎧』ほどでは無いが、高

火力・高性能を誇る物ばかり。光輝の「光爆」もこれらにより、速く、強く発動できる…筈だった。

だが光輝も教会も失念していた。相手は他でも無い【錬成師】である事を。

「——「錬成・壊」」

蒼の魔力光が弾ける。

光源は三つ。光輝が持つ剣の根本と身を包む鎧の胸当て、そして耳からだった。

すると刹那、光輝の剣が、鎧が、耳飾りが分解される。白銀の粒子が空を舞い踊る。鎧の下には防御魔法陣が刻まれた服も着ていたが、それごと分解された。

アーティファクトには当然、光輝が使う魔法の魔法陣が刻まれている。ともすればこのハジメの一手は、光輝の魔法の発動を封じたと言えた。

武器を封じられた光輝には意識の余白が作られる。その一瞬を、ハジメは取り逃がすなどしない。

「「錬成」」

魔力光がまたもや輝いたと思えば、ハジメの手元には一対の双剣が完成していた。

光輝がごくりと唾を呑んだのが、側から見てもよく分かる。それを感じつつハジメは構えた。

(まずは…第一関門は突破、かな?)

そう、ハジメは心中で呟いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…ふーん、天之河フル装備じゃねーんだな？」

『神前決闘』では予め、各チームに敵方の装備情報が公開される。

こればかりは一応平等らしいが、あくまでも明かされるのは武器の種類と名前のみ。どんな性能をしているのか、までは明かされる事は無い。

つまりはどんなアーティファクトを敵方が持って来たのかは、ハジメ側チームにとっては本番のお楽しみに、という話である。

まあ、それでも『聖剣』と『聖鎧』は装備欄に名前であれば分かる。天之河の装備欄にその名前が無いと言う事は…間違い無く天之河は本気で無い。

この事実には幸利はニヤリと笑う。

「ハハハッ、敵さん油断したなあ。南雲相手ならそれで済むとも思ったんだろなあ。こつちにおりますのは【錬成師】！並みのアーティファクトで勝てる筈が無いんだよなあ!!」

「…うん？これって大丈夫なの、ユツキー？」

「おん？何が？」

『やり直し』の事でしょ？『聖剣』とか『聖鎧』フル装備じゃないから、やり直ししまーすってゴネるんじゃない？って」

「ああ、それか。それについては何の問題もねえ」

「へー、そなの？」

この一件で一番気を付けるべきは『やり直し』についてだと、幸利が散々言っていた。『やり直し』は教皇が試合自体に難有りとした際に発動される。

だからこそハジメ・優花はそう判断した訳だ。しかし幸利はチツと指を振り、それを否定する。

「良いか？俺達が防ぐべきなのはあくまでも『こつち側の言い訳材料』だ。それ以外の材料なら十中八九レスバ完封出来る。…ま、その辺りは後々になりや分かるさ」

どう言う対抗手段を幸利が用意してるのかは分からないが、彼がそう言うならば確実なのだろう。ハジメと優花は信頼もあつてか、じゃあそうなんだろうなあと即刻受け入れた。

すると幸利と優花は察知した。ハジメのテンションが明らかに下がりがやがったのを。

「…ねえ、南雲。アンタ今『本気の天之河くんとやりたかつたな』とか思ってるない？」

「!？」

「粗方、そつちの方が白崎の隣に行けるとかそんなんだろうな…」

「!!？」

ハジメはめっちゃ動揺した。口にも出していないと言うのに、心にした内容を読まれたからだ。

もしやエスパーでは、とか思考し始めるハジメ。そんな彼を他所に目を尖らせる二人。怒り心頭は間も無くである。

この前エゲツないくらい怒られたハジメはビクツ。取り敢えず目を逸らす事で危機を回避に掛かる。

「凶星か…二兎追うものは一兎も得ず。欲張り過ぎだ。取り敢えず今回は無実獲得を優先しろ。どうしても今つて訳じゃ無いんだ。応援はしてるが…俺の心臓に優しい程度で頼む」

「…まあ、了解」

「コイツ、明らかに不満げよ?」

「前回の反省が見られねーな?」

「いやしてますよ本当してますから許して」

「怒涛の勢いだな」

「最近、コイツの土下座に価値を感じなくなって来たわ」

「見慣れたよな。芸術点高いけど」

と、言うわけで作戦会議に於いてハジメの方針は『ヌルゲー光輝を倒して勝つ』という風になった訳である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「げんか——」

「錬成」

「——いっ!?!」

天職【勇者】の固有魔法、〃限界突破〃。

この〃限界突破〃は、一時的に魔力を消費しながら基礎ステータスの三倍の力を得る技能である。ただし、文字通り限界を突破しているので、長時間の使用も常時使用もできないし、使用したあとは、使用時間に比例して弱体化してしまう。酷い倦怠感と本来の力の半分程度しか発揮できなくなるのだ。なので、ここぞという時の切り札として使用する時と場合を考えなければならない。

光輝はその切り札を切ろうとしていた。そうしなければ勝てないと、これまでの過小評価を排し、判断したからだ。

その判断自体は正しい。実際、今の魔法が使えない光輝ではハジメとの戦闘は厳しい。基本、近接をメインにするハジメに対し、光輝は近中遠全てを用いて戦うスタイル。だからこそその一部が剥落した現状では形勢はハジメ側に向かっている。

だからこそ、その突破口として「限界突破」を頼りにするのは当然の話だ。現在の形勢はあくまでもステータス差が少ない故の物。「限界突破」でステータス値を三倍にしてしまえば、その差は一気に広がる。力押しではあるが、光輝はそれがベストであると断じた。

しかしその判断が遅過ぎた。既に光輝はハジメの間合いの内だ。

「『錬成』」

蒼い魔力光が地面に走ったかと思うと、瞬間その光が円陣の形を成す。

自然魔力により刻み込まれた魔法陣は瞬間――

「ここに風撃を望む――『風球』」

――風の暴威を解放した。

風は光輝の身体をかち上げ、無防備を晒させる。その隙を逃す程、南雲ハジメという男は易い戦場を潜り抜けていない。

すぐ様、距離を詰め拳を放つ。空中故に避ける事も出来ず、光輝はその一撃を受ける事となった。その一撃を何とか腕をクロスさせる事で受け止める。

（発動する間が――）

武器があるタイミングで発動していればこんな窮地には陥っていなかった。剣さえ有れば間合いの確保も出来るし、魔法だって放てる。そうして生み出した隙でも発動可能だ。

だが徒手空拳の現状では、あくまで光輝に出来る事は回避か防御のみ。そもそも地球の頃から剣の一边倒であった為、それが無くなってしまった際の対処と言う物を光輝は知らないのだ。

しかも相手はハジメだ。近く中距離ならば大体対応可能たるこの男の間合いから逃れるのはまず困難だ。

「――『縮地』――！」

光輝が距離を取り、「限界突破」までの時間を稼ごうとしようとも

「『錬成』」

——地面から形を成した槍が、光輝を強襲する。

「『剛力』！」

地面を砕き、視界を防ごうとしようとして——

「『魔錬・水音』」

——魔力の監視網を逃れる事は出来ない。

武器を奪われた。まさかそれだけでここまで追い詰められるとは思ってもしなかつた。故の焦り、恐怖、そして逆上。

「うああああああああああ!!!」

負けている筈がない。そんな根拠も無い理由で光輝はハジメに拳を放つて——

——ゴツ!

胸元に潜り込んだハジメが、カウンターを光輝に見舞った。

単に当たっただけならば良かったが：何せ部位が悪い。ハジメの拳は、ものの見事に光輝の顎に直撃した。

視界が乱れ、平衡感覚が麻痺する。地面が崩れたかのような錯覚を覚え、思わず狼狽えた。

そして気付けば、光輝はハジメに組み伏せられていた。

「——ふあ、あ?」

「『錬成』」

仰向けに倒れた光輝の上でハジメが馬乗りとなっており、左腕を光輝の口に咬ましている。『錬成』により変形した地面が光輝の四肢を縛った。拘束力は弱いが人間の動きの基点ばかりを封じており、思う様に力が入らない。

『10——!』

カウントダウンが聞こえた。

何故? そう疑問を呈する光輝。同時に自分が今、倒れているからだとすぐに答えが返ってきた。

『9——!』

秒針が刻まれる。

見下ろす目と自分の目が合った。

何故自分は見下されている、と疑問が湧く。同様の答えがまたすぐに返って来た。

『8---』

負けている、その事実を漸く認識する。

すると光輝は暴れようとする。身を焦がす様な激情と共に、拘束を振り解こうとする。

しかし光輝への拘束は強度こそ低い、基点を抑えている。故にチートだろうが、身体のコントロールが儘ならなくなっているのだ。

『7---』

「限界突破」の鍵言を告げようとする。目の前の宿敵を吹き飛ばせと、心のままに叫ぼうとする。

しかしハジメの左腕がそれを遮る。口を動かすどころか呼吸さえもが十分に行えない。声にならない苦渋と涎が腕と口の間から漏れるだけだ。

噛み砕く程の力を顎に込めるが、腕が力強く口を押し付けている為か力が入らない。

『6---』

駄目だ、嫌だ、違う、これは違う。

光輝の内心が我武者羅に自身の劣勢を否定する。

彼の血走った目がハジメを見上げる。対するハジメの表情は——  
無だった。

『5---』

まるで下らない物を見る様な、茶番を見ている様なそんな瞳。

何故そんな目をしているのか、光輝にはまるで分からない。

カウントダウンが半分を過ぎた事さえも忘れ、光輝はハジメの目を見続ける。

『4---』

沸々と何か湧き出す。かつて「オルクス大迷宮」での香織の死闘。その際に彼女が浮かべた笑みを見て生まれた感情。

しかし以前のそれよりも遥かに強く、そして黒い。

光輝はその感情の名を知らない。  
何故ならばその感情を彼は今迄抱く事は無かったから。皮肉にも彼の才能が、その感情を表面化させなかつたから。

『3——』

その感情の名は劣等感。

その感情の名は嫉妬。

そしてその感情の名は——

(——巫山戯るな！)

——その名は憤怒。

『2——』

カウントダウンが間も無く終わる。

その前に光輝は虚空を掴む様に掌を広げ——

(来い——ッ！)

——その武器の名を、心中にて叫んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

間も無くカウントダウンが1に行こうとした瞬間、その音は盛大に鳴り響いた。

硝子を派手に割った様な、そんな音。それが客席に響き渡る。戦いの風景を写すシユタイガンにより、王国領の人間にはその音は間違いない無く聞こえた。

砕けたのは戦場を囲む物理結界の一部だ。凄まじい衝撃による物か、かなりの規模の破損を迎えていた。

第三者の参戦？ 或いは片陣営への助太刀か？ そんな疑惑が人々に伝播する中、皆それを見た。

「あれは……」

それは美しい白の輝き。正しく流星とも見紛うであろうそれは、一本の剣だ。

それは荘厳な黄金の光。剣を囲む様に展開されるそれは、鎧の部品<sup>パーツ</sup>であった。

そして其れ等は空を駆け抜け——辿り着く。  
「なっ!？」



押さえ込みをしていたハジメはその光の強襲を、寸前の所で回避する。やはりそれも紙一重で回避した様で、ハジメにダメージは入っていない。

だがそれは同時に、地面に縛り付けていた拘束が甘くなった事を意味する。

剣が、『聖剣』が地面へ勢い良く突き刺さる。その衝撃波により残りの拘束具が形も残らず砕け散った。

立ち上がる彼を鎧が、『聖鎧』が包み込む。その輝きは正しく色褪せる事の無い『絶対』を彷彿とさせた。

彼の出立ちは形容出来ぬ程に神々しく、何と尊き事か。

人々は遠くから、或いは画面越しにその光景を見る。それは正しく伝承の一頁、英雄譚の挿絵と遜色ない。

『あ、嗚呼——』

『あれが…【勇者】』

『神が宿っているかの様な煌めき…美しい』

人々は見惚れる。今自分達は伝説的一幕を見ているのだと、そう信じて止まない。中には膝を折り、祈りを捧げる者達まで居た。

民衆の憧れ、希望、そして大義を一身に受ける彼は…最後の鍵言を告げた。

「——『限界突破』」

瞬間、溢れた極光が天蓋を焦がした。

この魔力光の奔流こそ【勇者】にのみ与えられる特権、『限界突破』。光輝の身を覆う魔力外骨格は『聖鎧』も相まって、『神の使徒』たる所以を瞬く間に人々に知らしめた。

ハジメは構える。こうなってしまったからには油断は出来ない。

その判断は正しい。『聖剣』、『聖鎧』を持ち、かつ『限界突破』を行つた光輝は先程までとは段違いの力を持つ。確かに油断してはならない敵だ。

しかし、同時にそれは間違いだ。

「——遅いよ、南雲」

「ガッ——!?!」

油断してもしなくても、もうこの領域の光輝に対応する事は不可能なのだから。

白閃が空に軌道を描く。咄嗟に手持ちのナイフで防御をしたが意味が無い。ナイフは無惨に砕け、赤い線がハジメの胴を斜めに走った。

ブシユウツ！ と音を立てて噴き出す血。それに唾然とする暇も無く、光輝の猛攻は続く。

剣道の突きがハジメの左腕へと襲い掛かる。全神経を持ってその一撃を掠らせるに留めたハジメは『聖剣』へ「錬成」を発動した。

——バチンツ！

しかし意味が無い。『聖剣』は人工的なアーティファクトでは無い。言うなれば『神造武器』とも呼べる代物で、人智を遥かに凌駕したオーバートクノロジー。その抵抗<sup>レジスト</sup>力は恐ろしいまでに高い。

蒼い火花が弾け、思わずハジメはのけぞった。そのハジメの腹を蹴り、吹き飛ばすと光輝は詠唱を開始した。

「万翔羽ばたき、天へと至れ」

天へと掲げられる『聖剣』。それを中心に地上を照らすかのような光が渦巻いた。

そこに込められたエネルギーは、見ているだけでも分かる。尋常では無いと。宙に舞うハジメは何とかその一撃だけは回避せんと、鋼線を「錬成」し、遠くの地面と癒着。そして引つ張る事で其方に飛ぼうとした。

だが光は無慈悲にも、神敵に放たれた。

「——天翔閃！」

ハジメの必死の足掻きも虚しく鋼線ごと包み込んで、光は進撃を開始する。

「魔錬・武装」による自然魔力強化を全て防御に注ぎ込む。だが、膨大なエネルギーに耐え切れずベリベリと肌が焼け落ちて行く。

「ぐっ、があああああああああああああ!!!」

叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ。

痛い事だろう。辛いだろう。徐々に自身の体が削れていく感覚は、

恐怖を覚えるに違い無い。

やがて光は収束した。力の奔流から投げ出されたハジメはそのま  
ま地面に転がった。目は腕により覆い隠され失明を防いだが、代わり  
に腕はかなりの重傷となっている。動かす事は出来るだろうが、その  
度に激痛が伴う事が予想される。

「何処を見ているんだ？」

「ッ——！」

だが気にしている暇は無い。背後からの脚部狙いの横薙ぎを飛ぶ  
事で避ける。代わりに空中での刺突は横腹に受けてしまった。

今、対応出来ているのはあくまでも光輝が三倍になったステータス  
に慣れ切っていないからだ。それ故の動きの無駄が、ハジメの対応を  
許している。

だからこそハジメはこの瞬間に光輝を撃破せねばならない、が。

「はあああああああああああ!!!」

(はやつ——)

あまりにも早過ぎる。稀に『聖剣』の腹に攻撃を当て、攻撃をずら  
すのが出来る精一杯だ。

血が舞う。衝撃に内臓が潰れ、光が肌を焼く。夥しいまでの血が口  
から吐き出では、〃錬成〃した武器が間も無く砕けた。

それ程のダメージを受けて尚、ハジメは倒れない。皮肉にも〃魔  
錬・武装〃の強化がハジメの脱落を許さない。ハジメ自身の強靱な精  
神が諦める事を許さない。

これが差。頂点と自身の差。それを身を持ってハジメは知る。

たった一手。それを許しただけで、先程の優勢が嘘の様に覆され  
た。

これまで修羅場に立つ度にハジメは進化して来た。最初のベヒモ  
ス戦では〃錬成〃の技術が洗練され、〔ウル〕では擬似的に〃魔錬〃に  
よる自然魔力強化を体感した。二度目のベヒモス戦では〃魔錬〃に  
よる戦闘法を確立して見せた。

だがこれまでの経験を、そして至り得る先全てを見渡しても、この  
頂点には届かない。

絶望、そんな二文字が脳裏に微かに浮かんだ。

当然ハジメはまだ抗う。これまでもそうして来た様に、いつもの様に逃げない。

だからこそ、二度目の極光が世界を焦がした。

「――『天翔閃』 ツー！」

そして――

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…いやはや。【勇者】様が勝手な真似をされた時はどうなるかと思いましたが、杞憂でしたな」

「全くです、猥下」

「二度目の『天翔閃』の直撃…立てるはずもあるまい」

空に浮かぶ映像が、ハジメの力無く倒れる姿を映している。一時優勢な時もあったが、【勇者】の本気がこれだ。敵うはずもない。

イシュタルはもしもの時、光輝が『聖剣』と『聖鎧』を持ち込まなかった事をやり直しの言い訳の一つとして使おうと考えていた。人々の信仰と己の話術、それがあれば正当化出来ると考えていた。

だからこそ光輝が『聖剣』と『聖鎧』を呼び寄せた時は驚いた物だ。規定外の武器の持ち込みは点数の低下となる。ただでさえ檜山と鈴が負けているのだ。両チームの点数差は酷く広がっており、このまま負けて仕舞えば言い訳のしようも無い差がそこにはあった。

だが敵チームのリーダー、ハジメを倒して仕舞えばそれも話は別。よく思えば『聖剣』と『聖鎧』、そして『限界突破』まで出揃った【勇者】に勝てる筈がないのだ。イシュタルは自身の心配が杞憂であったと、そう判断した。

しかも民衆の信仰も、光輝の神々しい姿により取り戻している。観客席では【勇者】へ捧げられる応援エールが何重にも渡って捧げられる。ハジメへの物もあるが人数がまるで違う。まるで押し潰される様を示しているかの様だ。

映像の先ではカウントダウンが始まっているにも関わらず、光輝がハジメへと近付いている。息を止める気でのだろうか。それも悪く無いとイシュタルは嗤う。

ハジメが産み出した「魔鍊」という技術は確かに凄まじい。酷いステータス差があつて尚、こうして戦えているのもあの技術が有つてこそ。その技術が欲しく無いと言えれば嘘になる。

ただ生かすには、あまりにもハジメは不穏分子だ。彼を中心にしたメンバーは教会には届かないにしても、最早一大勢力と言える。【聖女】、【豊穰の女神】、王族、王国騎士、『神の使徒』：それぞれが旗頭となれる程の名声を持つている。

世間では彼等がクーデターを目論んでいるのでは、とすら揶揄されている。その可能性は低いものの：その可能性を孕んでいる事自体が問題なのだ。

だからこそ中心人物であるハジメを公衆の面前で殺すのは、教会に歯向かおうとする組織の牽制にも繋がる。次はお前だと、そう世界にアピールするのだ。

「魔鍊」は欲しい。だがウォルペンや「ウル」の「鍊成師」が既に技術を獲得している。彼等を捉え、方法を尋問させ教会の下にある工房に伝えれば何ら問題は無い。何もハジメに拘らずとも良い。

故にハジメは要らない。イシユタルは醜悪な笑みを持って、ただ見つめる。

光輝がハジメの首へ剣を振り下ろす瞬間を――

★★★★★★★★★★

――魂が巻き戻る。

走馬灯とでも言うのだろうか。

かつて僕が辿つて来た世界が、客観する形で脳裏に映る。

家族に初めて頭を撫でられた事。

お父さんの仕事を見て、見様見真似でプログラムをし始めた事。

初めて描いた絵を見せると、お母さんが年甲斐も無く対抗して来た事。

お父さんがお母さんに秘密でアツハーンなゲームを見せてくれた事。

お母さんが締め切り間際に何故か家族総出でコスプレ大会を開き出した事。

家族全員で滅多に食えないレベルの高級肉を奪い合った事。

お父さんの部下さん、お母さんのアシスタントさんどちらもが優しかった事。そしてどちらも隈が酷かった事。

：我ながら家から外の思い出がまるで無い。振り返って見ると、記憶に残っているのは家族の事ばかりだ。

やはり帰りたかった。そんな悔いが自身の中の心の中であつた。もう充電の無い携帯電話を毎日の様に眺めているのもそれが理由だった。

そんな景色も記憶の奔流に流されて：不意に見覚えの無い新鮮な景色が目の前に現れた。

それは街中だった。何かに注目しているのか民衆は一点を見つめ、止まっている。ハジメはそれが気に掛かり、人混みを割って真ん中へと進んで行く。

やがて進んで行くと、人混みの中心の光景が見えた。居たのは凶暴そうな荒くれ者達、戦っている子供と老婆。そして――

『すみませんでしたあああああああああ!!』

「……………あつ」

他でも無い、土下座をかましている僕だった。

同時にこの光景がいつの物かも理解した。

面倒な奴から逃げろと荒くれ者達が退散して行く。それに乗じて人目に晒されているかつての僕もその場から逃走し始めた。人混みの中を正確に進んでいたのを見て、逃げ足はこの頃から速かったかと再認識する。

するとそのかつての僕が、進行方向とはまた別の場所を見た。それはとある人で：同時に彼女もかつての僕を見つめていた。

腰まで届く長く艶やかな黒髪、少し垂れ気味の大きな瞳はひどく優しげだ。スツと通った鼻梁に小ぶりの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧な配置で並んでいる。

今となつては忘れる筈がない彼女の姿。まさかこの頃の僕が一瞬とは言え、彼女を見ているとは思っても見なかった。

「…此処が、本当に始まりだったんだなあ」

そんな風に過去を懐かしんで、一拍。

僕は次の記憶の一頁を捲った。

### 31、とある少年の回想

——趣味の合間に人生

それが僕のかつて掲げていた志だ。

子供の頃から両親の影響もあり、サブカルチャーに染まり切っていた僕。それにより僕は小学生の頃から友人関係の作成という物に価値を見出せずにいた。

何て事は無い。趣味の方が友達を作るよりも遥かに楽しいと、そう比較しての話だった。高校こそ学校Ⅱ寝る場所として扱っていたが、小学生の頃は自由帳に落書きを量産していた記憶がある。授業中、他の子が元気よく手を上げているのに対し、僕は黙々と絵を描き続けた。

話し掛けて来る子はいた。興味本位か、或いは優しさか。はたまた揶揄い目的か。僕はそれに対して無難に返事を返していた。一応、小さな頃から社交会やらに出た事がある為、受け身の話し方は得意だった。少なくとも相手に不快感は与えなかったと断言出来る。

しかし話し掛けて来る子は段々と減って行った。他の子と話したり遊んだりする方が楽しいと判断したのだろう。僕の周りから人は減って行った。

悲しくは無かった。むしろ自分の世界に浸れる時間が増え、良かったかもしれない。当時の先生は心配していたけれど、両親はそれを問題視するつもりは無かった。

まあ、二人とも「社会に出て、成功すれば官軍！」とか言うピーキーな考え方なので、完全に二人をアテにする気は無かったけれど。

そうして中学校までは特に変わらない学校生活を送っていた。途中、また関わろうとして来る人も現れたが、その人もすぐに何処か別のグループへと流れて行った。

またヤンキーが老婆さんに絡んでいる所に全力で土下座しに行くという事もあった。一応他人から見れば人助けになるのだろうが：僕はそんなつもりは無い。ただ単純に人が傷付くのを見るのが嫌だった、その頃はそれだけの話だ。



こう言った経験を重ねて、すっかり僕にとっての『外』は退屈な場所になっていた。もしくは単に寝る場所として考えていた部分もあった。変人扱いはされたがそれはそれ。僕にとっては外面など無いような物だった。

学校に行くのもあくまで人生に於ける最低限の保険を作る為だけだ。『外』に興味があつた訳では無い。

まあそんなこんながあつて、高校生へとなつた訳だけれど…

『初めまして！ 南雲ハジメくんですよね!?!』

『……………はい???』

彼女は急に、僕の前に現れた。

正直、第一印象は「何だこの子」だった。

繰り返すが、今迄話し掛けて来る人間はいた。優しさやら見栄やら興味やら冗談やら…理由は何であれ、そう言った人はいた。そこまでは良い。

問題は真正面から来る熱量が半端では無い、と言う事だ。

今迄の相手は全員、初っ端に探りを入れて来る事が大半だった。煽つて来る系のタイプは例外だけれど、そんな彼等でもこれ程じゃ無い。だってそうだろう。

たまたまクラスが一緒になった異性が、それもモデルが裸足で逃げ出しかねない美少女が、入学式が終わるなり、直ぐに近付いて話し掛けて来る。

…繰り返し言おう。本気で訳が分からなかった。

一瞬、偶々後ろにいる人が僕と同じ名前で、その彼に話し掛けているのかと、視線を後ろに送ったが…

『えつと…南雲くん、で合ってますか?』

そんな無言のジエスチャーも意味が無かった。彼女の目は完全に僕を捉えていた。

『そ、そうですね。僕が南雲ハジメです』

『やっぱり！ ああ良かった。名前間違っちゃったかと思いまし

た』

——うわっ、顔が良い

当時の僕がそんな事を思っていたのを思い出す。顔面偏差値の暴力である。ちなみに現在の僕も完全同意である。

ただまあ美少女は美少女でも状況が状況だ。何故いきなり話し掛けて来たのかとか、そもそも初対面ですよねとか、ヤベーってこの人ヤベーってとか。そんな思いがかったの僕の中で飛び交って居たのを覚えている。

だが当然、彼女はそんなかつての僕の内心を知らない。友人から呼ばれたらしく、其方に戻る彼女は最後に振り返って一言。

『これからよろしくお願いしますね！』

『エ？ アッハイ』

『それじゃあ失礼します！』

怒涛の勢いで迫り、そして去って行った嵐の様な少女。周りがそんな一幕に騒めく中、僕はただ立ち呆ぼけていた。

そしてこの日から、僕にとっての『外』は大きく変化した。

『南雲くん、目の下に隈があるけれど大丈夫？ ちゃんと寝なきやダメだよ？』

『南雲くんってアニメ好きなんだよね？ オススメって何があるかな？』

？』

『ねえ南雲くん、お昼ご飯いっしょに食べよ？』

もう、それは本当に凄かった。

何せ思い当たる節も無いのにグイグイ美少女が迫って来るのだ。これまでの人生経験に於いて一度も無かったケースに、慄いたのは仕方無い話だった。

それに加えて彼女は無難な話しかしない僕から離れる事は無かった。これまでは一ヶ月もすれば皆見向きもしなくなつた。だけど彼女はめげずに僕に話しかけて来た。どうせいつか離れるだろうと言う僕の予想は大きく外れていた。

しかも外見・器量共に有って、人望も尋常では無い美少女だ。単なる変人扱いだった中学までとは打って変わり、僕は主に悪い理由で注

目を集めた。

『やあ、南雲。今日も君は不真面目だな。そろそろ他人に迷惑を掛けている事を自覚した方が良い』

『南雲君…その、いつも迷惑を掛けるわね。あの子、こう言う時周りが見えないから…』

『ほーん、お前が南雲か。根性ねー奴だな』

『よー、キモオタ。お前何で学校来てるんだよ?』

『南雲くん。悩んでいる事が有ったら、先生に何でも言ってくださいね?』

…本当に、今考えればマイナスの方向性ばかりだったなあ。

今こそ良くして貰ってるけど、坂上くんはそもそも無関心。園部さんやユツキーもほぼ接点が無かったから、話し掛けなんかしなかった。【ウル】組の皆も、この頃はまだ視線が鋭かったっけか。

派手なイジメは無かったけど、ちよつとした物が積み重なって…少なくともストレスであったのは間違いないかった。

途中、両親から高校を辞める提案をされる程、高校での僕の環境は面倒な物になっていた。実際その選択肢を魅力的だと思つた僕もいた。趣味に人生を費やす事を目的としていたから、高校は最悪捨てる事だつて出来た。

でも僕はその選択肢は取らなかつた。両親には一つ目の理由である『人生の保険を作る』という理由を話したけれど…もう一つ理由は二人にも言わなかつた。

一つ目の理由だけなら学校を転校するなり、家庭学習なりに切り替えれば良い。両親には迷惑を掛けるかもしれないけれど、おちやらけた様に見えて僕の事を心配してくれているのは分かっている。そうして心労を掛けるぐらいなら、金銭面で迷惑を掛ける方が二人的にはマシだと知っている。

でも二人は僕の意思を心配する様な様子はしていなかつた。きっと二人とも僕のもう一つの理由を理解していたんだと思う。目敏い人達だ。これだから親には敵わないと心底思ってしまうのだ。

単純に『外』が退屈じゃ無くなつていた。それだけの理由だ。

これまで『外』は僕にとって、単なる寝る場所だった。僕一人で構成されて、稀に他人と関わってはまた一人。そんな場所だった。それが当たり前だと思っていた。だから僕もその閉じた世界に居続けた。それを寂しいと思った事は無い。窮屈とも思わない。それが本当に僕を構成していた世界だったから。

けれど――

『南雲くん、おはよう！ 今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ』  
――いつかこの『外』<sup>世界</sup>を退屈だと思ふ暇は無くなった。

楽しい事だけじゃ無い。かなーり危ない事をしれつと彼女が言ったり、それにより嫉妬により獣となった男子と逃走中したり、寝る時間が減ってしまったり：マイナスだって一杯あった。

でも少しだけ、『外』の世界への興味が湧き出した。

無味無臭じゃ無くなったこの世界。僕の想定を上回ってばかりなこの高校生活を、僕は何処か楽しみだしていた。

そして――全てが崩壊した。

異世界召喚。

ファンタジー 夢物語だと思っていた世界が、僕のこれまでを粉々に潰した。

この世界に僕が培って来たアドバンテージは無い。絵やプログラムなどと言う物はこの世界に於いてほぼ役に立たない。純粋な力が、僕らには求められた。

より勢いを増した理不尽。【無能】というレッテルはクラスメイトからの侮蔑を促進させた。罵り、痛み、拒絶。ありとあらゆる物が二十四時間、僕を突き刺した。

安らぎの場所はない。かつては簡単に辿り着いたあの家。けどもうあそこは果てしないほど遠くにあった。絶対の味方であった両親の顔を、もう見る事は叶わない。

あらゆる物が、僕の膝を折ろうとした。劣等感、苦痛、そして孤独。何故僕がこんな目に、と世界を恨んだ時もあった。

知識を集めていたのはそんな状況からの現実逃避だった。止まって仕舞えば、それこそ動けなくなると確信があった。それが怖くて、僕は歩き続けた。

ただそれでも、止まってしまふのは時間の問題だった。だって僕の掌には何も残されていないから。

『だから、私の中で一番強い人は南雲くんなんだ』

——そんな僕を、君は肯定した。

心、今も僕が持つている。これまでの僕が一切価値を見出していなかった物。それを君が見つけ出してくれた。

弱くても立ち上がる勇氣。それが僕の武器なんだと、君は笑ってそう言った。

きつと君は知らない。

あの言葉に、僕がどれだけ救われたかを。

君は僕を傷つけ続けていたなんて言った。それは間違いじゃ無い。でもそれ以上に僕は君から立ち上がる勇氣を貰った。歩き続ける力を貰った。

そしてあの日、あの時、あの場所で。どれだけ君に憧れたか、きつと君は知らないんだ。

だから進み続けた。

だから足掻き続けた。

だから、ひたすらに君の隣を目指した。

だから——

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——まだだっ！」  
「!？」

光輝がトドメの為に繰り出した最短の突き。この『聖剣』の横腹を叩く事で、殺意の一撃を真横に押し出した。

光輝は驚愕する。二度目の“天翔閃”を受けて尚、これ程の動きが

出来るものなのかと。

驚き、そして同時にその事実には青筋を立てた。

「まだ立つのか…いい加減に諦めたらどうだ？」

「ハハツ…残念ながら足掻く事に関しては君よりもプロフェッショナルだよ、僕は」

身体全てに傷が刻まれている。満身創痍。万が一にも勝ち目は無いだろう。それでも足掻くのは止めない。

彼女から貰い受けた『勇氣』が、ハジメの意志を燃やし続けているから。

「南雲、残念ながらお前は俺に勝てない。何故か分かるか？」

「そんなの、最後までやってみなきゃ分からないじゃ無いか」

「…ああ、やっぱりお前は俺に勝てないよ」

そんなハジメが気に入らないと光輝は『聖剣』を煌めかせた。『限界突破』の脅威は未だそこにある。

そして問答と共に放たれた横薙ぎ。それをハジメはしゃがみ込む事で回避。しかしその頃には既に『聖剣』の先が目の前に迫っていた。

「俺の肩にはトータスの人々の期待が！ 希望が！ 未来が乗っている！ 俺にはそれだけの勝つ理由がある！」

「——ッ！」

これを仰け反って回避する。しかし完全には避け切れず、目の前でパラパラと髪の毛が散った。

「だけどお前には無い！ お前が戦うのはお前一人の為だけだ！ 俺

の様な『大義』が！ 『正義』が無い！ だからお前の剣はこんなにも軽いんだ！」

「うぐっ!？」

光輝の間合いから離れるが、砕けた地面の礫がハジメの視界を潰す。圧倒的な破壊力故の礫の勢い。ハジメの節々にダメージが与えられた。

「そんなお前がどうして俺に勝てる!? 何も背負っていないお前が！

自分の事しか考えていないお前が！ 勝てる訳が、無いんだ！」

「——あがッ!？」

そしてハジメの顔面に、光輝の蹴りが決まった。鼻先が折れ、骨が砕ける。あまりもの強力な一撃は、ハジメに一瞬の隙を創り出した。「だからいい加減に——沈めっ!!」

その隙を光輝は逃さない。上段に構えられた『聖剣』を、今ハジメへと振り下ろした。

さもそれは処刑の宣言の如く。

光り輝く刃は今、ハジメの首元に吸い込まれて——

「魔錬・発勁!!」

「ッ!」

——首元から放たれた蒼の魔力が、『聖剣』に衝撃を与えた。

特殊技術、『魔錬・発勁』。やっている事はあまりにも単純。集めた自然魔力を外部に放つ事で、物や敵に物理的な衝撃を発生させるという物だ。

練度が低い為か主要攻撃の領域にまでは辿り着いていない。しかし両者間に発生した衝撃波は見事、『聖剣』からハジメを吹き飛ばした。

「何でだ…諦めろ。俺とお前の差はもう分かった筈だ。俺も流石に人を殺したく無い」

もう勝ちが決まったと思っっているのだろう。光輝は『聖剣』を下段に構えて、ハジメを見据える。もはや手を下さずとも勝てるという確信がそこにはあった。

ハジメはもう立てもしない。片膝を付き、蹲っている。全身が赤く汚れていた。

そんな光輝の言葉にハジメは小さく微笑む。その笑みには儚さが滲み出ていた。蒲公英の種のように、風がそよげば散ってしまう。そんな微かな命だった。

「…確かにそうだ。僕は誰の為でも無い。僕自身の為だけに戦っている。そこに『大義』は無い。『正義』は無い。何たって僕はこの世界が嫌いだ。この世界の為に戦うなんてつもり、全く無いよ。…ハハッ、まったく君の言う通りだ」

「だったら何で…」

「何で…かあ」

ハジメはあくまでも我欲の為に動いている。他人の為にこんな場所に立っているつもりは無い。『正義』だの『大義』だのを掲げる気は全く無かった。

何故か。尋ねられればハジメは簡単に答えられない。『原点』は一つだ。しかし…ハジメを立ち上がらせようとする記憶物があまりにも多過ぎた。

蒼い魔力を全身に走らせながら、ハジメは付いている膝を無理矢理真つ直ぐにする。

『坊主、お前さんは中々見込みがあるなあ』

『よっしゃ、小僧！ 工房全体で、今日も“錬成”勝負するからお前も参加しろ！ やるだろ？』

「期待を、託された」

最初の頃、まだ自分が何も成し遂げて居なかった頃。それでもお前には何かがあると言ってくれる人達がいた。

その手が、ハジメに力を貸す。

『俺達は今日から南雲支援隊でもある！ 手伝える事が有ったら言うてくれ！』

『応援するよー、南雲っち！ 勝ち取れ！ 無罪！』

『ふん…愛子に恥をかかせるなよ、南雲ハジメ』

『デビッドはああ言っていますが、我々全員が応援していますよ。南雲殿』

「笑顔が、見えた」

走り抜け続けて、やがて追いかけて来る人が現れた。朗らかな大笑が、不器用な微笑みが、明るい苦笑がハジメの脳裏に浮かぶ。

その顔が、ハジメの震えを止めた。

『最近の南雲君には活力が有りますね。先生は嬉しいですよ』

『此処まで仕え甲斐のある方はお嬢様以来ですね、正直飽きません』

『あら、南雲さん。右脚が逆ですわよ？』

「支えが、あった」

自身が進んだ道を肯定してくれる先立ちがいた。傷だらけになっ



て、それを癒そうとしてくれる人達がいた。

その存在が、ハジメから痛みを奪い取った。

『えーつとなー。脚をこう…ガツとやって腰をくんってして、拳でド  
ンツてやるんだ！…わかんねえのか？』

『私も可能な限り手助けするわ、南雲君。貴方には生きていて欲しい  
から』

「声が、聞こえた」

身の丈に合わない夢を追う為の、血の滲むような修練。その助言を  
してくれる同輩達がいた。

その言葉が、今のハジメの耳に残響する。

『とつとと行くわよ、南雲。寝ぼけてる暇なんて無いわ』

『刻むぞ、ハジメ！俺達の伝説を！』

『主様は厨二病やね』

『ちゅーにー！』

「失いたく無い、物が出来た」

掛け替えの無い物が、いつの間にか数え切れない程に積み重なって  
いた。どれもが大切で、自分には無い物。

この世界で築かれたあまりにも多くの絆を、ハジメは失いたく無  
い。

だからこそ、ハジメは立ち上がった。

そして脳裏に、彼女が浮かぶ。

『うん…待ってる。絶対に、南雲くんが来てくれるまで。いつまでも  
待ってるから！』

朝焼けの純白が、ハジメの世界に光を与えた。

己の中の『特別』。それを改めて感じて――

「――ああ、そつかあ。そういう事だったのか…」

漸くハジメは気が付いた。

どうして彼女が己にとって此処まで『特別』なのか。何故自分がこ  
れ程までに彼女の隣を目指すのか。

走馬灯が、南雲ハジメの想いを明らかにした。

それはあまりにも陳腐な感情で、そしてあまりにもこの世界にあり

ふれた言葉。

「僕は、白崎さんが好き…なんだなあ」

果たしてその言葉に込められた想いはどれ程の物か。

眩き程に小さな声。しかしその声は音量に反して、広く遠くに響き渡る。

鎮まる世界。その小さな眩きに応じてだろうか。草木が、風が、人が全て音を忘れる。

その中で、ハジメは蒼の光を束ねた。

「…だったら、益々負けられないじゃないか」

また一つ、ハジメを立ち上がらせる物が出来たとハジメは笑みを溢れさせた。

その笑みの何と獰猛な事か。つい先の死相は失せた。不屈の眼光を煌かせ、三日月の形を口が作った。

武器は無い。長い付き合いの手袋も失せた。だがもう関係ない。彼は今、限界を超える。

「――『錬成』」

瞬間、蒼の魔力が咆哮を上げた。唸り、立ち昇り、やがてその光はハジメを包み込む。

刹那、地面から一对の双剣が創られた。背水の状況にも関わらず、その鋭さは失われていない。

最早そこに立つのは満身創痍の弱者では無かった。地に堕ちた哀れ者では無い。

そこに有るのは挑戦者。太陽に身を焦がし、されど人間を超えた意志により空に手を掛ける愚者。

頂上に立つ強者の喉を喰い破る、唯一無二の弱者だ。

「好き…だど？ そろそろ巫山戯るのは良い加減にしたらどうだ、南雲…」

それに怒りを剥き出しにしたのは光輝だ。『限界突破』による魔力の奔流が荒れ狂う。それが示すのは彼の心境か、はたまたこれから戦況の加速か。

どちらだろうと関係無い。光輝は純白の魔力光を『聖剣』に束ねる。そしてその『聖剣』を振り抜いた。

「お前に、お前なんかに！ 香織は渡さない！」

そして――

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「たくつ。アイツ、やりやがったな……」

「うん？ 何のはな――ああ、南雲？」

「ああ。案の定だ」

「あー、つまり――」

戦場の何処かにて、とある二人の会話があった。

片方が闇魔法『共眼』により、外にいる使い魔と視界を共有していた。それにより大将同士の戦いを、見詰める事が出来た。

そして試合を眺めている内に、その少年は頭を抱えた。もう片方の少女もまた少年の様子から察した様子だ。

二人はこれ以上無く呆れた様子で呟く。

「アイツ……天之河に全力出させたのね？」

「はー、知ってたけどさー。もうちよつと、俺達の胃に優しくしてくれないかな――!!?」

「全くね。あの作戦を話してた時ほど、ダチョ○倶楽部を身近に感じた事は無いわ」

「まだダ○ヨウ倶楽部のが聴き分け有るわ。あの狂人と一緒にすんな」

「なるほど。アイツには芸人の才能があるらしいわ」

「芸人にリアル狂人は求められてねーんだよ」

二人は薄々察していた。口では此方の作戦に賛同していたが……目がまるで話を聞いていなかったと。

恐らくはどうであれ、ハジメはこの死地を誘発する気だった。それを二人は理解していた。そして案の定のこの状況に、やはりかと思れ

ていた。

例えば念話石のイヤークアフスの破壊。これにより教皇イシユタルによる『聖剣』および『聖鎧』の発動の妨害を防いだ。

例えば光輝に終始向けられた無感情の表情。それに挑発的な物言いい。これによりハジメは僅かにでも光輝の怒りを誘発した。

例えばこの一対一という状況。相方二人を自分から突き放す事で、ハジメは光輝とのタイマンと言う状況を作り出した。

何故こんな事をしたのか。言うまでも無いだろう。

あの男、南雲ハジメの『原点』はただ一つなのだから。

「で？ アンタはどうする気？ 何か茶々を入れる気？」

「俺もう十秒背中着いちまったからなく。お前まだだろ？ お前こそ

どうすんの？」

「私？ やる事は決まってるでしょ？」

やはりアイツは狂っていると再確認しつつも、二人は今後の動きに關して話し始める。現状ハジメが追い詰められているのは言うまでも無い。ならば何かしら動くのが最適だ。

答えはすぐに出た。

「無事に帰って来た南雲に説教するに決まってるじゃない」

「だろ？ つまりはそういう事だ」

『フアツイト！』

二人は不敵に笑う。

その表情には確信が込められており、1ミリたりとも憂いは無かった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——ズガアアアンツツツ!!!

凄まじい音が神像の麓にて鳴り響く。

その映像を見詰める人々は、その光景に姿勢を前のめりとした。戦場の中心にて見えるは白の極光。振り下ろされた意匠の凝った刃。勝利を確信した飢えた笑み。

そして、其れらを全て吹き飛ばす蒼だ。

「……」

光輝には理解出来ない。逸らされる、避けられると言った事ならば  
数度に渡り今迄も存在した。

しかし何故、どうして。

どうして武器の打ち合いで自分が負けたのか。

これが光輝にはまるで分からなかった。

蒼き修羅は笑う。

「成程…これは、難しいなあ」

身を包む魔力が、幾重にも重なっている。それは肌に纏わつてお  
り、<sup>ギブス</sup>包帯を彷彿とさせた。

——「魔錬・戦鬼」

「でも…ハハハッ。やっと盗めた」

双剣が蒼に輝いている。『聖剣』との打ち合いにも関わらず、その刃  
には傷がない。否、傷が無くなった。

——「錬成・不屈」

「…行くよ、天之河くん。僕の今出せる全力…その先の全力だ」

体内魔力と自然魔力が重なり合い、魔力外骨格を形成する。凡夫の  
膂力を超えた一歩が、地面を砕く。

——「魔錬・擬似限界突破」

文字通り、限界のその先。その魔力の奔流は溢れながらも静かで…  
天蓋に見える大空を想像させた。

戦場に煌めく二つの一等星。遠い客席からも視認可能な程、その光  
は眩しい。

「僕はまだ——折れてすらいらないぞ！」

最早誰にも止められない戦いが、今始まる。

### 32、矢文

『ぎ、疑似… 限界突破“!?”』

『有り得ん! 【勇者】様の真技だぞ!』

『だ、だがあの魔力の奔流は確かに…』

『そんな事よりも【聖女】様の名を! 訳が分からんぞ!』

世界が揺れる。

『…まさか、此処までとはな』

『ははは…すっかり我々も抜かれてしまいましたね、デビッド』

『やったれー! 南雲オー!!』

『いけいけー!!』

人々が魅入る。

『馬鹿な!? 馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な! 神聖なる【勇者】のみに許

された力を…あの神敵が!? 何故っ! ふざけっ!』

『猯下!? 落ち着いて下さい! 所詮模倣です! オリジナルの【勇

者】様には及ぶ訳がありません!』

『そ、それもそうですな。ふっ…ふう』

ある者は畏れ、

『嗚呼、素晴らしい! やはり彼は限界を超えた! 天運も神の助け

も無く、凡夫たる己の手で! …貴方はどう見ます? 『三代目』?』

『…ただ敬意を示そう』

『ふふっ…貴方でもそれだけの評価をするのですね? 当然では有り

ますが』

ある者は敬い、

『ククツ…クハハハハハハハハハ!!』

『お父様、落ち着いて下さいまし。我々はお忍びですわよ? …勿論

私としても『彼』がとても、とてーも気になりますが』

『ハハハ…予想外だ。全くもって痛快だ! アイツめ、とんでもない

サプライズプレゼントを用意してくれたものだな』

ある者は熱狂する。

そんな間にも二者間の剣戟は加速する。

蒼と極光。遙か先の客席からでも視認出来る二つの光は止まる事なく戦場を駆け回る。

もはやそこには圧倒的なワンサイドゲームは存在しない。互いが全霊を掛け、勝利を渴望する。正しく死闘がそこにはあった。

『あああああああああああああああああああああああ!!!』

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!』

人々の声を掻き消す様な咆哮が轟く。その真意は威嚇か、或いは己の激励か。少なくとも最早、威嚇として意味の無い雄叫び。その氣迫を乗せて、また一撃が振われた。

そして剣が振り下ろされる度に、また一つ声が上がる。その場にいる誰もがその熱狂に呑み込まれる。

『やれえ！　そこだア!!』

『頑張れエ!!』

『負けるなア!!』

町の荒くれ者が、辺境の貴族が、矮小な男児が声を上げ始めた。

その声が誰に向けられた物か、言うまでも無いだろう。教会への信仰、周囲からの無言の圧力、潜在的な罪悪感。それ等を置き去りにする程、彼の在り方は鮮烈だった。

だからこそ、自分もその一つに加わるべきなのだ。

分かっている。理解している。頭はそう在るべきなのだと結論を出している。何故なら彼は自分との約束を果たす為に彼処に立っているのだから。

だと言うのに、何故だろうか。ただぼうつと彼を見詰める事しか出来ない。

息が荒い。頬が熱い。波打つ鼓動が痛くて五月蠅い。

——僕は、白崎さんが好き…なんだなあ

あの言葉が、耳から離れ無い。

(どうしちやったのかな、私…)

白崎香織は知らない。

自分が抱いているソレが、俗に言う所の『照れ』である事を。

そして自分の胸にある答えを、この瞬間はまだ——

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(此処に来て、まだ互角！)

そして戦場を照らす蒼、それを纏うハジメは今迄無い苦戦を強いられていた。現在の實力は正に互角。どちらに勝負が転ぼうと誰もが疑わない程に拮抗している。

「魔鍊・擬似限界突破」。これは光輝の「限界突破」を見て数分、その間だけで自ら組み立て、そして現在尚も頭で演算し再現している言わばただの技術だ。「限界突破」の様な発動しただけで、継続出来る技では無い。

ハジメが編み出した「魔鍊」と言う技術は、単に『自然魔力や自己体内魔力を操作する』と言った物。その性質故に、「魔鍊」での操作には常に魔力の全てに意識を置き、操作を行わねばならない。

これは一応、「鍊成師」という天職においては不可能な事では無い。何故ならば「鍊成師」は鉱物を構成する一つ一つの土粒子、それらを全て操作する事によって「鍊成」を行っている。全員がそうとは言えないが、ハイクラスの「鍊成師」に関しては分子操作の五歩手前までは辿り着ける。ちなみにハジメは三歩手前、と言った所だ。

だが今のハジメは身体を動かし、幾種類もの「鍊成」を個別で発動している。最早その行動は並列思考マルチタスクにまで行き着いている。完全な唯一無二とさえ言える程の現状。

故に綻びが生じる可能性も、また近いのだ。

これ程の連続行使、本来のハジメでもまず不可能だ。それを為しているのは他でも無い、今迄に類を見ない程の集中力だ。

だが逆にその集中力が途切れた瞬間が、ハジメの終わりだ。

その上「魔鍊・擬似限界突破」には仕方が無かったとは言え、酷いデメリットが存在している以上、長期戦は不利となる。

(倒す——この一瞬で。僕の全霊を掛けてツツ！)

俄然不利。されど折れる気は無い。南雲ハジメに退路は元より存在しない。

だからこそ蒼を纏い、少年は刃を振るい——



「ミツケタ」

——ソコに、何かがいた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あはは…やっぱりこうなるかあ」

コロシアムの遙か高い場所。人目が一切無いその場所で、『使徒』は笑っている。だがその笑みに感情は無い。笑みの含まれてい無い目が、空に映る戦いを捉えていた。

だがそこに驚愕は無い。まるで想定通りだと言わんばかりに、彼女には余裕があった。

わざわざ用意した駒は負けた。軽く助言した駒も沈んでいる。本命の【勇者】さえも互角の場所まで追い詰められている。

だがそれでも『使徒』は表面上は笑っていた。会場に渦巻く驚愕、賞賛

熱狂：それ等に呑まれる事無く、がらんの笑みを絶やさず、ただ一人戦場を俯瞰する。

「はあ、見事だよ。敵ながらあっぱれって、こう言う時に言うんだねえ。やっぱりボクの判断は間違ってたなかつたかもね。本当に面倒な物だよねえ」

腕を前に伸ばす。人差し指と親指が広げられ、その間にはハジメの頭が映っている。『使徒』はそれを確認すると、ゆっくりと人差し指と親指を閉じた。

それはまるでハジメの未来を暗示しているかの様だった。

そしてニタリと擬音が聞こえる様な笑みが、一瞬で切り替わる。指をぐりぐりと、目線の先にある少年を擦り潰して一言。

「本当に…邪魔だよ、南雲ハジメ」

刹那、怖気が走る不快な声が一帯に染み渡った。

つい先程まで露程も見せなかった『使徒』の内心。それを閉じていた蓋が、僅かにズレた。そんな一瞬だった。

「…まっ、ボクからすれば勝つても負けてもどっちでも良いんだけれど…どうせだし光輝君に勝って欲しいよねえ」

だがすぐに顔に笑みを張り付け直した。変わらぬ笑顔。まるで人形のようなそれを空に向けながら、『使徒』は画面の少年に聞こえない呟きを残す。

「だから南雲君、頑張ってる君にプレゼントをあげよう。とっておきだよ？ どうせ用意したんだから、ちゃんんと…受け取ってね？」

それは何処までも冒流的で、邪悪な研究の結末。

『使徒』のそんな呟きを本能的に感じ取り畏れたのか、画面の先でほんの僅かな変化が現れる。しかし誰も気付かない。誰も分からない。誰もがその戦場に目を向けながら、誰もがその揺らぎを認識する事は無い。

今、正に激闘が繰り広げられる二人の戦場。皮肉にも白熱する試合に、誰もが目を奪われていたが故に。

警報も鳴らない。魔力感知機に血を入れるのは試合の前に公然の目の前で行われた。それ以外の機会には血の取り入れは出来ない様に保管もしてある。本来ならば選抜外の人間の体内魔力を感知し、鳴るはずだ。

しかし鳴らない。それもそうだろう。『使徒』の協力者、彼が自身の血と共にもう一人分の血を混ぜて機器に取り入れたからだ。

その事実は教会さえも、イシユタルでさえも知らない。『使徒』は他人を信頼していない。利用はすれど、頭の全貌を晒す様な殊勝な性格はしていない。

協力者ともう一人、その二人以外はまず知り得ない。

正真正銘の反則チート。しかし気付かない。当人のハジメも、熱狂に声を上げる人々も。その場にある一切合切気は気が付く事が無い。

「さてと…南雲君、王手チェックメイトだよ？」

最後の…透明な駒遠藤浩介が、キングハジメの隣に配置された。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——しかしそれは、ただ一人を除いての話だ。

(何かが…いるっ!?)

【聖女】白崎香織は見た。姿形は見えない。気配などこの遠くから分かる訳が無い。

しかし香織には見える。【暗殺者】の脳に住む「闇魔法」、その痕跡を視認する。

天職【聖女】の固有技能「浄眼」。本来、人には不可視の物を見る事が出来る常時発動型技能。その視認対象が何処までかは香織自身、理解に及んでいないが…遠くからでもその悍ましい力はくつきりと目に映っていた。

幾度と無く繰り返されたであろう洗脳と激痛の痕跡。魔法自体はもう完結している様で、洗脳者の体内魔力はもう【暗殺者】の体内には存在していないらしい。

【暗殺者】が果たして何者か、香織は認識出来ない。それ程までに彼は戦場に溶け込んでいた。

しかし本能的に理解する。【暗殺者】は間違いなくハジメに害を為す者だと。

(——南雲くん!)

気付いている者は誰一人居ない。自分以外には、ハジメ当人でさえも。

だからこそ駆けようとした。人が居ない場所に出れば自分も助力出来る。その思考の下、席を立つ事を優先した。

——が、横に居るのが誰かを忘れてはならない。

「止まりなさい、白崎香織」

「ッ——!?!」

眼前に見えるは細やかな手のひら。同時に動きを御する銀の視線が真横から確認出来た。

神殿騎士団長、ノイントゥエリジユヒト。人類最強という座をとある男と争う、教会の最大戦力。世界でも上澄み側にいる香織でさえ

も、まだ先が見えない程の実力者だ。

「教会の通達を忘れましたか？ 貴女は南雲ハジメへの肩入れがあまりにも過ぎる。こうして私が貴女の側にいるのも、監視が目的である事をお忘れ無く」

「……ッ…はい」

彼女が何故香織の横にいるのか。それは「オルクス大迷宮」へ無断で単独突入した罰だとされている。「聖女」が「勇者」と同等に重要な天職である為、その話を香織自身も先程までは疑っていなかった。

しかし今になって気付いた。ノイントの目的は『監視』では無く『牽制』、あるいは『妨害』だという事に。

恐らくは香織がやらかさずとも、教会は何らかの言い訳を持って香織の側にノイントを置いただろう。護衛…それも無い事は無いのだろうが、それ以上に生まれる効果が今此処にある。

この遠距離からの【暗殺者】の感知、そんな事が出来るのは対魔を極めて得意とする【聖女】ぐらいだ。また香織の得意分野は魔法、遠距離攻撃による【暗殺者】の除去を成立させてしまう可能性がある。

当然戦場には魔力感知機がある。魔法を放てば警報が鳴り響くだろう。だからこそ教会自体はそこで満足していた。

だが『使徒』はそうは考えなかった。常に想像の先を行くハジメとその仲間、その可能性を見越していた。そして香織ならば警報を鳴らさずに【暗殺者】の無力化が可能であると予測した。

だからこそ『使徒』は見えぬ第四の刺客を突入させた。

だからこそ『使徒』は香織の牽制を行った。

勝負は試合が始まった時点で決まっていたのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

じわり、じわり。

音も無く、ハジメと【暗殺者】の距離が縮まる。今のハジメは仮にも「限界突破”を使用した光輝と互角。その敏捷は凄まじく、改造と強化を施された【暗殺者】と言えども簡単に手を出せない程。

だからこそ【暗殺者】は忍び続ける。生じるであろう僅かな綻びを、ただ待つ。下手に手を出すよりも、機を捉えた一撃の方が何倍も効果

がある事を【暗殺者】はこれまでの経験を持って知っている。

【暗殺者】は本来、善性の人間であった。少なくとも当たり前の如く、殺人をする様な人間では無かった。彼の友人等もそう断ずる事だろう。

だが『使徒』はそれを許さなかった。『闇魔法』による洗脳、教会直々の騷、薬物の投与などにより、少年の自我はほぼ全て失われた。もしやすれば僅かにあるのかもしれないが、それは泡沫にも似た儂い物だろう。

そうして生み出された怪物に、躊躇いは無い。単純に対象を殺す傀儡として成り果ててしまったのだから。

故に選択は一撃必殺。皮肉にも自分達を助けた少年の心臓に刃を突き立てようとしていた。

そうして待っていると、ハジメが光輝に敢えて吹き飛ばされる事で距離を取り、次の武器を創ろうとしていた。光輝との一対一タイマンと考えれば悪手では無いこの一手。距離もそう遠くない。【暗殺者】ならば刹那で届くであろう距離だった。

懐から何かを取り出す。それはあまりに鋭く細い、刺突性能を存分に高めた針。刺す箇所さえ間違えなければ容易く人を殺せる、もう手に馴染んでしまった暗器だ。

何かを言おうとしたのか、【暗殺者】は僅かに喉を震わせた。しかしそれが空気を揺らす事は無く、形になるはずだった声は喉に飲み込まれてしまう。

そうして静かにも必殺の一撃は放たれて――

「？」

——光を、見た。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(集中、しなきや)

数十秒前、香織は別の手段に切り替えた。

下手に動けばノイントが動く。一つ大きな動きをしまえば、助力はまず不可能になるだろう。

だからこそ香織は指先から細かな光の粒子を放っていた。

——“光球”

それは香織が最も得意とする魔法にして、遂に詠唱破棄に辿り着いた魔法。体内魔力をそのままに外部へと放出でき、魔法陣の作成に香織は使用している。加えて魔法の遠隔発動も可能。だからこそ香織はノイントから離れた箇所まで魔法を完結させ【暗殺者】を倒す。そう決めた。

そして目論見は当たったらしく、ほんの僅かな魔力の粒子ならば流石のノイントも気付かないらしい。

ただ一つ、この手段には致命的な問題がある。

「——ッ!？」

「? どうされましたか、白崎香織?」

「い、いえ。なに…も」

「:…でしたら構いませんが」

それはコントロールの圧倒的な難易度だ。

日頃、香織はある程度大きな“光球”を幾つか放出する事で魔法陣の作成を行なっている。一つ一つに込められている魔力量は体積に反して凄まじく、五つも有れば中級魔法の一つでも放てる程だ。

では何故それだけの魔力を一つに込めるのか。一つは少ない数で魔法陣を成立させる為だ。数が少なければ操作難易度も下がる。単純な話だ。

そしてもう一つ。それは発生するであろう“光球”からの魔力漏出だ。再三説明するが“光球”は体内魔力の集合体を外部に放った結果である。それ故に“光球”のコントロールが杜撰になって仕舞えば、体内魔力が外部に漏れてしまい、ロスが発生する。

しかも今回は放つ必要のある「光球」の数は多く、かつノイントに気付かれない為に微量となる。少しでも「光球」から体内魔力を漏れ出すれば、「光球」自体が消失してしまいかねない。

加えて【暗殺者】がいつハジメに攻撃するか分かりはしない。だからこそなるべく早く魔法陣を完成させる必要がある。

「光球」の数は1000を優に超えた。それらなるべく速く、しかし丁寧に頭上へと移動させて行く。自身の身体になど気を向ける暇も無い。全身全霊で魔法陣の完成に努める。

同時発生する演算の数々に目が眩む香織。耳朶を打つ声もあやふや。外界を感じられない程の計算量。

(南雲くんは、いつつもこんな事をやってるんだ)

それはハジメの「魔錬」に近い操作だ。単純に属性を生み出し、その動きを操作する属性魔法と異なり、「錬成」は構造を理解した上でその構成物一つ一つを操作する魔法だ。同時に一流であればある程、細かく操作が可能となる魔法でもある。

そしてハジメは魔力の粒子一つ一つを制御し、戦っている。体内魔力や自然魔力、膨大なそれらを瞬時に並列的に動かしながら戦っている。

香織は自身の体内魔力を制御するだけでも大変だと言うのに。

果たしてそれを習得するにどれ程の努力を重ねたのか。思考を繰り返したのか。修羅場を潜り抜けたのか。

(凄いなあ……嬉しいなあ)

——待ってて、白崎さん。必ず、必ず君の元までたどり着くからあの日の約束の為に走り続けてくれたと思うと、白崎香織の内から込み上げる物があった。

単純な驚愕や感心と共に、これ以上無い程の歓喜が香織の心を満たしては溢れる。彼が今も戦っていると言うのに、それだけ想ってくれる事があまりにも嬉しい。

苦痛はもう無い。ズキズキと警告を響かせる頭痛を否定し、魔力の粒子を操作する。蛍火よりもほのかで力を感じさせるその光はやがて巨大な円環を築き上げた。

(ああ…欲張っちゃうなあ)

これだけ想ってくれる事がどれだけ貴重で素晴らしい事か、それに気付かない香織では無い。だからこそこんなにも心臓が煩いのだ。

だがやはりと言うべきか。白崎香織は結局の所、強欲なのだ。

戦場から遥か遠く高い彼方の空。太陽と重なり、尚も煌めく円環。あまりにも淡く輝くそれを誰もが陽光として疑わない。

そしてその中央で一つの矢が形成される。かつてベヒモスを穿った矢とはまた違う…言うならば『救いの矢』。

上空にて創り上げられた超巨大の魔法陣。その魔力に気付いたのかノイントが空を見上げる。その魔法陣を視認したのはノイントを含め五人のみ。

彼等の内の数人がその魔法陣に対処しようとする前に、その光は放たれる。

「好きだよ、南雲くん」

—— やさかにのゆみ 天穿・八尺瓊弓”

発射から着弾までの時間はコンマにも満たぬ刹那。『聖剣』により創り上げられた結界の穴を通り抜けて、矢は落下する。

そして見えぬ【暗殺者】を貫いて、矢は痕跡も残さず影の中で消えていった。

貫かれた【暗殺者】はその陽炎を揺らして、その後痕跡も残さず戦場から姿を消した。

死んではいない。怪我もしていない。これはそう言った技では無いのだから。

ハジメが倒れる様子も無い。ただ倒すべき敵を見つめている。それで良い。自分がやったのはあくまでも助力なのだから。

「だから…勝ってね？」

そうして彼女は、悪戯っぽく笑った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「…はっ」

『使徒』は固まる。眼下にて繰り広げられる闘争、それがまだ続いている事実ともう二つ。



即ち自身の「闇魔法」が解除されたという感覚ともう一つの理由に戸惑っていた。だがもう一つの話は今どうでも良い。洗脳が解かれたと言う事実が問題だ。

原因は分かっている。白崎香織に違い無い。遠隔から【暗殺者】の存在に気づき、「闇魔法」解除などまず他の人間には出来ない。【聖女】たる彼女のみに許された絶技だ。その可能性があったからこそ『使徒』はノイントを側に配置した。流石にノイントの監視を潜り抜ける事は出来ない、そう慢心していた。

まさかノイントから気付かれない位置から魔法を発動したなど、思いもなかった。

「ああ……どいつもこいつもボクの予想を超えて来るなあ」

加えて魔力感知の警報も働いていない。恐らくは香織の放った魔法に魔力の無駄が無かったからだろう。魔力の全てを何らかの効果に費やしたならばそれも原理上可能だ。魔力感知が効果を見せるのはあくまでも空気中にある漏出した体内魔力のみ。何らかの効力により消費される魔力に対してはその限りでは無い。

問題は原理上は可能であるものの、その様な事をしでかす人間がまじ居ないと言う点である。

エネルギーの無駄を省くと言うのは凡ゆるエネルギー置換に於いて不可能とされる問題である。電気から光を生み出す際に熱が生まれる様に、運動をする際に音が必ず鳴る様に。極微小に抑えると言うのは出来ても、無くすと言うのは現段階の人間にとっては絶対不可である。

だが今、目の前で起きた現象は間違いない。香織はそれをしたのだ。特筆すべき香織の才能と腕に、『使徒』は小さく笑う。

「ふふっ……ボクもまだ君達を過小評価してたのかなあ？」

空のとある一点を見上げ、自嘲気味に笑う。今日初の己の失敗だと認めざるを得ない。

そして「念話」を通して彼女に伝える。

『もう良いよ、ノイント。後はもう光輝くん達次第だ。どっちに転んでもおかしくない。だから……プランBを念頭に置いておいてくれな

いかなあ?』

『…そうですか。まあ構いません。神はどちらでも良いと仰せですか  
ら』

『ホント良い空気吸ってるね、あの神様。ま、ボクとしては気楽だから  
イイけどね? あ、あと遠藤くん死んでないんだよね。ま、元から  
行方不明扱いだから表に顔を出したら、捕えられるだろうけど。:  
ま、一応注意しておいてね?』

『左様ですか。では、もう〝念話〟を切らせて頂きますよ?』

『うん、お疲れ様〜』

『失礼致します』

全貌の読めぬ会話を終えて、『使徒』は鼻歌を歌う。

その歌の間、ずっと『使徒』は空を睨み付けていた。

「さて、ボクも本腰入れて行かないとね?」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

何が起きたのか、まるで彼には分からない。

だが一つだけ理解に及ぶのは、あの光は彼女のものだという事だ  
け。

何から彼女が自分を守ってくれたのかは分からない。しかし彼女  
が自分を守ってくれたと言うだけで、可笑しい程に力が湧いて来る。

——勝つてね?

そんな応援エールが聞こえた気がした。幻聴だ。遠くにいる彼女の声が  
此処に届く訳が無い。

そんな事は分かっている、が。

「本当に…単純だな、僕は!」

胸から込み上げる熱を感じる。踏み込む脚が余す事なく力を地面  
に伝える。素晴らしいまでの全能感が全身を駆け抜けた。

迫る白刃を潜り抜け、瞬時に双剣による連撃ラッシュを繰り出すハジメ。対  
する光輝はそれ等を『聖剣』や『聖鎧』を用いて防御する。突破不可  
能のこの組み合わせ。

だが、ハジメの眼光は煌めいていた。

「〝錬成〟!」

「なッ!?!」

瞬間、彼が持っていたナイフが蒼いスパークと共にその刃を伸ばした。

ハジメがこれまで敢えて隠していた全速力の「錬成」。それはまるで持っている武器が入れ替わったかの様な錯覚を敵に覚えさせるであろう。

ナイフは唯一剥き出しである頭部目掛けて振り抜かれて――

――ザシユツ!

光輝の頬に、一筋赤い線が描かれた。

光輝自身もそれを知覚したのだろう。それは「限界突破」後、初めてともに作られた傷だった。

「くそっ!　また――っ!?!」

狼狽える光輝に続け様に放たれる刺突。光輝は上半身をずらして避ける。だが先よりも余裕は無い。

光輝は確信する。この土壇場に立って尚、ハジメの力が増している

と。  
生半可の意識では勝てない。光輝は頬の傷の屈辱をすぐに脳裏から消し、『聖剣』に光を収束させた。

「ッ!　…行くぞ、南雲オ!!」

「――「錬成」エ!!」

――もはや勝負を妨げる物は何も無い。

――邪魔者も外野も関係ない。

――決着が、訪れようとしていた。

### 33、【勇者】VS【錬成師】

地平線が赤く、赤く。

脚を地に付けた夕焼けが、やがて来る終わりを顕著に示していた。そうして：太陽は、月は笑うのだ。

世界が赤に照らされても尚、地上で蒼く輝く<sup>ソラ</sup>大空に。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

肉体が剥落する。

攻撃は覚醒後、一度たりとも受けていない。武器で攻撃を逸らすか、或いは躲すか。少なくともまともな直撃をハジメは受けていない。

にも関わらず打ち合う度に手の皮が剥がれ、爪が粉々に砕けた。走る度にヒビが入った事を確信し、眼球も外部の圧力を受けてか赤く染まっていた。

単純に言おう、自分の動きにすらハジメの肉体は耐え切れなかった。

本来ならばそれは可笑しい。『限界突破』は全てのステータスを強化する技能だ。当然それは『耐性』、『魔耐』の強化にも繋がる。少なくとも自らのステータスによる自壊など、起こる筈もない。

だがそれはあくまでも通常の『限界突破』での話。『魔錬・擬似限界突破』は一見同種に見えて、多少ながら能力が異なる。

『魔錬・擬似限界突破』は光輝の『限界突破』を見様見真似した物だ。原理を頭で理解し、魔力を制御する事で擬似的に再現した物。

だから、という訳ではないが即席で再現したからだろうか。『魔錬・擬似限界突破』の倍率は『限界突破』と比べて低い。本来ならばハジメのステータス値のどれもが光輝に敵う事は無い。再現したとしても、そこで戦いは終了していた。

しかしだ。再三言うが、ハジメの『魔錬・擬似限界突破』は『限界突破』の仕組みを理解した上での発動だ。だからこそ：改造も容易に可能となる。

そう、ハジメは「魔錬・擬似限界突破」以降、『耐性』と『魔耐』の強化を切り捨てる代わりに他のステータスの倍率を引き上げたのだ。それまでの「魔錬」ならばステータスの変更はある程度自由に行っていたが、「魔錬、擬似限界突破」ともあらば変更は容易では無い。その為、防御の際に『耐性』や『魔耐』に振り分けるといふ手は使えず、この二つに関しては、ハジメはただの一般人と変わらない。

元より死に体。「魔錬・戦鬼」による戦闘続行能力があろうと、その体を蝕む痛み、倦怠感は変わらない。むしろ「魔錬」による肉体強化は神経をより過敏にする。故に走る痛みは通常時を超えてしまっている。

自壊する肉体。彼の身体を包む蒼の清廉さとは程遠い残酷性。

正しく捨て身の戦い。一度でも光輝からの攻撃を食らえば負ける。そんな確信がハジメの中にはある。

故に一刻も早く光輝を倒す必要がある、が。

(動きが、読まれてる!?)

永劫にも刹那にも思える白熱。その中でやはりと言うべきか：光輝も学習していた。

二種の神造武器を引き出し、かつ「限界突破」を使って尚も倒せない相手。たとえその相手が認めたく無い相手であろうと、認めざるを得ない。

これまでの光輝は全力だった。己が持ち得る全てを使って目の前の存在を否定しに掛かった。それは間違い無い。

しかし今の光輝は同時に本気でもあった。全身全霊。自身のスベックをただ使うのでは無く、そのスベックを目の前のハジメ敵に合わせ用いている。紛れも無い、今の光輝がこれまでの自分の中でも最強だ。

ハジメの癖を見抜き、かつそれに対応する様に剣を振るう。地球にいた頃から用いていた『八重樫流』、そして此方に来てから学んだ王国式の戦闘法。それらをハイブリッドにした光輝だけの剣術だ。

ハジメのナイフを流すと、すぐに脇腹へと横薙ぎが放たれた。ハジメはそれをしゃがみ込む事で回避する。同時に地面にいつの間にか

描かれた魔法陣が煌めく。

「ここに焼撃を望む——『火球』！」

「甘んぶ！」

光輝の真下から放たれる焰。飛距離を零した故に発現と同時に爆発。されど光輝は僅かに飛び、『聖剣』を振るう事でその爆撃を切り裂いた。

当然初級魔法を食らった程度で光輝にダメージは無い。『聖鎧』の防御力は並外れている。初級魔法程度ならば構えずとも、無効化可能だ。本来ならば避ける意味も、ましてやわざわざ無効化する意味も無い。

しかし光輝は長い戦いからハジメの狙いはダメージでは無く、視覚を埋める事にあると理解している。だからこそ敢えて大きく回避し、爆撃を防いだ。

死闘は徐々に光輝が押し始めている。気迫は確かにハジメの方が有る。工夫の点を見ても、ハジメは良くやっていると云えるだろう。

だが光輝は慣れ始めていた。滅多に使わない自身の『限界突破』の身体能力。同じく身体能力を活性させているハジメの速度。そして何よりも奇怪な事極まり無い、『錬成』を織り交ぜた戦闘スタイルにも。それら全てに適応しつつあった。

これまでハジメが光輝との差を埋められたのは、当然彼の実力もある。しかしそれ以上に彼の持つ特殊性、所謂『初見殺し』に近い戦闘スタイルが何よりも武器だった。

短期決戦ならば意味はあった。しかしこうも戦いが長期間続けば、ハジメの『初見殺し』も効果を成さなくなる。

光輝は離れようとしたハジメとの間合いを埋める。それは互いの独壇場。されど光輝の方がソレに関しては、年季が違う。上手だ。

「ぐっ?!? このっ?!? ツ——！」

ハジメはよく対応していた。迫り来る滅びの連撃、それを己が身に受けること無くやり合っているのだから。

半年。僅か半年。それだけでこれだけ戦えるのだから大した物だと光輝もほんの少し感心した。されど胸を焦がす嫉妬嫉は益々燃え盛

るばかり。

遂に怒涛の攻撃によりハジメの姿勢が崩れ、光輝の方へと背を向ける。ハジメは短剣を持っているが、生憎背を向けた状態での防御は人間の構造上不可能。その背に光を集結させた『聖剣』、その突きを放つ。

「終わりだ！ 南雲オ!!」

今度こそ油断も何も無い。床に仕込まれている魔法も無い以上、カウンター反撃でも無い。

——決まった

そんな確信が光輝の中で駆け巡って。

そして——

それは見覚えがあつた。

この戦場に於いてはあまりに不相応。されど確かに彼女はその正体を看破する。

何故ならば他でも無い。彼に教えたのは彼女自身なのだから。

だからこそ驚愕と呆れと称賛、そして歓喜を胸一杯にして彼女は口を開いた。

「…本当に節操なしですわね、南雲さんは」

「ええ。間違いありません、お嬢様」

光輝の一撃を避けたのは社交ダンスにおけるターン。

かつてリリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒが骨の髄まで教えて込んだ技術。本来ならば戦いには程遠い代物であるそれ。しかし一芸は万芸に通じると言う様に、しつかりと会得した上で工夫をこさえればそ

の一芸は正しく化ける。

特殊で滑らかな足の運び。全身が流動する様に動き。戦場においてあまりに異色の動きに光輝は付いて行けず、その剣を空振った。

ぼやりと光輝の目には、ハジメの背後に何かが見えた。だが余所見している暇は無いと、ハジメはターンの勢いのまま光輝の鎧に剣を叩き付けた。

（——!?!）

ダメージは無い。しかし驚愕がある。ハジメ特有の剣筋もまた、足運びとともに別人の様に切り替わったから。

そしてその剣筋には見覚えがある。この半年嫌と言うほど見て来て、追いつけた人の剣。豪快ながらも繊細という矛盾した性質を秘める、光輝の記憶上最優の剣士。

（団長?!）

王国騎士団長、メルドⅡロギンス。

何もハジメが完璧に彼の剣を模倣出来ている訳では無い。半年で追い越せる程、メルドの剣技はお粗末な物では無い。

しかし光輝は幻視する。ハジメの背後にメルドを、リアーナを。彼の背を押す姿を何故か見る。

「——ッッッ!!」

光輝の拳に力が籠る。巫山戯るなど彼の心が喚いて煩い。そしてその心模様に従う様に、凄まじい一振りがハジメへと放たれた。回避の隙間も与えんとする袈裟斬り。先程の様な足踏みでの回避でも擦りはするだろう。

するとハジメの短剣が蒼に包まれる。知っている。変形の前兆だ。盾か、或いは籠手か。躲せない前提により、光輝は防御の類の武器を想定する。

そして現れたのは、一本の日本刀。

「ふ——っ！」

あまりに短い深呼吸の後、光輝が放った斬撃が逸れる。何の抵抗も無く、まるで水が岩を避けて流れる様に。『聖剣』の一撃が虚しく、地面のみを砕いた。



——八重樫流「音刃流し」

本来ならば反撃もセツトの技だが、急席で作られたこの剣はあくまでも薄刃の剣。対する『聖剣』は剣に触れるのみでダメージが発生する。ハジメが『聖剣』の攻撃に対し、回避や武器での防御を選択するのはそれが理由だ。

だから反撃は刀では無い。その拳だ。

砕けた刀は蒼により籠手と成る。そして雄叫びの様に詠唱を拳と共に放つ。

「猛り地を割る力をここに！——剛力!!」

——ズドンツ!!

雷が落ちたと錯覚する轟音が響く。ただの籠手と鎧の衝突とは思えない衝撃波が周囲の遺跡を砂利に変えた。

変わらずダメージは無い。『聖鎧』のダメージカットは堅牢その物。されど問題はハジメが殴った箇所だ。

「ツ——!?!」

ハートブレイクショット  
——心臓打ち

心臓を麻痺させる様な衝撃は胸に伝わっていない。しかし己が急に攻撃を入れられた、その事実が光輝の思考を一瞬白く染め上げる。

(雫?…龍太郎?)

またハジメの背に人影を幻視する。何故お前の傍に二人が居るのか。それは正しく無いだろうと。

とは言えダメージも無く、肉体的な麻痺でも無い。あくまでも感情が生み出したただの怯み。刹那にも及ばない隙だ。

ならばと蒼の稲妻がハジメの足元を照らす。創り上げられるは強大な大剣。ベヒモス戦で創り出した物よりも遥かに重く硬い、常識を遥かに追いやった超級の質量武器。

光輝でも分かる。まともに食らえば自分でもダメージが入ると。精神的な麻痺から脱した光輝は、その危険性を避ける為か。すぐにバックステップで距離を取った。

対するハジメは大剣を中段に構えて——詠唱を開始する。







あまりに呆気ない結末。会場は疑念に囚われる。あの男がまだ何かをしてくすつもりで無いかを。

だが地上に姿は見えず、かつ詠唱する暇も無かった。「錬成」で地下に隠れた可能性も否めないが、「神威」の威力は地面を深く抉る程。余程深くに逃げていなければ極光に巻き込まれているだろう。

だからこそ南雲ハジメの死が現実味を持ち始める。今度こそ逆転は無いかと段々と信じ始める。

砂塵が薄れていく。「神威」の余波が撒き散らしたのだろうか。光輝の前方で砂が舞い踊っている。

その砂が降りて——やはり誰も、そこには居なかった。

皆が確信する。この戦いは「勇者」が勝利したのだと。「錬成師」は皮肉にも一歩及ばなかったのだと。

ある者は拳を掲げ、ある者は悲嘆に暮れる。その中で教皇は叫ぶ。

「この勝負！ 我らが勝利——」

「はあ…はあ…」

砂塵渦巻く世界の中で、一人だけが立っている。

過去の建造物も、草木も、そしてハジメも何も無い。あらゆる物が焼き尽くされた平地がそこにはある。

一瞬、世界を見渡して、光輝は『聖剣』を杖代わりに地面へと突き刺し、もたれる。

限界だった。過去に無い長期間における「限界突破」の使用。それは光輝に限界を齎していた。

凄まじい疲労感に手が痙攣する。脂汗が湧き、光輝の睫毛を湿らせた。それが億劫で、人差し指でその湿り気を払う。

「勝った…のか？」

明けた砂塵には誰もいない。少なくとも光輝の目には誰も。

「ははっ、何だ…勝てたじゃないか」

光輝の顔に喜色が宿る。それは何を思ってたか。人を殺しておきながら口端を上げるその姿は、もはや狂人と言っても差し支えなかった。

だが光輝自身はそんな事など知らない。息を荒げつつも、勝利と言う二文字に浸り、拳を握る。あんな奴よりも自分の方が強かった、そんな事実を思ってた酔う。

空が赤い。夕焼けはもう落ちようとしていた。逢魔時と言うべきか。何処と無く不穏な雰囲気の世界に漂っている。

そして遂に夕焼けの残り一片が落ちて――

「うん…信じてたよ南雲くん」

そんな中で彼女は空を見上げ、微笑んでいた。

「? —— ツツ!!?」

薄暗い紺青の空。其処で瞬く蒼を、彼等は見た。それは落ちて来る。

あの蒼を紛う事は無い。紛れも無く彼の魔力光。

「南雲ツ!」

倒したと、そう思っていた敵の再来に光輝は今日何度も繰り返す驚愕を見せた。

恐らくは跳躍してなるべく「神威」の直撃を避けたのだろう。そこまでは現状の光輝でも理解出来る。

だが「神威」の攻撃範囲は「天翔閃」と比較しても尚膨大。龍をも飲み込むとされる程の攻撃面積を誇る。今、ハジメは上に避けたとしても、「神威」が掠りさえすれば即死圏内。

ならば何故か。

それはたった今砕けた殻が答えだ。

光輝はその魔法を良く知っている。この半年、その魔法に幾度と無く助けられて来たから。

それは光属性最上級魔法にして、結界術の極地。発動さえすればあらゆる攻撃を一度は無効化するとまで言われる奥義。

そして同時に、とある少女の十八番たる魔法だ。

その名は――

「――「聖絶」」

答えを示す様に、ハジメは再度その魔法を発動する。ハジメの魔力量を考えれば有り得ない最上級魔法の連続使用。しかも詠唱をしていないにも関わらず、だ。

何故そんな事が出来るのか。

光輝は気付く由も無いが、客席から戦場を俯瞰する者達を見た。

――そこに刻まれている直径100mにも渡る、あまりに大きな魔法陣、「聖絶」のそれが輝いているのを

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「地脈を利用しますか…ふふつ、やっぱりハーちゃんは面白いですね」  
ハジメの体内魔力は少ない。単なる循環である「魔錬・武装」や「魔錬・擬似限界突破」は魔力を消費しない。しかし「錬成」や魔法陣を動かす「魔錬」は当然魔力を消費する。

その違和感を大空に浮かぶ月は看破する。

戦場の周囲に張り巡らされている結界や魔力感知機。その発動に  
関わる魔力の導線が戦場の地下には張り巡らされている。それをハ  
ジメは「魔錬」によつて、地面に刻んだ魔法陣を発動する度に地脈の  
一部を拝借したのだ。

元より有り余る程の魔力が流れる地脈。故に一部を掠め取られた  
所で各アーティファクトの発動に支障は無く、それ故に教会はその違  
和感にまるで気付く事が出来ない。

それもその筈だ。教会はこれまでの、この【錬成師】の戦いを全く  
と言つて良い程知らず、それ故に【無能】のレットルを貼り続けて来  
たのだから。

「さて。ちよつとだけ手伝つて上げたのですからちやんと勝つて  
くださいね、ハーちゃん？」

そう言う彼女の横にはこれまでの四つの陰とは異なる、もう一つの  
陰がふよふよと浮かんでいた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(何で——詠唱がっ!?)

動揺する。目の前の存在に。故に思考の呂律が回らなくなる。

それもその筈、光輝は騙されていた。「魔錬」は直接魔力を操作す  
る技術、その使用の指向を定める為の魔法陣は必需であるものの、魔  
力を操作する為の詠唱は必要が無い。

だが光輝はこれまでハジメが詠唱していたが故に、騙されていた。  
光輝のみでは無い。外野の目をも欺いてみせた。原理を理解してい  
れば分かつたであろう嘘。

全ては、この一瞬の為に。

「ツー」

苦し紛れに光輝は『聖剣』による魔力の斬撃を放つ。だが再度展開  
された「聖絶」はそれを無効化する。

ハジメが手中のナイフを握り締めたのが遠目でも分かつた。

(あれが——南雲の渾身の一撃！)

ハジメが元より満身創痍であるのは理解している。だからこそ光  
輝が奥義を放ち、疲労が見えた瞬間に勝負を決めに掛かつたのだ。



なればこそ、次の一撃こそが勝負の分け目。光輝はそう判断して『聖剣』を構える。『聖剣』にてナイフを砕き、その返しで反撃を決める。それが今光輝が考え得る最善。

(さあ来い！)

そして光輝の読み通りハジメは腰を捻りナイフを突き出して――

——そのナイフを宙に放り投げた。

「はっ。」

宙に放り投げられたナイフを辿る様に光輝の視線が、其方を向く。完全な計算外。突拍子も無い意味のない行為。『聖剣』にて自身に投げられたナイフを砕くが、意味が無い。

故にこの無駄な一手は、光輝の意識を奪う最良の一手に化ける。

瞬間ハジメは『聖絶』の一部を剥落。同時に己の足元にある『聖絶』の障壁を蹴り、自身の軌道を無理矢理曲げる。内部からの衝撃に障壁が砕け、音が鳴る。光輝はまたもやその音に目が吊られる。

ハジメはその一瞬を逃さない。体内を巡る全ての魔力を今、活性化<sup>ブレイスト</sup>する。

溢れ出る魔力光。文字通り、自壊しかねない本気。『魔錬・戦鬼』の戦闘続行能力を持ってしても、連鎖する傷を抑え切れる事は無い。止めど無く溢れる血が、彼の苦痛を示す何よりもの証左だ。

光輝が意識の余白から帰還し、此方を見やる。流石は【勇者】というべきか。もう迎撃の準備を完了している。油断などもう無い。全身全霊で己に挑む光輝の姿がある。

そう、全身全霊で互いは戦っている。

ならばまだ、ハジメの手には…残っている。

それは【無能】と呼ばれた最初からあって、幾度と無く助けられて

来た力。

呪った時もあった。もつと強い手があれば平和にこの異世界を歩めたかも知れないと思つた時期もあった。

だがそれでも創意工夫をこなし、師より手解きを受け、共に研鑽を重ねた。

今なら思える。自分に与えられたのがこの力で良かったと。

ならばこそ、ハジメはその力の名を誇る様に高らかに叫んだ。

「——『錬成』!!」

ハジメの脚から蒼の魔力光が地を伝い、波紋を広げる。その魔力光が光輝の足元まで届くと、すぐに変化は訪れた。

隆起する。地面が八岐大蛇の様に変化し、光輝の胴体に絡まる。

【オルクス大迷宮】の頃からずっと進化した、ハジメの捕縛技。

「俺は——まだッ!!」

光輝は当然砕こうとする。この程度ならば砕けると『限界突破』しているその肉体で、此方に迫るハジメごと吹き飛ばそうとする。

——が

「…え？」

——光輝の身体は動かなかった

代わりに訪れるは倦怠感。元のステータスでも砕けるであろう薄さにも関わらず、身じろぎすら認められない。

光輝は忘れていた。『限界突破』はあくまでも一時的な強化だ。永続的に続くわけでは無く、魔力が不十分になって仕舞えばすぐに破綻する。

しかも『限界突破』はその性質上、活動するだけで体内魔力を消費する。一方で全ての魔力が発動者の制御化にある『魔錬・擬似限界突破』は体内魔力の無駄が限り無く零に近い。どちらが先に限界を迎えるかという持久戦はハジメの方が有利だった。

『限界突破』を発動してから三十分、ステータスチートの光輝と言えどもそれ程長い期間の発動には無理がある。体内魔力もほぼ尽きていて、身体が麻痺している。

「…嫌だ」

口だって動く。大層な怪我がある訳でもない。ただ魔力が無くなり、【勇者】の特権が消えただけ。それだけで、光輝はあまりに無力に成り果てた。

「嫌だ嫌だ」

迫る。蒼く闘志を燃やす羅刹が。固く握られた拳が。そして何よりも——敗北が。絶望が死神の足音を鳴らして迫る。

これまでの人生において無縁だった恐怖が、絶望が。光輝の喉を震えさせた。

「いやだああああああ——」

——ドツツツ!!

唯一防具が無い顔面に直撃する拳。ミシミシと嫌な感触が捉えた頭蓋と己の拳、両方から鳴った。

だがハジメは走る痛みにも構わない。更に拳へと力を込めて、光輝を吹き飛ばす。

「いやっ、あ…」

4、5メートル吹き飛んだ後、地面に引き摺られて漸く光輝は静止した。そんな彼は血に塗れ、白目を剥いている。拳による衝撃は鼻の骨を折り、歯を何本か砕いていた。

その光景はなんとまあ…哀れな物だった。

当然と言うべきか。彼は既に延びており、テンカウントすら必要が無いほどである。

審判は一瞬で切り替わった勝者に唾然としながらも、判決を下さざるを得なかった。

「…やっぱり、気持ち良い物じゃ無いなあ」

そんな事をボヤきながら、それでもハジメは戦場に立っていた。

——勝者、南雲ハジメ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ば、ばかなあ…」

教皇イシユタルは目の前の光景に青褪めていた。勝った、そう確信した数分後にこれだ。天国から地獄にでも落とされた気分だ。

しかも試合結果をまとめればどうか。此方陣営は全員敗北。向こ

う側は幸利が疲労により十秒間背を付けたがそれだけだ。しかも光輝の反則もあり、見事な惨敗と言えよう。

加えてもう一つの問題は『言い訳』がほぼ皆無である事だ。向こう陣営には非がなく、むしろ此方側の非ばかりが目立つ。

端的に言おう、最悪だ。

(い、いやまだですぞ！ 奴等の技はどれも初見殺しの物ばかり！ もう一度やり直せたならば、そう出来れば対策は容易！ 何かしらをそれらしく言えれば民衆操作などたやす——)

だが流石と言うべきか。イシユタルは思考を切り替え、民衆を納得させ得る十分な『言い訳』を産み出そうとする。

ただそうだ。イシユタルに非があるとするならば。

相手が悪かった、と言うべきだろう。

——パチパチパチパチパチ

客席から拍手が鳴る。

『神前決闘』には暗黙の了解が存在する。例えば試合後、最初に反応を示すのは【教皇】で無ければならないという物が。

すなわちこの拍手は無礼に値する。故に誰もが目を向け——必要無いと投げ捨てられた外套に、隠れていたその顔に目を剥く。

「……は？」

それはイシユタルも同様。何故コイツが此処にいるのか、その答えを求めて困惑する。

だがその疑問を解決する暇さえも無く、その男は全世界に轟かん程の呵呵大笑を響かせて、声を発する。

「ハハハハハハハハハハ!!! まずは見事だ、若き戦士達よ！ 貴様らの勇姿は全世界、永劫に忘れる事が無いだろう！ これまで俺様が見てきた中でも引きん出て、良き試合だった」

大胆不敵にしてあまりもの破天荒。教皇の言葉等知らんとはかりに、これまでの死闘を称賛する。

本来ならば客席中にいる神殿騎士達が止めに掛かるだろう蛮行。或いは信者達がこぞって非難するであろう愚行だ。

されどこの男には許される。何故ならばこの場において、この男に

敵う者は居ないのだから。国にある全ての荒くれ者を武威のみで鎮める人類の絶対王者。

「改めて【ヘルシャー帝国】皇帝、ガハルドⅡDⅡヘルシャーの名に掛けて：園部優花！ 清水幸利！ そして——南雲ハジメ！ この場においては貴様ら三人のみ、健闘を讃えよう！」

紛れも無い、この世界の氷山の一角が『神前決闘』の場に姿を現した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——はあ!? 皇帝ガハルド!? 何でそんな大物が此処にいるのよ!?」

取り残される戦場の一角にて、園部優花はピナの『共眼』越しに目を剥いた。

だがそれも仕方が無いだろう。『神前決闘』はあくまでも聖教教会主催の最終判決の儀式。そこに呼ばれる客人は教会の庇護下ゲストにいる者達ばかり。聖教教会と仲が悪いガハルドはまず呼ばれる筈がない。

ならば何故——

優花は横で笑うのを抑えている阿呆に目を向けた。

「オイ、アンタ。今度は何をしでかした？」

「プフツ、あのイシユタルの顔ヤバくね？ 俺よく笑い声上げんの我慢したわ」

「今そんな事はどうでも良いのよ、ユキ！ この事態を説明しなさい！」

「別に良いけど多分まだ中継中だぞ？ 普通に話すぐらいならまだしも、そんな大声上げたら：ハジメの二の舞だぞ？」

「うぐつ!? …そうね、落ち着いたわ。私もああはなりたく無いし」

「まあ、もうとっくに中継終わってるけどな？」

「殺すわ」

幸利は頬をリスの様に膨らませ、口を押さえる事で笑うのを我慢していた。ぶっちゃけ寸前である。というか漏れている。

まあ優花としても、散々今までやらかしてくれたイシユタルが変顔を決めているのは噴飯物だ。しかしそれはそれ。これはこれ。それ

以上に気になるのは客席で起きている状況だ。

何とか笑うのを堪えられたらしい幸利が目元の涙を拭って答える。

「そんで? …あー、確か俺が皇帝サマを呼んだ理由で合ってたっけ?」

「違——って予想はしてたけどアンタが呼んだの!! 何処で知り合ったのよ!」

「中継が無くなったからって叫ぶな叫ぶな。うるせえんだよ? いいか? 人の鼓膜は案外容易く破れるんだぞ? 俺の鼓膜が破れたらお前はどうかしてくれる? もう少し俺と言うか弱い生物を甘やかに接して——」

「はやくこたえろ (木串装填)」

「了解であります! 正確には元より親交が有ったメルドさんの助力の下、この試合を見に来る様に誘導したであります!」

「…もしかして、コレがやり直し対策?」

「正☆解 (良い男風の声)」

「… (木串)」

「あ——!!!」

「オラウータンの鳴き真似が上手ね?」

「くそッ…すぐに暴力に訴えやがって…」

「違うわよ、ユキ? これはね、黙って言うのよ?」

「俺ってペット!」

「家畜よ?」

「断言された!」

試合のストレスからか。言葉の茶番が進む事この上無し。二人とも結構怪我やら疲労が凄まじいと言うのに生き生きとしている姿はある意味凶太いと言えた。

尻を押さえる幸利を椅子にしつつ、優花は質問を続ける。

「で、何で皇帝が対策になるのよ?」

「おーん…まあ、見れば分かるぞ? 先ずは見てろ。それでも分からない低脳なら説明してやる」

「…………… (木串再度装填)」

「私に説明させてくださいませ、園部様」

「それで良いのよ」

何故いちいち煽るのか。そして何故いちいち木串なのか。それは質問してはならないポイントである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「な、何故貴様が此処にいる?! この野蛮人めが!」

視点は再び客席側に戻る。

衝撃による麻痺から回復したイシュタルは即刻、ガハルドの賞賛を止めに入った。

「ふむ? 何だ、貴様がイシュタル。俺様は今気持ち良く称賛をしているんだ。邪魔しないで貰いたい…ああ、ただ貴様の気味の悪い笑みが剥がれたのは面白い。そこで顔だけ置いておけ、観賞用にしてやる」

「ツ——申し訳ありませんな、ガハルド殿。少しばかり冷静さを失っていた様です。ただ…儂の邪魔はしないでくれませんか?」

「ふーむ…それは無理な相談だな、イシュタル。俺様はあの者達の事を気に入った。喝采の一つや二つ、別に構わんだろう? 勝敗は決まったのだから」

「勝敗はまだ決まっておりますぞ、ガハルド殿? 儂が判決を下すまでは——」

教皇イシュタルと皇帝ガハルド。二者間に稲妻が走った幻覚を人々が見る。犬猿の仲である二人は、互いに棘の含まれた言葉を投げていた。特にイシュタルに関しては日頃の余裕ぶった様相が消え、言葉遣いも荒々しい。先の試合もあってだろうか、動揺が透けて見える。

そしてその言葉の内、とあるワードにガハルドは如実な反応を示した。

「まだ? 何も何も今まさに決まっただろう? 被疑者側の勝利だ。勿体ぶっても意味が無いだろう。さっさと発表しろ」

ガハルドが取り上げた言葉に民衆がハツとする。確かに「まだ」と言っただけで教皇の方を見る。

イシュタルもこれにぴくりと眉を擡めた。同時に己の失言に心の中で叱咤を打つ。『神前決闘』は表向きには決闘で判決を決めると言う物。イシュタルの「まだ」という言葉は明らかにそれに反している。だが負けを認める訳には行かない。言ってしまえば神からの使命を果たさない。故にイシュタルは動揺を巧妙に隠し、平静を繕って言う。

「そうは言いますがな、ガハルド殿。南雲ハジメは神敵、判断は慎重にせねば——」

「神敵である事は前提だろう？ この決闘はそもそも被疑者側は神敵だ。それは何の言い訳にもならん。神は勝てば許すとしたのだろう？ これはそう言う儀式だろう？ 貴様は神の意に反するののか？」

「——」

イシュタルは今度こそ言葉を失った。言い訳が無い訳では無い。返す言葉が無い訳では無い。だがどれもこれも目の前の男には反論され得る。

これまでの『神前決闘』ではこんな事は無かった。では何故——だがそんな意識の余白すら無視して、皇帝は威風堂々と声を張り上げた。

「確か……勝利判定後、教皇が試合結果に難有りと判断した場合、三日間期間を置き、再度『神前決闘』を行う。この際のチームの再編成は許可される。』、だったか？ なる程、貴様はこの勝負を難ありもしているらしい。……ハッ、くだらん。この死闘の何処が難ありだ？

【ハイリヒ王国】の者達よ！ 何処に難が有るか口に出来る賢者はいるか!? 俺様は全く持つて分らん！」

『……分かりません！』

『戦士かく有るべし、私はそう思わされました！』

『歴史に残る素晴らしき試合だったと存じます！』

「嗚呼、そうだろう？ 【ハイリヒ王国】の賢者達をもしても分かんと言うのだ。俺に分かる筈もない」

皇帝の威光は瞬く間に人々を惹き寄せた。或いは決闘より出でた白熱が人々を感化させたのか。矢継ぎ早に声は増え、そのどれもがハ



ジメへと寄っていた。

そうだろう。何故ならば今まさに百の見聞に勝る証明が、戦場にて示されたのだから。

人々が明らかに皇帝の方に、ハジメ側に比重が向いているのがよく分かる。イシユタルはしてやられたと唇を噛んだ。

「見ろ！ 貴様に向けられたこの視線の数々が、先の死闘に拳を掲げた者達の数と知れ！」

視線が、針の筵の如くイシユタルに向けられる。これまでは羨望や畏敬に満ちていたそれが、今は打って変わって疑念や不満を露わにしている。たった数時間で変わってしまったその視線にイシユタルは狼狽えた。

「敗者は勝者に従え！ 我が国でも同じ様に、この決闘は正しくその規則に則るべきだろう？ 何故それをしない？ 理由を早く言え、クソジジイ」

そうだ。早く理由を言って試合をもう一度行わねば、負けてしまう。

だが、だが！

此処で理屈を付けて言ったとて、此処にいる者達は納得するか？ 過半数の信頼を勝ち取れるか？ この男の口を塞ぐ事が出来るか？

そんな思考がイシユタルの頭に過ぎる。

本来ならば適当に理由を話すだけで勝ち取れる信用があった。神の威光が、イシユタルの背にはあった。イシユタル自身にもそれだけの話術があった。

だが目の前の皇帝はそれを全て瓦解した。神の威光をイシユタルから取り除き、イシユタルの話術を途中で遮り説得力を掻き消す。

たなりとイシユタルの頬に汗が流れたのがよく分かった。少しでも良い言い訳を作ろうと身体中が情報を集めようとする。

まあ、しかし。やはりと言うべきか。それは目の前の皇帝にとっては遅すぎる。

彼はトドメとばかりに最後に一つ付け足した。

「ついでに言っておくと、もしもう一度試合をやるなら俺様は南雲ハ

ジメの陣営に入るぞ。俺様に味方になりたいと思わせたのは他でも無い南雲ハジメだ。これもまた奴の人脈と言えるだろう？ ルール違反では無いな」

即ちもう一度『神前決闘』を行う理由。それを根刮ぎに刈り取って行った。

イシユタルの望みが、プツリと切り落とされた音が聞こえた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「つまりはだ。イシユタルは井の中の蛙だったって訳だ」

「私に分かる様に言え」

「あいよ。面倒だがしゃーねーな」

ピナ越しの様相を見ながら、幸利は話を続ける。

「まずこの『神前決闘』の会場において一番権力を持つてるのはイシユタル、次にエリヒドだ。此処まではOKか？」

「うんうん、そうね。それで？」

「それが『神前決闘』で教会が無敵な理由だ。単純に言えばイシユタルがどれだけ滅茶苦茶な事を言っても、それに反論出来ない状況。それを作ってるんだ」

例えばハジメ側での権力者はリリアーナ、メルド、ウォルペン、そして愛子だ。だが前者三人はエリヒド、そして愛子はイシユタルにより完封され得る。

つまりは権力の上位互換が常に教会側にいる。反論しても消され、勝っても改竄される。嗚呼なるほど、確かに最強だ。

「だから俺達は外部から権力者を呼び寄せる必要があった。それこそどっちにも負けを取らない様な奴を」

「それが…皇帝」

「その通り！ 【ヘルシャー帝国】は人類最大の国家！ 戦争になれば王国と教会が手を組んでも勝てない一大勢力！ しかも『人類最強』ともなれば申し分も無い！ ならば…教皇に反論出来る人間が一人出来上がる。しかも…『神前決闘』の在り方は矛盾してる。例えば勝ったら良い筈なのに、ケチを付けられたらもう一回とかな？ 国民も馬鹿じゃ無い、それに違和感やら疑念やらはある筈だ。それじゃ、

それは何で言葉に出来ない？」

教皇、国王。どちらも共にあるカーストの頂点達。それ故に誰もが反論出来ない。本来客席には「聖教教会」と「ハイリヒ王国」、その二つの勢力しか存在しないのだから。

もう分かるだろう。客席にある者全てが、反論を口に出来ない理由が。

「ついさっきアンタが言った…権力」

「その通りだ。厳密にはそれ故に矢面に立てないんだよ、全員。逆に言えば、それを言葉に出来ちまう旗頭がいればみーんなそっちに行ける。そんでえ…この通り♡」

「えっぐい手、使うわね…」

「まあな？　でも躊躇ってたら死ゾ？　ならやる理由しか無いんだよなあ」

「良くやったわ、ユキ。褒めたげる」

「やったぜ」

ガハルドは旗頭だ。教皇に、そして『神前決闘』に物言いを示すための象徴<sup>シンボル</sup>。

教皇の持つ『やり直し』、これは一見最強の手札に見える。だがこれはあくまでも人々の信頼があつてこそ成り立つ規則<sup>ルール</sup>。その力は実の所、かなり脆いのだ。

幸利の狙いはその地盤を丸ごとひっくり返す事。人々に主張出来る場を作り、真の意味で判決を平等にしたのだ。

そこでふと優花が気がつく。

「…でもぶつちやけそれなら全部皇帝あつての事よね？　もし皇帝が見るだけ見て何も言わなかったらどうするつもりだったのよ？」

「うん？　それなら死ゾ？」

「とんでもないギャンブルじゃない!？」

「H A H A H A H A H A !」

「笑ってる場合かあ!!？」

「いやー、その辺りは信頼した」

「何をよ!？」

そう、幸利がメルドに頼んだのは「ガハルドを『神前決闘』に招待する」。それだけの話だ。ガハルドとメルドの親交は深く、それ故に呼ぶまでは作戦として確定していた。が、当然試合後どうするかはガハルド自身に委ねられていた。

正直に言って作戦とも呼べない、ただの運任せ。以前の作戦会議の際のドヤ顔を良く出来たものだと言ったと優花は呆れる。

だが幸利はこの作戦に絶対の確信を持っていた。

「皇帝の信念とハジメ。そのどっちもだよ」

ま、教皇が速攻でやり直しを宣言してたらそもそも無理だったんだけどな？ と笑いつつ、幸利はそう断言した。

改めてまあ、作戦とはとても言えない。人の意志などと言う不確定要素を取り入れているのだ。状況によって変化し得る乱数を、アテにするなど本当に愚行だ。

「…なら、問題ないかしらね？」

だがまあ、優花はそれを否定する気にはならない。

二人は共に南雲ハジメに魅せられた者達。彼が持つ惹きつける力を、嫌と言うほどに知っている。

「さて、さっさとあの馬鹿迎えに行くぞ？」

「そうね…何処のあたりに転がってるかしら？」

そうして二人は歩き出す。

本気で人の胃の事を考えず、無茶ばかりするド阿呆に怒りの鉄槌を下す為に。

…あとついでに。本当についでに「よく勝った」とその背を叩く為に。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ!!!)

イシユタルは追い詰められた。

神の意思に従い、その神敵に鉄槌を落とさねばならない。

だが同時に此処にいる全てを納得させねばならない状況を作られてしまった。

正しくどうしようも無い盤面。口を閉じ、押し黙っているがこれも

いつまで持つ事か。

その時だった。

——カツンツ

足音が鳴る。

ただの物音にも関わらず、そこに秘められるはとうしようも無い程の清廉さ。イシュタルばかりに目がいつていた人々の目が、自然と其方に吸い寄せられる。

そして人々は、銀の輝きを見た。

「…ほう、貴様が出るか。ノイントⅡエリジユヒト」

「面識は無かった筈ですが、御存知とは。身に余る光栄です。ガハルド陛下」

「…ふん、食えん女だ。取り敢えずその眼を止めろ。俺様をそこらの雑兵と同じにされては腹が立つ」

「おや…それは御失礼を」

二振りの大剣を背に負う絶世の美女。武力、知力、外見。ありとあらゆる面で秀でた彼女は正しく天から愛された女性と言えるだろう。

本来の目的で有る白崎香織の護衛。それを投げ出しているこの状況にイシュタルは困惑する。

そんなイシュタルを無視して、神殿騎士団長と【ヘルシャー帝国】皇帝、二人が相對する。二人は幾つか会話をするとお互いの狙いを把握し合ったのか、すぐに視線を逸らした。

そしてノイントは棒立ちとなりつつあるイシュタルに視線をやる。

「そして私がこの場に降りたのは他にもありません。…イシュタル」  
「!？」

何故自分の名が呼ばれたのか。動揺やら焦燥やらで回らぬ思考を回す。

（そ、そうかこの場に來られたのは儂を助ける為に——）

そして希望を見る。他でも無い神が自分を救う為に連れて來られたのだと。胸の中で神への畏敬が類を見ない程増し——

「やってくれましたね、如何なさるおつもりですか？」

「…はへ？」

ノイントは侮蔑の言葉をイシユタルに投げ付けた。それは他でも無い：切り捨ての言葉だった。

『神前決闘』の件において舵を取ったのは他でも無いイシユタルだ。表向きにしてもそうであるし、事実大まかには彼が主導であった。

だからこそ教会の信頼を守るには、全責任をイシユタルに擦りつけて斬り落とすのが最善手だ。この場において矛先を向けられているのは他でも無いイシユタル、ヘイトを押し付けるのはあまりにも容易い。

だがやられた側からすれば溜まったものではない。

「ま、待つてくだされ！ 儂は今迄教会の為に！ そして何よりも我が主神、エヒト様の為に尽くして参りました！ だと言うのにこれは！ これは余りにも酷ではありませんか!?!」

「ええ、貴方の献身は神も御存知でしょう。私自身も貴方の献身は知る所。故に何も死ぬと言っているわけではありません。ただ：その椅子を明け渡しては如何と聞いているのです」

「——ッ」

それは事実上の解雇処分。教皇の椅子を明け渡しての地方の教会への天下り処分。一見すればかなり甘い処分に見えるそれ。

だがそれは：教皇への世間の恨みを除けばの話だ。

教会は憎まれている。魔族から。或いは亜人族から。何なら一部の人族でさえも教会からの不条理を憎んでいる。そして当然、その長とも言える教皇ともなれば、殺した程度では晴れない程に殺したいと思つている筈だ。

だからこそ天下り処分となった歴代教皇は、誰も残酷な死を遂げている。苦渋に満ちた首を暫く晒される事となる。

つまりはこの処分は事実上の死刑。イシユタルとしては何としても避けたい結末。

だがその前に、ノイントがそつとイシユタルの耳元に唇を寄せる。周囲から見れば教皇を降りる事となるイシユタルへの最後の慈悲にも見えただろう。彼女の美しき外見がそう思わせる筈だ。

だがそんな客観視とは異なり、ノイントは残酷な神託を告げる。

「エヒト様は次の様に仰いました。『イシュタルの落ちて行く様も面白かった。来世も期待している』と」

「――あ」

ノイントの起伏の無い声からでも分かる神の邪悪さ。同時に神は人間を愛してなどいない。神は人類の味方で遊んでいる。そんな事実等がイシュタルの中で明るみとなる。

もう限界だった。イシュタルは膝を折り、地面に伏す。信仰が砕かれ、未来も無いただの老ぼれは正気の無い虚な表情をしていた。

絶望に染まる前教皇を他所にノイントは客席のあらゆる者を見て、そして告げる。

「皆さま、誠に申し訳ありません。神聖なる決闘を前教皇が穢したと言う罪深き行為…許せる物では無いでしょう。どうか来世こそ、彼の魂魄が浄化されている事を願います」

ノイントの声は鈴の音の如く、瞬く間に伝播した。

静かな声にも関わらず人々の耳を揺らし、心を掴んで止まない彼女の舌。距離など関係無く、見る者全てが否応無く彼女に「魅了」された。

ガハルドが彼女を詐欺師の如く見ているのを他所に、ノイントは黙々と言葉を続けた。

「当然この決闘の勝者は南雲ハジメとその御一行です。彼等には誠心誠意の治療を施した後、其々の要望を口にして頂きます。何と言っても神の施した試練を潜り抜けた御方。丁重に迎えねば失礼という物でしょう」

話は滑らかに通って行く。まるで、この様な事態になるのが想定されていた。そんな風にも思えて仕方がない。

しかし彼女を見つめる民草はそうでは無い。滅多に公に出ぬ神殿騎士団長の顔を拝見し、声を聞くことが出来た。ならば彼等は本望とばかりに涙を流す。

「…ハッ、気味が悪いな」

「何の事でしょうか？」

そんな会話が最後にあつたとか無かつたとか。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「う、うん？」

気絶していたのだろうか。少年は目を覚ます。

眼前には幾億もの星が散らばる夜があった。雲一つ無い夜空。異世界に来てからはじつくりと見る余裕など無かったが、こうして見れば何と綺麗だ。…ただまあ、血のせいでどれも赤いが。

身体が動かない。そもそも「魔錬・戦鬼」が無ければ動けなかった身。その発動を解き、尚且つ「魔錬・擬似限界突破」で痛めまくった以上、動けないと言うのは当然の帰結である。

(勝った…んだよね?)

いまいち実感が湧かない。夜の中で寝そべって、空を見上げる。痛みと倦怠感が身体中を支配し、意識が微睡む。

もしかしたら勝ったのはあくまでも夢で、現実では惨敗したのでは無いか。そんな予想がハジメの中で生まれ出した。

そうして混乱していると、視界の中である物が浮かび上がる。

「月…か」

幾つもの星が煌めく中、その輝きにまるで劣らない月がある。血の中でもなお、その白い静謐な光が見える。あの日の、最初の約束の頃の月に良く似ていた。

そして戦いの中、駆け巡った走馬灯と故に気付いた想い。だからこそ立ち上がり、戦って成し遂げた。そんな事を思い出して、くすりとハジメははにかんだ。

きつとあの結末は夢じゃ無い。漠然とそう思った。

ともすれば少しだけ笑えて来て――

「あ、起きたんだね。南雲くん？」

――素晴らしく既視感デジャヴな状況になっていた。



「……もしやすれば僕はまた膝枕して貰ってますか？」

「嫌かな？」

「ウエルカ——あつ違う。嬉しいけど、格好が付かないので……」

「試合は終わったから寛いでも良いんじゃないかな？」

「違う、そうじゃない」

ちなみに前回は軽傷(当社比)だったので後頭部の感覚があったが、今回はこれまでの中でも別格。後頭部の感覚すら麻痺している。改め無くてもヤバさしか無い重傷である。

しかも前回とは異なり、ハジメは自分の思いに気付いている。緊張感やら焦燥感やらは前回の比にはならないレベルである。押し出す血も僅かだと言うのに、心臓が張り切っている。かなーりピンチである。

「それにしてもすごい怪我だね？ ……頑張ったんだね？」

「自分で言うのは何だけど……人生一頑張ったかな」

「ふふふつ。そっかあ、ならたつぷり癒やしてあげないとだね！」

「……またお世話になります」

「大丈夫、大丈夫！ 【聖女】の本領、見せてあげるよ！」

瞬間、香織の周囲に「光球」が満ちる。其々が円環を繋ぎ、連結された魔法陣を完成させる。

完全に本気の大魔法行使に思わず、「えっ」と声を漏らすハジメ。しかし香織は構わず詠唱を続けて……その魔法を発動した。

「——『天照・八尺瓊勾玉』」

瞬間、香織の掌に幾つもの癒しの光玉が生み出された。それを香織が手で掬い、ハジメへと流す。ふわりとそれぞれの光が宙に浮き、やがてハジメの身体に染み込み始める。

効果は——あまりにも絶大。瞬時回復。先程まで重かった身体が万全の如く。試しに起き上がり、軽く身体を動かす。調子は……まるで問題無かった。快復と言えらるだろう。

「どうかな？ ……一応大丈夫だと思うんだけどね？」

「うん……すごく調子が良い。こんなのもあったんだ……」

「迷宮の時は帰りの分の魔力も考えなきゃだったから使わなかったん

「ただど…今回は回復以外にする事も無いからね？」

「本当にありがとう。助かったよ」

「ふふーん。半年間がんばったからね！ 南雲くんはすぐ怪我するだろうからなあ〜って」

「待って。それは僕が怪我する前提で考えてませんか？」

「違うの？」

「ちが…：…うと言ひ切れ無いのが凄く悔しい！」

「それでこそ南雲くんって感じがするね！」

Vサインを作り、自慢げに笑う香織。その笑顔はトータスの前から見ていた、自然な笑みそのものだ。傷付いていた時の面影はまるで無い。

ころころと万華鏡の様に忙しく変わる香織の顔。しかしそのどれもが楽しげだ。彼女のそんなかつてと変わらない姿を見ているだけで、つついっいハジメの頬も緩んでしまう。

(…ああ、やっぱり好きだなあ)

そんな事をついつい思ってしまう。

面してもその想いは変わらない。むしろ積もるばかりだ。風に靡く黒髪が、優しげな雰囲気、無邪気な笑みが。上げればキリがない程、好きな理由が湧き出て止まらない。

一方で、この感情を果たしてどうした物かと悩む。言うのか、或いは言葉にせず留めておくのか。まあぶっちゃけ我慢するにしても、長くは持たないだろうとは思うのだが。

(ただ戦場<sup>此処</sup>で言うのはムードもクソも無いからねあ。せめて普通の観光地とかで告白したいよなあ)

そんな事をハジメが思っていると、だ。

「あ、ところで南雲くん。えつと…ね。その…」  
「うん？」

ハジメは何か雰囲気が変わったのを察知した。

明確に何が、かは分からない。しかしこの半年間揉まれに揉まれて来た経験値により第六感<sup>シックスセンス</sup>が発動！ 結果、ヤバそうと言う事が分かった。…何も分からん。

ただ凄みがある。とんでもない転換期が眼前にて起きようとしているのが分かる。とある事実を全く知らないハジメでもそれだけは理解出来た。

そして…それは告げられる。

「あのね…まず南雲くんが私を好きって言ってくれたの…すつごく嬉しかったよー！」

「待って？」

「その…単に嬉しいだけじゃ無くてぽやーってしたって言うかね。頬が熱くなっちゃって、堪らなくなっちゃったというか——」

「待って待って待って待って待って、お願いだから本気で待って？」

「う、うん。どうしたの？」

ハジメは困惑する。まさかの告白前から、相手が自分の好意を知っていたというトンデモ事実。ラブコメでもそんな展開まず無い——えっ、最近是有るんですか？ 多様化してますね？

それは兎も角。

「えっ、何で僕の気持ち知ってるの？」

「えーつとね？ 試合の途中で南雲くんの声が通信越しで聞こえて来てね？ それで——」

「えっ…えっ？」

「？ どうしたの南雲くん？」

ただ今、香織さんがトンデモない事実を話してくれました。まさかアーティファクトの通信で、自分の恥ずかしい呟きが全世界にお知らせされたと言うヤバい事実を。

そりゃあ当然香織も知っている訳だ。人類全員が知ってるんだもの。何もおかしくない話ですね、こんちくしょうが。

「迂闊だった…何で独白とかやったんだよ、僕うゝ」

「えつと…南雲くん、何処か痛い？ 治癒する？」

「心が、痛いです」

「ちよつと治せないね、それは」

「これ程過去に戻れたらって思った日は無いツツ」

「えーつと…どんまい、南雲くん！」

頭を抱えて地面に転げ回る。好きな人の目の前だが、平静など保ってられない。過去の自分からのキラークラスは見事、今のハジメにクリティカルを発生させたのだ。

恐らくは過去一レベルのダメージ。光輝の後にラスボスが居たとはまるで思っていないかった。なおハジメは既に致命傷である。

ただまあ、香織はよほど嬉しかったのか。堪え切れないご機嫌ぶりを振りまきながら、話を続行させた。

「それでね…そこで私も私の心に気付いたんだ。だからちよつと聞いて欲しいなつて思うんだけど…いいかな？」

鈍感なハジメでも気付く。これは…そう言う事だ。

意図せずとも香織の想いを理解し、胸が跳ねる。互いの想いが重なり合っていた事が、堪らなく嬉しい。

ただ、やはり此処は男の性としても言うか。

「ちよつと待って、白崎さん。その前に僕にケジメを付けさせてください」

「ふえ？」

「その…独白を聞かれてたかも知れませんが、白崎さん自身にちゃんと、想いを伝えさせてください」

聞かれていたかも知れない。想いが通じ合っていたかもしれない。だがそれでも。やはりこの想いは直接彼女に伝えたかった。面と

面を合わせて言葉にしたいと、そう思った。

「…うん、分かった。だから…南雲くんの想いをちゃんと聞かせてね？」

「ありがとう。白崎さん」

彼女も頷く。恐らくは同じ想いでいてくれている。

戦場の真つ平らな世界で、二人は向かい合う。

嗚呼、胸が高鳴る。これまでのどの修羅場よりも身体に緊張が走る。自分の想いを直接彼女にぶつかる事。そんな簡素な事シンプルにどれだけの勇気がいるのか。ハジメは今、身を持って理解した。

どんな言葉が良いのか。どんな顔をすれば良いのか。そもそも此処で良いのか。幾つもの選択肢がハジメの思考をよぎっては消える。

それを幾度と無く繰り返して、結局ハジメは想いをそのまま形にする事にした。

右手の掌を彼女に差し出して。精一杯の笑みを作って。

ハジメは言う。

「白崎香織さん。僕は貴女の事が世界で一番好きです。どうか僕と、付き合ってください」

嗚呼、何と飾り気の無い言葉だろうか。あまりにつまらない。ただ彼の想いを絞り出したかの様な、誠心誠意の言の葉。

出し切った。そんな達成感がハジメの中で産まれる。

それと共に：差し出した掌に、温もりが灯った。

己の右手を見る。そこには自分の手を握る、細やかな手があった。

そこから視線を上げる。見た事も無い様な。それでいて世界一幸せそうな。そんな表情をする彼女がいる。

彼女は頬に涙が伝うと共に。自身の想いをありのままに語る。

「…はい。私も、ハジメくんの事が…これ以上無いってくらいに大好きです。だから…よろしくお願いします」

彼女の左手が同様にハジメの右手に添えられる。手を通してじんわりと心地良い温もりが伝わる。

それがあまりに嬉しくて。ついハジメもまた彼女の手を、自分の両手で包み込んだ。

彼女は目を丸くした後、恥ずかしそうに。けれど頬を桃色にしてはにかむ。

そしてじつと、見つめ合う。

視線が絡み合い、通じ合った様に同時に笑う。

それがまた可笑しくて。二人して声を大にして笑い続ける。

其処は間違い無く、二人だけが見れる世界なのだろう。

それは二人の顔を見れば簡単に悟れる事実であった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

どれだけ顔を見合わせ続けた事だろうか。

遠くから声が聞こえる。親しい人達の声が。支え続けてくれた人達の声。

だから二人とも、其方に歩き始める。

月光が作る影が地面に描かれる。

手を繋ぎ前へ進む二人の影が、其処にはあつた。

——【勇者】、それは何も天より授かつた才能の名前では無い。誇り  
高き英雄の別称でも無い。もつと簡素で、泥臭いシンプル称号だ。

それはある時は愚者と呼ばれ、幾度と無く傷付き、地に倒れ汚れ：  
だがまだ立ち上がる者。

それは旅路の途中で幾度と無く壁を前にし、それでも越えようとし  
諦めない者。

それは鮮烈な生き方故に人々を惹き寄せ、やがて一つの大きな渦を  
生み出す者。

【勇者】。それはその名の通り、勇氣ある者を讃える二文字。

——第33話、【勇者】ゆうしや VS 【錬成師】ゆうしや——

## 閑話、宴が始まる

『神前決闘』決闘から一夜明けた。

人族領全土に渡って配信されたその戦い。人々は【勇者】一行が勝ち、被疑者側に罰が下されると、そうとばかり予想していた。

だがその結果は世界を揺るがしかねない程に、衝撃的な物だった。

——【勇者】天之河光輝の敗北

人類の未来を期待されていた少年、その敗北は人類にとって不穏な未来を暗示する結果。その筈だった。

だが人々はその結果に絶望などしなかった。むしろ彼らが見せた反応は——自身への叱咤だ。

空に浮かぶ虚像<sup>モニター</sup>、その中で煌めく『蒼』。只人でありながら、【勇者】と競り合う姿は歴戦の勇士と見紛う程。神敵かつ【無能】というレッテルがあつて尚、彼の姿は人々の目に刻まれた。

そして脳裏に刻まれた彼の陰が、人々に語り掛ける。

——自分はこのままでいいのか、と

あの様な子供達が全力で己を賭している。だというのに自分達は現状に甘えてばかり。それで良いのか、と。

才能？ 理由にならない。彼は【錬成師】でありながら彼処にいる。

年齢？ 阿呆を言え。自分達は大人だ。子供になど負けていられるか。

平穩？ なら何故彼等は呼ばれた？ それは自分達の平穩を守る為だろう。赤の他人に護って貰ってまで得る物か？ そんな人生を誇りと言えるか？

ならばと彼等は叫んだ。彼方に居る少年達に負けぬ様、それぞれの武器を持って叫んだ。

その熱狂は一人や二人だけの物では無い。大陸全土に渡り、覚醒の雄叫びは聞こえた。

これが後に歴史で語られる事となる『黄金時代』<sup>パブル</sup>の始まりである。作物、商品、技術、戦力：【ハイリヒ王国】領土ではありとあらゆる物が溢れ、従来とは隔絶した革新を見せた。

これを歴史として学ぶ子供達はまさか思うまい。その時代を生み出した切っ掛けが、ちつぽけな少年達の勇姿による物だと。

そしてまさか思うまい。大人達が少年達の勇姿に張り合った結果が、『黄金時代』を切り拓いたなどと。

そんな荒唐無稽な話などと、誰が思う物か。

さてさて。それでは歴史を変えた要因である少年達はどういうと――

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「え——つと…本当に僕で良いの？」

「うんうん。今日の主役はハジメくんだもん！ みんな文句無いよ、ね？」

「ええ。香織の言う通りですわ、南雲さん。皆様お待ちですし、なるべく手短にお願い致しますわ」

「と言うかウオルペンさんがもう酒飲み始めてるから、早く言いなさい。小難しいのも今更だから、最低限で」

「子供より堪え性無いぞ、あのオッサン…」

【ハイリヒ王国】の城下町。その中でもここ最近、売り上げを凄まじい勢いで伸ばしている『アスタマリア食堂』の扉には、一つの看板がぶら下がっている。

——『只今、貸切中』

「それじゃあ本当に手短に…皆ありがとう！ 乾杯！」

「！！乾杯！！！！」

カ——ンツ！ とコップ同士がぶつかり、甲高い音を鳴らす。それなりに広い食堂。その席一杯に座る者共が本日の主役に合わせて、声を上げた。

まあ、つまりは…宴である。

内容は言うまでも無い。『神前決闘』の勝利。そして何よりもハジメの冤罪の解消である。戦いが終わり、寝て覚めたら衣装を仕立てられて此処に到着だ。ハジメは意味が分からなかった。

ただ一介の食堂である店主は今夢心地だろう。何せ貸切のメンバーがメンバーである。主人ノツズⅡアスタマリアとその嫁さん、あ



と子供。全員がキッチンで両手いっぱいの色紙を抱えながら、感涙を堪えているのがその証左である。

「よーし！ 今日俺の奢りだ！ 好きなだけ飲んで食らえええええ！！」

——王国騎士団長、メルドⅡロギンス

「おつ。この酒安い癖してうめえな。小僧は：飲めねえのか、難儀だなア」

「ふむ？ ならばその分君がどんどん飲みたまえよ、旦那様。安心して欲しい。ちゃんと私は君をベッドに送り届けるから。：ただまあ、その分の労働費はその場で君から徴収するけれどね？ あ、コラ逃げないでくれよー！！」

「またトリーヨーがシャクつちと夫婦漫才しててマジ出」

「いつもの事じゃん。アレだアレ。：：：：『嫌よ嫌よ嫌嫌よ』ってヤツ」

「：『嫌よ嫌よも好きのうち』の事を言ってるんスか？ 嫌がつてるだけじゃないっスか、それ？ まー、俺そう言うコを落とすのも好きっスけど」

——王国工房【ウォルペン工房】棟梁、ウォルペンⅡスターク

——王国工房【アルソンス工房】棟梁、シャクナⅡアルソンス

——以下、【ウォルペン工房】の幹部

「店主さん、今日は無理を言って開けて貰い感謝致しますわ。お礼と言っては何ですが、また働かせて頂きますわ。ランデルもいつその事、働いてみればどうですか？ メソメソ泣いてないで」

「うぐう：余はもう立ち直りました！ この失恋を糧にして進むと決めましたからあ！！ むしろ姉上こーアツハイ、ゴメンナサイ」

「私も手伝わせて頂きます、ノツズ様。この人数は暴力的ですから」

「本当にこの場を設けて頂き、ありがとうございます。お陰で生徒達も喜んでいきます。料理もとても美味しく：また個人的に来させて貰ってもよろしいですか？」

——【ハイリヒ王国】第一王女、リリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒ

——【ハイリヒ王国】第一王子、ランデルⅡSⅡBⅡハイリヒ

——【傍付き】ヘリーナ

——【豊穰の女神】畑山愛子

「うまい！ うまい！ うまい！ うまい！」

「何だろ…オカンの味がする…泣けて来た」

「宴開始数秒で泣くな、明人!？」

「でも、おいしくよく。ほつぺた落ちるう〜」

「良い店見つけたね！」

——【愛ちゃん護衛隊】相川昇

——仁村明人

——玉井淳史

——宮崎奈々

——菅原妙子

「ふん…奴もまあまあ慕われている様だな」

「デビッド…既に貴方もその一人でしょうに…」

「大衆食堂と侮っていけれど…これは中々…」

「神殿の食事と遜色無い。美味しい…」

——【神殿騎士】デビッドマーク

——チエイスルーティン

——クリス

——ジエイド

「俺あ嬉しいぜ、旦那が勝ってくれてヨオ!!」

「分かりますぞ、ジェルノ氏！ 某も未だに色んな水が溢れ出て溢れ

出て…」

「俺なんか気絶したぜ！ 開始数秒でな！」

「でも私、何だか南雲師匠が有名になって…何処か寂しくて…嬉しい

筈なのに…」

「「「「分かりみが深い」」」」

——【ウル】錬成師棟梁、ジェルノサルマナ

——以下、【ウル】の【錬成師】

「何と言うか…凄い人達ばかりね？ 分かっては居たけれど彼、人たらしが過ぎないかしら？」

「八重樫さん、マジでソレな？　ここ到着した時、知らん奴割といるか  
らコミュ障発現仕掛けてヤバかった…」

『情けねえなあ』

「だからアンタ、さつきから私の後ろに引っ付いてるのね…」

——『神の使徒』八重樫雫

——黒ランク冒険者【魔物の歌い手】清水幸利

——使い魔、ピナ

——『神の使徒』園部優花

「改めて…おめでとー、ハジメくん！」

「うん。ありがとう、白崎さん」

——【聖女】白崎香織

——【蒼の錬成師】南雲ハジメ

と、まあ面子が面子。この宴の会場となった『アスタマリア食堂』は  
なお一層、客を獲得するに至るだろう。何というWin-Winか。

ちなみに王城でも開けるのに、わざわざ店を借りたのは『王様、我々  
ちやーんと調子に乗ってる訳じゃないっすよ？　せいぜい大衆食堂  
一店貸切にする程度っすよ？』と言う言い訳のためである。あと普通  
にラフな方が良いと言うのもある。

ちなみにハジメは現在、『アンタが主役や！』と書かれたタスキを肩  
からクロスに掛けている。特に意味は無い。強いて言うならばパー  
ティーらしさが出る程度か。『使徒』男子衆によるノリの産物である。

ちなみに【蒼の錬成師】はつい最近付いたハジメの二つ名だ。今迄  
は不名誉な二つ名が多かったが、何というか…何処ぞのフルメタルな  
アルケミストを彷彿とさせる二つ名だ。聞いた際にハジメと幸利、香  
織がちよつと笑ったのも仕方が無い話である。

他にも大金星を勝ち取った故の【巨人殺し】。『魔錬』により

基本六大魔法を使い分けるが故の【六星】。武器を生み出し巧みに操  
る技の冴え故に与えられた【武器使い】。どれも厨二チックである。  
ハジメ的には大変恥ずかしい。…こう、頭の中にこびり付いている中  
学生の己が湧き出て来るので。

ただまあ、以前と異なりもはや負の感情らしき物が向けられる事は

無い。久しぶりに王城の廊下を気を張らず進む事が出来た。この際、ハジメが涙ぐんだのは秘密である。周囲は哀れさで泣いた。

ちなみに優花と幸利にも新たに二つ名が付いた。

優花はそのイケメンメンタルにより【女傑】。シンプルに格好良く二人がムスツとした。ただまあ、これで姉御と慕う一般人が増えるだろうなあとも思った。ただ優花は厨二チックに全く慣れていないので、当時頬を真っ赤にしていたが。

一方、幸利は元々【魔物の歌い手】という二つ名がある。これは冒険者として『黒』のランクを手に入れる際に、使い魔を使って大暴れした結果である。その為、幸利はテイマーとしては一流と判断されていた。

ただ今回の『神前決闘』で、本体性能も凄まじい事が公衆の目前に晒された。まあそれに加えて古代魔法「影帝」と本人の黒つぽさから【陰者】シャドーマンと言われるに至った。幸利は悶えた。

三者三様にボロボロになって戦った、『神前決闘』。世間の皆様はそんな彼等の健闘を讃え、二つ名を名付けたが：悲しきかな。まさかそれが当人らにとって一生刻まれる傷となるとは思わなかった事だろう。善意故の悲劇である。

——そんな事はどうでも良い 閑話休題

「ところで坂上くんはどうしたの？ 体調不良？」

「違うわ、もうちょっと真剣な理由よ。詳細な理由を言うのは：やめておくわ。野暮なもの」

「？」

龍太郎の姿は無い。一応雫を通して、祝いの言葉はあったがそれのみだ。彼は義理心情に熱い人間なので、大丈夫かと心配してしまうが、雫がそう言うならば良いのかなと取り敢えず頷いた。

凄くついでに言っておくとポチも王城でお留守番である。流石に店内で、大型魔物を連れてくる訳には行かない。幸利は後でお高いご飯をあげようと決めている。

そこでふと幸利が何かに気付く。

「にしてもメルドさんやリリイって、こつち来て良かったのか？ 此

処に来る事で心象悪い奴だっ居るだろ？ 俺らはある程度自由な立場だけど、二人は対人関係とか色々あるだろうし…」

「む？ それは我々だけ仲間外しにする宣言か？ それは寂しいぞ、幸利」

「いや、そういう訳じゃ…」

「私、泣いてしまいますわ…よよよっ」

「」「泣ーかした、泣ーかした。ユーキくんが泣ーかした」「」

「やめろオ!! あと嘘泣きじゃん、コレ!？」

「チツ。バレましたか、ですわ」

「お嬢様がはしゃいでますね、コレ」

「相変わらず流れる様に泣くなあ、お姫様は」

一斉に非難された幸利だが、彼の懸念は尤もである。

ハジメ派は今や、ある種の反教会勢力である。ハジメ本人にそのつもりは無いが、『神前決闘』を唯一生き残った罪人と言う名目がある以上、その印象を拭う事は出来ないだろう。

市民達は問題視していないが、面目を気にする貴族共はハジメを注視している。次にどの様に動くか。何を仕出かすのか。

これまではメルドやリリアーナにも「免罪を晴らす」為の協力と言う名目があった。が、これ以上ハジメを懇意にするならば、それは完全に『肩入れ』だ。他にも数多くの『神の使徒』がいる為、それは避けた方が良いと言うのが幸利の思考だ。

幸利のこの判断は間違いでは無い。ただ…

「冗談はさて置き、ユツキー様の懸念は最もですわ。私達はなるべく此処にいるのを避けねばならない。それは事実…ですが私達にも情は有りますわよ?」

「その通り。坊主は半年間ボロボロになりながら戦って来た。その努力が漸く報われた…それを祝わずに居られる物か」

「リリアーナさん…。メルドさん…」

…常に理性のままに動けるならば、人間に情と言う物は当の昔に捨てられている。慈愛の含まれた目で二人はハジメを見つめる。

ハジメの戦いは長かった。単なる戦闘の時間としては短い物かも

しれない。だが研鑽や思考を幾度と無く積み重ね、【無能】からの飛躍を見せた。苦痛だった筈だ。

それが漸く晴らされたとあらば、祝いの場から退くなど出来はしない。二人はそう語る。

「あと私、その程度の不満でしたら話術で何とか出来ますし。私、王女ですわよ?」

「そう言う事をぐちぐち言うてくるのは大抵ザコだからなあ。ぶちのめせば何も言わなくなる」

「メルドさんもリリイもやっぱ強いね!」

「何かしら…二人とも有無を言わさない気迫があるわ…」

あとまあ、この二人の目の前でハジメを馬鹿にした時点で御察し案件なだけだ。イシユタルは権力とかがあつたから見逃さざるを得なかつただけ。リリアーナは舌で、メルドは腕で。それぞれ黙らせられるだけの力がある。それは振るわずとも、だ。

なので問題無いですとサムズアップする両者。素晴らしく強者である。説得力にはちよつと欠けて居なくも無いが、頷かざるを得ない。だってオーラが凄いもの。

香織が目キラキラさせ、雫が少しビビる。そんなハジメの付近にトコトコと、一人駆け寄つて来る小さな陰があつた。

「南雲君。改めておめでとうございます。ただ先生は他の生徒の見回りもあるのでこれくらいで失礼しますね? 君達は是非楽しんで」

「あ、はい。ユツキーの件とか色々有難う御座いました、先生」

「私が君に出来る事は少なかつた。正直君は私に文句を言つても仕方が無いと言うのに…優しい子ですね。君は」

「? 僕からすれば先生の助力が無ければ、ユツキーと馬鹿やれて無かつたので。感謝しかないですよ」

それは紛れも無い本心だつた。実際、愛子が幸利を雇わねば『神の使徒』の名を剥奪されている幸利はこの場には居れない。もつと別の場所で一人ぼっちとなつていただろう。

ただまあ、それを感謝する事は周囲に人が居るのが当たり前になつている人間には到底不可能な事ではあるのだが。

それを思ってたか。愛子はほのかに笑う。

「…ふふっ。本当に優しい子ですね、君は。どうかその心、大事にしてくださいね?」

「よく分かりませんが…でもそうして行きます」

「ええ。当たり前でいて、とても大切な事ですから。そのまま居てください」

愛子が何をハジメに望んでいるのかは分からない。ただ愛子がそう言ってくれる所が、皆んなが共に歩んでくれた理由なのだ何となく察する事が出来た。だからこそ愛子のその言葉を、ハジメは真摯に受け取った。

そうして去っていく愛子。そして愛子を守る為に追従する神殿騎士の四人。軽く四人が別れの挨拶やらを済ませて、店を出て行こうとする…が。

そこで一人、扉の前で暫く静止したかと思えば、頭を掻き回して戻って来る陰があった。

「…デビッドさん」

神殿騎士デビッド。未だにハジメに対して強めに当たるものの、何だかんだと味方で居てくれた騎士。

あと「ウル」の最後に聞かされた言葉は、未だにハジメの胸へと刻まれている。

「……………まあ、貴様にしては良くやった。先ずは褒めてやろう」

「凄く既視感デジャヴなんですけど…」

「静粛に聞け! ……それで、まあ、貴様は一応…また『神の使徒』と堂々と名乗れる様になった訳だ」

「そうですね。図書館の本、制限無く読める様になったので有り難いです」

「それは別に良い。それでだ……………」

そこでデビッドは数秒黙る。顔を顰めて、うぬぬと唸る。やがてチェイス達はデビッドが何をしようとしているのか察したのか、「ほら、早く言いなさい」と急かしに掛かる。デビッドは楽しげに煽って来るチェイスに青筋を立てながら、再びハジメへと向き合った。

そしてデビッドは…己の頭をハジメへと向かって下げた。

「すまなかった、南雲ハジメ。出会い頭にお前に働いた我が不徳。この場にて改めて詫びよう」

そこで気付いたが、デビッドは今迄一度もハジメに謝罪をする事は無かった。他の神殿騎士は「ウル」の時点で既に最初の態度に関しては謝っていたのだが…デビッドは性格が性格だ。とても素直にはなれなかったのだろう。

ただまあ、同時に真面目な人だなとも思う。過去の罪を謝罪もせず、有耶無耶にしようとする人はこの世に幾らでもいる。謝罪とは決して言葉だけでは意味が無いと言う。しかし同時に言葉にする事によってその反省の意思を示せると言うのもまた道理である。

だからこそハジメはデビッドに対して、心温かに許そうと思えるのだから。

「はい。その謝罪、しっかりと受け取りました。それと…あの時僕もデビッドさん達の事、『嫌な人だなあ』って思っていました。すみません」

「あの時の我々は貴様を敵視していた。貴様がそう思うのも無理はない。謝罪する程の事では無いだろう」

「それでもです。実際、デビッドさんの言葉は今も役立ってますし…今は尊敬出来る大人の人達です。なのでこの謝罪、ちゃんと受け取ってください」

「…分かった。その謝罪、我々一同受け入れた」

「それで良いです！」

「…貴様、本当に顔に似合わず強情だな？」

「何処ぞのデビッドさんの所為ですわね！」

「貴様のそれは元からだろう!? 我々に責任をなすり付けるな！」

デビッドの叫びに、ハジメの周囲の人間が全員頷く。

「そうね。コイツ【オルクス大迷宮】で秒で前線突っ込んだし」

「沢山の怪我があったにも関わらず、白崎さんの所に歩いて行きましてからね…先生は気が気で無かったですよ」

「俺の作戦ちよいちよい無視するからな、お前。ホント心臓に悪いか



「らやメロ」

『バーカ』

「俺がハードスケジュールだと言っても、坊主は一向に止める気配が無かったな…」

「ある種の暴走したゴーレムですわ…」

「その辺りは地球にいた頃から変わってないわね。香織に幾ら言われなくても、生活態度直さなかつたり…」

「そう言えば…ベヒモスともう一度戦うって時も、私に譲るつもりなさそうだったなあ」

「何これ、イジメ？」

あんまりな言われ様だと、ハジメは泣いた。ただ彼等の言い分は御もつともなので、言い返せはしない。しくしく隅っこで三角座りだ。本日の主役とは思えない扱われ様である。

「そもそも俺と優花が意気投合したのも、『南雲ってヤベーよな？』ってのが始まりだもん」

「確かにそうね。そつから一時間ぐらいそれで喋ったわ」

「嘘だろ、オイ」

「あ、ごめん嘘だわ。もうちよい喋ってた」

「違う、そうじゃ無い」

今明かされるまさかの真実。友人等にUMAを見る様な目で見られているとは思っていなかった。側から見れば噴飯物だろうが、個人的にはかなり恥ずかしい話である。

そんな風に真つ白に燃え尽きて座っていると、その肩にふと何かが寄り添った。

どうしたのか。ハジメが其方を向くと…天使がそこにいた。

白色のワンピースを身に纏い、長い黒髪をたなびかせる天使。ワンポイントの蒼いヒールが眩しい。彼女のそんな姿は清涼感を超えて神聖さすら感じさせる。そんな彼女がハジメの肩に頭を乗せて、ほのかに桜色をした唇を動かして言う。

「でも、私はそう言うハジメくんも大好きだよ？」

「白崎さん……っ」

たった一言。それだけでハジメの涙が悲しみ故の物から、歓喜の代物へと切り替わる。

ハジメも自分の気持ちを伝える為か。彼女の肩にそっと手を添え、引き寄せる。二人の間にある余白がまるで無くなる。

秒で展開される桃色空間。

『お互い、元から矢印は凄かったけれど…付き合う事になったらこうなるのね…とんでも無いわ』

『俺の飲んだ酒が急に甘くなつたんだが…イチャつくのも程々にして貰えんものか…』

『お嬢様はアレを超えなければならぬのですね…ファイトですよ！』

『へリーナ!? 何言ってますの!?!』

『むう…あそこまでのイチャイチャ。妬けて来るね…そうだ! ダーリン!!』

『ヤベツ! 逃げろ!!』

『テロだろテロ! アレ、非モテへのテロだろ!?! そうは思わないか

!?! 昇! 明人! 幸利!』

『『『応ともさ、淳史!!』』』

『『『うわあ…』』』

結果、外野が見事に荒れるわ荒れる。

雫とメルドの反応はまだマシ。雫は「こうなるかあ」と眺め、メルドは少しでも愚痴を呟く。だが邪魔する様な事はしない。問題はその他全員である。

へリーナは関心しながら、リリアーナに謎の応援。狼狽えるリリアーナを見て愉悅るので始末に負えない。そしてどうやら触発されたいらしいシャクナが、ウオルペンに突貫。その気配を察してか、ウオルペンは酒瓶を放り投げ扉の外へと逃走を開始。『使徒』男子勢がこんな理不尽あって良い物かとキレ、女子組が男子のノリに引くという…控えめに言って混沌カオスがそこにはあった。

収集が付かないレベルの外野の各反応。されど二人っきりの空間にいるハジメと香織は気付かない。あそこだけ別空間にあるのかな、

と思っっちゃうくらい一瞥もしない。

愛の力つてすげえと、比較的冷静な『使徒』女子組とメルドが白目を剥く。

「あ、でもね。ハジメくんの頑固さんな所で一つ、嫌な事があるんだ」「え——つと…僕に治せそう?」

「大丈夫だよ。すぐに治せる事だから」

「それなら良いんだけど…何を治したら良い?」

此処で香織一級ソムリエの雫が「おっ、風向き変わったな?」と○ユータイプの如く感知。

「ハジメくん、まだ私の事名字で呼んでるよね?」

「……………」

——Hey、突撃乙女モード…カモンツツ!!

最近会ってなかった為、ここ最近まではシリアスな恋愛だったが…生憎香織は香織。その根源が直る事はない。

ここまで来れば雫じゃ無くても雰囲気が変わった事が分かるだろう。現に混沌組カオスが全員ハジメと香織の監視に戻っている。素晴らしく速い切り替わり様である。

変わらぬ天使スマイル。されど何故だろう。般若が薄らと見える。

「リリーの事は下の名前と呼んでるのに?」

「……そうっすね」

「メルドさんの事もそうなの…」

「あれ? カテゴライズおかしくない?」

「スタークさんに神殿騎士さん。サマンサさん?も名前で…」

「何故さつきから執拗に男性を羅列するんですか?」

「清水くんに至ってはあんな親しそうに呼んでるのに…」

「ちよつと待って、アレは親友だからっただけで——」

「だったら私は——恋人だよ!」

「仰る通りで御座います!」

堂々と『恋人』と叫ぶ白崎さん。初心ウツな『使徒』組は全員、本人でも無いのに照れる。ちなみにハジメも顔真っ赤である。

外野の一部がこの修羅場(?)を酒のつまみやら賭けの材料にし始

めた。何たる外道共か。ハジメはイラツとした。

「えーつと…要望は分かりました。ただその為には然るべき準備を――」

「必要あるかな？」

「心が！ 心が追いつかないんです！ どうか慈悲を！」

「残念だけどハジメくん…慈悲は無いよ！」

「くそう、可愛い…」

ハジメさんは恋愛面において基本ヘタレである。どんだけ修羅場を潜り抜けようとも、その辺りは一寸たりとも変わらない。昨日告白した時点で、ハジメの勇氣は売り切れだったりする。嗚呼、何たるチキンハートか。

ただまあ、香織さんはその辺りを考慮する気は無いらしい。早く言えと身を乗り出し、迫る。香織がハジメを押し倒すみたいな構図となりつつある。

ただまあ、実の所これはただ名前と呼ぶか呼ばないかというだけの口論。しかも香織さんが明らか押し勝っているので、ハジメが折れるのが目に見えている。詰まる所、側から見れば高度なイチャつきに見えるなくも無い。

再び『使徒』男子が呪詛を呟き始めた頃、ハジメの対応が変わる。

「そ、それじゃあ…香織さん」

案の定、ハジメは折れた。照れ臭そうに顔は逸らしながら。それでも視線だけは香織を見つめて、彼女の名前を確かに呼んだ。

ヒューツと囁し立てる外野。ハジメは彼等に復讐する事を決めた。

…が、生憎その復讐は叶わない。何故ならば――

「香織、だよ…」

「マッ!?!」

――香織さんが追撃を止める気配ZEROだからだ。

更にぐぐいツと迫る香織。何かもう色々ヤバイ絵面である。まさかの『さん』付けも許さないという想定外。ハジメは仰天する。

何故そこまで拘るのか。それにはあまりにも単純な理由がある。

「だって清水くんは『ユツキー』でしょ!?! 負けてられない！」

「男友達をライバル視するの辞めてもらえませんか!？」

「仲良さそうだもん！嫉妬しちゃうよ！」

まさかの理由に目を剥く香織。流石にアダ名呼びまでは強要しない様だが、それでもかな〜り恥ずかしいのは言うまでも無い。

根気を使い果たしたと言わんばかりのハジメ。果たして言う事は出来るのか――

「……………かおり」

ぼそりと、虫の鳴く様な小さな声。それでも確かに香織の名を呼んだ。

今度こそファンファーレか!? 周囲が意気込む中、香織は――

「…なんて言ったかな?」

――まさかの聞き返しである。

聞き逃したの!?! と周囲が目を開く。ハジメも目を剥く。

我慢しきれなかったのか、ハジメは両手で顔を覆い隠して。それでもハジメは。

「か、かおり…」

「聞こえないよ?」

絞り切るハジメ。だがそれでも香織は首を傾げる。

此処で周囲は違和感に気付く。何故香織が聞き逃しているのか。

他でも無いあの香織が、と。

教室でハジメの一言一句を逃さんと会話していた香織が!

異世界でハジメの為に献身を尽くして来たあの香織が!!

あの香織が、聞き逃すだど!?

答えは簡潔、ありえねえ。こんな二度も聞き逃すギャルゲー主人公よろしくなイヤーを香織が取り付けている筈が無い。超高性能集音器に決まってるよ、その場の誰もが確信する。

では何故。何故聞き逃してるのか?

そんな理由は、あまりにも単純なものだ。

「…香織」

「えへへ。もう一回」

「…聞こえてるよね?」

何度でも聞きたいと言う、単なる乙女心。

単に名前を呼ばれるだけ。それでも香織の表情は宝物を独り占めしたかの様に、喜びに満ちていた。

恐らくハジメは聞き直した時点で、それは察していたのだろう。ただもう羞恥心が限界らしい。実質的なギブの宣言である。

それに対して、香織は覗き込む様な体勢で一言。

「言ってくれないの?」

「…言うよ、何度でも。香織」

「うん! これで良しだよ、ハジメくん!」

取り敢えず満足した! と香織はふふんつと鼻を鳴らす。

そして並べられた椅子の上でハジメは…顔を抱えながらふるふる震えていた。多分『神前決闘』よりも勇気使い果たしてんじゃね、というぐらい限界が来ていた。

そんな二人の桃色空間を目の前にして、現場の皆様はというと…。

『体は砂糖で出来ている。血潮はシロップ、心は飴細工…』

『詠唱しようとするな』

『にしても…優しく抱かれたみたいになってんなあ…南雲』

『確かに抱かれたな(概念)』

『抱かれてたね(概念)』

『坊主は将来どうであれ、香織に尻に敷かれそうだな』

『間違いねえ』

もう嫉妬とかそう言った物は無く、ただ純粹に目の前で起きるイチヤイチャぶりを楽しんでたのだった。

「あ、それと坊主。これからお前さんはどうするつもりなんだ?」

「…この状態の僕に聞きます?」

「日頃無茶ばかりするお前さんには良い薬だ。世にも珍しい甘い良薬だろう?」

「甘さで死んでるんですが、それは?」

「薬は過剰に取れば常に毒となる物だぞ。知らんのか?」

「なるほど…身に染みました」

ニヤニヤと言ってくるメルドには一言や二言文句を言いたい。だ

が根気尽きた今では口論しても負ける気しかないので、自重する。取り敢えず冤罪を被らないという、この世界における第一目標は終わった。メルドが尋ねているのはその次の目標が何か、という事だろう。

今のハジメならば、大概の事には手を出せる。王国や神殿の戦士として働くも、研究に身を費やすも、【錬成師】として工房を開くもよしだ。全て道が保障されている。

しかも『神前決闘』により得た『お願い』は優花、幸利共にまだ使用していない。つまりその次の目標に關しては教会の力をフルに利用する事が出来るのだ。何とまあ、贅沢な事か。これまでの苦労を考えれば、割と正当な報酬では無かろうか。

と、言う訳で。大体何でもやれる現状。とは言えハジメの次の目標は既に決まっている訳で――

――カランコロント

扉に付けられた鈴の音が鳴る。

愛子達が戻って来たか。或いは龍太郎が参戦しに来たか。

そうした呑気な予想はもの見事に：外れた。

そこに居たのは少なくとも、呼ばれざる客。ハジメ達にとって一人を除き、親しい間柄では無いと断言出来る。

ただ、貸切中の店への無断侵入。それを誰もが咎める事は出来ない。店主ノツズが反射的にその客の立ち入りを止めようとしたが、侵入者の顔を見えず。店主の腰が砕けた。

それ程の威光。それ程の気迫。それ程の武威。

ニイツと寧猛さを感じさせる笑みを浮かべ、彼は堂々と店の中へと足を踏み入れた。

そして彼は——皇帝ガハルドは言う。

「その話、俺も混ぜてはくれねえか？ 南雲ハジメ」

世の中にはこんな言葉がある。一難去つてまた一難。

物の見事に現状に相応しい言葉が、ハジメの脳裏には浮かんでいった。